THE CENTRAL REVIEW

中央公論

臨時増刊

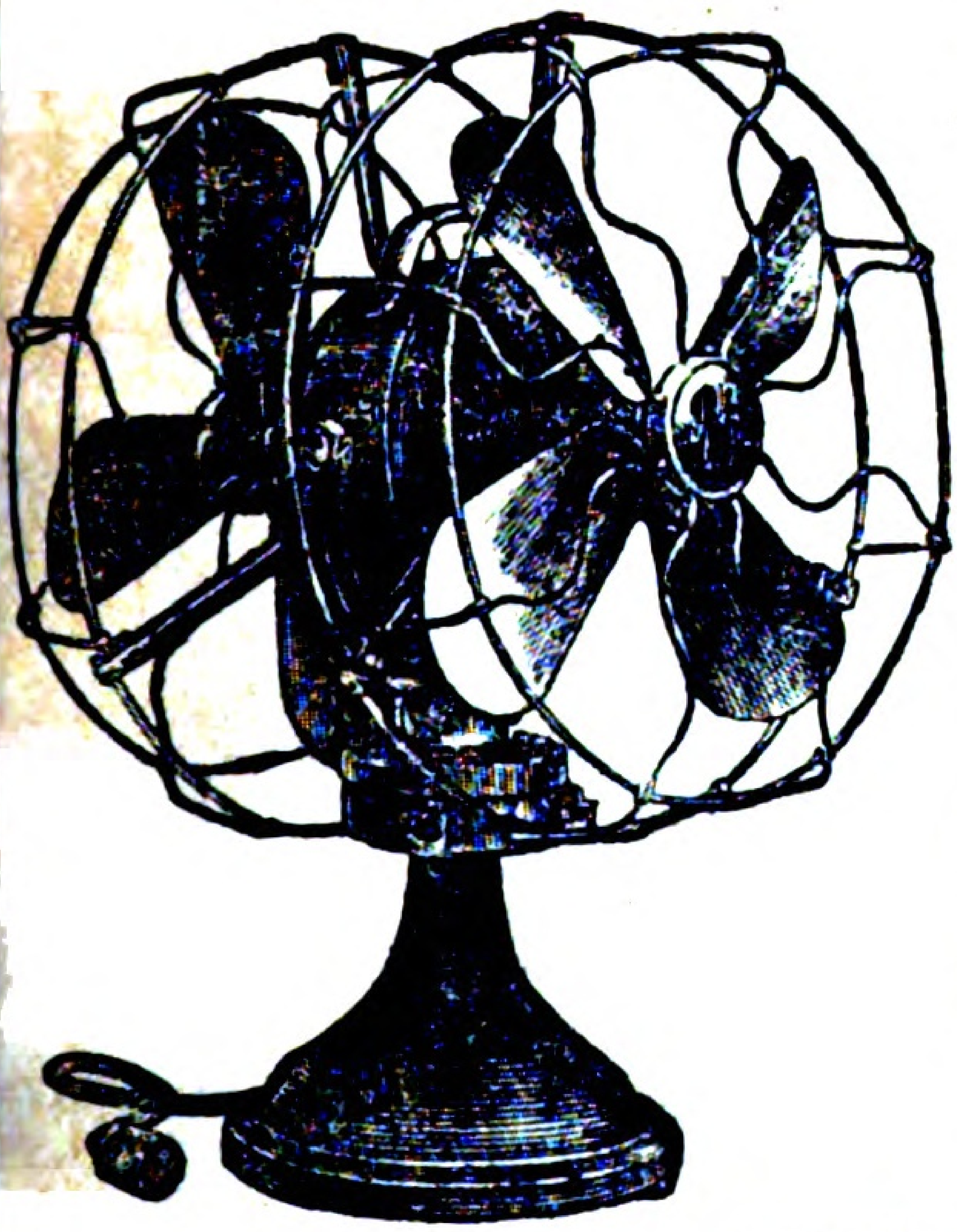
大正新機運號

第三十三年第八號　第三百一十號

The Best Fan Motors

TRADE (B.K) MARK

兩羽電氣扇



是眞ニ模範的國產品

（我國唯一の特許扇風機外國品に比して毫も遜色なし）

東京大正博覽會に於て多數扇風機出品者ありたれども受賞の榮譽を負ひたるは獨り弊商會製品あるのみ

專賣特許
實用新案登錄

第二六一二一號
第二九一九三號
第三一九〇三號

第二六一二二號
第三一二五七號
第三二五〇七號

第二七五七九號
第三一九〇一號
第三二五二六號

各國特許出願中
第三一九〇二號
第三三九三一號

普通形卓上電氣扇



Desk and Bracket Fans.
12 inches and 16 inches.

特色

一、成績　頗る優良にして回轉圓滑風力强き割合に電氣の消費甚だ少なし

一、構造　堅牢にして永年使用に堪ゆ

一、体裁　優美高尚にして室內裝飾に適す

一、應用　自在にして調節自由に强弱を變ずることを得

一、種類　十二吋羽根、十六吋羽根、交流用、直流用普通形及び自働回轉式兩羽根付き等數種あり

在庫豐富
豫約及多數御注文に對しては特に割引仕候、御申越次第目錄進呈可仕候

サンデン電氣商會本店

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
電話新橋二四二二番
振替口座東京一八四七三番

支店

東京市日本橋區吳服町十八番地　電話本局一九五六番
大阪市東區心齋橋筋博勞町南入　電話南二二〇五番振替口座大阪七三四四番
橫濱市吉田町一丁目二十九番地電話一九三一番

電氣器具材料製造販賣

印度タゴール著、三浦關造先生譯

第十版

森林哲學 生の實現

世界的名譽の月桂冠たるノベル賞金を得たるタゴールの代表作『生の實現』の飜譯全權は弊社が之を獲て居るのですから其全譯は本書を措いて他に無いのです。

四六判上製
全一冊
正價 金八十錢
郵税金八錢

『生の實現』目次

東京市本郷區西片町十番地
玄黄社
電話下谷一三九一番
振替東京七九九五番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

下卷新刊全部完了せり

■縮刷全譯叢書■

ルッソオ著

全譯 懺悔錄

生田長江氏・大杉榮氏共譯

上下全二冊
紙數一千頁
■總洋布最上製
■一册九拾錢宛
■送料一册八錢
全部二册申込の方には送料小社に於て負擔す

「懺悔錄」は單に文學上乃至思想史上の名著たるのみならず、實に一般人間生活上に經典的權威を立するの書也、誠に此書の貴きは聖書の貴きが如し、聖書は神の聖書也、懺悔錄は乃ち人間の聖書なるもの、天下讀む可きの書頗る多しと雖も、しかも本書の如くその讀む可きの必然性を普遍の萬人に有するものありや。今回下卷を新刊して、此の世界的大名著の縮刷刊行は全部完了せり。下卷は、運命日に非にして數奇更に數奇を重ぬるルッソォの晩年を曲盡せるものにして、彼が面目益々躍然、これを事實としての興味より見るも、亦その感想の深刻なる點より見るも、遙かに上卷にまさるものあり。「懺悔錄」の神髓は或はこの部分にあらんか。譯はその大部分、少壯佛文學者にして、其根本に於てルッソォの自由平等思想に共鳴する所多き大杉氏が苦心になれるもの、断じて讀者の期待に負かざる可きを信ず。

東京市牛込區
矢來町中の丸

新潮社

電話番町二二二三番
振替東京一七四二番

理想的の新聞

■最も良き新聞は主人にも、奥様にも、御隠居にも、子供にも、車夫女中に至る迄も、讀まれるものでなくてはならない

■即ち、良き新聞は一家族の何人にも向くものでなくてはならぬ

東京朝日新聞

■假し其家庭が學者政治家にしろ、軍人官吏にしろ、商家農家にしろ、如何なる家庭にも實益と趣味との源でなくてはならぬ

■東京朝日新聞は、斯の如き理想を以て編輯さるる新聞である

本紙定價

一ヶ月	金三十七錢
三ヶ月	金一圓十六錢
六ヶ月	金二圓二十七錢

地方郵送定價（郵税共）

一ヶ月	金四十七錢
三ヶ月	金一圓三十六錢
六ヶ月	金二圓六十七錢

海外郵送定價（郵税共）

一ヶ月	金九十七錢
三ヶ月	金二圓八十六錢
六ヶ月	金五圓六十七錢

廣告料

五號活字十七字詰 一行（一回）金六十錢

發行所 東京京橋區瀧山町四番地 振替口座東京一七三〇番

中央大學學生募集

○法科大學（英法科 獨逸法科）

○商科大學

○大學豫科（英語 獨逸語）

○經濟科大學

○各科專門部

○英語專修科

右學生を募集す受驗者は試驗前日迄に無試驗入學者は始業前日迄に申出らるべし○法科經濟科は從來の**晝間**授業の外別に**夜間**授業を特設す晝間は午前八時より夜間は午後五時半より授業を開始す

○九月二日、八日、十五日入學編入試驗擧行○各科共來九月十一日より始業す

貸費生

新入學生中法科大學及商科大學十名を其志望に依り貸費生とす志望者は來八月十日迄に申出らるべし委細は貸費規則に詳なり

●學則其他の規定希望者は二錢郵券を添て申込あるべし

東京神田錦町

中央大學

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

一 當會社の保險料は低廉にして且つ利益金の百分の五十以上を五箇年目毎に契約者に分配す

一 當會社の保險料拂込方法は保險證券訂正の煩を要せず其變更契約者の隨意とす

一 當會社は拂濟保險の便法を設けあり

古河家經營

博愛生命

社長 男爵 中島久萬吉
專務取締役 小原元美
專務取締役 鈴木市之助
常任監査役 安達仁造

本店 東京市日本橋區本町四丁目十五、十六番地（電長本局一八五六、五一五〇、一二八七番 振替貯金口座東京一七一七番）

支店 大阪市東區本町一ノ一三（電長本局二三一一番

一 當會社は低利なる金融機關の設あり

一 當會社は被保險者の年齡範圍最も廣く滿九年七箇月以上滿六十年六箇月迄契約す

一 當會社の保險金支拂は最も迅速なり是れ保險契約の目的を遂行せんが爲なり

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



中央公論大正新機運號目次

▲公論

▲說苑



▲問題小説と問題劇



營業品概目
○懷中時計 各種
○掛置時計 各種
○ダイヤモンド並ニ各寶石
○指環手釦並ニ各種携帶品
○貴金屬美術工藝品製作
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話長新橋 一一〇三 一一〇四
振替口座 七八〇七

中央公論



大正新機運號
第三十年第八號
第三百二十號

政界權威の新陳代謝

（一）權威殆んど地を拂ふ

近時我政治界精神界に於て各方面ともに權威殆んど地を拂ひ、社會の徵候往々にして亂世の近けるを思はしむるが如き大に天下識者の深憂に値するものなくんばあらず、我壯丁體格の衰弱せりと云ふが如き素より憂ふべきも比較的迫切せざる問題たるのみ、之に反して現在權威の頽廢に至りては其事直に國家の興亡に關す、誰か我邦の現狀に對し薄氷を踏みて大川を渡るの感なからずや、

王政維新は德川幕府を仆ふし封建制度を一掃したるも、薩長藩閥の實力は能く政治の中心を一定し得て、前には岩倉、大久保、木戸あり後には伊藤、山縣、井上、陸奥、松方、桂あり政治の問題に關して

は其一擧手一投足は以て國論を一定するに足れり、西園寺侯亦た大政黨の首領として重きをなし、一世の木鐸たるの觀ありしことあり、素より時事問題に付ては先輩の採りし政策に對し當時異論も少なからず、或は世論囂々として反對したる場合もなきに非ず、然れども此等の人物が健在せる間には兎も角も彼等は政界の權威者たり、內治外交の重大問題に關しては國論は竟に彼等の指導に服せざるを得ざりしなり、例せば征韓論の如き、征臺役の如き、西南の亂の如き、貨幣整理と金貨本位の設定の如き、國會開設、治外法權の撤廢、日清、日露の兩戰役、プリモス條約の可否、政黨政治の開展と云ふが如き凡て明治先輩の識見手腕を煩はして始めて解決することを得たり、是れ世間は彼等に反對しつゝも竟に其節度に服せざるべからざるを觀念したればなり、今や此等先輩多く死沒し、唯だ山縣公、井上侯、松方侯西園寺侯の生存するあるも、前三者は頗る老衰し僅かに元老として消極的權威を振ふを得るのみ、即ち現在の如く腕白子息に家督を托したる場合には聊か後見の世話役に骨折れる耳、西園寺侯に至りては年齒未だ老衰の域に達せずと雖も宿痾と一種の事情の下に自ら政界を隱退せるものにして、少なくとも今直に政界に復歸し其權威者たるを肯ぜざるべきに似たり、其他山本伯あり材幹閱歷優に現代の一權威たるに足れるが如きも不幸偶然の一事件に座して一時政界を退かざるを得ざるに至れり、更に其他に於ては寺內伯清浦子原敬氏あり、政界今後の開展如何に由りては各々權勢の中心人物たるべき運命の下に立つに似たり、唯だ其果して眞の權威者たり得るや否やに至りては尙ほ未知數に屬すと云はざる可らず、又た此外には大浦子加藤男あり、大浦子は這般の總選擧に意外の大勝利を博してより未來の總理大臣を

夢み其昵近者亦た頻りに子の驕慢自尊を煽りつゝあると云ふものあり、子や警察行政上一種の辣腕を有するは爭ふ可らずと雖も未來の首相たり又は政界の權威者たらんには餘りに識見を缺き且つ隠れたる創痍に富む、加藤男に至りては學識才幹に於て群を拔くこと一等なるも、這般の支那外交の手際は外交家としての男の聲望を傷けたること少小ならず、蓋し若しも強いて現内閣員中に未來の首相たり得べき人物を索めば是れ大浦子に非ずして寧ろ加藤男なるべきも、男や自尊の念徒らに強く雅量の以て人の長所を容るゝものあらず、男の背後に於ける黄金力は頗る侮る可らざるも、其竟に政界の權威たらんことは一大疑問たらざるを得ず、更に又政界の一雄將としての犬養氏は確に尊敬するに足れり、然れども氏や一騎打の大將として天下逸品たるも思想單調にして包容力を缺く、且政界浪人の親方然たる肌合は自ら一代の權威者たるに適せずと云ふべきに似たり、其他現大臣、舊大臣、政黨の領袖として知名の人も少なからずと雖も、或は大臣として資格十分なるもあらんかなれど、一代の權威者として天下を指導すべき人物としては殆んど稱するに足るものあらず、

要するに今の政界は宛も團菊沒後の劇界の如し、一人として氣魄一世を蓋ふものあらず、獨り大隈伯は名聲元勳に並んで元氣壯者を凌ぐ、人格の構造亦巨大にして一たび政界に現はれ其大傘を擴ぐれば優に天下の衆愚を其下に包容するに足れり、又た其長廣舌は優に千百の訪問者を怪烟に卷くに足れり、而して今や伯八十の頽齡を顧みず不具なる老軀を提げて國政の衝に立つ、誰か伯に同情せざらんと欲するも得べけんや、伯の如きは實に我荒涼落寞なる政界に於て其權威たるに最も適當なりと思はれざるに非

ざるも、其事實然らざるは亦奇ならずや、蓋し伯は今や一代の大權威者たり得べき機會に接しつゝあるも、其人物の構造餘りに粗大にして、中外識者の信望を繋ぐに足らず、想ふに大隈伯の一大短所は其才能の不足に在らずして寧ろ德義心の缺乏に在り、三宅雪嶺博士は多年大隈伯の同情者として世に知らる、而して此人の口より伯の德義心に對する訴告を聞くが如きは吾人の頗る意外とする所なるも、從つて其非難の言に信を置くことも亦た重からざるを得ず、即ち事は六月二十日福島縣教育會の席上の出來ごとにして、此時三宅博士は德育問題に聯關して口を極めて大隈伯を罵倒し『伯の如き虛言者(ウソツキ)はなく大隈內閣の如き虛僞內閣はなし』と痛言したりと云ふ、若しも博士が用ゐたりと云ふ不穩の言句を歐洲に於て用ゐしめば正さに決鬪を以て名譽を保つの外なからんも、虛言を大罪惡なりと思惟せざる我邦に在りては三宅博士の勵言問題も僅かに縣官の曖昧なる申譯を以て鎭定するを得たり、蓋し問題は『ウソツキ』と云ふ不穩の言辭を一國總理大臣に對し用ゆるの禮に適へりや否と云ふことゝ教育會に於て政治に關する言論を爲せしこととの可否にありて、事實上伯は言質を重んずる人なりや否やと云ふに非ず、三宅博士が責任を以て云ひし言句は取消すを得ずと言張れるに對し世人は概して博士に同情するに似たり、即ち大隈伯の一大缺點は誠意を缺くに在りて其口約言質の如き多くは不渡手形たるを免れず、古來日本の武士は然諾を重んじ、二言なきを以て最上の誇りとなせり、大隈伯にして若しも武士道の第一義を缺けりとせば伯や全然政界の權威たるべき價値なきものなり、而して實際上近來伯の信望益々薄弱ならんとする所以のもの實に此缺點あるに由るに非ざるなきか、曾て西鄕南洲は大隈の言は證文にても取

りて置かざれば信ずるを得ずと云へりしと聞けり、即ち伯の人格上の缺點は其壯年時以來のことにして、恐らく老來益々之を露骨ならしめしものならん、

政治界に於て權威者を失へる我邦は精神界に於ても亦た權威者を失へり、明治年間の大部分を打通して精神上智識上一大權威者と云ふべきは福澤先生ならん、先生は世の所謂道德家に非ず又所謂文學者哲學者にも非ず、然れども蒙昧なる鎖國的人心を啓きて開國進取の何物たるを解せしめ、平易にして達意の文を草して漢文の奴隷たりし我時文の進步發達に資する處あり、頑迷固陋の道德論を嘲罵して文明的忠孝の眞義を闡明し、更に一大日刊新聞を發行して時事問題に付て大に輿論を指導したる福澤翁は實に一世の木鐸たりしなり、この外、人物の規模に於ては遙かに福澤先生より小なれども其獨特の感化に於て寧ろ却て深切なりしは中村敬宇先生と新島襄先生となり、其他雲照律師あり亦た師獨特の感化を及ぼせり、此他明治年代の精神的偉人として是非とも茲に記せざるべからざるは海舟先生勝伯なり、彼れは雲照の如く戒律に括られず、中村新島の如く道德を說かず、福澤の如く知識の開拓者を以て任せず、然れども彼は凡て此等のものを超越し包容せり、彼れは最も眞正の意味に於て當代の大批評家たり、彼れの靈犀なる眼光は能く世道人心の機微を穿ち其諷刺的訓戒は多く時弊に適中し痛快を極めたり、然れども海舟の力は其智能にあらずして、彼の至誠にあり、彼が憂國の誠は古人の所謂未だ一飯も其君を忘れずの慨ありしなり、彼の言語は實に明治時代のデルフイの神託なり、我日本は云ふに及ばず遠く支那歐米よりも彼の神智を求めて來りしもの多くは失望せざりき、

今や海舟なく福澤なく雲照なく中村、新島なし、而して之に代はり精神界の權威者とては未だ世に出でず、蓋し其人なきに非ずとするも未だ世に認識せられて其威力を振ふものあらず、教學の大家はあり、說法の雄辯家はあり、哲學倫理學の博士も亦たあり、然れども精神界の權威としては吾人未だ斯人ありと指さし能はざるを遺憾とす、而して指導者なき世人は宛も迷へる羊群の如くベルグソンよりオイケンに行き、更にタゴールに聽かんとするも容易に安心立命の地に達すべからず、既に形式の宗教と形式の道德に聽き飽きて切に權威ある指導者に逢はんことを欲するも容易に其人を得ず、天下の人心は益々饑渴し益々離亂し、綱紀の弛廢遂に或は窮る處なからんとす、

（二）　我國空前絕後の亂世

我邦現時社會の狀態、その政治上精神上之を指導すべき權威者を缺き、動もすれば紛々擾々の群議停止する處なからんとし、綱紀頹廢の前兆頗る顯著なるものあるは前段已に述ぶるが如し、抑も頹廢を未然に防ぎ萌芽を未だ長せざるに除くは識者の職分なりと雖も、大凡世間の事多くは大勢に制せられ微々たる人力の左右すべき限にあらずして、現在の我社會は依然として或る程度まで解體するの傾向を持續せんとするやも未だ知る可らず、而して改善の機運は始めて一定の窮處に達したる後に於て之を見んとするなるべきか、或は斯る不吉なる途行きを踏まず識者の努力國民の自反空しからず直に今の危機を轉じて奮起自强の實を擧ぐるに至らんも亦た知る可らず、兎に角我邦歷史上綱紀の廢弛最も甚だしかりし應仁の時代を一瞥して敎訓を求むる亦た徒勞に非ざるべし、

所謂應仁の亂とは應仁元年より文明九年に及ぶ十一年間の騷亂を云へるものにして、其起原は足利氏の御家騷動に基く、即ち將軍義政の養子義視と實子義尙の相續爭ひに關し當時の强臣細川勝元と山名宗全が各々義視、義尙を擁護せんとして兵力に訴へしものにして、義視方なる細川は十六萬人を率ゐて室町幕府の東方に陣し義尙方なる山名は九萬人を以て幕府の西に陣を張れり、而して幕府權威なく之を制する能はず將軍義政は東山に優遊して眼前の大亂に與らず、京都の中央地區は擧げて兩軍の戰場と化せり、畏れ多くも皇居を初めとして神社佛閣公卿貴人の邸宅及び重立たる市街は燒拂はれ、歷代の記錄寶物悉く灰燼に歸せり、市民は家を燒かれ業を失ひ都を去りて諸國に離散せり、斯くて應仁の亂なるものは其範圍京都に限られたりと雖も、其影響は一般に及び天下の騷亂を惹起せり、即ち十一年間京都にて戰ひし細川山名の兩軍勢は亂鎭まりて後ち各〻國に歸るや將軍の命を奉せず又た朝廷の命にも服せずなれり、玆に群雄割據の勢を成し北條早雲は伊豆に起りて小田原に據り、伊達、相馬、南部、秋田、葦名等東北に崛起して各々版圖を擴めんと努め、今川は三河に起り、信と越とに武田上杉起り、中國には赤松、毛利、大内あり、四國に河野、長曾我部あり、九州には小貮、大友、島津あり、所在の豪傑孰れも自家あるを知りて皇室を顧みるものあらず、足利將軍亦た宴遊を事として天下の政を視ず、文明十五年即ち應仁の亂止みて僅々六年の後なるに將軍義政が多年の經營に係る東山の銀閣寺は落成したり、以て其如何に國政に無頓着なりしかを想像するに足れり、此より後御所の修繕容易に成らず、後奈良天皇御宇に至れば禁裡の垣は破れ實所の御燈遠く三條大橋より拜せられ、紫宸殿左近の橘の側には市民來りて茶店を

出だし居れりと云ふ、而して畏れ多くも御宸筆を要むるものは御歌の料紙に御禮金を添へ御殿の御簾に結付け置けり、斯る淺間敷有様なりしを以て宮中にては平日の供御にも御差支あり定規の御儀式も大概廢止せられ、御一代一度の即位式すら擧行せられ難き事態にあり、即ち後柏原天皇は踐祚の後二十年を經て本願寺光兼の献金ありて始めて大典を擧げさせられ、又た土御門天皇は崩御の後御葬式の費用辨せ得られず爲めに四十餘日も御柩を宮中に留められたりと云ふ、以て朝廷の衰微の狀態見る可らずや、應仁より天正に至るまで實に百年有餘史家稱して戰國割據の時代と爲す、即ち日本の暗黑時代にして、所在の豪傑戰爭を事とし互に領地の奪ひ合ひをなし、强は弱を呑み大國は小國を併せ、君主を殺し主家を亡ぼし、或は君主の仇を報ずるを名として主家の舊領地を奪ふものあり、人々只兵力を以て領地を擴め自家を利することを此れ事とし德義節操を顧みざりしなり、精神界に於ても南都比叡山等名僧智識跡を絶ち淨地保護の辭柄の下に盛んに僧兵を養ひ常に下民を殘害し時に或は朝廷を侵し奉るの暴擧あり、其狀却て俗界の亂れたるよりも淺間しかりき、獨り一向宗日蓮宗は戰國亂離の民に向ひ一種の安心と希望を與へたれば其敎勢の擴張頗る見るべきものあり、但た現世に對する德義の權威として果して幾許の功驗ありしかは寧ろ疑問に屬すと謂はざるべからず、而して此二宗徒も亦た漸く其勢を加ふるや僧兵を養ひ亂暴を働くと毫も他の宗徒に異ならず、一向日蓮互に相戰ふことあり、殊に一向宗徒は所在暴威を逞ふし北國に於ては幾度か謀反を企てゝ戰亂の巷と化せしめ、又他の宗徒と戰へり、天文年間一たび天主敎の傳へらるゝや乍ち燎原の勢を以て普及し中國九州の諸侯多く之に歸依せしが如き以て當時佛敎の權

威地を拂ひしを想ふべく、而して此新來の宗教は佛教家の自反改善を促がすに功ありしものの如し、
斯の如く足利氏の後半は政權教權共に地に墜ちて暗黑亂離の狀態を呈し其慘憺たる光景我邦歷史上に於て空前絕後と云ふも不可無けん、今此形勢を一變し、尊王の大義を明かにし國家統一の基を開き以て政權の樹立を圖りしものを織田信長とす、信長中道にして斃るゝや秀吉其業を繼ぎ、先づ國內を統一して遂に我武威を朝鮮、大明に揚ぐ、而して德川氏に至りて三百年泰平の基成れり、德川氏の封建制度は實に世界無比の完全に達せしものと云ふべく、京都朝廷を以て至上權者と爲し兵馬の實權を江戶幕府に收め、三百諸侯亦た各々多大の權威を以て其地方に君臨し、而して全國幾百萬の士族の階級は武權を代表する耳ならず、亦實に名教の代表者として一般人民に臨めり、玆に於てか人倫の道綱張り目擧り、秩序整然として政界の權威全く樹立せり、而して此政治上權威の樹立は精神界の權威者續々輩出して治道を補益したるに負ふ所多かりしは特に注意を要す、足利時代に於ては苟も精神界の問題と云へば擧げて佛教徒に委し去りしも、德川氏に至りては一方佛教間の秩序を整理して大に信用を恢復すべき道を開く耳ならず、特に儒教の倫理的感化に偉大の功能あるべきを看取して之を獎勵するの法を採りしは一大見識なりと言はざるべからず、家康在世中藤原惺窩の高弟林羅山を幕府の儒官に任じ寬永年間昌平學校を起したり、是れより各藩競ふて學校の設あり、米澤の興讓館、水戶の弘道館、加賀の明倫館、備前の閑谷黌、肥後の時習館、薩摩の造士館等最も其名を知らるゝに至るも、儒者として門戶を張り子弟を教育するもの亦た所在之あらざるなし、殊に蕃山、仁齋、闇齋、徂徠の如き大儒出でゝ各一世を指導したる

は名敎を把持するの功擧げて云ふべからざるものあり、且つ加茂、本居等國學を唱へし以來勤王の思想大に勃興し水戸の大日本史、賴山陽の日本外史及政記により我國體の精華を發揮したるが如き名敎に資する所甚だ大なりしは想像に餘あり、

(三) 維新後に於ける舊權威の失墜

斯くて德川幕府は三百年の天下を保つを得たりしが、終に歐米の開港要求に接して處置を誤まり同時に王政復古の國論勃興したれば竟に土崩瓦解の止むを得ざるに至りしが、維新政府の樹立は百事改革の開幕にして、廢藩置縣、徵兵法の實施、行政司法の改革、國會開設を經て竟に今日の政黨政治を見るに至れり、而して此等の改革たるや舊日本の社會に於て吾人の祖先が以て人生の權威として尊重したる多くのものを一掃し之に代ゆるに新たらしき權威の樹立を以てせんと試みしものなり、即ち德川幕府なり各藩の殿樣なり一藩の家老なり又は士族なり、其他神社佛閣及び儒敎の如き政治上の改革と共に必然に廢れたるものあり或は開國進取の一般の氣運に觸れて忘却されたるもあり、即ち未だ新たなる權威樹立せざるに先だち舊き權威者は續々取除かれ、社會の光景は轉た荒凉を極め宛も大風に吹荒されたる後の觀あるを免れざりき、獨り我維新の革命は他の海外幾多の革命と科を同ふせず一天萬乘の天子を中心として行なはれ、凡そ幕府、各藩主、士族と云ふ如き大小君主を去りて國民を此天子に歸結せんとするものなるが故に、大體に於て我維新後の社會は其主たる方向を謬らず忠君愛國の精神は國民一般に普及し國家の統一力は維新以前に比し却て大に優るものあるに似たり、且つ舊日本の權威者の督勵の下に生育

せし先輩が新日本の指導者となりたれば歐洲文物の形式は輸入したれど我社會に充盈せる精神は純然日本式にして、國民は依然として武士道の理想の下に支配さるゝを得たりしなり、然るに明治時代の過去ると共に先輩指導の時期も亦過去りしものゝ如く、彼等の多くは既に世を去り、其生存せるものゝ中或者は老衰して其聲望復た前日の如くならず他の或るものは種々意外なる事情の爲めに世間より遠ざかるの止むを得ざるに立至れり、而して新たに國民指導の任に當れるものは多くは新時代に入りて敎育を受けしものなるが故にや人格の鍛錬自ら明治の先輩と異なるものあるが如く、智識材幹に申分なきものも權威の點に於て甚だ缺如たるの觀なきこと能はず、素より明治時代の敎育に於ても依然として忠孝を本として敎へたり、而かも其結果の前日に及ばざりしは全然社會周圍の狀況を異にすればなり、即ち前日に於ては君も目前に在り父母も目前に在り、即ち君父の膝下に於て敎育を受け且つ社會の制裁亦儼乎として犯す可らず、是れ第一に今日と狀況を異にする點なり、更に現在の日本社會には舊日本に於て曾て見ると能はざりし自由平等を理想とする個人主義の冥々裡に人心を支配しつゝあるとを記憶せざる可らず、即ち舊日本に成長せし人々の尙ほ國民の多數を占めし明治時代と比較せば現在社會の表に立ち國民を指導せんとする人々の資質に於て大に異なる耳ならず國民自らの思想感情に於て大に異れるものあり、此新たらしき精神の我靑年子弟を支配しつゝあることを解せざる我敎育家は形式的に忠君愛國を說くも、其効果は容易に豫期の如くならず、寧ろ擧世滔々として名利に狂奔し社會解體の兆頗る顯著なるものあるに至る亦た止むことを得ざるものか、明治時代の敎育家は母雞にして其苦勞して孵化し得たる

ものは鴨子なり、教育効果なきに非ず卵子の性質既に異なれるに因れり、

抑も明治維新は王政復古を旗幟として行なはれたれば其標榜の舊式なりし如く其結果も亦た建武中興の理想を實行すと云ふに終り、政權を朝廷に收め武門の跋扈を制すと云ふに止まるべかりしも、當時多くの勤王家輩が曾て夢にも思はざりし革命的新思想は既に少數の我邦識者の頭腦に潛みつゝありき、他なし米國獨立の根本理想たり又佛國大革命の大綱領たりし自由平等友愛の思想即ち是れなり、五箇條の御誓文の起草者は必ずや直接又は間接に歐米人權の理想に接したる人なりしや疑あるべからず、穢多非人の階級を廢し四民平等の實を擧げしは亦た同一の理想に基き來りしこと疑あるべからず、而して幕府を斃ふしたる明治政府は竟に閥族の專有に歸せず薩長藩閥も僅かに立憲政治に推移すべき手段方法に外ならずして止むことを得たるは亦た同一理想の感化に因れりと斷定するを至當とせん、而して今や方さに此理想は我國民の頭腦を支配せんとなしつゝあり、之を解し之に同情し得るものに非ざれば教育家として成功す可らず、又た之を解して利導し得るものに非ざれば政治家として權威の地位に立つべからず、世の論者或は個人主義を危險なりとして排斥するものあり、然れども個人主義は既に我新日本の生命となれり、之を排斥せんとする人の子弟既に此主義に支配せらるゝなきを保せず、之を排斥する人彼自ら亦た冥々の裡既に幾分之に感染し居れるやも未だ知る可らず、何となれば個人主義は既に我邦の民法刑法に認められ世間一般の思想界には宛も空氣の如く之に充盈すればなり、

《四》新らしき權威は如何にして立つべき

個人主義の行なはるゝ處は即ち個人の意見の行はるゝ處にして、此間に於て一致統合を求めば識見の力と人格の力に由らざる可らず、別語之を云へば言論文章を以て意見を發表し能く世間多數の賛同を得而して其言論は誠意誠心に基くものなること論者多年の行爲により證明せらるれば玆に初めて其人は公人として社會一方の權威者たるを得るものなり、例せば例令如何に能辯を振ひ世間の聽衆を魔醉せしむるを得るも其人にして常に主張を二三にするの僻ありとせば是れ人格の問題にして、其公人として世の尊信を受くべき資格なきものなるを示すものなり、現在の我邦政治家中大隈伯及び尾崎行雄氏の如き確かに權威者たるべき一要素を備ゆるに相違なきも、不幸にして兩氏とも餘りに言論に無責任なり、此れ兩氏が既に人格上世人に疑はるゝに至れる所以なり、

更に一歩を進めて論ずれば個人主義の社會に於ては國家は一の有機體と見做されざるべからず、即ち各個々々の意志が總合せられて國民の輿論となりて現はれ來るべく、此の意見は即ち有機體なる國民の意見なり、故に政治界に權力を振はんと欲するものゝ最も勤むべきは輿論の開拓に在り、輿論を開拓し天下の同情信賴を得て玆に初めて公人としての權威を振ひ得べきの望ありと謂ふべく、徒らに官歴に誇り又は黨歷を頼みにして天下の權威者たらんとす其空望に終らんこと實に止むを得ざるなり、近年我邦に於て政友會は多數政治の妙味を發揮せんと欲して衆議院に絕對多數を占めんことを專念し數年間打續けに多數黨の威力を示すを得たりき、然れども其志ざす所一に多數頭顱を集結するに在りて、輿論の開拓を怠りしかば一たび新聞紙の包圍攻擊に遭ふや乍ち脆くも破れたり、之に反し大隈伯一派は平素頗る

言論の勢力を扶植するに努力し天下の新聞紙を大半其味方にしたれば遂に一たびは天下を取るを得たるも、其言質を重ぜざることは公人の威信を傷ふこと夥だしく、是より其在職の久しければ久しき丈けに益其信用を失墜するに至るべし、政友會の罪は甚だしく世論を度外したるに在り大隈伯一派の謬は猥りに世論に媚びしに在り、兩者互に消極と積極の區別はあれど罪は則ち一なり、孰れに在りても未だ政界の權威者を出すに至らざるは自ら招くの災と謂つべし、

立憲政治は輿論の開拓に骨を折るべき筈の政治なり、若しも言論を以て世間の同情を得るに努むるを以て多勢にして面倒なりとし、寧ろ秘密の怪運動に依り多數を集むるを以て手輕にして早路なりと思ふ人あらば、是よりも甚だしき大なる心得違はある可らず、斯の如き考を以て成功せば一種のボス、即ち政黨の親分たるを得べきも到底眞の權威者たるを得べからず、試みに一の例を擧げんに十數年前ジヨセフ・チエムバレーン氏が英國の關稅改革を提議したることあり、當時彼は言論文章により其主張を發表し頗る輿論の開拓に努め、更に政治界實業界の有力者に依賴して私立委員として問題の研究及び意見の普及に努め、終に自ら植民大臣の職を擲ち野に下りて其主張の普及に盡す所あり、而かも不幸にして其意見は世間一般の贊同を得るに至らず氏亦病みて終に沒したりと雖も氏の如きは實に能く立憲政治家の面目を發揮し得たりと謂つべからずや、一たび政權に有付けば在野當時の主張を放棄すること弊履の如く而して之を恥づることを知らざる我邦一派の政客の如き豈し故チエムバレーンの沓の紐を解くに足らずと謂つべきなり、

之を要するに今や我邦の政治界を眺望すれば舊來の權威として國家綱紀の維持に任ずべきもの殆んど皆な去りて跡を止めず一方に不完全なる政黨ありて國民を代表し他の一方には半死の元老ありて政機の運轉に干與するあり、新たに衆議院内に多數を占めたる與黨は未だ威信立たず、爲めに衆議院の權威を重からしむるに至らず、貴族院は近年稍々其威信を加へたるの感あれども、國家を荷ひ立つの意氣あるに非ず、樞密院亦た消極的に時に内閣の失態を未だ甚しからざるに救ふのみ、其本來の性質上政界の權威たり得べきものに非ず、然らば言論の權を握れる新聞紙は如何、果して政界の權威たり得るや否やと云ふに、近年技術として營業として新聞紙の發達頗る著るしきものありと雖も、言論上の權威に至りては未だ著るしき進歩を認むる可らざるに似たり、世間の新聞紙其數多しと雖も多くは彼是の黨派に與みし福澤先生が時事紙上に筆を執りし時の如き權威あるものを見ず、然らば則ち今後政界の權威は孰れの方面に起るべきやと云ふに、吾人は先づ指を政黨と新聞の方面に屈せざるべからず、所謂元老の如き舊時の殘物にして明治元勳の沒落し盡すと共に自然に跡を絶つべき性質のものなり、若しも萬一にして然らず尙將來に繼續せらるべしとせば是れ我國情止むを得ずして玆に至るものと云ふべく、而かも到底政界の中心的權威たり得べきものに非ず、玆に於て吾人は政界權威の座を政黨と新聞紙に求めずんばあらず、

今や我邦は振古未曾有の大機運に際會し、我日本が世界第一等の强國として興るも又は二流三流に下り衰へんとするも其隆替の機實に今日に在り、此時に當り權威を以て國民を指導し以て國家の針路を誤

る無らしめんことは一に之を壯年有爲の士に待たざる可らず、一般に權威の廢れたる今の時は即ち壯年有爲の政治家言論家の大に雄飛すべき好時節に非ずや、政黨の秩序亂れ變遷甚だしきは正に是れ後進者の崛起すべき機會なり、新聞紙上言論の權威なきは議論文章を商賣とする人の多きを示す即ち是れ言論を以て畢生の事業とする偉大なる文章家の輩出すべき時ならずや、ピットは二十四歲にして大宰相と爲り大久保、木戶、伊藤の如きも亦た四十前後を以て天下の實權を握れり、夫れ國亂れて忠臣を知る、我邦の政界は永久に今の權威者なき烏合の狀態を持續す可らず、必ずや言論界に政治界に偉人輩出し新時代の國民を指導すべし、新聞紙は重砲隊なり政黨は步兵團なり、健全なる輿論の援護の下に絕對多數の政黨を結束せば、權威の座は自ら此間に在らん、吾人は現在二流三流と認めらるる壯年政客の中より必ず新權威者の續々輩出せんことを期待せずんばあらず。

新日本主義の勃興

（世界の大破壞）

茅原華山

上篇

一　敗者の哀泣

日本人よ、汝は汝の使命を自覺せよ、國民として世界の現在及び將來に對する汝の位地を自覺せよ、漫りに我れを忘れて敗者の哀泣を學ぶ勿かれ、敗者とは誰れぞ、英國是れなり、佛蘭西是れなり、露西亞是れなり、伊太利是れなり、敗者の哀泣とは何ぞ、歐洲聯合國説是れなり、世界平和説是れなり、世界國家説是れなり、私は所謂ミリタリズムを渇仰するのではないが、更に前三者に附加するに、軍備制限説是れなりと言ひたい。

近ごろ英國の有名なる藝術家、エチ、ジーウエルス氏は紐育タイムスに一書を寄せ、題して『破壞點に於ける文明』"Civilization at the breaking Point" といふ、題からして既に『敗者の哀泣』ではないか、文明が破壞されんとするならば、自ら起つて自らの力でその難有い文明を擁護するが可いではないか、自ら擁護するこ

との可能ない文明、文明自ら文明を擁護することの可能ない文明は、是れ破壞破滅に慣する文明である、此狄蠻人に蹂躙された羅馬の腐敗し墮落した文明と別に擇ぶ所なき文明である、そして日本人といふ立脚地から言へば、ウエルス氏の所謂文明＝西歐文明＝物質文明＝病的物質的のデモクラシイの文明＝戰爭、然り歐洲に在ても百年罕れに見る戰爭に於ても、資本家は只管自己の利益を是れ計り、爲に勞働者をして羨んで同盟罷工を起さしめ、一大帝國の存亡に際しても、ジヨルジ我れに君臨するも、ヴイルヘルム我れに君臨するも、我れに生活と自由とを與ふれば可なり、我れは進んで戰場に出づる危險を冒すを好まずといつて、百方募兵に應ぜず、遂に志願兵制度とは失職者を驅りて護國の任に膺らしむるものなるを立證したる文明＝こんな文明は破壞されても何にも破壞の悲哀を感ずるには及ばぬではないか、日本國民が現状を破壞して新なる日本の文明を世界の表面に建設せんとするに方つて、その進路を遮るものは所謂將に破壞されんとする文明である、その破壞されんとする文明は、最早我等の眼中には脆るい文明である、日本國民よ、汝はゆめ貰ひ泣きをしてはなるまいぞ。

そのウエルス氏の言ふに、我々は左右の岐路に立つてゐる、人類は速に世界的國家を立てゝ以て戰爭を防止するの計をせねばならない、然らずんば我々の稱する文明といふものは不斷の戰爭、不斷の不安、不斷の國家的掠奪の餌にならねばならないと、英國民の祖先は海賊であつた、その英雄は印度帝國を建設した、南阿の帝國を肇造した、此時代の英國は決して斯かる福音を吐かなかつたのだ、世界的國家を組織して以て戰爭を防止するといへば、自らの力で戰爭を防止するのではなく、猶英國が今日白耳義、佛蘭西、露西亞を藩屛として自ら衞らんとするのと同じ英國的の思想である、英國は既に末路である、英國民の生命力は既に老ひ去つたと稱せらるゝのも決して偶然ではない、

他の一英人はトロント、グローブルに寄書して、ウエルス氏と似よつたことを言つてゐる、曰く、「世界を

して一國民の支配するに任かす勿れ、獨逸不可、露西亞不可、東洋不可、米國不可、英國固より不可、組合であつて反對ではない、共働であつて葛藤ではない、法律、然れども腕力は不可、正義然れども權力は不可、總てのもの平等、或者をして他に對して優勝者たらしむる勿かれ、英國は此理想の爲めに死をだに厭はず、米國は此理想を實現せん爲めに生きんとす」

紐育のイヴニング、メイルは之を評して高遠なる理想といつたが、何んでこんな平凡な世界を實現するのが高遠なる理想であらうか、英國は現にその世界的帝國を維持せんと悶きつゝあるのではないか、其自ら之を維持する能はざるを自覺するに及んで、一國民をして世界に雄飛せしむる勿かれといふ、弱者、敗者、劣者、落後者の哀泣でなくして何んだ、獨逸は世界の最强者たらんとす、我日本も亦世界の最强者となるの計を講じ、以て獨逸を壓倒せんとするに何の不可がある、我れは獨逸の志を壯んとするものである、獨逸の志を壯んとするは即ち我れ自ら獨逸たらんとするものなるを明にして宜しい、英國が世界を支配する場合には、組合は御免だ、共働は御免た、腕力も可し、權力も可し、印度を取り、濠洲を取り、加奈陀を取り、南阿を取り、埃及を取り、そして他國が英國に代りて之を爲さんとするに方つては則ち大聲疾呼して是れ高遠なる人類の理想に反すといふ、敗者の哀泣でなくして何んだ、英國は此理想の爲めには死をも厭はずといふ、去らば何故に今少し多くの兵を獨逸の國境に送りて、所謂文明の敵獨逸を世界の地圖から抹殺せざる、英國は今や最も死を厭ふ國民に成り果てゝゐるではないか、

グローブの言草が面白い、世界的國家を組織するは艱難であらう、之を世界的國家と言ふよりは寧ろ世界的良心と言ふが可からうといふが、世界的良心は一大帝國が老衰して、四時の序功を成すものは、去るべきものを去らしむるを是なりとするも之を非なりとするものではないのである、メチニコフは人間は百二十五歲まで生きられる、そして死の本能といふものがあ

つて、生きるだけ生きれば死にたいといふ本能が起つて來ると言つたが、現在の世界的大帝國は既に生きるだけ生きたのだ、死の本能が生の本能に代つた、當然死にたいといふものを生かしておくのが世界的良心だのいふ論據は安くに在る、グローブは遂に米國は世界權力爭奪の中心から遠ざかつて居る、軍備競爭の仲間入りすることが少いから、各國民を一致と平和とに導く最も適任であるといつてゐるが、これは米人の夜郎自大である。

南歐、西歐及び米國の人類を支配し來つたものは平和の思想である、平和の思想は卽ち休息の思想である休息の思想は卽ち老の將に至らんとするもの〻思想である、死の手に攫まれた人類の思想である、西洋文明の無批判的輸入は日本人もこれから少し—少しではない大に注意せねばならぬ。

二　第二十世記馬上の英雄

物質文明、デカダン文明、デレタント文明、動物的文明、惡魔文明、世紀末文明が此に極まつて、第二十世紀は新英雄時代に入つた、歐洲戰爭は「中央公論」九月號（大正三年）に於ける私の「切腹文章」として世に知られた「國際史的文明史的に觀たる歐洲戰爭」に於て豫言した如くに、獨逸が最後の勝利を獲て終局せんとするの形勢は、既に何人も認識せざるを得ざることに爲つたやうだ、此論文は歐洲戰爭の經過を評論するのが目的ではないが、我々日本人が承知して置かねばならぬことは、獨逸が英、佛、白、露、伊の諸國を向ふに廻はして乾坤を一擲する大屠博を試み、而も最後の勝利者として新なる世界の舞臺に踊り出でた日は、獨逸は世界の最强者として其勢威全世界を風靡するの日であることである、そして維廉二世はアレキサンダー、シーザー、ナポレオンにも優りて第二十世紀に於ける馬上の英雄 Man on the horseback として獨り日耳曼民族のみならず、世界人類偶仰の焦點と爲るに相異ないといふことである、戰勝國民として其國民的生命力が無限の泉の如くに噴出する獨逸國民が其疲憊、其哀愁、其悲傷、其墳墓、其浪費、其破産、其創

痍より恢復することは蓋し亦案外に早いであらうといふことである。

この戰爭の直接及び間接の影響として人生生活の各方面に於て新局面が打開（然り打開である、展開といつては語氣が弱い）さるべきは、固より言ふまでもない、歐洲の地圖がその著色を變ずといふやうなことは小中の小問題である、文明といふ意義が轉換し、人間生活の根本的觀念までが一變するかも知れないのである。

獨逸の最後の勝利は如何にして來るべき、獨逸が露西亞に對して其攻勢作戰に根本的打撃を與へ得べきは、既に軍事專門家が一致してゐる所と爲る、既にプッエミスルを失ひ又レムベルグを失つた、十箇月の努力忽ち空に歸した、獨墺の兵が勢に乘じてワルソーの背後に突進することに爲つたならば、露領波蘭土は復た露の有にあらず、ワルソーが守れなくなれば、退いてスモレンスクを守らねばならぬ、退いてスモレンスクの線を守らねばならなくなれば、露兵は能く莫斯科を防禦し得べきも、中央政府をペトログラードに置くことは頗る危險に爲るかも解らない、私は今こゝに『ツアール蒙塵』といふやうな大膽にして不祥なことを口外するを好まぬが、露國が外日耳曼に破られた刹那は即ち露國の宿痾たる革命亂の再發すべき刹那ではあるまいかといふべき理由がある。

露軍の總司令官ニコラス、ニコライウイチ大公は嘗てツアールに奏して『戰場に於ける日耳曼は私に能く之を掃蕩すべし、宮中に於ける日耳曼は陛下願くば自ら之を掃蕩し玉へよ』と言はれたさうであるが、ニコライウイチ大公が戰場に於ける日耳曼を掃蕩するが至難の業たるは言ふまでもなく、ツアール陛下がその萬乘の尊を以てしても、宮中並に府中及び陛下の知らし召す總露西亞（オール・ゼ・ロシアス）より日耳曼の勢力を驅除することの亦極めて艱難であることは既に世に明なる事實である、露國に革命亂の勃發した刹那は即ち露國に於ける獨逸人及び獨系猶太人が其勢力を恢復し來つた刹那だといふも不可はあるまい、現に莫斯科は一種の革命亂あり、

一城を擧げて戒嚴令の中に在りと傳へらる。

若し露國が獨逸に對して單獨に平和を締結せざるを得ざるやうなことに爲つたならば＝我々は決して斯かる出來事は起らないと斷定しても＝若し獨逸に對して事實上休戰の狀態に入らねばならないやうな羽目に陷つたらば、私は少くとも歐洲大陸に於ける戰局は早く已に大に定まる所ありと斷言するに躊躇しないものである。

墺軍が若し其全力、若くは全力に近き兵力を以て伊を邀へ撃てば、其勝敗の數は必ずしも問ふを要せない、墺軍の素質の伊軍に優さるものあるは既に定論である。

獨逸が其鐵條網を利用し、其大兵を西に移したならば、佛國は固よりその敵ではない、ダンカルク、カレーは一蹴して其掌中に落つるであらう、獨逸が能く英國に入寇し得るや否やは今之を論ぜざるも、英國は強制された孤立の位地に陷らねばならぬ、英國は果してその數々首相其他各政治家の雄辯に由りて宣言されたが如く、最後まで戰ふや否や、三年五年の持久戰を爲すや否やはいざ知らず、獨逸能く露國の攻勢作戰に對して根本的打撃を與へ得べしとする豫想にして實現さるべしとすれば、何とあつても歐洲戰爭に於ける最後の勝利は獨逸のものであらう。

露國の英を惡むや久し、先づ獨逸と結んでこの戰局を收拾すべきか、將た利害の打算に敏にして、利害の前には眼中條約もなく（白耳義中立三條約を除く）友國もなく何時にても其態度を一變するを辭せざる英國が露國を出拔いて、先づ獨と左提右携するの計を廻らすべきかは、國際上最も興味ある問題であるが、其孰れに歸著するにもせよ、露國の國威が重ねて地に墜つるは掩はんと欲するも能はざる所であるが、同時に大英帝國が其基礎からして振撼すべきは最早盲者と雖も首肯せねばならぬ所であらう、私は嘗て「大英帝國分割論」を提倡するや、之を空論なり、之を遠い未來の理想だのと言つたものは、今何の顏色かある、獨逸は必ず敗北する＝宜しく歐洲に出兵して以て獨逸を剿滅す

べし＝と其自身矛盾したる議論を唱へ廻はりたるものと共に、其短見は長く後世に物笑ひと爲るであらう。

三　獨逸と歐洲との分離

東京に發行する或英字雜誌が日本の政治家公人新聞記者論士の九割までは向獨逸（プロジャーマン）であると恨むやうに言つた、獨逸の徹底、獨逸の組織、獨逸の勇敢、獨逸の科學的應用、而して獨逸皇帝が軍費を蓄積しておいた如く愛國心まで長い年月蓄積しておいた用意には、日本人として一人も甚深なる尊敬を拂はないものはない、是れ英字雜誌の言つた如く「精神に於て獨逸（ジャーマン・イン・スピリツト）」であるが爲めではない、反つて『精神に於て日本』であるからである、日本國民は世界的國家だの世界的平和だの總仲裁條約だのといふ高遠なる理想＝實は休息安慰を願ふ衰亡、廢頽、爛熟したる民族とは異つて、尚一味邁往向上の精神がある、世界の最强者たらんとする大願がある、日本が獨逸に對して甚深なる尊敬を拂ふは獨逸が適ま日本人のこの精神、この大願と共鳴したからである。

獨逸が果して戰勝國民として新しい世界の舞臺に躍り出して來るとすれば、日本の競爭者日本と並び立ち難き英雄（ライヴァル）は唯獨逸あるのみといふことに爲る、それだのに、日本國民が甚深なる尊敬と其ライヴァルに拂ふは、競爭者のない好敵手のない世界は、實に『孤獨の悲哀』を感ぜねばならぬからなのだ、鹽を武田信玄の國に送つた上杉謙信の精神は、敵を海上に封鎖して、兵力に依らず、唯兵糧攻めを以て勝を制せんとする惟物主義の國民には解らないことだ。

私の半ば豫言的に述べた此言論が若し適中したとすれば、これ實に第二十世紀劈頭に於ける世界の大變局ではあるまいか、地球の表面に於ける新局面の大打開なくして何ぞ。

獨逸國民は世界の最强國として雄飛するであらう、然しながら私は日本人の間に一種心理作用の變化が起つて來ることを明言し得る、日本人は專獨逸はエライと嘆息する、然しながら從前の如く獨逸がエライと嘆息することは取りも直さず歐洲がエライ白人類がエライ

といふことに爲るであらうか、獨逸は彫刻師が浮彫(うきぼり)を爲すが如く、他の歐洲諸國を刀尖きで削り崩して、そして自ら斬然として頭角を露はした、故に獨逸が高く頭角を露はしたといふことは卽ち他の歐洲諸國が削弱された沉下(シンクダウン)したといふことに爲る、果して然らば日本人の歐洲に對する價値觀念は全く轉換され、獨逸は歐洲に屬し、其國民は白人類なるが故に價値あるにあらず、獨逸は獨逸なるが故にチユートンはチユートンなるが故に價値ありといふことに爲れば、日本人の眼中に於て獨逸は全く歐洲より切離され、歐洲に對し白人類に對する尊敬の念と偶仰の情とは亦昔日の如くなる能はざらんとするは、誠に餘儀ない歷史の進行と言はねばならない。

四　日本國民の前に橫はる三大問題

日本國民の歐洲に對する價値觀念にして轉換せらるゝものとすれば、日本人の心頭には抵抗し難く、少くとも三個の新問題は湧出し來つて、以てこの世界の大變局、新局面の打開に應ぜんとするに至る、これ勢の必至數の必然である。

其一　日本を肯定せざるを得ず

日本國民が日露戰爭の後を承けて、勝利の悲哀に沈んだ一時は、時の流轉と共に過去の扉の中に隱れて了はねばならぬ、我々は最早悲觀ばかりしては居らぬ、我々は樂觀せねばならぬ、大樂觀の境地を開拓せねばならぬ、日本國民は必ずや現在及將來に於て地上に雄飛すべき運命を有するものは西に於ては獨逸あり東に於ては日本ありと自覺するに至るであらう、而して兩國は世界に於ける競爭者たり好敵手たりライヴアルたりとすれば、日本が外部世界に學ぶこと益々深く且つ益々廣からざるべからざるも、外的生活が內的生活にあらずして、內的生活が外的生活であつて、外的生活の繁榮な大は卽ち內的生活の繁榮强大を投射したものに過ぎ强い、外部世界に學ぶは要するに內的生活に刺擊を與ふるに過ぎないと知らば、何時までも獨逸を始め其他の諸國の物心兩方面の產物を取つて日本國民の上にスーパーフイシヤル、ジヤパニング（皮相的塗抹模倣）ば

かりを遣るべきものではあるまい、日本自ら日本の一新機軸を出さねばならぬ、日本の國粹發展、日本の國粹創造がなければならぬ、日本の獨創自發に屬する文明と生活とがなければならぬ、支那流に言へば、我れより古を爲さねばならぬとの一念が沛然として日本國民の胸臆裡に發生せねばならぬではないか、日本國民は最も深刻なる自己內省を爲し、最も大膽なる自已創造を爲さねばならぬ、舊るい日本は世界の新局面に應ずるに於て固より斷々乎として之を否定せねばならないが、否定は即肯定で、我々は同時に新しい日本を肯定せねばならぬ、悲觀するのも、悲觀を透して樂觀に入らねば生きては居られない、舊るい小さなる日本を否定するといふことは即ち新しい大なる日本の肯定でなければ、我々は日本人として全々生甲斐がないではないか。

既に日本國民の眼中に於て歐洲に對し白人類に對する價値觀念に一大轉換あり、新しい大なる日本を肯定し日本は先づ內に繁榮強大ならざるべからずとすれば、此に自然に論理的に西洋文明を批判する要求が生じて來る。

其二　西洋文明の批判

冥々の間に於ける日本國民の歐洲の文明に對する感想は多大の變化を遂げつゝあるとはいへ、歐洲戰爭は維新前後から殆ど批判することなしに西洋の文物制度思想藝術を輸入し來つた態度に對して一大變化を與る一大時機と謂はねばならぬ、歐洲戰爭が世界歷史の一大回轉機であると共に、日本の歐洲に對する態度の一大回轉機である、由來日本人の歐洲に對するや極めて單純なる人生批評ある耳であつて、斷えて文明批評即ち歷史批評といふものがなかつた、日本は歐洲に劣る何でも歐洲に劣るといふ觀念が先入主と爲つてゐたから、日本人は努めて歐洲に於て日本と同じきものを發見せんとし若しくは日本に於て歐洲と同じきものを發見せんとする一種の力強い傾向があつた、加ふるに日本人に於ては東西生活の批判的研究、世界文明史の比較的研究がなかつたから、唯日本と歐洲とを平等的に

のみ観て差別的に觀なかつた、新日本の創造者と言はれた伊藤公にも固より此病があつた、現在最も新しいと言はるゝ大學教授に於ても思想家とか藝術家とかいはるゝ輩に於ける亦同様である、人生批評といふは人性は一なりといふ立場であつて即ち平等觀的立場である、國を開いて五十年の日本に於て西洋を理會し鑑賞することが全然不可能であるとはいへない、殊に西洋の學術は總て外的實在を解剖し分拆し説明し組織するのであるから、西洋の文明は眼で見ゆる文明である、學んで取ることの可能る文明である、其科學に於いて最も然りとする、若し夫れ思想藝術に至つては、之を理會し鑑賞することは科學の如くに容易ではないが、西洋の思想藝術と雖も東洋の如く神秘主義に於て徹底してゐないから、時としては爾我れに在り、我れ爾に在りとする妙域、自己が彼れと融け合つて神融意會の極地に到り得ぬことはないが、日本人の歴史的生活を以てしてニイチエでもベルグソンでもミルでもエマーソンでもトルストイでも西洋の歴史を背景とするものを理會し鑑賞し盡くすといふとは至難の問題である、兎に角人性を一なりとして其文明の性質、其生活の性質、換言すれば歴史に拘らず、西洋の文明を直ちに我國に移植すべしとしたのが我先覺者の態度であつたが、人間には一種言ふべからざる秘密の經驗"Secret experience"（エマーソンに出づ）なるものがある、或は潜在意識とも言へやう、或は意識に入らざる經驗とも言へやう、西洋から飜譯し來つた文章議論文物制度、一時は成程と感服するであらう、その多くは宛も彩雲の天を渡るが如く忽ちにして生じ忽にして消え、縱ひ一年草と爲るも宿根草となり得ないのは、日本國民の秘密の經驗が否定するからである、私をして此に二三の例を擧しめよ（一）日本に西洋の如き自治制度を移植したが、日本國民は實際に之を否定してゐる（二）日本には日本的の立憲政治が實現するであらう、猶日本的の自治制度が實現せねばならぬやうなものであるが、西洋に於けるが如き階級戰爭の結果たる階級的代議政治なるものは果して日本國民中心の要求であらうか、日

本國民は選擧に於て實際に之を否定してゐる、之を日本國民が猶西洋の人間の如くならないからだといふが、今までの見解であつた、私と雖も日本國民が其物質的文明に於て多く西洋に劣るを認むるものであるが、私は同時に日本國民は自ら日本國民の進路があつて、決して歐洲の迹を趁ふて進行するものでないといふことを認めざるを得ざるに至つた、若し階級競爭を激成せずんば、西洋の如き代議政治が實現せずとならば、日本國民は所謂代議政治を捨てゝ階級の理會と同情とを益々深からせんと要求するに至るかも知れない(三)日本も亦西洋の如く法治國の理想に向つて進まざるべからずといふものがある、日本國民は法治主義に異議はあるまい、人事益々複雜多岐に亘るに於て大岡裁判のみで滿足する譯には行かないが、日本國民の異議のないのは、法治主義を日本國民生活の或物と爲すので決して總ての物と爲すのではない、最後の手段とするので、人事萬端盡く權利義務の關係を以てするのではない、日本の學者敎授などが法治國をその理想などいふは實に不見識の事である、法治主義は物質文明の產物で、即ち惟物主義の產物である、東洋の德治主義、愛治主義、情治主義は精神文明即ち惟靈主義の產物であるといふことを知らないのだ、物心一致、靈肉合流せざるべからざる現代に於ては、德治、愛治、情治も時に及んで一大變通を爲さゞるべからざるは言ふまでもないが、法治國が何んで我々の理想であらう、蓋し斯かる學者敎授は要するに西洋の文明を無批判で受け入れた時代に人と爲つたからで、最早保守黨に屬する、舊日本舊東洋を墨守するものが舊保守黨、歐洲を墨守するものが新保守黨、日本は今や新保守黨の多きに堪へざらんとす、(四)日本に於て西洋の社會政策を講演して、これ日本の社會政策なりとするが如きは全く日本の生活とは柄鑿相容れざるものである、勿論日本の西洋の社會政策に取る所あるべきは、私と雖も決して之れを否むのではないが、西洋の社會政策は資本と勞働とは必ず相衝突すべきもの、即ち分裂より分裂、競爭より競爭に入る資本階級、勞働階級を基礎と

し出立點としたものである、そして總ての社會問題をば惟物主義的に解釋せんとするのであるが、西洋の社會政策は西洋の社會的生活を基礎として樹立されたもの、日本の社會政策は日本の社會的生活を基礎として樹立されねばならぬ、果して然らば西洋の社會政策は階級競爭から出立し、日本の社會政策は階級調和を主とせねばならぬ、西洋は既に分裂したものを調和し、日本は未だ分裂せざるのを更に益々調和し以て近世歐洲の弊風を免れしめんとするのでなければなるまい、そして若し日本に於て社會問題、勞働問題を解決するの必要ありとすれば、日本に於ては西洋の取引（ビジネス）は取引（ビジネス）なりとする原則に加ふるに日本の「温情主義」を以て之を解決せんとするに至るのは甚だ見易き勢である、西洋に於ては資本階級は勞働階級を壓倒せずんば已まず、勞働階級は資本家階級を壓倒せずんば已まざらんとするに反して、日本に於て若し階級の葛藤が生ずれば、それは互に他を壓倒するが爲めではなくして、相互の理會と同情とを益々深からしめんが爲めであるといふことを忘れてはならぬ(五)且つ日本の學者敎授、それから此等から傳授を受けた青年は資本家とか勞働者とか一氣に言ひ去つて殆ど日本と西洋とを區別しないが、日本は依然として家内工業が主であつて、工場制度は一般に普及して居らぬ、産業革命は現に來りつゝあるが、西洋の如く忽ち資本と勞働との葛藤を生ずるものが來りつゝありとは何うしても考へられぬ、私一身としては日本國民をして世界に於て産業的帝國主義（インダストリアル、イムペリアリズム）を行はしめんが爲めには工場制度を促迫せしめねばならぬと思ふのであるが、日本人に海外貿易、海外發展が意の如くならないのは、日本人に資本がないからである、日本が資本國でないからである、各日本人をして此資本家たらしめ日本をして一大資本國たらしむるのが急務なのではあるまいか、日本の學者は泰西を學んでも解釋轉換、價値轉換を遣らないから、若しくは遣る能力がないから、日本は何時かは西洋の如くに爲らうといつてゐる、何時かは西洋の如くに爲らうと考へねば、其學問は全然無用に爲る、故に現實の日

本には當て箝らないのは、日本が西洋の如くに進んで居らぬが爲めであるといふのは、實は學者の自己防禦である、利己心の然らしむる所である、日本が西洋の如くなるといふのが既に一大疑問である、日本をして西洋の如くならしめねばならぬといふは更に一大疑問である、私は日本の大學教育には早晩一大革命の起るべきを豫言するものである、近々に自由戀愛だの、デモクラシイだの、無政府主義だのといふものがあるが西洋の現實は多くは日本の幻影、西洋人は現實を現實として生活してゐるが、日本の高等飜譯業者、高等醫術は現實の幻影の裡に生きてゐる(六)猶一例を擧げんか、家族制度は貴族、富豪、地方の大地主の間には存續すべきも、活動の中心たるべき日本人の生活とは固より相容れない、家族制度は此意味に於ては破壞されるとしても、我々は西洋の如くに夫婦までが惟物主義と法律とを以て支配せられ、愛の裡面が權利義務で、愛と法律とが影の形に伴ふが如くなるを以て滿足すべきとするか、家族的制度は亡びても家族的精神は生存競爭が猛烈に爲るに從ふて反つて長養せらるゝに至るであらう、我々は舊日本、舊東洋の生活、制度、習慣、傳説、觀念に反逆し謀叛したが、同時に直ちに日本を擧げて歐化すべき乎、日本人は從來保守でなければ、歐化、歐化でなければ、保守といふやうに、極日本と西洋との間を行つたり來たりするものであつてが舊日本舊東洋から解放されて、そして既に衰運に向ひつゝある西洋の文明に束縛せらるべき乎、是に於てか日本には文明批評即ち歴史批評が大に與らざるを得なくなるではないか。

其三　日本國民には世界の強者たるべき素質ありや

日本國民が日本國民を肯定し、其國粹を發展し更に國粹を創造して世界の最强者たらんと覺悟し、更に西洋の生活と文明とを批判して、そが全然惟物主義であることを自覺したならば、日本人は必ず自己意識に立戻り日本意識に立戻り東洋意識に立戻らねばならなくなる、日本人は人間ではあるが、日本人である、東洋人である、現世を超越せんとする厭人家(ミスアンスロピスト)はいざ知らず

日本人がいかに西洋を學ぶもいかに、西洋の物質的文明を輸入しても、日本人は或日本人の如く『我英國』として出立する譯には行かぬ、必ず日本人は日本人と『我歐洲』として出立する譯には行かぬ、必ず日本人は日本人として出立せねばならぬとすれば、日本人は結局日本意識、東洋意識に戻るは理數の自然である、時の進行と歐洲戰爭とは既に日本人をして日本意識東洋意識に立戻らしめつゝある、そして日本に於て將來日本人が個人としても國民としても世界の强者たるべき資格あり素質あり、自己には自己の人粹あり國には國の國粹あるかを冷靜に大膽に觀照し點檢せねばならなくなる、若し我々にして之が無いと知つたならば、日本人は自殺するより外はないが、これが有ると知つたならば、その人粹、國粹が日本人の出立點であらねばならぬではないか、近時東洋思想が歐洲の人心に浸潤する實に驚くべきものがある、日本の所謂思想家、藝術家＝適切に言へば高等飜譯業者、高等通辯＝が盛んに歐洲の思想藝術に於て共鳴點を發見するのは、それが純然たる歐洲的のものでないからである、純歐洲的のものは彼等には不可解である、不可解ではない、讀んでも面白くない、少しも共鳴しない、故に不可解に陷るのである然らば彼等は何故に歐洲の新しい思想藝術に共鳴するかといふに、此等は多くは東洋思想が歐洲化され近代化されたものであるからである、即ち彼等は再輸入された東洋思想を歡迎するのである、日本人が歐洲を以て其判斷の標準と爲さば、維新以來歐化的の時代思潮に感化されたもので、今日に於ては寧ろ無意識になつてゐる、由來判斷の標準は自己に存すべきものであるが、日本人に於ては他己に存ずるのだ、他己とは何ぞ歐洲是れ、歐洲に於て是とせられ正とせらるれば、日本に於ても是とせられ義とせられ眞とせられ善とせられ美とせらるゝのである、タゴールにして若しノベル賞金を受けなかつたならば、彼れは日本に於て一無名氏であつたであらう、彼の我國に歡迎せらるゝは輙ち共亦歐洲からの再輸出であるからではないか、孰れにもせよ日本にも東洋にも兎に角歐洲の人心に浸潤すべき價値のある或物があるといふだけは、容易に且つ安々

首肯される、勿論歐洲に浸潤した東洋思想が果して我日本人の現代生活に價値のあるものであるや否やは自ら別問題である、

人或は東洋も進歩すれば遂に西洋の如くに爲らうといふ、これは東洋を西洋の原始時代と同一の位地に在りとするの觀察である、その說は多くは西洋の學術思想に束縛された人々の言分である、日本が若し西洋の如くに爲らなかつた日には、彼等は飯の喰上げと爲る故に彼等が斯くいふは前にも言つた如く畢竟するに利己の動機から來るのである、然しながら東洋には自ら東洋の文明がある、ベルグソンは『時間の世界は創造の世界である、空間の世界は反覆の世界である』と言つたが、私はベルグソンすら其觀察が時間と空間との外には出られなかつたものではあるまいかと疑はざるを得ない、時間といひ空間といひ要するに外的世界、外的實在に對する問題であつて、内的世界、内的實在に對する問題ではない、西洋には過程がある故に歷史がある、東洋には過程がない故に歷史がない、故に西洋は時間の世界であつて、東洋は空間の世界であるといふものさへあるが、成程東洋の外的生活は極めて簡單である、歐洲に於けるが如き歷史がないが、その歷史あり過程ありといふは、外的世界、外的實在に對する人間生活の問題である、明白にいへば惟物生活の歷史である、東洋の生活は惟心生活である、東洋の歷史を論ずるに時間と空間とを以てするは、外的生活の眼を以て内的生活を觀るものである、決して兩端を叩いて盡したものとはいへない、惟心惟靈の生活は時間にも空間にも束縛されない、全く超越時間（スーパータイム）、超越空間（スーパースペース）の生活である、ヴエダもウパニシヤッドも婆羅門も佛教も儒教もゾロアスターも猶太教も基督教も儒教もゾロアスターも朱子學も陽明學も人間生活の大創造大産物ではないとは誰が言へる、西洋は時間的に大創造をた、東洋は超時間的に大創造をした。

東洋人の生活は形式に於ては單純であるが精神に於ては極めて複雜である、西洋人は然らず精神に於ては極めて單純にして形式に於ては極めて複雜である、西

洋人は基督教徒でなければ則ち自由思想家（フリーシンカー）だといふ、西洋人には東洋の所謂「心虚しければ物集まる」といふ解放思想が解らない、基督教に囚はれなければ、自由思想なるものに囚はれる、西洋人には同時に二箇の思想を受け入れられぬ、日本人はさうではない、若し人あり私に向つて「君は基督教徒なりや」と問へば、私は「否」と答へるであらう、去らば基督教を好まぬかといふに、私は之を好む大に好む、私は基督教を好きなり佛教も好き儒教も好き西洋も好き、バタ臭い西洋料理も好き、ブタ臭い支那料理も好きなのだ、そして私は一箇の自由思想家である最も自由な自由思想家で必ずしも基督教に對し佛教に對して言ふのではない、西洋人は解放々々と叫ぶが、總ての外物から解放されれば今度は自己に束縛される、解放に囚はれてゐるのだ自己に囚はれてゐるのだ、自然の繼兒であり板子一枚を爭ふ破船者のやうな生活をして來たのであるから、西洋人は其生活の基調に於て惡黨である海賊である、陸賊である、何うしても心虚ければ物集まるといふやうな絶對解放の神境には達し得ない、至極後生の惡るい人種である。

日本人は極めて自由である、日本人は基督教を西洋の形式に以てしては決して取らない、いかに歐米の宣教師が努力しても日本は決して基督教國には爲らない、日本人は儒教でも佛教でも全體として取らない、基督教と雖も亦全體として取らないことは言ふまでもあるまい、去れば或物として取るか何うかといへば、私は勿論否と答へる、日本人は固つた基督教を取らない、融けた基督教を取る、融かして取つて固めて取らない、故に基督教も日本人にあつては御膳の上の一皿の肴である、そして基督教といふアイデンチチーを失はしめねば止まぬ、西洋人は寢室は寢室、食堂は食堂書齋は書齋、客室は客室、形式が極めて複雜であるのは即ち其思想精神の極めて單純なる證據である、日本人の如く圓融自在なとは西洋人の夢にも出來ないことだ、倫理觀念に就いて見ると、西洋は正直（オネスチー）を主とする、東洋は誠（シンセリチー）を主とする、瀕死の病人に向つては、

其人間の性格に依りては醫師親族が時として「大丈夫だ安心せよ」といふ必要がある、これは正直ではない倫理の基礎が正直では此嘘を說くよしがない、人生には「嘘は方便」といふが如く、時と場合とに依りて嘘を吐かねばならぬことがある、苟も誠を遂すといふ觀念が倫理の根本であらば、譯もなく解說される、西洋は此點に於ても單純で東洋は複雜である。

私の親友として新しい商人たる京橋の碌々商店の野田正一君が常に私に語る、西洋人と取引するには一本槍で行くより外はない、負けろ〱といつて取引の際餘りに强情であるから、一番彼奴を恥ぢしめてやらうといふので、思ひ切つて彼れに讓れば、恥ぢる所ではない、此方に別に思ふ仔細があつて讓つたのだといふことには氣が附かないで、それからは益々附け上がつて來る、日本人はさうではない、後で餘りに强情であつたといふことに氣が附けば、氣の毒で堪らなくなり他の取引で埋め合せをするか、又は別に新奇の得意を周旋するやうなことをする、西洋人に向つては「負けるは勝ち」といふ俚諺を應用し來れば最後大損をせざるを得ないと、私は決して反動黨ではない、故に毫末も日本の現在に滿足するものではない、否、進んで大に現在を破壞せんとするものであるが、私は自己の、日本國民の、東洋の生活には世界の强者たるに足るの資格あり素質あることを認識し、若し之を長養助成したならば、獨り東洋を倚るしとするのみならず、西洋も亦倚るしとする新生活、新文明を創造することが可能ると信ぜざるを得ない。

* * * * * * *

是の如くに觀察し推究し來れば、日本國民は此三個の問題を痛切に自省內觀せねばならなくなる、そして日本國民は自ら其世界に於ける使命を自覺したならば歐洲戰爭と前後して、世界が新局面を打開し來ると共に日本も亦新時代に入り新氣運に向はねばならぬ、新日本主義の勃興し來るは、洵に避くべからざる自然の勢ではないか。

下篇

一　華想精神は生命の躍動

いかに打算に富んだ人間でも、苟も其生命力が躍動して居る間は、最も華想的精神（ローマンチック、スピリット）に富んで居らねばならぬ譯である、否、生命の躍動其物が華想的精神なのである、世の中に紅褪せ艶消えた老婆が終日臍繰金の勘定ばかりして居る位見惡い者はない、英國の如きは此老婆的國民ではあるまいか、これ英國は國民として民族として最早生命力が躍動しなくなつた證據ではあるまいか、如何に生活問題を解決するに急であつても、若し其人間に華想的精神がないとすれば、それは既に老青年である、一歩を進めて言へば、生活問題さへ大なる華想的精神がなければ解決の可能ないものである生命の飛躍、生命の暗中に於ける飛躍、これが最善の生活問題の解決である、英國民にして長へに世界に於ける大帝國を維持せんとならば、此歐洲戰爭の機會を捉らへて暗中の大飛躍を試みねばならないが、臍繰金の勘定ばかりしてゐる紅褪せ艶消えた英國民には可哀想だがこれが爲し得ないのだ。

英國も昔しはこの生命力が躍動してゐた、『ルール、ブリタニカ、ブリタニヤ、ルース、ウエーヴス』と歌つた時代は確に華想的の國民であつた、それだから萬里の波濤を支配することが可能たのだ『英國は各人が其責任を遂行するを期す』と號令したネルソンの英國は確に華想的の國民であつた、エリザベス女王・ジエームス王・クロムウエル、ウイリヤム・ピットの英國は亦確に華想的であつたが、現代の英國は最早此華想的精神に見捨てられて了つた英國である、キッチエナー、フイシヤは陸軍の元帥として海軍の大提督として知られてゐるが、其人既に英雄的の氣象と規模とがない、戰場に於て一人々々の勇者や大將がその武者振を示すために五色まだらの鎧を着けて雄鷄の如く雄叫びをするの時代は一たび去つて復た還らずといへやう、科學の進歩は武器と交通機關とは驚くべき發達を遂げて戰爭は個人を全體に沒入せしむる程の大規模と爲つたといふが、第二十世紀に於ては果して英雄は無用であら

うか、天才は其才を縦にする餘地がないであらうか、ルーテルは「神も賢人を要す」といつた、人類は最早賢人を要さぬであらうか、去りとは實に平凡な世界ではないか。

科學の發達は人間をして科學の奴隷たらしめた、天定まつて人に勝つといふ、人類が此科學から解放されて、科學の主人と爲るに及んで、新英雄時代は此に新なる面目を以て復活し來るのではあるまいか、私は獨逸のカイゼルを以て新なる英雄時代が復活して來たものだといひたい。

獨逸は徹底科學的であるのは何人も首肯せざるを得ざる所である、英國よりも科學的、佛國よりも科學的勿論伊國、露國よりも科學的である、然しながら獨逸の強いのは唯科學の然らしむる所であるといへば、それは獨斷の偏見たるを免れない、獨逸國民には生命力の大躍動あり、從ふて躍動する華想的精神があつて、能くこの科學の主人と爲り得たからこそ全歐洲を敵としても猶勝算の歴々たるゝのがあるのではないか、戰爭は個人を全體に沒入せしむといふが、カイゼルは決して全體に沒入してゐないではないか、ヒンデンブルグ將軍でもマッケンゼン將軍でもホルケンハイン將軍でも軍の統率者として決して自己を沒入さしては居らない、若し總ての個人が全體に沒入した場合には、其全體が運動することが可能なくなる刹那である、少くとも盲目的の運動を爲すより外はなくなる刹那である場合に依りては四分五裂せねばならなくなる刹那である、全體に其個性の偉大を沒入しない英雄、天才があつて之を統率せねばならないのは殆ど自明の理である、そして若し獨逸國民が各自其國民的華想的精神を解して戰ふたとすれば、彼等も亦自覺した國民であつて決して自己を全體に沒入したものではない、單なる科學の奴隷ではない。

「歐洲の祠的幻影」と題する一書を著はし、戰爭は勝者にも經濟上の利益を與ふるものにあらざるを詳説して名を一時に馳せた英國のノルマン、アンゲルが獨逸に遊んだ、學生等がノルマンを或處に招待して

『戰爭と經濟』と題する討論を爲し、彼れの批評を請はんとした、一大學教授あり、登壇して說き出して曰くノルマン君の故郷なる英國に於ては、經濟上の利益あるに非ずんば戰爭を遣らない、故にノルマン君が戰爭は勝者と雖も經濟上に利する能はずとして戰爭を避くべしと言はるゝは、英國としては至極の次第なるも、我獨逸は獨り經濟上の利益の爲めに戰爭をしない、普墺戰爭でも普佛戰爭でも感情があり主義があり理想かあつて遣つたのである、故にノルマン君が英國に於て問題とする所は獨逸に於ては始めから問題とする所ではないと、あの鄙吝な獨逸國民にもこの華想的精神があると思へば、其處が賴もしいではないか。

此で支那でもあるまいが、支那では近ごろその國歌を作つた、左に引用する

中國雄立宇宙間　廓八埏
華冑來從崑崙顚　江河浩蕩山綿連
共和五族開堯天億萬年

私は米國を夜郎自大と言つたが、此國歌を見れば、夜郎自大といふ熟語を作つた支那が實に夜郎自大で而も大氣魄大精神が少しも燃え立つて居らぬ、そして序ながら言ふが、支那で共和といふは支那に於ける五民族の共和である、西洋の共和國といふものは民族共和ではあるまい、それだから袁世凱が支那共和國の皇帝に爲つても差支ない譯だ！然るに私は最近米國に出版された『英國と獨逸との帝國主義』なる小冊子を讀んだ、其中に面白い記事があつた『獨逸帝國は愛國心の上に建てられ、英帝國は貿易の上に建られた、祖國（ファーザーランド）の一語は能く普魯西、バヴアリア、サキソン、ウルテムベルグの小猜忌を融和するも、英人には之が解せない、英國の國民的生活は旣に死んだ、何故に死んだ、商業主義の爲めに窒息して死んだ、日耳曼はさうではない

"German troth and German women,
German wine and German song,
Shall inspire us in the battle,
Shall preserve us pure and strong.
"German brotherhood and freedom

E'er shall flourish though we fall.
In its beauty—in its duty,
Deutschland! Deutschland! over all!"

『獨逸よ、獨逸は萬國に冠たり』と唱へて戰場に赴くに、英國では其兵士に獨逸から商業を奪ふたのだから戰場に赴けと勸誘して居る』と、英國では最早やルール、ブリタニカを唱へなくなつた、或ポンチに英國の士官が途に一勞働者を擁して蔘兵の勸誘に應ぜしめんとして『兵士に爲れ、英國の勢は大したものだ』勞働者いふ『そんなら私が兵士に爲る必要はない』士官いふ『誤解してはならん、英國は今太だ危險な位地に居る、それだから兵士になれ』勞働者いふ『そんなに危險なら猶更御免だ』

二　世界に國なし

カイゼルは是の如くにして科學を驅使する第二十世紀に於ける强國民の第一の英雄となつた、このカイゼルを首領とする獨逸が日本の競爭者たりライヴアルたりとすれば、獨逸國民だけの苦楚を嘗めたことのなき日本國民は猛然として深省を發せざるを得ざることになる、然しながら私は反覆していふ、世界の現在に於て最强國民として樹立するは獨逸で、獨逸に次いで、世界の將來に於て最强國民として樹立すべき運命を有つてゐるは日本であると、何處に光りと希望に滿ちた國民がある、露西亞は愈々地上に於ける强者となるべき國民でないことを暴露した、露西亞人は夢に生き幻想に生き理想に生きる國民で、自ら手を下して實生活を改造する國民ではない、露西亞人は實生活を作らないで藝術を造る、故に文藝の國としては優に世界を支配することが可能やうが、政治國として商業國として商工的帝國主義を發揮して世界に雄飛する國民ではない、露國人は數を知らない、五萬とは若干と訓く人間である、露西亞は國家としては餘りに漠然としてゐる、故に露人には國家といふ觀念がない、國民としては餘りに多くの民族を混じてゐる、地上に立脚して地上に膨脹する帝國としては統一が艱難である、大男は何時も總身に智慧が廻はり兼ねるものである、墺國は

中央に位し、佛伊は南方に居る、中央歐洲、南方歐洲は到底西班牙、葡萄牙、和蘭の後を趁ふより外はあるまい、而して英國も亦强努の末魯縞を穿つ能はずとすれば、歐洲は唯獨逸あるのみ、他は最早衰運に就きつゝあるのである、個人としても國民としても生活の疲憊に堪へない國民である、太西洋を超えての米國は歐洲人種がその物質慾を滿足せしめて安眠に就く黄金の寢床である、新しい國であるから尙活氣が充ち滿ちてゐるが、決して世界を支配するやうな雄心のある國民ではない、平和、文明、理想、仲裁條約を絶叫するは黄金の寢床に熟眠する人間の寢語である、世界の現在及び將來は西に獨逸あり東に日本ありと謂ふより外はないではないか、嗚呼白人類の世界は東洋諸國の轍を踏みつゝある、東洋が日本を殘したが如く、白人類の世界は唯獨逸を餘すのみである

三、人間生活の分裂

東洋と西洋との生活は當然一なるべき人間生活が二つに分裂したものである、西洋は感覺主義(センセーショナリズム)の生活である、東洋は超感覺主義(スーパーセンセーショナリズム)の生活である、感覺主義は外物を實驗する主義であるから外驗的である、超感覺主義は内物(若し斯く言ひ得れば)即ち人間の靈性を心驗する主義であるから内驗的である、一は專ら外に伸び、一は專ら内に向つた、外驗的であるから肉主義である惟物主義である、故に西洋の生活は一面に於いては富を貪るが主となり、一面に於ては外的實在即ち物質的實在を解剖分析する科學となる、富を貪る心が科學の發達したる反面、科學の發達したのが富を貪る心の反面である、外驗は解剖分析が主であるから大極に至り得ないで、一向(ひたすら)小極に至らんと努力する、元素から元々素、分子から分々子といふ風である、西洋の生活に過程あり其史路に歷程のあるのは、日本人の學ばねばならぬ處だが、西洋の生活をして西洋の生活に終らしめば、分裂又分裂、終に窮極する所なく歸一する所なく綜合する所なきに畢る、無量數があつて全一がない、西洋の個人主義なるものはこれである、私は此點に於てタゴールの西洋觀に同意する、西洋の個人な

るものは堡壘の中に籠城したる個人——自我である、私は自我の絶對を信ずるものであるが、同時に絶對即ち相對で、主觀すれば絶對と爲り、客觀すれば相對と爲る、然るに西洋は個性を宇宙及び他の同胞から截然切離すまでに主觀し、之に反して東洋は自己を宇宙に沒するまでに客觀した、彼れは執着思想のみにて徹底し、我れは解脱思想のみにて徹底した

西洋は感覺主義であるから從ふて理智主義(インテレクチユアリズム)である、此理智主義なるものは東洋の超理智主義(スーパーインテレクチユアリズム)と好個の對照を爲してゐる、理智主義であるから總てのものを物質として觀る、心理學さへ自己の心を内驗した心理學ではなくして、人の心を物質として死物として觀た心理學である、近時ウイリアム、ゼームスが較々此弊を免れたまでだ、ベルグソンの哲學が直覺を高調する理智主義の産物であるは既に定評がある、西洋哲學は全く『科學の科學』である、科學はいくら行つても科學である、我々の所謂哲學ではない、全然組織の中に打ち込んだ哲學、それは決して生きた哲學ではない、然しながら東洋の超理智主義は自己内省が主である直觀自省が主である、其結果は自我を放棄して宇宙の大自我に入つて總てのものに歸一す、所謂萬法歸一で全一(オールインワン)に歸著するのである、自己を超越して一如の宇宙靈に歸著しやうとするのであるから、東洋主義は神秘主義である、或は詩と爲り藝術と爲り哲學と爲り宗教と爲る、般若正覺とは若し西洋の言葉で解説し得るとすれば、それは神秘的理性(ミスチツク、インテレクト)の自覺とでも言ふべきものであらう、出入無門戶で、實在を知るに門戶は要らない、去らば何處に實在があるかといへば、直觀自證で、唯心會默到である、感覺主義は肉眼で肉耳で肉鼻で肉口で肉觸で物質を感覺する理智主義と爲るが、超感覺主義は心眼で心耳で心鼻で心口で心觸で靈性を感覺する超理智主義と爲る、視るも心で視、聽くも心で聽き、鼻ぐも心で嗅ぎ、味ふも心で味ひ、觸るゝも心で觸れる、教外別傳、不立文字だ、由來二元多元でない一元、一元でない二元多元も共に淺薄にして一方面の生活である、西洋は物質一元、東洋は靈性一元、西洋は感覺主義一

元、理智主義一元、東洋は超感覺主義一元、超理智主義一元

故に私は言つた、東洋が舊るいといふならば、西洋も最早舊るい、

友人福來博士は曰く『吾人の神祕主義に依れば、一如の宇宙靈が分裂して意念が生れ、其意念が生存競爭の必要上から感覺を生み出したのである、故に感覺及び感覺に基きて生じたる一切の思想は唯意念の個體生命を保持する爲めの役を勤めるだけの機能であつて、それ以上は全然無能である、丁度硯、机、小刀などが或特殊の要求を充たすには能く當てはまる至極便利のものであるが、部分的有限的なるが爲めに人間存在の全意を悟るには役に立たざるものだ』東洋は個體生命を放棄して一意に一如の宇宙靈に歸一せんとし、西洋は個體生命を保持せんが爲めに全く一如の宇宙靈と絕緣して了つた、勿論人間は凡て宇宙的大靈の分身的顯現であるから、西洋にも神祕を解する人がある、東洋にも科學がないといへないが、東西の生活が分裂して各一方面に傾斜したことは疑ふことが可能ない

四　之を一にするは誰ぞ

知らず之を一にするは誰ぞ、西洋に於ては獨逸である、東洋に於ては日本である、獨逸は西洋的に之を一にし、日本は東洋的に之を一にするのである、獨逸は惟物主義を主として理想主義を加味し、日本は靈性を主として惟物主義を加味す、獨逸國民も亦理智主義、感覺主義の白人類である、野蠻を距る遠からずして動物的元氣動物的精神の旺盛なる上に、長く四境より大敵の蹂躙する所と爲つたから、其帝國が愛國心を基礎として樹立せられたのだ、私は獨逸が大勝の結果は或は自ら首を回らす能はずして、物質生活に墮落するのではあるまいかといふことを懼れてゐるが、兎に角獨逸と日本とは第二十世紀に於て珠を爭ふ双龍である

然らば何故に日本が之を一にする、私をして少しく細かに文明批評を試みしめよ、東洋に於て最も善く其神祕主義、超感覺主義、超理智主義を代表してゐるの

は印度である、一如の宇宙靈に歸しては其處に個體の生存がない、故に私は言ふ、印度は靈に墮落し天に墮落したのであると、同じ東洋の國でありながら、支那は肉の國、デカタンの國、何處に支那と印度との一なる處があると問ふものがあるに相異ない、善いかな問やで、印度が靈に墮落し天に墮落した如く、支那は肉に墮落し地に墮落したのである、印度と支那とが東洋生活の兩半面を代表してゐる、支那人は起きんが爲めに寢るのではない、起きなければ寢られないから起きるのだ、働かんが爲めに休むのではない、休むには働かなければ休まれないから働くのである、支那人は寢てそして喰つてゐれば可いので、印度人は言はゞ死んで仕舞へば可いのだ、支那人は地上の人だけれども地上に横臥してゐる人間である、印度人は地上を厭離して天上に移住せんとする人間である、之に反して西洋人は地上を歩いてゐる人間である、若くは地上を疾走してゐる人間である、餘り疾走して靜以て動を救ふの工夫がなかつたから、時に疲憊し盡くして支那人の如くに地上に横臥せんとしつゝあるのだ。

去らば日本人はといへば地上に坐つてゐた人間であるといふのが最も適當であらう、支那人は地に臥し印度人は天に上り日本人は地に端坐す、其靜的生活＝時間から見ての靜的生活を爲すに於いては一、獨り西洋人の所謂動的なる所以、私は既に露西亞を始め中南歐洲諸國を始め米國に至る迄の國運を說いたから、序でに東洋の運命を說かなければならないが印度が若し其靑年の理想するが如き印度合衆國を築造せんとならば、天より地に下りて來ねばならぬ、支那にして若し西洋に於けるが如き共和國を樹立せんとならば地に起き上り更に歩行し疾走せねばならぬ、日本人は坐つてゐたのであるから、唯起きれば可いのだ、歩き出せば可いのだ、場合に依つては驅け出せば可いのだ。

此に我々の注意せねばならぬことは、東洋には一個普遍の思想のあることである、私はそれを名けて休息思想といふ、東洋人は競爭を一時とし、愛の勝利、平和の勝利、調和の勝利を久遠なりとする先天的觀念が

ある、故に東洋人は戰即愛、葛藤即調和、衝突即平和ではなくして、戰ふて後に愛あり、葛藤して後に調和あり、衝突して後に平和ありとするのであるから、休息が主ではないが、支那では代朝革命ある毎に天下と共に休息すといひ、民と共に休息すといふ、或は創業は易く守成は難しといひ、創業守成の觀念があつても、不斷の創業、不斷の創造といふ觀念がない、私はタゴールに於て多く共鳴する所あるも、彼にも亦到底自我放棄の東洋觀念を脫し得ないと思ふ、基督敎も亦到頭此觀念を脫し得たいと思ふ、支那人は地上に休息せんとし、印度人は涅槃に寂滅せんとし、猶太人は天國に休息せんとす、均しく是れ休息思想である、

日本人の獨り他の亞細亞大陸の諸國と異なる所は此休息觀念のないことである、若し有るとすれば、そは亞細亞大陸の輸入思想で日本の土壤に於ける自然生ではない、歐洲は專ら時間的に生活し、東洋は專ら超時間的に生活し來つた。超時間的生活を背景として時間的生活を爲すの使命を有するものは即ち我日本國民なのである。

五　競爭は愛の分裂

新日本主義は思想的に先づ日本國民の生活の基調を確定せんとするのである、東洋に於ては德といひ愛といひ人情といひ西洋に於ては競爭といひ奮鬪といひ戰爭といふ、即ち知るべし、東洋には愛ありて競爭なく西洋に於ては競爭ありて愛なきを、是點に於ても由來一なるべきものが分裂して東西相別れてゐる、然しながら愛は愛を以て全からず、競爭ありて始めて全く、競爭は競爭を以て全からず愛ありて始めて全きものである、支那の古語に『於道和、於藝競』とある、道に於て和するのが愛で、藝に於て競ふのが競爭で、本來二段あるべきものではない、愛が分裂して競爭とならなければ愛に內容がなく、競爭が歸一して愛とならなければ競爭に收拾する所がないことに爲る。

我々の眞生活は不斷の競爭でそして不斷の愛の勝利であらねばならぬ、西洋の個人主義なるものは分裂又分裂の生活より來りたるものである、日露戰爭以後、

日本の青年は思想の名に依りて藝術の名に依りて此個人主義に征服されたが、新日本主義の樹立と共にその個人主義も亦過去の扉の中に入らねばならなくなる、蓋し日本人は東洋に在りながらも休息思想の爲めに囚はれなかつたのは、實行を主とする人民であるからである、日本人は支那人の如くに地上に墮落しなかつた代りに孔子を出さない、印度人の如くに天上に墮落しなかつた代りに釋迦を出さない、猶太人の如くに沙漠に飄泊し世界に散在すべく餘地なくされなかつたから基督を出さない、然しながら日本人は思想上に獨創の特色を發揮しないながらも總ての思想を理會し而して之を實行してゐる、實行といふ範圍に於て孔子を輸入して之を實行してゐる、實行といふ範圍に於て釋迦を輸入して之を實行してゐる、基督教に對しても、實行といふ範圍に於て基督教を輸入して之を實行してゐる、日本人は實行の人間、實際の人間、日本人は故に一種のプラグマチストである。

その實行的なるは即ち日本人が現世的なる所以、專ら東洋の影響を受けて來たから精神的現世主義の國民である、日本國民は最も死といふことに就いて淡泊な性質を有つてゐる、生を考へても死を考へない國民である、死んだ先きは何うならうともといふは今でも昔しと毫も渝りはない、日本の神話に於ては死に就いて何も語つてゐない、死を忌んだといふことは見えるが、死を怖れたといふことはないやうだ、國土生成の項に於て物の生成する所以を説いてゐるが、物の滅亡に關しては少しも顧慮してゐない、女神は一日千人づゝ殺すと宣はれたのに對して、男神は一日千五百人づゝ生まうと誓はれる、日本國民が現世主義の國民であることは神話が證明する、佛教が日本に渡來してから死といふことを禁じるやうに爲つたのは無論であるが、それにも拘らず、佛教さへも著るしく現世的傾向を帶びて來て、奈良朝平安朝を通じて佛法は現世の利福を祈禱する爲めの佛法であつた、生を欲するが生に執着しない、生に執着しないから眞逆の場合には死を恐れない、死後の世界に就いては深い恐怖もなく心配もな

い、日本國民が現世主義の國民であるといふことが日本國民の特色異彩なのである、現代に於ては思想問題が最も深く研究されるが、それもいかに生くべきかを研究せんとするのであつて、死といふことは殆ど問題に爲つて居ない、日本國民の境遇が世界生活に參加してから大なる變化を生じたのは爭はれない事實であるが、個人と個人との競爭、民族と民族との競爭、印度の如く四六時中、死の事を討論しては居られない、不斷に生の事を思索せねばならなくなる、故に日本の生活が變化すればする程、日本國民は益々現世的にならねばならぬ運命を有つてゐる、同時に其反動として人間が深刻なる自己内省を始めるから日本の思想は益々深きを加ふるであらうが、要するに涅槃に寂滅し天國に安息すといふやうな未來主義の國民と爲らないのは殆ど分明である。

未來主義の國民に爲れない所ろではない、日本國民は最早精神的現世主義では地球上の大生活が營まれない、同時に物質的現世主義と爲らねばならぬ、そして東洋生活の影響等を受けて精神的現世主義になつたのだらう、西洋の影響を受けて物質的現世主義に爲るのは亦容易の業である、獨逸は物質的現世主義より起つて愛國的華想精神を發揮した、日本は精神現世主義より起つて物質的現世主義に入る、兩國共に兩國の缺點がある、獨逸は其世界强たるの目的を達すれば、物質的現世主義に墮して、他の西歐諸國の如く物質の奴隷、機械の奴隷、享樂の奴隷、肉慾の奴隷と爲りはせぬかといふことである、之に反して日本は物質の奴隷、機械の奴隷と爲るまで進み得ないではなからうかといふのである、然しながら日本が歐洲戰爭後に於て世界列强からボイコットせられ袋叩きにせらるゝかも譯からない、或獨逸新聞の言つた如く、世界から私刑に處せらるかも譯らない、外部の刺戟が猛烈なれば勢、日本國民は精神的現世主義を以て甘んぜられないで、物質的現世主義と爲るを避けられない、然れども精神的現世主義の一面は、日本國民をして全然外的世界に於ける物質競爭のみを以てしては滿足が出來ないで、

常に內的世界に於ける愛の調和を以て之を救はんとするに至る『競爭は愛の分裂』といふことが始めて實行的にして而して現世的なる日本國民に依りて實行された、そしてこの新日本主義は世界に於て最も進步したる個人及び國民の生活主義たるは、何人も爭へまい、其兵力の大、其物質の豐なるに於て、日本は貧かに獨逸に讓るも、日本國民にして能く其世界に於ける使命を自覺し、又英雄あり天才あり愛國者ありて之を指導せば、日本の將來は或は大に獨逸に優れるものなるやも計られない、要するに、日本國民の使命は啻に人を富ますといふ希臘主義でもない、兵を强くするといふ羅馬主義でもない、大義を四海に布くの用意がなければならぬ、昔し横井小楠が維新の時代に於て『何啻富國、何啻强兵、布大義乎四海而已』といつて日本國民の使命を喝破したが、日本國民は右の手には商品左の手には劍を携へ、その商品を買へ、そして故なく日本の正當なる進路を遮ぎるものは斬り捨て御免とし(物質的現世主義)而も其心には深い愛の精神を把持して(精神的現世主義)、競爭は愛の分裂、愛は競爭の歸一、現世に於ける人間生活の積極的模範を全世界の現在及び將來に於ける人類に示すのが、我々日本國民の使命なのである、福來博士又早く『靈一方の印度文明は遠き昔しに亡び、肉一方の西洋文明は今や行詰まりて一轉機を求めてゐる、肉の文明を靈で指導し、靈の文明を肉で活動させるものでなくしては、生命の眞義を發揮することが可能ぬ、世界萬國中、如何なる國が斯る意義の文明を開拓するに最も適當してゐるであらうか、余は「神ながら言擧せぬ國」の日本がそれだと確信する』夫子之を獲たり。

六　世界の大破壞

私が少時マコレー卿の文集を讀んでゐる間に、英國の榮華は疾く逝いて、テームス河には寂しき漁夫が天に懸れる缺月を眺めてといふやうな極めてローマンチンクの文句に心を躍らせたことがある、後長くテームス河畔に客と爲り、時々此舊句を臆ひ出せずには居られなかつた、英國は階級の區別が極めて峻嚴なる國

で、勞働者は長く勞働者であつて、爲めに勞働者としての自覺は强いが、人間としても英國民としても最早雄心もなく猛志もなく向上も理想もなくなつたのを目睹して、英國民は民族として衰老病共に至り、其大帝國は唯惰力に依りて支持せらるゝを覺つた、大廈の崩るゝ一木の能く支ふる所にあらず、大英帝國は何等の機會に破滅するを感じて、獨逸の郵船に乘つてサウサンプトンを去るに方つて、英國の爲めに一掬の涙を其地に注いで來た、英國の弱點は歐洲戰爭で遺憾なく暴露された、この歐洲戰爭に於て大英帝國が忽然として四分五裂するや否やは、私の知る所ではないが、大英帝國が既に運命附けられてゐることだけはいかに遲鈍な人間でも既に直覺してゐる所であらうと信ずる、昔しギボンは羅馬の古趾に遊び、殘夜枯僧の祈禱を聞き、慨然として羅馬帝國衰亡史を著はすの心を決した、現代及び次ぎに來らんとする時代の歷史家は大英帝國衰亡史(Decline and Fall of the British Empire)を著はすの用意がなければならないと思ふ、故に曰く歐洲の地圖が其色彩を變ずといふが如きは實は世界の上から觀れば、眞に些末な問題であつて、大英帝國の衰亡は羅馬帝國の衰亡にも優さりて、世界の大破壞であるといふことを知らば、我々は現代に生れたのは復た何の幸かと言ひたくなる、日淸戰爭を觀、日露戰爭を觀、歐洲戰爭を觀、更に大英帝國の衰亡を觀る、我々に取つて之に代はるの計がなくしては何うする、獨逸が英國に代るであらう、去りながら我々には少くとも獨逸と共に世界を二分する位の計がなければなるまい、新英雄時代來り、新天才時代來り、日本國民は新に其使命を自覺す、世紀末の思想は遠からず日本から一掃せられねばならぬ、我々は我々の生活問題を決するにも、亦國民の暗中に飛躍する華想的精神の發揮に待たなければ決して積極的に解決されないことを自覺せねばならぬ、歐洲に於ける敗者の哀泣などに耳を假すは、新興國民の爲す所ではない。

現代文明を評し、當來の新文明を卜す

中澤臨川

一

十九世紀の後半から現代へかけて世界を風靡した物質文明は、人類が嘗て罹つたことのあるいろ〳〵の病氣の中でも、一番大きな、そして危險なものであつた。

日本が西洋文明を採り入れ始めた明治の初年から三四十年の間といふものは、彼方でも此文明が旺盛を極めた時期で、それを我國民は何のことはなしに、その儘無差別に模倣し吸收して、政治に、法制に、思想に、藝術に、唯だ剽竊を之れ事とする有様であつた。わが國民の頭腦には、最近の物質文明が西洋文明の總てで而かもその文明は唯一最高の文明であるかの如く映じた。凡そ今日の如き急轉直下の世の中に於て四十年は決して短かい歳月ではない。あらゆる物は加速度を以て變化しつゝある。時には數年、數ヶ月の日子が百年の舊慣を打破するに餘りあることさへある。で、匆々として明治の幕が閉ぢて大正の時代に入るまでに、この日本のあらゆる文物制度は模倣の物質文明を以て遂透し盡されたかの如き觀がある。今日の我國の情態は皮相な樂觀者の思惟する如く『若き日本』にあらずして、自墮落に早老した『世紀末』の國家である。民族の頽廢が慢性的徴候を帶び出して、それが自棄と驕慢の相に變らうとしてゐるのは、宛うど廿年前の佛蘭西を想はしめる。今日マックス、ノルダウをして日本の地を踏ましめば、彼はこの極東國に於て彼の學說を證據立てる好個の實例を發見するに相違ない。

しかし斯樣な狀態が永く續きうるものであらうか。

一文明が爛熟してその弊害に耐えられなくなる時に、更に新しい文明が起るべき筈である。順當な生命の進化に於ては、爛熟はやがて更新の前兆でなければならない。昔から生存力（バイタリチー）の旺盛な國家が、頽廢のどん底から新意志を創造して、一夜に生れ變つた例は尠なくない。これが革命の奇蹟である。現下の社會が何となく物々しい動搖の兆候を示し、所謂『大正維新』を仰望する聲の諸方から聞えるやうになつたのは、かやうな點から見て先づ祝着の至りである。それは疲弊と倦怠との空氣に耐え兼ねてゐる現代國民の切迫した要求である、生れかゝつてゐる新しい民族意志の無意識的努力である。

果して然らば將に來るべき斯の新機運はどういふ性質のもので、また如何なる道を採るであらうか。之に對し我等はいかなる覺悟を必要とするか。是等の研究はその當然の前提として、先づ現代文明の批判から始まらなければならない。

二

向にも述べた如く、現代の物質文明は、ひとり我國ばかりでなく、歐洲の一角から起つて世界の隅々まで浸潤し瀰漫した一大時代傾向である。日本はたゞ之を後入的に模倣し、そしてその爲めに征服されたに過ぎない。されば世界共通の斯の文明を批評することは、即ち現代日本を批評することである。

所謂物質文明の起源は、十九世紀の歐洲に於ける自然科學の勃興に發してゐる。一言にしていへば、自然科學が主として物質即ち富の上に齎した花々しい勝利が急に人心を眩惑せしめた結果は、茲に、極度に精神を踈んじ物質を偏愛する一種の變態文明を構成したのである。なぜ變態文明といふかといふに、精神の發達と伴はない不尋常な物質の繁榮は、人類の生命の進化に於ける邪路でなければならぬからである。我等は物質界を征服しながら、その勝利に醉つて却てあべこべに物質に囚はれた。で、かやうな變態文明または病的文明が社會の上に齎した影響を總括的に敍述すると、凡そ次の如く言はれよう。

一、唯物論と無神論とが榮えて在來の宗教を切り崩し、社會が共通に持つ目的理想を失つた結果は、人と人とを結び附ける有機的統一が斷たれた。

二、一方には人心を統一する高遠な目的がなくなり、他方には物質を過重する傾向を生じ、その爲め各個の人心はそれ自ら分離し、偏頗になり、且つ非人道化された。

三、共通の目的のない機械的社會に於て、物質の欲求が熾んなれば、從て際限のない爭奪が行はれ、利我的個人主義が一世を風靡するのは當然の結果である。

四、個人の幸福のみを目的とする物質的個人主義は國家なり社會なりを奴隷視して、之を各個の欲望の方便に用ゐようとする。それが偶ま佛蘭西革命の成果たる民主主義と結び附いて、この主義の根本を腐らせ、世界の政治を墮落させ、引いては單調陰鬱な。平凡(メディオクリティー)の空氣を漲らした。

五、同じく極端な個人主義の結果は、生命の本能を腐らせ、人間をして正當な社會觀、生命觀、または宇宙觀に對して盲目ならしめた。從て人は非愛國的になり、厭人(ミザンスロピック)的になり、僅かに抽象架空的な世界主義的人道觀に由て、その道德性を維持してゐる。

六、急激な物質的富の勃興は凡ての社會制度を繁雜にし、目眩るしく人間の外的刺激を增加した。その結果は十九世紀の特産物たる所謂都會文明を產み出し、人間の精神を極度まで疲らして神經症を激增せしめた。それが爲め人間の身體を虛弱にしたことが甚だしい。それがまた反對に精神に影響して世紀末の頽廢(デカダン)文明を育成した。

以上列擧した諸顯象は、玆に一々例證する必要のないほど公知の事實である。で、是等の顯象が互に因となりまた果となり、互にもつれ合つて、私の謂ふ所の物質本位の變態文明を構成したのである。

三

自然科學の發達はやがて實證主義(ポジチヴィズム)の勝利を持ち來た

し、それが唯物論的世界觀を傳播した爲め、これまで社會を維持し人心を統一して來たあらゆる精神的原動力が地を拂ふに到つた。茲に謂ふ所の精神的原動力とは、宗教、理想、その他の名によつて稱ばれる共通感激の源で、人の心に動かすべからざる一種の信念を打ち込み、從て彼の一生を調節するところの至上欲望を指すのである。で、この唯物論は當然の論理として利我的倫理觀を產み出し、絶對個人主義に變形し、それが偶ま物質上の富の驚くべき成功に眩惑した人心に投じて、いよ／＼具體的信條の境に入つたのである。

廣き意味に於ける宗教、即ち具體理想の缺亡は十九世紀文明の主要特徴である。科學文明の最初のそして最後の主張は理性主義（ラシヨナリズム）と無神論（アセイズム）との二箇條にある。從てそは人生を宗教的にそして有機的に見ようとはせずして、之を合理的にそして機械的に見ようとしてゐる。かやうな人生觀は分類に克つて統一に缺けてゐる。また其處には爭奪はあるが親和がない。人心の癒すべからざる離散がそこから起る。で、共通感激の源を失つた社會は、之を有機的に統一して行くあらゆる精神的制裁、即ち宗教、家族制度、愛國心などの羈絆（きづな）から放たれて、一種の虛無主義、無政府主義に墮落し了せた。

現代の社會を一言にして評すれば、非宗教的といふ詞で盡される。茲に言ふ非宗教的とは單に在來の固定成形宗教に反對する態度を指すだけに止まらない。無神論や實證主義もそれが白熱の境まで行けば（例へば一八六〇年代の露西亞の青年の間に行はれた如く）一種の宗教である。また唯物論的利我主義もその底に强い道念の根據を有するならば（例へばステュアード、ミルに於ける如く）矢張一種の宗教である。茲に言ふ宗教とは、人間の道念に斷えざる刺激を與へ、その人の全活動を支配し統一して行くあらゆる精神的原動力を總括した詞である。そこで、現代人の心理を窺ふならば、彼等の殆んど凡ては非宗教的であると謂へる。もつと適切に言へば、彼等は無神論者でもなく、理想無用論者でもなく、單に宗教や理想に無關心の徒であるのだ。彼等は滔々として利を談じ、政治を論じ、そ

の或る者は文學を嗜み、また或る者は眞面目(?)に哲學的思索を廻らしてゐるが、多くの者は全く宗敎を忘れてゐる。剩さへ一部の階級では、宗敎を以て敎育や「文明」と兩立することの能きない舊習の如く考へてゐる者がある。極言すれば、現代人は宗敎上の不具者である。彼等は宗敎的觀念の上にも下にもなく、寧ろその水平線環をはづれてゐるのである。なぜなら、彼等にあつては嘗て之を經驗しようとする意志さへ起らないのであるから。

宗敎なく、理想がない。從て人心を高調せしめ、之に一定の統一と、方向と、目的とを與へるところの至上意志を催起せしむる感激がない。曾ての時、人は神の名に於て、或は眞理の名に於て、或は君主や祖國の光榮に向つて働いた。然るに今日の社會は何を目標(めやす)にして働きつゝあるのであるか。その慌たゞしい活動、狂的爭奪は何を意味してゐるか。その「今日主義(ツーデーイズム)」は何處へ我等を導くであらうか。その蓄積しつゝある無限の富が終局に我等に齎す物は何か。誰も知らない。たゞ我等の知る所は、それが神の光榮の爲めでも、生命の光榮の爲めでも、眞理の光榮の爲めでも、愛の光榮の爲めでも、祖國の光榮のためでもないといふ消極的の答だけである。我等は唯だいやが上に複雜化された「文明」社會といふ巨大な盲目な機械の上に乘せられた一輪齒に過ぎないのである。

唯物論的無理想主義が至上共同の原動力を我等から取り去るとともに、一方には應用科學の發達から商賈主義の繁榮を來たし、それが富の急激な蓄積を行はしめた。かやうな二重の理由からして、社會は統一から混亂に、單純から複雜に向つて進んだ。即ち目的の無い複雜が現代社會の顯象である。かやうな社會に於て、人は機械的に特殊化せられ、一方に偏して變成され、從て非人道化(デフユーマナイズ)されるのは當然の成行であらう。その結果、現代人の精神は一時痲痺された形であつて、心の絕望的分離が之に伴つた。そは啻だに社界的に目的、理想を失くしたばかりでなく、一々の個人からも有機的統一が奪はれた。彼等は世界觀的に the All と親む

意志を缺くと同時に、人生觀的に whole-heart となる能力をも失つた。「吁、私の心には幾つかの魂が宿る」といふ歎聲を經驗しない近代人は尠なからう。

統一の欲求は單に理性上の、又は哲學的の好奇心でなくして、切實な人生の本能である。それは生命の行路に於て意識が物質を叱咤する雄叫びの聲である。さればその現はれるや常に宗教的な白熱意志の形を採る。統一の要求のないところには意志が現はれない。意志が無い故に統一が行はれない。そこで人心の分離が起り、生活の恐怖がさまざまな形をとつて發顯する。そして物質が却て精神を征御するやうな變態顯象を呈する。之を要するに、凡ての道德的及び精神的生活は個人と彼自らとの、及び個人と世界との調和の上に據りかゝつてゐて、斯様な統一を缺くところの分離生活は變態な、薄弱な、無意志な、病的生活であるといふことが謂はれうるのである。從てかやうな生活は我等の行爲慾と活動力とを弱め、次第に人生に對する信念を失はせる。

高遠な感激のない生活、統一慾のない生活の行くてが最も惡い意味の個人主義でなくて何であらう。非宗教的といふことは、直ちに斯様な絶對個人主義を意味する。それは意志された主義(イズム)でなくて、自墮落の結果に落ち附いた一種の病である。それは消極的な精神上の虛無主義または無政府主義の別名である、悲慘な人心分離の創痍である。而もそれが理性主義の名を冠つて哲學化され、所謂理智的個人主義が主張されるに到ては最も大きな弊害を見るのである。あの自由思想家にして實證論者なるコントでさへ、之を指して西歐文明の病氣であると言つた。實際、近代の歐洲人の殆んど凡てがこの病氣に罹らない者はないといつて可いぐらひである。トルストイでさへが一種の時代的虛無主義に陷り、宗教上の合理主義を鼓吹し、「個人理性の批判」を唯一終局の目的かのやうに取扱つた。

四

宗教的理想の滅亡、人心の頽廢的離散が、生命の活源なる意志の力を殺ぎ、甚だしく人間の行爲を弱めた

ことは、向に述べた通りである。されば近代人は眞に信じ、眞に行ふ勇氣を缺いてゐる。彼等の生活基調は恐怖そのものである。物質上の驕慢、理性主義の高蹈的假面、「活動主義」の美名のもとに自己を僞いてゐる暴的騷擾然――これ等のものが旣に恐怖の諸變形に過ぎない。何處に眞の勇氣があるか、何處に眞に信ずる勇氣があるか。何處に强大な意志の發露があるか。凡てが是れ、卑陋なそして怯懦な利我主義の結晶ばかりではないか。

ロマン、ロオランが斯う言つた。『現代の道德家ほど奇怪な動物はない。彼等の凡ての才能はその觀察の能力の犧牲となつて萎縮した。彼等は人生を洞察する試みを棄て之を理解しようと努めないばかりでなく、如何なる事があつても之を「意志」することは毫頭ない。彼等は唯だ人生上の事實を觀察し、記述して、能事足れりとしてゐる。そして斯う言う、「これが事實である」と。で、彼等はその事實を變へようとは望まない。彼等の眼には單なる存在の事實が道德的價値を有するかに映じ、どんな弱點でもが神聖な光を帶びてゐるやうに現はれるのだらう。世界は次第に民主的になりつゝある。昔は責任を負はない者は帝王ばかりであつた。今は凡ての人間が、恐らく獸物までが、この特權を與へられてゐる。誠に立派な顧問官よ！。今日の道德家は、周密な用意を以て、なぜ弱い者が正に弱いのであるかといふこと、彼等は永久にその狀態にあるほかには道のないやうに定められてゐるといふことを證明しようと努めてゐる。……そは取も直さず怯懦を奬勵し、それを傳播させることである』と。

試みに一人の靑年に向て、人生には靑春期と稱する特異な心理狀態の一時期があること、その時代には彼の心がまだ確固な平均を保つまでにいかないので、彼は罪惡、自殺などのあらゆる誘惑にかゝり易いことを敎へ、そしていかにも同情ありげにその已むを得ないことを說き聞かすとせよ。その結果のどうあるべきかは直ちに想像しえられるではないか。今日の人の自ら許し、そして人に許す態度が正にこれである。彼等は

向に述べ來つた理由に由て殆んど、意志の力を缺いてゐる。從て彼等には强烈な責任觀念がない。彼等は習慣的に、そして言ひわけ的に道德を口にするが、その實良心上の不具者であるのだ。

自制、責任などの觀念のない者の陷る先は唯だ一筋の道よりない。それは放縱の谷底である。彼等は正義の判斷の伴はない、そして嚴肅な責任の恐怖を感じない自由を要求する。自由！　偶ま佛蘭西革命が發見した「自由」といひ「平等」といふモットオは、彼等の怯懦と恐怖と怠惰とを隱すに最もよき遁辭を提供した。家族や隣人に對する義務は本能の自由の名に依て拒まれ、國家や人類に對する義務は個人の自由の名に依て拒まれる。要するに、一方には責任を回避する好辭柄であり、他方には個人の利我的欲望を象徵してゐるところの放縱が、自由といふ美しい名のもとに在來の道德的制裁を打破して、社會のあらゆる習慣形式を無視せしめたのである。

醫者が病人を治療し慰安する爲めに、あらゆる氣隨な行動を彼に許すであらうか。それと同じやうに、單なる放縱で人間の精神を健全に解放する手段だとする考は間違つてゐる。近代の因習打破の聲には、最も深い、そして最も新しい意味があるが、それが意識の奧底から出たまことの聲でない限りは虛僞に陷り易い。我等の革命者が凡ての舊い形式に反抗するはよし、あらゆる形式を無視する事はできないのである。却て我等は意志された服從、忍苦の洗禮をうけた後の自由に於て、眞の自由の意義を發見することが能きる。「我等の實踐生活の眞蹟は、いかにして個人的放縱を越した自由を實現するかにある」といつたエドワアド、ケーアド（「コントの社會哲學及宗敎」の著者）の詞は眞理である。

我等をして少しく心理的生理の研究に立入らしめよ。凡ての精神的疲勞症が無意志、無氣力の結果たる心の惱みからくることは醫學上周知の事實である。而してかやうな病氣が藥劑よりも寧ろ獨斷的敎義の力に由て救治され易いことも亦明らかに證據立てられてゐ

る。同じやうな心身の關係から、無秩序で放縱な生活が何れだけ我等の精神と併せて我等の肉體を害ふかといふことを顧みないのは、少くとも現代の心理學にもどつた見解である。尋常行路の皮層な自由思想家と偶像破壞者とには、是非これだけの事を戒めて置く必要があると思ふ。

ウイリアム、ジエームスはその心理學の研究に於て有力な實驗の結果を我等に示してゐる。彼はその人の日常が一定の習慣を持たないで、食物に、起臥に、仕事に、萬事が無秩序無節制の生活を送つてゐる人間を研究して、その運命が當然過勞症に陷らねばならぬことを斷定した。なぜなら、習慣の惰性を持たない彼は一々の些事にまで神經を惱まして、その都度之等のものに決定を與へて行かねばならぬのであるから。その爲め彼の活動力は激減せられ、併せて肉體の衰耄を來すのは免るべからざる結果である。

日常の放縱生活が之ほどの結果を齎すとしたら、より廣汎な道德の世界に於ける絕對無定見の生活が何ういふ運命に終るかといふことは、くだくだしく述ぶべき限りでない。これをしも自由といひうるであらうか。我等の偶像破壞主義(アイコノクラズム)は之だけ高價な犧牲を拂つてまで購はるべきものであらうか。

深く疑へ、然し强く信ぜよ。疑ひは信心への方便でなければならぬ。信ずることは力である。信ずることに由て意志が產れ、意志することに由て責任と節度との觀念が起り、そこに初めて『放縱を越した自由』が實現されるのである。眞の自由への道は虛無的否定でなくて、信念の努力にある。

五

近代文明の產んだ放縱無秩序の生活は、人の精神を過勞させ、その爲め肉體までも傷ける。かやうな徵候を名けて我等は『頹廢(デカダンス)』と呼ぶ。然るに、所謂頹廢は單に放縱生活ばかりの產物でなくて、同じく斯の物質文明が催起したところの社會の複雜化といふことに、二重の素因を有つのである。

物質文明、又の名を『都會文明』といふ。急激な物

的富の蓄積は加速度の勢を以て斯の社會組織を複雜にした。試みに我等の日常生活に起る煩多な出來事を數へ上げて見るがよい。毎日我等が眼を透さなければならない新聞、その上に現はれた社會のいろ／＼の珍事に對する感想、驚嘆だけでも、優に敏感的な人間の心を疲らすに充分である。そのほか繁雜な自分の仕事から交際、讀書、遊樂を數へ、猶も自分の周圍に起る雜多な刺戟、誘惑——例へば芝居、活動寫眞、汽車、電車、自働車、大禮服、金鵄勳章、貴女、賣女、立ん坊殺人、强盜、探偵……を思ふときに、我等は我等の文明が我等の神經に負はせる稅課の過重なるに驚かざるを得ないではないか。

　況んや我等の文明は、その交通機關の發達と共に、あらゆる田園鄙里までを都會化した。近代の都會文明はひとり都市のみの產物でなくて、凡ての社會に共通した顯象である。人は耕農生活と信念生活との健全な平衡を失つて、都會生活と理智生活との危い繩渡りを渡世とするやうになつた。若し我等にして、四つの眼と、四つの耳と、二つの頭腦と、二本の脊髓とを有たない限り、我等の神經が斯様に過重な刺戟に堪えうるといふことが寧ろ奇蹟である。その結果は神經症の激增となり、引いて我等の肉體と精神とを腐蝕せしめるのである。そして之には狂人と罪人との數が正比例して伴つて行く。

　これ等の結果に就ての詳しい說明は、醫者と、病理學者と、そして最も面白くはマックス、ノルダウに聞くがよい。たゞ私は斯樣な顯象が精神的に人間に及ぼした大要の影響に就て述べるであらう。

　狂人と罪人との發生は至て極端な場合で、之が社會に流す害毒は尠ないとは言ひえないが、その現はれの顯著でそして比較的少數なだけそれだけ始末がよい。然るに、その中途にある神經疲勞症は、近代文明人の大半を侵しつゝある時代病で、之が救濟は獨り醫藥の能くするところでない。今、これが顯著な病徵を擧ぐれば、第一に意志の無能力である、それから生活の不安と恐怖である、他人に對する羨望と憎惡である。癒

すべからざる厭人思想(ミサンスロピイ)である。他愛のない『世界(ウエルトシユメルツ)苦』または『民族苦(トスカ)』である。之等の人間苦、民族苦、世界苦は、みな ennui 即ち倦怠の變形狀態であつて、健全な厭世觀とは全くの別物である。

意志の缺乏が放縱な生活を産み、それが原因で人間の神經を傷け、肉體を虛弱にした。反對に、今度は虛弱な肉體が精神に影響して次第にそれを腐蝕させ、ますます意志を病ませ、生活力を弱らせ、人間の心身を擧げて頽廢の底へ底へと導くのである。因果相廻り、罪業必ず酬ゐて、二乘的に進んで行くのがこの頽廢文明の特色である。

之を要するに、我等は我等の社會から、意志、勇氣、責任等の道念の次第に跡を絕ちつゝあることを認めざるを得ない。人間の性格と世間の輿論とは不健全に過敏になり、狐疑的になつて、常に動搖して居り、我等の行爲からは嚴肅な論理が去つた。あらゆる罪惡は感傷的な言ひわけを附けて保護され、正義の憤怒は恐怖の伴つた冷笑と變つた。何よりも健全なそして巾廣い常識が地を拂つたことが惜まれなければならない。英語で "absurd" とか "frivolous" とかいふ語が、最早之に伴ふ痴愚な意義を正當に現はしえないほど、人間の心は痲痺してゐる。恐怖、倦怠、感傷、發作的狂熱、非常識、利我――これ等が近代人の心理の凡てである。彼等はその精神を痲痺させ、その肉體を衰弱させた揚句は、たゞ緊張した神經のみに由て生きてゐるかの觀がある。而してこれが證左を無盡藏に提供してゐるものが、時代の反映たる近代文學である。

倦怠!、際限のない倦怠。疑惑!、際限のない疑惑。無氣力、無行爲。オブロモフ主義、ハムレット主義は物質文明の最も汎(ひろ)い、そして最も惡い産物である。近代人は餘りに多くの遁辭をつけながら、癒すべからざる心と行爲との無憐から自ら苦んでゐる。彼等の欲する處は成るべく安泰な睡眠である。而もその睡眠から覺めるときに、彼等の倦怠はいやが上にも增し、彼等の神經はより疲勞をおぼえるのである。かうした病的生活の反映をば、次のハムレットの詞が好く現はして

ゐる。

「かくてこの決斷の自然の色は、思想の蒼白き影もて蔽されぬ」

と。

然し、かやうな頽廢状態がまだ自識され、そして悔恨される間は救治し易いのであるが、それが無意識狀態に入り慢性症となり、いろ〳〵の巧みな遁辭を發見するやうになつては、終に不治の病である。そこで卑怯なイゴイズムは個性の獨立といふ名で、自墮落な放縱は自由の名で、無氣力からくる人間苦は哲學上の厭世觀の名で、それ〳〵一理ありげに飾られる。殊に近代の物質文明に附き纏つてゐる一大遁辭は理性主義である。

理性主義は唯だ人間の理智の萬能を認めて、生命の本能要求を認めない。で、その論據は思想の普遍性を主張するにある。從てその態度は高踏的であり、冷笑的である。これほど近代人に好都合なイズムが他にありえようか。彼等は思想の名に由て、家族の義務をも隣人の愛をも、忠君をも愛國をも、凡て直接自分に重い責任を負はせるもろ〳〵の羈絆を逃れることが能きる。彼等は理智を振りかざして神の存在を拒む、そして信仰の壓迫を打消す。彼等は理智に境界のないことを主張して行爲の要求を斥ける、そして自由の名のもとで放縱を樂む。彼等は殊更に高踏振りながら、瞑想をかこつけに、社會の荒波の押し寄せない薄暗い一隅に隱れる。彼等は日光を避けて、ランプの下の不眠に耽る。皆な是れ敗殘者の傷々しい、而も面憎い託托に過ぎない。

かくて止め度のない頽廢が全人類を襲ひつゝあるのである。

六

これ迄私は主として近代の物質文明が個人の上に及ぼした影響に就て述べた。次にはそれが社會的に如何なる顯象を呈しつゝあるかを窺ふ必要がある。

佛蘭西革命のなし遂げた事業は人權の樹立といふことであつた。そしてそれが民主々義の勝利を齎した。偶ま之に次ぎて起つたのが、自然科學の勃興に伴ふ物

質文明であつた。人類は一度に、社會と自然との二つのタイラニイから開放されたのであつた。勝ち誇つた彼等は、理性萬能主義を提げて、同時に精神上の專政者(?)としての神にも反いた。かうしてあらゆる羈絆を振り棄てた人類は何處へ行つたか。

唯物主義と民主々義との握手が齎した最後の歸着點は、世界的平凡(メディオクリティー)の一事にある。社會は我等からあらゆる差別特色を取り去つて、一體に灰色の衣物を着せた。試みに街頭に立つて見よ、何處に貴族と勞働者との區別があるか、何處に貴婦人と賣女との區別があるか、何處に教會堂と銀行との區別があるか、何處に學校と遊廓との區別があるか。外形に於て今日の社會は既に無人格である。教育の方面に於ては殊に然りで智育は進むが、徳育(カルチューア)は全く忽かにされてゐる。今日の教育は個性の發達を殺ぎ、天才をなみし、平等の名に於ける平凡を强いて、人間の心的活力を抹消させるやうにのみ努めてゐる。その結果はニーチエの所謂「開化した俗物」のみが跋扈する世界と成り了せた。

要するに、今日の社會を一言にして評すれば、自由を裝ふ亂雜と、平等の名を籍る平凡の世界と言はれよう。高き感激に由て維持せられない社會は、例へば低きにつく沼の水の如きである。墮落の果ての均一である。所謂民化は俗化である。その沼の水は、やがては濁り、腐り、そして孑々(ぼうふら)がわく。何たる陰鬱ぞ、何たる痴鈍な平和ぞ。かやうに重もたるい倦怠(アンヌイ)の中では、どれだけ稀有な天才の芽でもが華咲かずして萎み、何れだけ强い個性の努力でもが一つの波だに昂げえずに終るのである。呪ふべき永遠の平和よ!。

餘りに自由であることは一種の不幸である。ちやうど菓子屋の店先に放たれた小兒のやうに、近代人は急に政治的に解放せられ、同時に物質的富の洪水に食傷した。彼等は自分で積み立てた富を支配しえずして、却てそれに醉はされた。彼等が民主々義の勝利を謳歌しつゝある間に、世界的の新しい貴族階級が起つた。それは金のある俗物(フィリスチン)である。彼等が偶像破壞の事業を成し遂げたと思つた時に、新しい神がこの地上に君

臨した。Deo ignoto! それは富である。所謂新しい貴族は我儘である、放縦である。彼等は精神的には無性でそして寛大であるが、物質上の瑾過をば些しも假借しない。世は情理を顚倒した。平等であるべき人間の物質上の權利が放棄せられて、富の貴族主義が起りしに反し、特權的であるべき精神上の自由は迫害せられて、却て心の民主々義が强ひられた。私の民主々義の墮落といふのはこの事である。

かやうに墮落した、放縱な民主々義の强力な宣傳者は、今日の新聞紙である。一個の人格化された新聞紙を想像するときに、我等は『開化した俗物』の權化としての巨人を眼のあたりに見る感がある。今日、新聞は社會の敎化の具として最も大きな勢力を揮つてゐる。百千の大學も、萬人の僧侶も、その一枚の雜錄の功果に匹敵すべくもない。今の人間の大部分は日々の新聞に由て其意見を支配せられてゐるのである。一個の現代式の機敏な商賈であつて、同時に敎化の具を兼ねた「ニュース」なるものの出現は、洵によく時代を穿つてゐるではないか。今日の新聞の第一の功德は、讀者を非人格化し、型に箝め、そして平凡化することである。ちやうど街の店頭に幾つもの出來合の服や帽子や、靴やが備へられてあつて、見ず知らずの群集相手に賣り附けられるやうに、凡そ平均らしい所で人間の頭腦の型を取つて、それに當てはまるやうな意見を製造してゐるのが即ち新聞と稱する機械である。

第二に新聞は公平を裝ふ必要のあるところから、期せずして皮膚な理性主義の宣傳者と化了する。そこで氣味の惡い冷靜と侮蔑とがその特色となつた。個人々々の癖見や情熱やは顧みるに足りないといつたやうな高振り方が、滿幅に現はれたその氣分である。換言すれば、新聞の調子は最も非宗敎的である。あらゆる點から見て、時代を俗化することの新聞ほど甚だしいものはないと謂はれよう。

七

社會に共同の理想、感激なく、世は益々非宗敎的となつて、人と人との間に有機的統一を缺き行く結果、

絕對個人主義、絕對理性主義のみの榮ゆる世界となりつゝある。かやうな社會に於ては、富のほかに個人がない。個人のほかに社會も國家もない。非愛國的の氣分が到る所に漲つてゐる。で、その歸するところは、國家を唯だ個人の利益の方便の爲めに使用するやうになり、政治でも、敎育でも、あらゆる共同の諸機關を富の奴隸たらしめずには措かない。

夫れ、政治は經世の大本である。廣き意味に於ける政治は國民諸活動の總勘定であつて、意識的にか無意識的にか、全國民の有してゐる志向、理想の綜合的表現と見るべきものである。然るに、その政治の擧らず有機的生命としての民族生活の強い創造意志を表示せずして、國民の行動を全的に整調するだけの力を缺くならば、その國家は洵に憐むべき狀態に在ると謂はねばならない。政治の民心と共に墮落せざるを得ないのは此の理である。今日の國民は自己の利益と安逸との爲めに國家を弄し、民族の生命を犧牲にした。國家もまた之に甘んじ、國民の手先となつて、利益本位の政策にのみ忙殺されてゐる。その結果は即ち流行の帝國主義、軍國主義、商賣主義である。國是とな？國是とは、生命の大本に歸り、民族の傳統に準據し、建國の精神を重んじて、より自由とより幸福との天地を切り拓き行く眞理の道ではないか。プラトオが哲學者をして政治を行はしめよと言つた詞の眞意は玆にある。然るに、今の政治家の口にする國是なるものは、滔々として皆是れ富を目的とする國民慾の傀儡に過ぎない。此の如き政治の墮落に於て時代の大弊は極れりといふべしだ。

利益を目的とする個人本位が、あらゆる社會に行き渡つた結果、人道(ヒューマニティー)は抽象化された。隣人に盡す義務にだに耐え得ない怯懦心が、理性主義の名に隱れて、非人格的の愛を鼓吹してゐる。その家族から離なされ、鄕土から離なされ、國家民族の土から根こぎにされて、「人造」が「理想」といふ甕の插花(さしばな)にされた。

或る人は、かやうな人道の理性化、抽象化、外面的世界化を祝し、一方には人心が道德的に痲痺した現象

を寛大の德と思ひ違へて、人道の進化と思ひ做してゐる。昔の人は物質上の罪惡には寛大であつたが、神に對する罪惡には峻嚴であつた。然るに今の人は精神上の事には疎漫であるが、物質上では少しも假借しない。之が抑も人道の進化であらうか。

「決して心配するな。この世には神樣もなければ、天罰も存在しない。文明の今日はお互が兄弟だ。許し合はふではないか。」

これが現代人の心理である。

かやうな時代に於て、我等は何を目的とし、どういふ足場をえて人の道を行ふことが能きるか。カアライルに次のやうな詞があるが、その中に現代人の弱點が最もよく現はれてゐる。曰く、「昔は人の行爲が安易でそして自發的であつた。なぜなら、人間の仕事に聖い價値が認められてゐたから。忠義の德が服從を聖化した。そして法律を尊嚴にした。……然るに今の時代にあつては、勇敢な行爲が跡を絕つた。なぜなら、どんな價値が疑はれずにそれに附隨してゐるか？」と。

要するに、宗教的感激が社會を去り、道德的統一が失はれ、抽象理性主義が人道を毒して、それが爲め人間の行爲慾を弱めたのは爭ふべからざる事實である。

八

文學が時代の反映であるならば、現代の文學がその儘現代の病的文明、頽廢文明の惱みを分けつゝあるのは、當然と言はなければならない。その詳細はここに論ずるまでもない。十九世紀末から現代にかけて現はれた世界の文學の殆んど每冊が其證據を提供してゐる。オスカア・ワイルド、ダヌンチオ、モオパッサン、アナトール・フランス、グウルモン、ベルレエヌ、アンドレエフ、クウプリン、バリモンド、正宗白鳥、永井荷風、谷崎潤一郞……と有名な作家の名を列擧するだけでもが、讀者は思半ばに過ぐるであらう。

イブセンの詞だといふものに次のやうなのがある。

「若し人が藝術に於て活きんとならば、彼は生れながらの天才以外、天才以上の或る物を有たねばならぬ。即ち彼の生活を充たし、彼の生活に一定の方向を與へ

るところの情熱、悲痛を有たねばならぬ。さうでない限り、彼は創造せずして、唯の書物を書くであらう」と。然るに、かやうに沈痛な衝動を、彼は何處から得られようか。理想なく感激なく、宗教的情緒に缺けた社會に於ては、生れながらの天才も、之が營養を得るに困難ではないか。天才は感激の餓鬼である。要は、インスピレエションの有無に由て彼は活殺される。政治の擧らざると同じく、文學の起らず、人類に新しき共同の書物のないのは、矢張社會の罪である。

物質と富とは斷じて藝術の友でない。富みたる者、富を念ふ者、富の世界に痲痺した者の、偉大な文學を作らず、また之を味ふ能力のないは、河の海に朝すると一般、例外のない眞理である。藝術家をして『聖き乞食』たらしめよ。苦しむ者、苦しむ事を知る者をして、ひとり藝術の友たらしめよ。なぜなら、眞理は苦しい經驗からよりほかには生れないのであるから。生命の荒削りの實在に觸れ、悲痛の毒々しい息に吹かれた者でなければ、地の鹽の味ひを知らないのであるから。富は文學を毒した。

汝の理性主義の夢想郷から醒めよ。汝の足をかたく大地に着けよ。汝の立つ土が汝の母であることを思へ。この土は汝と共にあらゆる世界の同胞を乘せてゐることを覺れ。藝術は地の聲である。我等は我等の共通の母なる大地の胸に憩ひ、そこから我等に脈動するところの最も深く、最も聖き愛の囁きを聞かねばならぬ。千萬の人間の心がどんなにかとり〳〵に相違してゐるにしても、我等の足が人道の大地に蹈み入つてゐる間は、其處に一つの共通な心靈がある。幾千年か時を距てた靈と靈との間にさへ飛び交はす電火のあるのは、その爲めである。これが生命の奧底を貫流する川である。藝術家をして、この地の聲を歌はしめよ。單純にして聖い土の生活を描かしめよ。民の詞を寫さしめよ。

近代露西亞の文學者の偉大な點は、おもに斯樣な點にある。彼等はその貴い現實性から、期せずして『その心に神を負ひつゝある民衆』を描いた。昔からこの民族の間に流れてきた宗教の熱火が今も猶ほ消えずに

燃えてゐる。さればゴーゴルにとつては、ゼルサレムへの旅行は、彼の一生中での大きな出來事であつた。ドストエフスキイの作物は、おもに「虐げられた人々」のゐる牢獄と、田舍に名のない聖院の蔭とで練えられた。トルストイは、八十年民の聲を聞き飽かうともせで、矢張晩年は鄙の神の魂の宿る聖院に憧がれ迷ひながら、順禮の途で死んだ。「汝、貴き民衆よ、汝は私の美しい神である」とは、ゴルキイの懺悔である。

然るに現代の文學者は、その足を地から抽かれた。物質の魔力は彼等と民衆とを離して、土の子の魂を忘れさせた。そこで彼等の藝術は温室の花のやうな、ひよわい、不自然な、病的な物となつた。一方にはまた流行の理性主義が彼等を襲つて、多くの民衆の癖見と情熱とから高踏した皮肉なニヒリストたらしめた。一個の人間の如く談らずして、「藝術家」の如く書くのが彼等の矜りであつた。所謂デカダン藝術は、富者の贅澤で不健全な心のアルコールとなつた。「それは一類の病人が、自分の病氣の事ばかり談りつゞけ、他人相手に忌はしい細々した事まで、飽きもせず繰返す」のと同じだと、ロマン・ロウランの言つた評語通りである。神經的の畸形兒よりほかには、彼等の筆に上ぼす題材はない。

世を擧げて凡ては灰色の薄明の世界である。

九

かうした時代が長く續きえたであらうか。伸長力のある生命が不自然の壓迫を受けた時には必ず劇しい反撥が起る。で、國家或は社會に於てはそれが革命となつて現はれる。

物質文明の隆盛は、その發祥地たる歐州に於ても餘り長くつゞかなんだ。事實、かやうな變態文明は、世界史の上での過渡的產物であつた。人類の廻轉期に於ける苦しい試みの一つに過ぎなんだ。我等は餘り多く悔恨に耽らぬがよい。我等をして科學の齎した正當な恩惠と、近代文明の積んでくれた驚くべき富の力とを制御し善用する方策を立てしめよ。精神と物質との轉倒は、所詮は一時的顯象に過ぎない。それは文明の河

流のよどみである。やがて來るべき廿世紀の新文化の準備である。

果して我等の醒むべき時期が來た。たゞならぬ動搖が約十餘年以前から、朧氣ながら各國民の間に萌し始めた。陰鬱な一體の空氣を破つて、處々から絶望の聲と、雄々しい叫びと、福音と、豫言とが、雜り々々に聞え出した。そこへ計らずも今回の歐州戰爭が突發して其機運を促進し、今更の如く世界を驚かしたのであつた。今日の世界の人心は非常に緊張し、そして著しく精神的になつてゐる。實際、今日の歐州のやうに、國々のあらゆる國民がめい／＼一致して、同じ問題を眞面目に考へてゐる時代は、歷史上尠なからう。彼等は今回の悲慘な戰亂の有樣を眼のあたり見せ附けられながら、今更のやうに恐怖し驚嘆し、そして今更のやうに振り返つて、過ぎこし方の文明の失策、罪過を思ひ廻らさゞるを得なかつた。我國とてもさうである。我等は歐州の戰亂を對岸の火災として視過するわけにいかない。飽かれかけた明治文明は當の歐州から借りてきて、彼等の爲した跡を踏み、彼等の積んだと同じ罪業を繰返してゐたのではなかつたか。そこに深い感想がある。恰もよし、代は大正と變つて、感情的にも人心の革るべき時期が來た。實にも當に起らんとする新機運は、餘程大仕掛けで、世界的で、そして精神的である。大きな地震が今日の社會を震蕩してゐる。精巧に造られた物質文明の街々の、どの建物でもがその基礎からゆるぎ出した。或る所では高い樓閣が斜めに傾きかけた。また或る處では堅い鐵塀が紙製の玩具の家のやうに、意久地もなく崩れた。どの建築家も技師も、かやうな地震に對する安全率を豫想してゐなんだ――ビスマルクの鐵血政策でもが、マルクスの資本論でもが。剩さへ、棄てられた古い墓場の地が裂けて、そこから忘れられた幽靈が現はれた。いろ／＼の理想や神が新裝して復活しかけてゐる。見えざるモーゼが山からおりた。彼の周圍には既に幾人かの新しい踊り手を見た。

然らば、當に來るべき新文明は、どういふ特徴を有

し、どういふ方向を指してゐるかといふに、之に對する私の推斷と期待は、上來の現代文明の批評の中におのづから盡くされてゐる。且つ私は之に就て、既に本紙四、五月號で、『現下の社會的動搖』及び『新文明の道程』なる題下に論じたことがあるから、茲には之を繰返すまい。唯だその概要を左に列記するに止めよう。

一、物質文明の壓迫に耐えない人心の反動として、精神的欲求の復活しかけたこと。

二、その當然の結果として、人は何等かの具體理想に憧がれ、從て非常に宗教的になつたこと。

三、生命の全的經驗主義が勃興して、今迄の抽象理性主義に反抗しつゝあること。

四、物質上のまたは個人の爲めの個人主義が衰へ、『生命主義』が頭を擡げたこと。

五、新興の生命主義は生命の傳統を重んじ、生命の自然に從つて生きようとする結果、こゝに在來の抽象的人道主義または世界主義（インターナショナリズム）に反抗して、新しく民族主義の叫びを聞くやうになつたこと。

六、新民族主義は國民性復興の聲となり、愛國的空氣を蒔きつゝあること。

七、病的なデカダン生活に於ける神經の疲勞に耐えないで、剛健な筋肉主義が起らうとしてゐること。

要するに、物質の經驗から、生命乃至は精神の經驗の上に人類の基礎を推し立てようとするのが、新文明の特色である。

殊に注意すべきは、民族性の上に眼醒めた宗教熱の勃興といふことが、最も鮮やかな徵候であるらしい。之に就き先づ西歐諸國で眼につくのは佛蘭西の思想界である。バレスやモーラスのやうな『生命派』の人々が、切りに民族主義を叫んでゐる一方には、今まで永らく棄てられてゐた斯の國獨特の舊教が復興の氣運を示してきて、國民の間に眞面目な、而かも熱烈な宗教心が汪溢するやうになつた。ジエームスや、ブウトロオや、ベルグソンの哲學が新カトリズムを刺戟し、埋もれたグョォの天才が急に持て囃されるのであつた。生活と思想との間にいみじき調和を見ることに於て現

代佛蘭西の如きはない。更に露西亞を觀ると、「九十年代」が頽廢のどん底で、その後日露戰爭後の革命から蘇り返つた國民は、精神的に元氣づくとゝもに、矢張スラブ族特有の正教を興隆させる機運に向つてゐる。その方面の思想家としては、晩年のメレジユコオスキイとゴルキイなどが好き例で、ブルガコフの如きは政論にまでこの狂熱を搬んでゐる。わが國に於ても、近來國民性の復活を叫ぶ聲がいろ〳〵の方面から聞えてくるやうになり、日本神教が一部の人々から特別の注意を以て研究され出した。筧博士や岩野泡鳴氏は熱心なこの道の人で、殊に川面凡兒氏は體驗の境地までこの信仰に入つてゐるらしい。

今日の物質文明は初め歐州に發達した。從て歐州人と斯の文明との間には、根柢にその民族性と合した自然な契合がなければならない筈である。然るに極東の日本は唯だ之をその儘模倣したに過ぎない。されば、この物質文明の弊害が認められて、更に新しい文明を建設するに就ては、歐州諸國とわが國とはおのづから其覺悟を別にせなければならぬ。換言すれば、我國人の現代文明に對する疑惑は、彼等よりもより根本的でなければならぬ。現に我等が借りつゝある遠い民族の異文明が、精神的にどれだけ我等に不拘合であるかといふことを研究するばかりでなく、肉體的にもそれが如何なる影響を及ぼすかといふことをも視なければならぬ。大和民族の體質に對する肉食と菜食との優劣、日本造りと西洋建築との可否——さういふ方面まで根本的に考へる必要がある。要するに當に來るべき大正維新は、自發的で、そして生命本位でなければならない。

十

私は以前に屢ば理想とか目的とかいふ語を用ゐた。之に對し讀者の誤解を防ぐために、一應の説明を與へた上で、この稿を結びたいと思ふ。

理想とは人間の道德的欲求の具體的現はれで、善と判斷せられ、追求の價値あるとせられるものである。これを我等は、第一に本能の欲望（デザイア）と區別せねばなら

ぬ。本能の欲望は盲目で、そして善といふ判斷を挾まないが、理想は自識的で自ら撰擇する。かるが故に理想は人間の特有物である。

次に我等は理想と夢想(ユートピア)との區別をば一層峻刻にする必要がある。夢想とは理性主義の產物で、抽象的で、範疇的で、非人情的である、而してそれには意志が伴はない。その偶ま意志を伴ふ如く見えるのは、一種の閑散な欲望または好奇心が之に連れ立つからである。然るに、眞の理想は生命の全的要求で、具體的で、體驗的であり、且つその背後に强烈な衝動、即ち撰擇意志を隨伴するのである。今の人々が『理想』の名に於て攻擊するのは、この夢想を指してゐるのである。で同じく理想の名を以て稱ぶならば、前者は抽象理想であり、後者は具體理想である。前者は消極的であるが後者は積極的である。當に起りつゝある新文化が、在來の理性主義に反對し、その抽象的人道主義や世界主義を抗擊し、之に代る生命主義を押し立てゝ、具體的人道主義を鼓吹しつゝあるのは、取りも直さず、夢想に代ゆるに理想を以てし、思辨に代ゆるに意志を以てしようとするのである。かやうな意味から言へば、當來の新文明は『新理想主義』である。或は具體理想の復活である。

私は理想を以て善の欲求の表現であるといつた。然しかやうな定義はそれ自らでは意味をなさない。たゞその形骸を示したに止まらない。要は內容の奈何にある。理想とは己むに己まれない生命の衝動で、それが人類に於ては自識的に道德意志となつて現はれるのである。で、かやうな善の撰擇意志を伴はない理想は一種の形骸で、夢想と擇ぶところがない。即ち理想の唯一の內容は意志である。之あるが爲めに、それは行爲となつて現はれ、かくて具體的價値を生ずるのである。然るに理性の樹になる菓物(くだもの)は乾いた殼である、なぜならその汁は皆な夢想の蟲の爲めに吸ひ盡されるから。で、理性からは決して行爲を生じない。誰が假說(ハイポセシス)の爲めに身を棄てる者があるか。されば我等の思想に生命の血を漲らせ、我等の行爲の實と美とを調和させ、

我等をして勇氣を以て考へ、勇氣を以て行はしめるものは、孤り理想の責である。

然るに我等の理想に於て欲望は隣り合つた貪欲な敵である。理想が形を現はす刹那に、旣う欲望がその命に喰ひ入る。そして之を食ひ盡したあとで、自分が理想の容を眞似て生命を欺く。名譽、富の如き我等の物質欲は斯うした變態理想である。因習の囚はれの懼るべきは此處にあるのだ。ベルグソンが斯う言つた『我等の自由の確立する瞬間に、もう因習が頭を擡げ出す。で、不斷の努力に由て自ら新たにして行かない限り、その自由は窒息するであらう。自由は常に自働作用に追躡されてゐる。……我等の最も熾んな情熱でさへ、それが行爲として外面に現はれるが早いか、自然に利益と野心の冷たい勘定に氷結する。前者はそれほど容易に後者の形を採り易いために、我等は兩方を混同し、そして自分の誠實を疑ひ、善と愛とを否定することがある――死んだ者も暫くは生者の面影を保つといふことに氣附かない所から』と。

げにや、消極的の疑ひ失望は易いが、積極的の肯定はむづかしい。理想は欲望に敗かされ勝である。ゲーテがマホメットの生活に觀た悲劇はこれである。あらゆる豫言者と使徒と哲人とが疑つた。基督でさへ疑つた。理想は勇猛な火である。人類がこの松火をかゝげて長途を旅するのは、生柔しい事ではない。それには我等は白熱の信念を要する。白熱の信念に由て燃やされない理想は、虚弱い小兒のやうなものである。換言すれば、我等の理想を一種の宗教まで高めることに由てのみ、人類は救はれるのである。私が當來の文明に第一に宗教的素質を要求する所以は玆にある。

理想や善やは固定のものでなくて、一つ・傾向である。生の衝動に荷はれて無限進化の道にある欲求である。理想が固定する時に、それは最早死んだものである。なぜなら神は『斷えざる生命、行爲、自由』(ベルグソン)であり、神は『永久に戰ふ自由の意志』(ロマン、ロオラン)であるから。此の如く、固安の神の觀念を排斥し、在來の宿命觀や目的觀を打破して、生々

たる創造理想が樹立するところに、更に當來文明の頼もしい氣勢を觀取することが能きる。

以上はおもに道德的の方面から、當來の新文明を論じたものである。別に、純精神上の立場からは、本紙新年號の「思想、藝術の現在」に於て卑見の大略を述べて置いた。

帝國政界の將來

長島隆二

（一）

大隈內閣は其組織の第一日に於て、旣に崩壞せるもの也、故に將來の政界を卜せんとするには、斷じて現閣そのもの丶命運を問題とし、之を重要條件として論議するの要なけん、寧ろ問題は隈閣に代るべきもの丶形式と實體とを審査し、並に今後の政界が如何に變化すべきやを推斷し、更に進んで其究極する所を揣摩して、政變頻出する大正の政局が、果して如何の地點に到つて、始めて平靜に復歸すべきやを研究すれば足る。唯將來の趨勢を豫想するに便にし、少しく隈閣組織の失敗を指摘せん。

惟ふに明治維新の偉業は、其形態に於て尊王倒幕の擧に出でしと雖、仔細に精神の發動する所を觀れば、實は歐洲文明の思想に接觸したる結果にして、幕府の政策常に民論を壓迫したるに憤激し、少數者の利益の爲に多數人民が犧牲となるを怨恨したるに因す、故に五條の御誓文を拜誦するも、萬機公論に決すとあり、また以て先帝大御心のおはします所と、當時人心の歸嚮する所とを窺知するに足る、故に苟も維新の宏謨を

善美ならしめんとせば、必然藩閥、官僚と云ふが如き一部少數の利益を擁護するが爲に、皇室と國民とを疎隔して擅に國權を侵亂するが如きものを排除し、以て本來の大目的に復歸せしめざる可からず。

然るに明治年間は、外國に對する帝國發展の準備に忙殺されたる結果、內には藩閥打破の努力あり、憲政布かれて政黨崛起し、相搏互擊、熾に民權の伸長を計れりと雖、此風潮も時あつて消長し、日清日露の兩役に際しては外敵を迎えて內爭を戒め、國力を統一して以て讎人の討攻に當りたる爲、國民と特殊階級との爭鬪は全然こゝに中止さるゝに至り、政黨の勢力亦從つて失墜し、雄魂氣魄地を拂つて空しからんとせり、而も之等一時的消長は以て大勢を沮止すること能はず、變形して國民的政治の建設となれる一種の潮流は、天を捲き地を蔽ひ、猛然として競ひ來らんとするを見る。即ち藩閥が政黨を蹂躙して凱歌を揚るの時、國政に屬する國民實力の自覺と、國政に對する國民協力の必要は、着々として事實の上に彰顯さるゝに至れり。

特に日露戰役後、國民政治の氣運は勃然として沸騰し、遂に政友會內閣の成立を見たり、而も其施政は却て國民の期待する所に背馳し、幾許もなくして桂內閣と代れりと雖、其後繼內閣の首腦者も、亦超然政策の時代に適應せざるに覺到し、務めて政黨に憑依するに至りしもの、畢竟政府と、國民政治との調和を計らんとするの意に出づ。

要之、明治時代は國民政治建設の準備期也。其間紛糾したる政爭の數曲は、悉く皆國民政治に到着す可き奮鬪の進軍歌と謂つ可し、唯其行陣が遲々として人目を聳動せしめざりし所以のものは、一方元勳の中異常の時代に際會して、鍛錬研磨されたる爲、有力なる政客を輩出し、特殊の能力と偉大の信望とを具有せるものありしに對し、他方國民の政治思想發達せず、加ふるに政黨の間、人材貧弱にして自ら任ずるの氣慨に缺け只管藩閥に賴つて權勢の頒與を希ふに過ぎず、於是乎國民政治の氣運は欝勃として天地の間に滂沱たるものあるに不拘、何等形態を組織する事無くして止みたり

萬機公論に決すべくして、而して未だ決せられず、憲法制定せられたれ共其活用を缺き、議會開設せられて而も國民の思想、感情、必要、希望は遂に徹底せらるゝの期なし。

然るに明治の末年に至ては、藩閥の人材殆ど絶滅し僅かに遺留するものも耄衰、餘喘を保つに不過、之に反して國民の智識は昇進し、政黨の自覺また確乎として認識すべきものあるにより、所謂國民的政治を大成すべき眞時期は、漸くにして到來せんとするに至れり。殊に國民は先帝の崩御により、邦家の前途に就て甚しき憂慮を懷くと同時に、久しく禍せる藩閥政治が假裝して官僚政治となり、更に變形して軍閥政治となり、愈々跋扈して止まざるものあるを見て一齊振起して是が根滅を劃し、以て國利と民福とを調和すべき政治の建設を期待し、更に腐敗せる既成政黨を改造して國民的政治を行使せしむべき新眞政黨を組織せんことに苦惱し、熱烈なる希望を提げて以て新政の曙光を翹望したりき。

(二)

大正初年の波瀾は重疊也、而もこれ皆國民の自覺と要求との出現に他ならず。

桂内閣が内に在つては藩閥官僚を打破し、外に在ては新政黨を組織したる蓋し是が爲のみ、突如として憲政擁護の聲起り、非常の高潮に達したるもこれが爲而已、政友倶樂部の分離を見たるもこれが爲而已、政薩聯立内閣に於て政友會が常に悶々の情に堪えず、黨員の要求に壓迫せられ續けたるもこれが爲而已、海軍收賄問題を動機として慘死するに至りしもこれが爲而已既に大命を拜し乍らも、清浦内閣が流産に終りたるも皆これが爲而已、自覺せる國民の要求は人を更め形を變えて如斯に大正の歷史を賑はしぬ。

大隈伯の出廬に至てはもと二三子の計劃に出で、其實現さるゝ迄は寧ろ一喜劇として政界の消息通に嘲笑せられたり、而も其一度話題に上せられし以來、紛糾せる時局を收拾するものは、且らく大隈伯を除て、他に其人なしと公評せらるゝに及び、多年の政敵たりし

薩長の元老は、直に一致して之を推擧するに至りし所以のもの、畢竟國民の希望を容るゝを以て己むを得ざる運數なりと覺悟したるが爲なりとせん。

大隈内閣成立の動機と原因とは、一に懸つて國民政治の出現に存在せり、即ち藩閥政治を崩壞し、之に代つて國政の安泰を保障すべき新政の施設を必要條件とす、故に之を爲すには當然國民の思想と感情とに最融和し適應すべきを以て其第一義とすべく、其の主旨を全うするが爲には必然政黨を基礎とするの要あるを見る。而して玆に政黨と云ふものは、斷じて舊習に拘泥して遠く吾人の利害と隔離し居れるが如き、弊害多き政黨を意味するに非ずして、實力態度並びに國民思想を代表するに足る可き一團の結社たらざる可からず、而も事實はこれに背馳す。

忌憚なく云へば大隈内閣の組織者は大隈伯たらずして加藤男なりき、而も男や内政に經驗なく自信なきの所以を以て、百事を擧て之を大浦子と謀議し、否寧ろ之に一任し、之に盲從して所謂大隈内閣なるものを組織したりき、而して大浦子は藩閥の番犬也、官僚の權化也、軍閥の傀儡也、海内を物色し、果して何人をか羅致し來れる。

看よ、國民とは何等の交渉なく、唯藩閥に勤勞し來れる一木喜德郎氏は擧られて文相となれり、同志會中最官僚式に養成せられたる武富時敏氏は擢でられて遞相となれり、癈減稅を排斥して民力の涵養を閑却したる若槻禮次郎氏は、薦められて藏相の椅子に凭れり、而も永年政黨政治を唱道して國民思想を了解せる大石河野二氏は入選せず、前内閣破壞の偉勳者島田三郎氏除外せられたり、若夫尾崎行雄氏に至つては辛うじて法相の職に贏ち得たりと雖、加藤男と並んで内閣組織に參加するの權なく、外に對しては尸位伴食の譏を受け、内に在つては加藤男の嘲笑を蒙むる、想見す當年憲政の神、今將た何の面目を以て天下有爲の士人に對せんとする。

當然隈伯の傘下に馳せ參ずべき犬養毅氏は冷然として現内閣の組織を目送したり、畢竟大浦子を中心とし

て描出せる一幅の書圖は、謂ふまでもなく官僚の怪物が、適々政黨政治の假面を被むれるに過ぎずと、觀破したるが爲ならむ。

而も尚ほ隈伯を引出したる當時の計劃者は其組織の日に於て無意味、無生命のものと化し果てたるを捨てず、更に一碁子を投じて之が復活救治に努めたり、即ち是れ三派連合の策也、而して加藤大浦の二人者は極力之が成立を妨碍し、立ろに辣手を揮つて、其一石を跳ね退けたり、憐む可し政權を擅斷するに狂躁して、遂に大勢の歸嚮する所に反けり。

爾來大隈内閣の施設する所、抑も何等の事ぞ。

（三）

廢減税は同志會の旗幟也、生命也、之を掲げて天下に大波動を與へ、之を樹てゝ空前の大政戰を爲せり、而も内閣成るの日に於て卒然として大地に抛擲し、言を左右にして其實行を逃る、無耻陋劣共に齒する事能はず、會内の紛擾、常に絶ゆるの期なき、病源蓋しこの問題に胚胎す。

而して大浦子の陰險なる、到底國民の希望を踈外しては内閣の命運を一日も持續し能はざるを覺知するが故に、努めて黔首を愚にして之を欺論するに苦惱し、百方惡策を擅にして弘く言論文筆の徒を操縱し、黑白正邪を顚倒して、一時の苟安を偸み、其間私曲を擅にして以て、其黨與を養ふ、滔天の罪殆ど數ふるに遑なからんとす。

加藤男に至つては自ら許して幕閣の頭梁と爲す、而も其唯一の寶物とする外交術は、果して善く今日の時局に適當したりと云ふか、日獨の開戰や、當否得失は寧ろ後代の批判に待つべし、歐洲最近の形勢より見て唯同盟の義によると云ふが如き曖昧なる事由の下に、英國と共に獨逸と戰ふことが國家の大計より打算して果して如何の結果を齎らす可きや、實にこれ一大問題たらずんばあらず。假りに戰爭に參加するも、英國をして絶大の信頼を我に拂はしむるの術も講ぜず、嘗て有利なる條件を提唱したりし痕跡だに見ず、堂々たる帝國を以て尚ほ自由行動に出づることを善くせず、遽

かに狼狽して開戰し、結果限りなき羈束を蒙むり、多大の侮蔑を招致したるに止まらず、戰後日支交渉に對してすら、天下頻りに英國が陰然たる障害を與へたりと傳ふ、豈にこれ咄々怪事に非ずや。

日支外交の失態は詳説を要せず、兩國の親善根柢より破壞され、帝國の大計礎石より轉覆さる、此一事以て加藤男の愚劣を嗤笑して止む可からず、社稷の存亡民人の安危實に懸つて此問題に存す、闔國の志士誰か皆を決して痛恨せざるものあらむや。

若夫れ米價調節の如き蠶絲救濟の如き、悉く當局失敗の小史にして、而も亦其無智と無算と、無謀と無責任とを曝露す、政府は責任支出を辨疏し、常に政友會の事例を引て以て罪咎の輕減を主張すと雖、抑同志會成立の趣旨孰れに存し、其旗幟何を以て特色とせるやに想到せば、苟も政治に道義あるを解するの徒なりせば、斷じて愧死せざる可からず、他人惡を爲す、我れ之に倣ふのみと云ふが如き、厚顏無恥、甘じて憲政の賊たらんとする者也。

熟ら現内閣の爲す所を見るに悉く主義あり主張あるものに非ずして、唯一時の人心を收攬して僅に權勢を把持せんと努むるに他ならず、而も其間一點半點の誠意を宿さゞるが爲に、成立の日よりして既に破壞の影を投映せる内閣が、奈何かよく其命運を持續すべけんや、破綻百出、極端なる悲劇の一齣を以て其終局を告ぐるに論莫けん也。

然らば即ち其崩壞が如何の日に於て顯見さるべきや曰く國民が國政の重大問題の解決に就き、國民と沒交渉の内閣は一大障礙を爲す可きものたることを自覺するの日に於てすべし、曰く眞個國民的政治を行ふに足る可き結團の存在が、國民に發見せらるゝの日に於てすべし。

(四)

現内閣の彌縫策は果して何れの時期迄繼續する事を得るか、これ大に興味ある問題也、而も其第一關門は近く廢減稅問題に就て、現内閣が斷じて實行する能はずと明言す可きの日に於て到來せん。

此關係に於て、二個師團增設問題に伴ふて國防會議を論究するの要あるを見る。

元來日本の對外關係より云へば、陸海軍の大擴張を必須とすべきは論を俟たざる所にして、英獨二國の趨勢より推すも向後日本が世界の强大國たる實を全うするには、軍備の充備更に今日に數倍せざる可からざる事は、また一點の疑を存せず、然れ共我國民は日露戰後以來、急激に軍費の負擔を增進され、殆ど將來の發展を犧牲として、過去の償却に役使され、國枯れ民瘦せ、羸々としてまた起つ能はざるの悲運に逢遇しつゝあり、故に此時期に於ては、且らく財政を整頓して公債を減少し信用を恢復して將來の餘力を貯ふるの要あり、また租税の負擔を緩和し經濟力の增大を計るの要あり、而して之を就すが爲めに長年を費すこと能はずとするも、或程度に於て此目的を遂行し、少なく共國民が國政に對する負擔に就き、抱懷せる惡感情を根柢より一掃して然る後に、始めて第二の陸海軍擴張に着手するを以て必然の順路とし、當然の政策と爲す、於是乎一方には軍事費の整理を企劃し、他方新計劃の中止を斷行し、ことに始めて意義あり實力ある陸海軍の大擴張を見んとす。

彼の二十五師團計劃と云ひ、所謂五十萬噸計劃と云ふが如きは、明治四十一年の既定方針にして到底變更し中止し若くは延期する事能はずと强辨するものあれ共、如斯は單純に當時の狀態より、簡單に軍事上の見地よりして決定したるものゝみ、敢て外交關係を參酌したるに非ず、また敢て財政關係を討究したるに非ず、於乎時勢の推移は無稽の政策を共儘に續行すべからざるに覺到し、爲めに國防會議の制定を必要とするに至れり。故に財政と外交との調和を計り、其時期を撰定する迄且らく軍備の第二擴張を中止せんこと、これ國防會議の依て發生したる眞因也、露骨に之を云へば陸海軍當局が既定政策として執着し居れるものを抑制し以て安全に强固に國資民力を涵養せしめんとするものこれ實に國防會議出現の精神也。

桂公は此見地より國防會議を唱道し、同志會は此經

綸により廢減税を絶叫せり、增師案と國防會議、國防會議と廢減税、其間自ら截斷す可からざる一條の連鎖あり、然るに現内閣は既に廢減税の旗幟の下に國民の同情を得、之に賴つて以て政權を把持するに至りたるに不拘、内閣組織の當初に於て、卒然として玆に防務會議を創設しぬ、夫れ防務と國防とは其名相近うして實甚だ遠し、國防會議は二師團增設を抑へ、繼で來るべき海軍擴張を防がんとするものにして、防務會議は二十五師團計劃を認識し、其一部たる二師團增設を是認せるもの也、故に國防會議の本體は廢減税なり、防務會議の裏面には二師增設に次ぐに四師の增設あり、而も陸海の均勢平等を叫ぶ軍閥の傀儡たる防務會議の進行は、明かに玆に增税に次ぐに增税を以てせんとするの傾向を生ず。

現内閣が内閣組織の始に當つて、防務會議を設置したるは、即ち廢減税を否定したるもの也、後に與黨が囂々として廢減税の事を以て迫りしもの、寧ろ太だしく政治の活機に觸れざるものと謂つ可し矣。

果せる哉二師增設の問題は現内閣の生命として前議會に提出せられ、其否決せらるゝに於て解散を斷行し一大政戰の陣を展開して縱横の陋策を敢爲し、以て臨時議會にこれを强遂せり、而して海軍擴張問題は相踵で提唱されたり。本年の豫算編成の重大問題は、即ちこの海軍大擴張案に存在す、全額一億九千餘萬圓、四年計劃也、思ふに如斯巨額の支出は常時すら尙且つ之を認むるに難ずるに、剩餘金缺乏を告げ、歲入の減少殊に顯着なる今日に在て、如何にしてかよく此多額突飛の海軍擴張を包容する事を得んや、此財政の下此國情に於て、現内閣が無謀なる提案に苦惱する所以のものも、唯陸軍の增師を圖つて、獨り海軍の擴張を沮止する能はざる情弊に出づ。

廢減税は唯現内閣と與黨とが、一時國民を欺諭すべき術數に他ならずとの觀念が、一般に周知せられたる時、現内閣は果して晏然として其地位を固守し能ふ可しと信ずるか、殊に米價の下落により、地方經濟未曾有の困難なる時期に於て、地租輕減の絶叫は天地の間

に瀰蔓す可く、此問題に就て政國兩黨は勿論、無所屬中正二團も正面より反對する事能はず、同志會中にも尙ほ選擧區民に憚つて贊成するものを出したりとせば如何に呑氣なる大隈伯も、如何に頑迷なる加藤男も、如何に陰險なる大浦子も、斷じて內閣の崩壞を支止する事能はざる可し。

(五)

國民と沒交涉なる無力の內閣が、到底今日に於て存續すべからざる事は明瞭の事實也、我等は大隈內閣に於て其最も好適例を目睹し、而して國民は現政府に於て其最も憂懼すべき惡結果を遺留せられたり、對支交涉如何、遡つて日獨開戰如何、而して更に英國にのみ偏倚して、列强交情の推移を問はず、邦家を驅つて嶮崖の危きに置かんとし、而も尙且つ反省するに念なき孰與れか社稷百年の長計を過らざるものあらんや。

今の內閣を見るに、大隈伯は唯好々爺のみ、傀儡のみ、加藤男を頭腦とし大浦子を心腹とす、爾餘碌々の小豎輩に掛齒するに足らんや、唯是れ塚中の枯骨に非んば即ち守戶の犬耳、藤浦二人者果してよく國民的政治を行使するか、常に國民を欺くを知つて之を變ふるを知らず、常に政黨を利するを解して、之を尊むを解せず、於是乎國民は長へに蠱惑せられ、於是乎政黨は久しく利用せらる、その少數者の利益と權勢とを維持するが爲には、如何なる惡政虐治を遂行するも、寸毫顧慮するに遑なからんとす、故に彼等の主張する所に依れば政黨は唯少數者の意見を擅行すべき武器にして議院は政府が國民を抑壓すべき機關なりと云ふに歸す。故に同志會は加藤男を總裁としたる刹那に於て、分明たる一官僚的朋黨と化し終んぬ、而して大浦子が其黨務を專擅するに至つてや、玆に純然たる藩閥の一分身が政黨の假面を被むり、以て國民を欺騙すべき準備を整了したるものにして、何等本來の面目を遺留するを許さず、即ち黨內に政策の論議討究を忌避し、只管盲從の風潮を誘導せり、其總選擧に臨むでや空前の大干涉を行ふて敵黨の撲滅を計れる、彼に在つては、唯尋常の茶飯事に屬す、獨り怪む所のものは大隈伯が多年

憲政の改善を高談し乍ら、一朝局に當るに及んで全然憲法の精神を無視し、極端なる責任支出を斷行せる事也、固より責任支出の前例は屢々之を聞見する所なりと云へ、寧ろ違憲の行爲たるに恐れ、極めて内密に而してまた微細の金額を支出するに過ぎざりしに反し、現内閣は露骨に之が支出を繼續し、殆ど豫算協賛の本旨を蹂躙して憚らず、專制政治に復歸したるの奇觀を呈せんとせり、伯や老衰殆ど精神に異常を示す、跛躁して是を責むるには太だ忍びざるが如しと雖、事國權に關す、斷々乎として之を糺彈せざる可からず。

(六)

政局革新の機、目睫の間に迫れり、國民的政治を沮礙する有ゆる政黨、有ゆる内閣は決して其永續を許さず、破壞を悦ぶ群衆の心裡は一面渇仰せる國民的政治の投影にして、政變の頻出、漸く國民の自覺を促進し今や有識の徒期せずして新政の出現を絶叫し、之が基礎となるべき眞新政黨の創設は、防ぐ可からざる大勢として政界に唱道さるゝに至る。

惟ふに其機の熟する所、既成政黨は先を爭ふて解體し、糾然として新旗の下に聚集すべく、後れて加はらざるものは、遠からず土崩瓦解の悲境に陷らん、而も此一大新政黨の創設は藩閥政治に代つて國政を安泰ならしむるの趣旨に依り、國民の自覺と必要とにより出現するものなるが故、其根柢は頗る鞏固にして而して其命運は永遠也。

現に存在せる幾多の政黨を見るに一として國民の思想と希望とを代表せず、政友會の如き年來の歴史は國民嫌惡の度を加へ、群衆反感の府と化し、黨内の新潮流は最早此儘に存續するを許さゞるに至り、解體の説漸く高うして新黨樹立の聲相次で起らんとす、國民黨に至つても黨勢不振の頂點に達し、到底大政擔任の自信なきに加へて、唯政治の批評を以て政黨本來の面目を發揮する能はざるに覺到せば、必ずや翕然として新黨組織の中堅たるを悦ぶべく、中正無所屬二團の如きは唯感情に左右せられて適々現閣擁護の任に當ると雖大隈内閣瓦解の曉には、必ず名聞を崇んで歸嚮する所

を過ぎらざるべく、同志會中また幾多硬骨慷世の徒なからんや、一朝の迷夢醒め來るの時、焉んぞ疇昔立黨の當初を回想し、猛然として憲政有終の美を成すに奔馳せざらむ。

大隈内閣の運命は既に日を算して俟つ可く、後繼内閣の組織は幾多謀士の間に策せらる、而も不幸にして國民的政治と背馳したる舊態に復歸することあれば、之等中間内閣はまた幾許もなくして狂瀾怒濤の裡に葬去せらるべく、要は大精神大本義を具有したる新政黨の出現する迄、起倒限りなく變遷極まりなけむ。

而かも大勢は避く可からざる偉力を示して新政黨の創設に向ひ、有識の士は狂呼して其出現を翹望す、時來らざるか、勢進まざるか、何ぞ夫れ新黨の成る可くして而して成る事の遲々たる、世間往々中心人物の缺乏を慨するものありと雖、抑も人物を看板とし本位とし主義主張を沒却して集散するの日は既に遠し、今の要する所は即ち國民の心を以て心と爲し、國民の血を以て血としたる、團體の出現に在り、一人半人の智力は畢竟時代の渇仰する所に非ず。

政局を大觀するの徒、恐らく此見の他に出でざる可く、唯黨爭を以て國權を侵擅し、黔首を愚にして一門の榮利を購ふの豈、其假面を剝落せらるゝの日に於て國民悉く大勢の推移する所を知解せん也。

大正政界の新傾向

古川學人

一

大正と改元してから急に政界に新らしい傾向が起つたとも思へないが、併し明治の末から大正にかけて段々新らしい傾向が著しく起り初めたことは疑ひない。而して此新傾向は、最近日支問題の交渉が切迫した當時に最もよく現はれて居る。我國よりの二度目の對支要求が拒絶され、愈々最後通牒を發するといふ間際に、元老の干渉のあつたことは、公知の事實である。聞くところに依れば、五月四日の元老と閣員との會議に於て兩者の意見が合はず、中にも加藤外相に對する元老の反感が本となつて、お互に「勝手にしろ」といふ態度で物別れとなつた。斯うなれば元老は元老で、更らに相談を新たにして事の顚末を闕下に伏奏するといふ段取になる。さうすると內閣は顚覆せざるを得ない。そこで政界は俄に色めき渡つて、策士並びに策士と稱する者が、暗中の大飛躍を試みる。翌日旅行から歸つて來た大浦內相が、事の急なるを憂へて元老と內閣との調停の任に當り、各元老の私邸を回訪したのであるが此際松方侯のみは不在と稱して中々會はなかつた。二度三度訪ねても居ない、行先も分らないといふ事であつたが漸く夜になつて面會する事を得た。而して不在と稱した朝から夕方までの間は、實は奧深き密室に於て、山本達雄、床次竹二郎二氏と卓を圍んで後繼內閣の役割を相談して居つたといふ事である。斯く政界の頭領株は元老並びに其周圍の政界の長老の間を活動して頻りに運動する。之と同時に彼等は又政界の陣笠をして、或は歌舞伎座に、或は新富座等に、外交失態の聲を大にして內閣を痛烈に彈劾せしめ、以て盛んに民心を煽動せん事を努めた。斯くて內外相呼應して現內閣の顚覆を計つたのであつた。幸か不幸か此運動は其目的を奏せなかつたが、兎に角此事實は、最近政界の新傾向を語る代表的の出來事であると思ふ。

然らば其新傾向とは何ぞやと言ふに、政界の轉機を決するところの中心點が今や二つあるといふ事である。一つは元老で、一つは民間の輿論である。一體元老を中心とする勢力は、少數の間に政權を壟斷せんとする

考を代表する者で、所謂輿論政治とは兩極相反するところのものである。性質上相容れざるところの二つの主義を代表する者が、兩々相竝んで、同一の目的の爲めに活動を共にするといふ事は、考へて見れば極めて不可思議な現象であるが、併し之が我國今日の爭ふべからざる事實であるから致方がない。而して此二つの中心が、各相當の勢力を以て現今の政界に活動して居るのであるが、單にそれ丈けなら何も之は大した問題にはならない。けれどもこゝに一つ面白いのは、前者が段々凋落し、後者が段々芽を吹き出さんとして居る事である。之を我輩は新しい傾向といふのである。尤も絶對的に兩者の現在の勢力を比較すれば、元老の方が強く、輿論の力はまだ頗る弱い。けれども、將來の傾向から言へば、輿論の力には先きの望みがある。而して元老は最早や過去の勢力たるを免れない。而して元老の命運が今や日に〳〵縮らんとして居る際に、兎も角民間の輿論が政界の新勢力たらんとして居るのは、政機進展の大局に着眼する者の看過するを許さゞる所である。

二

元老は今日でもなか〳〵勢力はある。けれども其威望の昔日の如くならざる事は、彼等の羽翼たりし官界の俊髦が、近頃踵を接して政黨に加入する事に依つても分る。政黨に加入する事は、多くの場合に於て、元老に見切りをつけた事である。尤も中には元老の廻はし者もあらう。けれども政黨に入つて相當の地位を得れば、彼は最早や元老の傀儡たる事を甘んじない。さればにや、今日元老の勢力といふものは、段々元老の個人的勢力以外には之を認むべきものがないやうになつて居る。昔元老の勢力の偉大であつたのは、只彼等が個人としてエライばかりでなく、其周圍に天下の人才を網羅して社會の各方面に其大いなる羽翼を張つて居つたからである。されば當時彼等の意志は一つとして成らざる事はなかつた。政界に於て彼等は唯一の主人公であつた。我國に立憲政治が布かれて帝國議會が一方の勢力となつた後でも、彼等は決して政府を議會

にあけ渡さなかつた。當時議會に於て現はるゝ民間の勢力は、積極的に內閣を取つて代る能を有せなかつたのみならず、消極的に只內閣を破壞するといふ能さへ十分でなかつた。けれども、時勢の進步は爭はれないもので、明治三十年頃からは、段々議會の勢力も張つて、所謂政府政黨の妥協に依つて、交互に內閣を組織する事になつた。而して最近に至つては、苟も內閣を組織する者は、議會に相當の根據を有せざるべからずといふ事になつて、政界の主人公たるを得る第一の要件は、議會の後援を有するといふ事になつて來た。元老獨自の勢力のみで內閣を組織せんとした最後の試みは、去年三月の淸浦內閣成立の運動であらう。之が失敗に終つた直接當面の原因は何にあるとしても、之を憲政發達の大局から見れば、確かに、元老は最早や政府を組織する積極的勢力たるを得ないといふ事を明かにしたものである。之は元老勢力の大なる變動といはねばならぬ。彼等は最早政界に於ける積極的勢力では無い。然らばせめて彼等は仍ほ少くとも政府を破壞する消極的の勢力たりやといふに之も段々怪しくなつて來た。尤も今日でも元老の意志に逆つては到底政府を維持する事は出來ないと考へて居る事大主義者も少くない。さればこそ所謂政界の策士なる者が巧みに元老の間を說き廻つて常に內閣顚覆の陰謀を企てんとして居るのである。乍併去年の秋以來內閣と元老との意志が常に疏通を缺き、殊に最近に於て元老の方から起つて色々內閣の方に衝き當るに拘らず、尙未だ十分に內閣を窮地に陷れ能はざるのを以て見れば、元老は最早政府を破壞する消極的の能すら段々失ひつゝあるのではあるまいか。

尤も個人的に見れば、元老諸公は、兎角の批難はあつても、兎も角衷心國を憂ふる赤誠に於て、多大の尊敬と心服とを多くの人から得て居る事は疑ひない。從つて彼自身尙政界に於て大いに重きをなして居るのである。のみならず、其乾兒ともいふべき者は、樞密院邊に於ては勿論、貴族院にも隨分ある。內閣が常に鞠躬如として樞密院の意向を迎へて居る事は人の知ると

ころであるが、貴族院に對しても亦案外に氣燄をして居るといふ事は、現内閣が今度の參政官任用に就いて低能の聞え高き某を貴族院より任用したといふ事實に依つても明かである。併しいかに元老の一派が樞密院や貴族院で頑張つて居つても、最早や孤城落日の狀態にある事は疑ひない。爲めに末派のものは非常に躁擾いて居るやうであり、而して陰險なる內閣顚覆の運動なども主として之等の連中から發源して來るといふ事であるが、末派の身としては之も止むを得ぬ事であらう。然しいかに國を憂ふるの誠心があるとはいへ、末派の奸策に乘つて元老彼自身の政界に乘出して來るのは、餘り感心した事ではない。

一體彼等が本當に國の爲めに盡す誠心があるなら、自分で政界に活動すればよい。責任なき隱居の地位に退いて居りながら、後輩のする事を一から十まで氣にするのは甚だ心得ぬ。我輩は此點に於て我國の元老に奮闘活躍の任期滿つるや飄然として田園に歸臥し再び政治を談じなかつたワシントンの高風を學ばん事を勸告したい。若しワシントンたる事を欲せざるならば、蔭の方に隱れないで堂々と表に出て來るべきである。早い話が、山縣、大山の諸公にしても、松方、井上の諸侯にしても、彼等は皆貴族院議員である。而して未だ一回も議院に出席して其意見を吐いたといふ事を聞かない。如斯は無責任といふよりも寧ろ曠職の罪甚だしきものと言はねばならない。出て物を言ふべき場所では物を言はず、蔭の方で政界の當路者を衝ッく。之は甚だ其當を得ざるのみならず、尙一方に於ては非常な弊害の源を爲すものである。何となれば、元老が如斯態度を取れば、政界の重立つた者は、元老と事を隱密の間に決する事のみに苦心して、民衆と共に公明正大に事を計るといふ風がなくなるからである。之は確かに政界腐敗の源である。而して此等の隱密の運動が、實際に於て勢力を有するといふ事であれば、爲めにまた政府の行動を妨ぐる事が少くない。殊に此弊害が外交問題に於て表はれる。例へば今度の對支外交の失態に就いても、聞くところに依れば、元老の此態度が一つの

禍をなして居ると思はれる。尤も我輩は、元老が直接に政府を制肘して要求を緩和せしめたといふ當時の通説を必ずしも其儘賛成するものではない。けれども從來元老が政界の一方の中心であつて、政府に對して有力なる敵國を作つて居つたといふ事が、今度の外交失敗の根本的原因であつたと思はれる節がある。其故は外國では元老の意見といふものを非常に重んずる。殊に年老つた者の意見を公私共に尊重する支那では、元老の意見は政府の決議よりも重いと考へて居る。支那の清朝時代では、國家の大事は皇帝が必らず之を母后に聞かなければならなかつた。女であらうが何であらうが、年の老つた者に聞いて其賛成を得なければ、國家の大事が極らないといふのが支那の思想である。斯ういふ考の國で、元老の地位を實際以上に重く見たといふ事は怪むに足らぬ。そこで支那に對する談判では此政府の考は元老も同意であるといふ風に持つて行かなければ、重きをなさないのである。從來の政府は、總て皆此方法に依つた。然るに今度の大隈内閣丈けは全然此方法に依らない。聞く所に依れば、去年八月對獨宣戰以來、大隈伯の發意であるか、加藤男の發意であるか、今後外交の事は從來の樣に一々元老に相談はすまいといふ事を閣議で決定し、之を闕下に伏奏して御嘉納を得たといふ事である。然るに元老は、先に先帝崩御の砌、國家の大事に際しては汝等の助力を覓むるといふ　今上陛下の優詔を賜つて居るので、之を楯として、外國と戰爭をするといふ樣な大事を我々に相談しないのは、陛下の御思召を曲ぐるものであると言つて憤慨し、其結果當時元老會議の樣なものを開いた事があつたが、それにも拘らず加藤外相は、依然秘密主義を守り、元老に對しては一通りの報告はしたが何も彼も打明けて相談するといふ態度には出でなかつた。從來の政府は、例へば今度英國から斯ういふ抗議が來たと言うては、直ちに之を謄寫版にでも刷つて元老に配附する。アメリカから抗議が來る。直ぐに其寫しが元老の手に入つたものだ。すると所謂政界の策士等は、直ぐに元老の手からそれ等の寫しなどを見せて

貰つて、外交の大勢には皆通じて居つたものだ。然るに今度は如斯事はさつぱりない。戰後の我國の外交は政友會邊の頭株には勿論、元老にもさつぱり分らないそこで兼々おせつかいな元老は、一つには何をするか分らないといふ心配と、一つには事を秘密にされた恨みと、兩々相待つて外相攻撃を以て内閣に反對するといふ事になつた。之が何人かの手を通して支那に傳はつた。袁探の說ありし所以である。愈々最後の間際になつても、支那では日本政府の決心に對しては元老の後援がないといふ情報に接して、頗る强硬の態度を取つた。此等のいきさつに就いては、差當つては政府が元老とよく打合せをしなかつたといふ事に缺點はあると言へるけれども、然し其本をいへば、元老といふ隱れたる中心勢力があるといふ事に禍根がある。之は尤も大きな弊害と思ふが、之れ許りではない。元老が斯ういふ態度を取ると、政治は元老の間に出入して居る少數者の專門になる傾がある。長嶋隆二君が近頃政界で多少の注目を惹いて居るのは、其人自身にもエライところはあるだらう。が、一つには井上侯などと接近して居るが爲めである。元老と接近して居る者が、皆長嶋君の如き人才であればよいが、中には下らない者もある。此所謂下らない者までが政界に跋扈して居るやうでは、結局人材を阻む事になる。之を要するに、元老が今のやうな態度であるといふ事は、元老自身は善意であつても、日本政治の健全なる發達の爲めにはよくない。而して今日之が尙政界の轉機を決定する一つの勢力たる事は、甚だ之を遺憾とするのである。けれども、又一方に於て我輩は其勢力の日に〳〵傾きつゝあるのを見て、些か慰むるのである。而して彼等の餘命もはや幾何もない。此等諸公百年の後は、其末派の有象無象では何人集つてもあれ丈けの勢力を支持する事は出來まいと思ふから、今日元老の勢力は先づ過去の勢力の惰勢的連續と見て差支へない。

三

扨て元老の勢力の凋落に代つて段々振興し初めて居るものは輿論の力であるが、併し、此輿論の力が儼然

たる勢力として政界を支配し得るに至るまでには前途尙遼遠であると思ふ。輿論の力は今日稍々認められかけて來た。けれども政界の識者は眞に果して之を敬重善導するの誠意ありや否やは頗る疑はしい。只疑のない點は今日の政治社會が民衆が一つの勢力であるといふ事を確認した事である。否之れ許りではない。民衆の勢力は世の中の進歩發展に伴つて段々に振興するといふのが自然の勢であるといふ事をも知つた。民衆が一つの勢力であるといふ事を知つたのは、恐らく例の日比谷原頭の騷擾以來の事であらう。近頃政界の策士がやゝもすれば國民大會とか、國民同盟會とか言つて、諸方の劇場や公園等で多數の人を集むるのは、民衆は以て之を利用するに足ると信じた結果であらう。何れにしても、今日の政治家が段々民衆の力といふものを認めた點が餘程面白い。兎に角一つの進歩である。固より個々細目の點に就いては遺憾な事はまだ非常に多い。けれども少數政治から多數政治に移る一つの階段として見れば、今日は正に古い着物を脱いで新しい着物に代へんとして居る。其代り目に立つて居るものと見る事が出來る。此點に於て我輩は、我國今日の新傾向を將來の政界の發達の爲めに之を歡迎するに躊躇せざるものである。が併し、之と共に我輩はまた他方に於て我が輿論政治の健全なる發達の爲めに大に憂ふる點もあるのである。

何が憂ふべき點かと言へば、我國の政治家が、民衆の勢力といふものをやつと認めたのではあるが、併し果して民衆政治といふものは本來よいものであるかどうか、又民衆政治の美果を收むるには何うすればよいかといふ點に就いて、はつきりした考がありや否やといふ點である。今日我國には、民衆政治に對して反對の考を抱いて居る者が案外に多い。一體民衆政治といふ事は、一國の政治は須らく人民の爲めに爲さるべしといふ主義と、一國の政治は須らく人民に依つて爲さるべしといふ主義と、此二つの內容を有して居るものであつて、若し此政治の利害得失の關係に就いて爭ひの起る點ありとすれば、人民に依つて爲すのがよい

か、或は少數者の手に政治の運用を總て托するのがよいかといふ問題に就いて起るのであつて、政治が人民の爲めに行はるべきものとするの點は、最早や一點の疑もなかるべき筈であると思ふのに、案外にも我國には此事まで明白に了解しない者がある。封建時代ならば、何事もお家の大事といふ事で押し通して行けたであらう。けれども今日は人民一般の利益幸福が政權運用の最後の目標でなければならぬ。然るに此問題にすら疑がある位だから、況んや政權運用の終局根本の判斷を人民に決定せしむるといふ主義に反對するものあるは無理もない。尤も兼々民衆の友を以て立つて居つたものが、此間の總選擧で美事落選したので、民衆談ずるに足らずとして貴族主義に移つたといふ男もあるさうだが、此等は須らく論外として、我國の所謂識者の間にも、民衆政治の眞義を了解しないものが相當に多いやうだ。而かも民衆勢力の滔々として伸暢する自然の傾向は、彼等と雖も之を認めざるを得ないので、彼等は滑稽にも密かに國家の前途を憂慮に堪へずなどゝ歎息して居る。若しそれ如何にして民衆政治の美果を收むべきや否やの問題に至ては、民衆政治を謳歌するものと雖も、よく之を心得て居ないやうである。之れ甚だ我國政界の前途に取つて憂ふべき事であると思ふ。

四

以上述ぶるところを総括すれば、我國今日の政界の新傾向は、其赴くべき當然の徑路を誤らず通つて居るといふ事は明かである。けれども舵手が果してよく政機を適當に進轉して目的の彼岸に達せしむるを得るや否やに疑問がある。此點に於て予は世の識者と共に、折角勃興して來た喜ぶべき新傾向を善導し、何とかして憲政の健全なる發達を來したいものであると思ふ。之については幾多の論ずべき問題があるが、差當つて予はこゝに二つの事柄を我國政界の識者に申言したいと思ふ。

一つは民衆なるものゝ政治上の意義並びに價値を適當に了解するといふ事である。民衆が政治の進歩の上

に持つて居るところの地位は、それが純粋に消極的受動的であるといふ事である。之を他の半面から申せば、民衆は元來政治上の問題に就いては、何も積極的の意見を有つてゐる者ではないといふ事を意味する。尤も天下萬民が悉く理想的の發達の狀態に達すれば、民間に積極的の意見といふべきものが生ずるだらうが、如斯は現實の民衆には望まれない。一般の民衆は夫れ程有識な者ではない。從つて之れと定つた意見のないのが當り前である。然るに世間の政治家中には人民は、何も分つて居ないとか、民間の輿論等は當てにならぬとか、人民の智識が低いからまだ民衆政治は早いとか、色々民衆の無智を罵るのである。之が第一の誤りである。かく民衆には何も意見がないと言つて愛想をつかす者があるかと思へば、他方には民間一部の誤つた意見を民衆全體の積極的輿論なりとして之に媚ぶるものもある。其處此處の演說會で場當りを取つて得意になつて居る陣笠政治家等は正に此類である。そこで我々は、民衆とは何も極つた意見はないものだといふ事に腹を極めなければならぬ。それならば何を便つて民衆につきあたるかと問ふ人があらう。それは彼等の健全なる常識的判斷力である。相當の程度に達した民衆には、自分には積極的の意見はなくとも、人の意見を聞いて其是非曲直を判斷する丈の力はある。それ丈けの力もないとならば、其時は無論民衆政治がまだ早いと言はねばならぬ。併しながら、廿世紀の今日、所謂文明國の人民は最早民衆政治を尙早とする程に智見の程度が低いといふ事は許されない。そこで或政治問題が具體的に起つた時に、政界の識者に色々意見を自由に吐かしめて、而して民衆をして其可とするものを擇ばしむるといふところに民衆の政治上の意義が存するのである。各種の意見が自由に吐かるれば、大局に於て最も健全なる意見が大多數の採納を得るといふ事は、大體に於て誤りがない。個人〱に就いて見れば、其人の性癖、境遇等の影響を受けて其判斷を誤る場合が少くないけれども、民衆全體を以て之を見れば、大多數の場合に於て彼等は決して判斷を誤るものではない

「民の聲は即ち神の聲なり」といふ西洋の諺は、此點に於て動かすべからざる眞理を含んで居る。只往々民衆の判斷が誤るの事實あるのは、脅迫等の積極的手段、賣收等の消極的手段に依つて、言論の自由を妨ぐる場合に限るのである、されば最も健全なる思想をして民間の輿論たらしむる爲には、言論の自由を尊重するといふ事は根本の第一義である。此言論の自由を尊重するといふ約束の上に、各種の意見を些の拘束なしに發表せしめ、彼等をして民衆の心理上に自由競爭せしむるといふところに、民衆の政治上の意味と價値とがある。此點をよく了解するといふ事が、今日我國政界の最大急務であると思ふ。

第二には世の識者が自ら民衆の一人たる事を自覺すると共に、尙民衆の指導者、民衆の代表者たるの心掛けを有する事である。他の言葉を以て言へば、民衆と共に動き、而かも民衆より一歩先に進むといふ事である。今日の議員諸君等の中には、民衆と一所に居る者はある、けれども一歩先に進んで居る者は極めて少ないではないか。又政界の先覺者學者等の間には、一歩先に進んで居る者は多少あるけれども、民衆と手を携へて居る者は極めて少ないやうに思ふ。之は決して健全なる社會狀態ではない。天下の事をなさんとするものは、決して民衆の力を無視する事は出來ない。民衆に納得させないで自分一人で事をなさうとするのは、非常な專制主義者でなければ、必ず政界の落伍者である。又天下に事を爲さんと欲する者は同時に、民衆を指導する一大精神的威力でなければならぬ。要するに民衆政治の健全に行はるゝが爲めには、民衆から言へば、最も健全なる精神に服從しつゝ、其精神を自分の代表者として民衆の事をなさしむるものでなければならぬ。之を民衆を代表して起つた者を主として言へば民衆を指導しつゝ、民衆に推されて動くものでなければならぬ。先覺者と民衆とは、常に相提携し相影響する關係に立つて居なければならない。此關係をよく理解し、此關係をよく運用するところに、健全なる民衆政治の華が咲く。然るに今日我國の識者は、動もすれ

ば此關係を離して考へる。且つ指導する精神のみに着眼するものは、民衆の力に推されて行く關係を無視して、貴族主義を謳歌する。又民衆の力のみを認める者は、指導する精神の尊さを忘れて、衆愚主義に墮ちんとする。互に罵り合つては結局其の陥るところは自滅の外にない。現代此關係を誤つて政界の困難を來して居るものは露西亞である。之に反して此關係の適當な理解と運用とに依つて美事な成功を收めて居る者は英吉利であらう。政權の運用について、我國は果して露西亞に依らんとするか。將た英吉利に依らんとするか。

政黨發達史論

山路愛山

夢中の起草。

中央公論記者足下。足下が歸ると同時に僕は又風邪の氣味なり。此風邪にて執筆を斷れば、僕は其實正直の男なれども無責任なる文人と思はるべし。夜半に至りて氣分少しく快し。因て蚊帳の中にて筆を揮ひ何處まで書けるか書いて見る積りなり。かゝる次第なれば夢中を離るゝ能はず、粗末の記憶をたどりて朧氣に要領をのみ記るしたり。時に家人皆眠りて細雨霏々たり。小池の蛙は如何にしたりけん四五日前より鳴かず。

政黨史の材料を評す。

日本政黨の歴史の世に存するものは我等の見る所を以てすれば舊自由黨諸氏が材料を供して誰やらに編修させたる板垣老伯の傳あり。以て自由黨史と稱すべし。さりながら其文は所謂餘り立派のものにして華餘ありて實少く、讀去て悲歌慷慨の詩境を脫すれば一物を讀者の腦底に止めずと云ふも可なり。伊藤公の傳は末松男、

古谷久綱君、中原邦平氏などの著述あれども主として大なる官員伊藤侯を論じたるまでにて政黨の史を研究すべき材料としては殆んど取るに足らず。獨り德富蘇峰君が嘗て世局の變遷を論じたるものと、其桂公の評傳とは流石に眼光政界の下層に徹したる所なきに非らず、勿論例の蘇峰君の筆癖とて微言幽辭多く、讀者往々其眞意を捕捉するに苦しむと雖も猶ほ人生の眞象を閃光的に漏らし來るものなきに非らず。嘗て衆議院の役人を勤めたることあり、唯今も勤め居らるゝや否や官邊の事に不案内なる我等の知らざる所なれども工藤武重(?)と云ふ人あり。日本議會の歷史を作る。其中には政黨の事をも記したり。細心の著述とは見へたれども申さば記錄の類にして議會及び政黨の發達を記したる史學上の意味に於いて歷史と稱し得べきものに非らず、博文館にて發行したる政黨史など云ふものは割合に普く出來居るもあれども是亦急拵への間に合せ者たるを免れず。我等の一讀し若しくはざつと見渡したる書物は唯是だけなり。自身は政黨に縁遠き身なれば近頃のことは唯だ新聞を讀むで想像を逞ふする計なり。是だけの準備にて政黨發達論を説くも押しが强し、默つて引込むべしと云ふものもあらん。引込たきは山々なれども書くべしと約束したる天罰は免れず。諺に云ふ當るも八卦、當らぬも八卦なり。僕請ふ妄りに語らん。君且妄りに聽け。

古今の歷史は則ち政黨の歷史なり。

物の名も所によりて變るなり。浪花の芦は伊勢の濱荻と云へり。政黨と云ふものは西洋若しくは現代のものにて日本には昔より無しと云ふものあらば浪花の芦が伊勢の濱荻たることを知らぬべら坊なり。遠く往古を尋ぬるまでもなし。長州の奇兵隊、俗論黨、薩摩の高崎黨、非高崎黨いづれも政黨なり。淸盛、賴朝の時代に田舍紳士(武士)が戰線に立んで都の紳士(公家)を壓し天下の權を取りたるも政黨なり。小さき植物の枝葉も大なる植物の枝葉も、其枝葉の生活作用に至つては同樣なり。されば政黨の發達史と云ふも眼前四五十年若しくは二三十年乃至十年、四五年の瞬間のみに執着し

て人類歷史の總體より觀察せざる時は何の將も無きことなり。人類社會を蟻の巣様に考へて大きなる所より立論せねば天下國家の赴く所、世潮の流れ行く方角は知り難からむ。先づ斯う云ふ大言を吐き散らし讀者に一驚を喫せしめ、扨本文に入る。作文は風邪の藥と見へ、記して此に至れば大に發汗す。

政黨の歷史には上下動あり。水平動あり。

政黨の歷史に竪と横の兩面あり。此頃少々活動する富士火山系の地震に譬ふれば上下動あり。水平動あり。たとへば政友會の天下が加藤高明とやらん云ふ我々社會にては何のへちまの皮とも思はざる外交家を總裁とする何とやら云ふ政黨の天下になりたりとも、是は所謂横の歷史にして上下動なり。政友會を以つて加藤黨に代ふるは暴を以て暴に代ふるものなりとて慷慨するものあれども、それに慷慨する奴が初心なり。元來政界の水平動なれば暴を以て暴に代へ、賢を以て賢に易ゆるが當然なり。日本國の無名の哲人は、早くも此意味を簡潔なる語を以て現はせり、曰く『牛は牛連れ、馬は馬連れ』と、但し竪の政黨の歷史と云ふは左様に氣樂なるもののみに非ず。是則ち恐るべき上下動にして政界の主人たるべき階級の變化なり。たとへば幕府の末に大名は上等の馬鹿殿様となり、家老用人は中等の馬鹿殿様となり、上士は下等の馬鹿殿様となり、世界の主人悉皆愚人の集團となりしかば、世界形勢の變化に應じて日本國の危險なる位置を脫する能はず、大まごつきにまごつきたる結果、憂世慨國の士、骨硬く、力剛なる人、下士輕卒より起り取つて之に代り、ぴんた打切る無骨の田舎士、唐詩選を歌ふの外はメリヤスも獨々逸も知らず、江戸の女に好かれそうも無きクヤクヤ連中が庶士寒人を以つて政界の主人となりたるは是れ則ち上下動の一例なり。是は賢を以て愚に代るか、或は愚を以て賢に代へるか何れにしても要するに政界の主人が變化したる狀態なり。

所謂大正維新は依然たる政黨の水平動のみ。

政黨の歷史に上下動と水平動の別あること此の如し。さりながら地震には上下動と水平動が多少同時に來ることあるが如

く、政黨の歴史にも專ら水平動と見へて多少の上下動を伴ふことあり。或は上下動のやうに思はれて其實は水平動に過ぎざることあり。近頃大正維新など云ひて馬鹿馬鹿しき騷ぎを爲し、桂内閣に向つて咆哮し、藩閥を倒し、憲政を擁護すべしと、大聲疾呼しては天子の御膝元に燒打をさへ演じたる光景を見ればどうやら佛國革命を目のあたりに見る樣の心地したれば氣の早き連中は、さては政界の上下動來れり、人氣も改まれり、時勢後れの老書生落ついて腰が拔けたかなどゝ我等の冷血を笑ひたるものありしかども其實やはり水平動に過ぎざりしものと見へ、山本が桂に代り、七十八翁滅（マイナス）隻脚の大言伯が山本に代り例に依りて例の如く大風呂敷をひろげ政界に乘り出しても政界は依然として腐水の如く、參與官などゝ孑孑を多く生じたり。斯樣の冗官冗員を作り、國帑を費すこと以ての外の惡事と存ずれども是は澁谷村の村民一人の私見にして日本國民の崇敬する大隈伯爵閣下より見れば人才登庸の門戸を開き、些か鬱勃として將に破裂せんとする政界上下動の危險を避くべき名案たらんも知るべからず。左樣の辯護をして伯の機嫌を取る利口者もあるべしと雖も、大隈伯は大隈伯、愛山先生は愛山先生なり。我等の意見を正直に申せばどうしても大隈伯の出現はやはり政界の水平動にして上下動に非らず。我等は平和を愛好する一事に於いては未だ嘗て何人にも讓らざる臆病者なれば、勿論亂民たるを好まず。大隈伯にても加藤男にても、馬鹿にても、賢人にても既に國家の大臣とあれば障らぬ神に祟なしとの訓誡を守りて唯だ敬遠するのみなれども、大正維新などゝ騷ぎたる奴が古い古い古い政治家をかつぎ出し、それを神輿にして騷ぎ出したるを見るに忍びず。惡詩一首を作りて感慨を漏らしたり。

五十年來教育新。深山何處不才人。
忽驚隻脚半死叟。獨上天朝稱宰臣。

昔し大久保甲東は迂生未有尺寸功。累辱朝恩禁闕中。早晩尋賢成宿志。深山何處訪英雄と云へり。日本帝國の新教育も既に五十年に及びたるに政界依然として朝三

暮四の水平動に齷齪し、深山に人才なきに非ざるに何時もながらの薩長土肥。餘り情なきやうに感じたれば下手ながらうなり出したるものなり。をや〱是れは筆がいさゝか岐路に迷ひたり熱が手傳ふものと許したまへ。

維新政府の奥の院。

議論の筋は正路に戻る。さても將軍、大名、家老、用人、上士の天下を覆へして下士輕卒の天下としたる政黨の上下動は日本歴史に於いて新時期を開きたるものにして維新の政府は此激烈なる上下動と之れに伴ふ激烈なる水平動に依りて破壞したる舊政府の故墟に政界の新主人に依りて建設せられしものなり。此時代の政界の主人は誰れぞとならば則ち士族なり。薩摩、長州の士族は政府を造りたる大株主にして土佐と肥前は其間に割込みを試み多少成功したるものなり。世に之を薩長土肥と稱す。先づは政府黨なり。其外の士族は薩長に天下を取られて其下風に甘んずるものにして先は在野黨と目すべきものなり。記して此に至る。顏がすこしいたし。筆を投じて休む。時に七月五日、夜半なり明くれば七月六日午前六時。寢られさうにも思はざりし昨夜は記者足下の御蔭にて疲勞したれば間もなく熟睡したり。今朝目覺めたるに舌が苦がし、熱もあるやうなり。龜の子の如く布團の中にもぐり込み、腹ばいになりて前文を續く。扨も維新の政府は田舍の下士輕卒を在朝黨の幹部とする新式の政府なりしかば幕府の旗本にして風流才子たりし成島柳北などは之を冷笑し二頃田翁博卿相。幾家王孫飯漂母と歌ひたり。但し自己の力に依りて德川の天下を覆へしたる薩長の田舍者も其心事を尋ねれば割合に公平にして第一に日本國の成立つ樣に考へ、第二に自黨の利益をも少々は考へ、一旦朝敵となりし幕士及び東北諸藩の士をも多くは其死を宥し、新政府の節度を奉じて敢て逆はざる卑怯なる男も其才を用ひて政府の小役人としたり。是れ則ち左傳に謂ふ所の楚の材も晋にて用ひられし類にして幕府時代に其才ありとも門閥、資格の殊なるに依りて登庸せらるゝこと無かりし人物も却て其敵たりし薩長氏に

用ひて多少の世用に供したるものなきに非ず。誠に不思議の現象なれども是れ則ち庶姓寒人の天下となりし結果なり。尤も薩長氏は何處までも政界の要路に居すはり、日本國を我物と心得、政府の座を肥前、土佐などに分つやうに表面は見せかけれども其實は『其方に權を分けてやりたり』と恩を示したるのみにて薩長氏には別に政府の奥院ありて他人の干渉を容れず、諸事は薩長氏だけにて取扱ひたり。されば海舟先生は參議兼海軍卿になり、大隈伯參議になり廟堂に幅を利かしたる大官にして外より仰ぎ見れば言聽かれ計用ひられたる英雄のやうなれども其實は寓客同樣に扱はれたることにて政局の奥の院には未だ一歩も足を踏み入るゝ能はざりしことなり。此段近頃出來たる大久保甲東の傳に載せたる其書簡を見れば明白なることにて大久保は折角薩長にて取りたる天下に後れ馳せに馳せ付けて拾首したる土佐と肥前などが割込み來り我物顔するを耻を知らぬ人の樣に思ひたり。但し薩長氏の內心は此の如くなりしかども表面には何處までも公平を粧ひ人望を收めんとしたるは其時代の士族は瘠せても枯れても政權の土臺にして士族の甘心を得ざれば直ちに其政府を顚覆せらるゝ危險ありたればなり。此處まで記るしたる時面倒なれば床を片付け机を椽側に持ち出す。少し頭痛すれども左程の苦勞に非ず。雀、庭樹に囀く、雨滴椽を鳴らす。

薩長氏の心事は寧ろ光明正大なりき。

斯樣に論じ來るときは西鄕、大久保、桂(小五郞)の徒は僞善の塊にして天下を我物と心得ながら表面に王莽の恭謙を示し、天下の人才と共に天下の事を做さんとするやうなる純忠無二の態度を粧ひ、天下の豪傑を甘くたらし込みて其實政界の奥院に立籠り、十分に我儘を働きたる贋物なりしやうなれども決して然らず。尤も彼等が政界の奥院を占有したるは專橫とも云ふべし。さりながら天下の蒼生を安ずるを以て自ら任ずる公僕に是程の執着あるべきは當然にして權を好むと云ふは必しも橫着者の事業に非ず。たとへば一家の尊長者が家事を以て我任とし、何事も一手に取捌きて他人

の干渉を容れず。或は家の太郎の意氣地なきを憤りたる次郎が我家の柱は吾なりと自任し、世間の付合、家事の取締まで我任とし身を粉にして働けば樂も亦其中に在り、次郎の一家を擔任したるを見て次郎が我儘專權なりと云ふは非なり。專權には相違なけれども人間に斯樣の權勢慾あればこそ家事、國務の擔當者も出來、人界に活氣の現はるゝことなり。世の人何れも釋迦のやうに覺りたらば誰れも人の世話は面倒なり、御免を蒙るとて引込みたらば社會は其時より瓦解すべし。されば薩長氏の權勢欲は如何なる點より見るも非難すべきに非ず。我々が取つたる天下を我々が治むるは我々の任なり。氣の知れぬ奴に世を渡してはどんな事になるも知れずとて權勢に執着し、政界の奧院に座して他人の容喙を容れざるは必しも横着の心のみに非ず。さて權勢を自身の物にして日本國の改造に着手して見れば是れ則ち我開拓したる畑の芋大根なれば苦勞の多き代りに樂も亦其中に在り、權勢慾を滿足したる快感を覺へては之に執着するも尤むべきに非ず、若し此快感なけれは天下何人か、酔興にも他人の事に干渉し惡まれ役となりて喜ぶものあらんや。扨又、薩長氏が政權を公平に天下の英雄に分つやうな行儀を粧ひ人たらしの爲したるは僞善のやうなれども、其實權利と義務との區別は世の人の思ふ如く容易に定むべきものに非ず。たとへば舊幕の時代に主人の馬前に打死するは士の本分なりとて正直の侍は其通り心懸たる心事は勿論一點の疚しき所なく僞善の分子は塵程もなき樣なれども、斯樣の誠心の發達したるは其始の主人より祿を貰ひ家人を養ひたる恩義に報ゆるものにして最初の動機を露骨に云へば利益の交換なりと云はざるを得ず。さりながらそれが久しき習慣となり、子々孫々に遺傳する時は利益の交換と云ふ最初の出發點より解脱し全然身を獻ずる犧牲の精神となる。たとへば赤穗義士の心事の如きは即ち是にして純忠無二の快擧には相違なけれども世の中が改まり主人と云ふものなく、祿と云ふもなき天下となれば斯る快擧は復た見るべからず。然らば則ちやはり忠義も利害問題なり。傍人より薩長氏の人た

らしを解剖すれば僞善のやうなれども薩長氏自身の心事を叩けば才を愛し士を敬し天下の豪傑と共に天下の事を了せんと欲したる其覺悟には何等の疚しき所なかりしやも知るべからず。僞善にもせよ、眞善にもせよ、形式だけにもせよ、或は心から出でたることにもせよ、敵も味方も一になり、幕府の家來をも明治の天朝に出仕せしめ、土佐、肥前の拾首連中をも伴食ながら參議に列せしめ、人才登庸に汲々たりしは士族と云ふ階級の心を失ふまじと只管其機嫌を取りたることなり。身に熱があれば固形物を喰ふがいやなり。此處まで記す間に牛乳三合を平ぐ、雨またざつと降り來る。

維新時代の政治的人民は獨り士族のみ。士族の政治的勢力。

維新の初十年ばかりの政府が何故に左樣に士族の機嫌を取りたりやと云ふに、其時代に政府を造り若しくは破毀する力あるものは獨り士族のみなりし故なり。仔細は士族は舊藩と云ふ團體に分かれて自ら首領を有す。首領一呼すれば一藩の士、響應す。明治四年に廢藩置縣を行ひて封建制度は破壞したるやうなれども、それは制度の上に名の亡びたるまでにて事實に於て舊藩の勢力が全く破壞したるに非ず。藩が無くなり、藩主は華族に列したる代りに何縣貫屬士族と云ふ名義の下に士族は舊藩時代の政治地圖に依りて諸方に割據し、其士族の中には善く言へば德望家、惡く言へば餓鬼大將とも言ふべき人物ありて精神的の首領となりたれば、やはり自ら統一したる勢力にてありたり。如何なる場合にても統一したる勢力は恐るべきものなり。別して餓鬼大將に從つて荒れ廻る連中は政府に面倒を掛け易きものなり。是れ一。次には士族は既に廢刀令に從て刀劍を捨てたれども祖先以來鍛錬したる武道は未だ衰へず。まさかの時には長持に仕舞置きたる錆槍と錆刀を取出して戰場に飛び出すを得べし。今日は士族も平民も其相違は戶籍面だけの事なれども此時代には謂はゞ士族は變則の兵隊なり。谷干城子の遺棄と云ふものを見たるに明治政府は其時代に鎭臺兵を作りたれども、各地方に百姓一揆などの起る時は地方官は鎭臺の出兵を求めず、却て縣の士族に依頼して鎭撫せしめたるが

故に士族は時を得たりと喜び、袋の中より刀を拔き出し百姓を畏したり。政府の代官たる地方官さへ此通り鎭臺兵を信ぜず、却て士族の武器を信じ、正式の兵にもあらぬものに依賴して、騷亂を壓止するとは何事ぞやとて谷子は歎息したり。谷子の歎息は我等の關せざる所なれども、士族の劍が一個の力たりしことを思ふべし。唯今の政治界は空言と空言との戰鬪にて畢竟、尾崎行雄君のやうなる容貌壯重、議論しかつめらしき人物が雄を稱することとなれば、吾何ぞ學堂の大言壯語を恐れんとて一蹴し去りたりとも政府に苦勢なきことなれども、其時代の士族の言論には背後に劍あり。氣に入らねば『拙者の腕には骨が御座る』と恐ろしき事を言はれては政府も少々迷惑致成るべくは其感情を和らげ、其生活を保護せんとしたり。是れ二。其時代に於て日本國民中、兎も角も書物を讀み、世界の形勢を解したるものは士族のみなり。尤も其時代の士族を立派なる本讀みなりしと思ふは誤解にして士族の階級も實は隨分無學なるものにて大抵は日本外史の素讀も覺束なき程の連中なりしかどもそれにても日本人民中の敎育あるものを求むれば士族の外には皆無と云ふも可なり。たとへば明治十年頃までの慶應義塾は士族の書生のみにして福澤先生の初より平民主義なりしに關はらず、百姓、町人の子は殆ど其影を見せざりしが如し、是亦士族の恐るべき所以なり。是れ三。凡そ此等の理由に依りて最初の明治政府は士族を政治の土臺とし士族の人望を得んことを力め、政府に居るものも士族、政府反對黨も士族にして日本國の政黨は唯だ士族の政黨なりしと云ふも可なり。されば明治七年の名高き民選議院開始の建白なども畢竟は、政府の反對黨たりし士族の巨魁が政府に立籠りて在朝黨たりし士族を畏嚇したる一手段にして是を人民の聲なりなど思ふは時勢を解せざる妄斷のみ。

西鄕騷動は政黨生活の水平動たるに過ぎず。

さりながら日本帝國は果して士族の階級だけにて維持し得べきや否や。全國の士族四十萬戶、何程骨硬く、義堅く、智識、敎育備はりたりともそれ計りの人數にて

世界の列強を相手にし、抑も押されもせぬ東洋の大國たらんと果して出來得べきことなりや否や。高山に上るものは國の形、眼下に現はる。日本國の中心に座し、世界の形勢を見渡したる薩長氏の中には是ではいかぬ。是非とも日本人民全體を教育し、百姓町人をも兵役に服せしめ、三千餘萬の蒼生と共に力を戮せて國家を經營せざるべからずと見込をつけたる文明流の政治家あり、或は百姓町人に何が出來る。日本國の命脈は士族なり、武士道なり、西洋の眞似をするに及ばずと云ふ保守黨あり。彼是の感情自ら衝突し。猶ほ種々の原因ありて、薩長氏自身自ら二に分れ、士族總體も保守黨、進歩黨の區別を生じ、其結果、佐賀、熊本、秋月、萩の騷亂となり、西郷隆盛の薩摩に兵を起すに至りて爭亂其絶頂に達したり。江藤、前原、西郷の徒、何れも兵器を執て政府と戰ひたれば義理名分をむづかしく言ふ論者より見れば反賊とも云ふべけれども其實は彼等は在野黨の士族にして言論の代りに刀劍、鐵砲を以て在朝黨の士族と戰ひたるに過ぎず。其心事に立入りて之を尋ぬる時は國家を思ふ赤心に於ては大久保、桂の徒に殊なることなしと云ふべし。たとへば唯今の政黨は黄金を武器とす。何の埒もなき自惚男にても其身が金穴に縁ある故に二三十萬金を抛つて黨資に供する時は、黨人も内々其痴氣滿幅の人物たるには辟易しながら大將などゝ崇め奉るが今の世の習なり。則ち現代に於ける政戰は詰る所は金の戰にして「友人の政戰を助けん爲に五千金を贈りたるは政治家に在りては尋常茶飯の事なり。敢て怪しまるべきに非ず」と公然金を友人に贈りたることを議會に公言しても誰も之を非難すべき口實を有せざる世なり。昔しは孟子は杖にて人を殺すも、刄にて殺すも、人を殺すと云ふは同様なりと云へり。黄金の戰爭も、武器の戰爭も政爭の機關たるは則ち一なり。江藤、前原、西郷の世には士族の腕力は政治家の反對黨を壓すべき武器なりしが故に、彼等は今の政治が黄金を散じて戰ふ如く士族の腕力を以て戰ひたるのみ。固より腕力の戰爭は血を流し人を殺すが故に史上の大慘劇たるに相違なしと雖も、其[illegible][illegible]は

士族と士族の政權爭奪に過ぎざれば政黨の歴史より言へばやはり水平動にして上下動に非ず。西郷輩が勝ちたりとも士族のみが政治的人民たる舊態は依然として變ぜず、士族以外の社會は政治の門外に沈默せざるを得ざりしならむ。

國會開設は政黨の上下動を誘因とす。

然るに此處に注意すべき事件こそ起りたれ、他なし、百姓、町人を以て組織したる鎭臺兵が西郷を大將としたる薩摩の武士二萬人と戰ひ、兎も角も後を取らず、敵將の首を取り、鼎の沸きたる如くに亂れし九州を鎭定し得たることと是なり。但し其時代兵隊といふは必しも百姓町人のみを以て組織したるものゝみに非ず、士族兵も多少は雜り居り、其上戰場の必要に應じて新に組織したる拔刀隊など云ふものは其内容は士族兵に相違なかりしと雖も、概して言へば百姓、町人を以て組織したる兵隊が日本士族の中にても慓悍決死の士と云はれ薩摩武士の傲慢を破壞したるものなり。是れ則ち平民の世の來るべき前兆にして政黨ハ水平動が一轉して上下動に移るべき端緒を發したるものなり。斯樣に平民の動き出したるには仔細あり。日本政府が教育令を布き、全國に小學校を設けしめたるは平民の頭を搖げ來るべき最初の警鐘にして、今までは明治政府の布告も碌々讀め兼ねたりし名主庄屋の類までも六づかしき文字を覺へ、百姓の暮し向、豐かなる輩は追々學校に往來し、學問、智識士族を凌ぐものも出來たれば、鎭臺兵も從つて善く戰ひたり。我等は猶ほ當時の事を記憶す。或人我祖父を訪ひ、此頃は小學校にて日本地理を教へ、其上左樣の書物を讀むものも多ければ鎭臺兵も戰場の方向を心得居り、指圖するにも都合よしと云ふ噂を聞きたりと云へり。教育の効以て思ふべし。かゝりしかば士族の勢力、やゝ衰へしと共に士族の外にも教育あり階級を生じたる其上に西南の戰爭に依りて新聞の勢力を增し、日本の津々浦々にも東京の新聞を取寄せて讀むものあり。或は東京より記者を聘し來りて新たに新聞を起すものあり。かてゝ加へて其頃財政の局に當りて大隈伯の不換紙幣濫發は物價を騰貴せしめ

田舍の百姓に何となく懷の春めきたるを感ぜしめしかば是亦其氣力を强くし、是に於てか政治の上下動を起し所謂國會開設請願運動なるものを見るに至れり。士族は腕力ありて恐ろしけれども其腕力も西鄕騷動の結果に依りて其賴むべからざるを證したれば今は政府の懸念する所に非ず。さりながら不平士族を先達にし田舍の腹脹れが西洋新學の議論を旗幟として出陣し、我に政權を與へよ、我に政權を分てよと怒號するに至ては政府と雖も些か氣味惡く感ぜざるを得ず。元來明治十年までの明治政府は何方かと云へば世界文明を丸呑にせんとする急進主義の政府にして、之が爲に保守主義の士族より國を誤るものなりと誤解せられ遂に小亂大亂を惹き起したる程なれども、人民却て新式の西洋主義を揮廻はし、議會を求め、憲法を求むるに至ては政府と雖も餘り文明開化の藥が利き過ぎたるに迷惑せざるを得ず。是に於て乎、薩長氏は保守主義に變じ、人民の一部は長夜の眠より覺めて純理急進の主義を唱へ、此分ならば政府の威力、能く人民を壓して其位置を保ち得べきや、或は人民の運動猛烈にして政黨生活の上下動を現出し來るべきや。事態頗る危險となつたりしが幸にも薩長氏は元來下士輕卒より起りて天下を取りたるもの多ければ民權など云ふことにも必しも門外漢に非ず。中にも伊藤公井上侯などは元來文明政治家を以て自ら任ずるものなれば、必しも政權を人民に分つことを好まざるものに非ず、別して大隈伯は大久保甲東の死後參議の首席にして下馬沙汰にては首相も同樣なる人なれども、其實は前文にも說きたる如く云はゞ薩長氏の寓公なれば、此機會に乘じ人民黨の首領となり、大に其權勢慾を發揮すべしと心掛け書生を近づけ、新聞を利用し、伊藤公、井上侯と結んで政府中の進歩派を以て任じ、人心の赴く所に從つて大博奕打たんと試みたれども、それが何とやらして、何とかして薩長氏は同盟を堅くし大隈伯は廟堂より投げ出されたれども明治大帝の親裁にて十年の後議會を開くべき旨を詔らせたまひたれば、此上下動は危險の狀態に陷らざるを得たり。但し其後とても政府と人民との間に

は猶ほ渦溝あり。「壓制政府顚覆すべし」などゝ騷ぎ立てたるものもあり。政府も亦こはい顏をして人民を畏(おど)したることあれども聖詔儼として人心に存すれば其騷ぎも大きくならず、以て議會の開設を見たり。右の類はれ上る。此頃流行のおたふく風の類ならん。濕布を作りて頭に卷く囘教人の出來損ひの如し。

來るべき政黨の上下動を警誠せよ。

中央公論記者足下。昨夜の夜半より起稿し、此處まで來れば足下と約束したる紙幅の中僕の領分は既に大に縮まりたり。此處らにて茶でも呑み、迹は御免を蒙りたけれども、それにては日本政黨發達史の中にも及ばざれば後文は全速力を以て十年を一日の如く、說き去るべし。議會開會より唯今まで三十年に近し、其間に於て見遁すべから一事は黃金の勢力の增進なり。唯今の政黨は必ず金主を有す。政黨中の幅利(はゞきゝ)は悉く大なる金穴、若しくは少さき金穴なり。內相大浦子は選擧に賄賂を用ふることを嚴禁せんと欲し、淸廉の評判高き學堂居士は到る所に名高き禽獸演說を試み投票を金に換ふることの禽獸の行爲に均しきを論難したり。さりながら演說は演說なり。命令は命令なり。其實賄賂と相關せず、政界は依然として金の世の中なり。高材逸足の士と雖も金なければ則ち草菅と共に枯死せざるを得ず。先年伊藤公の政友會を組織したりし時、自負心强き公は乃公起たば天下の金穴も亦來りて其陣に加はるならんと思ひたり。されど事は全く公の豫期に反し天下の金穴大抵政黨を侮りて歸款するもの少かりき。是既に日本の政界に富豪が一敵國たらんとする意氣を示したるものなり。しかりしより後、政治家の社會的位置は頗る輕く、政黨も富豪の庇護に依りて運動費を才覺す。唯今にては政黨と富豪との關係は猶ほ頗る曖昧なるものなれども此勢にて自然の儘に進みたらば政黨は富豪の傭兵となるに終るべし。さて其後は如何。我等は此時こそ再び劇烈なる政黨の上下動が起るべき機會なりと信ず。西南の騷動は中等階級を呼醒し、其結果は天鑑に應じて議會を賜はれり。進んで已ざる日本國民の自覺は平民の社會を統一し、之を組織して有力な

る階級とし、此に再び政黨生活の上下動を見るべき歟。さる場合に急劇の變化を避け成るべく怪俄人を少くなるは今は世に隱れて現はれざる未來の政治家の重任なり。昨日より疎懶の結果、無理な執筆を受合ひ風邪の爲に大に迷惑したれども是にて我言はんとする大略を盡すを得たり。左樣に苦しまずとも善ささうなれども約束は果さゞるを得ず。時に午前十一時四十分。陰雨蕭々秋に似たり。椽もやゝ暗く惡寒を感ず。則ち再び蓐中に轉げ込む。（六月六日）

平塚らいてう氏に與へて氏の婦人觀を論ず

田中王堂

平塚さん。

あなたは、既に御承知のことと思ひますが、中央公論社では、此度大正新機運號といふ標題で、臨時增刊を企てました。其の志趣は、文壇の諸家に乞ふて、評論、小說、劇等の形に依つて、明治の末年より大正の初年にかけて起つた、又は、起らうとして居る社會生活の趨勢の敍述、解釋乃至、批判を網羅しようとするにあるのださうです。そして私はつい、婦人問題を引き受けることになりましたのです。

然し、私が改めてこゝに告白するまでもなく、私は是れまで婦人問題に就て論文らしい論文は一つも公にして居らないのでもお解かりになりましようが、私は是まで婦人問題といふものに就て、特別の考察を費したことの無いものであります。隨つて、嚴密に自分を吟味すると、私は、今でも、どんなに狹い範圍に限つてでも、婦人問題を評論する資格を十分に有つて居らぬやうな氣がします。しかし之れはたゞ、偶然の成り行きで、さうなつて居るのであつて、何も

大した理由が私にあるのではありません。否、若しも條理から云つたならば、私の職分と抱負からしても、當然、婦人問題に對しては平生も尠し、注意を拂つて居らなければならない筈なのであります。何故ならば、私共のやうに、自由思想に憑つて、世間の政治家や、教育家が企てゝ居り、爲して居るよりも、一層深く、強く、社會生活の改價と改造とを圖らうとして居る者が、どうして、婦人問題を多くの問題の中の最も重要なるものの一つとして、それに對して、相當な考慮を費すことを等閑に附することが出來ませうか。

して見ると、私が是れまで、尠なくとも、正面より婦人問題を考察せず、隨つて、其れを論議しなかつたのは、つまり、私に取つて他に其れよりも更に先決せねばならぬ問題があると考へた結果に他ならぬのであります。畢竟するに、たゞ婦人問題までは手廻り兼ねた爲めといふに過ぎないのであります。されば、是れまでの私の行動は、決して私が婦人問題に對して興味を有たなかつたからだとか、意義を認めなかつたからだとか云ふことの證據には少しもなりませんのです。さうされては、尠なからず迷惑を感ずるわけです。

然し、其れは兎に角、事實、かういふわけで、或る問題に就ては、相應の自信を有つて居る私も、婦人問題、特に狹義、嚴義の婦人問題に就ては、珍くも自信を有つて居りません。されば、中央公論社より依頼のあつた時に、この役目は當然お斷りすべきであつたと思ひます。そして、現にお斷りしたのでした。すると、瀧田君の私に對つてのお言葉として『それならば、平塚らいてうさんの婦人觀に就てなりと意見を發表して頂きたい。其れならば、嘗て、一通りは、お調べになつたことがおありであると聞いて居りますから』と云はれるのでした。實を申し上げると、私はあなたのお書きになつた『圓窓より』及び『現代と婦人の生活』中に收められた論文の多數は、前に讀んで居ります。隨つて、自然、其等に對して或る種の評價は作つて居ります。然し、全體に對して、今、新たに、適切にし

て、統一ある意見を發表すると云ふことになると、なほ一應精讀した上に、一層の考察を費す必要があります。かうなると、是れだけの仕事でも、容易に引き受けられない氣も致します。が、一度は讀んだことのあるものではあるし、其の上、なほも一度讀み直すにしても、大部の書物といふのではありませんから、一旦著手したら、何んとか纏りは付くであらうと極めて簡單に高を括つて、つい引き受けて了いました。其れが五六日前のことであります。

斯くして、私はまた初めから『圓窓より』と『現代と婦人の生活』とを讀み返しました。尤も、文章其れ自身に大した價値はないと思はるゝものや、又直接にこの當面の試みに關係の薄いものはわざと讀みませんでした。そして、其等は兩書を通じて六七篇はありましたらう。兎に角、私からしてあなたの婦人觀を理會するに肝要なと思はれるものは、悉とく再讀したわけです。この工夫の結果として、是等の文章を貫串して居る中心思想、若しくは中心情操とも見らるべきものは可なりの徹底さを以て捉へ得ました。然し、是等の文章は單純な題目を有ち、純一な目的に依つて支配されて居るに拘はらず、仔細に點檢することになると、是等の論文の中には（其等が異なつた機會に於て、異なつた興味を以て書かれてあるといふ簡單な事實からして）各、異なる發想の樣式を有つのみならず、又異なる思想の内容を有つて居るものもあります。されば、この短き時日の間にあつて、是等の總ての文章に含まれた一切の志向と一切の見地とを檢索し、網羅して、其等に適當な總合と、評價とを與へると云ふことは決してさう容易な業ではありません。隨つて、實際に私が擧げ得た結果は、あなた、並びに、第三者たる讀者に取つて、或は極めて不滿足のものになりはすまいかといふ掛念は、多少持たぬことはありません。

是等の論文に對する私の態度は、何處までも鑑賞の其れでありました。私は、是れまで、可なりに多く、他人の主張や事業に關して論議を試みて來ました。そして、評論家としての私に、どれだけの缺陷が他にあ

るにしても、無意味な稱讃と沒分曉な非難とだけは絕對に爲したことのないといふことは成績が儼乎として證明して居ると信じます。が、是等の論文に依つて、あなたが宣言して居らるゝ主張や事業に對しては、特に、同情あり、理會ある鑑賞の態度を取りたいと苦心して居ります。と申すのは、他の理由からではありません。私から見ますると、あなたの意見にも、誤謬も矛盾も不徹底も含まれて居ります。然し、わが國の現代に於て、あなたの主張せらるゝところのもの、あなたの事業とせらるゝところのものは、極めて重大な意義と、極めて高貴な價値とを持つて居るものであります。されば、常に光明と幸福との味方となつて、暗黑と罪惡とを敵とし、永遠の戰鬪を續けて居る私共は、實力の多少は論ぜず、あなたのやうな主張や事業には出來るだけの同情と寛容とを以て面し、其等の發展と生長とに努力することは、私共少數者に供託された神聖なる義務の一つと考へるからであります。

今より二年前、明治の時代は已に盡きて、私共が方に大正の時代に入つた當時、世間では頻りに、大正維新とか、第二の維新とかいふ警語が流行し出しました。無論、他の多くの場合に於けるやうに、此の場合に於ても、相應な理會と、感情とを以つて、此の警語を使つて居つたのは極めて少數の者に限られたことでありませう。然し、如何に少數の者にしても、彼等は如何なる動機に依つて、こんな警語を造つたり、用ゐたりしたのでありませうか。私は、彼等がこの警語に託さうとしたものは、一半失望であり、一半發憤であつたと信じます。苟しくも、物事を正當に觀察し、公平に評價することの出來る人々であつたならば、誰れにしても、明治の時代を、全體として非常な成功とは觀ないでありませう。其れは確に光榮の時代でありましたが、然し、以上に失敗の時代でありました。其の意氣込みの盛であつたに似合はず、其の出來榮は甚だ粗笨でありました。多少思慮ある人達が、假に明治の時代が去つて、大正の時代が來たつた時に、漠然ながら、前時代の總勘定を始め出し、こゝに端なく失望の

脊を起したと云ふとは極めて自然であります。然し、彼等の失望は彼等の行動に對して生じたのであつて、決して、彼等の有つて居る力に對して生じたのではありません。彼等は皆過つたことを覺りました。然し、其の過ちはまた考へやうにより、仕やうに依つては、確に改めることの出來るものであることを知つて居ります。彼等は、失望すると同時に、發憤したのであります。斯くして、大正維新とか、第二の維新とか云ふ警語は生じ來たつたのであります。

何時でも、修業の時代は、師匠の時代に先だたねばなりません。そして、修業はひとり幾度か過失を重ね、幾度か改悛を重ねることに依つてのみ得らるゝものであります。失敗をしたといふ知識は、其の失敗に依つて賢くなつた後に初めて得らるゝ自覺であります。後の自覺は、前の失敗が無ければ到底起ることの機會を有たないこととも隨分あります。それ故に、私は成る丈け、明治と大正とを同じ精神、同じ事業に動いて居る一つの繼續した時代と見るのであります、見たいのであります。さうすることに依つて、最も大なる意義と、價値とは、吾々の生活の中に見出されると考へるものであります。或る賢き學者が西洋に於ける現代を文藝復興の繼續であると見たやうに、私は吾が國に於ける現今を明治維新の繼續であると見たいのであります。一口に云へば、あの五個條の誓文の志向を實現しつゝあるものと見たいのであります。

それならば、明治の時代の事業の特徴は何であつて、その過失は如何なる性質のものであつたか。大正の時代の傾向の特徴は如何なるものとすべきであり、其修整の性質は如何なるものとすべきであるか。私は他の場合にも力説した通り、明治時代の文明の特徴はたゞ斷片的に西洋文明を使用したところにあるのでありますし、大正の時代の文明の特徴は西洋文明を全體として運用して行くところになければならぬと信じて居ります。物事を部分的に使用することを私は物質的と呼びます。又、其等を全體的に運用することを私は精神的と呼びます。部分的に使用して居る間はそれの

効能は解かりますが、其の意味の解かつて來るのは、運用してから後のことであります。されば、生活の覺悟としては、無論、物質的であるよりも、精神的である方が優れて居りますが、是等の二つの間には、世人が輕々しく想像して居るやうな相違はないのであります。畢竟するに、是等の二つの間の相違は、態度より來たるものではなくして、寧ろ、程度より來たるものであります。そして、こゝでは、個々の場合を一々說明して居るわけには行きませんが、從來とて文明の性質によつては、必然に物質的に始まりながら、精神的に進んで行つた例はまゝあります。明治に依つて始められた文明も、それが精神的となる前に、功利として、先づ物質的であることが必要とされたのであります。かういふ理由で、今、大正に生活する私共が、明治の文明に對して、どの位、不滿であつても、それを批判するのは賢い事ではあるが、それを批難するのは眞に愚な業であります。私共の任務はたゞ、忠實に明治の文明の由來と構造とを吟味して、親切に大正の文明の精神と方向とを決定することの外にはありません。

あなたの婦人解放主義は、確に明治の終り、大正の初めに生活する私共の要求を中核として居るやうに思はれます。あなたは、「我が國に於ける婦人問題の世界的地位」といふ論文の中で「『日本の今日の狀態も知らないで』とか「日本の今日の社會制度を無視してゐる」とかいふやうな非難がよく、私共の上に加へられるけれど、私共は寧ろ、却て今日の日本の社會や家庭によつて、その社會制度や家族制度によつて、覺醒の緒を得た場合が多いやうに思はれる。』と云はれて居ります。是れは、前後の關係よりして、私がこゝで執つて居るとは、少し違つた觀察から云はれて居るのではありますが、然し、あなたの主張が、特に、その主張を實現する方法が、現存の狀態、傾向に根ざして居るといふことは何人と雖も容易に看取し得る事實であります。あなたが是等の二卷に亘つて、根氣よく、手を更へ、品を替へて、宣言と、說明と、爭議とに努めて居らるゝ通り、婦人解放のために、何物にも先立つて肝

要なものは彼れの內部生活の覺醒であるとするあなたの御意見は端的にこの問題の眞髓を捉へたものであります。是れさへ成し遂げらるれば、他の物は大して勞せずして成し遂げられる。又、是れが得られない位ならば、他の物は、當然、得られないし、また萬一得られるにしても、毫しも貴いものにはならぬといふお考へである。そして、あなたのこのお考へに對しては、私は滿腔の同意を表したいと思ひます。そして、何人と雖も、わが國が現に置かれた狀態と、將に執つて行かねばならぬ方向とを理會し得る聰明を具へた者は何人と雖も、私と同じやうに滿腔の同意を表するであらうと私は信じます。是の一事だけを取つても、其れだけで、婦人問題の解決者としてあなたの天分と位地とを定める十分な材料とすることが出來ます。

　實に、明治の時代を通して化釀せられ、大正の時代に入つてからも啻に、そのまゝ、繼承せられて居るのみならず、動もすれば、增大されようとして居る、あらゆる罪惡、あらゆる過失は、（私が他の場所で、度々繰り返して敍說し、證明して來た通り）わが同胞が、近世文明の機構を採取しながら、其れを運用するに必要なる理會を有たないといふ一つの源泉から生じて居るのであります。さうであるから、私共が現に陷つて居る此の悲しむべく、憐むべき、狀態を改善する方法としては、たゞ、あらゆるものを在るまゝ活らくまゝに取つて、全體として近世文明の意義と價値とを理會するだけの聰明と情操とを啓發し、涵養することより他には無いと私は信じて居ります。あなたにしても、試みに、敎育に於て、政治に於て、學問に於て、はた國際關係に於て、日夜に發生して居る弊害の性質と由來とを吟味して御覽さいまし。是等の孰れの一つとして、わが同胞が現代文明の性質を理會することの出來ないため、それを使用しようとして、反つて、それの機構の爲めに壓抑されて居る結果でないものはないことがお解かりになりませう。獨逸に於ける婦人問題と、英米に於ける婦人問題とに對するあなたの觀察と鑑識とは淺薄であり不徹底たることを免れませんが、わが

國の婦人問題として、彼等の職業や婦人の參政權よりも、先づ彼等の内部生活の解放が急務であるとあなたが想取された一事は、確にあなたの驚くべき見識を宣明する有力なる證左となると思ひます。そして、あなたは、この根本思想より、婦人問題を構成し、解決しようと努めて居られるのです。されば、あなたが、この地盤に立脚し、この視角に着眼して、觀察を爲し、議論を進めて行かれる時に、自然に發露し來たるあなたの玲瓏なる睿知と、あなたの尊貴なる感情とには、確に人をして驚歎せしむるものがあります。私は、嘗て、何かの折りに、森鷗外氏が、あなたの評論家としての資格に論及して、現今、男子の評論家にして、あなたに匹敵し得るものは一人もないと云ふやうに云ひ放たれたのを讀んだことがあります。そして、其の時は、鷗外氏も時としては隨分無責任なことを云はれるものだと思ひました。然しあなたが、婦人の内部生活の覺醒といふことを興味の焦點として物せられた婦人論、例へば、「讀んだマグダ」「ノラさんに」「ヘッダに就て」「女としての樋口一葉」「ヰヾイと其の母の生活」等の四五篇だけに就ては、私も、尠しも躊躇するところなく、同氏の宣告に裏書きし得ることを欣ぶものであります。尤も、直率に、私の感想を申し上げると、是等の外の諸篇の中には、稚氣に滿ちたもの、觀察の粗笨なもの、論理の徹底しないもの、知識の缺乏の甚しきもの等、人をしてまるで別人の手に出たものではないかと疑はしめるほど不出來のものも大分に見えるやうですが。

私は、現今、吾が國に於ける婦人問題の解決の第一歩として、先づ婦人の内部生活の覺醒に着手しなければならぬといふ御意見に同意しました。然し、私は、あなたの提唱に同意したのであつて、あなたの推理に同意したのではありません。あなたの著想に同意したのであつて、あなたの歸結に同意したのではありません。尠しく、私の不滿の點、反對しなくてはならぬ點を申し上げて見ましよう。

或る時代と、其れが産出する歴史とは必然に同一特

徴を有つて居ると說いたのはヘエゲルでありました。是れはさうあるべき理屈であつて、又、大體に於て、事實もさうなつて居ります。この見地からして、何故に近世に到つて、修養の最後の樣式として科學が勃興して來たか、そして、特に、何故に、科學の中でも、過去二世紀に亘つて、進化論的、心理學的の特徵を有つた學說が段々に勢力を得て居るかといふ理由を考へて見ることは、理論上、極めて興味あることであり、實行の上、極めて大切なことであると思ひます。この事實は、今日、苟も私共にして、意義あり、力ある生活をしようとするならば、發展的に有機體と周圍との關係を觀、作用的に個人と境遇との交渉を觀ることを怠つてはならぬといふことを暗示して居ると思ひますこの準備なく、この覺悟なくして、現代を理解しようとし若しくは、現代を鑑賞しようとするならば、其んな企ては、悉とく、失敗に終はるに極まつて居ることは明かであります。して見ると、たとひ、あなたが現に考察して居らるゝ題目は、主として婦人の覺醒、婦人の解放といふやうな範圍に限られて居るにしても、現代の批評家としてのあなたには、何物を以てしても到底代償することの出來ない缺陷があるやうに思はれます。あなたは、現代文明、現代生活を理會するに必要なる知識を缺いて居られます。尙ほ一層悲むべきことには、是等を鑑賞するに必要なる氣分を欠いて居られます。あなたの思想や見解の中で私が誤謬とか、矛盾とか、誇張とか、不徹底とか見なければならぬものは、咸な、この二重の缺陷から來つて居るのであります。

若し、人あつて古代人の修養又は覺悟と、近世人の修養又は覺悟との相違の點は那邊に存するかと私に問ふものがあるならば、私は言下に答へて、其れは、(大ざつぱの學語で)生活を品性と境遇との二要素の確執と協同とから成り立つものとすると、古代人は專ら品性の陶冶にのみ依つて幸福を實現しようとして居つたに反して、現代人は品性の陶冶と倶に、境遇の整頓に依つて其れを實現しようとして居るところにある

と云はうと思ひます。そして、是れは特に近世人の發見であつて、近世人が古代人に優越する特徴の第一に數へられねばならぬものであります。何故ならば、是れは、直ちに、人間が自然に對し、個人が社會に對して、おのれの尊貴と力量とを自覺して來た事實を語るものであるからであります。

あなたの物された、これ等の論文を讀んで、私が一番物足らなく感じますことは、あなたが、或る問題を取扱はるゝ時に、與材としては、境遇の要素が無視され、考察の方法としては、進化論の見地が閑却されて居ることであります。この當然の成り行きとして、あなたの議論は隨分精鋭な觀察と、巧緻な省察とに富んで居るに拘はらず、なほ、全體の調子、歸結は、極めて固定的に、超越的に、そして、獨斷的になつて居ります。是れが、現代人たるあなたが、現代に生活する方針を改善し、若しくは、創設するために、事件、又は人物を評論する態度としては、私に取つて、甚だ不滿に感じられる點であります。總べてのものの意義でも、志向でも、價値でも、其等を發展的に、作用的に觀ることに依つてのみ始めて相對的であつて、同時に絶對的な(其れであるから、最も優秀な)批判の標準が得られるものと私は信じて居ります。今、あなたの思索方法には、境遇の要素と、進化論の見地とが全然缺けて居るのでありますから、私から見ますと、正當な批判の標準が缺けて居るといふことになります。

私は、先きに、わが國に於ける、婦人問題の解決法としては、婦人の內部生活の覺醒、又は解放を第一著にしなければならぬといふあなたの意見を非常に卓越したものとして推稱しました。然し、私は、眞の內部生活の覺醒、又は解放は、たゞ、何人をしても、彼れの生活を形作る品性と境遇との交渉の事相と、其の交渉の推移の次第とを會得せしむることに依つてのみ始めて得らるゝことゝ信じます。この點から見ると、私はあなたの新らしき生活を欲求せらるゝことの旺んな事實は十分に認めますが、其の欲求を實現する方法に到つては、甚だしく新らしさを缺いて居ると考へます。

あなたは、しば〳〵、好んで新らしいといふことと舊いといふこととを對立させて居ります。然しながら、私から見ますと、未だ、あなたは、生活の事實に照らして、眞に、新らしいといふことゝ舊いといふことゝとの意味を、哲學的に、即ち、徹底的に考へられたことはないやうです。之れが證據は、遠く索むるに及ばす、あなたが「圓窓より」の序文としてお書きになつた、極めて短き小品の中にも、既に現はれて居ります。あの中で、あなたは、かう云はれて居ります。

「私は一切の舊きものの敵である。
けれどそれは必ずしも不善なるが故ではない。
舊きものには生命がないからだ」。

こゝには、あなたは、多分、社會に存在する制度とか、習慣とか、思想とか云ふものを指して「舊きもの」と呼ばれて居らるゝのであらうと私は推察します。隨つて、善と不善との中間には、別に、善でもなく、不善でもないといふやうな中性のものは一つもないわけであります。されば、あなたが「必ずしも不善なるが故ではない」といはれる言葉を飜して、「善であるものもあるが」とか「善の側面もあるが」とか云ひ換へても、大した無理はしないと思ひます。さうすると、なぜ、あなたは善であるものを捨てようとするのです。なぜ、捨てる必要があるのです。是れに對するあなたのお答へは、「舊きものには生命がないからだ」。であります。こゝに、あなたにして、單に文字を弄んで居られるではなくして、事實を語らうとして居られるのならば、こゝに、確にあなたの見解の不徹底より來たつた誤謬があります。何物に限らず、善であるといふことと、生命があるといふこととは一つの事柄であります。たゞ、一つの事柄を別の言葉で云ひ表はしただけのことであります。されば、善であるといふことも、生命があるといふことも、其れが尙ほ生活の要素となつて、それに利用されて居るとか、或は其れを支持して居るとか云ふことから來たつて居るのであります。されば、不善となつたといふことも、生命を失つたと云ふことも、生活にとつて不要になつた、隨つて、障害となつ

たといふことに他なりません。さうすると、善なるものは、皆、生命があり、生命のないものは、皆不善でなければならぬ。然るに、あなたは、必ずしも不善ではないが、生命がなくなつたからであるといふやうな、極めて曖昧なことを考へて居られます。これを見ると、カアライルが、嘗て舊教が新時代に入つて、不要となり、害惡となつたのを論じて、『それは嘗て善かつた。然し、今は惡しくなつた』と端的に云つて居るのを見ると、舊新善惡の關係に就て彼れは、あなたより、遙に徹底した理會を有つて居つたと云はねばなりません。

又、私は、同じ序文の中に、

『私は一切の新しきものの味方である。

否、新しきものそれ自身でありたい』。

といふ言葉を見出しますし、又、新しい女と題する小品の中にも

『自分は新しい女である。

少くとも眞に新しい女でありたいと日々に願ひ、日々に努めてゐる』。

といふ言句を見出します。誰にしても、人間の生活の要件を知悉して居るものは、是れを結構な覺悟と觀なければならぬのみならず、又、必要な覺悟と觀なければなりますまい。然し、それは是等の言句を語る人に、人間の性情に關して徹底した知識があるといふことを假定しての後のことであります。何人にとつても、新らしくあり、日に新らしくあることの必要のあるのは、さうしなければ、生活は破壞される虞れがあるからであります。卽ち、不善を生ずる虞れがあるからであります。この萬人の生活が服從すべき善惡の標準を離れては、どんなに進まうとも、退かうとも、そこに、何等の意味もないのであります。そして、あなたの尊重なさる『生命』なるものもこんな處には存じないのであります。進化といふ事實は確にあります。然し、それの重大なる意義は俗人の考へるやうに、決して生物の變遷といふことではなくして、それが自己の破滅を保證する爲めに、自己の安全と幸福とを標準として、境遇に適應する、若しくは、其れを醇化することでありま

す。其の結果は、生活の方法の變更といふことになつて、是れを分析すれば、有機體の改造と、同時に周圍の改造となります。然し、それ等は適應、若しくは醇化の行はれた後の結果に過ぎないのであります。眞に、偉大なる、そして、充實した生活を希ひ、且つ生きた人々は、決して新らしくなるとか、進むとか云ふことの如きは、一向に懸念しなかつたやうです。彼等の覺悟は、何時でも、當の瞬間に方つて、たゞ全力を傾けて生きると云ふことだけであつたやうです。

生活の改善の爲めに、境遇の整頓よりも、品性の陶冶を重しとし、品性の陶冶を力說しようとして、反つて、境遇の整頓を沒却しようとするあなたにあつては、極めて自然のことではあるが、現今、吾が國に於ける、婦人解放主義者の急先鋒たるあなたが、やゝもすれば、知識を輕蔑するの傾向があるのはどう云ふものでありましようか。あなたは、現に、わが同胞があらゆる種類の桎梏に苦みながら、其れを破却するの力と、明とを兩つながら缺いて居るのは、全く、彼等が無智の結果に他ならぬことは夙に御承知の筈です。男子が婦人を抑壓することを續け、婦人が男子の抑壓に安んずることを續けて居るのは、全く、等しく、彼等の無智から來たつて居るのではありませんか。彼等の現在の要求に對照して、舊き因襲の意義と、新らしき方針の意義とを商較することの出來ない無智より來たつて居るのではありませんか。

『元始女性は太陽であつた』といふ一篇に於て、あなたは、

『抑も智識を求めるのは無智、無明の闇を脫して自己を解放せむが爲に外ならぬ。然るにアミイバのやうに貪り取つた智識も一度眼を拭つて見れば殼ばかりなのに驚くではないか。そして又我々は其殼から脫する爲め多くの苦鬪を餘儀なくせねばならないではないか。一切の思想は我々の眞の智慧を晦まし、自然から遠ざける。智識を弄んで生きる徒は學者かも知れないが到底智者ではない。否、却て眼前の事物其儘の眞を見ることの最も困難な盲に近い徒である』。

と云はれて居る。然し知識と智慧とは、あなたのこゝで考へて居らるゝやうに、さう違つた性質のものではありません。知識は人間の生活にあつては當然智慧になるべきものであり、又、なつて居ります。知識とは智慧の發端に與へられた名に過ぎないのであるし、智慧とは知識の結末に與へられた名に過ぎないのであります。私共は、理解が形式的にある間は之れを知識と呼び、それが實際的に進むに及んで之れを智慧と呼ぶのであります。成る程、世の中には、頻りに知識を蒐めながら、其れを智慧にまで進めて行かないものは澤山あります。又、知識を誤り用ふるがために、其れをして智慧の敵たらしめて居るものも澤山あります。然しながら、智慧を中止したり、誤用したりして、それをして、其れの本來の目的に反せしむるものは、弱き人間の罪であつて、決して知識其のものの罪ではありません。あなたは、知識を疎外して、而して、眞の智慧をどこに索められるのであるか。時としては、知識の智慧でない場合はあります。然し、あらゆる場合に於て、知識を離れて智慧の來たる源泉は決してないのであります。あなたは『そして又我々は其殼から脫する爲め多くの苦鬪を餘儀なくせねばならないではないか』と云はれました。なる程、之れは確に事實であります。然しながら、人間の所思にして、所爲にして、一つとして、其の殼を殘さないものがありますか。そして、おのれの作つた殼を破るの力を最も多く强く有つて居るものは知識であります。

私は、甞てルウズベルトの道德觀を論じて、彼れが、力と德義を併有するだけを以て、共和國民の完全なる資格とするのを非難して、眞に、是等をして、完全なる資格たらしめるには、も一つのものが必要である。そして、其れは知識である。今日の米國に於て、犯される過失、又は、罪惡の大部は、確に、知識の缺乏、新時代の組織と要求とを理解するに必要なる知識の缺乏より來たつて居るのであると論じたのでありました。わが國に於ては、知識の缺亡から、新時代の組織と要求とを理解するに必要なる知識の缺亡より何の位損失を

彼つて居ることの多き、到底、米國あたりの比でないことは聰明なるあなたの夙に知られない筈はないと思ひます。私はわが同胞が、文明の機構を悉く採取しながら、自由に任意に其れを運用することの出來ないのは、全く、彼等がそれをするに必要なる知識を所有せぬ爲めだと斷言し、證明出來ます。されば、私は吾が國の婦人の第一人者たるあなたは、彼等に對する重大なる責任の觀念よりしても、も尠し、知識を尊重しなければならぬと思ひます。知識を尊重する態度を示さなければならぬと思ひます。私は、あなたに盲目なる知識の崇拜者たることを希望しません。然し、吾が國現下の要求を根柢として、知識の正當なる評價者たることを要求します。

私は、こゝまで知識に就て語つて來ましたから、行き懸り上、あなたの謂ふ所の知識と、謂ふ所の情意との關係に就て尠しく、あなたの考慮を煩したいと存じます。あなたの『田中王堂氏の哲人主義』と題する論文の中で、あなたは次のやうに語つて居られます。

『知的計算に生きる當然の結果として、其觀察は歷史的、社會的であり、從つて功利主義者である氏にとつては所詮情的評價――我等が情意の力によつてのみ到達し得る絕對界は、絕對界に行はれる情意の眞理、即一段論法によつて運用せられたる知慧は氏にとつては單に非論理的な、獨斷、迷信とより外、理解することも出來なければ、鑑賞することは尙更出來ないのはあやしむに足らぬ』。

『大宗敎家、大藝術家、其他偉人と呼ばれたる人には知的計算の方面の卓越ももとよりだが、殊にあらゆる事物を絕對として見るの能力――情意の力に於て一層優れたものがなくてはならぬ』。

是れは、あなたが、私の哲人主義で私が取つて居る態度と、あなたが解釋されたものに對して向けられた批評であります。然し、知識と情意との關係に就て、あなたのこゝで云はれて居ることは、事實に照して根本的に間違つて居ります。事實を云ふと、知識と情意とは單一なる欲求の發動するに方つて暫らく執る二つの

様式に過ぎないのであります。最初あるところのものは、たゞ衝動、又は、欲求のみであります。然し、生活は品性と境遇との二要素より成り立つて居るから、品性は境遇より來たる刺激に酬酢して、其れを支配しなければなりませぬ。こゝに於て、生活の方針なるものが生じて來ます。行爲は單一ではあるが、同時に客觀の條件に適ひ、主觀の滿足に値するものでなくてはならない。吾々は客觀の條件を司る側面を知識と呼び主觀の評價を司る側面を情意と呼んで居ります。されば、最も小さき觀念より、最も大なる概念、信念に到るまで心像は、悉とく知識たると、情意たるとの二側面を備へて居ります。あなたの考へて居らるゝやうに、知識と情意は別のものでもなければ、反對するものでもありません。然し、文明、個性、又は、經驗の種類に依つて、情意の側面の比較的に主として現はれることもあるし、又、知識の側面の比較的に主として活らく場合もあります。又、あなたは、同じ論文の中で、私の態度に就て、こうも云はれて居ります。

「氏の世界は何程擴大せられやうとも關係によつて成立する世界である。物自身に就ては何事も知られてない。

氏は如何なる場合にも一事一物を絶對として見ることの出來ぬ人である。

氏は詩人としての素質を全然所有しない。

だから其言ふところは總て相對的である。條件的である。部分的である。一時的である。現代を離れて無意味なものである。」

固より、私は、物自身に就ては何事も知つて居りませんから、随つて、知らせやうもありません。然し、知りたくもないし、又知らせたくもないことも事實です。そして、多分、あなたの憧憬なさる大宗敎家、大詩人と雖も、知らなかつたし、又、彼等の敎訓、言説の意義と志向とを眞に會得出來るならば、彼等の一人として知らせようとして努めては居らなかつたことが解かりましよう。私が眞に知り、且つ知らせたいと思つて居る知識は、どこ〳〵までも、相對的であり、部分

的であり、而して、現代を離れて無意味となるかも知れないし、なつても差支へないものであるのみならずさうなる方が、却つて善いやうなものであります。私は、いつの時代に於てゞもさうであるが、殊に、現代のわが國に於ては、各人をして正當な、さうして、有力な行爲を爲さしめるものは、獨り斯かる知識に限られることゝ考へて居るものであります。かういふわけで私は、斯かる知識を吾が同胞に宣傳することを自分の天職とし、誇として居ります。

一體あなたが、私の態度の相對的であり、條件的であり、部分的であるのを非難されるのは、あなたが現に吾が國が如何なる要求を有ち、如何なる思索が其の要求を滿たし得るかを知らない結果であると思ひます。

政治の方面に於て、產業の方面に於て、はた敎育の方面に於て、日夜に過失と罪惡とは犯されて居ると思ひます。そして、其の源に遡れば、決してあなたが云はれる通り、情意の缺亡からでも無ければ絕對觀念の缺亡からでもなく、全く、文明の機構の關係と作用とを理會するに必要なる知識の缺亡より來たつて居るのが多いと私は確く信じて居ります。

誰れにしても相手を選ばず、逢ふ人每におのれの職業を語るは惡趣味に相違ありません。私が知識の性質に就て、知識と情意との關係に就てこれまでに述べたのは決して、おのれの職業だから述べたのでありません。他に當面の問題に卽して重大なる理由があるからであります。

私は、あなたが興味を有つて居られる問題に直接與つては居りません。あなたも、亦、私が興味を有つて居る事業に直接與つては居られません。然しながら尠なくもこゝに一事の何人と雖も疑ふことの出來ぬものが儼存します。其れは、あなたも、私も同じ文明の中に、同じ邦土の上に生活して等しく個人の解放を目的として居るといふことであります。わたくしの事業にしても、あなたの事業にしても、是等のものの誤解からして、當然受ける損失と障礙とは實に甚大であると

信ずるからであります。

私は、あなたと同樣に、現下に於て、婦人を解放する唯一の手段は、彼等の心靈を開發するにあると思ひます。然し、彼等の心靈を開發するといふことは、私にあつては、彼等に知識を與へて、彼等の現に置かれたる位地に於て、自然と、社會とより來たる刺激を自由に、支配して、强烈に彼等の欲求を滿足せしむることの他には無いのであります。やゝもすれば、知識を排斥しないまでも輕視して、其の他の方便に依つて彼等を解放しようとするあなたは、如何なる手段に依つて、其の目的を達しようとせらるゝのでありますか。

あなたの解放の意義は、次の言葉に依つて、最も明白に概括されて居ると思ひます。

『一言にして云へば男子と共に「人」であるといふ內的覺醒に基く種々なる要求である。自己の內生活の貧弱と空虛を痛切に感じ、女子も亦人たる以上は豐富な充實した、高き自己の生活を有たねばならぬ。それにはこれ迄女子の自由發展を抑壓してゐた習慣因襲から脫して、まづ內部心靈を解放し、その自然性を發揮せねばならぬといふのである。斯くして我々は飢へ渴く如く知識を求むると共に又その感情生活に於ては戀愛の自由をも主張せむとするものである。自分は眞の人たらむとする如上の要求は何も女子に限られたことではなく、男子に於ても同樣であらねばならぬと思ふ。只久しく忘れられてゐた女子に向つて特に事新しく想ひ起された迄のものと見るべきであらう。』

なほ是れに類する言句は、是等二卷を通じて、到るところに見出されるが、兎に角、あなたの婦人解放の意義は、こゝに最も美しく、最も明白に云ひ盡されて居ると思ひます、この高明なる、そして、尊貴なる主張に對しては、現代を解し、其の要求を解する者である以上は襟を正うして、敬意を表さないものは恐らく一人もあるまいと思はれます。この宣言は、何人と雖も、自由を愛し、光明を愛する人に取ては、一點の非難をも挿むことの出來ぬ一個のツルイズムであります。然し、それが、無條件で、萬人に受け取られるの

は、恰も亞米利加の獨立戰爭の第一句たる『吾人は自由の人として生まる』とか、佛蘭西革命の標語たる『自由、平等、博愛』とかと等しく、其れの意義の普遍的であつて、同時に抽象的であるのに依るのであります。爭議や、質疑は、或る場合に於て、其等の意味は如何に解釋せられ其等の精神は如何にして實現せらるべきかといふことから始まるのであります。

時代に依つて、段々變はつて來ては居りますが、概して云ふと、總ての有力なる改革家の宣した信條は、皆、簡單なものでありました。然し、是等の信條が、社會の勢力を得るに隨つて、段々に、制限と、變更とを受けて複雜なものとなりました。如何なる信條も眞空の中に宣せらるゝことは出來ません。そこには、已に歷史もあり、因襲もあり經濟狀態もあります。そこに力を得ようとするならば、どうしても、其等を感化すると同時に、或る程度までは、其等に依つて同化されねばなりません。其の形式から云へば、或は、墮落でありましょう。然し、其の精神から云へば、確に、發展であります。基督教、佛教、社會主義等の傾向が皆此の事實を證據立てて居ります。あなたが、こゝに宣せられて居る、信條は實に立派なものであります。然し、たゞ、是れだけでは、民衆を刺激する材料とはなりますが、彼等を指導する方針とはなりません。其れに至るまでには、斯かる原理は、必然に、樣々な變更や、制限を受けなければなりません。

あなたは如何なる變更と、制限とを施して、此の信條を應用しようとなさいますか。尠しく、其の消息を洩らす言葉が、同じ文章の中に見出されます。

『更に極端に云へばよしそれが萬人の信ずる客觀的眞理であつても自分の要求と背反する場合、自分は自己の生命を以て何等の共鳴をも感ずることは恐らく出來まい。例へばこゝに一個の眞面目な女性研究者があるとする、そして廣くあらゆる方面に亘る事實を觀察して、長い間の科學的研究の結果、遂に女子は人たるべからず、男子に比して肉體的にも精神的にも所詮劣等なるもの、斯くの如き者に自由を與ふるは女子自身

の生存を危くするのみならず、社會のため、人類、種族のため有害である、矢張り女子は種々なる拘束のもとに從屬者として、奴隷として終るべき運命を負つてゐるものだといふやうな結論に萬一到達したと假定しても、我々はそれによつて自分自身の內に發した、要求は容易に否定することも、撤回することも出來なければ、婦人問題がそれによつて否定されるものでも、消滅するものでもない。世の婦人問題を論ずる人達の、ともすれば我々の要求そのものに對する同情と理解のないところから、兩者を混同してゐるのを屢々見受けるが、自分はこの意味で要求に基く婦人問題と、事實にもとづく女性研究とは自から別問題であることを承知しておきたい。』
が其れであります。

　あなたは、又、どこかで、

『烈しく欲求することは事實を產む最も確實な眞原因である。』

と叫んで居られます。一句にして、此の位眞理と、併せて虛僞を含んだ言葉は他に多く見出されますまい。言ひ換へれば、解釋次第にて、同じ程度に、虛僞ともなり、眞理ともなる言葉であります。烈しく欲求することが事實を產む眞の原因であると云ふことは、欲求することに依つて事實を產み出すことの可能な範圍に限りて、其れが原因となるといふことに過ぎません。そして、世の中には天地の理法と、人間の力量とに無限の變化が起らざる限りは、たゞ欲求することに依つては、勝手な事實は產み出され得ないことは事實ではありませんか。こんな宣言は其條件の意味に於て、何人に對つても、最高の理想を有てといふ奬勵と等しく生の改造に間接の、そして極めて限られたる効果しかなきものであります。

　あなたは、同じ意氣で、こゝに要求に基く婦人問題と、事實に基く女性研究とは自づから別問題であると云はれて居るが、是れは大膽と云ふよりは、寧ろ幼稚な意見であるとしか私には思はれません。事實を決定する女性研究は、固より、賢明なる人士に依つて豐富

な材料に基づき、公正なる精神を以て遂行さるべきは無論のことであるが、婦人の性情が、非常な程度に激變せざる限りは、要求に基づく婦人問題は當然事實に基づく女性研究の結果より制限を受くることが窮極最も賢い道なのではありませんか。あなたは、如何なる理由で、婦人問題を女性研究より離せば利益があり又、兩者を合すれば害があると考へられたのであるか。私には、其の理由は尠しも解かりません。

あなたは、又『民衆と政府と新しきもの』と題する論文に於て、世の誤つて識者と呼ばれて居る臆病なる妥協者を嘲つて、

『彼等は事物を根本的に考察しやうとしない。だから彼等は二つのものさへあればいつでも調和が出來ると信じてゐる。それがいかほど根柢に於て相反背するものでもそこまでは氣付かない。』

といはれて居ります。

固より、あなたの冷嘲に値する識者の多いことは事實であります。

然し、世の中には、特に近代に到つては、性來獨立不羈、何物をも恐れず、何人をも憚らないが、彼れの超凡の聰明は能く事物を根本的に察知し得るがために反つて極端を避けて中庸に就くところの人物もまゝ見出されます。例へば、十八世紀に於て全歐洲切つての賢者と呼ばれたチルゴォの如きは是等の一人でありました。この種の人の眼には、或る企てが、急進であるか、漸進であるか、改造であるか、革命であるかは其れ自身では尠しも、其れの價値を定める標準にはなつて居りません。必要に應じて大膽にもなり得、小心にもなり得るこの種の人の考慮の中には、或る場合に在つて、總べてのものに對して商量を盡した上に如何にせば、成りたけ小なる犠牲に依つて、成りたけ大なる成果を得られるであらうかと云ふことの一事だけであります。あなたのお考へに依るとさきの識者の欲するところのものは妥協であります。さきの識者は聰明を缺くが故に微溫に甘んじ、この種の人は聰明衆に拔んず

るが故に大抵の場合に於て、中正を擇びます。然し、私は是等異種の人々はあなたに依つて同一型の俗漢として一概に排斥し去られるかも知れぬと云ふことを恐れて居ります。然し、總べての企てに關して、眞の味方はこの種の人々の中に見出さるゝが如く、婦人問題に關しても永久に眞の味力たるものはこの種の人々の中にありはしますまいか。

何と云つても、是等の兩篇を通じて、其の價値に於て、卓然屹立して居るものは、あなたが、藝術上の及び實際上の女性を論じた諸篇であります。あなたの（婦人問題に關聯してではありますが、）信仰論、哲學論、社會改良論等には正直のところ、餘り感服しない、感服出來ない私も、是等の女性論に對して、心の奥底からの敬意を捧げます。是等の文章に於て、あなたの天才はあなたの他の文章で到底見ることが出來ぬ程の光彩を以て飛動して居ります。畢竟するに、あなたの本領はかう云ふところに在るのではありますまいか、私が是等のノラ論、ヘッダ論、一葉論其の他二三の人物論を讀んだ時には、ちやうど、嘗てヂョルヂ・エリオットの二三の作品を讀んだ時と全く等しき驚歎と尊敬との念に打たれたのでした。

この事は、あなたとしては、たゞ自然の事に過ぎないのでありますが、私は、あなたの信條たる婦人の内部生活の覺醒といふ立場から、觀察し、想像し、論斷して居るのが、極めて痛快に思はれました。是等の名什に含まれた、あなたの御意見の基調には、大體に於て同意出來ると思ひます。尤も、ある特殊の事實に對するあなたの評價に關しては、まゝ失望したり、不滿を感じたりしましたことは事實でありますが。例へばギギイの性格に對するあなたの評價、ノラの性格の變化に對するあなたの希望、牧師に對するあなたの稱讚等に關しては、容易に御意見に贊同出來ませんものが私にはあります。そして、其れは、私の一時の思付きからではなく、深く、私の心に根ざす、私の歴史觀と人生觀とから來たつて居るのであります。然し、今私は是等の興味ある事柄に就て、詳細に、私の意見を述べ

て居る時間を有つて居りません。もつと前に、何處かで一層善く、詳しく述べて見たいと心掛けて居つた一事がありましたが、つい其の機會を失つてしまいました。其れは、あなたの思索の方法に、そして、又、實行の方針に尠なからぬ影響を與へて居ると見える宗教的の更に、嚴密に云へば神秘的の傾向であります。

あなたは、今日でも、あなたの宗教上の訓練から、大層、力と利益を得て居るやうに考へて居られるが、是れは、果して、如何なものでしよう。私から見るとあなたの神秘的傾向はあなたの思索や、事業を助けて居るどころが、反つて、害を爲して居ることが多いやうに思はれます。兎に角、あなたは、あなた自身のために、世間の婦人一般のために、宗教の與へ得るものと、現に社會にはたらいて居る思想、又は、生活の他の部分との關係をもつと、もつと、深刻にお考へになつて見る必要があると思ひます。尠しく、獨斷のやうに聽えるかも知れませんが、私は、ます／＼現實的功利的になつて行く現代生活に在つては、新思想又は新計畫の特徴の一つは必然に其等が、宗教的傳習、宗教的色彩から遠ざかつて居るか、遠ざからうとして居るところにあると信じて居ります。そして、又、さうすることが、新思想、新計畫の使命の一つであると信じて居ります。今、あなたは無論、主觀的にあなた特有の信仰をあなたの思想や事業に關聯させて、信仰の意義を十分に體認して居らるゝのでしよう。然し、それは、あなたに取つて必らずしも永久、停まらなければならぬ最勝の立場ではありません、私には、婦人の解放と云へば、其の思想の中には、當然に必然に、宗教からの解放も含まるべきものと思つて居ります。

あなたの文章の中では、自覺、無自覺、內部要求、外部要求といふ言葉が、よく目に附きます。そして、あなたとしては、是等の對立に何等か重大な意味があるやうに考へて居らるゝのでしよう。然し、このお考への大半は、あなたに特有な宗教的思索と云ふよりは寧ろ情操より來て居るのであつて、他人には別に大し

た意味のないものです。然し是れは、あなたの主觀上の差別であつて、あなたが考へられるほど生活に取つて、大切な標準でないことは、事實が、そして、實行が證明して居ります。是等も私から見れば、あなたの思索の方法の神秘的に傾くところから來たつて居る弊害の一例としか觀られません。實驗に基づく知識で何よりも有効に行はる場合に、あなたは、其れを中途で止めて、直ちに、尠しく突梯に理智情意、第一義に第二義、相對の世界に絕對の世界といふやうな對立的の概念（この場合概念も直觀も同じものです）を持ち出したがります。俗人は、是れを大層、深遠だとか、えらいとか觀て居るかも知れませんが、思索上の經驗のあるものから觀れば、實は一種のトリックに過ぎないのであります。

隨分、全體に亘つて、つまらぬ事を澤山書いてしまいました。書かなくてもよい事を書いて書かなくてはならぬことを大分取り落しました。其の上全體の調子が、初め、私が企てたものと違つたものになつて了ひ

ました。この不出來のために、今、不愉快を感じて居るものは誰れより先づ私です。なほ、他日、機會がありましたら、もつと緩りした準備で、あなたの思想と事業とを、も一度鑑賞さして頂きませう。

大正時代と社會問題の解決

△社會問題と人權の尊重

法學博士 堀江歸一

一

大正改元以來、年を重ぬること既に四、殊に即位の大典も數月の後に擧行されて、人心自ら新たならんとしつゝある今日に於て、時代の新機運を利導して、積年の秕政を一掃し、大正の新時代に適する施政の方針を樹つることは即ち爲政者の責任である。今日我國の政柄を握る大隈內閣が斯る重任に堪ゆるものであるや否やは、姑く未決の問題とし、一方に新時代の要求する施政を數へれば、政治上に經濟上に將た又社會上に擧ぐ可きものは殆ど枚擧に遑なき次第である。吾輩は本論に於て、社會上の立脚地から、當今最も急を要する施政の一端を論述したいと思ふ。

我國が開國以來歐洲の物質的文明を輸入するに勉めた結果、國民の生產力は著しく上進し、其生活も亦豐富に爲つたことは爭ふ可からざる事實であるが、同時に我國民の社會生活は完全の域に赴くを得たかと云ふに、吾輩は不幸にして、此點に就て大なる疑を懷かざるを得ない。社會生活の完全なると否とを判斷するには、色々の標準があるが、吾輩は人生完全なる社會生活の狀態に於ては、人々の權利が安全に保護され、他人の利益を侵さゞる代りに、自分の利益も侵されず、自分の爲さんと欲する事柄にして、他人の利益を傷けざる限り、自分の意思の命ずる所に據つて、自由に之を爲し得ると、又自分の爲すを欲せざる事柄は他人に依て爲すことを强ひられない、而して其間に有形的文明の備へる恩澤を利用して、自他共に滿足なる生活を營むに至ることを以て、最も重要の條件であると信ずるのである。彼の封建時代に於て、武士が農工商民の上位に立つて、故なく彼等を無禮打にしたり、三代相恩の君主の爲めには、馬前に討死をすることを畢生の譽れとしたり、一度び主家の祿を失つた者は忠臣二君に仕へざるの敎訓から、浪人と爲つて、一生を埋木同樣にすると云ふやうな事は何れも奴隷制度の必要とした道德律であつて、人權を蹂躪することの甚だしきものである。封建制度の既に破れた我國に於ては、斯る舊式の道德の行はる可からざるは勿論であるが、因襲の久しき、動もすれば斯る道德律に左右され、社會階級の間に濫に上下の別を立て、强者は階級的勢力を以て、弱者を壓倒しやうとし、弱者亦其壓制に甘んずるのみならず、國家の法制も强者の利益を保護すると

とに傾き、相率ひて社會生活の缺陷を甚だしからしめんとしつゝあるのは、吾輩の遺憾とする所である。

契約の自由は今日の法制に於て、又社會生活に於て、最も尊重せらるゝ所であつて、奴隷制度の行はれた時代に、契約の自由を有しなかつた者も今日は自由民と爲り、自己の意志に據つて、契約を結び、權利義務の關係を他人と結ぶに至つた。英吉利の如き此點に最も重きを置き、人は他人に對して爲す可しと約定したる事を爲し、又爲さゞる可しと約定したる事を爲さゞるの外に、何等の義務を負ふものでない、國家も亦國民に對して、其他人に約定したる事を爲さしめ、又約定しない事を爲さしむるものでない、斯の如くして人の自由は極度まで發揚され、個人の利益する如く、社會も同じく利益するに至ると云ふ信念の下に、法制を定め、此事は實は十九世紀前半から續いで千八百六十年代に至るまで英國民一般の信條と爲つたのであるが、斯る主義は資力知識健康等の相匹敵した國民の間に行はれてこそ、各自の利益を伸暢し得るが、今日の如く知識に優劣の差あり、體力に強弱の別あり、資力に貧富の隔ある場合には、契約の自由が認められても、此自由を利用する事が出來ず、却て社會上の強者が此自由に乘じて、弱者を虐ぐるに至るのである。斯う爲つては、契約の自由は弱者を利せずして、之を苦めるの具と爲るのであるから、國家は宜しく弱者に對して、契約の自由を用ひることを制限し、進んで弱者を保護して、強者と社會上對等の地位に就かしめることを期せなければならぬ。英國が契約の自由を法制上の根本主義としながら、一方に昔から一般的救貧制度の下に、貧民に對して公費を以て、生活の安全を保證したり、十九世紀の始から工場法を制定して、社會上の弱者たる婦人小兒の勞働を制限したり、種々の點に於て、契約の自由を束縛し、又社會の或る階級に對して、自己が自由意志の下に、他人に契約上負うた義務の外に、國家の強制を以て或る義務を負はせたは、畢竟斯の如くして多數の人民に最大の自由を與へ得ると信じたからであつて、近年此信念が漸次發達して、英國社會政策の根柢を築くに至つたのも、偶然でないのである。

二

社會問題は一の勞働者問題のみに限られるものではないが、工業の發達した國に於ては、工業勞働者は社會階級として最も多數を占め、且つ彼等は重に工業分布の關係から、都會に密住するので、其生活狀態は自然世間の注意を惹き易いのである。隨て勞働者が資本家なる他の階級に依て壓迫されて、人權を蹂躙されることゝ爲れば、勞働者問題即ち社會問題の全部であるかの如き勢を以て、論議されるのは、敢て不思議でないのである。然らば人が勞働者として主張する權利は如何なるものであるか。吾輩は之を左の數項に區別し、其我國に於て如何なる程度まで法制上に社會上に認められて居るかを論じやうと思ふ。

一、勞働者の勞働効程に値する報酬を要求する權利。

二、勞働者が其好む時に勞働し、其好まざる時に勞働せざる權利。

三、勞働時間、勞働に關する衛生的設備等勞働條件に關して、文明國

民の生活に値する程度を要求する權利。

四、以上の要求を貫徹する方便として、勞働者の團結する權利。

勞働者が自己の勞働に依て現はした効程即ち能率に値するだけの勞働報酬を賃銀として受取る可き權利のあることは、當然の道理であるに拘はらず、本來資本家と勞働者とは智力、資力其他の關係に於て、對等の地位に居らず、資本家は一日事業を休止したからと云つて、其損失を償ふ道はあるが、勞働者に至つては、一日仕事を休めば、一家を擧げて、生活の窮乏を訴へる狀態に居るのであるから、若しも一の資本家と一の勞働者と相對して、賃銀其他勞働條件を決定したならば、勞働者は必ず資本家の乘ずる所と爲つて、自己の勞働効程に値するよりも以下の賃銀を以て勞働するに至らざるを得ない。勞働者にして斯る不利の狀態を脫出するは、彼等の間に職工組合を設けて、一定の標準賃銀率を確定し、團體の力を以て、之を資本家に要求することが必要であつて、歐米諸國の如き近年勞働者の賃銀が相當に上進し、其生活に多少の餘裕あるに至らしめたのは、要するに職工組合の勢力に因るものと認められるのであるが、我國に於ては未だ勞働者の間に鞏固なる團結が設けられず、隨て勞働者は資本家から恩惠的に賃銀を與へられて、之に滿足しつゝあるの狀態である。物價は騰貴し、生活費は增進するのに、賃銀が之に伴はず國民の多數を占むる勞働者が常に生活に苦しみつゝある有樣では、我國の工業は前途幾何の發展を遂げるであらうか。我國識者の間に、賃銀の低廉なることは、生產費を節約する所以であつて、賃銀が低廉でなければ外國の競爭に當ることが不可能であると云ふやうな守舊論が唱へられ、賃銀の增進所得の豐富が勞働者の生活を改良して、技術を熟達させる所以であることの考へられないのは、吾輩の遺憾とする所である。

勞働者をして各自の勞働力に値する報酬を得させるは、勞働者が團結して、團體の勢力を以て、資本家に當ることが必要であると共に、資本家が勞働者の要求を容れなかつた時には、勞働者は團體として勞働を休止し、即ち同盟罷業を企てゝ資本家に反省させ、自分等の要求に服從するに至らしむることが必要である。然るに我國には勞働者の間に組織ある團結がなく、又時に勞働者の或るものが團結して、同盟罷業を企てゝも、直に治安警察法第十七條の規定に依て、處罰せらるゝ以上は、彼等が如何に資本家から壓迫されても、之に服從しなければならないのは、當然の數である。人は一人にて爲して可なること、又爲さずして可なることである以上は、多人數が同時に之を爲し、又爲さずしても亦可なる譯であつて、勞働者に關する法制に於て、此原則が認められて、始めて合法的に同盟罷業が行はれるに至る譯である。例へば人が傭者を反省させる爲めに、仕事を休むことは、固より其人の自由である。一人に此自由ある以上は、多人數が一緒に仕事を休んでも亦不可なかる可き譯であつて、一國が同盟罷業を禁止し、又之を不合法のものとして處罰するが如きは、勞働者に對して、其好む時に勞働し、其好まざる時に勞働せざる權利を奪ふものと云はなければならぬ。

工場法は先年我國に於て制定せられたが、每年豫算不成立の結果施行準備に要する經費を支出するの道のなかつた爲めに、今日まで實施を見るに至らなかつた。然し今回追加豫算の成立した爲めに、準備費用も支出され、其施行を得るも亦近きに至つた。固より我國の工場法は骨拔同樣のものであつて、殊に婦人、幼年勞働者の勞働時間制限に關する規定の如き、施行期日を十五年間猶豫されて居るのであるから、殆ど有名無實の工場法とも評し得らるゝのである。然し全く工場法の缺けて居る今日に比較すれば、骨拔きでも何でも、工場法の體裁を備へた制度の施行されるのは、我國勞働立法の新紀元を劃するものと認む可き次第であつて、吾輩は世人と共に今後工場法の規定を完成することに努力せんと欲するものである。元來今日の文明國が工場法の下に、工業勞働者の勞働狀態に制限を加へんとする眼目は之に依て社會に多數を占むる勞働者に對して、文明國民として當然營む可き生活の最小限度を保證するの一事に外ならぬ。工場法が少年婦人の勞働時間を制限し、之を通じて成年勞働者の勞働時間をも制限しやうとするのは、文明國民的休憩の最小限度を保證するの趣意に基くものであつて、勞働者は此休憩時間を利用して生活の慰安を求めたり、技術の養成、知見の開發を謀つたりして、益々社會有用の民たるを得るのである。而して工場法が工場の衞生的設備を規定するのは、是れ亦文明國民に國民的衞生の最小限度を保證するの趣意に出づるものであつて、此保證あつて、勞働者は始めて勞働力の繼續心身の健全を期し得るのである。

民に工場法に於て國民的休憩の最小限度と國民的衞生の最小限度とが保證された以上は、之と同時に勞働者たるものは、休憩時間を樂むだけの所得を得ることが必要であり、又自分の勞働する工場と同一の程度に於て衞生條件の備はつた住居を構へるだけの所得を得ることが肝要である。所が今日文明國では隨分工場法の規定は之を嚴重にしながら、前に述べた如く、國民的休憩の最小限度と國民的衞生の最小限度とに重きを置くに止まり、未だ國民的所得の最小限度に規定を及ぼさないのは、畢竟職工組合の勢力に依て、組合に屬する勞働者自ら所得の最小限度を決定し、之を維持するを得ることに信賴するからであつて、要するに工場法と職工組合とは唇齒輔車の關係を有するものである。是等二つの効果あつて始めて、勞働者の生活は發展す可き所まで發展し、其一を缺いたならば、勞働者の權利は尊重せらるゝを得ない。不完全ながら工場法制定され、又其實施せられんとする我國に於て、次に來る可きものは、即ち職工組合の組織であつて、吾輩は其組織を妨碍せんとする法制上社會上の事情は總て之を除却することに勉めんとするものである。四五年前吾輩が治安警察法第十七條削除の必要を論じた一文を世間に發表したのも、亦此微意に外ならないのである。

社會政策と云へば、我國に於ては、頗る耳新しく、又之を社會主義と混同して、一概に排斥する傾向もあるやうであるが、我國に於ては、餘程以前から、或る方面に於て社會政策を實行しつゝあるのである。即ち現行の國民教育制度は社會政策を國民知識の分配に適用したものであつ

て、此制度の行はるゝ以上は、日本國民たるもの、特殊の事情の存ぜざる限り、小學程度の教育を受けることを國家に依て强要せられて居る。是れは法制上に於て國民知識の最小限度を規定したものであつて、既に此最小限度以上の知識を備へた國民が國家の要求に依て、世間に出でゝ生活を求むる場合に、所得に於て、衞生に於て、休養に於て、知識の最小限度に相當するものを要請するのは、當然の數である。我國が知識の分配即ち教育上の方面に於て、社會政策を實行して、三十餘年を經過しながら、富の分配即ち經濟上の方面に於て全然社會政策を排斥しつゝあるが如きは、辻褄の合はぬ話であつて、自ら求めて社會制度の缺陷を大ならしむるの譏を免がれないのである。

四

雇傭契約が表面對等なるが如くにして、實質に於て不對等である爲めに、傭者をして被傭者を壓迫するに至らしむるの弊害は獨り資本家對勞働者の關係のみに止まるものでない、我國今日の實情を見れば、各種の雇傭契約悉く然らざるものなきの有樣である。彼の藝娼妓と雇主との關係や商家の主人と手代丁稚との關係や、遊藝人殊に徒弟藝人と興業主との關係の如きは總て此類例とすることが出來るのである。

社會制度として公娼と密娼との得失如何は吾輩の論究せんとする問題ではない。唯國家が公娼制度を立てゝ、妓樓なり、娼婦なりの營業を認めて居る以上は、彼等の營業の安全を保護することは、國家の任務である。妓樓の經營者は娼妓を貨物視して、前貸金の形で、之に資本を投下して居るのであるが、一方に近年娼妓の自由廢業が認められる以上は、妓樓の有する資本は決して安全に運用されて居るものと見ることが出來ない。一方に娼妓其ものも無知無識であることゝ、窮乏の極前借金をすることゝの關係から、契約締結の當初から、隨分無理な條件を付せられて居るのみならず、營業を始めてから後も、衣服の料や、食物の代までが前借金に加重され、如何に稼いでも終身醜業者の境遇を脫することの出來ないと云ふが如きは、實に奴隷制度を今日に再現させたものに外ならぬ。斯る事情は或る程度まで私娼、酌婦、藝妓の類にも適用されるやうである。殊に醜業者や遊藝の興業主などが目腐金で貧家の子女を購ひ來つて、之を養子女とし、一家に十數人の養子女を仕立てゝ、醜業を營ませたり、危險極まる藝事をさせることに對しては、人倫の大本を破壞するものと認めざるを得ないのみならず、金力を以て、人權を蹂躙するの甚だしきものと考へるのである。

今日の社會狀態に於て公私孰れの種類に屬するを問はず、娼婦なるものゝ存在することが必要であつて、而して其娼婦は自ら營業の場所を構へることが出來ず、資本家たる妓樓の主人から營業の場所を借受けることが必要であるとすれば、宜しく席料を拂つて、之を借りるのが當然であり、前借金をすることも亦已むを得ないとすれば、前借金、之に對する利子、營業收益より償還しつゝある金額等一切の計算を明にし、些細の金て、婦人の一生を金縛りにするが如き弊害は之を除かなければならぬ。彼の藝妓業者が藝妓を養女とする手段で、一生を束縛し、時に藝妓を

落籍させやうとする客があれば、養女の籍を除くことを口實にして、途方もない、身代金を強請するが如きは、亂暴至極の沙汰であつて、社會人倫の維持に就て、八釜しい論者が何故に此問題を閑却して居るのであるか、吾輩の不思議に感ずる所である。

商家の丁稚小僧の如きは、最も苛酷なる徒弟制度の下に居る者であつて、所謂年季と稱する期間内は技藝を見習ふことの出來る代り、粗惡なる食物と些細の給與とを以て、殆ど終日主人の爲めに、酷使せられ、休日と云つては、盆正月の兩三日に止まる有樣である。彼等が使の出先で道草を喰ひ、帳場の在金を盜み出し、稍や其大なるものに至つては、得意先の掛を着服するやうな種々の罪惡を犯すが如きは、畢竟平生の過勞、積年の壓迫に對する一種の反抗心に基くものと認められるのである。世間の丁稚小僧總て此境遇に居るなれば、彼等と雖も、境遇の束縛に堪へ得るかも知れないが、社會狀態の過渡時代に在る我國に於ては、大商店などは相當に丁稚小僧の待遇法を改良し、一箇月中に一二回の休暇を與へるものもあり、夜間は業務を休んで、普通教育を授けるものもあるやうであるから、斯る改良は漸次他に波及し、同一の待遇を受けざる丁稚小僧の反抗を助長するに至るのは、當然の道理である。

前年吾輩が倫敦で、或る家庭に下宿をして居つた時、主婦に賴んで下女に渡す契約證文を見せて貰つたことがあるが、驚く可し其契約書には十數箇條の項目が並べ立てゝあり、給料の額、拂渡日、勤務の種類範圍は勿論、下女の使用する寢具のシーツは何日目に洗濯するとか、晩飯には麥酒を與へるとか、日曜日の何時以後は外出を許すとか、解傭する時には何日前に通告するとか、苟も下女の權利義務に關する事柄は細大となく定められて居る。而して英國の下女なるもの、概して無教育ではあるが、此契約に揭げられた義務は固く守る代りに、其以外の用事と爲れば特別の依賴あり、又之に對する餘分の報酬を貰はない限りは、之に應じないのである。倫敦に一家を構へて居る日本の婦人などは英國の下女の遣ひ方に困つて居るやうであるが、權利思想の進んだ文明國民としては、下女までが斯る態度に出でるのは、當然であつて、之を不思議に考へるのは、畢竟日本人の頭に封建時代の奴隷根性が殘つて居る爲めではあるまいか。

五

序でながら吾輩が平生から懷いて居る疑問に就て一言したいと思ふのは、官公吏、民間の銀行會社員等に對する恩給制度、大工場に行はるゝ職工勞働者に對する扶助金制度である。世間では一般に是等の給與を以て老年と爲つた人の生活を保證する効果あるものとして、稱贊して居るやうであるが、一面から見れば、恩給の如きは、人が勞働の結果、今日當然報酬として與へらる可きものを與へられずして、將來に抑留せらるゝに過ぎない。之を抑留する理由は之に依て強制的に人に貯蓄をさせ、將來の生活を安全ならしめる趣意に外ならないやうであるが、斯の如きは人を將來の利害を打算する能力なき愚民と同一視した譯であつて、其人を輕蔑することの甚だしきものではあるまいか、國家が人民に對し、餘

者が被傭者に對し、其生活の前途を安全ならしめることに就て、左程までに配慮するならば、國家なり、傭者なりが被傭者と共に醵金して、養老年金の制度を設けるのが最良の方法である。今に當然給與せらる可きものゝ給與を受けず、他日恩給と稱する名の下に與へられた所で、被傭者は何の恩惠を感ずるであらうか。權利として當然受け得べきものを却て恩惠の形に變へられると云ふが如きは、人を愚にするものである。況や被傭者の勤務年限が足らなかつた場合、年限は充ちて居つても、職務上の過失等に依て職を罷められた場合に、恩給權其ものを喪失するに至るが如きは、人權を蔑視し勞働權を蹂躙したものと云はなければならぬ。

要するに日本のやうに濫に社會に上下、貴賤、主從の差別を立てゝ、此關係に依て、社會の階級を律して行かうとするのは、封建時代の思想や習慣を大正の今日に持續せしめんとするものである。若しも自分の一生なり、又は其死後に於ける家族全體の生活を保證して吳れる者があつたならば、封建時代に主從の關係の存在して居つた如く、前者は後者に臣從することを辭せないであらうが、今日の雇傭關係は傭者に資力あり、被傭者に勞働力ある間を限度とするものであつて、斯る一時的關係を指して主從の關係であると云ふものがあつたならば、事理を辨ぜざるの譏を免がれない。人は報酬に刺戟されて、勞働す可きものであつて、一方に勞働に對しては、其勞働力に値するだけの報酬を受けなければならぬ。報酬を拂ふ者を貴しとし、報酬を受くる者を賤しとするが如き、又は前者を以て、上流社會とし、後者を以て下等社會とするが如き、社會が相倚り相助けて存立す可きの道理に反した言である。

此間中、東京相撲協會で內訌が起つて、大相撲の初日が一箇月近くも延期したのは、讀者の承知せらるゝ所であるが、此內訌の如きは、誠に社會階級の爭を縮寫したものである。横綱大關などが利益配當を給金制にせよと主張して、協會に迫まつたのは、勞働者が勞働權を自覺して、勞働に値する報酬を得ることを資本家に要求したものであつて、更に是等階級以下の力士が利益分配の頭割を主張したのは、恰も職工組合に屬せざる勞働者が組合に屬する勞働者に反抗するのと同じく、少數の優秀の階級に依て、多數階級の利益を傷けらるゝことを防がんとしたのである。勞働權の尊重、生活權の保證は從來世間から別物扱にされて居つた力士社會に認めらるゝに至つた。力士の强弱相撲の巧拙を評論し、力士以上に知識を有すると自信して居る一般社會に此種權利を尊重する者の却て少ないと云ふに至つては、吾輩は唖然として言ふ所を知らないのである。

△農民發展の新天地開かる

永井柳太郎

一

我國の社會問題は、都會に於けるよりも、寧ろ田舍に於て重大である。

我國の社會問題を論ずる者動もすれば社會問題を以て、都會の工場に於ける勞働者に限らるゝものゝ如くに論ずるけれども、斯の如きは歐米の書籍を通じて社會問題を研究した結果である。歐米に於ては、工業の發達著しく、英國の如きは全生産者の中殆ど五割五分は製造業に從事し、農業に從事するものは僅かに其一割を出ぬ故、社會問題の如きも都會勞働者を中心とするは當然である。然れども我國は、尙未だ農業を以て國本となし、今戸數九百二十五萬戸の中、約五百四十萬戸は農家にして、日本國民の約六割が農業に依りて衣食しつゝあるのである。製造業に從事する勞働者の數は、大正元年末の統計に據れば、男女合計八十六萬三千にすぎぬ。加ふるに都會の勞働者に對しては、今日既に工場法の制定あり、施療院其の他の慈善事業ありて、彼等を保護するの方法漸次具備せられむとしつゝあるが、田舍の農民に對しては、斯の如き保護機關の設備未だ絕無である。

二

凡そ世界の文明國の農民中、我國の農民の如く貧困なるものは稀である。小作農は云ふまでもなく、自作農の如きも、名は獨立自營の企業家であるが、其の大部分は、五反以內の田畑を以て生活する小百姓である。前述の如く我國の農民は全人口の約六割を占むるのであるが、我國の地勢は山脈重疊して平地少なく、僅かに全面積の一割四分に相當するの耕地を有するに過ぎぬ。全面積の一割四分と云ふが如く狹隘なる土地に、全國民の約六割が鋤、鍬を入れるのであるから、勢ひ小百姓たらざるを得ないのである。伊太利の如きは、我國と同じ割合の農民を有するも、其の耕地も亦全面積の約六割に相當するが故に、一人平均の耕地は我國の農民に比すれば甚だ豐なりと云はざるを得ない。英國の如き農業の衰微せる國でも、其の耕地は尙未だ全面積の割六分に相當し、其の他尙多大なる放牧地がある。

然るに日本に於ては、今日既に山の頂まで鋤鍬を入れ、谷の間さへも耕して、僅かに一割四分の耕地を得るに過ぎぬのである。農商務省の調査に據れば、十五度の傾斜地をも耕す時は、尙約五百萬町步の耕地を加ふることが出來ると云ふのであるが、今日未開墾地として殘されたる土地は、排水灌漑の困難なる處のみであるが、强いて之を開墾するには、巨額の資本を要するのである。試みに最近三十年間に擴張せられた耕地面積を平均すると、一年僅かに一萬五千町步宛增加しつゝあるに過ぎぬ。若し此の割合を以て年々耕地を擴張するものとせば、五百萬町步を開墾するには約二百年の歲月を要する道理である。而して縱し五百萬町步を開墾するを得ても、尙未だ全面積の二割八分以上には相當せぬのである。從て我農民の耕地狹隘なるは當然であつて、全農民の約四割は、五反步未滿の田畑に依つて生活しつゝある。數年前の農商務省の報告を見ると、米一石の價十八圓の時に、田一反步の純所得は平均二十三圓六十九錢である。農民の耕地は大底半分が田、半分が畑であるが普通だけれども、是を全部米田と見ると、五反步の收入は百十八圓四十五錢に過ぎぬ。若し小作を營むならば、其の中約四割は地主に納むる故、純所得は

五六十圓に過ぎぬのである。五反の耕地を耕作するも斯の如くである、況や五反未滿に於てをや。

於是彼等は副業を以て此の不足を補ふの外ないのである。然も製粉、製紙、織物、造酒、繩、蓆、麥稈細工等の如き有利なる副業は工業の發達とゝもに都會の工場に集中されて、副業の收入も次第に減ずるのである。今日全國の農家の副業を合算すれば、其の生産額は、約三億に過ぎぬ故、之を平均すれば、一戶平均約六十圓內外に相當する。

斯く收入の減少するに拘らず、支出は次第に增加するのみであつて、租稅の如きも、過去十年間に著しく增加して居る。一般生活費の如きも同時に膨脹して、兒童を學校に送るためには、筆墨紙の費用を要し、昔は手拭の頰被りで滿足した者も帽子を被らねばならず、又登校の時間を正確に知るために曾て鷄鳴を聞て曉を知り日沒するを見て家に歸れる彼等も、今や時計を備付くるの必要に迫られ、行燈は洋燈となり、燧石は燐寸と變じ、鞋は靴となり、種々なる生活必需品が增加したのみならず、貧困なる農民の如きは、自作米は之を他に賣却して、自家用の爲めに特に外國米を買入るゝのであるが、それも穀物輸入稅のため農民の負擔を增加しつゝあり。實に彼等の生活を目擊すれば、農民の窮狀思半ばに過ぐるものがある。

三

更に彼等の生活が如何に困難なるかは、地租若くは地租割滯納のため、財産差押へをせらるゝものは、年々多數を算し、而も其の金額は一圓內外なるに見ても知られるのである。先頃、當局者が概算せるものに據れば、全國農民の負債額は、約九億四千萬圓に達して居るらしい。其の中約六割は不生産的の債務であつて、全く彼等の生活を維持するがために起したものである。此の利子のみにても、約一億七百六十五萬圓を算し、農家一戶に割當てれば二十圓內外に相當するのである。

於是、今日は五反百姓の二男三男に生れたる者は、迚も父祖の家業に依りて生活すること不可能なるが故に、相次で都會に出で、新しき運命を開拓せむとするのである。是れ人口が都會に集中する根本源因であるが、此の根本源因を除かずして、徒らに彼等の都會集中を非難し、不健全なる現象なりと主張するは、一を知て二を知らざるものゝ愚論である。曾てエドマンド・バークは「人口稠密にして生活困難なる地方の人民が、人口稀薄にして生活の容易なる地方に移動せんとするは、恰も濃厚なる空氣が稀薄なる空間を充たさんとして移動するが如く、全く自然の勢なり」と云へるが、我農民の相次ひで都會に集中するも、同じく自然の勢であつて人爲を以て是を防ぎ得べきものではない。

固より我等は、出來得る限り農村の改良を計り、農民の生活を容易ならしむる様努力せねばならぬ、例へば、低利資金の融通や、諸種の組合の奬勵や、租稅の輕減や或は交通の設備や、凡そ農村の改良に必要なる施設は是を怠るべからずと雖も、而も土地には報酬遞減の法則ありて、一程度以上の勞力を加ふる時は、却つて報酬は遞減するものなるが故に、人口過剩と云ふ根本原因を除かずして、人口過剩より生ずる地方農民の

都市集中を防ぐことは出來ぬ。我國に於ける農村改良の根本問題は、其の狹隘なる山河の間に剩餘せる小農民をして、能ふ限り、海外に移住せしめ、新しき運命を開拓する新天地を與ふることである。

元より我國の工業が盛であつて無限に勞力を吸收し行くならば、彼等をして多々益々都會に集中せしむるも亦一方法であるが、我國は尙未だ資本乏しくして、田舍より集中し來る農民を無限に吸收し得る迄に發達して居らぬ。於是彼等は其の新天地を海外に求めねばならぬのである。ミルは世界經濟の見地より移住の效力を論じて、『舊世界の勞力及び資本を、新世界に移すは生產力乏しき地方の勞力及び資本を、生產力豐かなる地方に移すを意味する、其の結果は全世界に於ける勞力及び資本の生產力を增加し富の蓄積を迅速ならしむ』と云つて居るが、此の原則はひとり世界經濟に關して然るのみならず、國民經濟に於ても亦、眞理である。

四

社會政策は分配の公正を目的とする、然し如何に分配公正なるも、分配すべき富其のものにして僅少ならば、國民は凡て平等に貧困であらねばならぬ。於是分配を公正ならしむることを期すると共に、富其のものゝ增加を計らねばならぬ、然も今日の社會に於ては、土地が富の大部分を占むることは、否認すべからざる事實である。於是、社會政策と相俟て、植民政策を實行するの必要を生ずる。社會政策と植民政策とは、表裏相容れざるものゝ如く論ずるものあるも、其の目的とする處は、二者相同じである。即ち彼等は二にして一、一にして二なのである。

然し乍ら同じく海外に移住するにしても、土地を選擇することなく、只移住さへすれば、其の目的を達し得るものとは云へぬ。例へば熱帶地方の如きは、自然の富源に富むと雖も、此處に內地の農民を移住せしめて、其の新しき運命を開拓せしむることは不可能である。凡そ熱帶地方及び亞熱帶地方に於ては、マラリヤ、睡眠病、黃熱病、黑尿病、熱帶赤痢等種々なる風土病ありて、人の健康を害すること著しい。是等の風土病は、醫術の進步に伴ひ、或程度迄征服し得るとするも、如何にしても征服し能はざるものは、過激なる氣候の變化が、人體の生理組織に及ぼす影響である。如何に强健なる者と雖も、溫帶人が熱帶地方に於て、高度なる日光の下に生活すること數年なる時は、大抵其の健康を破壞するに至るのみならず、生殖力の如きも、或は過度の疲勞に基く精力の消耗のため、又は高溫度に基く病的亢奮の爲め、著しく障害せられて、婦人の如きは其の姙娠力を失ひ、よし姙娠するも、流產し、或は母子共に虛弱なるが常である。殊に溫帶人の兒童の如きは熱帶地方に棲む時は、其の成熟する事頗る早く、男女共に不品行に陷り易きのみならず、周圍の土人の兒童も亦早熟なるが故、敎育上より云ふも、熱帶地方に於て家庭生活を營むことは不可能である。

於是熱帶地方に於ては、溫帶人は其の資本を投ずるに止め、勞力は之を土人に仰ぎ、自らは唯監督指揮するを以て甘んずるを常習とする。從て熱帶地方に對しては、資本家の活動する餘地あるも、生活難に苦しむ

勞働者自ら徒手空拳にて移住し其の運命を開拓するが如き餘地は甚だ乏しいのである。是れ南洋地方に對して一攫千金を吹聽する幾多の泡沫會社が續生するに拘らず、事實に於て此等の會社の吹聽する如く徒手空拳にて一攫千金を得たる人の甚だ稀なる所以である。是に反し温帶地方に於いては男女共に移住すること極めて容易なるのみならず、健康は寧ろ增進し姙娠力盛になるのが普通である。今日朝鮮に於ける日本人は、本年三月末の統計に據ると、二十九萬二千人あり、うち十五萬六千は男子にして、十三萬六千は女子である。其の數略ぼ伯仲してゐる。從て內地の赤貧なる農民が家庭的生活を營み、新しき運命を開拓するには、北米或は加奈陀或は濠洲の如き温帶地方を選擇するのが最も得策である。然し乍ら是等の地方は外交の關係上、日本人が移住せんと欲して能はざる處である。爰に於て勢ひ滿韓地方を選擇するの必要が生ずるのであるが、幸にして今や朝鮮は我國土となれるのみならず、新しき日支條約に依りて南滿洲に於ても、廣大なる移住地を得たのは、我國の爲めに大に慶賀すべきである。

南滿洲の土地は廣大且つ無限の富源を有し、農、商、工、鑛等の經營は悉く有望であるが、就中最も有望を以て目せられつゝあるのは農業である。日本人が明治四十二年、南滿洲鐵道附屬地の水田に於て初めて日本米を試作した以來、其の成績益々良好であつて、大正二年に於ては水田の面積百六十七町歩、其の總收穫額四千四百十九石を超えてゐる。政府の調査に據れば南滿洲のみで容易に水田を爲し得べき地域凡そ二百五十萬町歩あるとのことだ。若し開墾宜しきを得れば二三千萬石の米を生產し得るのであつて、獨り農民の移住のためのみならず、內地に對する米の供給を豐富にする點より云ふも、頗る有望なのである。然しながら此等多數農民は貧困なるが故に、彼等を手引しないで、放任して置けば移住の容易に實行されざること明らかである。されば、政府は此の際自ら進で、土地を買入れるか、又は南滿洲鐵道會社の如きをして土地を買入れしめ、此等の土地に對し農民が移住の出來るやう相當に設備し、又補助を與へ、以て大いに之を奬勵しなければならぬ。朝鮮に對しても今度は二箇師團を增設することになつたが、この二箇師團の兵員の如きも漫然と內地より按分比例などで徵集することなく、徵兵適齡者の中、特に將來朝鮮に永住せんことを希望する者を拔いて之を朝鮮師團に送り、兵役に就かしむると同時に義務年限後は朝鮮に止つて開墾に從事せしむる。さうすれば國防と朝鮮の開拓と內地の農村改良と三つの目的を一擧にして達することが出來る。吾輩は政府も人民も、もう少し深刻に覺醒し、もう少し遠大なる抱負を以て、國家的にも、また個人的にも、新しき運命を開拓する時代を作りたいと思ふ。今日の日本人の活動には、對內的のものに於ても、對外的のものに於ても、組織がない、唯一日を彌縫するだけである！

△大正新機運と社會問題

法學博士　福田德三

大正新機運なるものありやなしや予に定見なし。唯だ近き將來と云ふ漠然たる意味に解釋して中央公論の問に答へんとす。

近き將來の我邦は必ず歐洲戰爭の成行及其終了後に於ける世界の趨勢の影響を免るゝ能はざるは多言の要なし。歐洲戰爭の成行如何は元より豫言し得る所にあらずと雖も拜英主義論者が吾人をして信ぜしめんと欲する如く獨逸を滅ぼし若くは著しく衰退せしむること能はざると共に英國が開戰前に有せし世界的プレスチッヂの其儘に維持せらる可きにあらざることは之を今日に於て逆睹し得可しと信ず。從て日英同盟の我邦に對する効能を過重したる過失は向後我邦は其國運の發展の上に於て高き代價を以て辨償せざる可からず。元より誰人も英國の軍事上の無爲無能斯くの如き甚しきものあらんとは豫想せざりし處なれば此誤謬を直ちに我邦外交當局者の全責任に歸せしむること能はず。否な日獨開戰を謳歌したる我國民は其懐中より此の高き代價を支拂ふの義務あり區々一內閣攻擊の問題とする斷じて不可なり。他方には獨逸の實力を誤算したる過失あり、世間往々其妄を辯ずる識者なきにしもあらざりしと雖も我國民は自己の豫想を指摘する人に飛彈を放て之を傷くるの惡癖を有するが故に大言終に俚耳に入らず無知無學なる英國崇拜主義は遠慮なく國民の輿

論を風靡したり。此過失の代價は極めて高かる可きこと今より覺悟を要す。我同盟國の實力恃むに足らず而して日支交涉其他に顯はれたる其同盟道德――此造語を許せ――の又た甚だ頼るに足らざること我等の具さに實驗したる所にあらずや。恃む可からざるの同盟を恃むの危險は獨逸の伊太利に於ける實例我等の猛省す可き所なり。而して米國は如何支那如何。我邦は三國協商の四國同盟のと空賴みを爲しつゝありと雖も事實は愈々我邦をして其心にもあらざる軍國主義を取るを餘儀なくせしめつゝあり。日露同盟の如き之れある妨げず之なき亦妨げず。其價値は日英同盟よりも更らに小なるは疑ふ可からず。眞に賴る可き同盟國は自國を措いて他になし。思ふに最も近き將來我等罪なき市民は日章旗英國旗の外更らに露國旗を新調す可く命ぜらるゝことあらん。然れども我等は日本人なり政府の御都合次第敵愾心を起し又其御都合次第同盟心と交換し得可き底の御方便的なる心腸を有せず。我國民が歐洲出兵論に讃歎しつゝある時々刻々我國歩は彌々艱難を加へ軍國主義の惡魔は彌々我邦を捉らへて免るゝこと能はざらしめつゝあり。

軍國主義の代價は財政難なり。之を社會問題の方面より觀察すれば我邦が今處する處の難局は社會上必ず惡しき作用を生ずるの外なし。我等は希ひてにあらずして軍備を充實するの一大義務を過去過失の代價として引受けざる可からず。何ぞ二個師團の增否を爭ふの暇あらんや。斯くの如き政略上の爭は有害にして無用なり。軍備の充實は我邦に取りて必然の惡のみ。之を逭るゝの途は更らにあることなし。其結果は則ち財政

難なり又租税の重加なり。廢減税論は人氣取り論のみ黨勢擴張の手段としのみ言ふ可し實行の望更らになし。今日減じて明日增し右に廢して左に起すことの大勢は如何なる人が大藏大臣たりとも到底之を免るゝ能はず。而して之に伴ふて起るものは富豪の增長ならん。政府の財政難と富豪の增長とは今日に至りて最早誰人も否認し得ざる因果關係を生じたり。此勢は財政難の大となればなるほど助長せらるゝものと覺悟す可し。此くの如くにして階級政治は益々進み社會の下流は愈々其負擔を加ふ可し。然れども此は未だ其最惡なるものにあらず。最惡は他にあり何ぞや。間接税の過重即ち是なり。財政難の加はり富豪の權獨り伸ぶるとき議會若くは政黨は其權の大なるものと結び之に左右せらる可く、乃ち財産階級の納むる直接税の割合を可成減じ議會に其擧を揚ぐる能はず、國債募集の相談に干與するを得ず、議員の選擧に阿ねらるゝの幸を有せざる階級の主として負擔する間接税の割合の重くなり行くことは歷史上の事實之を明證す。我邦近き將來に於て必ず同一事の繰返さる可きを思ふ。是を大正新機運と名く可くんば社會問題の立場より見て惡中の最惡なるものにあらずや。

斯くの如く予は徹頭徹尾悲觀す。然れども之を更らに遠き將來に就て考ふるときは悲觀の中自ら樂觀の禁ず可からざるものあり。間接税の增加を主として起る階級政治は、虐げらるゝ階級の自覺を早晩喚起することは是なり。而して其勢を助長す可きものは政黨の腐敗墮落之なり。社會問題の立場より云へば政黨は過去十九世紀の遺物にして、第二階級の勃興の手段たり機關たりしものなり。政黨政治の無能は近く英國の内閣改造之を示したり。煽動により焼打によるに非れば擁護せられざる底の憲政は社會問題の解決と風馬牛たり。然れば政黨の無能の忌憚なく證明せられしことは取も直さず十九世紀の——而して二大政黨對立と云ふが如き拜英主義の——迷夢の打破せらるゝ勢を促進するものと云ふ可し。是れ予が特に社會問題の立場より見て悲觀の中自ら樂觀の生ずるを禁じ能はざる所以なり。(四・六・廿三)

△勞働問題の根本的解決

安部磯雄

勞働問題と言へば何人も先づ資本家と勞働者の衝突及び其調和法といふが如きことに考へ及ばすのであるが、勞働問題の主要點は必ずしも此處に在るのではない。勿論資本と勞働を如何に調和すべきかといふことは重大なる問題であるに相違はないが、私共はこれよりも更に大なる問題のあることを忘れてはならぬ。今日は世界何處に於ても『貧乏』といふことが學者や政治家の解決せねばならぬ大問題となつて居る。一方には巨額の富を蒐めて居る少數の富豪が存在せるに拘はらず、一方には多數の憐むべき貧民が不幸なる生活を送つて居る。而して此等貧困者の大多數が勞働者であることを考ふる時には、私は勞働者對資本家といふこと

とを考ふるよりも寧ろ如何にして勞働者を貧乏の中より救ひ出すべきかといふ問題に想到せざるを得ない。勞働問題として研究すべきものには工場法とか勞働保險法とかいふが如き勞働者保護を目的とする所の問題がある。其他勞働紹介所、慈善病院、勞働者金融機關、小口保險といふが如き、或は勞働者教育を目的とする各種の機關といふが如き、要するに其目的は勞働者を貧困の中より救ひ出さんとするにある。資本家と勞働者が往々衝突して工場閉鎖となり或は同盟罷工となるが如きは、勞働者の向上を謀らんとする其徑路に横はる一障害物に過ぎないのである。私は將來に於ても資本家と勞働者の間に多少衝突の起ることは免れないことゝ思ふけれども、これは勞働問題の主要點たる貧乏病撲滅の目的を達するため已むなく附隨する所の不幸として忍ばねばならぬのである。

虎列剌チフスの如き傳染病を撲滅するには何れの國も充分なる努力をなしつゝあるに拘はらず、此等傳染病よりも遙に恐るべき貧乏病を撲滅するためには何等確乎たる方針を有して居ない。現社會に於けるあらゆる不幸は多く貧乏といふとが其原因をなして居る様である。若し貧乏といふことがなければ犯罪者の數は著しく減少するに相違ない。男女の風儀も少からず改善せらるゝに相違ない。私は傳染病の如きすらも貧乏といふことに密接なる關係を有して居ると思ふ。極端に言へば貧乏病の根治と共に今日世界に行はれつゝある社會政策は全く無用に歸するかも知れない。然も世人の注意が未だ多く此問題に向つて居ないのは何故であらうか。思ふに貧乏病といふことは餘りに大なる問題であつて、今日の人力では到底これを根治することが出來ないと考へられて居るのであらう。シドニー、ウエッブ博士は其『防貧論』に左の如きことを言ふて居る。『一八一五年ロンドン市には惡疫が流行して多數の市民が其犧牲となつた。其死亡者數はオートルローに於て戰死したる英國の壯丁よりも多かつた。其當時に於ては其惡疫の名稱も原因も不明であつたが、爾後研究の結果今日のチフスなることが分り其病源も治療法も明となり今日は全く撲滅せられることゝなつた。これと同じく吾人が貧乏の原因と其救濟法に關して精細なる研究を爲すことゝなればこれを根治することは決して不可能でない』。貧乏病の撲滅を不可能とするのは恰も傳染病の撲滅を不可能とするが如きもので、決して徹底した考へと言ふことは出來ない。故に私は勞働者を全然貧乏なる境遇より離れしむることが即ち勞働問題の主要點であると信ずる。

今日行はれつゝある社會政策は多く貧乏病撲滅のために貢獻しつゝあるけれども、私は此等を以て根本的解決法と信ずることは出來ない。工場法や勞働保險法の如き勞働者の幸福を增進することは無論であるけれども、此等は國家の力を以て勞働者を助くるのであるから、勞働者自身をして自らの位地を向上せしむるといふ自助的方法の如くに有效でない。勿論或場合には他動的に勞働者を扶助し保護することも必要であらうが彼等が自動的に自らの位地を改善し得る場合には彼等を獨立せしむるのが得策である。故に歐米諸國は工場法や勞働保險法によりて勞働者の位地を向上せしむると同時に勞働組合の組織を獎勵して勞働者が自動的に改

善の途を講ずることを謀つて居る。私が勞働問題の根本的解決といふのは即ち此勞働組合を許可しこれを奬勵することである。

我政府が近き將來に於て工場法を實施せんとして居ることは私共が大に歡迎して居る所である。我政府は更に進んで小口保險法をも實行せんとして居る位であるから、早晩勞働保險法をも制定するに至るであらうと思ふ。然し我政府が單に此等の社會政策のみに努力して、然も一方に勞働者が自由に團結することを禁ずるならば、是れ大なる矛盾であると言はねばならぬ。勞働者が自由に團結することを許せば彼等は自助の精神を發揮して種々なる方法により自己の位地を向上せしむることが出來る。然るに我政府はなるべく勞働組合の發生を防止するの方針を取つて居る。これ恰も故意に人の一足を切斷して彼に擁木杖を與ふるの類ではないかと思ふ。若し勞働者に眞の自覺心あらば彼等は決して政府の保護を受くることに滿足を表するものではあるまい。天は自ら助くる者を助くといふ諺のある通り勞働者をして自動的方法を取らしむることが最も有効なる途である。斯く論じ來れば單に勞働組合の設立を許すのみでなく、寧ろこれを奬勵することが政府の當に取るべき方針ではあるまいか。我政府が信用組合の設立を奬勵し且つ今も尙ほ奬勵しつゝあることは私共が大に注意すべき事實である。今や全國を通じて一萬以上の信用組合がある。若し此等の團體がよく運用せらるることにならば如何に大なる便宜を生產者及び消費者に與ふることであらうか。團結は今日の產業制度に於て大なる力である。然らば政府は何故に此原則を勞働者にも適用しないのであらうか。

勞働組合が經濟的政治的敎育的社會的に勞働者を訓練しつゝあるとは歐米諸國に於ける勞働組合の現狀を見れば明かである。國家は實に勞働組合に對して大に感謝する所がなくてはならぬ。私は勞働組合の性質を概略說明する前に先づ其勢力を示さんがために少しく數字を並べて見たい。目下諸文明國に於ける勞働組合員の數は英國が三百八十一萬三千九百七十三人、佛國が百二萬九千二百三十八人、獨逸が三百三十一萬七千二百七十一人、米國が二百四十九萬六千人である。英國は最も勞働組合の發達せる所で、組合員の間には廉價を以て日用品を供給するために消費組合が組織せられて居る。亦組合員の中に少額の資本金を醵出して生產事業を營んで居るものもある。彼等は所謂資本家なるものに使役せられず、自ら獨立經營をなして居るもので、これを稱して生產組合といふのである。今此等の消費組合及び生產組合に就て數字を示せば一九一二年に於て消費組合數一千四百七、生產組合數百十二であつた。組合員即ち株主數は二百七十六萬五百九十一人で、同年に於ける賣上高は十六億圓であつた。而して資本金三億五千萬圓に對し一億二千萬圓の純益を得たのであるから、年三割四分といふ配當をすることが出來るのである。これによりて見るも卸賣商小賣商といふが如き仲介者と所謂資本家なる者とを除去することが如何に大なる利益を勞働者に與ふるかを知ることが出來る。

勞働組合は勞働者の位地を向上せしむる目的を以て起つたのである

が、彼等の主張は先づ賃銀の增加と勞働時間の減少を要求するに在つた。故に勞働者は職業によりて各組合を組織し、各組合が定めたる賃銀以下にては決して雇主の招きに應ぜぬこと、亦組合が定めたる勞働時間以上は決して働かぬといふことを約束して居る。彼等は亦每週規定の會費を納むるのであるから、組合員にして疾病に罹るものあれば、組合は彼に醫藥を給するのみではなく賃銀の二分の一乃至三分の二を與へ、若し亦死亡する時には若干の扶助料を遺族に贈ることになつて居る。斯くして勞働組合は立派に相互保險を實行して居るのである。英國の勞働組合が每年取扱ふて居る所の收入は二千九百九十五萬四千八百九十一圓で、積立金は五千六百八十二萬一千三十八圓である。若し英國に此の如き團體がなかつたならば如何であらう。政府は必ず今日よりも遙に多數の貧民を救濟せねばならぬ必要に迫られて居るに相違はない。

勞働組合が自治的の團體であつて、よく其組合の規約を守り、終に今日の成功を見るに至りたることは實に敬服の至りである。歐米の勞働者は此組合組織の中に在りて自治的精神と技術とを訓練し來つたのであるから、彼等は一國の政治に參與してもよく其職責を盡すことが出來る。若し我國の勞働者にして團結の自由を公認せらるゝことゝならんか、彼等は必ず自治的訓練を受くることゝなるから、選擧者としても充分なる資格を得るに至るであらうと思ふ。實に勞働組合の教育的價値に至りては何人もこれを疑ふ譯にゆくまい。勞働組合若くは消費組合には必ず組合員の集會し得べき俱樂部がある。此俱樂部には多く圖書室及び講演室をも備へてあるから、有志者は此處に來りて讀書を爲し若くは講演を聽くことが出來る。故に歐米諸國の勞働者は決して人々の想像するが如く無學なる者ではない。今より百年前に於て勞働組合が始めて設立せられたる時には政治家若くは學者が常に勞働運動の指導者であつたけれども、其後に至りあらゆる勞働運動は全く勞働者自身によりて行はれることになつた。されば勞働者の中よりジョン、バースの如き大臣を出すに至つたのは決して怪むべきことではない。斯く考へ來れば勞働者の位地を向上せしむる最良法は彼等をして自由に勞働組合を設立せしむるに在る。

我政府が充分に勞働組合の利益を知りながら寧ろこれを禁壓するの方針を採つて居るのは多分勞働者の勢力が增加する結果としてストライキの發生することを恐れて居るためであらうと思ふ。私は歐米諸國の實例に徵してストライキの發生を全然防止することが出來るとは思はないけれども、ストライキを恐れて勞働組合の設立を禁止するのは全く角を矯めて牛を殺すと同樣實に拙策の甚だしきものである。資本家側から言へば勞働者を今日の如き情態に放任して置く方が便利である樣に思はれるかも知れない。彼等をして頼らしむべし、知らしむべからずといふ專制主義の方が資本家にとりては面倒が少ないのである。然し國家は少數資本家の利益のみを謀りて多數國民の幸福を犧牲に供すべきものでないから、斷然勞働者の團結を許さねばならぬ。且つ資本家が勞働者の團結を以て已れに不利益なるものと考へて居るのは全く彼等の誤解に過ぎないのである。勞働者が賃銀の增加を要求することは近眼的資本家に對して

は由々敷大事と思はれるかも知れない。然も賃銀の增加は勞働者の向上を意味し、勞働者の向上は結局資本家の利益を增進することになるのである。米國の勞働者は概して世界最高の賃銀を得て居る。而して彼等は世界最高の効程を有する勞働者である。我國にも『安からう惡からう』といふ諺のあるにも拘らず、我資本家が賃銀の增加と勞働時間の短縮に反對して居るのは實に近眼的ではないか。殊に政府が此等近眼的資本家の意を迎へて勞働者の向上を阻止せんとするのは甚しき拙策であると言はねばならぬ。

英國に於ても百年以前勞働組合の設立せられたる當時資本家はこれを以て自己に不利益であると信じ、種々なる手段を講じて妨害を試みた。政府も亦資本家に味方して勞働者が賃銀增加と勞働時間減少の目的を以て團結することを禁じ、これを犯す者を二ケ月の禁錮に處することにした。然し今日英國の勞働組合が如何に産業界に於て大なる貢獻をなし、如何に勞働者の効程を增加したかを見たならば、彼等資本家及び政府の當局者は必す地下に於て苦笑して居るに相違ない。歐米諸國の勞働組合史は殆んどこれと同一の事實を語つて居る。然も我國の當局者が前車の覆轍を見ながら、少しも後車の戒を爲さないのは如何なる理由であらうか。私は切に當局者の説明を聽きたいのである。

論者は或は言ふかも知れない。勞働組合の設立を自由に許して居る歐米諸國に於ても尚ほ工場法や勞働保險法によりて勞働者を保護して居るではないか、然らば勞働組合の如き自動的方法を許可しても、他動的に勞働的に勞働者を保護する必要は依然として存在して居るではないかと。勿論私は今日の場合決して保護政策無用論を唱ふるものではない。勞働組合の如きは其性質上一時に勞働者全部を收容することの出來ぬものである。即ち大工、左官、機械工といふが如き熟練を要する職工は賃銀も比較的高く、從つて相互保險のため相當の會費を納むることが出來且つ其職業が比較的安定して居るけれども、熟練を要せざる土方の如きは容易に組合を造ることが出來ない。故に獨逸の如き勞働保險法の保護を受けて居るものは千二三百萬人あるに拘はらず、勞働組合員は三百三十萬人に過ぎないのである。然し近年に至り熟練を有せざる勞働者の組合をも組織せんとする努力が充分に現はれて來たのであるから、漸次勞働組合はあらゆる勞働階級を網羅するに至るであらうと思ふ。今や勞働組合は其進步の道程に在るのだから、保護政策の必要なることは無論であるけれども、若し勞働者が悉く勞働組合を組織することゝなれば國家は全く其保護政策を廢止することが出來るのではあるまいか。同時に貧乏病は根本的に救治せられるのではあるまいか。

私は最後に全く異なれる方面から勞働組合の價値に就て一言して見たい。今後國家は如何なる方向に進行するかと考ふる時私は世界何處に於ても財力的封建制度の建設せられることを信ぜざるを得ない。武力的封建制度が倒れて今や金力的封建制度が漸次現出する樣になつた。これを我國に於て見るも三百諸侯倒れて今や三百の富家が此處彼處に割據して居るといふ有樣である。今日の岩崎三井は往時の前田島津よりも尙ほ有

力にして、早晩徳川の位地を占めて天下に號令する様になるであらうと思ふ。今日ですらも既に政治家、學者、教育家、宗教家は富豪の鼻息を窺ふて居るのであるから、今後全く彼等の爲に征服せられてしまうのは既定の事實である。此時に於ては單に富豪の御用を務むる政治家、教育家、宗教家あるのみであつて、思想の獨立も何もあつたものではない。此際に於て私共が唯一の希望と稱し得るのは勞働組合である。彼等は自ら相互保險をなし、自ら消費組合を設けて日用品を購ひ、自ら生産組合を組織して自己に必要なる物品を生産し、何等富豪の扶助を仰ぎ國家の保護を求むる必要はない。勞働組合は實に國家の中に獨立的存在を有する一國家である。將來完成せんとする財力的封建制度は或は此勞働組合の爲に致命傷を與へられるかも知れない。私共日本人は幸にして武力的封建制度を逃れ、僅に一息吐いたかと思へば、更に以前に勝りて殘酷なる財力的封建制度に捕へられんとして居る。私は我國民が勞働組合に於て其活路を求むるより外ないことを信ずるのであるから、私は特に勞働問題の根本的解決法として、同時に國家問題の解決法として勞働組合を論じた次第である。

△社會衛生論

醫學博士 文學博士　富士川游

社會上から人類の健康に關する事項を觀るには二つの方面がある。一つは病氣の社會的原因と、病氣の治療及び豫防に對する社會的處置の方面で、之を研究するものを社會病理學といひ、他の一つは、社會を成して集つて居る人類と其子孫の健康をよくして行かうと云ふ方面で、之を詳しく云ふと、空間的、時間的及び社會的に集團して居る所の人類又は實際的に集團をなして居る所の人類例へば兵隊、職工と云ふが如き人類の健康状態と社會状態との間の關係を研究して、而して其人々等の健康を保持し及びこれを增進するを期するので、之を研究するものを社會衛生學と云ふのである。

社會病理學では傳染病、生殖器病、皮膚病、心臓病、呼吸器病、消化器病、職業によつて起る中毒、レウマチス、齒の病、婦人病、乳兒病、小兒病、神經病及び精神病、それから外科の病、癌腫、眼の病、耳鼻咽喉等の疾病の社會に關した方面を研究するので、即ち社會的にいろ〳〵の原因があつて、其れが爲めに病氣の起つて來る場合を研究し、又其れを治療する社會の方に餘程關係することがあり、それから又病氣が社會の上に大變に關係を及ぼすことがある。其等の方面を研究するのが即ち社會病理學である。

社會衛生の方は一つの社會的集團をなして居る所の人類の社會状態と健康状態との關係を研究して、これによりて健康を上進さすることを期するものであるからして、其問題は廣く多岐に亙つて居る。試に其範圍を示して見ると、

第一、社會的健康狀態の因子（ファクトール）

（イ）人口の集成及び運動
（ロ）勞働
（ハ）榮養
（ニ）住居
（ホ）衣服
（ヘ）皮膚の養護
（ト）休息
（チ）生殖
　（一）遺傳
　（二）變性

第二、各個人の社會衛生的狀態

（甲）年齢的階級
（イ）母親
（ロ）乳兒
（ハ）遊戯期兒童
（ニ）學齢兒童
（ホ）青年及び壯年
（ヘ）老年

（乙）職業的階級
（イ）勞働者
（ロ）内職者
（ハ）婢僕
（ニ）商家小僧
（ホ）官公吏
　（一）鐵道吏
　（二）郵便吏
　（三）教師

第三、各個疾病と社會的及經濟的事項との關係

（イ）結核
（ロ）非結核性呼吸器疾患
（ハ）心臟病
（ニ）神經病及精神病
（ホ）酒毒
（ヘ）生殖器病
（ト）職業中毒
（チ）リウマチス
（リ）惡性腫瘍（癌腫）
（ヌ）消化器病
（ル）齒牙疾病
（ヲ）畸形
（ワ）天然痘

社會衛生は、以上のやうな項目について、諸種の方面から、各個人民の集團の健康狀態と社會狀態との間の關係を研究するものである。

第一の「人口の集成及び運動」と云ふものは人口統計の學問で、別に「デモグラフキー」と云ふ名が附いて居つて、人口稠密、年齢構成、人口の動態（婚姻、出産、死亡）の自然的及び社會的の因子（ファクトール）を調べるもので、此等の事項が衞生の上に實に重大な關係を有することは無論の事である。殊にこの中にて、目下、問題とすべきものは**女子過剩**の問題である。女子過剩と云ふ事は一體、歐洲の文明國では多數の國にこれを見るものである。我邦では女子過剩はまだ問題にはならぬのであるが、追々は女子過剩が現はれて來るかも知れない。

女子過剩と云ふものが、一體どう云ふ譯で出來るかと以ふのに、元來小兒の生れる時には男が多い、處が男の子は、生後直に多く死ぬるがために後に女の數が多くなるのであるが、併し大人になつてからの女子過剩はそんな事で無しに、他に相當の原因が無くてはならぬ、歐洲の學者の説を調べて見ると、女子過剩の主因は移住と云ふ事である。血氣盛りの力の强いものが外に出て行くから、女が多く內に殘ると云ふ事になる。そして女子過剩になると云ふと、男はその數が少いから、婚姻をするに譯はないが、女は結婚が六づかしくなるから其結果私生兒が增す、花柳病が蔓がる、賣淫のものが多くなる。之は社會衞生の上から大に憂ふべき現象である。今日の處、我邦では今日幸にまだ男が多いから此問題は起らぬが然し追々はこれも起るかも知れぬから、今から其事を考へて置かなくてはならぬ。

勞働の關係に於てもいろ／＼の問題があるが、殊に社會衞生の上より見て重要であるのは、勞働時間、收入と生活との關係、作業の關係、それから女子の勞働、更に又失業者の關係等である。勞働時間は一面には經濟上の問題であるが、一面には又社會衞生の問題である、收入、生活作業等の諸項も同じく社會衞生上から見て重大のものである。失業者の中にも疾病又は災害のために其業を失ふものがあつて、失業の原因たる疾病又は災害を研究し、及びその疾病又は災害を豫防することを講ずることは社會衞生上緊要のことである。

次に榮養の事について言へば、人類の榮養が健康狀態に關係のある事はよく分つた事で、榮養過剩の方は其人の肥胖を來たし、其結果いろ／＼の病的狀態即ち心臟病、血管病、肝臟病、皮膚病、レウマチス等を誘起するものである、併し之は金を持つた人の病氣であつて、社會衞生の方から云ふと、別問題である。社會衞生の方から矢釜しく云はなくてならぬのは榮養不足の方である。之は國民の衞生上、非常の大問題である。殊に子供の時には身體の發育が盛であるのに、此時に榮養が足らぬと其發育が停まる。一旦發育が停まると其後幾ら榮養をやつても發育せぬ。そこで殊に西洋などでは貧困の學齡兒童に學校から辨當を遣る方法を採つて居る。一體榮養の不良は身體の發育を害し、精神作用を鈍くする上に、外から來る黴菌に向つての抵抗力を弱くするものである。例へば發疹チフスの如きは腹が減つて榮養の惡いものに起るものだから、一名饑餓チフス又は饑饉チフスとも云ふ。日本で近頃起りたる發疹チフスも東北の饑饉の地方から始まつたものと認められた。又戰爭などをすると饑

を食はぬ事が多く疲れが甚しく、榮養が衰へるので、よく發疹チフスが起る。それで又、別名を戰爭チフスとも云ふ。今度の歐洲戰爭に於ても已に出て來て居るやうである。又監獄によく出る故に監獄チフスとも云ふ。貧乏の爲めに――榮養の分量の足らぬ爲めに起る病氣の多いと共に又食物の性質のわるい爲めに起る病氣も澤山ある。例之、戰爭で籠城などをした時には野菜の缺乏の爲めに壞血病を起す。先年の旅順の籠城などの時は露兵が澤山之に罹つた。又北海道の雪の中で一種變つた病氣の出るのも食物の關係からである。故に之を救濟する社會的組織即ち購買組合等を設くるか、若くは一定の方法によりて食物を安くし、下層人民の榮養狀態をよくすることが社會衞生上の急務である。

次に住居の問題。住居の身體に衞生上の關係を有することは何人も知る所である。溫濕な家陰暗な家屋の如きは殊に其害が甚しい。住居のわるい爲めに起る病氣は生殖器病、貧血、急性傳染病等である。急性傳染病の流行る時は何時でも貧民窟が其中心になる。殊に最も甚しいものは結核で、今日の有樣では結核と云ふものは已に住居病となつて居る。結核はもと／＼結核菌から來る病氣で、傳染病の一種であるが、既に廣く世間に蔓延した今日の狀態では、傳染病と云ふよりも住居病として取扱ふことは社會衞生上、適切である。コツホ博士なども住居と結核との關係を矢釜しく云はれた。それで今日結核豫防の事業が諸方に起つて、咳唾を何うとか命令して居る。それは無論必要に違ひないが、それ丈けではどうしても結核の撲滅が出來ぬ。本當に結核を豫防するには貧民の住居を立派にすることが急務である。之は實に金のかゝる非常の大事業であるが又實に社會衞生の上の最も重大な問題である。東京の貧民窟などを見ると、一疊の中に三四人も居つて、夜具なども三人で一枚を引張り合ふと云ふやうなのがあつて、意想外に不良の狀態にある。その爲めに傳染病として取扱ふ豫防法は其効果薄く、住居病として實際の撲滅法を講じなくてはならぬ。結核豫防會などでもどうか上つ面の事丈けをせずに根本的のことに目を著けて貰ひたいものである。又住居が狹くして多數人が一所に居る結果は花柳病、トラホーム、貧血などに罹ると云ふ重大な關係がある。殊に都會の住居の改良問題は目下焦眉の急務である。

衣服は住居の小さなものとも見ることが出來るが、之も衞生の上に關係のある事は云ふまでもない。殊に下等人民の衣服はどう云ふものがよいかと云ふ事は社會衞生上考ふべき問題である。日本人は今追々洋服を着、下等の勞働者にも洋服を着るものが可なり多い。獨逸ドレスデンの醫者のドクトル・ワイスワンゲン氏は、日本婦人の衣服の事を研究して日本の着物が大變よい事を褒めて居る。氏の外にも日本の着物を褒めて居るものが少くない。少くとも日本の勞働者の腹掛、袢被（はつぴ）などは勞働服として適當のものと云はねばならぬ、此よい物を單に西洋模倣の爲めに捨てるのは、經濟上からも社會衞生上からも考を要すべきことである。

次に皮膚問題であるが、日本人は昔から混浴をなし、又熱い湯に度々入る。外國では混浴は中々行はれ難いが、日本人は多年の習慣で混浴は平氣である。嚴密によべば黴菌などが混浴によつて――湯の中よりも寧

ろ其出入の前後に於て――傳染することがないでもないが、我國に於ては入浴は下等社會の社會衛生上最も簡便にして且經濟的の方法であるから、私は社會衛生上、日本の混浴は今のまゝでよいものと考へる。(浴場其他設備の改善は別として)、西洋でも追々は日本の風を餘程取入れて混浴にするかも知れない。現に獨逸では公泉浴(フォルクスベーデル)を作る爲めの會即ち獨逸國民浴協會と云ふものが出來て居る。幸に我國には昔から此風があるのだから之を保存するがよからうと思ふ。

次は休息の問題。休息が精神及び身體の仕事に必要なるは勿論であるが、我國の習慣はノベツ幕無しに人間を働かせて居る。一日に一定の休憩の時間を作り、一週に日曜があると云ふやうにしなければならぬのに我國の工場などでは餘りに使ひ過ぎて居る。其結果は只働いて居るといふ丈けで、實際の能力率といふものは衰へて居る。之は休養といふ事と大なる關係のあることで、西洋人が日本へ來て、日本の勞働者を見ると、其手先の器用な事と其勉強な事とには誰しも驚くけれど、善く調べた結果、案外、能力率の少いのに復たしても一驚を吃する。之は全く其使ひ方に因るのであつて、精神及び身體に要する相當の休養がいかに必要であるかといふことが解ると思ふ。

次は生殖の問題である。社會衛生の上から生殖を論ずるのは、生れた子供を好くしようといふことに歸する。即ち遺傳の方則を利用して好い子供を生むやうにすることである。善種學(ユーゼニックス)がそれである。遺傳の原則は定つて居るし、又一定の體質の遺傳することも分つて居るから、之を妨ぎさへすれば生れる子供は好くなる道理である。ところが此生殖の問題について注意すべき重大な問題は變性(Logeneration)といふことである。變性とは兩親に惡い病氣又は不良の點あり、それが遺傳して生れた子供の體質が惡くなることをいふのである。兩親の病氣とは例へば花柳病、酒毒、結核、精神病、神經病とかをいふので、其他婚姻の不適當な原因の爲めに生れた子供に變質を呈し、その體質が不良となるのである。而して其變質の異つた子供の身體には必ず變質の徵候がある。變質の徵候といふのは、頭の形が變つたり、眼や鼻や口や耳などが畸形であつたり、毛髮が早く白くなつたりして色々の變化が表れるのをいふのである。此變質の徵候ある子供は大きくなつて、普通の人間と精神病者との中間位の人間にある。これが異常な性格を持つて居つたり、或は其變つた性格の爲めに、反社會的の行爲をしたりする。所謂不良少年がそれで隨分社會に迷惑を及ぼす犯罪者ともなるのである。近頃日本國民の體格が一般に惡くなつたといふやうなことをいふ人もあるが、私共の調べたところに依るとそれは認められぬ。只變性のもの、即ち不良の體質を持て居るものが學生及び徵兵不合格者に澤山にあるといふことは明かである。體格が惡くなつたといふことは首肯し難いけれとも、變質者が多いといふことだけは明白な事實である。これが色々良くない犯罪をするに至るのであるから、此點は深く注意をしなくてはならない。

それから遺傳の原因を應用して生れる子供を良くする運動、即ち善種學(ユーゼニックス)の運動は、まだ日本では實際に現はれないが、米國では已に遣つて居

る。結婚等も一定の場合には禁ずるし、犯罪人又は白痴者には結婚作用を取らせぬといふことを遣つて居る。これは早晩社會衛生の上から問題にならうと思ふのである。更に此方面に喧かしいのは所謂二兒制（ツワイキンデルシステーム）である。これは子供が多くては、教育上、經濟上で困るから子供を餘り多く拵へないといふのである。これには出來た子供を殺すのと、子供の出來ぬやうに豫防するのと二つの仕方である。生れた子供を殺すといふやうなことは我國でも或地方では昔からあつた。今でも此習慣がないとは言へないと思ふ。それは地方によりて死産の數か著しく多いといふ事實を見て、推定せられるのである。關西ではマビクと言つたり、關東の或地方ではお返しをすると言つて、産婆が出産の場合に鼻孔や口に濡紙を張つて分らぬやうに遣るのである。其外我國では姙娠の豫防をせずに一定の時期に墮胎をする。私生兒や或は密通等をして子供が生れる場合に耻や外聞の爲めに行ふ墮胎は今こゝでは論じない。それ以外に夫婦間に於て或は殺したり、或は墮胎をしたり、或は避姙をしたりすることがある。西洋で、姙娠を豫防するのは近頃のことで、新マルサス主義といふのである。然しながらマルサスの唱へた人口と食物との增加率の間違であつたことは今日何人も知つて居る。人間が殖えれば食物が減じ、食物が減ずれば人間の殖え方も緩漫になるから、マルサスの云ふやうに人間が無限に殖えると云ふ事はない。然しながら、親にわるい病氣がある場合は勿論、又餘り多くの子を有つて居ると經濟上の關係からしても良い教養を與へる譯に行かぬから二兒制にすると云ふ議論も出て來るのである。之は歐洲では重大な社會問題となつて居る。

第二の各個人の社會衛生狀態についてもいろ〳〵論ずることがあるが、先づ第一に母親の問題に大いに考へなくてはならぬ。母親になる時期は大抵十六七才からして四五十才、即ち月經が始まつてから終るまでゞある。此母親になれば身體に一種の變化が生ずるが爲めに男子よりも弱くなる。それで勞働をすると害がある。殊に姙娠中、月經中は其害が殊に甚しい。獨り其母親自身の體にわるいばかりでなく、其胎兒にも害が及ぶ。又産後早く職業に就くのもよろしくない。そして仕事をすると乳の出る力にも關係を及ぼす。夫れ故に婦人の勞働は餘程注意を拂はなくては可けぬ。近頃は日本でも鐵道とか電話とか商店とかによく婦人を使ふのであるから實際問題として研究する必要がある。獨逸などの調べによれば、婦人の勞働者はどうしても、病身になつたり、神經衰弱に罹つたりするものが多いさうである。それで同國では貧乏人の産婦に只で之を收容する所がある。

次に乳兒の問題であるが、乳兒には母親の天然の乳が一番よく又理想的であるのを、近頃の人は、少し金でも持つと、牛乳で育てることをやる。又社交だとか、容色が衰へるとかで自分の乳を飲まさぬ女が澤山になつて來た。其結果子供の腸がわるくなり、遂には死亡するものさへある。又其爲めに母親の方も乳が遂に出なくなることがある。之は社會衛生上重大な問題である、今日獨逸では母親に自分の乳をやることを奬勵し、やつたものには賞與金をやる制さへ設けて居る位である。一昨年頃

我が邦でも高等女學校卒業生の婚姻したものに、其乳を飲ます人を調べられたが、段々飲まさぬ人が澤山になつて來た事が分つた。之は大いに研究し注意しなくてはならぬ事と思ふ。殊に乳兒死亡數の増加は社會衛生上大に憂ふべきことであるから、乳兒保護の問題が八釜しくあつたのである。

次に遊戲期即ち幼稚園に於ける小兒の衛生については最も傳染病について注意しなくてはならぬ。今日では其方面が多少忽諸に附せられて居る傾があるから今後はもつと注意して欲しいと思ふ。

次は小學校の兒童の衛生は、最も兒童の體に注意しなくてはならぬ。兒童の體を度外視して、教育の形丈けをやるのが今日の傾向である。現に學校で掃除問題など起つて居るが、教場は確實な方法で清潔にして置かねばならぬのにそれを子供にやらせるのなどは不都合である。掃除の風習は子供の德育上必要だなどゝ云ふ議論もあるが、多くは後から附けた辯護說である。現に獨逸では年を老つた女學生に掃除をさせることさへも學校衛生學者は矢釜しく云つて居る位である。小學校の兒童の掃除は無論之を癈すべきものと思ふ。

第三の各個の疾病及び畸形等については今之を委しく述べることを廢め、最後に社會衛生の上から病氣を豫防し或は治療して一般の健康を保持増進するにはどう云ふ方法を採るべきかを概括的に列擧して此お話を終ろうと思ふ。

第一に下等社會の社會的地位を高むる方法を採ること（獨逸には其趣旨の令が出來て居る）

第二は勞働者保護の爲めに一定の法律を設くる事

第三は母親保險、即ち母親の勞働に從事するものをして其生活の困難に對して用意をさする爲めに設けたる保險（之も獨逸でやつてゐる）

第四は失業者の保險

第五に健康を増す方法及び疾病を豫防する方法を採る事

以上は健康を保護する上に於ての注意であるが又病氣を治療する社會的方法として注意すべきは

第一、疾病保險

第二、災害保險

第三、醫師病院の制度の改正

第四、産婆及び非醫者の取締

等である。第三の事について少し話したい事は、貧民はよく醫者の藥を飲み倒す。今いろ〱貧民に宛てた慈善病院のやうなものがあるが、立派な王侯貴族の邸宅のやうなもので、其患者も實際の貧民よりは寧ろ中流のものである。矢張り貧民を救ふものは官營にした方がよいと云ふ說が獨逸などには行はれる。又第四の産婆もシユワイツのチエーリヒでは市營の産婆がある。又非醫者の跋扈を妨がねばならぬのは、貧民が病氣に罹つた時社會衛生上害がある。殊に非醫者の最も害をなすのは疾病の統計を誤まることである。一體疾病の統計は、疾病の豫防及び治療に大

關係があるものであるのに、非醫者に罹るものが多くなると、本當の統計を得られず、其結果國民の疾病治療上に大害を與ふるから、之は大いに注意しなくてはならぬ。

次に廢疾、不能力者、及び老人等も社會衛生上保護する機關が必要である。又貧民救助をなすの必要がある。大體に於て社會衛生の問題は總ての方面に於て最も重大な問題で、且つ皆我國刻下の實際問題であるから、どうか世人が今少し此問題を注意研究せられんことを切望する。(七月五日)

本社員と稱する詐僞漢に就き急告

鹽崎某或は淸水某と名乘る者、數月前より京阪地方を徘徊し、中央公論記者又は本社特派員と稱して巧みに本誌購讀料前金を詐取せる罪跡近頃に至り頻々として發覺致候。右者本社と何等の關係も無之、同一人の僞名か、或は別人の所爲か、其邊は未だ判明せざるも、いづれにしても弊社の名義を利用せる惡むべき不德漢の所爲には相違無之候に付、京阪地方の讀者は勿論、全國一般の讀者に於かせられても、此際特に御留意被下度、尙本社に於ては今後ともに編輯以外の事務に關して特派員又は勸誘員を派遣するが如きは絕對に無之事を玆に明言致し置き候へば何卒左樣御承知被下度候右至急公告候也

七月十五日

中央公論社販賣部

大正時代の新道徳

進歩的道徳論

法學博士　浮田和民

△新道徳の特質

道徳は理論上から言へば普遍的な、萬古不易の性質を有つものには相違ないが、實際上から言へば相對的なものであつて、即時と處とに依つて變化するものである。即社會の狀態、世界一般の大勢に伴うて變化せねばならぬところのものである。一つの時代に適應する道徳が必ずしも他の時代に適應するものでないことは歴史上の事實である。そこで維新前の我道徳が維新後の今日も尙間に合ふとは限らない。明治時代の道徳では、最早大正以後の日本の道徳として勢力を有しないといふことになる。勿論一國といふものは道徳的の歴史を有つから、其間には一貫した共通の道徳といふものが無ければならぬけれど、其道徳の實現する形式は千變萬化し得べきものである。要するに大正年代の道徳は保守的道徳よりも、進歩的道徳を要することは言ふまでもない。保守的道徳も道徳の基礎としては缺くべからざるものではあるが、今後の道徳は世界の大勢に從つて進化するところの道徳でなくてはならぬ。而して其進化は一國の發達、人民の膨脹、社會の改善となるやうの功果を擧ぐるものでなくてはならぬ。即進歩的道徳でなくてはならぬといふ所以である。

而して其進歩的とは何ういふ意味かといふに、今日の社會は最早貴族平民の階級を打破した社會である。勿論華族もあり、士族平民の稱號も今日尙殘つてはゐるけれど、此等は過去の遺物であつて、華族は單に國民の爲めに功勞のあつた人といふのみで、何等門閥系統に限つたことではない。才能實力さへあれば誰でも華族に成れる譯で、其根本は平民主義であると云つてもよい位である。ところが、從來の日本の道徳は全く此貴賤貧富老若男女の別を基礎として成立つて居つた道徳であるからして、所謂貴族的道徳であつた。此貴族的道徳は今日の時勢には間に合はない。華族や貴族院議員といふやうな者の位置は唯國家が、功勞に對し又は學識及財産に對する尊敬を基礎として居るやうであるけれども、華族も貴族院議員も人間として一般の平民より尊いといふ觀念に基いて居

るものでは決して無い。又今日の社會は交通自由にして、內外人の往來頻繁であつて、一々人間の身分や財産や學識等を糺して交際するやうな悠々閑々たる社會ではない。誰彼の差別なく、如何なる人間とも交際し提携し又は協同せねばならぬ繁忙な世の中である。政治上經濟上又其他あらゆる人生の活動に於て、人類平等觀を必要とする時代である。斯くの如き時代に維新前の貴族的道德を鼓吹しても、何等社會の進歩發展に貢獻するところ無きのみならず、却て其進歩發展を阻害するやうなことになるのである。要するに新道德は總ての人を人として待遇し得る道德でなくてはならない。此根本道德が國民道德の基礎とならざる間は、政治上宗敎上又社交上種々なる風俗頽廢の現象を見ることは覺悟せねばならぬことと思ふ。今日の日本には維新前の如き貴族を尊敬し、貴族の權威に依つて社會の秩序平和を保つといふやうな力はない。而して未だ新道德の要件たる人格の尊厳といふ意識が成立つて居ないから、實業家は只黄金の貴きを見て黄金以上に人間の尊き價値あるを知らない。政治家は權力の前には人格を犧牲にしても顧みず。或は權力を得る爲めには如何なる方法手段を用ふるも厭はずといふ國際政略のマキアベリズムが社會一般に行はれて居る有様である。之は舊道德瓦壞して新道德未だ組織せられざる過渡時代の通弊といふものである。玆に新道德の必要なる二三の例證を掲げて、讀者の注意を呼起したいと思ふ。

△政治上の新道德

之は今日總選擧などの行はれた場合であるから、識者は言ふ迄もなく如何なる道德が必要であるかといふ事は知つて居る事柄である。然しながら、人民の選擧權を正當に用ゐなければならぬといふやうな事は抑々政治道德の實際問題ではあるが、理論上から言ふと根本問題でないから玆には略する。政治道德の根本問題且實際問題といふべきものは忠君愛國の新觀念を建設することである。從來の國民道德は唯君主は尊い者である、國家は難有きものであるといふのみで、何故に君主の尊きか、國家の難有きかを解說することをしなかつた。又維新前の日本に於ては之を解說するの必要は無かつた。何人も社會の構成に就いて根本的批評を下し、或は道德の原理を哲學的に分析する者もなく、又其必要もなかつたのである。五倫の道さへ踏み外さなければ其倫理の根本を穿つ必要は無かつた。然れども今日は懷疑の時代、批評の時代、言論自由の時代であるから、忠君愛國の道德に至つても其根本を穿つて之を明白にするの必要がある。

然し今玆に其理論を解說する暇はないが、從來の政治道德なるものは宗敎に基いて居つたものである。即日本國民の忠君愛國なるものは祖先崇拜を中心として居る。日本國民固有の祖先崇拜に根柢を置いて居たものである。忠臣藏の判官の屋敷を義士の面々が引上げる時に『御先祖代々、我々も代々』と言つて城明け渡しを殘念至極に思つたのである。即君臣の道は先祖代々の感情を基礎として其情誼に依つて維持されたものである。そこで、從來我日本國民は何故に皇室に對し忠實を盡さねばなら

ぬかと言へば、我皇室は二千五百年來日本民族の宗主にして、日本國民は皇室と一體の人民也といふ事に外ならなかつた。從來の日本であればこれで忠君愛國の基礎は十分であつたのである。日本國民くらゐ祖先を崇拜する人民であれば、先祖代々君主と仰ぎ奉る主家に對して不忠を存する者はない。普通の教科書や教育家は今尙日本國民の根本道徳として、先祖を尊び、又先祖の事へたる皇室に忠を盡すべしといふだけで十分であるかの如く教育しつゝあるのである。然しながら今日の如く、文藝上宗教上政治上又は哲學上、社會の各方面より新思想の襲ひ來る時に方つて、祖先崇拜の基礎の上に國民の政治的道徳を建設せんとするは不可能な事である。祖先は何故に尊ぶべきかといふ事に就いては一考を要すべき餘地がある。殊に内地の外に新附の領土甚だ多く、大和民族と其崇拜する祖先を異にする者尠くない。同じ人類の事であるから結局同じ祖先を有するには相違ないが、白色黃色黑色等の人種に別れ、歷史を異にし、宗教を異にし、近頃まで國籍を異にしたる新附の人民に對して祖先崇拜を以て其道徳を勸めることは、日本の國民道徳上危險なる結果を生ずる惧がある。内地に於て教へるが如き教へ方を以て朝鮮人又は臺灣人に教へる日には、彼等は寧ろ日本國に叛き、日本國より獨立するを以て其祖先に對する義務本分也と理解するであらう。日本と朝鮮とは民族關係甚だ近く、日本人中朝鮮の歸化人を先祖と爲す者多く、又之を公言して憚らざる者も有るけれど、朝鮮人の身となつては寧ろ朝鮮舊王家に忠實なるを以て其祖先に對する臣子の本分也と思ふ者も多くあるであらう。日本内地に於ては弊害が無いやうであつても、之を朝鮮に施して弊害のあるものは、日本内地の道徳原則としても決して健全なものでない事は明かである。臺灣人とても同じ事である。人種の關係から言へば日本人とは何等差別する處がないから、祖先崇拜の原則に依つて行く〱は國民道徳の原則が成立ち得るやうに思はれるけれども、現今に至る迄臺灣の生蕃人などは一切部落以外の權力者に服從せざるを以て祖先以來の習慣となしたのであるから、彼等は日本人に服從するを以て此上もなき恥辱となし、日本人の首を取るを以て無上の光榮となし、其祖先の靈に報ゆる所以であるとするに至るのが彼等の間に於ける祖先崇拜の必然的結果である。

斯くの如く祖先崇拜の基礎の上に立つては、日本國民全體の道徳を完全に成立せしむるとは出來ない。況んや今日は日本國内到る處歐米の歸化人民を見るに至らんとしつゝある時代であるから、日本内地に於ても又は新附の領土に於ても祖先崇拜の上に國民道徳を建設することは出來ない。又た内地人であつても、今日の如く生存競爭激烈にして生活問題に困難なる世の中になつては一般に祖先を祀り、祖先の墳墓を莊麗にし現在の生活問題を顧みることなくして、日夕祖先を崇拜するやうな宗教は將來に於て其信仰の勢力を持續すること能はざるは必然の事である。現在及將來の實際問題は、祖先を顧みるよりも先づ自己の獨立及子孫の養育を考へなければならない。自己の獨立全く、子孫の養育さへ出來れば祖先の名譽は自然に擧がるやうなもので、故らに今後祖先崇拜の宗教

を繼續する必要はない。又繼續した處で今日の如く日本國内の社會組織が複雜となつた以上、之を以て國民道德の基礎となさんとするは却て國家の統一及秩序ある進歩を阻害するやうなことになるのである。

故に政治上の新道德は、國家は國民の幸福を圖り、人民の爲めの君主にして君主の爲めの人民にあらざることを實際上及理論上明白ならしめ而して實力ある國家は人民各自の幸福及其人格を維持するに必要なる事を知らしむるの外他に方法は無いのである。朝鮮に於ける又は臺灣に於ける日本の權力の基礎は日本の皇室及國家は何處までも朝鮮人及臺灣人の幸福を圖り、彼等が人間としての活動及運命を全うするには此皇室に事へ此國家に忠實を盡すに在る事を漸次自覺せしむるやうに、彼等の上に善政治を施し、又善教育を行ふ事である。而して内地に於ける教育の原則も亦之と異るものを用ふることは到底現在及將來の社會が許さゞるところである。

△家族上及社交上の新道德

舊道德に於ては貴賤階級の別を基礎とし、而して結局家族は家族の祖先を崇拜する宗教に根據し、又社會は一般に崇拜する處の先祖傳來の宗教を基礎として居つたから、舊道德は久しく家族の制度を維持し又之によつて社會の平和秩序を保つことが出來た。ところで今日は家族制度といへば先づ夫婦子供だけを以て組織せらるゝ狀態となつた。成育の後は父母兄弟一家に住むことは勿論、一地方又は一國内に住居することも不可能な世の中である。親は郷里に止まり、子女は他郷に移住し、兄弟姉妹天涯地角に別れて活動せねばならぬ世の中である。而して神儒佛ばかりでなく、耶蘇教又は其他の宗教も自由に行はれて居るから、同じ家庭の内にも異種の宗教が信仰されて居る。到底一の宗教を以て家族及社會の道德的基本とすることは出來ない。要するに宗教は自由、信仰は隨意に放任し、而して何ほ互に或は親子、或は夫婦、或は兄弟、或は朋友、或は子弟として交際をなし得るやうに國民道德を養成せなければならぬ即人間私交上に於ては人種又は民族を問はず、人類として必要に應じ境遇に從ひ、共同生活を爲し得るやうに、道德の基礎を築き又道德の修養を積まなければならぬ。即天地の間に生れたる人類は老若男女又は人類の異同を問はず、同じ人類であるから人類として之と交り、互に各自の人格を尊敬し得るやうにならなければならぬ。我も人也、彼も人也といふ人格の意識は總ての人に養成されなくてはならない。即男子にせよ、女子にせよ、又は國務大臣にせよ、車夫人足にせよ、或は生理上の分業或は能力上の分業をなして居るまでにて、人格としては何れも尊く何れも卑しむべきものでないといふ自覺の上に國民道德を建設するより、家族及社會の將來に於ける進歩發展を期するの道は無いのである。

△實業上の新道德

今後の社會は經濟上の關係が最も大なるものであるから、實業上に於ける新道德を養成することは今後日本實業の發展する上に最も缺くべか

らざる要件である。從來の如く日本人が只働かずして生活し得る狀態を理想となし、一般に勞働を卑しみ、成るべく人を使ふ事を名譽とし、人に使はるゝ事を耻辱とする間は實業の發展を期する事は出來ない。殊に宗教的又は人種的習僻に囚はれ、容易に他の人種及他の宗教を信ずる者と一致協力する能はざるやうの狀態では實業の發展を期することは出來ない。實業に於ても各人獨立自尊の觀念が無ければ眞に實業の健全なる基礎を築くことは出來ない。日本人は口には金錢を輕蔑するけれども、實際には金錢の爲めに人格をも犧牲にする者が多い。是れは何れの國民も同じことではあるけれども、英米人は口にも亦思想にも黄金を貴び、而して其實際は之れが爲めに却て人格の自由獨立及發展を完成して居るものが少なくない。今後日本國民として實業上第一に學ばねばならぬ事は勞働の卑しむべからざる事、及金錢の貴き事である。勞働の貴きは人格及人格の種々なる能力を開發し又完全ならしむるからである。勞働の結果として得たる正當の金錢は人格の權化にして、獨立自活の尊き記念なるが故である。從來の武士道にて名譽を重じたるは、是れ戰國時代に於て人格の尊嚴を保つ唯一の方便であつた。今とても名譽は尊きものであるけれども。其名譽は戰爭の名譽のみに限つた譯ではない。實業上利害得失の岐に立つて人格を傷けざることは武士道の名譽と同じく實業上の名譽である。商業上では特に之を信用と稱して尊ぶのである。正直は最良の政略也といふは此事である。尤も政略の爲めにする正直は餘り高尙なる道德ではないけれども、實業家が人格を重んずるの結果正直を以て最良の政略となすに至りては、商工業の發展と國民道德の實況と相俟るべからざる事を證明するものである。アングロ・サクソン民族の品性有つて始めて英米人の實業あり、獨逸國民の品性有つて始めて獨逸國民の商工業を見る事が出來る。凡そ人たる者自己の勞力に依つて生活するを無上の榮譽となさず、他人の恩惠に依賴し又は他人の功勞を偸んで自ら生活するを厭はざる如き卑屈奴隷的根性が人民の間に横たはる間は實業の健全なる發達を見ることは出來ない。今後の實業は國民的であると同時に世界的であるから、二個の矛盾せる特質を調和して之を實現し得るだけの克己自制を必要とするものである。即經濟上の利害得失は或意味に於ては人類共通であるからして、信用の發展は今日世界的である。日本の運轉は世界的信用の動機に因るものであつて、或場合に於ては人種宗教又は國籍を問ふの必要はない。苟も人道に反せず、苟も愛國の道に反せざる以上、如何なる人種、如何なる宗教、如何なる民族又は國籍に屬する人とも胸襟を開き、資本を合同し、互に克く一致協力し得る圓滿なる國民性を發揮せねばならぬ。而して之と同時に國籍を同じうする同胞は法律上又は經濟上の狀態を異にする外國の商工業者と大に競爭を爲す必要を生ずるものである。斯くの如き場合には同國人間の競爭を停止し、同業者相互に一致協力して外國の商工業者に當らなければならぬ。即人道に叛せず、愛國の道に反せざる場合に於ては、日本人が支那人或は歐米人と提携協力し得るだけの雅量及快活なる品性を有せねばならぬけれども、例へば支那に於ける日本の商工業は歐米人を競爭者として努

力せねばならぬ地位に居るから、如斯き場合に於て日本人同士が相互に競爭し、個々の小資本を以て個々の小會社を設立し、一方には日本人同志競爭し、而して一方には歐米諸國の商工業者と競爭する如きは淺見短慮なる擧動と謂はねばならぬ。如斯き場合には日本の商工業者は一團となつて結合し、而して外國の商工業者と競爭せねばならぬ。但し之は外國人を憎み、異人種を嫉忌する偏僻に基いてはならぬ。一方に於ては人類博愛的の精神を以て、如何なる外國人異民族とも利益の一致する場合には握手提携するが、經濟上公平なる商業道德に依つて如何なる民族人種とも競爭を必要とする今日である以上、同國民の經濟的利益上一致團結を要する場合には擧國一致大合同を爲して外國商工業者に當らなければならぬ。然るに前述二個の一見矛盾せるが如き實業道德は實際に於て其甚だしき弊害を實現して居るのが今日我國民の實業上に於ける道德狀態である。今日まで一般に行はれて居る國家教育の教科書や教育法では此矛盾衝突を融合調和して、現今及將來の實業を發展せしむべき其基礎となるものが見當らぬのである。國民教育の根本的改革は我國目下の最大急務といふべきである。

新道德の根幹

文學博士　三宅雪嶺

大正時代と言うて急に明治時代と變る譯でなく、過去の繼續たるは云ふまでもないことながら、常に幾何かの變遷あり、特に進步の跡が見えて、或は期限を限つて前と何れ程の違ひあるかを察することが出來る。大體に於て一定の方向を指して居るが、絕えず眼前に問題が起り、其著しいものが人の注意を惹くこと、近い低い山が遠い高い山を遮るやうなことがある。今は大正四年となつて居つて、尙ほ未だ曾て正式に豫算の成立したことなく、近き特別議會で急場を凌ぎ得た程であつて政界に穩かならぬところがあり、而して前内閣の倒れたのも、政治問題よりは海軍の腐敗に關聯したのに因り現内閣も相應に政治問題の湧き出でたものゝ、致命傷とし恐れられるのは閣員關係の瀆職問題である。裁判沙汰がいかに終結するかの解らぬにしても、要路の大臣が屢々引合に出るのは容易ならぬことであつて、此儘御大禮に臨み得るかゞ頗る疑はしくなつて居る。内閣の交迭は主として政治問題を以てすべきであつて、道德問題を以てするのは異例に屬すのに、近頃兎角不德を責められて危くなるのは我國政を擔任する政治家の身にとりて甚だ遺憾の次第ではないか。何故に近頃大臣の悖德が問題になるか。政治家の德義心が衰へたのか。又は一般公衆の德義心が高まり大臣の不德を默過して居らぬが爲めか。見やうに依つて色々になる。日本が社會的に進步を續けて居る以上、大臣の悖德が問題となるのはそれだけ進步したものと見ねばならぬが、何にしても悖德は悖德であり、又他の點に於て社會の進步を害する者官職を濫用し政府の威信を傷け、延いて國家の體面を潰すやうな者は十分に

處分し得るやうにならねばならぬ。どうせ何時迄經つても悖德漢の種は盡きず、問題が喧しくなれば今後手を變へて秘密に施し得るやうになるが、それはその時、今は今で處分を要する。それにしても政治家たるものが成るべく不德の事無いやうに注意するが望ましいのであつて、前例あるから自分も犯して差支無いと思ふのは大なる間違ひである。惡い前例を改めてこそ後繼者たるの職務を果し得るのであつて善い前例に守つても、惡い前例は斷じて改めるといふ覺悟なくてはならぬ。

扨て公德といふが、頻りに問題になつたが、多くは些細の事柄であり、落書せぬとか、公園の樹を折らぬとか、道を行くのに左側を以てするとかいふことであつて、何れも惡くはないが、問題として小さい。公德はさる小さい問題ばかりであるか。官吏として政治行政に與る者が職分を等閑にし、弊害を國家社會に及ぼすが如き、最も戒むべきであつて、國民の選良として衆議院に列する者が、車夫馬丁さへ驚くやうな騷ぎをする事も戒むべきであり、剩へ政府與黨として反對黨より騷々しく騷ぎ立つなど、政府の何たるかを解せぬ者とも見ゆれば、宜敷く深く戒むべきである。小さな公德を捨てゝおくべきでないにしても、大罪を小罪より重く見ねばならぬならば、もつと大きく眼を着け、先づ政治道德を高めるに努むべきである。商業道德の必要など言うて、今の商人の不德を歎じたりするが、四五十年前まで士族が全權を占めて居つて、商人は犬猫のやうに思はれて居つたのである。上の好む所下之より甚だしきは無しといふ社會狀態で、政治が腐敗して居つては誠に止め度がなく、何でも上から改めて貰はねばならぬ。是れ迄私德が備つて居つても公德が行屆かぬといふやうなことであつたが、此後は其の公德の大なる者即ち政治道德に意を致すべきである。

然しこれは部分的の事であつて、日本の社會全體として幾分づゝ變化して居る。鎖港時代には內國に限つて居つたのに明治に入つて世界と交際し、世界に事業を爲すに傾き、年を逐うて愈々其勢力の進むのを見るが、世界の競爭場裡に出づるとして、人々故鄉に戀々として居ることが出來ず何でも事業を爲すに是も適當な地を選ばうとし、場合に依り日本を去り、他國に歸化するといふことを思ふやうになつて來た。內地に閉籠つて居つては手が延びぬ。人間到る處靑山あり、五洲の何處で死んでも構はぬといふ意氣を壯なりとする。從つて忠君愛國といふにのみ拘つて居れず、世界的に着眼し、世界的に行動するのが當然であるといふ說が力を得やうとして居つた。世界に於ける人類としては勢ひ個人の自由に最も重きを置き特に就職難生活難の聲に勵まされ、從來の家族主義國家主義と撞着せうとしたことがある。少なくも個人主義に傾き、愈々其度を高むるの勢は到底妨ぐべからざる形を呈した。ところが偶々歐州大戰亂が起り、前に國民悉く個人主義であり、利己主義であると見えた國々が各々日に二三千萬圓、若くはそれ以上を費し、尙ほ總てを通じて何百萬といふ死傷者を出し、此先き何れ程に上るか圖り得られぬ。而して獨逸人の米國に歸化した者は全く本國を忘れて了つたと云はれて居つたのが戰亂の勃發してから頻りに活動し、米國の政治的輿論を動かさうとし

て居る。東洋に來て居つた英佛人で徵兵年齡なのは皆勇んで歸つて往つた。コスモポリタン的に道德無視國家無視の小說を書いた者が進んで從軍して居る。何かにつけ日本で前に想像して居つたとは違つて居る。實に前に考へて居つたやうに單純でない。國家社會の事は一朝一夕で變るべきでなく、變化の表れるのは由つて來るところの久しいのであるが、他國の大なる變動は常に幾何かの變動を及ぼすものであつて今回の戰亂も必ず及ぼす處があらう。いかに及ぼすかといへば、人々個々に力を具へると同時に、國家的又は民族的に固らねばならぬといふ念が强くならう。家族主義にしても、國家主義にしても、個人が力を蓄へ力を伸ばすとが必要であつて、有力なるもの丶出るのは家族として幸ひであり、國家として幸ひである。有力なる者が多ければ多い程愈々幸ひである。ならう事なれば悉く有力であつて欲しい。有力とは人の力を借りなくとも、已れ自ら自由に運命を切り開き得る事である。何程智識があつても、何程才能が有つても、人に賴らずして立行かぬやうな者は相集つても大なる力を發揮することは出來ぬ。個々人々、各々自ら恃み、自ら勵み、自らの力を伸ばすといふが肝要である。此意氣が益々壯んにならねばならぬ。然し世界は人類が個々人々に存在して居るものでなく、各々國を別にし之に屬して居る。或國の範圍を脫すれば他の國の範圍に入るの外ない。人間の住居し得るところで全く無所屬の地が無い。日本を脫しても、つまり日本を離れることは出來ず、離れて個人的幸福を得る者があるにしても、其數の極めて少いのを斷定するに難くない。遠き將來に於て國際的關係が變じ、國家組織の狀態が變じ、國境が古代の行政區劃に過ぎぬやうになるならば格別、それ迄のところ何處へ行つても、他國に歸化しても、祖國を忘れぬが順當である。鄕に入つては鄕に從ひ、鄕俗の通りになすにしても、一朝事有れば各々我が關係を思出し、之に力を添へるやうになるべきである。一面に於て出來るだけ個人性を發揮するやうにし、又他の一面に於て列國が世界に分立し、各々我國の爲めに盡しつ丶あるを認め、之に劣らぬやうにすべきである。故らに務めなくても自らさる勢になるのであるが、務めれば其れ丈け氣運を早めることが出來、道德も之に順應すべきものである。枝葉に亘れば樣々の事あるが、根幹は此邊にあるとすれば誤りはない。



大正藝者論

青柳有美

△蠣殼町に大正藝者現る

保險會社に「大正生命」といふものゝあることは、かね〴〵聞き及んでたが、藝者にまでも「大正藝者」といふものが現れやうとは夢にも想はなんだ。ところが現れた。去年の春頃あたりからだらう、高等密淫賣窟で天下に名高い、東京日本橋の蠣殼町界隈で披露目に及んだ所謂「大正さん」が即ち夫れだ。御祝儀無しの玉代一時間一圓で、お座敷の敷居に手をつき一聲「アリー……」とさへ言つてしまへば、即時に特別御祝儀ヌキの不見轉オールライ——これが其特色であるとやら。

こんな藝者を「大正さん」とは、大正の新政を侮辱するも亦甚しいといふべき處だが、その間に皇天上帝の大なる啓示あるを忘れてはならぬ。「大正」を單純なる年號とのみ解釋するのは、解釋するものゝ愚で、「大正」の眞義は「新機運」である。「大正藝者」とは「新機運に迎合した藝者」といふ意味だ。「大正さん」は決して大正の新政を侮辱しやうとするんでも何んでも無い、寧ろ之を助長せんとするにある。歎ずべきは、たゞ斯る女に助長せらるゝを光榮とせねばならぬ「新機

運」なるものである。

輕便を貴ぶ——何事も手つ取り早く埒を明ける——これが新機運といふものだらう。馬車でも遲いとて自働車で驅ける。大阪奈良間約七里を三十分にして達する高速力の電車さへ出來たとか。藝者の本務若し不見轉にあらば、最も手っ取り早く輕便に不見轉をやるのが、是れ藝者として新機運に迎合する所以の道で、斯る藝者が「大正藝者」の稱を僭するに至つたのも、敢て怪しむに足らぬでは無いか。

藝者も此處まで新機運に迎合すれば、最早や行き詰りになつたものだ。この上なほこの輕便を貴ぶ新機運に副はうとすれば、その時には藝者が亡びて女郎ばかりの世の中になつてしまふ。蠣殼町に現はれた大正藝者は、實に明治藝者末期の產で、それが偶々大正の新元に入り、完全なる末期形式を取つて、人目を惹くに至つたものと觀るべきである。

△明治藝者に不滿の徵象

末期形式を取つて現れた藝者さへ、大正の新人に歡迎せられ、斯る藝者が僭上にも「大正」の二字を冠する光榮を有するのに徵しても、大正の新人が如何に明治時代の舊藝者に飽き足らず、之に愛憎づかしをして居るかゞ知れる。大正の藝者は新らしい藝者であらねばならぬ——これが所謂「大正藝者」と僭稱する末期形式の藝者が現れたと同時に、大正の新人によつて發せらるゝ要求の聲である。これが、皇天上帝の「大正藝者」なる徵象によつて大正の世の中に垂れ賜ふた啓示である。

機運と人とは不思議な關係を維持するものだ。機運が人を作れば、機運が行き詰りになり、今度は人が機運を作るやうになる。人が機運を作れば、今度は人が行き詰りになり、再び機運が人を作るやうになるものだ。古語に物窮まれば通ず、とは、この意を示すに外ならぬ。大死一番絕後蘇生——亦是れ異語同意である。

所謂「大正藝者」を作つた機運は、一見新機運の如くに思へるが、この上如何に進轉しても藝者を亡すより他に動きの取れやうが無いものとすれば、實は新機

運に非ずして舊機運である。然り、所謂「大正藝者」を作つたものは、大正の新機運に非ずして明治の舊機運であつたのだ。

「大正藝者」を出すに及んで藝者界に於ける明治の舊機運は全く行き詰りになつたものである。此際此秋、藝者にして自ら若し亡びざらん事を冀はゞ、明治の舊時代に於て、その屬性中の一つなる不見轉が、殆んど藝者の本務なるかの如く心得らるゝまでの最高限に發達し、此上、發達せしめやうとしても能きぬまでになつてるのに心付き、藝者にある不見轉性以外の他の屬性を發達せしむるに意を注ぎ、不見轉性と稱せらるゝ屬性は當分棄てゝ之を顧みず、藝者自ら新たなる機運を大正の世の中に作り出す事に心懸けねばならぬ。是れ、藝者界に於ける明治の舊機運が行き詰りになつた結果、行き詰りにされてしまつた藝者に取つて、窮まつて通ずるの道を開く唯一の法である。

所謂「大正藝者」は、明治時代に於ける舊機運の産物で、決して眞の意味に於ける大正の新しい藝者では無い。眞の大正藝者はこれからである。所謂「大正藝者」は舊機運に作られたものであるが、新しい眞の大正藝者は自ら機運を作り、大正新機運の大成に貢献せねばならぬものだ。

△酌婦と藝者の劃然たる區別

總じて、物の善惡上下の區別は、程度の問題である。複雜なると單純なるとの差である。藝者と酌婦との區別が、矢張、それだ。程度の問題である。酌婦の複雜になつたものが藝者で、藝者の單純になつたものが酌婦である。藝者には、往昔、酌婦よりも複雜な屬性のあつたものだが、酌婦も藝者も共に酌取をするに於て異りなく、たゞ屬性の複雜なると單純なるとの差あるのみに過ぎぬといふ見地から、明治年間に於ては素より云ふまでもなく、大正四年七月の今日でも、大抵の地方官廳では、命令によつて藝者と酌婦とを一括して「藝者」と總稱し、之を三級に別ち、一級を「一本」、二級を「半玉」、三級を「酌婦」とする事になつて居る。地方によつて或は四級に分類し、「一本」と「半玉」との

間に「中花」の一級を設くるところもあるが、何れにしても最初の二級或は三級が藝者で、最後の一級が酌婦に當るのである。

斯くして明治年間に入り、酌婦と藝者との區別が昔の如く劃然たらず、藝者とは酌取女たとい觀念が一般に普及せらるゝやうになつたと共に、善貨は惡貨に驅逐せらるゝとのグレシャムの法則が其間に行はれて、屬性の複雜なる往昔の如き善良な藝者は漸次に其跡を絶ち、單純なる屬性の酌婦が、社交界に跋扈するやうになつたのである。之を進化論的に說明すれば、藝者は、明治の機運と稱せらるゝ包圍の自然淘汰を受け、漸次に其複雜なる屬性を喪失し、遂に退化して悉く皆な酌婦となり、それの一部は更に又一層退化して、不見轉性のみを屬性とする所謂「大正藝者」になつてしまつたのである。

是に於てか、藝者退化の機運を逆轉して、再び進化の道程に戻らせ、藝者界に大正新元の新機運を作らんとすれば、藝者の屬性を成るべく複雜なるものにして屬性の單純なる酌婦との間に劃然たる區別を自らにして生ずるやうにせねばならぬ。それに就ては先づ第一着に、地方官廳からはじめて、酌婦を「藝者」なる名稱の内に含蓄する如き命令の發布を今後一切見合せ、既に發布せられた此種の命令あらば、大正天皇の御即位式を擧げさせ給ふ本年に於て、早速取消すやうにして貰はねばならぬ。さうなると、一般民衆の心も、自ら藝者を單に宴席に侍して酌取の勞をする酌婦と區別するに至り、藝者に對しても複雜なる屬性を要求し、茲に藝者界に於ける大正の新機運が新たに作り出さるゝやうになるは必定だ。

△新聞紙を精讀すべし

藝者の名辭に囚はれて、藝者の主たる屬性は、藝を演ずるにありと思ふのは早計である。藝者の主たる屬性を演藝にありとした時代も或は曾てあつたかも知らぬが、現在の藝者は、宴席に侍しても、藝を演ずる時間が極短く、その時間の大部分は、酌をしながら客の話對手になつて、之を樂ましむるにある。社會の事物

は總て進化するものだ。ラヂウムの如き、單一の元素であるが、それさへ數千年の間にヘリウムに變じてしまふ。況んや、藝者の主たる屬性が、永遠不變であらう筈が無い。その昔し、原始的の藝者が總て演藝を主たる屬性として居つたからとて、演藝を永遠に藝者の主たる屬性として置かねばならぬ理由はない。現在の藝者が、客の話對手になり、之を樂ましむるため坐興を添へるのを主たる屬性とし、現在の時代が之を何ものよりも最も多く藝者に要求するとせば、藝者は此の屬性を發達さするのに、何よりも最も意を注ぐべき筈である。現在では、演藝の如き、客の話對手になつて之を樂ましむる坐興の一手段に供せらるゝに過ぎぬものだ。

然るに、現在の藝者には此の主たる屬性が、時代の要求に副ひ得るまでの發達を遂げて居らぬ。之が大正の新人をして明治の舊藝者に不滿を懷き、大正の新らしい藝者を要求せしむるに至つた所以である。

藝者が客の話對手になつて、之を樂ましめて行かうとすれば、什麽しても、話題に富んだものにならねばならぬ。話題に富んだものになるには、見聞を博くし知識を豐富にせねばならぬ。見聞に依る知識のみならず、讀書に依る知識をも豐富にせねばならぬ。これは軈て藝者の屬性を複雜にする事にもなる。

時代の要求に應ずる新しい藝者になるには讀書が必要であるからとて、必ずしも、ベルグソンの著書を讀めよとか、或は又オイケンを知れと、いふのでは無い、同じく「都新聞」を讀むにしても、小說や艶種ばかりでなく、二面の論說やら政治經濟記事やら、一面の美術記事などをも能く精讀して、社會百般の出來事に通曉するやうになりさへすれば、それで可いのである。藝者は新聞を社會的知識を供給して吳れる唯一無二の書籍と心得、必ず二三種以上を購讀し、之によつて得た知識を坐興に應用すべきである。

先代三遊亭圓遊は、新聞を精讀し、之を巧に話材に供したものだ。明治の舊藝者には新聞を精讀する者がない。隨て知識の範圍が低級で併も狹い。これが、大

正の新人をして甚だ飽き足らなく感ぜしむる處である。時代の要求に應ぜんとする大正の新しい藝者は、新聞を精讀應用する事、須らく先代圓遊の如くなるべしだ。

明治の舊藝者が出入する物見場は、殆んど劇場及び演藝會に限られてるが、之は藝者の見聞を博くし知識を豐富にする所以で無い。大正の新しい藝者は宜しく繪畫彫刻等の各種展覽會なども見物し、上野音樂學校の演奏會あたりにも、チヨク／＼出かくべきである。

明治の舊藝者は、時代によつて要求せられた博い知識を得んとするに努力しなかつたので、他の一方の要求に應じ、藝者の屬性中に最も微弱であるべき筈の不見轉性を極度まで發達せしめ、遂に所謂「大正藝者」を出すに及んで、行き詰りになつてしまつたのだ。

△外國語の知識を蓄へよ

ルーテルが宗教改革によつて新しい機運を作らうとした時には、まづ第一着に聖書を飜譯して、新しい國語體を作つた。人の心は共用ふる言語の影響を受くることが多いからである。日本でも主として獨逸語に親む學者は、その思想の傾向が獨逸的になり、主として英語に親しむ學者の思想は、その傾向が英人的になる。

大正の新傾向は、何によつて作られるかと謂へば、海外より輸入せらるゝ思想に待つところ頗る多しと答へざるを得ぬ。隨て新しい氣分になつて大正の新機運と共鳴し、大正の新人を樂しましめやうとする新らしい大正の藝者には、外國語の知識が頗る必要である。敢て、外國人接待の際に便利を得るやう外國語を修得せよと勸めるのでは無い。新しい氣分になつて大正の新機運と共鳴し、その話對手になつて大正の新人を樂ましめ得る爲に、外國語の知識を蓄へよと謂ふのである。

飜譯物を讀んだのでは、決して氣分が新らたにならぬものだ。外國の原語を目に讀み、外國の原語を口に繰るやうになつて、初めて新らたなる氣分を得られるものである。大正の新人が、大正の新らしい藝者に要

求する處は、實に外國語の知識である。明治の舊藝者には、外國語の知識が無いので、之を對手に酒を酌んで試ても、共鳴するところが少なく、興を催ほすところが薄いといふのが、一般に大正の新人が明治の舊藝者に對して慊く不滿である。大正の新人は概ね皆な外國語の知識あるものばかりだ。

從來の舊藝者が、歌舞音曲の稽古をする爲に費すを例とした時間は、決して少なくない。然し、現在でも演藝は既に藝者の屬性中にあつて從たるもので、將來は客の話對手になつて客を樂ましむるのは藝者の主たる屬性として益々發達せしめねばならぬものだとしたら、大正の新らしい藝者たるものは、大正の新人と共鳴し大正の新人を樂ましむるに最も必要なる外國語の知識を得る爲に、從來の藝者が歌舞音曲の稽古に費すを例とした時間の一半を割き、之を英語或は佛蘭西語等の勉强に費し、簡單なる話ぐらゐは外國人と自由に交換し、西洋の簡易な小說や新聞雜誌の拔き讀みの能きるやうにならねばならぬ。假令、それが能きるまでに上達せぬにしても、多少外國語，知識があるといふ丈けで、既に氣分が新らたになり、外國より輸入せらる丶新傾向を翫味し、大正の新人と共鳴する新しい大正の藝者になり得られる。

△藝者學校と開業試驗

藝者を趣味の博い知識の低級でない外國語の素養ある從來と異つたものに仕上げやうとすれば、第一に起る問題は、如何にして知識教育と藝教育とを併せ受くるを得せしむべきかにある。然し、これには官立なり公立なり私立なりの藝者學校を設立し　藝者を職業にして身を立てんとする女をして、女優志願者が女優養成所に入學するやうに、總て此の藝者學校に入學卒業せしむることにするが何よりである。差詰め、文部省に於て、この藝者學校を設立せんとするの意があらば、是非、和田垣謙三博士を校長に任命して欲しいものだ。又、名古屋の如き藝者產地では、賣藥の產地たる富山市が市立の製藥學校を設けてるやうに、早速市立の藝者學校を設立すべきである。

陸軍幼年學校とか、或は又、佛教各宗に於て設立する中學林とかいふものは、何れも小學卒業生を收容し、これに普通教育と軍人乃至は僧侶に必要なる特殊の敎育とを併せ施して居る。その成績は頗る良好で、普通教育及び特殊教育の二つか併行して授けられ、立派な士官候補生や僧侶が出來上るのである。依て、藝者學校に於ても、一般高等女學校の學科中より數學、裁縫、家政、體操の如き學科を控除し、之に代ゆるに舞踊、音曲を以てし且つ外國語の時間を增加する事とし、一般高等女學校では生徒には成るべく質素を勸め、人目を惹くやうな衣類を着けてはならぬ、御化粧をしてはならぬなぞと訓諭するのと反對に、藝者學校では、成るべく人目を惹くやうに意匠を凝らした服裝にて登校せよ、白粉のつけ方なぞにも注意し、精々念入りにお化粧の上登校せよ、服裝の意匠拔群なるもの若くは化粧の巧妙なるものには、一學期の操行點特に四十點を增加す、といふ如き規則を設け、校長或は修身科擔當の教師より之を懇々生徒に訓諭し、確く遵守せしむるやうにさへすれば、生徒は藝者たるに必要なる藝敎育と普通教育とを併せ受くるを得、その卒業生は大正の新機運に貢献し得る、趣味の博い知識の高級な、立派な大正の新らしい藝者になり得るは請合だ。

辯護士になるにも醫師になるにも、産婆、看護婦になるにも、夫々官律の開業試驗があつて、この試驗に及第せぬと開業し得られぬ規則だが、何事にも試驗出能主義の明治政府も、是まで藝者開業試驗だけは施行しなかつた。これが、藝者をして墮落せしむるに至つた第一原因である。大正の新しい藝者を作り、大正の新元に適はしい藝者を得んとするには、文部省若くは地方官廳の施行する藝者開業試驗に及第した女にのみ藝者開業を許可することにするのが、最も賢い道である。但し、文部大臣認定の藝者學校卒業生に限り、詮衡の上無試驗で、藝者開業免狀を交附する事にしても差支は無い。

△帝室藝妓の制度を設けよ

朝鮮には亡國前まで官妓なるものがあつた。大正の

新元と共に、藝者の品位あるものを作らうとすれば、曾て朝鮮にあつた官妓の如き制度を設け、帝室藝妓なるものを任命し、之に藝妓の名譽ある地位とし、全國の藝者をして此の地位を目的に、藝と術とを練るに専らならしむるやうにせねばならぬ。藝妓は實に大日本帝國の國粹で、到底他國に觀へ能はざるものである。既に寫眞師さへ帝室技藝員に任命せらるゝ時節柄故、帝國の國粹たる藝者のうちより帝室藝妓を任命するのは、決して不當のことで無い。

本年秋冬の間に擧げさせ給ふ御即位式の大典に際しても、大饗殿に於て女子に舞はしめらるべき五節舞なるものがあるが、當局者も、その舞姫の選定には頗る苦心したらしく、結局、京都在住舊堂上華族の娘うちより品行方正なる未婚のものを選ぶことになつたといふが、其道の素養に乏しい若い華族の娘の俄稽古で舞姫になつたんでは、その舞の手振に巧妙を望むは木によつて魚を求むる如きものであるが、若し帝室藝妓が既に任命せられてあつたとすれば、御即位式の如き大典で女子の舞を要する處には、この帝室藝妓を出し、之をして五節舞の如きものを舞はしめることが能き、舞踊としての全きを期し得られるでは無いか。

又、外國の貴賓御招待等のことが宮中に催せらるゝ際にも、金モール、金ボタンの舍人の代りに帝室藝妓を用ひらるゝことになれば、藝妓は接待術の素養を積んでるので、貴賓に愉快なる感じを與へ、御饗宴に一段の光彩を添へることにもなる。其他、春の觀櫻御宴、秋の觀菊御宴等も帝室藝妓を侍せしめ、接待の事に當らしむれば、御宴も華やかになる。

西洋諸國に斯る例が無いからとて一概に帝室藝妓の制を否定してはならぬ。西洋に斯る例の無いのは、西洋に日本の國粹たる藝妓が無いためである。帝室藝妓こそ無いが、西洋にても帝室俳優があるでは無いか。

△新聞雜誌の廣告利用

昨今は何事も廣告の世の中で、新聞雜誌に廣告を掲出せぬと、如何なる商品も賣行くものでないとせられ、醫師、辯護士、産婆何れも新聞雜誌の廣告に意を

注いでるが、明治の舊藝者は、毫も新聞雜誌の廣告欄を利用して稼業の繁昌を計らうとしなかつたものである。唯僅に、俳優に引幕を贈るとか、或は又神社佛閣の手洗所に手拭を奉納するとかして之に藝名を染め拔き、廣く名を知らるゝやうにするくらゐが關の山であつたものだ。普通の廣告法は、手拭を配るか、或は扇子團扇を配るくらゐのものであつた。

大正の新しい機運と共鳴し得るまでの博い趣味のある知識の高級な藝者は、よろしく新聞雜誌に自分の藝名を廣告して、博く客を引きつけ、博く招聘せらるゝやうになる道を講ずべきである。

初めて披露目をする時など東京朝日新聞の廣告欄一頁を全部買ひ切り、之に大きな美しい顏の寫眞を刷出し、藝者としての抱負を、御園白粉やクラブ洗粉が効能を述べ立てるやうに、並べあげるなども可からう。更に又外國人にも招聘せられ得るやうに、横濱あたりの外字新聞にも寫眞入の廣告を掲出し、外國語にも堪能なる旨を吹聽などすれば、外國人の御座敷も多くなり、見聞を博くして知識を豐富にし得られることにもなる。

大正の新しい藝者は、其實質を養ひ其品位を高める爲めに素より盡さねばならぬが、又大に賣らんが爲に新聞雜誌の廣告欄を利用する道に就て大に工夫すべきである。

街頭騷擾錄

田中貢太郎

一、大正の民衆運動

大正になつてから僅に四箇年であるが、我が國の民衆運動は、際立つて氣勢を添えて來た。明治後半世にあつても、足尾事件、別子事件、日比谷事件、電車事件などの激烈な運動がないではなかつたが、恰も睡眠火山の噴火する如く、如何にも斷續的で、噴火爆發の跡は、ケロリとその運動を忘れてゐると云ふのが常態であつた。それが大正になつてから、連續的自覺的の物となつた。事件に遭遇する毎に、猛然と運動に著手するやうになつて來て、民衆運動は新に大正に隆起した一風潮のやうにも見える。

併しながら政治に對して舊い迷想に囚はれてゐる我が民衆の多數は、煽動政治家の手先に操られて、政權爭奪の傀儡となつてゐる觀のあるのは、心ある者の至極遺憾とする所であるが、初期の運動としては、やむを得ない事で、これ軈て純粹無垢な民衆運動の魁をなすものであらう。曾て藤原氏の爪牙となつて政權爭奪の傀儡とせられてゐた源平二氏は、何時の間にか藤原氏に代つて、政權を握るやうになつた。北條氏でも豐臣氏でも德川氏でも皆同じ事であつた。明治になつても藩閥政治家の頤使に甘んじてゐた在野政治家は、近年其手から政權を割取するやうになつた。然らば我が民衆が、これら政治家と稱する職業的政治家の手から、その政權を取り戾して、己れの手で己れの政治を行ふやうになるのも、決して遠き未來の事ではあるまい。私はこの意味に於て、最近の民衆運動を多大の興味を以て注意してゐる一人である。

大正の民衆運動、先づ第三次桂內閣の崩壞から始つ

て、支那問題、山本内閣の潰滅。それから名古屋の電車問題、及び岐阜の電燈の問題などであつた。私は、今、その民衆運動から起つた街頭の騒擾を記述して見たい。

二、桂内閣崩壊の騒擾

■憲政擁護　閥族打破運動

大正元年十二月四日、眼中國民無く、ただ長閥あるのみなる陸軍側の壓迫は、第二次西園寺内閣を破壊して了つた。尤も西園寺内閣としては、財政難と云ふ一大暗礁に面接してゐたので、増師問題が無くとも、早晩瓦解の運命は免がれない所であつた。陸軍側の狂暴は、寧ろ西園寺内閣の最後を飾る花環であつた。

長閥陸軍の暴行、それでなくてさへ閥族の横暴専恣は長く我が民衆の憤怨を買つてゐた。物議は囂々として、陸軍を中心として長閥の官僚元老に向つて注がれた。それと反對に、民衆の同情は、翕然として西園寺内閣に集つた。同時に妥協苟合によつて。多年政權に接近してゐた爲に、閥族に次いで怨嗟の的となつてゐた政友會にも、自然と同情が寄つて行つた。

この氣勢を見て取つた政友會は、國民黨と提携して犬養一派に對するに尾崎一派を以てし、大に憲政擁護閥族打破の叫びをあげさした。

日ならずして憲政擁護閥族打破の聲は、囂々として起つた。十二月十九日、木挽町の歌舞伎座に催された憲政擁護大會に臨んだ民衆は、正面の舞臺に控えた當年の自由神板垣老伯の銀髯の鬖々たるを始として、杉田定一、大江卓、犬養毅、尾崎行雄などの多年憲政の爲に惡戰苦鬪して來た名士の面影に接した時から、既に熱狂したのであつた。風の吹きすさぶ師走の街頭に「長州征伐憲政擁護大會」など云ふやうな不穏な張紙が支ッ切り無しに貼られた。日々の新聞も、筆を揃えて閥族官僚の罪惡を暴露した。市内の劇場料理屋などには、毎日のやうに憲政擁護閥族打破の演説會や有志の會合があつた。地方では神戸・大阪・京都などが一番に響應した。

その一方では元老會議があつて、後繼内閣を物色し

た。先づ西園寺侯の留任勧告から、松方侯、山本伯、平田子、寺内伯と廻り廻つて、山縣公の爲に内大臣兼侍從長に封じ込められてゐた桂公の出馬となつて、十二月十九日には閣員の銓衡を終つて、愈々第三次桂内閣が成立した。

これが爲に政界の風潮は、一層險惡になつて來た。尤も第三次桂内閣の政綱は、立憲政黨主義を標榜するなど、從來の桂内閣に比して、雲泥の差があつたが、桂と云へば民衆の頭に既に、非立憲的宰相として侵しみ込んでゐる事とて、その政綱も皆一時を瞞著する方便として嘲罵せられた。その上桂公の出入に際して、屢々優詔を煩はしたる所爲は、僭上不臣の沙汰とせられた。桂内閣の警視總監川上親晴に對する惡感は、府會に於ける警察費の大削除となつて現はれた。桂内閣に對する非難攻撃は、恐ろしい狂焔となつて燃立つた。

その爲に桂公の計劃は、片ッ端から齟齬して行つた翌年一月二十日には、新政黨組織を發表したが、國民黨から大石・河野・島田・武富・箕浦・片岡などが相率ゐて來り投じたばかりで、政友會から七八十名も奪取する事が出來ると豫期してゐた事などは、全然失敗に終つた。

■民衆の熱狂

憲政擁護の聲に煽動せられた人心は、日增に昂進して行つて、殆んど停止する處なしと云ふ有様に立ち到つた。心ある者は、この革命的の狂焔を帶びた群衆心理の結果に就いて憂惧した。

一月二十一日は、休會明けの議會開會である。政國兩黨は、憲政擁護の大旆を振り翳して、議會に臨んだ。民衆も日比谷に集つて、民黨に聲援を添えた。警視廳では、正服私服の警官千人ばかりを議院附近に配置して物々しく警戒した。九時半頃であつた。衆議院の正門前に來た新政黨に走つた一議員は、「醜漢ッ」「後藤の犬奴」と云つて罵聲を浴びせかけられた。

議會は豫算印刷未了の名の下に、開會前に十五日間の停會となつた。十一時頃になると議場内が騒がしくなつた。「停會々々」と叫ぶ者がある。「非立憲だ」「開會

前に停會するとは何事だ。」と群衆は口々に罵り罵りして解散した。

停會明けの議會開會日は、二月五日であつた。愈々政國聯合の不信任決議案が議程に登つた。數萬の群衆は、議院を包圍した。その日は空が怪しうに曇つたゐた。

議場内では、首相の施政方針の演説があつた後で、政友會の元田肇が登壇して、不信任案提出の豫備として質問を提起した。そして首相の答辯を俟つて、豫定の如く彈劾案を提出した。尾崎行雄が羽織袴の瀟洒な姿をして、不信任提案出の理由を説明して、桂公が宮中府中の別を亂つた事、屢々優詔を請ひ奉つた事、又在朝の儘政黨を作らんとしたる非立憲行爲、及び議會開會前停會をした違法などを痛罵した。新政黨では島田三郎が辯護演説を試みやうとすると、紫の袱紗包が議長の手にあつた。議會は又五日間の停會となつた。

停會の報は、群衆に傳つた。「桂内閣を葬れ」「軟化議員を引出せ」と云つて騒いだ。警官は惶々として群衆を解散させやうとした。胸間に白薔薇(しろばら)の徽章を著けた民黨の議員が續々として歸り始めた。群衆は歡呼して萬歳を連呼した。わけて渇仰の的となつた犬養尾崎が歸りかけると、群衆はその姿を見んとして犇めいた。新政黨の議員が出て來ると、「それ桂の犬が來た。」「變節漢を毆れッ」と云つて罵詈に次ぐに凌辱を以てした。幌のある乘物は、「幌をとれ、何人だ。」と云つて一々群衆に抑留せられた。

■二月十日の暴動

時局は益々紛糾した。二度の停會期間に於ける黨員羅致の策も失敗に終つた桂内閣は、議會解散か政友會の行動を緩和するかの二つの手段あるのみとなつた。其所で先づ西園寺侯を奏請して、時局拾收の詔勅を拜授せしめた。その結果、西園寺侯の駿河臺邸の會議となつて、政友會幹部に軟風頻りに吹いたが、明けて十日の朝、政友會本部へ突如として山本伯が姿を現はして、階上の総裁室で西園寺侯と密談した後は、幹部の態度一變して、やがて開かれた總會には、全會一致を以て勅諚を奉戴せざる事に決し、同黨議員は、打連れ

て停會明けの議會に臨んだ。

民衆の憤怒の重なり重なりした第二回停會明けの議會開會日、警視廳の方でも、民衆の眼の色に狂光を認めたので、議院前の大警戒を遣る事となり、正服私服合せて二千五百名の警官を召集した。騎馬巡査隊と傳令の任にあてた自轉車隊も備へてゐた。他に五十名の騎馬憲兵の應援もあつた。

警官は議院の周圍に垣を作つて、刻々に集つて來る群衆の足を議院前に一歩も止めさせないやうにした。通用門から這入つて行く傍聽人は、全身の取調を受けた。十時前後になると、國民黨所屬の白薔薇軍の一隊が思ひ思ひに車を驅つて來た。政友會の議員も續々と遣つて來た。

民黨來、「萬歲々々」の聲は、日比谷の空に響いて、やはらかな二月の日の光にも物凄さがあつた。議院を目かけて押し寄せて來る群衆は、次第に其數を增した。正午過ぎには一團の群衆が、警官の垣を突破して、潮の如く議院前に殺到した。

既に登場した民黨の議員五十名ばかりは、議院の露臺に出て、白薔薇の徽章を振り動かした。犬養の姿も現はれた。數千の群衆は、熱狂して之に和した。之を見た騎馬隊は、二手に分れて議院前の通路を遮斷せんとして、二三十騎鼻面を揃へて、群衆の中に突撃した。群衆は數名の負傷者を出して散亂した。

やがて議會は開會とならずして、又三日間の停會となつた。群衆の怒は極度に昇つた。その上西園寺侯に對する詔勅の奏請は、いやが上にも民衆の激怒を買つてゐた。「桂を倒せ」「桂を逃がすな」「裏門を注意せよ」と云つて騷いだ。事態は益々容易ならず見えた。その間を議員は歸つて行つた。白薔薇の徽章の有る者には、「それ路を開けろ」と云つて路を開けてくれた。新政黨の議員は、多くは裏門から歸つて行つた。正門に向つた者は、「それ官僚黨だッ」と云つて車から引ずり下ろされたり、瓦礫を投せられたりした。

群衆は增すばかりであつた。日比谷方面を警戒してゐた警官の一隊が、圖書館前の門を境として公園への

通行を禁じたので、みるみる内に騒ぎは大きくなつた。數萬の群衆は、喊聲をあげ雪崩ゝ打つて、議院の方に向つた。騎馬隊は驚いて、又馬を揃えて突撃した。群衆の中には、又馬蹄にかけられた者があつた。

群衆は遂に暴發した。「官僚新聞を燒打しろッ」「都新聞、都新聞」と呼ぶ者がある。群衆は都新聞を包圍した。遣り所の無い怒を石に乘せて、新聞社の破壞に着手した。隙を見て事務所の横手に放火しかけた者もあつたが、それは大事に至らずして濟んだ。

京橋日吉町角の國民新聞社も、四時近くなつて包圍せられた。「國民の敵」「官僚新聞」と罵る聲に交つて、雨の如く飛散する瓦礫の爲に、二階三階の窓ガラスは、音を立てゝ碎けて行つた。新聞社では喞筒を仕かけて群衆に水を注いで追拂はうとした。群衆の中から二人の青年が出て來て、正面入口の上に攀ぢ登つて、國民新聞と書いた看板を落さうとした。五名の社員は手に手に白刃を振り翳して、入口にあらはれて近寄る者に斬付けた。看板を放さんとした青年の一人も、その白刄を受けて血を浴びて倒れた。社内からは又短銃を發射して、群衆の一人を殺した。群衆は嚇怒して、石油を注いで放火せうとしたが、果さなかつた。その中に百五十名の警官が馳付け、續いて出兵せられた軍隊の一部も來て警戒に任じたので、群衆は遠くに退いた。同時に眞暗であつた社内に電燈が點いて、破壞せられた窓を照らした。

やまと新聞、報知新聞、讀賣新聞、二六新聞、いづれも同時に群衆の包圍を受けて破壞せられた。二六新聞を包圍した群衆の一人で、黒い外套を著て鳥打帽を眼深に被た男は、スル〳〵と攀ぢ登つて、正面二階と三階との間に懸つた看板を放さうとした。警戒の警官が窓から棒を持つて突いた。鳥打帽の男は、眞逆樣に落ちて死んだ。群衆の中に交つてゐた數十名の壯士は、之れを見ると、仕込杖や短刀を閃かして警官に抵抗して、數名に負傷さした。

國民新聞社に向つてゐた群衆の一圏が、竹川町の交番を押仆したを手始めに、附近一帶の交番や警察署の

襲撃も始まつた。銀座四丁目の交番は、電車の線路の上に持出して、火をかけた。警視廳に襲撃して行つた一團もあつた。電車も襲撃した。附近を通行してゐた電車は、恐れて宵の口から運轉を中止した。二六新聞を離れて上野の方に向つた群衆の一團は、路々の交番を破壞しながら、十一時過ぎに上野署に殺到した。上野署は既に數回の襲撃を受けて、窓や扉は破壞せられ、二十餘人の警官は署内に潜んでゐた。群衆は之を見て引返さうとした。二三人の警官の顔が窓から覗いた。群衆は之に氣勢を得て、忽ち亂入して刑事部屋に火をかけ、一方は向つて右隣の民家にも火をかけた。血の色をした炎は、みる／＼上野の空を染めた。北稻荷町の消防署から蒸汽喞筒が來て、消火栓を拔いて消火に取りかゝつた。群衆は民家の方に注ぐ水には何も云はなかつたが、警察署の火に喞筒の口が向くと、消火栓に仕かけた水管を拔いて防げた。急を聞いて二百名の應援警官が來た時には、上野署はもう大半燒けてゐた。警官隊は拔劍して群がる群衆を追つた。清島町の交番を線路の上に持出して、それに火をかけて暖を取りながら、上野署の燒けるのを眺めてゐる者もあつた。やがて軍隊の一部も駈付けた。群衆は淺草の廣小路を目がけて進みながら、路々の交番を破壞し、吾妻橋を扼する警官の警戒線を破つて、本所に入ると共に解散した。

東京の暴動は、地方にも傳播して行つた。大阪・神戸・廣島・京都なども可成りに騷いだ。わけて京都へは伏見の憲兵隊、神戸へは姬路師團から出兵すると云ふ有樣であつた。

桂内閣は一支もなく崩壞した。三日間の停會は、總辭職の準備であつた。政友會が時局拾收の詔勅を奉戴しない上に、山本伯が横合から頭を出して來たので、動きの取れない破目になつたのであつた。で、十一日には、臨時閣議を開いて、總辭職を決定した。元老會議は直に山本伯を後繼者として奏請した。日ならずして薩閥政友聯合の山本内閣が成立した。尾崎行雄一派の憲政擁護會派の者は、政友會と分離して、政友俱樂

部を作り、國民黨と共に、內閣反對の位置に立つた。政友俱樂部は後に同志會（亦樂會）と合同して、中正會となつた。桂公の私生兒であつた立憲同志會も愈々結黨した。

三、對支問題の紛擾

■阿部局長の暗殺

大正二年九月二日、支那第二の革命軍が破れて、南京の陷落した日、南京在留の我が同胞の二人は、日本國旗を携帶して、領事館に引揚げて行く途中、張勳の手兵の爲に虐殺せられた。他にも負傷したり、家財を掠奪せられた者もあつた。其他、漢口派遣隊の少尉と支那駐屯軍所屬の大尉とが凌辱せられた事實も暴露した。國論之が爲に沸騰して、政府の對支外交の軟弱を攻擊した。

この時、靑年獨立黨といふ名で、對支問題演說會を開いて、外交の軟弱と失敗を摘發してゐる一部の靑年團體があつた。その靑年團體の連中で、宮本千代吉・岡田滿と云ふ二人の者があつた。その時岡田は十八歲であつた。

南京事件があつてから三日目、即ち九月五日の夕暮瘦ぎすで背の高い宮本と、色の白い圓顏の岡田との姿が、赤坂靈南坂町三十一番地にある外務省政務局長阿部守太郎の門口にチラと見えたが、やがて迫つて來る夜の色にかくれた。

其所へ阿部局長が歸つて來た。午後七時に新橋驛へ着いた伊集院前駐淸公使を出迎へに行つた彼は、松井次官と虎門まで馬車に同乘して、それから徒步で歸つた者である。門口には泥溝に架した小さな石橋があつた。阿部が石橋を越えた所で、闇の底から二人の靑年が躍り出て、一人は背後に廻つて阿部を抱き締め、一人は短刀を閃かして、阿部の腹部と右の股とを突いた。阿部は驚いて叫んだ。その聲を聞付けて、家人が玄關へ飛出して來たので、刺客は阿部を離れて逃げ走つた。阿部は夢中になつて、洋杖を振りながら追跡した。

「泥棒だッ、泥棒だッ」

二人の刺客の內、一人は追跡者の視界を遁れて靈南

坂の方へ逃げ去り、一人は追はれて、靈南坂町と麻布市兵衛町の境になつた暗闇坂の方に走つたが、未だ宵の口であるから、門口で涼んでゐた人々が之を知つて、阿部に代つて追かけた。刺客は麻布谷町の俗に山谷通り云ふ所に出て、同町の田島屋といふ道具屋の店先まで行つて、追跡人に包圍せられた。麥藁帽子を被て黒の堅縞の筒袖に小倉の袴を著けた、色の白い可愛らしい書生が、片手に血の滴つた短刀を握つてゐるのが、追跡人の眼に入つた。これが岡田滿であつた。追跡人は恐れて近寄らない。岡田は隙を見て、福吉町通り一番地角を左に折れて、氷川方面の闇に姿を消した。

阿部は六日午前十一時に絶命した。この氣の毒な對支問題の犧牲者は、特命全權公使に陞叙せられた。岡田は九日になつて、牛込築土町の辯護士の家にあらはれて、家人の隙を見て、同家二階で掛軸用の支那大陸地圖を敷いて自殺し、宮本は大連に走る積りで、大阪に潜行して汽船に乘込んだが、あらはれて宇品で逮捕せられた。

■外務省と外相邸

阿部局長の暗殺の報が傳つてから、對支問題は殺氣を帶びて來た。對支聯合同志會の主催で、七日午後一時から日比谷松本樓で「國辱問題有志大會」と云ふのが開かれた。

空は薄曇りがして、街頭の運動には、又と無い日であつた。日比谷公園は次第に集つて來る群衆を以て埋められた。正午頃から音樂堂の裏手に當つて爆竹の音が續けさまにした。松本樓の入口には國旗を交叉し、對支聯合同志會と書いた一旒の旗も垂れてゐた。二階の欄干には、「國民は政府に出兵を要望す」といふ決議文も張出してある。階段の所には張紙がある。群衆は松本樓の垣を破つて押寄せた。印刷にした決議文が紛々として飛んだ。髯の白い童顏のテラ〱した老人が、東方の露臺にあらはれて、開會を宣した。音樂堂でも有志の演説が始つた。警視廳では無干渉の方針を取つて、私服巡査に警戒をさすのみで、正服巡査の姿は殆

んど見えなかつた。

やがて松本樓の大會が終つて、群衆は音樂堂を中心にして渦を卷いた。音樂堂では飛入演說が一頻盛になつた。筒袖の單衣に紫紺の袴を著けた廂髮の若い女も演說を遣つた。「外務省へ行かうが、山本に行かうが、それは諸君の勝手だ。」などと煽動する者もある。二萬の群衆は、霞門を拔けて、ゾロ〳〵と外務省に向つて行つた。

外務省では正門も通用門も鎖して了つて、靜まり返つてゐたが、省內陸奧宗光の銅像の蔭や門衛舍內やには、六十餘名の制服私服の警官が警戒してゐた。群衆は門內には入らうとして鐵門を力限りに搖かした。外務省前の電車は通行を中止した。パナマ帽を著た紳士が鐵門に攀ぢ登つて、「委員を選んで談判したら何うだ」と謀つた。

其所で十名の委員が出來て、警官に交涉し、鐵柵を越えて省內には入つた。外務大臣は登廳せず、松井次官は退出したと云つて、阪井秘書官が出て應對した。委員は政府の態度を攻擊した上で、斷然出兵せよと要求した。委員の交涉が長いので、門前の群衆は飽いて來て、大半散々になつて、六時頃には三四百人ばかりになつた。空は暗くなつて今にも降りさうになつた。委員が引返して來て、「是から大臣邸に行く」と云ひ出した。同時に雨が降つて來た。委員を圍んだ群衆は、その雨を衝いて赤坂見附を通り、午前八時千駄ヶ谷の牧野外相邸に著いた。

外相邸では夫人が出て來て委員を迎へたが、外相は出先不明とあつて要領を得ない。屋外の群衆は、焚火をして待つてゐた。十一時になつて外相邸から就寢の通知を受けた委員は、不滿な顏をして額を鳩めて何事か評議を始めた。警官は忽ち委員を檢束した。群衆は激昂して、石を飛ばすなど不穩な兆候を示した。警官は驚いて委員の檢束を解いた。

もう一時近くなつて、群衆の一半は靑山の方に向つて散々に消えて行き、一半は降頻る雨を冒して、永田町の首相官邸に迫つたが、それもうやむやの中に解散

した。

又神田青年會舘の演說に集つた群衆は、その夜の九時半頃、外務省前に集つて、梯子をかけて門内には入らうとして騷いだり、エビスビールと染拔いた赤提灯を眞先に押立て丶次官邸に迫りなどしたが、それも何時の間にか解散して了つた。

對支問題は、支那が日本の要求を全部承認したので、日ならずして落着した。

四、山本內閣潰滅の騷擾

■海軍收賄問題

對米對支の外交失敗はあつても、大局にはさして影響も無い上に、政友會といふ大黨に擁せられてゐる山本內閣は、三十一議會の平穩無事を豫想して、悠々と大正三年を迎えた所で、思ひも寄らぬ海軍收賄問題が突發して、平地に狂瀾怒濤を捲き起した。時事新報の倫敦電報で、リヒテルの脅喝事件が報ぜられると共に、一月二十三日の衆議院豫算委員總會の島田三郞の大質問となり、海軍攻擊は、燎原の勢を以て熾烈になつて行つた。

最初政府では之を否認したが、プーレー、ヘルマン、吉田收吉等の取調が進捗すると共に、海軍の腐敗は續々暴露して、機關少將藤井光五郞、海軍大佐澤崎寬猛等が收禁せられた。實際に於て我が海軍當局と外國商會との間の罪惡は、公然の秘密であつた。シーメンス事件などは、その一少部分を暴露したに過ぎなかつた。輿論は遂に山本首相を公盜視し、海賊の巨魁とまで嘲けるやうになつた。

山本內閣は忽ち民衆が罵詈誹謗の重圍中に陷つた。桂の私生兒として政界に顏出しの出來なかつた同志會は、この好機會を得て、海軍收賄問題を以て山本內閣に肉迫する傍、連日連夜の內閣彈劾演說で氣勢を高めたので、民衆の同情は靡然として集つた。國民黨は長閥の復活を恐れて、時局に對して煮え切らぬ態度を示してゐたが、輿論の怒りを買つたのと、一般の氣運が三派聯合を醸成して來たのとで、突如として起つた。かくて同志會、國民黨、中正會の三派は聯合して、政

府不信任案を提出する事になつた。

■民衆煽動と聲援

二月十日は衆議院に三派聯盟の不信任案が提出せられる日で、之に聲援をする爲の國民大會は、日比谷公園に開かれた。一年前の本月本日は桂内閣に對する大暴動のあつた日であつた。空は晴れて日は華やかに照らしてゐたが、大雪の翌日の事とて、屋根にも地べたにも雪が斑に積んでゐた。民衆はその雪を蹴つて日比谷に集まつて來た。

國民大會は十時に開會した。會場となつてゐる松本樓の露臺には、國旗を交叉し、「國民大會」「皇國の興廢この一擧にあり、」などいふ旗が幾旒となく飜つてゐた。民衆煽動の文字が屋外一面に貼附してある。曾て對支問題の時に矢張り此松本樓で國民大會の開會を宣した、髯の白い童顔の老人が開會の辭をのべた。各地より上京したといふ有志の演說もあつた。爆竹の音が頻りに起つた。やがて「國民は衆議院に向つて現内閣の彈劾を要望す、」といふ決議文が讀まれた。群衆は喝采した。

政友會にては、この時、日比谷に起る國民大會の喚聲を聞きながら、都下八ヶ所に集合してあつた自黨議員を自動車に載せて、衆議院に送り込んだ。

十一時近くなつて一團の群衆は、數百の警官を以て固めた議院前の警戒線を破つて、衆議院前に押寄せた。輸送に漏れた政友會の一議員は、幌車で來て、二回まで車を覆され、警官の保護で漸く門内には入つた。國民黨の一議員も幌車で來た爲に、顚覆の厄にあつたが、胸間の白薔薇徽章を示すと、群衆は萬歳を連呼して路を開いてくれた。

正午近くなつて大國大會の一團は、「大正憤慨團」と書いた大幟を眞先にして、衆議院前に强行したが、一團の指揮者らしい男が帽子を振つて踊上り踊上つて演說を始めると、群集は之に和して、門内に押込まうとして、警官と小競合を始めた。群衆の投げ上げる雪の塊は正門に集つてゐる警官の頭の上に爆彈のやうに散つた。

聽て議會がはじまつた。不信任案提出と共に、國民黨からは犬養毅、同志會からは島田三郎、中正會からは花井卓藏が出て、內閣攻擊の鋒を向けたが、結局多數黨の蹂躙を免かるゝ事の出來ないのは旣定の事實であつた。

議院前では、謄寫版の小さな刷物を手にした洋服の男が、群衆の間を潜り潜りして、その刷物を讀んだ。「今や不信任案呈出せられたり」「島田三郎氏の演說中なり」と云ふやうな文句であつた。「只今政友會の松田源治の演說中に、國民諸君を指して暴民と云へる語ありたり、」とも讀んだ。之を聞くと群衆は激昂して、院內に亂入せんとした。門內に控えてゐた警官は、驚いて門扉を鎖した。群衆は之を押破らうとする、警官は破られまいとする、內外互に押合ふ中に、群衆の力は遂に右方の大扉を押倒した。群衆は門內に雪崩れ込んで、議院の窓に石を投げたり、警官と格鬪したりする者もあつたが、暫くして追ひ出されて了つた。

刷物の男の聲は一回は一回と枯れて行つて後にはすつかり聲が出ないやうになつた。「何人か分る奴が讀んでやれ、」不信任案の破れた時は、議院の壁の上にかき上つてゐた印袢纏の手で讀みあげられた。「不信任案は破れたり唯此上は諸君の同情に待つのみ也」と云ふ煽動的な刷物の讀まれるやうになつたのは、四時頃で、聯合派の議員は續々と歸りはじめた。

民衆は漸く不穩になつて來た。聯合派の議員には盛に萬歲を唱へる傍ら、政友會の議員を凌辱せうとした。「政友會の野郎をにがすな」「通用門の方にも注意しろ」と云ふ聲が何人の口からともなしに傳はると、群衆は貴衆兩院の前後左右の門々に雪崩れて行つて騷いだ。

五時頃安樂警視總監が自ら指揮して、數百の警官で群衆の間にトンネルを作つて、歸り後れてゐる兩院議員を歸した。貴族院議員の十五六人も、貴族院議員と云ふ木札を捧げた車夫を前にして、車や自働車を後に從へ、そのトンネルの間を潜つて出た。落月の光が赤々とその札を染めて凄かつた。「あの老人は農夫のやう

な奴だが、あいつも貴族院か」と云ふものがあつた。痩せて背の低い老議員の一人は、この言葉を聞くと、口髭の白い血色の好い顔に優しい笑を浮べて、その聲の主らしい職人體の男を見た。

やがて三聯隊から兵士を出した。議院前には電燈が輝いた。「日比谷、日比谷」と云ふ聲がするかと思ふと、群衆は一齊に日比谷公園には入つて行つた。

音樂堂では、煽動的な演説があつたが、喧囂の聲に消されて少しも分らない。その内に群衆の一大集團は、公園の正門から出て行つた。三田行の電車が遣つて來た。群衆は之を包圍して雪を投げた。乘客は悲鳴をあげて逃げ出した。「中央、中央」と云ひ出す者があると、又、「毎夕、毎夕」と叫ぶ者がある。群衆の渦巻は延びて、帝國ホテル前を押して行つた。そして先鋒は、高架線の下を拔け、山下橋を渡つて、數寄屋橋方面から來た群衆と合して、中央新聞を襲撃せうとした。數十名の警官が橋の袂で之を喰ひ止めた。群衆は之を突破せんとして、手に手に雪や石を投げた。警官は遂に拔劍して群衆に向つた。群衆は數名の負傷者を出して高架線の下まで退いた。橋の上から濠の中に落ちた者もある。「切つた、切つた」「警官の奴、拔劍したぞ」と云つて群衆は進み兼ねて、警官を睨んで立つた。空には赤い月が出て、警官の手にしてゐた劍の刃に映つてゐた。橋の右斜に見える中央新聞は、窓々に火が見えるばかりで、ひつそりとして音も無かつた。

毎夕新聞に向つた一團は、築地行電車の線路に添うて、路々電車に投石し、三原橋交番、新富町交番などを破壞しながら、八時近くになつて、目差す毎夕新聞に殺到した。百餘名の警官と數十名の憲兵が駈付けて、毎夕社の周圍の露路口を警戒したので、群衆は手の出しやうなく、中橋交番、久松署を襲撃した後に、淺草橋方面へ流れて行つて消えた。銀座附近にゐた一團は、十二時過になつて銀座の電車交叉點に現はれて、品川行の電車三臺に投石したが、それも間もなく解散した。

十二日にも數千の民衆が議會を包圍したが、警官と

小競合をしたのみで解散した。夜になつて、青年會館で催した時局問題演説會に臨んだ群衆が騷擾をはじめて、又毎夕新聞に押寄せたが、警官と兵士五百餘名で警戒してゐるので、新聞社の襲撃を斷念して、一團は久松署、中橋交番に向つて盛に投石し、一團は小傳馬町に向つて、小傳馬町交番を破壞し、折柄來た電車三臺を取圍んで騷擾した。警察では暴行者の大檢擧に著手して、日本橋小傳馬町より淺草橋に至る通路を包圍して、二百餘名を捕縛檢擧した。

然るに此檢擧者の中には良民が多かつた。近所の錢湯に行つて歸りを檢擧せられた者もあつた。山下橋際で警官に切られた者の中には新聞記者が交つてゐた。及び原内相邸の壯士が又新聞記者を毆打したりなどしたので、輿論紛糾して、時局は益々困難となり、遂に民意を代表した貴族院の豫算大削減に遭つて、三月二十四日、山本内閣も無殘の最後を遂げた。

他に名古屋の電車問題、岐阜の電燈問題も記述する積りであつたが、紙數の都合で稿を更める事にした。

新らしい女銘々傳

東京日日新聞記者　小野賢一郎

「新らしい女」とは世間の俗稱になつてゐる。俗に云ふ「女らしからぬ女」を指した名稱になつてゐる。私が玆に「新らしい女」と俗稱に從つて呼ぶのは、さういふ意味ではなくて、世間からさう稱せられた婦人の群れを差して呼ぶのである。女らしからぬ女と認めた譯ではない。敬意を表して始めから斷はつて置く。

銘々傳と云つても傳記ではない、一種の印象記であつて夫れが各人に分れてゐるからである。各人別條の思想もあらうがソコまで立入つて見ないことにした。嚴密な意味で見出しをつけるなら「俗に新らしき女と稱せらるゝ婦人の群との交渉記」とでもしなければならぬものであらう。

一、尾竹紅吉氏

今の富本憲吉氏夫人である。然し尾竹紅吉と呼んだ方が通りがよい、後には一枝といふ本名を頻りに使はれたが紅吉といふ名の方がどうしても通りがよい。今は家庭の人となつて、かゝる婦人の群との交渉もあるまいが、私が最も深く知つてゐる人だし、又是非この中に無くてならぬ人だから敬意を失しない程度に於て富本夫人を書く。

子供も子供、なんにも知らない子供でございます。面と向つては御話もなんにも出來ない子供で御座います、それでもおかまひなければ御出で下さいまし。

如何してまづく書くべきか、と云つたやうな六朝風の字で大きく達者に書かれた手紙を初めて紅吉から受取つたのは左樣――明治四十五年の秋の或る日であつた。その頃新聞に「東京観」なる題下に書いてゐたが其中に青鞜社一派の空氣も入れてみたいといふ希望があつたから、當時一派の人々に講義をしてゐた生田長江氏に會つて、紅吉への紹介を頼んだのであつた。そしたら此手紙が來たので早速伺ひ ます と電報を 打つた。

下根岸の誠堂氏の家で會つた。人形とオルガンが目についた、女中がお茶を持つて來てから暫くして紅吉は入つて來た、いつたい紅吉には斯ういふ貴族らしい處が餘計にあつた、セルの袴を穿いてゐた、大きい可愛らしい女だなアと思つた。

紅吉は頻りに世間の噂に就て辯解してゐた。そしては雷鳥を褒めた、黒燿石のやうな女だとも云つた。自分は子供の時から不思議な氣分を持つて居ります、などゝ好奇心を挑發するやうな事も云つた、人には話せない、死ぬる時に遺言狀には書くかも知れないが、とイヤに新聞記者の好奇心をそゝつた。

二三時間も話し込んでゐたらう、私は足が痛くなつて了つた。雷鳥の處へ一緒に行かうといふので、ふたりで外に出た。もう淡暗かつた鶯谷から山の手電車に乘つて夫れから本郷の平塚氏の家を訪ねて暫く話した此頃の雷鳥と紅吉とは戀人のやうであつた。途中で小笠原島に行きたいなどゝ紅吉は云つてゐた。

私は友達から正直を看板にして僞をつく子供だといふ非難を受けてゐます、私は、私にはそんな心がそりや全くなかつたのです。私は只いつもの私をあなたの前に擴げたのです、勿論恐ろしい新聞記者としてあなたを迎へたのなら私はおとなしうしてゐましたけれど、私はあなたに對してそんな恐ろしい樣な氣分になれませんでした、ですから私は言葉と言葉の間を考へて見ず話と話のあとさきも見ずに色んな事を話しました。

記事が出てからこんな手紙が來た、要するに青鞜社の仲間で物議が起つたので退社しようと思ふといふ意味であつた。私は氣の毒に思つた、何たか私が雷鳥との仲を割いたやうな形になつたが夫れでも「私はかなり不正直な事を先達書いた或新聞記者にあなたのあの記事をよく讀んで欲しいと思ひます、いえ今でもさう思つてゐます」と私の記事に裏書し

てあるからは、まんざら私の記事が故意に惡く書いたのでもないと自ら慰めもした。

私の宅も其頃根岸だつたので紅吉とよく往復するやうになつた。私が赤い蒲團にくるまつて原稿を書いてゐると紅吉はおかしいと云つて笑つた事もあつた。一緒に御飯を食べにも外にいつた。

紅吉は五尺三寸五分も身の丈がある、それを氣にしてゐるらしかつた私も大きいから一緒に歩いてゐると目立たない――といふやうな氣持があつたらしい、帝劇の村瀨露子と歩く時にもどつちも高いからと云つては喜んでゐた。

その頃からういふ話をした。これも小さい時から持つてゐる「不思議な氣分」の内の一挿話かも知れない。

越中富山に小さい時は住んでゐた。近所に評判の美人がゐたが紅吉を非常に可愛がつた、紅吉が四つか五つ位で美人は十八九だつたらしい、日が經つに伴れて其美人は紅吉を一刻でも側から離すのを嫌がつた、迚も正氣の沙汰とは思へないので美人の兩親は心配して、成るべく紅吉から遠ざけるやうにした――すると美人は發狂した、土藏に入れて置いたところが二三日すると紅吉が見えなくなつた、神隱しにあつたと打騷いだ處が紅吉は土藏の中で美人とお人形さんを飾つて遊んでゐた。――同性戀愛の一。

――これもはつきり覺えてゐないが、矢張年上の二十一二の美人が其頃紅吉を可愛がつた、夕方から紅吉を抱いたまゝ町を出た、眞暗い夜である、不思議な事には其美女は重い紅吉を一度も下さずに抱いてスタ〳〵と三里許りの道を走つて山中に入り大きな瀑布の前に出た。紅吉は泣き出した、美人はそれにも頓着せず瀧の上に出て、小さな祠の前で瀧の水を汲み神樣の護符を紅吉にのませて「一枝ちやん、もう〳〵あたしとお前とは離れないよ」と耳許で囁いた。はつきり覺えないがさういふ氣が今も殘つてゐるといふ――これが同性戀愛の二。

小說じみた話だが紅吉は誰にも話した事はないがと前置して細かに殘つてゐる記憶を辿つて私に聞かせた。こんな話は紅吉の詩人らしい頭で夢のやうな間にでつちあげられる事だが私は事實として其時には聞いた

大阪每日の蜂郎君が來たので紅吉に紹介した。その晩だつたか方々三人して步いて雷門のよか樓で吞み田原町で蜂郎君と別れて私と紅吉と根岸の方に歸りかけた。吉原の土手に出た時ばら〳〵と雨が來た。「吉原を見ましようか」といふから私も贊成して仲の町の或るお茶屋の二階にあがつた、こゝでは紅吉の事を先生々々と呼んでゐた。鏡をかりて紅吉は長い髮を梳つた、矢張女だと思つた。

其夜私はシルクハットの入つてゐる大きな鞄を下げてゐた、首桶のやうだと云つて笑つてゐた。川越の大演習に行かねばならぬので直ぐ車でふたりとも歸つた、そして私は川越にいつた、宿醉で頭はがん〳〵してゐた。

川越から歸ると紅吉は生田長江氏の宅に預けられてゐた。勉强する爲めにそして二階で巽畫會に出す屛風をせつせと書いてゐた。私は景氣づ

けに芝居の總見のやうに繪の總見をやりませうと冗談を云つたが、それが事實となつて、社の同人が幹事となり上野で古今未曾有の繪の總見をやつた。

三十人位集つた。色どりに女優も三四人加へてあつた、紅吉の繪の前にいつて盛んに批評する筈であつたが、皆遠慮して何も言はなかつた。

それから繁く往復した。方々のカフエーも覗いたし芝居の總見もやつた、併しいつも私は男の友達と歩き呑んでゐるやうな氣がした。その頃紅吉の周圍には多くの美くしい婦人がゐたやうであるが私には決して自分から話さなかつた。

紅吉はよく豫言者めいた事をした。今日は誰がくる、といふとよく的中するらしく、誇りかに話す事が間々ある。又熱心な九星の信仰者であつた、今日は佛滅だからドウとか、よくそんな事を氣にしてゐた。

繪は滅多に書かなかつた。私が貰つて來たのは月見草が吹いてゐる川邊に赤い着物を着てゐる女が立つた尺五の絹本だつたが、後に「金曜日の夜」と取替へた。これは斯う原稿を書いてゐる私の室の床に今もかゝつてゐる、墨と金箔と空色とで塗潰した魔が出さうな畫である。——

紅吉と私との交際してゐる間は隨分永かつたゞけに色々の事がある。併し夫れは何でもない事だけれど誤解を招くから預つて置く。

其間に信州、越後、福島、秋田——とながい旅をして私の社に通信を寄せてくれた事がある。私が根岸の濁つた生活を打切つて芝の方に引越してからは、ドウしたものか往復が疎くなつた、二三度會つた位の事である。それも或人から原信子氏を布哇に招待したいから交渉してくれと頼まれて、信子氏と直接に知らないから紅吉に紹介を頼んだ——そんな用でなければ會はなかつた。

富本氏と結婚するといふ噂は聞いたが通知にも接しないのにお祝ひするのも變だと思つて控えてゐた。お母さんと銀座で會つて初めて本當に結婚した事を確め得た位である。

聞けばお目出たいさうである。紅吉——ぢやない富本夫人一枝氏の爲めに、又近く生を享け給ふ玉の御子さんの爲めに幸福と健康とを祈つて置く。

二、平塚明子氏

雷鳥に初めて會つたのは前文の通り紅吉と曙町の宅を訪うた時である書齋は二間で一間の机のある方に瓦斯をつけて一間の私の座つた方は暗かつた。机の上には腰に下げる煙草入が置いてあつた。油繪もあつた、これは若い燕の奥村氏の作品である。

私の座つた座敷の床の間には香爐が置いてあつて柱には拂子が掛けてあつた。圓窓はこの座敷にある。雷鳥は紅吉とこそ〳〵話してゐたが入つて來た、セルの袴を穿いてゐた。座敷にも座禪臭があるが雷鳥も室に入る前に深呼吸を二三度やつたと云つたやうに落つき拂つて私を頭から呑んでかゝつたやうな態度であつた。ハヽア これだな、これで人に反感を起させるのだな、と思つた。

人が高飛車に出ると私も高飛車に出るのが癖といふより病氣である。

雷鳥は早速高飛車に出た。「私は嘘を吐きますよ」とのつけがこれだ、そして「嘘を吐く事も新聞記者に數へられてたのですよ」と、これだ。

そこで私も病氣が發作的に起つた。「どうぞ嘘を仰言い、嘘も結構ですが、あなたの坐つてらつしやるところがイケない、も少し明るい方に向いて下さいませんか。新聞記者は人を訪問したらば、巳れは光線を脊にして椅子に掛くべし、さすれば被訪問者は光線に面して掛けん、これ被訪問者の顏色を見るに便なれば也といふ定義がありますからも少しこつちに寄つて下さい、お顏が拜見されませんから」と云つた。笑ひ乍らさう云つた。

それから新聞談に移つた。雷鳥は訪問記者が婦人を訪問する時には、既に其時記者の目が狂つてゐる、疑惑の目を以て見、一ツの記事を頭の中で作つて來て、當人の談話を無理に夫れと辨めやうとする――といふ意味の皮肉も云つてゐた。私もこれに對して意見を述べた。

野依秀一といふ男が私より二三日前に訪問したらしい、「小さい可愛いゝ人ですね、チヨコ／＼入つて來てチヨコつと坐つて、直ぐ世界の人類の半分は女だ、だから婦人問題は忽かせに出來ないと云つたやうな事を申されるでせう、人のいゝ人でなければ云へませんよ」と笑つた。野依氏は私が書いた此記事を見ていゝ氣持でゐるらしいが格別尊敬して云つたらしくも見えなかつた。

それから紅吉を前に置いて紅吉に會つた印象談が初まつた。

其後會つたのは青鞜社が講演會を開いた青年會館だつたと思ふ。講演會が濟んで長江氏が是非にといふので河岸の西洋料理店にいつた。馬場孤蝶、生田長江、阿部次郎、岩野泡鳴、伊庭孝、上山草人などの諸氏、青鞜社側では雷鳥、保持研子、荒木郁子、岩野清子、伊藤野枝、その他二三人、紅吉は退社してゐたで出たり入つたりしてゐた。絹物は着ないと云つて木綿の絣を着てゐた。卓上酒も出た。雷鳥もちびり／＼遠慮勝に舐めるやうに呑んでゐた。

其後荒木郁子氏の宅などで會つたけれども時の挨拶ばかりで餘り深く話したとはない、上辷りのした事實だけを書けば之れだけである――雷鳥氏は下田歌子より頭がいゝでせうと皮肉つたのは長江氏である、雷鳥の顏はいゝ顏でせう、日本人には珍らしい顏でせうと云つたのは郁子氏だつたと思ふ。

年始狀を頂戴した事がある。それが北海道にゐる舊友のMから「浮世の義理に謹賀新年」と書いて來たハカキと一緒に舞込んだ。對照に一種のおかしみを感じた。奧村氏と共同生活をするといふ通知狀も頂戴したしかし當の奧村氏とは途中で見かける位であつた一度も話した事がないだから何も云へず書けもしないのである、たゞ奧村氏を知らなかつた爲めに此記事をして精彩あらしめず、點一畫を缺いたのを怨みとする。

三、荒木郁子氏

黑繻子の襟、晝夜帶、前垂、黑い涼しい目、これが郁子氏である。下町風の娘さんよりおかみさんと云つた風、難を云へば肩をいかつく見せるのと外股に歩く氣味がある。

青鞜社の講演會で會つたのが初めて。「今度の會には私が踊りませうか」と冗談を云つてゐた位に社中でも變つてゐるらしい。

其後湯島天神で「くみは」といふ料理店を始めた。紅吉が呼びに來たので開業の日にいつた、杉柾の衝立には紅吉が大觀張の繪を書きあげてゐた。社中の保持研子、岩野清子、それに私ども。――岩野氏は生田氏から非常に氣持のよい人だからと紹介を受けてゐたが、此日は餘り話せなかつた。

「くみは」の景氣づけの爲め隨分よく飲みにいつた。同人冷洋氏が洋行から歸つた時にも歡迎會をこゝに持込んだ。私もよく醉ッ拂つたものである。隣室に尾竹竹坡氏などが來てゐた事もあつた。郁子氏はお座敷には滅多に顏を出さなかつたが私共のやうな知つた者が來た時には顏も出し酒を呑みもした。女としては隨分酒の强い方であつた。

「くみは」も大變繁昌したが、手狹いのでどこかへ越さうといふ事になつたらしく、一先づ店を閉ぢた。印袢纏のやうに折つた披露の手拭が甚だ振つてゐたのに、餘り閉め方が早いと私共は云つた。

猿樂町に暫らく默つて引込んでゐたらしかつたが神保町に家を持つたといふ通知が來たので遊びにいつた。滅多に外出しない人だし話も面白いのでよく遊びにいつた。毎日のやうにいつた。棺桶のやうな長い箱がある、其上に郁子氏が晝寢してゐる事もあつた。世話好きな人だけによく色んな人が遊びに來た、私より年下だが何だか姉さんのやうで私の私事にも立入つていろ／＼心配もしてくれた。

「仕事をする」といふ事が此人の大きな慾望らしい、旅館を初めやうと云つては家を探して歩いた、料理店らしい家もたづねた。世間の事はよく知つてゐるし、數字にも明るいし「儲ける」といふ事も知つてゐる。この人などは青鞜社の中でも餘程毛色の變り過ぎた方であつた。

私の芝の方にもよく遊びに來た。私が入院してゐる時にも毎日のやうに見舞つてくれた、檢溫器を入れる筆立やら、枕許に撒く香水やらの贈物も其人らしかつた。私の宅へ來て誰もゐない留守の時にはマッチを並べて疊の上に字を書いて置くところなども其人らしかつた。技巧の好きな人であつた。

其内に氣まぐれから「仕事」をやらうといふので赤本を出版しやうといふ段取になつた。赤本は私が新聞に書いたもの、又私の「新聞記者の手帳」も一緒に出す事になつた。それからは俄かに忙しくなつた、化粧水まで出さうといふ事になつた。何か名がなければイケないといふので突飛に／＼で「美人大學社」といふ名まで私がつけた。

さて本は出たが初めての商賣だから勝手が分らない。てんで私には何が何やら分らない、算盤などは迚も分らない。それでも郁子氏は印刷所も製本屋も販賣店にも自分ひとりで交渉してドウにかヤッつけた。損をするといふ事は誰しも嫌ひ、郁子氏は損をするやうなヘマな事はしないと思ふが、併し商賣の事だからドウか分らない。

景氣のよい事が非常に好きな人である。三崎座の女役者などが好きなところなど餘程面白い。その後氣まづい事があつて暫く遠ざかつてゐた

が近頃は意思が疎通してゐる。氣ごゝろの分つたお友達だから氣まづくなる譯はないが、矢張遠のいてゐると自然妙になるものだ——併し酒を一ぱい呑めば直ぐ妙にならなくなるから妙だ。

要するに郁子氏も此儘ぢッと引込んでゐる人ではあるまい、何か「仕事」を初めるに違ひない、私は堅くさう信じてゐる。

四、伊藤野枝氏

今一番よく思想を發表してゐる。一番よく勉強してゐるらしい。私はこの人は好きな人である、ちつとも虚飾がない、感情も純な人で嫌味がない。

講演會の夜、初めて會つたのだが私と同じ福岡縣であると聞いて何とならう懐しかつた。尤も此人に會ふ前に同人の春鈴氏から紹介は受けてゐた。——この夜は國の話を一寸した位だつた、併し演説ぶりから體(からだ)のこなしから女學生らしい乳臭い人だと思つてゐた。

その後社で氏の訪問を受けた。「平塚明代理」と名刺に書いてあつた。雷鳥の代理？、ハテ何事かしらと思つて應接室で會つた。野枝氏はにこ〳〵笑ひ乍ら話した、非常に人なつッこい處がある。訪問の要旨は青鞜社で研究會をやる事になつてゐる、ところが青年會館の講演會以來世間で誤解されて、適當な會場を貸してくれない。虎の門のどこ〳〵、銀座のどこ〳〵、斯々のところを交捗したが皆斷はられて實に弱つてゐる。それで私の社のどの室でもよいから貸して貰へまいか、人數は餘り多くないので小さな室でもよろしいが……といふ相談があつた。

私は一寸考へた。併し研究會の性質を聞いて見ると頗る眞面目な研究會らしいので、兎に角相談してみやうと副主幹に相談した。ところが非常に好意をもつて、時間の都合も社の方とは差支がないやうだから、小人數なら便宜を與へてあげてもよいといふ返答だつた。私も非常に喜んだ。

その事を野枝氏に話すと氏も喜んだ、夫れでは明日にも保持氏か平塚氏が伺つて室を拜見して御禮を申すといふ事であつた。ところが當日になると「平塚の代理でございますが……」と女中らしい女の聲で電話が掛つて來た。雷鳥氏が口移しに云つたのを書とめてゞも來たのか、切口上で少し都合があるから見合せるとの事であつた。後で聞けば研究會其ものがお流れになつたやうであるが、兎に角其時に私は不滿であつた。私の好意は兎に角副主幹の好意、社の好意に對しても野枝氏か誰か來て見合せる事情を話してくれべきではあるまいかと思つた。——併し世馴れぬ人達の事だからと善意に解釋してゐたが、其後どこでか社中の人のゐる處で私が正直に其儘を云つたから無論雷鳥氏に通じてゐると思ふ。だが之れが爲め野枝氏に對してドウのコウの思つてゐる譯ではない。

それから隨分永く會はなかつたが先月上野精養軒で開かれた小倉清三郎氏の相對の研究會で會つた。子供を生んだとは聞いてゐたが見違へる程よいお母さんになつてゐた、乳臭いところはすつかり取れて落つきのあるいゝお母さんになつてゐた。同行してゐた冷洋氏も「感じのいゝお母さんだね」と云つた意味の事を話した。

「青鞜」は氏ひとりの手でやつてゐる。そんな話も立乍らした。——とにかく野枝氏は一番よく育ちつゝある。

大正新時世粧

黒頭巾

其一

◉大正新聖代の御大典は、日に近づきつゝあり。草はいよ／＼碧に、花は、交も／＼開きて、人は草木と共に、欣榮を競ひつゝあり。

◉御大典は菊花の節なるべし。菊花爛熳として秋風に映發す。今年の菊花は、特地に、光彩を添ゆるものあらん。殊に、全國、菊花の秀出するものを、悉く、日比谷の公園に集むべしといへば、都人の未だ見ざる異彩もあるならん。

◉古人、或は、歳々、花相似たりと思ひしは誤なり。同じ菊花なりといふとも、年々、相同じからず。菊花始めて、御紋章に用ひられし時の、菊花と、今の菊花とは、古人、今人の相似ざるが如くならずんばあらず。

◉菊花の花彩は群花を抽く。菊花に多とするところは、此の花の粧、人意に随つて新意匠を出せばなり。今年の菊花は、大正の新機運を祝す可く、新意匠を凝らして造る可ければ、其の新粧、舊花を壓して、新時代の新精神を象徴するに足るものあるべし。

其二

◉咲ける花に新粧あらざること無し。人間、須らく埋れ木の如くなる可らず。埋れ木は則ち無花果なり。人間、唯だ咲ける花の如くに、新たらしく咲かんとする花の如くにてあるべし。

◉花に似たる人の粧かな。此の頃の吾が庭のかげに、くちなしの花寂しく咲けり。くちなしは葉、多く茂り合ひて、葉の間に花あり。花は白くして、組織の單純なるも、其の葉の綠、濃きが爲に、花をして精彩あらしむ。花を著くるもの、悉く精彩あるなり。

◉今、くちなしの如き女は少し。地味なる底に花彩を藏するといふとも、江戸趣味とは異なり。江戸趣味は粹なり、地味には非ず。女大學の女は、くちなしに似たるべし。

●くちなしは、古來、花園の中心となれる花には非ず。武家の女は、くちなしの粧ありしともいふ可けれども、くちなしの中にも、八重、大輪の華やかなるが無きに非ず。御殿女中の粧は、それにてあるべし。

●八重、大輪のくちなしは、やゝ絢爛の趣致あり。舞臺に現はるゝ御殿女中の姿の、極彩色の絢なるを見よ。然れどもくちなしといへば、畢竟、一世を風靡する花にはあらず。

●「趣味の花」を愛する人は、くちなしを愛するならん。此の花、古雅、淡白の趣味を帶ぶといふも、昔の花といふには非ず。此の花、昔よりして、此の如くにして愛せられ、此の如くにして、今も、今後も、此の如き花の人と共に、榮え行くなるべし。

其三

●日本は、「脛の國」ならずんばあらず。男も女も、脛にて座はり、脛を敷物となし、脛にて行く。

●西洋人は股にて行く。其の行く時、股と脛と、殆んど一直線の上に在り。西洋人は、脚をコムパスとすれば、腰を起點とし、日本人は膝を起點とす。故に、西洋人の脚が描き成すコムパスの圏は、甚だ大にして、日本人のコムパス圏は甚だ小さし。

●昔の袴のマチの極めて低かりしを見よ。今の袴のマチは高し。今の少年は、恐らくは昔の袴を穿くに堪へず。若し穿かば疾足するに當つて、必らず顚倒せん。昔の人がマチの低き袴を穿くを得しは膝にて行るきしに由る。袴のマチは、新文明の發達と共に高く昂りつゝあり。

●袴を穿たずとも、和服を穿ちて健歩するを得るは、「脛の國」なればなり。股を以て行るかば、和服は、風下の幕の如くに、つねに開閉せざる能はず。

●日本の女は全く脛を以て行歩しつゝあり。故に、日本の女は、脊柱を伸ばして、正しく濶歩するを得ず。濶歩すれば白き脛露はる。白き脛を見せざらんが爲に脛を以て小さく刻んで行く。

●花の粧せる日本の女は、行くに、膝より上を動かさず。膝を細かく折つて、脛を以て細歩す。膝は上身の重量に堪へざるが故に、上身は、自から前に屈し、これに依つて、日本の女をして、自から溫淑にして嬌羞を含めるの姿態を爲さしむ。

●新らしき女といふは、脛の露はるゝを厭はず。脊を正し、濶歩するが故に、面、自から上りて、厚顏らし

き氣分を示すにてもあるべし。

其四

◉美しき花の粧に、人身を包みて、輪廓を崩すことと行かんとすれば、衣は袋に非ずといへども、衣を着けたるは、筒袋に嵌められたる同じ。則ち日本の女は、縫目の開放されたる美しき筒袋に包まれて、蹇脚行歩の氣分を以て、動きつゝあるものならずんばあらず。

◉蹇脚行歩若くは競走を爲す者は、勢體を前に屈し、腰を折り、膝を折つて、脛を以て行かざる可からず。日本の女の姿態が、屈曲しつゝあるは此の故なり。

◉吾輩、今日、電車に乘るに、一婦人の、洋傘を右手に、停留場に駈け付くる者を見るに、膝より下を以て急がしくチョコ〳〵と、前に屈して奔るの、甚だ人目を惹く。

◉我が國の、畵趣の女を一變したるものは、女學生の着袴なり。我が國の女が、袴を穿ち始めてより、女は脛ばかりを以て行かず、漸く股を以て行く。

◉野百合のように、うね〳〵と曲がりて行きし日本の女は、袴を著けて、漸く杉のように正しく立ちて行く袴を野暮なりといふは、うね〳〵とうねらずして、棒立ちに立つを意味するなるべし。

◉袴に慣れたる女は、再び、歌麿、春章の畵ける女となる能はず。錦繪の女は、未だ日本には見られず。唯だ錦繪に於てのみ見るを得べきのみ。

◉膝を折つて、膝より下ばかりを以て、小刻みに行く女は爪先きを突掛けて、前に傾斜するに非れば、輕く踵を地に著け、上下に、フワ〳〵と動搖しつゝ、彈かれるように進む。

◉野百合のように、萩のように、うねりし女の娘が、袴を著けて、靴を穿ちたればとて、サッサと行く能はず。遊歩する支那の女のように、尙ほヨチ〳〵として行くを免れず。

◉男も、女も昔よりは大きくなれり。殊に、女の脊高くなれるは目立ちて見ゆ。今の女學校には、五尺二三寸の女は珍らしからず。懷月堂の畵ける豐かに肉付ける、歌麿のスラリとしたる女も、皆、眼中に、五尺ばかりの女を、モデルとせしなるべし。

◉五尺二三寸許、或は其以上なるべき女が、文金高島田に、振りの袂を垂れたらんには、畵く可く、餘りに丈け高かるべし。

其五

◉女の洋裝の流行せしは、伊藤、井上歐化政策の時の一夢となれり。今、日本の女の洋裝せるは、舞踏會に非れば、つねに洋裝して人の前に出るは、看護婦と、玉乘の女と、天勝とのみなるべし。

◉女の袴は、古來、日本に無かりしにはあらず。然れども女學生の袴は、和洋裝の折衷の意に本づきしなるべし。洋裝して、疊の上に坐せしめば、絕世の美人も嬉劇の材料たるを失はず。袴なれば、落ち付きて見ゆるも、日本人が袴に慣れたればにや。

◉西洋の女は、上衣を著けたる時、多く男裝と異ならず。すべて男裝の、必ずしも、女裝に適せざるにも非るは、女義太夫の肩衣姿の、引立ちて見ゆるもあり。

◉日本の、昔の女裝の、男裝と同じかりしは、唯だ女義太夫のみ。男裝と女裝とは、雌雄の孔雀の如く、鴛鴦と如く、餘りに判然たる區別を有したり。鳥の雌雄の如くならん事は、いづれの部分にも發見せられざりき。

◉男と女とは、衣服のみならず。帶も履物も煙管も、財嚢も、形質ともに區別されたるを、今は、女の襟に毛皮の襟卷あり、皮の蟇口(ガマグチ)あり、男と同じようなるマントを被れる女も少からず。

◉洋裝は、流行らず、今、俄に流行る可き希望も見へず、然れとも洋風の影響は、此の頃の、五月雨の空に雲の、ひろがるよう限り無くひろがりつゝあり。

其六

◉烏拉山西の時世粧は、悉く東海の天に映ず。吾輩、少年時、女王ヴォクトリアの肖像に對して、西洋の女を想像したり。女王ヴォクトリアは、腰より以下、袴の推かく、ひろがれる、譬へば腰簑を重ねたるにも似たる、或は洋傘を、大小、順次に、ひろげて、其の中より上半身を出せるにも似たる肖像は、西洋の女の象徵(シムボル)たらずんばあらざりき。

◉近年、西洋の女は、上にひろがり、下に萎む。袴は筒の如く、頭は傘の如し。帽子、餘りに大きくして、洋傘を捧ぐるに堪へず。或は、笠の、一抔に發展したる松蕈に似たる哉。若し、今の西洋の女の輪廓を描かば、其の線は、丁字形を爲すべし。

◉昔の西洋の女を望めば、「袴」の行るくが如く、今の西洋の女は、「帽子」の行るくが如し。「帽子」と「袴」と

は西洋の女を象徵す。此の意味に於て、日本の女は、未だ西洋の影響を受けず。日本の女は依然として「帶」の行るゝが如きなり。

●「夏帶」は、「帶」よりも細く、小さし。「夏帶」の新流行を以て、烏拉山西の時世粧に、因緣せしむるを得ば、知らず、識らずの中に、「夏帶」はバンドの觀念に接近せしものといはれざるには非ず。

●「夏帶」はバンドに非ず。「夏帶」は依然として「帶」なり。其の細小なるに於て、唯だ帶よりもバンドに近きのみ。バンドの影響といふよりも、輕便を貴ぶの時代精神の表現に外ならず。

●三越や、白木屋や、新趣味、新流行を鼓吹するに力むといへども、未だ女の洋粧を鼓吹するに至らず。明治は大正となれりといへども、日本の女の性命は、依然として帶に在り。

其七

●日本民族の氣焰は、ます／＼揚らずんばある可らず。然れども日本の自然界は、最近、倏忽たる間に、泰西の動植物を以て充たされつゝあり。啻に、行燈がランプの爲に驅逐されたるのみに非ず。犬、馬、鷄が悉く和洋の雜種となれるのみに非ず。今に於ては、純粹の日本犬は、僅かに日本畫家の、雪中犬兒の圖中に見出さるゝのみ。鷄は、土佐の尾長鷄ひとり日本種を存すとはいへども、漸次衰滅に近し。

●草木の勢力は、文物の勢力よりも。頒布、蔓延の速力、遙かに優れり。恰好善く洋服を著ること能はざる者は、尙ほ地方には少からず。ダリアは到處に在り。其の舊來種のポンポンと稱するものに至つては、關西には峠茶屋にも見ることあり。

●輓近、自働車の普及の速かなるは驚く可し。乘合自動車は、東京には未だ見ず。すべて大都會の中には無し。奈良に、乘合自動車を開業したるは、殆んど斯業の嚆矢を爲せるものなる可けれども、間も無く廢業したりと聞く。

●田舍の人は、東京の電車に驚かさる可きも、自動車には敢て驚かず。日向國の如きは、俥無く、其の新文明は、千年の喬木のかげに、ガタ馬車より一躍して、乘合自動車となれり。

●文明は、時に、跳越しつゝ、進むことあり。兎も角も、東京の文明は、愛宕阪を、丁寧に、登攀するが如く、低より高に、順次に、進みつゝあり。然れども大

團體の登攀にして、其の行程は急、且つ長き阪なるを以て、時々、急速に突進し、或は時々、途中に滯ることも有り。

●大團體の登攀は、健脚、懶脚人さまぐ\なり。其の先登者と追隨者、殿後者とは、眼界を異にすること、恰も別世界の人の見地に立てり。這般の奇觀は、人少き田舍よりも、人多き大都會に見らる。日本にては、東京の文明を尤も奇觀なりとす。

●東京の文明は、健脚にして、跳越するものあり。懶脚にして跛行するものあり。極めて稀に結髮する男子あり。面會日を廣告する紳士あり。寄席も芝居も見たること無き女大學の淑女もあれば、自由に男子と交際すること、佛蘭西の女に似たるもあり。

●今の東京には、自動車の、著るしく增加しつゝあると共に、徒歩主義の唱道者もあり。女大學も、或は信仰せられ、ペラミーも愛讀せらる。文明に、遲速あり、緩急あり、矛盾あり。兎も角、舊木の株根、尙ほ蟠屈しつゝあるに、新草木の、無制限に輸入せらるゝが如くに、泰西の新文明は、日々、東京に移植せられつゝあり。

●泰西の新草木の中にて、尤も速かに日本に擴布したるはコスモスなるべし。寒村僻地にも、此の花開かざるは無く、茅屋に映じ、蟹舍にも映ず。此の花の色彩、日本人に適するにや、或は栽培の、極めて容易なるが爲にや。

●或はいふ、日本の自然界は、泰西の爲に、逸早く征伏せらると。吾輩は爾か信ずること能はず。新舶の動植物が、日本に適應し、繁殖すといふを以て、未だ遽かに、日本が新舶の動植物の爲に、征伏せられたりといふを得ず。

●獅子の嗜味は百獸の肉なり。獅子の胃の中に、つねに百獸の肉あり。然れども之を以て、未だ百獸が獅子を征伏したりといふを得ず。日本の自然界に、新舶の動植物、自由に繁榮するを妨げざるなり。

其八

●吾輩は、ニンジンを食ふといへども赤く長くはならず、豆腐を食ふといへども、白く、四角にはならず。つねに魚を喰へども魚とはならず。牛を喰へども牛とはならず。

●杜鵑は蜥蜴を喰ひ、鵜は香魚を呑む。食ふ者、食はるゝものに似ず。時に、蛇、大蛙を呑める時、蛇腹、

突膨しつゝ、蛇腹を模索して蛙形を得可きことあり。

◉飛行機の將校は、鳥を常食とするには非ず。然れども、鳥を常食とするに非れば、飛行機に乘るを得ずと思へる者、今、少からず。

◉山芋は化して鰻(ウナギ)となるといふ事を聞く。然れども卒然として鰻を見るとき、其のいづれか山芋の化身なるを識れる者あらん。山芋は鰻を化し去るの後、山芋の形骸を留めざればなり。則ち、山芋、鰻となれりとも「非山芋」とはいはれず。

◉京傳の黄表紙には、狐、娼婦に化身するの後、青藻を頭上に蔽ひて、花簪となし、尻尾を袋に入れて保重するの趣向あり。廓より出でゝ令夫人と化するの女、廓言葉を愼みつゝあるは、譬へば尻尾を袋に入れたらんが如し。廓言葉を出だせば、其の本地、暴露す。

◉日本人が英書を讀んで英人となり、漢書を讀んで支那人となり、獨逸書を讀んで獨逸人となれる者は、皆、以て、山芋の鰻となれるに比すべし。然れども是は日本人の形骸を存するが故に、非日本人といはるゝ事あり。

◉洋服を著て、西洋人と見へざるも日本人たるを失はず。油書を描いて、西洋の油書と見へず、日本人の油書と見ゆるも可なり。

◉日本人は洋食を食へども、西洋人とはならず。然れども吾輩を以て見れば、今の新時世粧を象徵するものは、洋風、洋食に非ずして、日本人固有の風呂敷ならずんばあらず。

◉水は方圓の器に隨ふといへり。容れらるゝものが、容るゝものに隨ふなり。君子は世と推し移るともいへり。世は周圍なり。君子は周圍に同化するなり。然れども風呂敷ばかりは、包む者が、包まるゝものに隨ふなり。風呂敷は日本人の特有なり。日本人の特性を示すものならずとせず。

◉風呂敷は王國たるを得ず。領土の地圖無ければなり。彼は、唯だ偏へに、內容に隨つて自由、自在に變形しつゝあり。風呂敷其のものには、內容無く、機軸無し。

◉風呂敷には大小種々あり、纖弱なるもの、耐久なるもの。或は粗野、華麗、固より其の選を一にせず。中風呂敷、小風呂敷、一世に磅礴し、大風呂敷は、割合に少し。

◉伯大隈は今の人氣ある首相なり。吾輩を以て見れば、彼や、風呂敷を代表するものにして、一世の大風呂敷ならずんばあらず。彼の大風呂敷なる所以は、則ち現

代精神を象徴する所以なり。

◉彼や、政治、經濟、文學、宗教、音樂、藝術、何にても其の得るものを直ちに包み去る。其の速かなるは、風呂敷を包むの剎那に在り。風呂敷は彼なり。風呂敷の模様、色彩は、つねに伯大隈なれども、其の內容の儘に、剎那に、其の形態を變化す。

◉大風呂敷の伯大隈は、ブライアンを包みてはブライアンとなり、ベルグソンを包みてはベルグソンとなり、官僚を包みては官僚となり、タゴールを包みてはタゴールとなる。

◉風呂敷なる彼には定形無しとはいへども、其の精彩は種々に變ず。或は、大に煥發することもあり。其の模様、色彩が、包まれたる內容の形に適應して、藝術的に、位置せらるゝの時、此の風呂敷を透して、內容は美化せらるべし。

◉風呂敷の世なるべし。此の風呂敷は持て囃やされつゝあり。變化せず、舊形を頑守するものは、新風呂敷に非ずとして捨てらる。

◉現代の人は、何物を有するを要せず。唯だ一箇の風呂敷を以て、天下を横行するを得べし。西洋人は、鞄(カバン)を發明したるも、風呂敷には想到せざりしなり。

其九

◉簡疎と、煩雜と、我儘と虛榮とは、形と影との如く此の世を分領しつゝあり。簡疎は我儘より來り、虛榮は煩雜を生む。

◉新年は禮節なり。然れども、名刺受を放出すれば、主人は、奧の室に、炬燵に據つて、淺酌微吟に耽るを妨げず。近縣旅行の廣告を、新聞に提供すれば、旅行するも、爲さゞるも自由なり。庭上に、追羽子の音華やかに響きて、玄關に、禮客を接待する者無し。

◉郵便と新聞との發達は、萬事を簡疎ならしめつゝあり。ひとり新年の禮節のみにはあらず。一錢五厘の金(カネ)はいふに足らず。葉書の一枚は則ち人生の義理を完くするに足るべし。

◉簡疎に流るゝときは、簡疎も無きに同じ。極小の數は零に近ければなり。然れども人心、簡疎を棄つるを得ず。寧ろ簡疎を嚴守せざるを得ざるは、「形式」の氣分、一世を貫けばなり。

◉等しく「形式」の氣分といふとも、或は簡疎となり或は煩雜となる。簡疎と煩雜とは夫婦なり。我儘を逞しくする時は、簡疎となり、虛榮に捕らはるゝときは

煩雜となる。簡疎の裏に煩雜あり。

●繁文褥禮は行政にも、執務にも、營業にも、交際にも、公私を通じて、いよ／＼發達し來れり。或は繁文褥禮を象徴するに官僚的の語を以てする者あり。

●官僚は繁文褥禮の代表者たるを失はざるやも知れず。然れども、官僚必ずしも繁文褥禮の源泉には非ず。繁文褥禮は「形式」の氣分を象徴するもの。譬へば雷鳴の雲にのみ電氣を藏するに非ず。電氣は大空に滿てり。而して官僚を笑ふの人、また我儘の人ならずんばあらず。

其十

●流轉の世なる哉。世人の群は環を爲して圏線の上を奔りつゝあり。尤も遲脚にして、全群に後るる者も、次の一週に、計らず健脚者の前に在つて、一群の先頭に立つ事あり。

●さま／＼の眼あり。或は前を望み、後を顧みる。婦人參政權を叫び、世界平和を夢想し、或は江戸趣味を鼓吹す。鎖國時代の趣味を以て、日進の人を修飾せんとしつゝあり。

●流行は循環す。古本の漢書は、紙の斤目を以て賣買せられし事ありしも、今、古本漢書の暴騰、人を驚かす。斷髮令の時、結髮は頑固の結晶として視られしならん。今、稍、好奇、尊重の目を以て見らる。

●漢字先生の、世に捨てられし者、今、悉く老儒を以て迎へらる。其の說の陳腐なりや、雄大なりやを、冷靜に審察する者無し。老儒は貴しとせらる。

●還暦已後の人は、紅衣を著く。乳兒は紅衣を著る。乳が小兒となりたればとて、紅色を破棄せざれ、還暦の時、再び世に出るを得べし。

●家は舊家、人は長壽に若かず。流行循環し來る時、舊說、舊藏、必らず還り咲きするの時あり。三越は二百年來の吳服屋なり。舊藏の元祿模樣を以て、元祿趣味を鼓吹するを得たり。

其十一

●隣家が燒けたればとて、鉛筆の價、騰貴すること無し。歐洲大戰爭は鉛筆の價を騰貴せしめたり。今の日本に於ては、歐洲の形勢は、隣家の火災よりも、直接に影響を、吾が國人に及ぼしつゝあり。

●鎖國の日本は開國五十年にして、全く世界的日本となれるなり。世界的日本に、國粹魂、東洋魂の興隆は

有力なる事實なり。日本料理、日本趣味、日本藝術、日本音樂、すべて誇張的に鼓吹せらる。必ずしも一時の反動に非ず。這般の事實は、沈著に、根を人心に下しつゝあり。

◉國粹魂、東洋魂を覺醒しつゝあるもの、今に於ては穗積八束の憲法論に非ず、タゴールならずんばあらず。

◉美術院は、民間の美術學校といふに非るべし。美術院の天職は、東洋魂の藝術を鼓吹するに存せずんばあらず。大觀、未醒は新畫壇の大教育家たる可らず。東洋藝術の樹立者たらざる可らず。

其十二

◉吾輩は「半搗米」を以て、東洋魂の發揮に歸する能はず。吾輩は、半死の病翁、或は嬋妍、花の如き女、「半搗米」に活きつゝあるを見る時、慄然として太平の餘習を感ぜずんばあらず。

◉如何に、强辯なる者と雖、「半搗米」を以て、精白米よりも美味なりといふを得ず。瑞穗國の人は、建國三千年にして、糠を食ふに堪へざるべし。

◉精白米に飽ける太平の民は、糠を交へて「半搗米」を喰ふの興味を有す。「半搗米」は、譬へば富貴者の繩暖簾に入るが如し。

◉天下太平の時、必らず不老長生の新法唱へらる。秦始皇、六國戰亂を一統するの時、徐福、求仙方を勸む。松葉を嚼み、烟霞を吸ふて仙人とならんとする者は、裏長屋の貧乏人の中より出でず。必らず榮耀の餘に出づ。

◉小作人が耒鋤を執つて、土に親しめると、金持の隱居が、園藝を事として、土に親しめるとは、意味、雲泥の差あり。貧民には「半搗米」を好む者無し。「半搗米」を好める者は紳士淑女なり。「半搗米」は、新世紀に於ける、爛熟せる太平の新仙方たらずんばあらず。

◉人情既に麥飯の粗なるを厭ふ。新流行、新模樣、新絹物を身に著けて、口に「半搗米」を喰ふといふは、矛盾なり。趣味の矛盾は、太平の象徴なり。

其十三

◉四人のサロメ、二人のカチユウシヤ、二人の助六を演出したるは特筆すべき事なるべし。世間何んぞ好題目乏しきや。また何ぞあらゆる役者を憧憬せしむるの好題目のみなるや。

◉赤城叢書、一たび出れば無數の赤城叢書あり。模倣

偏姝、競爭といふばかりにてもある可らず。一粒の砂糖、一箇の死繩、千の蟻を集むべし。櫻だらけの世にも、好餌は得難きに因らずんばあらず。

◉專賣特許の法律制定せられてより、特許品は既に山を爲すべし。然れども特許の思想、未だ一世に磅礴するに至らず。特許は未だ模倣に勝たず。特許は無人島の如く、模倣は大海の如し。

◉北警の聲は、明治維新の前駆たらずんばあらざりき。大正の維新には、人は皆、南へ、南へと叫びつゝあり。

◉南へ、南へと叫ぶ人は、未だ特許の人に非ず。機軸の人に非ず、日本人が特許、機軸の人となるの時、則ち憲政の光明、大正の天地に照映するなるべし。

其十四

◉女の種類、階級の多きこと、此の頃の小花よりも繁し。舊き女、新しき女といふ諸は、今や、餘りに單調なり。

◉女の種類餘りに多くして、淑女の一語は逸し去らんとしつゝあり。女學生の中にも一樣ならず。藝者といふ中にも種々あり。學問、職業の分科、分業の、木葉の纖維よりも細かくなり行くと共に、女の粧は、花の瓣、蕊の如くに、軟らかに、複雜に分かれ行く。

◉女學生、女教師、工女、女子判任官、電話交換手、女事務員、女記者、女優、新たらしき女、眞新婦人、カフエーの女、大正藝者。明治の終、大正の初に、日本に咲き出でたる花の女は、舶來の花よりも多く、女ばかりの新辭書を作らんには、優に、一大冊子を爲すに足るべし。

◉是等の女は、園藝の進歩を象徴するに足らずんばあらず。同じく朝顔、菊花、ダリア、葵の花といふとも、其の變種の多きは、大空の星の如く、星は皆、相似て、また相侵かす可らざるところあり。

◉藝者は貴婦人に似、貴婦人は藝者に近づく、賣笑婦は女學生に模し、圍者は女房に似る。然れども星彩相似て、分野の自から定まれるが如く、粧は相近し、表情は相遠し。

◉天は、あらゆる花を粧ふに、獨得の精彩と修飾とを與へたり。西洋の女を粧ふこと、硝子瓶の中に花を入れたらんが如く、日本の女を裝はしむるに、筍の如くにせり。

◉日本の昔の女は、必ずしも筍の如くに粧ひしに非るべし。今の女は、らつきようの如く、筍の如くに粧ひ

つゝあり。

◉今年の夏は炎熱、特地に烈し。都の女は、肌衣を著け、襦袢を著け、其の上に單衣を重ね、羽織を被り、而して之を包むにサンマーコートを以てす。

◉筍の皮は、其の眞を保護する所以なり。日本の女の筍に似たるは、其の眞を隱くす所以なるべし。實は其の上に表現されたるもの、却つて眞ならずんばあらず

◉女の美は夏に在り。自然美を包むに、煩雜と虛榮との修飾を以てす。單衣も、羽織も、コートも、蟬の羽よりも薄しとも、蟬の羽も重ぬれば厚し。綿は鐵よりも輕けれど、綿の百貫目と鐵の百貫目とは同じ。

◉筍も、らつきようも、厚皮を重ねたるが趣味あり。皮を重ねたる女は眞の美を隱くす。錦繪の女が美しく見ゆるは、筍の皮を重ねざるに依らずんばあらず。

雨上りの日、病を推し、腹を抑へて筆を弄らす。少し開ける障子の隙間より、裏庭の蛇目草の黄花、閃爍として目を射る。

黑頭巾　再記



社會各方面の新人物

官界及政界の新人物

鐵拳禪

一

▼官尊民卑の餘習未だ、全く脱却せず。此の一個の標題を聞くにすら、『政界及官界の新人物』と爲さんよりは、『官界及政界の新人物』と爲るの何程か讀み善く落著きのあるを感ぜずんば非ず。大正の新人物は、先づ官尊民卑の思想より脱せざる可からず。

▼明治を送りて、大正の新時代を迎へたるも、未だ新文明の明快なる氣分に接せず。陰霖に次ぐに陰霖を以てせるが如く、諒闇の明くるや世は再び諒闇に入り、沈鬱と悲痛との情調は痛く新時代の人心を支配せり。而して新時代の人心は、漸く此の沈鬱と悲痛との間に處して目覺め、我なる者の存在を認識するに至れり。

▼大正の劈頭に於て叫ばれたるは、閥族打破なり。次で反響の如く返り來れるは、黨閥打破なり。一は政友國民の聯合軍が長閥を屠るの大旆となし、一は大隈内閣が政友會を滅すの標幟となせり。何れも其の横暴を制せんとするに在るも、前者の新時代を動かすの強烈なるに比し、後者の感情は時代と逆行するの觀なきに非ず。

▼然れども、大正の新時代は、『打破』聲裡に來りて、『打破』聲裡に進みつゝあるは爭ふべからず。其の官界と政界とに論なく、明治に醸されたる情弊を芟除し、因襲を打破し、以て官紀の振肅と、政界の廓清とを期するは、新時代の任務なり。

▼閥族を打破し、元老を驅除するは、專制政治の餘臭を一掃するの第一歩なり。彼等が明治維新に寄與せる功勞尠からずとするも、其の扶植せる弊根も亦少からず。加之彼等が政界の進歩を喜ばずして、憲政の發展を阻害せること一再のみならず。閥族打破は過去の問題に非ずして、現在に亘るの問題なり。

▼黨閥打破は伯大隈の註文通り、過般の總選擧に於て其の目的を達したるも、更に新なる黨閥を樹立せるの嫌なからず。苟も憲政治下に政黨の必要なる以上、必ずしも之を撲滅するを要せず。二黨對立、乃至三黨鼎立、或は數黨分立も亦勢止むを得ざるなり。黨閥素より打破すべしと雖も、閥族の害に比すれば未だ物の數にもあらず。

▼舊物沈滯すれば、必ず腐敗す。官界又た政界の空氣も、舊人物の呼吸するに依りて惡臭を醞釀す。一たび門戶を開放して、新人物を流入するに於ては、自ら刷新の目的を達するを得。今日の腐敗は、舊勢力の跋扈より生ずるが故に、新勢力の活躍は即ち殺菌上多大の功を奏すべきや論を待たず。

▼閥族打破も、黨閥打破も、換言すれば老人閥打破なり。舊思想家驅除なり。政治上に無責任の干涉を試みる元老の如き、情弊百出の張本たる長閥及薩派の如き、妥協苟合を敢てする所の黨首の如きを排斥するに非ずんば、新時代の空氣を作る能はず。新時代の責務は、一に掛かりて新人物の双肩にあり。

二

▼官界は社會の特種部落なり。文官試驗及第者に非ざれば、此處に入るを許さず。文官試驗は、所謂人間の並木を作るの法なり。されば此の並木制度の難關を通過し、官界に入るもの並木以上の人物ならざるは言ふを須ゐず。縱令天下の秀才と雖も、一たび特種部落に入れば、圭角を去り、氣骨を捨て、屈從を以て美德と心得、而して平凡化せざる可からず。

▼舊人物あれば、新人物あり。既成品あれば、又未成品あり。官界の廣き、新人物、未成品等に乏しからざるも、多くは並木以上に出でず。何れも特種部落臭を帶び、有能なるか無能なるかの不明なる、平凡多奇なきの人物なり。新人物と云ふと雖も、官界の新顏たり、年齡の若きのみにては、眞個新人物と稱するに足らず。吾人の所謂新人物は、才幹秀拔にして、將來有望の器を指すものならずんば非ず。

▼然るに、大正政變後、官界の人物にして驥足を伸べんとするもの、相率ゐて政黨に入りたるを以て、純官界の人物にして將來ありと目すべきは、晨星の寥々たるの比に非ず。純官界の人物は、如何に才幹あるも、事務官たるに過ぎず。官僚的黨人の大臣となり、參政官となるの未來あるとは同日の談に非ず。

▼官界有爲の材の、政界に投じたるが故に、黨人には比較的優秀の新人物を物色するに難からず。既往は兎もあれ、今日乃至今日以後は、官界及政界と劃然區別して、新人物を論ぜんこと興味索然たり。今日官途に在る者を官界人物となし、野に在る者を政界又は黨界の人物となすの、便宜なるを覺ゆ。然れども誤解する勿れ、吾人は官界に在るを尊しとなし、民間に在るを卑しとする者に非ざるを。

▼官界の人物にして、將來を指目さるゝは、有松英義、福原鐐次郎、白仁武、內田嘉吉、久保田政周、平沼騏一郎、伊澤多喜男、稍下つては松浦鎭四郎、菅原通敬等あり。菅原の如きは凡倉と見ゆれど、多年大藏省にありて數字に精通し、今次大藏次官に陞進せり。松浦は文部の一局長に過ぎざるも、盛名省中に鳴れり。

▼菅原は明治二十八年の帝大出身なるも、常に儕輩を拔くこと能はず。其の下風に隱忍して事務に沒頭せり。而して彼れの孜々として勵精せるは、稅制改正の事にして、誅求輕減二つながら立案せり。性硬直なるが

如きも、傲慢にして郷黨の信を得ず。議會の説明答辯、共に議員の反感を買ふこと往々あり。

▼松浦は、菅原より三年後の出。初め内務省に入り、轉じて文相菊池の秘書官となり、後獨逸に留學し、歸來參事官に進み、會計課長を經て、專門學務局長となれり。帝大其他の折合惡しからず、後輩を以て能く局長の威信を保ち、事務の裁斷鮮かなるを見れば、特種部落有數の手腕家たるを失はず。

▲福原は、人と爲り圓滿、輪廓茫漠たるも、多少の機略を藏す。文部に次官たること多年、一たびは清浦流産内閣の文相に擬せられたるも、瞬の糠喜びに過ぎず。文展等に關しては、朋黨樹立の非難あるも、遮二無二例の猫眼主義を斷行す。政友會によく、長閥によく、彼れの行藏端倪すべからざるものあり。

▲彼れの今日まで好評を博せしは、一種の畸人たるに因る。而して其の奇は人格の内部的光輝より發するよりも、寧ろ外面的の態度にあり。古き麥藁帽、古き洋服、總て古きを愛用して、新樣に走らざるの無頓着に依りて、其の人物を稱せられたる也。其の事務的手腕に至りては、未だ靈活を以て許すべからず。

三

▼有松は、長閥の策士を以て目され、政變毎に必ず出頭沒頭す。彼れは岡山の人、怜悧にして機敏、如才なく立廻るを以て、容易に馬脚を露はさず。曾て警保局長となりて、凄腕辣手を試み、凡器に非ざるを思はしめたると同時に、其の良質を誤解されたるの點も亦無きに非ず。

▼白仁は勤儉力行の人、怪腕奇才の稱すべきなきも、篤學誠實の取るべきあり。表面華やかならざるも、成す事行ふ事總て根柢あり、便佞利口一時を糊塗するの輕薄を敢てせざる所、彼れの美點なり。關東州に赴きて幾年、蜚ばず鳴かざるも、御輿を据ゑて動かざるは、彼れの持久力の強ければなり。

▼彼れ曾て栃木縣知事となるや、所謂谷中村事件なるものありて、縣下騷然たり。田中正造の如きは、當局の指令を肯んぜざるのみならず、縣廳に迫りて彼れを暗殺せんとす。彼れ泰然自若として動かず、遂に猛獅の如き田中を說き伏せ、危地を脱するを得たり。斯の如きは吏風を吹かするを以て能事終れりとなす片々たる才子の試み得る藝當に非ず。

▼内田は才氣あり。白仁を去つて内田に接すれば、宛然巖石に背きて花罌粟を觀るの感あり。一は冷殺、一は鋭氣潑剌、一は氣壓し、一は懐柔す。其の遣り口の異なる所、啻に地の滿洲と臺灣との差のみに非ず、人格のメートル同じからざるに出る。

▼久保田は頭腦明晰、儁敏の資なるも、一見茫漠の歎あり。唯其の態度の悠容と、茫漠と以外、未だ手腕の群を抜くもの非す。平沼は資性硬直學識該博、一種の人物なるが故に、檢事總長の適任なるを稱せらる。然れども、彼れは人生を色讀すること未だ足らず。動もすれば學理に墮し冷酷人に忍ぶの失なきに非ず。

▼外交官には男石井菊次郎、男珍田捨巳、安達峰一郎、幣原喜重郎等の

新人物あり。前二者は何程か相場の定まれる觀あるも、後者は未知數なり。安達は重厚の資に缺くる所あるも、婉轉滑脫の才あり。幣原は三菱の女婿、公使たるの日未だ淺きも、其の成績必ずしも凡庸に非ざるを示せり。

▼日銀總裁、子三島彌太郎は將來藏相の目あり。策あり、略あり、事務的手腕ありて、華胄界有數の人物たり。伯大木遠吉は、無學にして往々螺吹に過ぐるも、其の元氣愛すべきものあり。公徳川慶久は赤門を出でて幾許ならざるも、其の學殖、手腕、識見等の多少採るべきものあり。青年貴公子の尤を以て稱せられ、上院の指目する所となれり。

四

▼官民兩黨相對する時、最も生彩を發揮する新人物は、下岡忠治、濱口雄幸等の與黨參謀と、床次竹二郎、長島隆二等の民軍闘士ならずんば非ず。上院の仲小路廉、澤柳政太郎、橋本圭三郎、勝田主計、水野錬太郎等、又箭を與黨に擬するも、下院の虎獅相搏つとは自ら異なれり。

▼床次は金穴漸く秋風を感じ、勢威從來の如くならざるも、人物碧洋の如く包容力を有するが故に、將來黨首たるの器あり。加之常に讀書を廢せず、努力修養を怠らざるを以て、益々人格の光を發揮するに似たり。唯未だ何分にも官臭を脫せず、薩派的鋒鋩を現はし來りて、黨人を苦ましむる事なきに非ざるも、仲小路の長閥臭強きに優る。

▼仲小路は氣骨稜々たるも、少しく權勢に焦せるの傾向あり。風潮に乘じて官海を游泳せるが故に、昔日の幸運を忘るゝ能はず。床次は官海不遇の兒にして、七轉八倒の後、遂に陞進の一途に上れるが故に、奇崛他に屈せざる所あり。一は策を以て用ゐられ、一は器を以て服す。野心滿々たるは、兩者共に兄弟たり。

▼長島は公桂の女婿なりと云ふの外、何等眼目を惹く者なかりしも、近時同志會を脫し、議會に獅子吼するに至りて、嶄然頭角を擢んじたり。然れども彼れの成す所は、飽くまでも國家の爲めなり、岳父の遺志なりと呼號し、獨創的色彩に乏しきを遺憾とせざる能はず。

▼彼れは同志會創立の帷幄に參し、其の表裏情僞を知悉すること、他の局外者の比に非ざるは勿論、元老とも親近なるが故に、諸種の消息に精通せり。彼れが强弩の敵の内甲を射貫き、功名手柄をなさしめたる故なきに非ず。所謂敵の利器を奪つて敵を攻めたるもの、策戰甚だ宜しきを得たりと雖も、奮闘未だ足らざるものあり。

▼近時、彼れは仲小路、男後藤、杉山茂丸等と共に、寺内内閣建立の筋書を書きつゝありと聞く。彼れの外交失敗を痛擊せる、彼れの現内閣彈劾に贊成せるよりして、議會以外に突擊の方策を講ずるの當然なりとするも、超然内閣を助成して、憲政逆轉を敢てせんとするが如きは、吾人其の可なる所以を知らず。

▼下岡の手腕、辛辣にして魔力を有する、子大浦を忍ばしむるものあり。子大浦は事務政治家、學識なきも機略縱橫、而も親分肌あり。對敵行動の殘忍なるに似ず、味方を遇するに温情を以てす。下岡は學識、手腕共に備はると雖も、親分肌を有せざるが故に、部下の信服を得ず。

▼子大浦の斷行、鐵騎突出の概あるも、下岡は理智に囚はれ、多少逡巡の狀なきに非ず。彼れ下院に議席を占むるも、同志會に入らず、無所屬團中の一頭腦として存す。官僚は彼れが家にして、政黨は其の適處に非ざるべく、將來同志會の謀將として、政友會の床次と對峙するが如きは空望なるや知るべからず。

▼濱口は、下岡の剃刀に比し、稍鈍刀の感を免れすと雖も、光を裹むだけ內面的に厚さを有す。人物沈着にして、多少の包容力あり。土佐人の怜悧と、役人より叩き上げたる手腕とは、時に人目を聳動するものあり。尋常螺吹の徒とは異なれり。

五

▼下院議長の候補者横山章は、其の人物如何よりも、寧ろ黄金を散ずるに於て、新人物の名聲を得たり。適宜の自己廣告をなすを、處世上の祕訣とせば、彼れの如きは能く之を知る者と言はざるを得ず。彼れが實業界の手腕は世人の認むる所なるも、政界にありて兵粮方以上に出でず。

▼併し兵粮方と雖も、却々蔑視すべき者に非ず。議會に於ては花々しき活動振を示さざるも、裏面にありて代議士を操縱するの勢力ある者あり鈴木梅四郎、藤井善助等の國民黨の兵粮方たる、阪本金弼の常に何程かの頭數を左右し得る、荒井泰治の東北政界に多少の勢力ある、山本悌二郎の政友會に疎外されざる、何れか這般の消息を語るものに非ざる。

▼菊地武德は中正會の雄鎭、憲政擁護以來尾崎の智囊となり、手足となりて活動し來れり。彼れの畫策動もすれば早計に失する事なきに非ざるも、實行の曉には勞を厭はず。平生の焦燥狀態忽ち變じて、白熱的の熱誠と化す。中正俱樂部と亦樂會との半熟的合同を遂げたる、尾崎の今日あるを得たる、彼れに負ふ所なしと云ふべからず。然るに、彼れ參政官になり損ねて、御機嫌頗る斜なるものあり。彼れ早計伯の態度、今後政界の注目を値す。

▼政友會の小川平吉、國民黨の高木益太郎の如き、新人物と云ふの格に非ざるも、將來に自ら期する所大なるものあり。與黨の田川大吉郞、早速整爾の徒、參政官に納まりたるも、氣位は蓋し夫れ以上にあらん。山川は識見あり、早速は自ら豫算通を以て任ずと聞く。二人者共に等閑措からざるを以て、議會の注意人物たり。

▼東北內閣を思寢にする森正隆、時機到來の時頭を擡げんの下地はあり。岡喜七郞も亦、長く雌伏するものに非ず。杉山四五郞、古谷久綱の徒の官界に鍛へたる手腕を以て、政界に地步を占めんとする、想像するに難からず。江木翼は同志會の謀士、現に內閣翰長の要樞に座し、縱橫の才を揮ひつゝあり。

▼斯くて新人物到る所に奮起し、老人閥を打破して、自ら雄を稱するに至らば、大正の官界及政界、漸く舊時の面目一新するを得ん。而して憲政濟美の日の吾人の頭上に來るあらば、啻に吾人を滿足せしむる耳に非さる也。

△文藝界の新人物

本間久雄

「文藝界の新人物」といふ表題の下に、人物評をするやうにといふ相談を受けたとき、私は、何の考へもなく、すぐ承知して了つた。しかしながら、後で考へて見ると、隨分、私は面倒な問題を引受けたものだといふ當惑と悔恨の情がひし／＼と私を襲つた。と、いふのは何よりも先づ「新人物」といふことの觀念が、私には甚だ不明瞭なものであるからである。一體「新人物」とはどういふ範圍の人々を指して云ふべきであらうか。何等かの新運動、新傾向を力說した人、乃至は力說しつゝある人を指していふべきであらうか。或ひは又、最近に文藝界に出て來た人々を指していふべきであらうか。それとも又は、單に現時の文藝界に、比較的多く活動しつゝある人といふ位の極めて茫漠たる範圍の人々を指して云つてもよいのであらうか。しかし、苟も「新人物」である以上は、やはり第一か、第二かの何れかの範圍の人々か、或ひは、この二つを引括めた範圍の人々と解釋するのが當然であらう。しかしながら、第一の範圍の人々を定めるためには、吾々は、先づ、始めに現時の文藝界には、いかなる新運動、新傾向があるかを定めてからにしなければならない。が、これは容易な問題ではない、早急に解決さるべき問題ではない。又、最近に文藝界に出た人々といふ第二の範圍の人々を定めるにしても、「最近に」といふ範圍が又々曖昧になつて來る。かくの如くして、「新人物」といふことについては、極めて、曖昧な、不徹底な概念しか私には浮ばない。で、私はやむを得ず、さういふくだ／＼しい範疇の制限といふことから離れて、たゞ現在の文藝界で、比較的に個性の色彩が鮮明であるか、又は、何等かの點で、新運動、新傾向の力說者、乃至は暗示者であるか、又は何等かの點で鮮明な未來の豫望を私に與へるかといふ位な、極めて茫漠とした範圍内で、「文藝界の新人物」といふ表題に囚はれないで、私に取つて比較的印象の深い人々についての私の感想を述べるに止めやうと思ふ。で、私のこの『文藝界の新人物』は、決してジヨールナリズムの立場から見た、所謂公平な觀察記錄ではない。たゞ私一個の偶感に過ぎない。そのつもりで讀んで貰ひたい。又「文藝界」といふ範圍も、こゝでは單に文壇及び劇壇の二方面に止めて、美術、音樂等には毫も言及しないといふことも一言斷つて置く。

さて一體今の文壇、劇壇はどんな狀態にあるであらうか。先づ文壇の方から云へば、此方面はおしなべて、沈滯萎靡してゐることは疑ひない。去る五月初旬の時事新報が、「吾等が要求する明日の小說」といふ題で文壇二三家の意見を徵集したことなども、或る意味で、この沈滯萎靡してゐる文壇に何等かの回轉を暗示しやうとした企てゞあるとも見られる。その時、長谷川天溪氏は、今の小說に最も缺乏してゐるものは、デモクラチツクな精神であり、從つて吾等の要求する明日の小說は、このデモクラチツクな精神を基調とするものであるといふことを力說し、相馬御

風氏が、現今の小說家には目前當面の問題を問題とするだけの敏感が最も缺乏してゐるといふことを痛論したなどは何れも肯綮に當るものである。確かに今の小說壇、否、廣く創作界全體が、さま〴〵の意味で、何等かの回轉をしなければならないやうな狀態になつてゐる。一昔前に唱へられたやうな、人生觀察の上の單なる觀照家として、とりすました傍觀者としての創作家といふことは、最早現今では、餘り多くの意味がないやうになつた。單なる傍觀者、觀照家として以外乃至以上に、創作家は何よりも先づ文明批評家であらねばならない。その文明批評そのものが、直ちにその作の價値を定めるほどの鮮明な一種の文明批評を懷抱するものでなければならない。自然と人生とを單にメタフィジカリーに觀照して、或ひは自然の無關心を說き、或ひは人生の宿命を說くといふやうな貴族的な、形而上的藝術家であるよりも、今の創作家乃至これからの創作家は、先づ、自分の立つて居る足元の地盤の批評乃至改造といふことを中心とする一種の社會批評家、文明批評家たることを要する。所謂眼前目睫の問題を問題とすることに最も多くの興味と意味とを見出す「平民的藝術家であることを要する。換言すれば、今の創作家乃至これからの創作家に取つての最重大事は、描寫よりも批評である。觀照よりも主張である。傍觀よりも改造である。更に一言すれば、言ひ古された言葉ではあるが「この世に於て、知られ且つ考へられる最上のことを知り、且つ傳へる」批評的精神である。

以上は極めて概括的な、もの丶云ひ方である。乍併、かゝる傾向は、よしや必ずしも明確な表面の流れとなつて今の文壇に現はれないまでも、必ず、今の文壇の底を流れてゐる大きな流れに相違ない。少くも大正の新氣運をやがて釀し出すべき、大きな流れに相違ない。そしてこの大きな流れに棹して最近の文壇に現はれた一つの事象は所謂問題文藝の提唱である。

問題文藝といふことには、いふ迄もなく種々の階段があり得る。所謂觀念小說、傾向小說の幼稚なものから、イプセン、トルストイ、ストリンドベルヒ等の高級な作物に至るまで、問題文藝の範圍は極めて廣い。が、吾々の要求する問題文藝が、觀念小說、傾向小說的のものでないことは今更云ふ迄もない。吾々の要求するそれはイブセン、トルストイ等の作に見る如く、そこに含まれた問題が、一面直ちに人生そのものの根底に觸れたものであると共に、一面直ちに「よりよき生活へ」の暗示を吾々に與へるものでなければならない。そして、このことを明確に意識して、それを創作の態度とするところに問題文藝提唱者の主張がある。

かゝる主張を眞向に振りかざして、最も鮮明に、最近、問題文藝を提唱したものは中村星湖氏である。氏はすでに今年初春の讀賣新聞に「問題文藝の提起」なる一文を公けにして如上問題文藝の必要と意義とを說いてゐるが、最近も切りにこれを主張してゐる。そして問題文藝の提唱者であるだけあつて、氏の作品、殊に最近の作品は最も多く問題文藝の色彩を帶んでゐる。つひ先月六月公けにした『復讐』『死』の如きその一例である。尤も氏の作に、いか程迄社會的批評が含まれてゐるか、或ひは

いかほど迄文明批評が盛されてゐるか、換言すればいかほどまで「よりよき生活へ」の暗示が含まれてゐるかは、今俄かに斷定しがたい。さういふ方面については、私は寧ろ、氏の將來に最も多くを期待する。現在に於ける氏は、例へば『復讐』に見る如く、文明批評的といふよりも、「よりよき生活へ」の暗示者といふよりも、より多く、人生と自然とに對する懷疑者である場合が多い。すなはち、『復讐』に於て、氏が提出しやうとした問題が、大自然の意志が、宇宙一切の事象の個々の生命に作用する場合、その作用が、素直に、のび〳〵と作用した場合は問題はないが、もしそれが伸び得なかつた場合には、それを「伸びないやうに折り曲げたものに罪があるか」又は「折曲げられるまゝに曲つたものに罪があるか」といふ問題である如きがそれである。とはいへ、とに角氏の態度が、その主唱でも明かである如く、力めて問題的、文明批評的ならんとする點は、如上文壇の傾向の上から見て、最も注目に値する。

文明批評とか社會批評とかいふことを殆んど口にすることなしに、即ち態度として宣明することなしに、而も最も多く文明批評的、社會批評的であるのは上司小劍氏の作品である。上司氏の作品は、往々、技巧の巧妙圓熟といふ點で主として推賞されてゐる。いふ點もなく技巧方面に於ける氏は、その精細な點で、巧妙な點で、圓熟してゐる點で全く獨自の境地を展いてゐる。然しながら、氏の作の基調となつてゐる文明批評に至つては更に〳〵、氏は獨白の境地を展いてゐる。氏の近著感想錄『小さき窓より』一卷を讀んだものには、いかなる思想が、氏の作の根柢となつてゐるかは容易に推測し得るであらう。私は今こゝで氏の思想を委しく論述する暇はないが、氏の思想の根柢はいふ迄もなくデモクラチックな精神である。而もそれは一見貴族的に見えるほど、趣味の鈍錄を伴つたものであり、又リファインメントの高調を伴つたものである。氏の哀愁に富んだユーモアや、又は痛烈な冷笑や皮肉やは、要するに現代社會のフィリスチニズムやプァルガリズムに對する氏の憤懣のあらはれである。この一種の社會批評である點に於て、私は上司氏の作品に最も多くの意義を認めてゐる。

德田秋江氏の作品の齎らす價値と意義とは現在に於てよりも寧ろ未來に期待さるべきであらう。私は不幸にして、あの評判の『舞鶴心中』を讀んでゐない。併し、その前の作品に依つて、又氏の書かれる感想に依つて、又氏の人物に依つて、氏は今の文壇稀に見る享樂性に富んでゐる人であることを私は思はざるを得ない。氏の趣味性は、建築や繪畫から、衣服の意匠等に至るまで可なりに廣汎である。そして氏は常にその趣味性に從つて實人生を藝術化してゆかうとする傾向を多分に持つてゐる。この方面が徹底してゆけば、谷崎潤一郎氏などの享樂藝術とは違つた意味での、一種の享樂的作品が德田氏から生れることを私は信じて疑はない。谷崎氏といへば——最近の氏には餘り作品がなさ過ぎるやうであるが、六月の戲曲『法成寺物語』などを見ると、やはり氏は今の文壇特殊のテンパラメントを持つてゐる才人であることを思はせられる。この他田山花袋、德田秋聲、正宗白鳥、小川未明、鈴木三重吉、田村俊子、森

田草平氏等夫々一家の風格を備へてゐる人々については、今更取り出して何等いふべきことも私にはない。たゞ、未明氏のいつも變らない眞摯に敬服するのと、三重吉氏の作を近頃殆んど見ることが出來なくなつたのを悲しく思ふだけである。

最近の文壇で一つの勢力である觀のあるのは雜誌「白樺」に依る人々、武者小路實篤、長與四郎、志賀直哉、小泉鐵諸氏の作品である。併し私は不幸にして夫等の人々の作品を餘り讀んでゐないために、今、それについて何等の纒つた意見をも發表することが出來ないが、私の讀んだ範圍で、そして又私一個の興味の上から云へば、私は志賀直哉氏の作品に最も多くの興味を覺えてゐる。同氏の昨年の作、『兒を盜む話』はあの病的なデカダンの少年の印象が今でも私の頭に鮮かに殘つてゐる。氏にしてもし努めたなら、谷崎潤一郎氏が甞つて『刺青』『惡魔』その他の惡魔的作品で、一個驚異の世界を創造したと同じやうな意味で、一個の新人生が氏に依つて創造されるであらう。氏は『白樺』の他の人々のやうに「天才」を口にしないらしいが、併し、一番天才らしい面影がある。

武者小路實篤氏の作品は、私は餘り讀んでゐないが、氏の感想は可なりに前から、時々拔き讀みしてゐる。そして前には少なからぬ尊敬を氏に拂つてゐた。殊に氏がいつか人類的の愛といふことを力說してゐた頃はさうであつた。が、最近は寧ろ、少なからぬ不快感をさへ與へられる事が多くなつた。最近の氏はインデブイヂユアリズムといふこととセルフイシネスといふこととを混同してゐる。そしていつも相手を眼中に置いて、その相手を打ちのめして、自分が勝利者となつて行くことがインデブイヂユアリズムのやうに考へてゐる。要するに、氏は自己の個性を認め又は尊重することのみを知つて、そして他人の個性を認め又は尊重することを知らないのである。

この他、新進作家として迎へられてゐる人に相馬泰三、鈴木悅、加能作二郎、中谷德太郎、谷崎精二、豐島與志雄等の諸氏がある。これらの人々の作品の齎らす風格や味ひについての論議は自ら他日に待たなければならない。その中で谷崎精二氏の作で、私の最近讀んだものに『小さき獸』(早稻田文學七月號所載)と題するのがあるが、これなどは、最もよく作家としての氏の將來を豫表してゐるものである。氏にはアンドレーフやドストエフスキーなどの感化も大ぶあるやうではあるが、この作にも、暗黑のどん底に這入つても尙光りを見るといふやうな生活肯定の光面的人生觀が、何等の附燒刄でもなくいかにも作者その人の人格から滲み出たやうに、鮮かに出てゐた。

要するに、これからの創作界は、飽く迄も前に述べたやうな、文明批評的、問題的の傾向を本流として、或ひは享樂的、或ひは高踏的、或ひは惡魔的、曰く何、曰く何と、種々の傾向に分裂してゆくであらう。併しながら、いかなる場合にも、當の作家の批評的精神の多寡乃至批評意識の強弱といふことが、とりも直さず、當の作品の、特色的なるか否かの分岐點となるであらう。一切の作家をして先づ本來の意味に於ける批評家たらしめよ。かう私は叫びたいのである。

轉じて評論界の方を一瞥しやう。昨今の評論界も何等かの時期に向ひつゝあるらしく、昨今、切りに力說される具體的問題の具體的解決といへやうなことも、近頃、また新たに主張されて來た科學的思想の必要といふことなども、二三年來の生命力說に對する、或る意味の繼續であり、又或る意味の反動であるとはいふものゝ、又評壇の轉向を暗示するものである。そしてかゝる評論界にあつて、とに角中心となつてゐる人は、やはり、昨年來の、田中王堂、長谷川天溪、相馬御風、中澤臨川、阿部次郎、生田長江、片上伸、吉江孤雁、安部成紀、石坂養平、稻毛詛風、三井甲之、岩野泡鳴、大杉榮、木下杢太郎諸氏である。これらの人々については、すでに定評があり、私も亦、所謂定評以外殆んど附け加へることを持たないから、こゝでは多くを云はないことにする。たゞ、その中の一二人についての感想をいへば、田中王堂氏は私の最も尊敬する人である。そして、評論家としての氏の態度は、所謂評論家らしい評論家の最もよい典型である如き觀さへ與へる。氏は「現實は茫漠たる無差別の憧憬に依つては改造せられずして、明確なる今日の生活より、それと有機的の關係を保つ計畫に依つてのみ改造されるのである」といふ現實主義に立脚した人生觀察の態度と、又明確なる論理の過程を踏んでゆく立論の樣式とには、氏獨特のものがある。乍併、氏の評論には、稍々もすれば、言葉の概念に囚はれ、又は批判に急で鑑賞に忽かせであることのある點は私の採らないところである。相馬御風氏は田中氏の評論家らしい評論家であるに比して、いかにも詩人らしい評論家である。私は曾て、氏の感想錄「第一步」が出たとき、氏を評してポエト、シンカーと云つたが、今も尙、私の氏に對する評語はこのポエト、シンカーの一語である。「思想の牢獄」を造ることを恐れてゐる氏は、恐らく、何物にも囚はれない自由な心持ちで、氏の敏感な官能と情緒に觸れる一切のものを批評とする。從つて氏は、問題の解決者としてよりも寧ろ提出者として、最も多くの効を收めてゐる。氏の思想に、求むれば一種の體系はある。併し體系ある思想を氏自らから求むるのは求むる方が無理である。

中澤臨川氏には、吾々が求めやうとしても求むべき思想の體系がない。そもそも氏が昨に於て力說し、主張したニイチエ、オイケン、ベルグソンと今日切りに氏が力說しつゝあるタゴールとの間には、如何程氏自らの思想的經過があるであらうか。乃至に我が國の現時の狀態と照し合せて如何ほどの文明史的意義をその間に認めやうとするのであらうか。これらに關する氏の態度には私は何時も慊らず思つてゐる。

木下杢太郎氏と石坂養平氏とは共に批評家として可なりに廣い鑑賞の分野を示してゐる人である。木下氏が常に、演劇に關し、繪畫に關し、その他あらゆる文藝方面について穩健にして妥當なる研究的論文を發表してゐることや、又最近、「自然主義の功罪を論ずる前に、もつと一層徹底したる自然主義を以て、我々の生活樣式、社會生活の眞相が見直されなければならぬ」と主張して、オイケン、ベルグソンから一足飛びにタゴールに移るやうな輕薄な現時の思想界に反抗の氣焔を擧げてゐることなども、共に、氏に對して大に多とすべき點である。私は又、將來、ソ

學を根柢とした文藝の鑑賞批評、又はウォルター、ペーターの所謂快樂的批評を、特に石坂養平氏に望みたい。又最も新進の批評家として田中純氏の未來なども囑望すべきである。

尚、評論界について云ふべきは、最近の一つの傾向として婦人問題が諸々方々で論ぜられ、それにつれて日本現時に於ける唯一のフェミニストたる平塚明子、伊藤野枝諸氏の思想や意見が切りに論ぜられてゐることである。これについてもいふべきことはあるが、意外に豫定の紙數が超過したから、直ちに劇壇の一瞥にうつる。

現時の劇壇は、以上の文壇よりも一層多くの混沌を極めてゐる。脚本の創作界の如き殊に委靡してゐる。昨年までは偶々見るべきものに吉井勇氏の『俳諧亭句樂の死』木下杢太郎氏の『柏井傳右衛門』及び同氏の數年前の舊作ではあるが『南蠻寺門前』外に秋田雨雀、長田秀雄諸氏の或る作などが、讀むべき脚本として、とに角一部識者の批評の對象とはなつたが、今年になつてからは、殆んどこれといふものはない。たゞ新劇壇で、上場して相當の効果を收めるといふ意味で、概念的であるといふ點で一方に批難されながらも中村吉藏氏の所謂新社會劇や、岡本綺堂氏の諸作などが、まづ淋しい新劇壇の實際的方面を、とに角賑はしてゐる。新劇團の俳優としては、藝術座の松井須磨子、舞台協會の佐々木積、加藤精一氏、無名會の東儀鐵笛等又舞台監督としての島村抱月、小山薫氏等の名は、新興劇壇を論ずる上には逸すべからざるものであり、又これらの人の藝風の批評もしたいのであるが、こゝではこれも省く。たゞ劇壇方面で是非一言したいのは劇評文學である。

劇評文學の上から見るとき、第一に擧ぐべきは小宮豐隆氏である。氏の『演劇評論』一卷は、劇評が、在來の所謂劇評なるもの、道樂半分に人生を見、又芝居評を書く無駄話的劇評家の演劇批評といかに違つたものであり、又違つたものであるべきかを明かに示してゐる。氏の演劇批評で最も採るべき點は、氏が徹頭徹尾眞面目な、眞摯な態度で、一舞臺劇の内面方面に含まれた美點を最もよく鑑賞し、發見して居ることである。氏は確かに或る意味で、今の劇壇の一傾向である歌舞伎リブァイブァルの先驅者たる觀がある。併し又氏の劇評は、飜譯劇その他に對しては餘りに、峻嫌苛酷の態度を把持し過ぎてその結果、新しいものに對しては、すべてそれを守り育てゝゆくといふ、(又、さうあらねばならぬ)ゼネラスな、温雅な心持ちを忘れてゐる場合がある。氏の「新作模倣論」の如きその一例である。とはいへ、如上歌舞伎劇の美を發見し、劇評その他に文學的價値を與へた點は劇壇全體の上から見て氏の沒すべからざる功績である。尚、新進劇評家としての灰野庄平氏、久米正雄氏、少壯演劇學者としての島村民藏氏、新歸朝者の坪内士行氏等の新劇壇に於ける今後の活動は正に注目すべきものがあるであらう。私は衷心から是等の人々の活動を期待する。(七月六日)

△教育界の新人物

文部の腰辨

そんなに急なら電話で御話をしませう、書いて下さい、題は何でしたかネ？　さう、『教育界の新人物』！　困りましたネ、『人物』は教育界には居ないと言つてますぜ、ナニ新らしくさへなれば可いと？、……では出來たてのホヤ〳〵は怎麽でせう、參政官とか副參政官とか。

アハー いけませんかネ、あれは教育行政の新役者で、教育者ではないと、……成るほど!!　ナニツ、大隈信常さんは伯の杖の代りだと？　君々、こゝは文部省ですぜ、人が聞いてますから惡る口は御止しなさい。

桑田氏は法學博士、大隈氏とても法學士、行政の事は常識で分かる筈、兎も角二人は是非月旦中に加へては如何でせう、？　ア、さうですか、次月號で參政官を論ずると、其れでは然か　僕の言ふことは無くなりますよ、僕は文部省參政官の事だけしか調べてはありませんぜ、出鱈目なら何でもやります、エ、？　其の方が面白いと、!!　さうですか、それにしても電話では少し變ですネ、ナニ構はないと、？　成るほど之れが本當の壁に耳ありか、アハヽヽヽ。

それ行りますよ、一體この新人物といふやつが教育界に出ない譯を御存知ですか？、御存知ない？、では貴方は濱尾さんを御承知ですか、アヽさうですか、あの人が書記官か何かして文部省に居た頃は隨分省內でも大學方面でも人物拔擢が行はれたもんです、死なれた外山さんなども隨分拔擢家として知られて居ますが、其の外山さんにせよ今の濱尾さんにせよ、矢張り拔擢を蒙むつた人なんです、濱尾さんが大學に行かれたのは確か專門局長の時でした、考へても御覽なさい、今の松浦局長が大學に總長となつて行つたとする、忽ち貫目がどうのからのと申すでせう、其の實松浦さんは現に大學に教へても居り頭はよいし、人間も確つかりして居る、どの點から見るも同じ局長當時の濱尾さんと比して遜色はない筈、然るにも拘はらず誰の目にも未だ松浦などはと若く見られる、どういふ譯けでせう、濱尾さんだつて初めから老人でもあるまいし、松浦さんだつて今に禿げて來ませう、何ぜ濱尾さんの白髮は貴くて松浦さんの禿は喝采されぬのでせう。

其のわけは何でもない、濱尾拔擢の當時にも老人が世の中に生きて居なかつたのではないが、今のやうに上が閊へて居なかつた、そこで拔擢の餘地があつた、今は其頃拔擢されたやつが其處にも此處にもウヨ〳〵して居る、文部省に向つて、少し掃除をしては如何ですと忠告すると、あのウヨ〳〵してる奴が太切なので、滅多にあいつを掃き出すものなら今まで澄んでた水が眞黑に濁つてくる、マアじつとして置くに限るといふ、……これでは丸るで人間を孑孑扱ひにしたも同然、——成るほど校風擁護とか何とか言つて舊いものが保護せられ新らしいものが歡迎されぬのも無理はない、校長交迭毎に起る新校長排斥や生徒委員の上京運動などでも分かる、學校の仕事其ものが既に保守的情義的だから、學校

革の行はれ難いのも當然である。

一々名前をあげるのは校長排斥運動に當るから其れは言はれぬが、現に東京だけでも最早いゝ加減に退引してよささうなと思はれる者が無いでもない、無論さういふ人々でも一々數へ立てれば効績もあらうが、其んな頌德は死んだ時にす可きものである、學校の新使命の開拓の爲には舊るいものが犧牲になり、新らしい將來の分かつた人が代つて其任に當るべきである、舊るい株は死ぬからこそ肥料にもなる、ジツトかじりついて居ては若木が傷むばかりだ、學校も時勢と共に變遷して行く可きものとせば、いつまでも學校の沿革ばかりに拘泥しても居られない、其の沿革に明るい生き字引きが居なくては學校經營が出來ぬといふなら、古るい小使でも大事にして腰の拔けるまで飼ひ殺してするがよい、校長は其れでは可かぬ、過去を語るものではいかぬ、將來を談じ得るものでなくては駄目である、古るい丈けが有難いなら、備前燒の立像でも据ゑて置くがよい、生きた校長は古色蒼然たるばかりが賣り物でもあるまい。

拔擢の少ない文部の内でも時々は必要に迫られて其れをやるが、年所を經つうちには其の結果が大抵いゝ様である、少し古い方から始めるなら、

村上外國語學校長の如きも其一例だ、今日では村上を新人物といふ人もあるまいが、其の校長になり立ての時には矢張り一種の新人物であつた、――少くとも外國語學校の範圍内での新人物であつた、其の頃は村上よりも古い頭が四五人も居て、皆な新校長の眞目が何うのかうのと言つたものだ、それを文部省が無理押しつけに押しつけたればこそ、今になつては村上ほど無事に勤めあげて行く男は外國語學校開始以來未だ一人もないと褒める人さへあるに至つたのである、村上を新人物として評するのは前陣の次第で少し恐れ入るから、此所に月旦を試みるわけでもないが、兎に角このやうな拔擢その事が教育界の爲に多く良好の結果を齎すこと丈けは之れでも分かる。最近に行つた京大の總長新任の如きも、此の見地から言へば惡るくもない、但だ澤柳をして今少しく改革をやらせてからにし度かつた、然かし荒木と澤柳と何方が新人物かと言ふ事になると頗る問題だ、澤柳は從來は新人物を以て目せられた人である、荒木は新人物としての將來を有する人である、機畧の點から言つても膽力の點から言つても澤柳の方が上であらうが、ヌーボー式で、割合に頭がよく、統畧の才ある英雄肌の人でもないが、人に可愛がられる素質を持つた點から言へば荒木の方が上である。

一體澤柳といふ人は役者で言つたら團藏といふところだらう、定九郎式の惡型は此人でなくては勤まらぬ、大向ふを相手にしてヤツとか何とか掛け聲して兩足を踏んばり眼玉をむいて見せるところは此人得意の藝當である、一高校長から普通局長、高商校長から東北大學長、つゞいて京大と斯らいふ順序で毎も其の大眼玉をむいて來たのは確かに最近教育史上の壯觀であつた、此人自身が中學校長から拔擢された如く、此人も後進を拔擢するに吝ならぬ所がある、省内の官吏は素より直轄學校乃至地方中學などの校長教員に至るまで從來此人の周旋を多とせざるもの甚だ

尠ないといふ事である、かく拔擢によつて常に新氣運を教育界に起し、大膽不敵に自己の所信を貫かうとする所は天晴れ教育界の豪傑である、今の普通局長田所などは拔擢には澤柳以上の敏腕があるが、全く肌が違ふ、才氣縱横圓轉滑脱、其の長所であつて澤柳のやうな惡型は其の短所である、役者で言つたら之れに菊五郎といふ格であらう、ヤア音羽屋！などゝ大向ふから來るのは此人に限る、何方が餘計に仕事をするかは問題だが、澤柳と違つて田所に突當つて進退に谷まるやうな事はない、人間が怜巧で策があつて幾つでも案が浮ぶのは此人の長所だ、澤柳は原理と主義とで行かうとし此人は理窟は後で付けやうといふ、其處が根本的に違ふ、澤柳は面と向つて惡口もするが田所は始終ニコ／＼して怒つた顔などした事はない、省内でも田所局長の怒つた顔を見た事がないと言つてる。

福原次官も田所と其の圓轉滑脱を同うして居る、新聞記者などは福原の瓢箪に田所の鯰——二つ合せて瓢箪鯰と歌つて居る、然かし其の瓢箪福原に腹の括りがあり、鯰に鋭敏な鬚が有る如く、ぶく／＼と肥滿とせる福原に案外硬いところがあり、スラリクラリとした田所に案外、神經を痛めるところがある、心配性は田所の持病で、惡る口は福原の道樂である、田所が情感的な英詩文の趣味を有し福原が四角ばつた漢詩を作るなどは面白い對照である。

序に松浦を看過するわけに行かなくなつた、前二者に比し官僚式なところが多いが大膽といふ點から言へば案外此の人が一番であらう、理路明晰條理整然、一糸紊れず堂々と押し強く行くところに此人の特色がある、其の代り田所ほどの情熱がなく、福原ほどの世才がない、大向ふの喝采もない代りに失敗をする憂も少ない、會計の山崎なども同巧異曲であるが、これは其のネイーヴなところに一種の魔力がある、それから……

オヤ／＼話が行政方面へ脱線したと？……イヤ是からが本題だ、田所と澤柳との人物拔擢の趣きは全く違ふ、各々一長一短があつて何れを是とし何れを非とするわけにも行かぬ、(これは機を見て論評しやう)然かし此の二人が近來の拔擢家たる事は疑がない、然かし之と同時に福原松浦に人物を看破するの明ある事も亦た事實である、——少くとも皮肉な觀察力に富んで居るのは……、兎まれ近來省内の拔擢方針は此等各中心人物の間に一致の點があるのは注目すべき現象である、それは野人起用の形式を採らずして、實務熟達の途によらうとする事である、具體的にいへばアップレンチスシップから段々使ひ上げやうとする方針である、省内で親しく使つて見て伎倆と人物に安心の出來るものをドシ／＼嫁入りさせてやらうと云ふ方針である、一高の瀬戸や五高の吉岡は視學官廢官の犧牲者とも見られやうが、一面から見れば矢張り此の拔擢主義を裏書きしたものである、話の序でに高等程度の學校長を短評しやう、然かし餘り長くもなつた事であるから、誰は誰に引かれたなどいふ話は御あづかりとし、唯だ簡單に新人物中の新人物として其名前を列擧するに止めて置かう、東京高等商業の佐野善作、——これは此種の學校の範圍内に於ては蓋し良教育家であらう、專門のことは何も知らぬ人の方

専門の學校の校長には向くといふ議論もあるが、かうした例外も有るといふ事を一言して置きたい、一高の瀬戸虎記は田所と同じく土佐人だけに辯に長じて居る、就任のとき澤柳に逢つたら、君少し生徒の思想問題を調べて見ろと言はれ、爾来大に其方面を研究して居るといふ、至極眞面目な男である、理學士で長く専門局付きの視學官をして居た爲め、世人は學者一方の人のやうに思ふ者もあるが、中々情に富み覇氣も機才もある人だ、特に學校騷動鎭撫の名人であつて、古くは岡山高等學校、其後は長崎商業學校等の大騷動に、三寸不爛の舌を揮つたので有名に成つた、全く反對の行き方をして居た新渡戸校長のあとに座つて今の如く泰然自若として居るのは、善惡兩方の意味に於て偉らい所がある、登校の際は電車の吊り皮に下つて、生徒と一緒になるなど、以て一には其の書生好き、二には其のヂンプリネーリヤン的態度を見るべきである。

第二高の武藤虎太は三好前校長のあとに此人を推さゞれば人なしとまで言はれた位で、確かに德望はある、熊本の人で、廿八年の國史出であるが、腦のよい男と見えて、岡部精一を凌いで一番で卒業した、然かし校長としての器量の大小は彼れの將來に徴して知る外はない、第三の酒井佐保も最近に轉勤した男だが、之れは六十の老人だから、新人物拔擢のカテゴリーには箝まらない、之れは御遠慮申して論評すまい。第四の溝淵進馬は若い、廿八年の文科出で、これも一番であつたが、學究といふよりも才子である、將來は何うか刮目す可きもの無いでもない、第五の吉岡郷甫は卅二年の國文出身、これも一番で出たが、山口縣人だけ人當りが柔らかで敵が少ない、人の知らぬ間に仕事をして行く特長がある、第六の金子銓太郎は東京の人で、歩兵大尉法學士だが、當年五十二三でもあらう、新人物としては之れも御遠慮申す、第七の吉田賢龍は石川縣、三十年哲學出身で、在校當時から頭の禿げた、おぢいさんの様な人であつたが、學問はある、人柄はよし、校長で仕くじつても潰しの利く男である、德望もあるから仕くじりも有るまいが、餘まり花々しい事は出來ぬ人である、斷の一字に缺けたと言はれるだらうが間違の少ない確かな人物である、學究的ではあるが青表紙くさくない所が取柄である、第八の大島義脩は廿七年の哲學出身で、兄弟揃つた才子である、卒業後直ぐ文部省に入つたが視學官としても頭のよいのが評判であつた、立身の早いわりに餘り世の中に歌はれないのは少し、スーボー式が足らぬ爲め子分の付かぬ所爲でもあらう、然かし精力絶倫勤勉無比と來て居るから性來の智と才とを發揮する機會も自から少くあるまい。

東西兩大學始め東北九州にも、新進の教授助教授乃至講師にして此の月旦に値するものが少くない、然かし學究の方面に限つた人々であるから之を世間に教育家として歌はれる（又は歌はれる筈の）人々と一緒に論ずるわけにも行かぬ。

東京其他の高等男女兩師範及び東京高工、美術學校等の名校長は何れも新人物中に入るべく餘りに老大家である、少し若いのでは東京音樂學校長湯原元一が居る、之れは又た大きな所もあり小さな所もあり、學者でもあり俗人でもあり、頭がよくてボツとして、ズルイ様で至極眞面目

である所の奇怪なる　物である、新潟邊の視學から鋭上り(ぶちあが)りに上つて、到る處に其れ／＼の事をやつて居る、水が方圓の器に隨ふ如く、之れは圓滑無碍の男である、人に好かるゝも此所(こゝ)、好かれぬも此處(こゝ)、‥‥まア此の位にして置きませう。

△實業界の新人物

四國町人

おたまじやくし

◎昔カーライルは、英雄論を書て、實界の暗黑に一つの光明を投げ付けた。今は實業全盛の世の中だ。一番此文豪を九泉に起して『實業家の巨豪』(ヒーロー、アズ、ビヂネスマン)といつたやうな、少し新らしい處を一つ書かせて見たいものだが、さて誰れか在る。カーネギーでもモルガンでも、クロムエルとの同席はまだ〱恐れ入るといふだらう。

◎して見ると、日本の實業家などは、まだホンのおたまじやくしである。無論此中からでも、將來意外な巨魚が出てゝ雲を吐き世を吞むやうた偉觀を現じないとも限らぬ。だから僕は決して悲觀はしない。然し今の處は韓退之の皮肉ぢやないが、どちら向ても黃茅白葦。過渡の時代は先づ此位で致方がないとして、其間に處々(ところ〴〵)紅くふくらんで居る花の蕾を少し拾つて見やう。

落葉雨の如し

◎然し、いつもながら驚くのは『時』(タイム)の力である。時一たび至れば萬木黃落せざるを得ない。時一たび至れば千樹笑を含むでないか。如何なる大手腕家でも、『時』が成し遂げる改革の力には瞠若たらざるを得ない。見よ我實業界にも、此恐ろしい『時』は既に其革新の手を着けて居るではないか。

◎澁澤男(七六)が如何に其自動車を旋風の如く乘り廻はしても、大倉翁(七八)が如何に其鬢髮を漆の如く黑しと誇つても、飛鳥川昨(きのふ)の淵はけふの瀨と遷る此世はもうすつかり變つて了つた。三井の益田孝(六九)が退隱してからでも既に五六年は過ぎた。次で三菱の重鎭莊田平五郞(六九)も退隱する、次で銀行界の覇王安田善次郞(七八)も退隱する。次で貿易界の巨擘森村市左衞門(七七)も退隱する。次で紡績界の元老日比谷平左衞門(六八)も亦退隱する。こゝ四五年來の暗遷默移を見ると、秋聲一夜落葉雨の如しの感なきを得ない。

少壯者の時代

◎成程柳は今でも靑い。然し其柳の下には年を經た以前の鮒はもう居ない。實業界の外觀は、以前と大した相違はないかも知らぬ。然し之を動かす實權の把手(ハンドル)はいつの間にか既に少壯者の手に歸して了つた。

◎三井銀行では早川千吉郞(五三)が今猶總理である。然し同行のハンドルは既に早くから池田成彬(四九)の手に在るではないか。三菱では今でも南部球吾(六二)が管事である。然し是もハンドルは江口定條(五二)の手に在る

ではないか。日銀では六十三の高橋是清が退いて、四十九歳の三島彌太郎が代り、正金では又その三島を祭り上げて、更に若い井上準之助(四七)を迎へたではないか。最も保守だといはれて居る郵船會社ですら、正副社長の間にぼつ〳〵隱居の相談が始まつて、新進の林民雄(五二)が中心人物とならんとして居る。一時石油界で剃刀のやうな奇才だといはれた松方乙彦は、今年漸く三十七歳の青年實業家である。自から成金と稱して實業に政治に芝居に風流に我から問題の種を蒔て歩るく福澤桃介は、勘平さんよりは大分歳は喰つて居るが、艶福ならまだ負けぬと力むだけあつて、知命には二つも若い四十八の好男子である。

◎百事草創の時代に、一足の草鞋一本の天秤棒から、七顛八起の奮闘をやつて、所謂『事業界の勇將』(キャプテン、オブ、インダストリー)となつたといふ如き小說じみた獨立自營の成功者は、天候の定まつた今日の世の中に、さう雨後の筍然と無闇に現はれるものでない。從て世人は、天麩羅といへばすぐ天金と聯想するやうに、銅山王といへば、今でも矢張足尾の古河、別子の住友を聯想するやうだが、焉んぞ知らんや、茨城縣の東北隅、太平洋の烟波と相照映して立てる日立鑛山を、先つ年睨み當て堀り當てた久原房之助は、破竹の勢を以て各地の銅山を席卷し、世間が銅の下落に泣面かゝへて手を拱ぬいて居る間に、默々として發展し、沈々として膨脹し、今や滿蒙にまでも猿臂を伸ばして、實力に於ても方法に於ても、既に住友を凌ぎ、古河の壘を摩して來た。此勢で推すならば、彼は遠からずして東洋一の銅山王となるだらうといふ噂だ。處が此久原は本年漸く四十七歳の壯年者である。波は高く瀨は迅し、いつの間にやら魚は既に龍と化して居るのである。

金融界の異彩

◎幾ら威張つて見ても、人間は矢張り孤獨で仕事の出來ない動物だ。世は道連れ世は情けとはよく人間の弱點を言ひ現はして居る。さて其世渡りの道中で、親みのある心安い道連れは同窓の友に若くはない。學問の觀念の全くない者でも、同窓の好誼は不思議なもので、何の話でも樂に出來る。此に於てか同窓の多少といふ事が、實業界に於ても亦大なる勢力となるのだ。

○今の實業界に二つの大なる同窓的勢力がある。一は三田派の勢力で、一は赤門派の勢力である。此勢力の上に立つて居る者は、根を張ること深く、功を成すこと早い。其大勢力の上に立つて、我金融界に異彩を放つて居る者は、赤門派に正金の井上準之助(四七)あり。三田派に三井の池田成彬(四九)あり。以て對立の觀を爲して居る。

◎見渡せば他にも花は無いでもない。日銀には土方久徵(四六)が居る。長い間井上の競爭者で、一時は日月と聯べて唄はれたが、理事に納つて以來、大分懸け隔つた觀がある。其他興銀には志立鐵次郎(五二)小野英二郎(五二)あり。勸銀には志村源太郎(四九)柳谷卯三郎(四九)あり。十五銀行には成瀨正恭(四八)あり。三菱銀行には串田萬藏(四九)あり。安田銀行には安田善三郎(四六)あり。第一銀行には石井健吾(四三)があれど、花形役者としては、どうしても井上と池田とを對立せしめなくてはなるまい。

◎井上のやうに立身の迅い者は一寸鮮い。二十八年に大學を出て、十年經つか經たぬに日銀の營業局長となり、更に又一躍再躍して正金の頭取となつた。出ては時代の寵兒として持て囃され、入つては居あり金あり妻の美しきあり、彼は少壯赤門派の羨望の中心となつた。池田は民間に立つだけそれだけ井上ほど華々しくは見へぬ。然し彼の立身も亦異數である。彼は三田を出るとすぐ三井に入つた。當時の大立物中上川彦次郎は彼の人物に惚れ込んで最愛の娘をくれた。群雄林立せる三井の大舞臺に立つて、彼は殊の外光つて見えた。とん／＼拍子に營業部長となり、次で重役となつた。

◎井上は誰が見ても才子といふ事がすぐ分る。然し彼は錐の尖を囊の外に露出しない。判斷は神速、主張は強硬、どんな面倒な問題でも、快刀亂麻を斷つ如く遣つてのけるが、穩秀なる容貌、疾言せず、厲色せず、何の問題で話をしても、宛ながら綿物にでも觸つてゐるやうに思はせる特長がある。池田は井上よりもモ一つどつしりした處がある。殊に公私の別を明にし、如何なる情實に責められても、斷々乎としてイエスといひ、ノーと答へる剛直がある。中上川の打込んだ點は此處ぢやないかと思はれる。三田派の連中は彼に對して羨望といふよりも寧ろ畏敬の眼を以て見て居る。

二人の將來

◎今の處では、井上よりも三島の方が無論大なる勢力であり、又池田よりも早川の方が無論大なる立物である。三島も計數に明るく、豫算案の討議では屢政府を窘め、且多年研究會の牛耳を執つて居たほどあつて人物も毅然としてゐるが、所詮は井上のやうな天成の銀行家ではない。矢張山本達雄のやうに、つまりは政海に流れ込む男であらう。早川は松方侯によく井上侯にもよく、且又社交に長じて居るから、今では大なる力であるが、蓋し今が全盛時代であらうと思ふ。

◎それから見ると、井上は之から先きもまだ／＼轉展して往く前途を有て居る。無論日銀の總裁にもなるであらう。其時には我日本は始めて中央銀行の總裁らしい總裁を見ることが出來るといふものだ。池田は此まゝで、三井を動くまい。三井の方でも離さぬだらう。さうして年を經、功を積む間に、彼の威重は益々加はるであらう。彼の澁澤男が第一銀行の勢力を背景として、久しく民間銀行界の軍鎭となつてゐたやうな勢力を、或は池田の將來に見ることがないともいへぬ。

實業界の白眉

◎先年添田壽一(五三)が興銀不始末の責を負ふて辭職した時、富士紡績の和田豐治(五五)に跡釜の相談があつた。和田は森村市左衛門に此事を話した。森村は今の實業界で、商人の獨立といふ事に就て比較的徹底した意氣を有つて居る爺さんだ。和田の話を聞て、右の手先で拂子のやうな髯をしごきながら「廣い野原で思ふ存分飛んだり刎ねたり出來る世の中で何も今更窮屈へはいつて箱を使ふにも及ばないぢやないか」といつたさうだ。此一言に和田は覺えず膝を打つて、我意を獲たりと喜び、跡釜の話は二つ返事で斷つて了つた。

◉今の事業界で、意氣と人格　手腕と、拍子揃つた事業家らしい少壯事業家は、先づ鐘淵紡績の武藤山治(四九)とか富士紡の和田なんどであらう。此二人は三田の雙生兒ともいふべき不思議の因緣と對照とを有て居る。同窓にして同級、卒業後彌次喜太となつて共に米國に渡り、歸來相前後して三井に入り、それまでは殆んど兄弟のやうにしてゐたが、鐘紡の改革から端なく西と東に別れることになつた。武藤は鐘紡に殘り、和田は富士紡に入り、而して二人共揃ひも揃つて紊亂の極に達した會社の整理を託された。突くなり殺すなりどうとも勝手にせよと、生命までも投げ出して大改革を行ひ、其明るい頭と剛い腕とで、孰れも今日のやうな東洋に雄視する大會社を築き上げたのである。

◎武藤の頭は、數字に始まつて數字に終る。丁度煉瓦を築き上げるやうに、營業の布置作戰他からは五分の隙も見ることは出來ぬ。故に其經營振りは如何なる大地震に遭つてもびくともしない處に彼は强大な自信を持て居る。和田は緻密な數字を豪快の態度に包み、細節は委せて大局を抑へ、卓厲風發、意氣を以て人を動かして行く風がある。鐘紡が磐石の如く堅固なるに對し、富士紡の遣り口が豪放に見えるといふのは兩者が性格の反影と見てよい。

活動の幅　努力の高さ

◎武藤は少し偏狹で、和田は少し大ざつぱだ。然し二人共、金儲けよりも仕事が道樂だといふのが他と變つた所である。武藤は曾て慰勞金として二十五萬圓を貰つた事がある。すると彼は直に十萬圓を職工に頒けて遣つた。鐘紡の職工待遇法は、今の日本で殆んど類のないほど完備して居る。先年福田法學博士が、世界の模範といはれるツアイスの工場を視て歸ると、武藤は直に教を請ふて之を參考にした。職工の中には彼の寫眞を神棚に祭つて居る者もあるさうだ。

◉和田が森村に所望されて富士紡に入つた時、重役として株を持たねばならなかつたが、彼には其資力がない。そこで一時森村の株を借りて置くことにした。幸にして奮闘効を奏し、會社が追々儲かるやうになつたので、會社から此株を彼に贈與することになつた。處が彼は要らないといつて斷つた。更に賞與を遣らうといふと、賞與も要らないといつて斷つた。散々說諭されて漸く貰つて置くことにしたが、恰かも其頃附近の村落同士で、基本財産の問題から、激しく爭つて居たのを彼は聞て、貰つた賞與を悉く其村へくれて了つたさうだ。今でも彼はさういふ癖が拔けぬやうだ。

◎福澤先生は、早い頃から日本の將來を考へて、勞働問題の發生をひどく心配してゐたと聞て居る。武藤が儲け主義に隨せないで、株主連の飽くなき欲望を制限して、職工の待遇改善に苦心維れ日も足らざる有様は見上げたものである。之と相對して、和田が森村一流の獨立の眞味を解し、頂天立地誰れ憚る所なく、大手を振つて男らしく活動して居る樣子は、今の實業家中でいさゝか水際立つて異彩がある。

◎活動の幅からいふと、武藤は一代一業主義、或は此上もう手を擴げぬかも知れぬ。和田は統率の器あり、推す者次第でどう變るか分らぬ。然し彼等の時流に卓越せる點は、活動の幅ではなくして、其努力の高さである。此高さがあるので、何だか彼等が今後の實業界に段々と光つて來はせぬかとも思つて見るのである。單に才ある者、金ある者、多少の地位多少の勢力ある者ならざるにあるが、それは所謂武芽白熱である。

新刊批評と紹介

△小さき窓より　上司小劍著　大同館發行

これは著者が書齋の小さな窓から人生、社會、自然を眺めたものである。氏の小説以外の評論感想である。諷刺や皮肉やユーモアがあつて、いかにも小氣味がよい。（定價金七拾九錢）

△妄人妄語　森鷗外著　至誠堂發行

鷗外氏の隨筆のいろ／＼を輯めたものである。論文もあれば批評もあり、たとひ忽卒の間に成つたものでも却て其間に筆者の面目が露れて面白い。（定價金壹圓貳拾錢）

△罪・罰（全）　生田長江生田春月共譯　植竹書院發行

ドストイエフスキーの傑作「罪と罰」の全譯を全部六號活字にて一册に收めたる大册、讀者にとつては便利重寶なる物也。（定價金壹圓四拾錢）

△大正雄辯集　大日本雄辯會發行

本書は「明治雄辯集」の續編にして、苟も世人の耳目を聳動せしめたる大演説は皆收めて本書に在り。（定價金壹圓貳拾錢）

△健全哲學　鈴木美山著　帝國健全哲學館發行

本書は健康にして幸福なる生を送る爲に必要なる哲學的智識を極めて平明に何人にも了解し得るやうに書き表したものである。（定價金貳圓）

△原始へ　村田光烈著　東雲堂發行

近代の生に疲れて偏へに原始至醇の世界に復らんとする憫みの聲を歌に詠うたものである。一般に悲調に滿ちた可なり佳い句もある。（定價金壹圓）

△近代西洋文藝叢書　博文館發行

記者は未だ一讀するの機會を得なかつたが爲めに批評するの資格はないが、左の譯書は何れも適當なる人選を經たものであるから、恐らく信用するに足るものであることを信ずる。（定價各金壹圓參拾錢）

◎罪（カッツエン・シュテイヒ作）　小宮豐隆譯

◎快樂兒（ダヌンチオ作）　森田草平譯

◎泥濘、結婚の幸福（トルスト作）　阿部次郎譯

△增訂改版貳倍收穫天理農法　小柳津勝五郎著　實業之世界社發行

天理農法に基く耕作法に依れば遙かに增大せる收穫を得るとの事にて其方法を講述せるもの也。已に版を重ぬる事二十有餘版、今また增訂改版す。徒らに誇稱せるにもあらざるは其實證に就いても知るを得べし。（定價金壹圓貳拾錢）

△近代佛蘭西文學　後藤末雄著　石川文榮堂發行

佛蘭西文學を我國に紹介する目的で書かれたものである。ゾラとかフロオベールとかロマンローランとかの藝術なり、性格なりを叮嚀に解り易いやうに解説してある好い本である。（定價金壹圓貳拾錢）

△大帝那翁（第一卷）　五來素川著　敬賢堂發行

本書は今尚讀賣新聞誌上に連載せらるゝ好讀物にして、世界の歷史中最も意義あり興味ある佛蘭西革命時代を叙するに趣味ある筆致を以てせり。（定價金壹圓拾錢）

△舞姬　長田幹彥著　植竹書院發行

西の都と、都の舞妓とを描くに一流の才筆を以てせる長田氏の作は世

既に定評あり。此書には殊に好評ありし「零落」「尼僧」「澤」等九篇を收む(定價金九拾五錢)

△愚人の力　野依秀一著　實業之世界社發行

無學を賓物にし、馬鹿を呼物にしてゐるやうであるが、中々馬鹿ては出來ぬ藝當である。只奮鬪努力の人野依君は傍若無人なやうな顏をして思ひ切つたことを言ふだけ、中には至言もあるれば、反語もある。面白味もそこにあれば、遠らなさも亦そこにある。(定價金壹圓四拾錢)

△癡人の懺悔　木村莊八譯　洛陽堂發行

「癡人の懺悔」はストリンドベルヒの自傳の第五卷目に當るものであつて、當時非常なる問題を惹起した有名な物である。譯文も極めて解り易い。(定價金壹圓六拾錢)

△女七人に男一人(定價金九拾錢)　高濱虛子作　四方堂發行

△柿二つ(定價金壹圓拾錢)　高濱虛子作　新橋堂發行

いづれも虛子氏の小說である。前者は「お丁と」と題して國民新聞に、後者は朝日新聞にそれ〳〵連載せられたものである。然し前者は純然たる小說であつて、後者は小說には相違ないが子規其人を寫さんとした小說である。著者が所謂寫生文の二つの行き方として面白い比較である。

△伯林脫出記　山田潤二著　千章館發行

千歲一遇の歐洲大動亂に際會して、時局の推移と動搖の局面とに接觸して委しく其才筆を以つて描寫せるもの也。(定價金壹圓三十錢)

△西洋史新話第七册 オルレアンの乙女　箕作元八著　博文館發行

百年戰爭に於いて有名なる夫のオルレアンの一少女を描くに興味ある物語りを以てせり。精確なる史的事實を知ると共に有益にして興味ある讀物として健全なる家庭に推奬する。(定價金壹圓)

△美と女と　青柳有美著　實業之世界社發行

本書は有美氏が「今日迄の著作中最も會心の物である」と言へるだけに如何にも到る處例の有美式獨創的美學論や性慾論が時に讀者の肺腑を突くものがある。(定價金壹圓二十錢)

△高遠の理想　早稻田大學出版部編輯發行

大隈伯の演說集にして、伯は政治、社會、文藝、哲學等あらゆる物に對して該博卓拔の議論を戰はす處實に驚く計りにして兎にも角にも天下の珍品たるを失はず。(定價金壹圓二十錢)

△修養日訓　大町桂月監修　植竹書院發行

一年三百六十五日に宛て修養を說くに古今の東西金言を以てせり。(定價金壹圓二十錢)

△禪の骨髓　秋野孝道著　丙午出版社發行

禪の眞髓に徹底すべく、いろ〳〵の法話を收めて其修養に資せり。(定價金壹圓)

△ローマ字びき國語辭典　上田萬年著　富山房發行

我辭典界に一新機軸を出したもので、發音によつて直に索き得て曖昧ならざる特長を有し。字數も割合に多く携帶にも便也(定價金壹圓)

△黑曜集　前田夕暮著　植竹書院發行

本書は著者が明治四十年後の作中會心のものを選んで一册に收めたものである。(定價六十錢)

中央公論大正新機運號創作

問題小說及問題劇十篇



小さな廢墟

田山花袋

『何うも此頃は何も彼も問題にならなくつて困る』

私はかう笑ひながら言ふと、若い友達はまた始まつたといふやうな顏をして、『さうですかな、僕なんかまた問題になりすぎて困るんですが……。何も彼も、そんなこと下らないと思ふことまでも、問題になつて仕方がないんですがな』

『さうかね』

『貴方のはまた問題になるのにわざとしないで放つて置くといふやうな處がありやしませんか』

『そんなことはない積りだけれど……』

『面倒だから放つて置く。考へずに置く。さういふんぢやないでせうけれど、始めから、問題にならないつて言んではないんでせう。幾度もさうい

ふ問題に邂逅して、もうそんなことはわかつてゐるつて言ふんでせうが、そのわかつてゐるといふことを言はずに、先を考へて見なくつちやならないんではないでせうか。少くともトルストイがあの年まで深い考察と恐ろしい煩悶とに耽つたやうに――。」

「しかし、君、トルストイのあの晩年の悲劇は、君達の想像してゐるやうに、問題に逢着してあの年まで煩悶を捨てなかつた爲めに起つたことだらうか。さういふ風な性格も、あの人にはあつたには相違ないが、もつと他に理由があつたんではないかしらん。僕等もまだあの年には達しないから、よくはわからないけれど、兎に角、人間にはある境からある境、ある知識からある知識と言つたやうに、物が開けて行つて、問題にしないといふことが、大に問題にしてゐるといふことにもなつて行く時があるもんだからね」

若い友達は考へて、「それはさうでせう。問題にする方法がちがつて來ることはあるでせう。しかし問題にならないといふことは絶對にないと思ひますがね」

「絶對に？」

「え」

「絶對にはちよつと考へ物だ。何故なら、いくら問題にしたつて何うすることも出來ないものがこの宇宙の底に橫つてゐる。その底に橫つてゐるものに突當ると、絶對といふことは言へなくなる。」

「そこがいけないんぢやないですか。突當るものがあると思ふのがいけないんぢやないですか？」

「でも突當るんだから仕方がない。」

『その突當るといふのは、何ういふ風にです？もつと具象的に伺はないと、よくわかりませんけれど：…。例へば、貴方のよくおつしやる年齢のやうなもんですか？』

『年齢ばかりではない。凡てがさうです。物に對して凡て、殆ど總て。體も、精神も、體と精神とから起つて來る性慾も何も彼も……』

『ちよつとわかりませんな』

私は考へた。沈默は續いた。家庭問題だの婦人問題だの社會問題だのが、到る處に堆積されてある。しかし、さういふものは大きな力の巴渦の中に浮んだり、沈んだりして行く泡沫のやうなものだ。すぐ消えて行つて了ふ。そしてまた新しい泡沫が浮んで來る。

『では思想は？』

若い友達はかう反問した。

『思想？　ある大きな力からある傾向やら發現やらを抽象したのが思想として考へて見て、大きな思想は大きな力と一致したやうなものですね』

『では、かなり、漠としたもんですね』

『さうですね。或は思想なんて言ふものは、第一義的には存在しないかも知れませんね。この世界の中心を流れてゐるのは、思想ではなくつて力でせうね。問題ではなくつて事實でせうね』

こんなことを話したのは、昨日だか一昨日だか、それとも十年も前のことだかわからないやうな氣が

して私は机の前にひとりぽつねんとして座つてゐた。梅雨が暗くあたりを襲つて、深い紋が頭を壓し附けるやうに蔽ひかぶさつて來た。雨がサッと降つて通つた。

もう何も彼も澤山だ。かう私は思つた。餘りに私には種々な誘惑やら種々な經驗やら種々な追憶やらが餘り過ぎた。『何故、俺はかうだらう。何故俺はかう深く物を思ひすぎるのだらう。何故また俺はかう種々なことを知りたがるだらう。知らずに居られないだらう。本當に、本當に、もう澤山だ』

……種々な顔が私の眼の前を通る。丸い顔、細長い顔、切れの好い眼を持つた顔、額の大きな顔。つゞいて、此間田舎に行つた時のことが思ひ出された。深い籔の中に私は入つて行つた。雜草だの竹だのが一杯に茂つた藪だ。蝦蟇だの腹の赤い守宮だのがそこにゐた。藪の中にな、黒い水が百年も千年も淀んでたまつてゐるやうに物凄く見えてゐた。

かと思ふと、私はこんなことを言つてゐた。『ぢや、此の室だね。君がその女と深い戀に落ちたのは？　この壁、この根太、この柱、この古い竹と松の墨繪のある板戸、これは皆なその時と同じなのだね。ふむ、さうかえ、こゝにあつたのかえ？　その團爐裡が……。その團爐裡の此方と彼方とに坐つて、お互に涙をこぼしたんだね。火箸をいぢりながら低頭いた女の眼から涙がほろ／＼灰の中に落ちたつて言ふんだね。そしてその女の競爭者の男の子供を今度君は貰はうつて言ふんだね。ふむ。そして女は何うしたんだえ？　死んだ？　二十年も前に？　ぢや、その今度の貰はうといふ子供の親も、矢張君と同じく失戀者だつたんだね。關係のあつた失戀者だつたんだね』

私は續いて言つた。『完全な址だね。問題に問題が起り、煩悶に煩悶が重り、歡樂に歡樂が積まれた址

だね。ふむ、あの老人、あの老人にもさういふ話があつたのかね。さうかね、今ぢやそんなことは誰も知つてゐるものはないが、その二階に女を毎夜つれて來たことなどがあるのかえ?』かう言つて、私は二階に上つて見た。暗い閉切つた二階には、何十年の塵埃が溜つて、古い板戸が右往左往に亂れてゐた。西の高窓から微かに光線はさしてゐるけれど、それは微かに二階の入口のところを見せてゐるばかりで、あとはちよつと入つて來てはわからないほど暗かつた。

私は草履を踏み立てるやうにして、靜かにその暗黑の中を彼方此方と歩いた。やがて落ちた壁や黑く煤けた羽目や其處此處に置いてある養蠶の籠などが見え出して來た。古い佛像なども置いてあつた。

そこから下りて來て、私は言つた。『この動かすべからざるある物の中に、萬事萬物の陷沒して行く形は悲慘なもんだね。いくら大きな問題でもそのある物の中には消えて亡くなつて行つて了ふんだからね。さう言へば君、今度の歐洲の戰爭だつてさうだ。あれほどの大問題はないだらう。歷史の上にも澤山は見ることの出來ないほどの大問題がそこに巴渦を卷いてゐるだらう。また個人の上から言ふと、あらゆる悲哀、あらゆる涙、あらゆる夫妻親子の離別、さういふものが無數に日毎に行はれ且つ消費されて行つてゐることであらう。しかし、山の中にはそんなことを知らずに生きてゐる人間がある。何處を風が吹くと言つたやうに痛痒を感ぜずに生きてゐる人間もある。新聞記者は平氣で戰死者の人數を數へ立ててゐる。つまり一方大事件でありながら、一方また風が吹いたり雨が降つたりする位の小さな事件なのだ。何も彼も問題にならないぢやないか』

『私の隣の兵隊さんの婦は、彈丸がドンと來りや若後家おやや』私は掩體の中の悲慘な光景を眼の前に見た。兵隊達は一時間ほど前に圓匙で一生懸命に堀つた二尺に滿たない穴の中に蹲踞つて、ある者は腹這ひに、或者は仰向けに、ある者は折敷きの形を取つて、一心に向ふを見てゐた。丘のすぐ傍に、敵が矢張同じやうにして散兵線を引いて蹲踞つてゐた。頭の上を砲彈はグンノ\と鳴つて通つて行つた。炸烟が炸烟につゞいた。後の松山は丸で砲烟で白くなつてゐる。そこに司令部がある筈だ。

小銃の音は豆を煎るやうに、機關銃の音は煤拂でもするやうに……。ふと氣が附くと、そこにゐるのはロシア兵で、何だかそれがレンベルヒの爭奪戰のやうに思はれる。

かと思ふと、楊の茂つたある谷からある谷へとひとりで歩いて行く私の姿が見えた。私は制帽を冠つて、ケイドルをつけて、水筒を肩からかけてゐる。丘を蔽つた高粱が縱横に折倒されて、そこに電信隊のかけた電信の線がつゞいてゐる。あたりには人一人ゐない。暑い日影に照つた雲が靜かに谷の上を通つて行つた。

『あ、君もあの谷を知つてゐますか』

『ゑ、あそこには五日ほどゐましたから、よく知つてます。あそこの谷はよく通つたものです。凉しい處でした。あつちで、あんなにすゞしいところはない位でした。好い水がありましたね』

十年も後になつて、私はあるところである男とさういふ話をした。私達は年こそ違ふが、同じ路を歩いたのだ。そしてその男は私の愛した女を愛して、二年ほど關係して、そして別れた。私もその女に別れてから、その男とその女の話をした。

「本當に、あそこの水は好かつた」

「でも、あの戰爭では、もうとても駄目だと思ひましたね。よく生き殘つたもんです。私の隊では半分以上死にましたから」

「ひどい戰だつた」

こんな話もした。

私は言つた。「址(あと)になつて行く時の悲哀は忘れられないね。心がかう底の底に落ちて行くやうな心持がするね。私達はそれに堪へて來た。一度、二度、三度……少くともそれだけはある。寢ても眠られない。物を食つても味がしない。時々赫となつて、身も世もあられなくなる。涙が夕立のやうに頰を濡す、心を浸す、體を浸す。そして、ぱつと夕日が當る。虹に似た美しい犧牲の念が熾に起る。そしてこの美しい犧牲の念に欺かれて、段々址になつて行くんだね」

『本當だね。有から無になつて行く境界線は面白い物だね』

一緒に歩いてゐる友達は言つた。

そこは小さな廢墟であつた。或は廢墟と言ふほどのものではないかも知れなかつた。それほど古いものでもなかつた。しかし奈良の廢墟とか、フルージの廢墟とか言ふやうに古くないところが、却つて私達の心を惹いた。有から無になりかけてゐる形が私に人間の變遷と心理とをありありと見せた。

そこには大きな河に近く、曾つて一つの停車場があつた。そこの鐵橋い工事が出來ないので、汽車は

三年も四年も其處に終端驛を置いてゐた。從つて其近所を往來する旅客は、そこから下りて川を渡つて行かなければならなかつた。停車場の前には、いろ〳〵な人達が來て住んだ。休憩所も出來れば、飲食店も出來た。驛長や助役の住む社宅なども出來た。ある休憩所からは、青田が一面に見わたされて、夜は蛙が鳴き螢が飛んだ。後には白粉をつけた女が大勢來て、賑かに騷いでゐる夜などもあつた。

停車場を出て、さういふ家の前を通つて、綺麗に青草の生えてゐる土手を上ると、大きな河が溶々として平野の中を流れてゐるのが一目に見わたされた。渡頭はそこから二三町上流にあつて、その向ふにある町とある村とを連絡した舟橋がかゝつてゐた。渡頭まで行く間の細い路には、夏の日の草いきれの中に紅い撫子などが咲いてゐた。桑畑の中では、白い手拭を被つた田舍娘がせつせと桑を籠につんでゐたりした。

それが四五年して、鐵橋が出來て、停車場が河向の別なところに移つて行つてから、一度開きかけた土地は、再びもとの荒蕪地にとなつて行つた。私は青田に面したその休憩所の屋根が無殘に剝ぎ取られて柱ばかしになつてさびしく立つてゐたり、停車場が廢人のやうになつて何時までも何時までも其處に殘つてゐたりするのを汽車の中から見て通つた。尠くとも二三年はその停車場は風雨に吹き曝されて殘つてゐた。しかし、それも段々なくなつて行つた。ある時、通つた時には、址に草が一面に茂つて、礎ばかりその中に殘つてゐるのを見た。

「とう〳〵あそこも、本物の廢墟(ルウイン)になつて了つたね」

私はかう友達に言つた。

『同じことだね。ローマの廢墟だつて、奈良だつて、フルージだつて、皆なあゝいふ風にして廢墟になつて行つたんだね』

友達もかう言つて合せた。

私の眼には、奈良の大極殿の址だの、都府樓の址の礎などが歴々と浮んで見えた。私はその後も度々そこを汽車で掠めて通つて行つた。雨の降り頻る中に百姓が笠をかぶつて通つて行つたりした。そこを過ぎると、汽車は長い鐵橋へとかゝつて行つた。

此間、田舍に行つた時、私は友達とわざわざ其處へ出かけて行つて見た。若葉の綠の美しい日で、野には一面にけんげなどが咲いてゐた。私達は靜かに歩いて行つた。

廢墟に似たやうな私の心だ……。

『これでも三年位、こゝに停車場があつたね?』

『三年ときかないよ。四年位あたつたらう』

『その間に、いろんなことがあつたらうね。ラブの一つや二つはあつたらうね』

『君は知らなかつたかな。話したと思つたがな。話さなかつたかな。其處の休憩茶屋の女が改札か何かに夢中になつて、男も惚れて、川から情死しかけたことがあつたアね』

『そんなことがあつたかね』

『それが、男が僕の町のもんでね。何でもお袋と二人でゐる奴でね。お袋が大騷ぎをしたことがあつたよ』

「何方も助かつたのかえ」

「何でも引揚げた時には、女は感じがなかつたさうだつたけれど、人工呼吸か何かしたら、呼吸をふき返したつていふ話だッた」

「ふむ…。そんな話、すこしも知らなかつた。一體、いつ時分のことだえ?」

「鐵橋で、大勢人夫が入つてゐる時分のことだよ」友達は歩きながら、『何でも、人夫頭か何かで、女にあつくなつてゐる奴があつて、金を出して自分のものにしやうとしたんだよ。何でもそんな話だッた。』

『さうかねえ、面白いねえ。さういふことが、他にもいくらもあつたんだらうね。誰も知らずにゐるけれど…』

『それはあつたらうよ』

「廢墟も、さうなつて來ると、面白ね。矢張人生だね」

停車場の址の向ふの方には、赤い煉瓦の堆積が雨に打たれ風に曝されてそこら一面に散ばつてゐるのが見えた。私達は太古の址をさぐる旅客のやうな心持を抱いて、礎の殘つてゐる跡などを拾つて歩いた。

『この赤い煉瓦は何だねえ。矢張、鐵道の方でつかつたのかね?』

『いや、それは、こゝに停車場が出來る前からあるんだよ。何でも瓦か何か燒いたあとだよ。それにも面白い話があるんだよ。』其方の方へ歩きながら、『何でもこの先の在の男だがね。事業熱にうかされた奴があつてね。何でもかなりの財産家だつたさうだが、いろいろなことをやつて失敗して、最後に此處で瓦を燒き始めたんだね。始めは大分によかつたッていふことだつたよ。瓦の他に例の井戸端などにつか

ふ赤太い土管なども燒き出したんだがね。ちと仕かけが大きすぎたんで、二年ほどで、すつかり駄目になつて了つたんでね。今ぢや、それをやつてゐた男も死んで、あとは滅茶滅茶になつて了つたといふことだ」

「ふむ」私は思はず立留つた。『矢張、悲劇のあとだね』

そこらに散ばつてゐる址の中には、成ほど窯(かま)のあとだと點頭かれるやうなものも殘つてゐた。赤い煉瓦は色が褪せて、草だの蔓だのが一杯に這ひかゝつてゐた。その下の溝の水は黑く汚く淀んで、流れるともなくレールの向ふの田の中に流れて行つてゐた。

『すべて址だね』

私はかう言つて溜息を吐いた。

私達はそこから昔休憩所の店の並んでゐた跡を通つて、車夫が車を並べて客待をしてゐたところを通つて、一直線に土手の上へと上つて行つた。春の水のたぷたぷとした大河は私達の前に展けた。

『でも、人事ばかりではないね。天然にも變遷があるね。汽車が此處でとまる時分には、向ふには桑畑があつたり何かしたんだけれども、それも三四年前の洪水ですつかりなくなつて了つたね。渡頭の杉もすつかり流されてなくなつて了つた。ちよつと、あの時分の樣子とは、感じが丸で違ふね』

私達はかう話し合つた。

麥の黃く熟した丘が彼方に見えた。それを見て私は思ひ出した。『あゝ何年前だらう。丁度あのやうな

丘だつた。長く靡いて麥が黄くなつてゐる丘だつた』私はかなりに遠い昔を繰返した。

と、その時の佗しい悲しい辛い心持が再び新しく私に蘇つて來た。重く壓せられるやうな、ゐても立つてもゐられないやうな、ある力に引摺られてじつとしてはゐられないやうな心……。

汽車は全速力で走つてゐた。

朝であつた。曇つたといふよりは、まだすつかり明け切らないといふやうな朝だつた。私は悲しい夢からわびしい現實へと目覺めて來てゐた。丁度その時黄く熟した麥の丘のやうなところを汽車は通つてゐた。

『これで一生の別れ』

かう思ふと同時に、嫉妬と憎惡との念が燃えるやうに起つた。何うして復仇せずには置かれやうと思つた。しかし心はすぐ沈んで行つた。『あの女とさへ別れて了つたら、自分は何うするんだらう。何う生きて行くんだらう。ひとりでさびしくこの辛い世の中が送つて行かれやうか。自分はあれほど心を注いだのに……。あの女の體と心の中にこの自身があれほど深く入つて呼吸してゐるのに……。それをあのやうにして……あんな一時のはづみ見たいなことで……』

麥の黄い丘は、丘へとつゞいて行つた。私はじつと唯それに見入つた。自分の心が體が苦惱が無關心な自然の中に深くにじみ込んで行くやうな氣がした。

『ぢや、その積でゐろ！』

『ゐますとも……』

「忘れるな」

「自分で言つたことを忘れることはありませんから、大丈夫です」

私は默つた。女も下唇を咬んだ。忘れもしない、それは遠い遠い田舍の小さな停車場の前の旅館の一間であつた。靜かに水田を見わたすやうなところで、田の畔には揚柳が毿々と靑く見渡された。その柳の綠を私は唯凝と見詰めた。

その小さな田舍の停車場、それが私の長い一生に何れほど深く刻み込まれてあることだらう。肥つた驛長の顏、若い改札の男の顏、其處に待合せてゐた客の顏、停車場の向ふにあゝ井戸つるべ、赤く毒々しく咲いてゐる西洋の草花——私達はその間を仇敵のやうな風をして、別々の車室へと乘り込んで了つた。

汽車は唯走つた。幾つかの停車場をも素通にして……。

今でも黃い麥の丘はある。汽車は走つてる。しかし女は？　あの燃立た心は？

「矢張、址だ」

かう私は思つた。

人間の心理に橫つてゐる址と、自然の中に殘つてゐる址と。後者は二千年經つても、三千年經つてもその址はそれと認めることが出來るが、前者はすつかりあとも形もなく消えて行つて了ふ。否、消えて行つて了ふだらうか？　否、否、矢張それは永久に人間の心の中に、廢墟として殘つてつゞいて行くに相違ない。

イブセンの提供した問題は？　ショウの提供した問題は？　さういふものは消えて行つて了つても、址だけは、この址だけは…。

『兎に角、確實につかむといふことが必要ですね』

から或る若い友達に言つた。

『つかむといふのは？』

『自己のものにするといふ意味です』

『他をですね』

『え、さうです』

『しかし、それは出來ることでせうか。他を確實につかむといふことは人間に出來ることでせうか』

『いくらも出來ると思ひますが――』

『では、君は完全に君の細君をつかみ得たと思ひますか？』

『え』

『子供ゝ？』

『え』

『友人も』

『え…ある程度までは』

「しかし、私はさうは思ひません。絶對につかむことは出來ないものだと思つてゐます。細君も、子供も友人も乃至は戀人も、決してつかみ得るものだとは思つてゐません。」

「では、何うして、かうしてゐるんですか」

「私もこれまでつかむことに努力はして見た。一人一倍の努力はやつて見た積りです。しかし、曾つて一度だつてしつかりつかんだことがあつたでせうか。私は私です。妻は妻です。戀人は戀人です。子供は子供です。永久に平行線ではありませんか」

「そんなことはないと思ひます」

「しかし、私はかうは思ひます。この平行線が無數に平行してゐて、そしてその平行した形の上に起つて來る調和とか融合とか言ふことは認めます」

「それが一致すると思ふんですが――」

「一致する時が來るかも知れない。しかし、私には、私の半生の經驗ではさうは思はれない」

こんな話を何處かでした。それが何處であるか、自分の宅であるか、それとも何處か川に臨んだ室であるか、山を前にした室であるか、それを私は覺えてゐない。

半分あけた窓から涼しい風が入つて來る。その窓は竹で編んであつて、向ふに柿の廣い葉が見える。その葉の表に日が明るく照つてゐる。あるところは暗いが、あるところは明るい。

丁度心に似てゐる。またその心が曇つたり晴れたりする。私はじつと私の心を凝視した。

何故私の心はかうわびしい暗い影を帯びたり、明るい日影に照されたりするのだらう。何故細かい葉裏の線のやうな愁を帯びるのだらう。ある時は靜かに、或る時は強く烈しく……。ある聲は言つてゐる。『疲れた、ひどくつかれた！』かと思ふと、ある聲は言つてゐる。『お前のやうに強い肺を持つたものはない。大きく息吐け！』と。

ある夜は、男の兒を伴れて、私は野の方へ行つた。川があつた。そこには白い花が咲いてゐる。卯の花だ。私達は川に添つて、橋を越えて遠い遠いところまで行つた。

『螢！　螢！』

かう男の兒は言つて、それを追つて走つた。螢はふわりふわりと光つたり消えたりして向ふの方に飛んで行く。

『あ、あんなとこに行つちやつた！』

男の兒はかう失望したやうに言ふ。

川のあるところは瀨を成して流れてゐた。音が凄しく闇を破つてきこえてゐる。私は且つ思ひ且つ歩いた。

時といふことは立體ではなくつて、平面的だといふことを、氣が附いて見ると、私は考へてゐた。螢がまた一つすーと闇を掠めて飛んで行つた。

私は其頃或心に觸れてゐた。ある心のあらはれは私を堪へ難くした。しかしそのあらはれは、別に無

理なものでもなければ不條理なものでもなかつた。當然起るべきことが起つて來たにとゞまつてゐた。それでゐて、何故かう私の心を支配するだらう。知るといふことを私は考へずには居られなかつた。

螢がまた一つ飛んだ。

今度は、男の兒は巧にそれを捉へて喜んだ。

「父さん、螢、螢」

私はそれを子供の袂に入れてやつた。そして家の方へ歸つて來た。

親と子との關係、妻と夫との關係、社會と個人との關係——さういふ問題が到るところにある。到るところで衝突して、そして平地に波瀾を捲き起してゐる。

私は前に眞といふことを考へた。人間は何うすることも出來ないものだと思つた。不思議にも、今でもそれは眞理の一面ではあると思ふけれど、さう言ふ風に考へずに、もつと大きな調和が其處に存在してゐるやうに思はれ出して來た。私は私の通つて來た家庭生活などを考へて見た。

「家庭の爭ひほど愚なものはない。そして人の精神を亡すものはない」かう私はある友達に言つたことを思ひ出した。子供は親の壓迫に苦むが、それは一面成熟しない子供に對する親の保護であるといふことなどは、親が亡くなつて了はなければ、完全に子供には理解が出來ないものである。何んなに仲のわるい嫁と姑との仲でも、姑の死んで行くのを見て單に重荷が下りたとばかり考へるやうなものは人間にはないのである。唯、家庭の辛さは、毎日毎夜、同じ顏を突合してゐる辛さである。つまり「ありのす

さび」の辛さである。

私は人の子となり、人の夫となり、人の親となつて來たことを繰返した。私は私の子供の中に私を見た。完全な私を見た。子供の時分には見えなかつたわからなかつた自分を、自分の子供に發見した。從つて人の子としての眞相は、人の親となつて見なければわからず、人の夫としての眞相は、人の舅となつて見なければわからず、人の親としての眞相は、人の祖父母となつて見なければわからないものだといふことを考へた。從つて人間は一生の中に二度同じ生活を繰返すものであるといふことが言へると思ふ。そしてその最初の一度は主觀的、無意識的の生活で、二度目は客觀的、意識的、觀照的の生活であらうと思ふ。前のは鏡も何も持たない生活である。後のは後に反射鏡を持つた生活である。

私の經驗では、鏡も何も持たない生活には、常に底に恐怖が伴つてゐた。不可解である。不可思議である。何ういふことが前から起つて來て、倏忽にして身を滅して行くかも知れないといふ不安がつねにつき纏つてゐる。不慮の災害が常に問題になる。自分で自分の行末がわからなくなる。從つて家庭にも疑問が起り、生活にも疑問が起り、社會對個人の關係にも疑問が起り、自と他との交渉にも疑問が起り、これを大にしては、自己の根本と自然の根本との連接について盛に疑問が起つて來る。

ヨオロッパの作家の書いた問題小說、問題劇、あゝいふものの痛切に頭に響いて來るのは、さういふ疑惑に滿ちた生活に、ある快よい解決或は答を與へるからである。マクダや、フオケラートや、オスワルドや、さういふものはすべてさうである。イプセンの戯曲、ストリンドベルヒの戯曲、ビヨルンソンの戯曲、すべてさういふ形と傾向とを持つてゐる。皆な反射鏡を持たないために、眞相がより大きく見

えたり、より恐ろしく見えたり、より美しく見えたり、より醜く見えたりする形である。幻想、幻影、幻視などで滿されてゐる。

Eine de siecleといふ言葉の影響は一時ヨオロッパを風靡した。極端から極端へを行つた。つまり秤の上下動が烈しく凄しく動搖したのだ。ある警官は死刑執行後に、人殺の罪人の皮の一片を取つて置いてそれを乾してシガー入れにした。ある息子は父親の入れられてある牢屋の前を通つて、『おい、あそこは父親の行つてゐる學校だ』と言つた。ある王はある政治上の權利を棄てた條件の下に、それを保留して置いて、それを自分の國へ賣つて、パリで博奕を打つて借金をかへした。かういふ例は澤山にあつた。殆ど數へ切れないほどあつたと言つて好い。マックス、ノルダウなどといふ老人が心配したのも無理はない。しかし、かういふ風潮がどれだけ長く世にあつたであらうか。生存に適せる、乃至は生の進化に益あるものだけ殘して、あとは皆な消えてなくなつて了つたではないか。さういふことをした青年は、皆な平凡な、普通の人間といくらもかはらない。かれ等が生効のないとして斥けた單純な平凡な生活に入つて、嗅を持つたり、餓鬼を拵へたり、お役所へつとめたり、毎日四時すぎに歸つて來て晩酌をやつたりしてゐるではないか。何も心配したことはない。眞に何も心配したことはない。

日本でも新しい女の中には、墮胎なんて言ふことは何でもない。ちよつと自分の指先の血を流したやうなものだ。それを咎める法律なんて無意味だといふやうなことを書く女があるといふことだ。これは私はその文を見たのではないから、果してさうであるか何うかは知らないが、兎に角そんなことは無論何でもないことである。取り立つて言ふほどのこともない位のものである。世の中ではいくらもそんな

ことは實行してゐる。そして法律などを待たずに、ちやんと自然の制裁を受けてゐる。一體、Fine de Siècle が法律などを對照にして皮肉を言つたり、氣まぐれを言つたり、新しいことを發明しやうとばかり心がけたりしてゐるのはまだ本當ではない。もつと先に行つて、自然の制裁あたりまで進んで、うんとぶつつかつて見るが好い。それでも私は猶繰返すことが出來る、「何も心配したものはない」と。

　明治大正の世の中にも、隨分個人として大きな問題に邂逅した人はある。新聞で見たのを覺えてゐるだけでもかなりある。人殺しをした人の遺族だとか、破廉恥罪に問はれた名士の遺族だとか、近い例が例の海軍問題の人達とか、社會からおし落された形になつては、隨分大きな悲劇でもあり、大きな問題でもあり、好い問題小説の材料でもある。しかしそんなことは何でもないぢやないか。海軍中將の位置から一囚徒に落ちて行つたからとて、個人の存在といふことには何の増減も加へられてはゐないではないか。矢張同じ人間だ。今まで善人であつたものが急に惡人になつたといふわけでもない。法律のきめた罪さへ受ければ、矢張同じ人間でこの世の中に生きて行かれるのである。またその人自身の内部生命から言つても、獄中の一食一睡が、世間に榮えてゐた時分の一食一睡よりも、愉快で、のんきで、待遠であると言つたやうなところがある。何んな境遇に落されて行つても、人間の内部生命は一毫も變つて行くものではない。これから思ふと、死刑などゝいふことは、大切な人間の内部生命に卑屈な小さな制裁を加へたやうなもので、その制裁を加へたものゝ方が却つて身敗れ心傷くといふ形になるのである。その證據には、裁判官の陰氣なつまらない家庭生活を見るが好い。

また斷頭臺に上された人間も、平氣で首の周圍に繩をつけて貰ふが好い。丁度不慮の災難か、ペスト

か、コレラで死んで行く人のやうに……。何も恐るゝところはない。現に、我々は、さういふ意味に於ては、毎日どれだけの無數の生物を殺してゐるか知れないではないか。

……ヤ、しかし、餘り昂奮しすぎた。また Grotisque Sentimentalism などゝ言はれるとわるいから、此位にして置いて、今度は反射鏡を持つた第二度目の生活のことを少し言つて見やう。しかし斷つて置くが、この第二度目の生活といふものも、決して自分が肯定して言つてゐるといふ譯ではないといふことである。時には、この反射鏡が非常に邪魔になることがある。そんな無用なものはかき捨てゝ、もう一度始めと同じやうな生活をしたいと思ふことが度々ある。しかし情ないことには、この反射鏡が何うしても動かずについて來る。何處に行つても、野に行つても、山に行つても、歡樂の巷に行つても、……。

そしてこれが名譽とか聲名とか財產とかいふ第二義的のものなら、何うにでも出來るけれど、振り捨てるなり、かき捨てるなり自由に出來るけれど、何うもさういふ手輕なものでなくて、飽まで根本的であるのが一番困る。大きくなつた子供が目の前にゐて、私の無意識であつた時代を具象的に映じて見せて呉れる。私の缺點を見せて呉れる。私の罪惡を見せて呉れる。また若い時代、新しい時代といふものがあつて、私の困迷した惑溺した懊惱した時代をはつきりと再び復寫して、手に取るやうに見せて呉れる。そして、ある作家は、私にその反射鏡を取つて了へと勸める。またある批評家はそんな反射鏡に捉へられてゐるから駄目だと嘲ける。私の最初の生活の、まだ回轉して來ない以前の生活の末期あたりに振廻した武器を振りかざして、却つて私に反省を求めて來る。

しかしこの反射鏡を取れといふ注文は、天と地とをなくして了へといふほどそれほど無理な注文だ。

何故と言へば、それは私に私の持つた生活をなくして了へといふことゝ同じであるからである。有を無にして了へといふのと同じであるからである。

で、私は仕方がなしに、この反射鏡があるために出來た世界をさういふ人達に說いてきかせた。詳しく說いてきかせた。反覆して說いてきかせた。しかし、多く要領を得たことがない。理屈ではわかつてゐても、氣分ではわかつてゐまい。ある人はそれを妥協の世界だといふ。ある人はそれを享樂の世界だといふ。またある人はそれをあきらめの世界だといふ。或は微溫の世界、或は洒落の世界、或は老人の世界、或は敗北の世界、さういふ名がちよつと數へきれないほどある。そして髮の白くなつたのだの、齒の崩落したのだの、皮膚の硬くなつたのだのを憐憫乃至嘲笑の材料にする。その癖、さういふ反射鏡がもうそろ〳〵後に出來かゝつてゐるのには氣がつかない。

しかしこの反射鏡が曇つてゐたり、半ば出來かけて壞れて了つたり、丸で出來ずに終つたりする人がないでもない。或はそんなものは俺は拵へないといふ人があるかも知れない。しかしさういふ人ほどこの反射鏡の出來るのが早いのだから面白い。聰明なれば聰明なほど、この反射鏡が早く出來て、そして玲瓏透徹した形を保つたのだから面白い。

この反射鏡の出來かゝつて來る時分が、人間は最も注意しなければならない時である。……しかし、こんなことをいくら言つたつて盡きない。唯、これが出來ると、問題などゝいふことが起つて來ないといふことだけは言つておく必要がある。

しかし、この反射鏡は、人間に、人間の一番最奧に橫つてゐる死といふものをもよく映して見せる。

或はそれを暗く物凄く見せたり、或は明るくはなやかに見せたりする。時には、人間をその境に一致させ、融合とか調和とかいふ境に伴れて行く。

其處に私がゐる。種々な私がある。薄い蒲團の上に寢て、まじりまじり大空の青いのを見てゐる私がゐる。母の背に負はれて、何も理由もないのに、いつまでも泣きじやくりをしてゐる私がゐる。風の音や、水の音に小さな耳をそばだてゝゐる私がゐる。唐人笛の音が日當りの向ふの田圃道を通つてゐる。それを私はきいてゐる。

それから暫くすると、筒袖姿でヤンマや蟬を捕つてゐる私が見える。川に行つて里の惡太郎と水を浴びてゐる私が見える。そこに蛇が泳いで此方へ向つてゐる。母親の涙が青白い頰を流れてゐるのが見える。東京の雜鬧の中に來て走つて行つてゐる私が見える。貧しい生活の中で嗚咽しながら本を讀んでゐる私が見える。五圓でも六圓でも好いから使つて吳れるところはないかと街頭をさがして歩いてゐる私が見える。自から傷けて蒼白い顏をしてゐる私が見える。妻を持つたり家を持つたりした私が見える。母の死に侍した私が見える。ある小說のヒロインと私と何か話してゐる。小石川の極樂水のところの阪が見える。工場のザラザラした氣分が浮んで來る。つゞいて旅に出でゝ海岸の磯のほとりを歩いてゐる私が見える。そしてかういふ姿は、もう自分ではなくつて、他の境遇に生ひ立つた他の人間のやうに思はれる。自分の生活は別に何處かに隱れて殘つてゐるやうにも思はれる……………………。

夜遲く電車に乘つた。ふと氣が附くと、大勢の乘客の中にちらりとその顏が見えた。私ははつとした。

私は何うして好いかわからなかつた。胸の動悸が急に高くなつた。今のやうな冷靜な、廢墟のやうな心の狀態にゐて、かういふ心の動搖を感ずるといふことは餘程のことだと思つた。

先方の知らないのを利用して、いつそ次の停留場で下りて了はうかと思つた。しかしそれもしない中に次の停留場は過ぎて了つた。ふと立つたものがあつた。今まで私の前にゐた男は其處に腰をかけた。その顏はまともに私に面した。

「まア」

挨拶した女の顏は眞赤になつた。しかし私も女もその次の言葉を何う發して好いかわからなかつた。女はメリンスの單衣に黑がゝつた帶をしめて、頭を束髮にしてゐた。人をなつかしむやうな笑顏だけが殘つてゐるばかりで、昔のはなやかな美しい肌も色彩ももうすつかり褪せ果てゝゐた。

「皆さん、御機嫌は？」

「難有う――」

また默つて了つた。私達は何も言ふことが出來なかつた。

「今度逢つたら、今度逢つたら……、もう何を問ふ必要はない。愛したり、憎んだり、呪つたりした女だ。今度逢つたら、一生に一度位はさういふ間柄になつても差支ない。今度逢つたら」から私は思つてゐた。しかしそんな空想が實現されたためしはなかつた。

考へると、大きな問題だつた。彼女に取つても、私自身に取つても……。ある學者はその爲めに湖水に投じて死んだが、それ以上に私達の運命は複雜した形を帶びてゐた。私達は生きたこの運命を堪へ忍

んだ。女の數奇な生涯は半ば私の與へたものであると共に、私の家庭の精神的破壞は、實にかの女がこれを促進したのであつた。かの女は私によつてかの女の自由を失ひ、私はかの女に由つて私の精神を擾亂させられた。今、猶私が女の殘骸を抱いて懊惱してゐるのは、皆なかの女の私に投げ與へた呪ひの爲めだ。それでゐて、この世では互に相觸れることの出來ないある約束が固く私達の間にあつた。

「弟さんは？」

「相變らず丈夫で」

「お國でも？」

「え、有難う――」

また沈默した。女の胸を往來してゐる暴風は、矢張私の胸にも凄しい力を逞うしてゐた。私達は五分なり十分なりかうして相面して腰をかけてゐなければならない〻〻〻に陷つたことを、一種の神の裁判のやうにすら思つた。

電車は走つてゐた。

灯はチラチラと色彩深く街を彩つてゐた。活動寫眞館からは今終結になつたと見えて、人がぞろぞろと出て來てゐた。右側には夜店の前をまた人が通つてゐた。

聞きたいと思ふことは非常にあつた。ひとりでゐる時には、あれもきかう、これもきかうなどと想像した。かの女も矢張さうであつたらうと思ふ。

私は先きまで行つても好いのであるが、兎に角、其處で下りる決心をした。

「そこでお下りになるんですか？」

「え」

女はまた默つて了つた。私は大きな問題の最後の尖端に立つてゐるのを感じた。これで、この問題はお終である……。離れてまた近づきつゝあつた二つの物が、また永久に離れて行かうとしつゝある。電車は私の下りる停車場へと次第に近づいて行つた。

「ぢや、左樣なら……」

かう言つて挨拶して立上ると、女はふいと立つて、そして其處から下りるやうにした。

「此處から下りるんですか」

「え」

私は下りた。女も續いて下りた。月は明るく濠端の水を照してゐた。

本當にもう澤山だ。何も彼も澤山だ。自分は何處まで行つたからとて何うにもならない。刹那より他に何もない。しかし刹那は現在ばかりでなくつて、過去も將來もまた刹那であることがある。長い長い追憶もこれまた一刹那ではないか。

常に感激して、常に昂奮してゐなければならないやうな氣がしてゐるけれど——否、否、つねに歡樂に醉つてゐるのが眞の人生だといふやうな氣もするけれど、しかしもうそんなことは餘りに空想にすぎてゐる。澤山だ、澤山だ。

誰かが琴を弾いてゐる。その曲は何十年續いて彈かれたものである。これからまた何十年つゞいて彈かれるか知れないものである。琴の柱を外す音が高く何處かできこえた。

エランダの周圍は草花の鉢で一杯に圍まれてゐる。赤い白い黄い花が夜目にもそれを美しく見えた。丁度そこは街の角になつてゐるやうなところで、夜涼を趁ふ人がぞろ〳〵と通る。電氣を蠟燭の代りにした提灯は赤く白く軒にチラチラと彩られてある。丁度歡樂のシンボルか何ぞのやうに‥‥。

私達は其處で十年も前のことを話した。其處には種々な心があつた。世に向つて戰へるやうな神經もあれば、未來に向つて憧れるやうな情緒もあつた。ある人の顔は赤く、ある人の顔は蒼白く、ある人の顔は土のやうに暗かつた。人々は皆な自分を土臺にして、銘々勝手なことを饒舌つたり喚き散したりした。現代の批評や、外國の戰爭の報道や、戀や、女や、酒や、さういふものが樂しく話題に上された。ある人の話した飛行將校の情死の話は、中でも際立つて人々の耳を聳たゝしめた。その將校は、女の襟首に拳銃を深く押し當てゝ、殆ど筒先が肉に埋まるほと深く押し當てゝ引金を引いた爲めに、最初の一發も、次の一發も、廊下一つ隔てた向ふの室にきこえなかつたといふ。スッとも言はずに女は死んで了つた。そしてかへす力で、男は拳銃を自分の領にあてた。しかしその時は男はもう響に就いて注意を拂つてゐる餘裕はなかつた。忽ち凄しい音があたりを驚かした。

私達は空を飛ぶ人達の心理狀態などを話した。人間が鳥のやうになるといふことは、今までの感覺に更に幾多の新しい感覺を加へずには置くまい。普通の心理では想像し理解することの出來ないある不可思議な心理が加はつて働いてゐるに相違ない。その心理は？ その空氣は？ こんなことを私達は想像

した。

男はその決意を實行する前に、女と一緒に海岸の丘の上に行つた。そこには觀音堂か何かがあつた。廣い青い海が未來派の繪のやうに其前に展けられてあつた。白い波頭、凄じい岩――其處で男は虚空に向つて一發最初の發射を試みて見た。その聲――靜かな漁村の晝の空氣を破つた其聲は、其時は唯不思議と思つて聞流した一漁夫の耳に再び蘇つて來た。漁夫は後にその時のことを話した。ジオルシオとイポリタの戀などが再び私達の眼の前にあつた。

私はかうした話の中で、ある一つのシーンを想像した。それは小デユマの小說の中にあるシーンに似てゐた。女は熟睡してゐた。白い顏と白い肌着と白いきめの細かい綺麗な肌と。私はそれをじつと見詰めてゐる男を眼の前に見た。死、死にあらずんば、遂に遂にその女の心を全く自己のものにすることが出來ないことを考へた時、男は赫とした。男は帶を女の首に卷いた。女はそれをも知らずに、すやすやと熟睡してゐた。……恐ろしい考だ。私ははつとして空想から覺めた。彩あるエランタの軒の提灯はある妖艶なロマンスを語るやうに靜かに夜風に搖いてゐた。

三冊の日記――一冊は青いクロースの表紙、一冊は小形のトルコ皮の表紙、一冊は半紙をそのまゝにとぢた手帳。數多い私の日記の手帳の中で、この三冊だけが今だに私の傍にあつた。

多い日記、本當に多い私の日記だ。それが殘らず殘つてゐたならば、さぞいろいろなことが思ひ出さるゝであらう。さぞさまざまの心理が研究されることであらう。大きな問題も其中には澤山にあつたで

あらう。しかし、多くは反古になつて了つたり、本箱の奥につかねられて了つたり、古本を賣る時にそれに雜つて何處かに行つて了つたりした。しかし、この三冊は、私には大切な日記帳だ。私は今日までそれを保存して來た。

トルコ皮の小形の手帳には、ある女に對する私の心理と、女の表情と態度と言葉から來る心理の錯綜したさまとが線やら符諜やら文字やらで現はされてゐた。もし、私が今にも死んで、この秘密な手帳が他人の手に落ちたならば、その人は屹度青い線や赤い線の無數に引いてあるのに驚くであらう。また何う考へて見てもわからない文字や文句の多いのに呆れて、そのまゝ無用の長物として無造作に反古の中に投り込んで了はるゝであらう。しかし私に取つては、これほど大切な手帳はなかつたのだ。これほど役立つた有益な手帳はなかつたのだ。

それは唯一年である。時には書かずに放つて置いた日もあれば、時には晴、雨としか書いてないやうな日もあつた。ある日には青と赤と黑との鉛筆で、直線と曲線が引いてあつたり、△や○が書いてあつたり、英語があつたりフランス語があつたりした。時にはサンスクリットなどさへ書いてあつた。

何んなに亂れた戀の潮であつたらう。また何んなに細かく解剖された戀の心であつたらう。女の言つた一言一句、女の見せた一笑一盻、さういふものから、私は細かい心の動き方を研究した。そこには懊惱もあれば、嫉妬もある。手錬もあれば、まことの心もある。まことの心が手錬に見えることもあれば手錬がまことの心に見えることもある。しかも女の心理の行動は、皆な一定のリズムと波動とを持つてゐた。假令、それは女には無意識であつたにしても……。

私は籐椅子に身を横へて、長い間それをくり返して考へて見た時分のことを思ひ出す。あの時あゝ言つたぢやないか。この時、かう言つたぢやないか。私はかう言つて、いつも女を驚かした。

その時は何とも思はなかつたことが、後になつて重大な意味をつけて來ることなども澤山にあつた。堆積に堆積を重ねて、そして始めてまことの意味がわかつて來たことなども度々あつた。ある線には二重圈點がつけてあつた。あのフランス語には三角がつけてあつた。符諜でなければ言ひ現らはせないやうな感情や心理が到るところにあつた。

靑いクロオス表紙の方は、それから比べると、年が餘程前であつた。少くともこの間に五六年は隔つてゐた。それを見ると、若い皮膚の肌理の細かい、なつかしい表情をする女がすぐ私の前に現はれて來た。線の代りに女の顏だの、唇だの、鼻だのが描いてあつた。若い感想めいたこともかなりに多く其處に見受けられた。ところどころに、女からよこした手紙が張つてあつた。それは紫インキで書いてあつた。

歌なども書いてあつた。

もう一冊の半紙でとぢたものは、それよりももつと以前だ。不思議にもそれを見ると、一種特色のある聲を持つた汚ないお婆さんが第一に私の頭に浮んで來た。それから古い三間位の家が浮んで來た。最後に女の愁を含んださびしい顏が浮んで來た。

しかし、もう過ぎ去つた。其時々に問題を起したことは今では、唯かうした小さな手帳となつて、私の机の上に殘つてゐるばかりだ。オスワルドのやうに狂ひもせず、フオケラートのやうに死にもせず、

またはジォルジォのやうな殘忍な最後も遂げずに、かうした平凡な一塊肉として此處に殘つた。問題劇の主人公となるには、餘りに平凡な私の一生だ……。

私の眼には、川端の小さな廢墟が再びありありと浮んで來た。もう草も生えた。僅かに殘つた礎もその綠の中に名殘なく沒却されて了つた。曾て其處に小さな停車場があり、小さな休憩所があり、小さな悲劇があり、小さな繁華があつたとは、誰も知るものもなければ、誰も氣が附くものもない。赤い煉瓦もやがては長い年月の風雨に曝されて全く土に歸して了ふであらう。其處に熱い心の一生を費した人間があつたなどとは誰も知るものはなくなつて了ふであらう。百姓が笠をかぶつて雨のそぼふる中を通つて行くだらう。雲雀が野から空に得意の歌を囀つて揚つて行くだらう。

しかし、ロオマや奈良やフルージのやうに、假令好奇の旅客を惹くことはないであらうとも、その一時の榮えを見た人の中には、靜かにその址を歩いて見たいと思ふものもないではなからう。

何も彼も過ぎ去つた。完全な小さな廢墟だ。



結婚滿期（諷刺劇）

松居松葉

時

大正三十年

處

日本の首都

人物

寺田誠一（十年の期限にて結婚せる男）

權利子（其妻）

利根雄（其子）

宇良木壯亮

尾上朗子（家庭敎師）

女中

二十世紀當初に於ける日本の藝術の幼稚さを、後の世までも、傳へんとす

るがために作られたる如きセツション式の西洋室、裝飾の繪畫の如きも其當時の流行なりし、似而非後期印象派の高慢無手の畫工の手に成りしものにて、雲か、山か、つく芋か、美人か妖怪か分らぬものゝみ。

家具はたゞ實用のみを主とする現代の要求に應じて作られたるもののみなれば、客間と云はんよりは事務室に近き無趣味の室なり。

主人寺田誠一、暖爐框の中に嵌め込みたるラヂエーターの前に腰かけ、新聞の切拔を讀みつゝあり。

寺田(讀む)『……省參政官寺田誠一氏と其夫人櫂利子との結婚は、去大正二十年十一月十一日、向ふ十年の契約にて執行されしものなりし故、來九日を以て滿期となり、夫妻は同日を以て全然夫婦關係を絶ち一子利根雄氏は、國家の負擔を以て教育さるべき事となり、一兩日中……市の養兒院へ收容さるべき筈なり』。(切拔を投げ出し、椅子に倒れかゝりながら)。左樣だ。契約は明後日が滿期だ。十ケ年！ 十年目におのれの家庭は消えてしまふのだ。妻はおれを棄てゝ行くのだ！ 小兒は國家の手へ奪ひ去られるのだ！ あゝ、これが二十世紀の幸福の理想なのだ！ あゝ、櫂利子がおれの思つて居るほどおれを思つて居てくれたら！ (躍ねとばされし如くに立上つて) こんな事は希望の外だ。

(利根雄は家庭教師の朗子に導かれて、隣室より入來る。利根雄は九歳の少年なり)。

寺田 あゝ、利根雄！

利根雄 阿父！ 阿父！

寺田(感情を推隱して)何だ、そんなに大きな聲をして。

利根雄 でもね、阿母は今度の日曜日に、僕を動物園へ連れて行く事は出來ないつて云つてるの。

寺田 それが何したと云ふのだ。

利根雄 僕、行きたくて詮方が無いの。阿母が行かなくとも、阿父は連れて行つて下さるでせう。

寺田 阿母はもうそんな事を云つて居るのかい。(家庭教師に向ひ) 如何したものだらうね。

朗子　もう、そろ〱云つて聞かして上げた方がよろしいと思ひますが。

寺田　左様かも知れないね。（獨語のやうに）可哀さうな人間だ。（利根雄に）利根雄、まあ、こゝへおいで。動物園よりももつと好いところへ伴れて行つて上げやう。もつと大きな、奇麗な家屋でね。美しい庭があつて、……それに玩弄具なども澤山にある……

利根雄　玩弄具！　いゝなあ！

寺田　それにお友たちも、どつさり居るんだよ。

利根雄　では太郎さんもそこに居るの。

寺田　さあ、太郎さんは……如何かな。まだ行つて居ないにしても、もう程なく行くだらう。

朗子　えゝ、山口子爵の結婚の期限は來月できれるはずでございます。

寺田　「結婚の期限」！　まあ何といふ無情な言葉だ。おれは其音を聞いたゞけでも堪らない感じがする。

利根雄　林の富ちやんは？

寺田　行つて居るとも。（朗子に向ひ）林の息子は行つて居るね。

朗子　林さんでは、御夫婦妥協の結果、御子息が阿父さまの御手許に御殘り遊ばす事を、奥様は御承知になりました。

寺田　なに、林の細君は息子を林の手許で養育する事を承知した！　あゝ權利子などもそれだけの思ひやりが有つてくれると、どんなに有難いか知れないんだがな。

朗子　併し林さまの奥さまのは、果して思ひやりの有るやり方でございませうか。私の信ずる處では、あんな姑息な手段は、親のためにも、お子さまの爲にも、不利益な結果を産むに過ぎないと存じますが。

寺田　何、何故、不利益だといふのさ。

朗子　でも……

寺田　母なるものが、自分の産んだ子を養育する權利を放棄したとすれば、父なるものが、其手一つで其

子を養育するといふのは、極めて自然な順序ぢやないか。親の意思に反してまで、國家がひとの子を奪ひ取る必要はない筈だ。

朗子　それは仰有る通りかも、知れません。併し、其父なる人がまた新らしい契約を望んで居るとしたら如何なさいます。

寺田　新らしい契約！

朗子　えゝ、新らしく、又結婚の契約をしやうとして居たら。

寺田　たゞ結婚といへ。契約などゝ無趣味な語をつかはずに。

朗子　契約なしの結婚は、無意義の結婚です。まあそれは兎に角、其父なる人が又結婚の契約にはいる事になると、忽ち起つて來るのは、繼母の問題です。而してその場合に小兒は一番先きに邪魔物扱ひをされる事になります。

寺田　小兒が邪魔ものになる？　そ、そんな馬鹿な事があるものか。昔は『子寶』とさへ云つて……

朗子　これは二十世紀の初め頃までの痴人の夢だつたのです。併し今日では……いや、餘計な議論は今の場合必要ではありません。プラクチカルな立脚地から見れば直ぐ分ります。新らしい夫婦の足元に轉がつて居る古い小兒は邪魔物に相違ありません。

寺田　では、おまへさんの兩親といふ方も、やつぱり汝さんの樣な考へを以て、汝さんを見て居たのかね

朗子　左樣ですね。わたしの親たちといふのは、多分あなたの御兩親のやうに、いや、多數の人たちの兩親のやうに、餘程舊式な人間であつたやうです。彼等はわたしを馬鹿げた、センチメンタルな方法で教育したのです。そのために、私は、自分を解放すべくどんなに困難を感じたでせう。併し私ははつきりと眞の、自由な自分といふものが分つて來ると、家庭に於ける小兒といふものゝ、邪魔物に過ぎない事も、自然に發見される事になつたのです。

寺田 （憤慨に堪へざる如く）汝さんは、其新らしい發見を以つて滿足が出來れば何より結構だ。が、理論は理論として、私たちはこゝで利根雄を如何しやうかといふ實際問題に逢着して居るのだ。如何したものだらうね。

朗子 如何も如斯もない筈です。今日の午後には市の養見院から御迎へに來る筈です。あなたも御記憶の筈と思ひます。左樣いふ手續きになつて居るのですから。

寺田 今日の午後！ いや、今日はやるわけには行かん。

朗子 だつて、今日は最後の日です。奥樣は成るべく早く、養見院へ送つてしまつた方が好いといふ御意見をもつておいでになつたのですから。

寺田 あ、あの女には人間のハートといふものが、少しも無いのかね。

朗子 普通の人類のもつて居る丈はもつて居らつしやると思ひます、たゞ奥樣はおあきらめが好くつて居らつしやるのです。必要といふことを理解して居らつしやるのです。

寺田 それにしてもあの女は、何故あの子をおれの手許に殘して置けないのだらう。

朗子 それは若樣の利益を御考へになるからでございます。わたしはわたしのシステムを以つて若樣を教育致しました。ところが其教育の方法は、奥樣にもあなたにも分つては居りません。だから若し私が居なくなりましたら……

寺田 汝さんまで居なくなる必要はないぢやないか。

朗子 （笑つて）まあ、あなた方御夫婦が離婚なすつて後まで、わたしが此家に殘つて居る！ そんな事を致したら、世間では何と申すでせう。

寺田 さあ、世間では汝さんを親切なセンシブルな人だといふだらう。

朗子 併しその以外に、わたしの品性を疑ふ人も少な

くないでせう。
寺田　そんな奴には勝手な事を云はせて置くがいゝさ
そんな事は何でもないぢやないか。
朗子　あなたには何でもないでせう、併し、私には大
きな事件です。
寺田　それにしても、さう慌てゝ決定しなくともいゝ
だらう。小兒の爲めわしのためにも、もう一度考へ直
して見てくださらんか。汝さんさへ承知してくれる
なら、給料なぞは又如何でも相談に乘らう。‥‥倍
にしてもよろしい。三倍にしてもかまはん。
朗子　わたしは今までの給料で十分です。それが不十
分であつたら、こんなに長く今日の地位を以つて甘
んじて居るわけがないぢや有りませんか。
寺田　しかし‥‥
朗子　しかし、わたしにしたところ條件次第では‥‥
寺田　條件次第では？
朗子　えゝ、條件次第では、自分の考へを變へないも
のでも有りません。
寺田　だから給料の事なら、二倍でも、三倍でも‥‥
朗子　いゝえ、私は給料の事を云つては居りません、
たゞ私の地位が‥‥あなた御分りになりませんか。
寺田　分らないね、わしは‥‥
朗子　では直截に申上げませう。わたしと契約をお結
びなさい。
寺田　契約を？　何の契約をさ？
朗子　夫婦の契約をです。
寺田　（驚いて）えゝ、夫婦の契約？
朗子　えゝ、左樣です。わたしはあなたがわたしに對
して、何等の愛情をも有つてお出でにならない事を
能く知つて居ます。あなたは今の奥樣に盲目的の愛
を捧げて居らつしやる事も能く知つて居ます。併し
わたし共が今考へて居るのは、若さまの幸福の問題
です。單に若樣の幸運を考へればよいのです。若樣
は今九歳ですね。もう五年たてば中學へ入れるので

す——その年齢になれば、あなたの手一つでも十分に教育が出來ませう。あなたも其時分には、强いて第三、第四の奥樣が必要でもないでせう。

寺田 (澁面つくりて) 無論、左樣だらうと思ふがね。

朗子 だから私は單にビヂネスのマッタアとして御話するのですがね。あなたはもう三日で自由な身體におなりになれるのでせう。左樣したら如何です、わたしと契約をお結びなさい。左樣ですね、五年の期限にしませう。いくら私でも、今の奥樣よりは立派な細君としてあなたの内助をして上げますよ。

寺田 (太息をついて) それあ、汝さん以上の細君を迎へるといふ事は、至難な事かも知れない。が、汝さんは一つ忘れて居る事があるんだ。あの權利子は、わしが汝さんと結婚をしたとなると、とても利根雄をわし共の手許へのこして置く樣な、そんな溫和な女では無いんだからね。

朗子 私もそれは考へて居ないことは有りません。併しあなたは何事よりも一番多く、若さまと分れるといふことを怖れて居らつしやるのでせう。(稍センチメンタルになりて) わたしもあの御方とはお別れしたくは無いのです。(利根雄に) あなたは、阿父さまと一緒に居らつしやりたくつて。如何?

利根雄 (今まで一人にて遊び居しが) 僕、阿父と一緒に居たいの。

朗子 左樣でせうね。

利根雄 それから阿母はね……

朗子 如何です、あなた、これでは若さまを他手にお任せになるわけにはまゐりますまい。ですから私と契約なさい。さうすれば私はこれまでにも增して若さまを可愛がつてあげます。若さまを立派な青年に教育して御覽に入れます。

寺田 併し養見院の方は如何したらいゝだらうね。

朗子 一時は向ふへやつて置て、それから自宅教育の手續きをしませう。市の方だつて、畢竟は兒童の幸

福を目的とするのですから、自宅教育の方が其兒童に利益ありと認めれば、强ひて養兒院へ引留めて置く必要は無いのです。私は此御子さんが、やつと口を御利になる頃から手鹽にかけて御育て申したのですから、母としての愛情なり、關係なりは、奧樣よりはずつと深いのですからね。

寺田　併し權利子は何と云つても血を分けた母なんだからね。

朗子　血は肉體に屬して居ます。魂の愛は血の愛よりも色が濃いのです。

寺田　併し……

朗子　その事ではあなたと議論をする必要はありません。市の當局者が取調べた結果、わたしの愛情がどの位深かつたかといふ事が證明されれば、それでいゝのですから。それに奧樣にはあの宇良木さんの事もありますからね。此御子さんに對する愛情の、どちらが深いかといふことは、直さま誰にでも分るだらうと存じますわ。

寺田　（稍急いて）なに、宇良木、宇良木といふのはあの宇良木壯亮の事かね。

朗子　えゝ、左樣です。

寺田　あの宇良木が、われ〳〵の結婚になんの關係があるのだ。

朗子　御存知がないなら御話致しませう。宇良木さん夫婦の契約は、此九月で滿期になつたのでした。ところが宇良木さんは、それ以來まだ獨身で居ます。あなたはこれが何の爲めか、お分りになりませんか。

寺田　分らないね。

朗子　宇良木さんは、あなたの奧さまの第二のパアトナアにならうとして居るのだといふ事は、誰でも知つて居る事なんですよ。

寺田　な、何だつて、あの宇良木の奴が失、失敬な。

朗子　何故そんなに御憤になるのです、あなたには愚圖々々いふべき權利がないぢやありませんか。

寺田　ぐづ〳〵云ふべき權利が無い？ハヽヽハヽハ！なるほど權利は無いかも知れない。が、權利の有無なぞはおれの問ふ處ではない。おれは有夫姦同樣な事をするあいつらを其儘にして置く事は出來ないんだ。

朗子　（惡意なき笑ひを以て）あなた、あなたは矢張三十年前の御方ですわね。生れて來た時代が遲過ぎましたわね。「時」はあなたとは何の關係もなく、移つて行つたのですわね。而してあなたは「時」の後に取殘されて了つたのですわね。社會の法律に逆行しやうなんてのは、掌で潮流を防がうとする樣なものです。もう三日たてば、權利子さまはあなたと何の關係もない方です。誰がその手を握らうと自由なんです。何か奇蹟でも起つて來て、あなたが契約を繼續なさるやうな事がない限りは。

寺田　われ〳〵が萬一夫婦の契約を繼續する事になつたら、それは奇蹟だといふのかね。

朗子　あなたは左樣お思ひになりませんか。あなたも奧さまの平素の主義は御承知でせう。あの方は少くとも近代的中の近代的な方のですからね。

寺田　（ぐつたりと椅子に凭りかゝり）もう止してもらはう、わ、わしはもう聞くに堪へん。宇良木なんてあんな薄馬鹿な奴に！　あんな色魔見た樣な奴に！　あゝこの子の母が、利根雄の生みの母が！　あゝ！（半ば狂へる人の如くに煩悶す）。

朗子　（冷然と）では宇良木さんの話は止しませう。併しわたしに對する御返事は如何なさるのでございます。あなたは若さまの爲めに、わたしの申込を御承知になりますか、如何なさる御考へです。

寺田　あゝ、利根雄のため！　左樣だ、利根雄のためだ。考へて見ませう――もう暫らく待つて下さい。いづれ返事をしませう。それにしてもあの宇良木の奴、宇良木の奴！　そ、そんな失敬な事をしやうなんて、畜生！　打殺して‥‥

（權利子入り來る。今日の新興劇團の女優を洋行せしめ、彼等のお洒落慾を充すに足るべき金を與へたらん結果に、現出せらるべき女性の風采を具へたる美人なり）。

權利子　まあ、あなた、誰を打殺さうなんて仰有るの。あなたは隨分こわい方ねえ。

利根雄（父が猛烈なる憤怒の容子に驚かされて、母の方へかけ寄りながら）阿母々々。

權利子（利根雄に接吻しつゝ）まあ！、如何したの、利根雄。（寺田に向ひ）あなた、如何したのといふのです。

（寺田、さすがに躊躇す）。

朗子（誇顔に）奥さま、わたし共は宇良木さんの御話を致して居つたのでございますよ。

權利子　左樣！では、あの方はさぞ御喜びなさるでせう。でも、何だつてあの方の事なぞが問題になつたの。

朗子　でも、わたし共だつて、自分達の鼻の先で起る事を、見ない振は出來ませんですからね。

權利子（朗子に對して一種の輕蔑を示し）あなたはこゝを出て下さい。私は寺田に話したい事があるんですから

（朗子思はず目を寺田の方にそらす。寺田も目まぜして立去れと命ず。朗子は力なげに利根雄の方にすゝみ寄り）。

朗子　若樣も御連れまをしませうね。

利根雄　いや、僕あこゝに居るの・・・

權利子　おまへはあつちへ行つておいで。いゝ子だからね。今直きに御馳走をして上げるからね。

朗子　さあ、まゐりませうね。大丈夫、あなたをどつこへも御遣りになりはしませんわ。（わざと權利子を見詰めながらかく云ひ、やがて利根雄を引つれて退場）。

寺田（長き間の後）けふ、市の養兒院から利根雄を迎へに來るのださうだね。眞實かい。

權利子　えゝ眞實です。

寺田　眞實？　それでおまへは何とも思はないのか。

權利子　それを考へると、私は堪らなくなります。でも、同時に私共は自分の責任といふ事も考へなけれ

ばなりませんからね。左様するのがあの子の爲めに一番好い事であつて見れば、已むを得ませんからねえ。

寺田　（思はず猛然と立上り）權利子、おまへは一體何だ。女か、何か。

權利子　（冷かに）あなたも御存じな筈だと思ひますがねもう十年も一緒の生活を營んで居るんですから。

寺田　そ、それならば大抵人情といふものゝどんなものだ位は理解の出來ない事はあるまい。それをおまへは……（情烈しく激して言葉を出し得ず）。

權利子　まあ、靜かになさいまし。ビヂネスはビヂネスです。あなたの樣に激昂しては話が分らなくなります。わたし共の離婚は結婚以前から豫期されて居た事なのですからね。

寺田　併し何故われ〳〵は、其れを豫期しなければならないのだらう。おまへはまだ私を愛して居る――私はそれを知つて居る。いや、たしかにそれが分つて居る。而して私は、私はこれ迄よりも一層おまへを愛して居る。それを、それを、何の必要があつて別れなければならないのだらう。

權利子　契約が滿期になつてしまつたのですから、詮方がありませんわ。

寺田　併し其契約を繼續すればいゝぢやないか。少くともう十年間延長すれば可いぢやないか。今からでも遲くはないぢやないか。

權利子　あなたは何故さう分らない事を仰有るのです離婚を怖れる感情は、わたしだからとて決してあなたには遜りません。でもわたし共には義務といふものがあります。わたしは是でも新式結婚の急先鋒の一人なのですかね。今更わたしの持論を變るわけにはまゐりません。それにあなたはわたしと結婚する前に何と仰有いました。愈よ離婚の時が來ても、兩人は決して態度を變ずる樣な事はしまい、戀愛とか愛情とかいふコンヴエンショナルな感情のために、

われ〱が眞の自覺から必要に迫られて考へついた此期限附新式結婚の實行を裏切る樣な事は、決してしまいといふ約束をなすつたぢや有りませんか。勿論、わたしの感情からのみいへば、わたしはまだあなたを愛して居ります。併しわたしの主義、わたしの意見は、如何しても變へる譯にはまゐりません。

寺田　主義！　意見！　まあ、そんな事のために……

權利子　あなたは如何して左樣分らないでせうね。それがわれ〱の棲息して居る世界に對する義務なのです。爲なければならない責任なんです。

寺田　そんならおまへは相互の間の義務は如何なつてもよいといふのか、あの可愛い〻小兒に對しては義務を負はなくともい〻といふのか。

權利子　わたし共は相互に義務を盡して居るのです。わたし共に取つては、わたし共の言が義務です。わたし共は責任として契約を履行しなければなりません。利根雄に對しては、國家が義務を負ふて、あの子を教育して呉れます。あの子はまだ頑是がないのですから、直きに私どもを忘れてしまひます。

寺田　あれがわれ〱を忘れてしまふ。子が親を忘れてしまふ？　實に怖ろしい事だ。おまへはわしより年齡は若いが、それでも大正の四五年頃の事は記憶して居るだらう。あの頃の人間の感情は、今日のやうに荒んでは居なかつた。冷酷ではなかつた。わしは愛しと見し世がまた戀しくなつた。

權利子　成程わたしも其當時の事は微かに記憶して居ります。其頃の人間は今日から見るとずつと馬鹿でした。そして其馬鹿なためにいろ〱間違つた事を平氣で實行して居ました。

寺田　兎に角、その頃の人間は、今の人間よりもずつと幸福だつたよ。

權利子　如何ですかね。それは問題だらうと思ひますね。

寺田　いや、それはどつちでも構はない、がおれは、あの

自分を愛して居る夫を、古い手套か何かの樣に拋り出さうとして居る女を、幸福な生活をして居る女とは思ふ事は出來ない。自分の腹を痛めた小兒を、平氣で他人の手に渡してしまふ樣な女を、幸福な人間とは思ふ事は出來ない。おれはもう一度、最後におまへに云ふ。おれは近代的罪惡の犧牲となつて居る樣な人間ではない。利根雄は國家の法律にしたがつて、一時は市の養育院の手に引渡さうとも、いつまでもそこへ渡しては置かない。一二週間したらまた自家へ連れ還す。

權利子　そんな事は出來るものですか。わたしが同意しなければ、そんな事は出來ません。

寺田　それでは何故おまへは同意をしないのだ。

權利子　それは、第一にあの子の利益ではないと思ふからです。第二にそんな事をするのは、わたし自身に取つて正しい事でないと思ふからです。

寺田　何故それが正しくないのだ、あの子をおれの許へ置けば、おまへだつて稀有にはあれの顔を見る事が出來るではないか。

權利子　左樣かも知れません。併しわたしは小兒に逢ひたいといふ樣な小さい感情のために、自分が多年懷抱して居る主義を棄てるわけには行きません。そんな事のために、自分を愚弄するには、わたしは餘りに大きな或物を有つて居ます。

寺田　（激昂の頂點に達して）きさまはきさまで勝手な事をしろ、おれはおれで好きな事を爲る。

權利子　少くともあの子の事では、好きな事はさせません。

寺田　父の手一つで小兒を養育して居る例ばいくらも有る。林の子息が其一例だ。

權利子　それは兩親が同意した場合です。私は決して同意しません。

寺田　併しおれは市の當局者に、利根雄がおれの手許で養育されるのは、あの子の幸福である事を證明し

て見せる。

權利子　あんな小さい子が、女の手なしで養育されるといふことは、決して幸福では有りません。

寺田　併し、あの子にはやつと口が利ける頃から、あの子を教育してくれた朗子さんといふ人がある。あの人さへ居てくれゝば‥‥

權利子　あの人は居るはづは有りません、わたしが此處の家(うち)を出れば乾度直ぐに出てしまひます。

寺田　併し若しわたしの爲めに殘つて居てくれるとしたら。

權利子　あの人のデセンシーの考へは、あの人をこゝの家(うち)から離れさせます。

寺田　(稍皮肉に)ところがそれは如何だか分らないね。

權利子　何故(なぜ)です。

寺田　あの人は居てくれても好いような事を云つて居たからな。

權利子　では、あなたはそれをあの人に賴んだのですか。

寺田　おれはそんな事に答へる義務はない。

權利子　(われ知らず激昂して)な、何ですつて！

寺田　(また皮肉に)われ〳〵の契約は、おまへが度々(たび〳〵)主張して居る通り、明後日(あさつて)を以て滿了になる。さうなればおれは誰とどんな事をしやうと、おまへから愚圖々々云はれるわけは無い。おれは最愛の利根雄のために‥‥

權利子　(烈しく動搖して)まさか、あの人と結婚しやうといふのではありますまいね。

寺田　何故爲(なぜし)ちやいけないのだ。

權利子　(俄かに笑出し)あゝ、あなたは冗談を云つて居らつしやるんですね。

寺田　おれは大眞面目だ。あの朗子さんは、立派な淑女(レディ)だ、何處へ出しても恥かしくない淑女(レディ)だ。而して利根雄に對しては生みの母よりも濃かな愛情をもつて居るんだ。

權利子　（憤然として）まあ、まあ、あなたは一方で他の女を思つて居ながら、わたしに對する愛情が毫も變らないやうな事を云つて居たのですね。あんな舊式な戀愛論なぞを口にしながら、內緒に他の女の手を握つて居たのですね、あなたはあんな雇ひ女に欺されて居ながら、一方では私をも欺さうとして居たのですね。

寺田　おれはまだそんな事までして居はしない。おれは單に……

權利子　何が「單に」です。あゝわたしは馬鹿でした。盲目でした。わたしがもう少し意思の弱い人間だつたら、わたしはあなたの甘い語に欺されて、あなたとあの女とから、とり返しのつかない凌辱を與へられるところでした……

寺田　權利子、權利子！わしはあの女にそんな約束なんかしたわけでは無いんだ。だからおまへさへ、何なら……

權利子　わたしさへ如何したらといふのです。わたしさへこの家に居る氣になつたらですか――ménage à trois の三番目になつてね！　わたしさへ有名無實の妻となつて、自分の目の前で夫と他の女とが好勝手なまねをするのを、我慢して見て居る氣になつたらですか。有り難う！　あなたの思召はまことに有難うございますが、まあ、それは御免蒙りませうあなたは利根雄を側に置くのが目的ではなくて、あの朗子と一緒に居るのが目的なのでせう。さあ、何卒御遠慮なくあの女と結婚なすつて下さい。が、愛情だの何だのと、妙な語で自分の汚ない心を飾つて、他を愚弄する樣な事ばかりは、まあ御許しを願ひませう。

寺田　これ、何故そんなに激昂するんだ。これ、他の女たちの樣に、もう少し落着いて話しをするわけには行かないのか。

權利子　どうせ、わたしは朗子さんのやうに立派な教

女ではありません、だから……

寺田　それから、それはそれとして……わしは一つおまへに聞きたい事があるんだ。おまへはわたしと別れた後、いつまでも獨身で居るつもりか。

權利子　えつ。

寺田　おまへはもう或人と第二の契約を結ばうとして居るといふ噂があるが、それは事實でないのか。

權利子　何の權利があつて、あなたはそんな事を質問なさるのです。わたしの將來の計畫については、あなたなぞから干渉される理由は少しもない筈です。兎に角わたしは此十ヶ年といふもの、人の妻として何人からも非難されるやうな行ひをした事はありません。あなたの前で云へない樣な事をした事もなければ、された事もありません。だからいよ〳〵契約の期限の切れる明後日からは、私は自由の身の上です。あなたから干渉されべき理由は毫もないのです

寺田　併し其自由はおまへ一人が享有すべき自由か。わしには拒否されなければならない自由なのか。わしは利根雄のために、同時にわしの爲めに、何卒自家に居てくれとおまへに頼んだ、哀訴した。が、おまへはそれを拒絶した。わしにはもう如何にもしやうが無い。おまへの云ふ通り、われ〳〵の契約はもう滿期になつてしまつた。かうなつてはもう相互の道を行くより外に仕方が無いではないか。

（女中入り來る）。

女中　あの宇良木さまが御出でございます。

寺田　宇良木？　おれに用があるのか、奥さんに用があるのか。

女中　（躊躇しつゝ）つい御伺ひ申しませんでしたけれど

寺田　（思ひ直して）御通し申せ。

（女中退場）。

寺田　おまへが逢ふか、おれが逢ふか。

權利子　（冷かに）二人で逢ひます。

（女中は花束を手にせる、宇良木壯亮を伴ひ來る。宇良木は四

十に近き男、繪畫を職業にすといへど、頭髪の長さによつて美術的氣分を顯はす大正初期の美術家とは、すこぶる其風采を異にす。全然一箇のビジネスマン――女中退場)。

宇良木（媚るが如く）これは、奥さん、御變りもございませんで。いや、寺田君、相變らず御盛んだね。

權利子　能くお尋ね下さいましたね。宇良木さん。

宇良木　いや、能く尋ねさせて下すつたと申上げたい位です。時に奥さん、これはつまらん花ですが、わたしが自慢の手植の薔薇です。どうか見てやつて下さい。（花束を出す）。

權利子　まあ、御親切ね！（寺田に向ひ）ねえ、あなた、綺麗ぢやありませんか。

寺田（苦々しげに）ふむ、おれは左様いふものを批判する智識を有たん。

宇良木　僕なんぞも、其方かも知れませんね。

權利子　それは嘘ですわ。あなたは此花を選擇するだけの趣味をもつて居らつしやるんですもの。

宇良木　これは恐れ入りますな。いや、それは左様と今そこで非常な珍談を聴いて來たのですがな。鹿場子爵はとう／＼前澤夫人と結婚したさうですよ。

權利子　まあ、眞實ですか。あなた委しい事を御承知？

宇良木　大して委しい事は知りませんけれど、兎に角不思議なんですよ。結婚にも事を缺いて、終身契約をやつたのださうです。

權利子　まあ、馬鹿らしい！

宇良木　それあ誰でも左様云つて居ます。併し前澤夫人の方では、終身夫婦でなければ如何しても忌だと云ふんださうです。

權利子　何故あの人はそんな馬鹿げた事を考へたのでせうね。

宇良木　つまり肩書が欲しかつたのですね。子爵夫人を生涯ふり廻さうといふ魂膽なんですね。

權利子　でも、兩人のなかはそんなに長持ちがするでせうか。

宇良木　さあ、其處ですがね、僕は鹿場子爵の氣象も能く知つて居ますが、まづ長くて二三年位のものでせうね。一體此節柄、終身夫婦の契約をするなんてのは頭から間違つて居るのですよ。

寺田　（腹立しげに）何、何て事だ。（つと立上り室を去らんとす。）

宇良木　えツ？

權利子　（笑つて）なあに、寺田は結婚問題と來ると、それあ舊式な考へをもつてるんですからね。それであんなに變な顏をして居るんですよ。

宇良木　なる程。いや、世間にはなか〳〵舊式な人があるものですからね。時に寺田君、僕あ、君に少し話したい事があるんだが。

寺田　（無愛相に）歸る時に、左樣いつてよこし給へ。わしは少し用があるから失禮する。

（寺田退場）。

宇良木　僕は先生の心地を察する事が出來ますよ。あなたと別れるんですから、つらいには相違ありませんやね。

權利子　だつて世間には、妻と別れる人が澤山あるぢやありませんか。それをあの人ばかりが何故特別につらいんでせう。さう〳〵、あなただつて奥さまに御別れなすつたのですわね。あなた、そんなにつらかつて。

宇良木　いや、それは自から別問題ですよ。あの女は極めて單調な性質でしたからね、十年も一緒に生活するにはあまり無趣味過ぎましたよ。だから、あれはまあ例外の方でせうね。

權利子　それではあなたも御困りでしたらうね。實際人間といふものは變化を好むものですからね。空氣でも、景色でも、夫婦の關係でもおんなじ事ですわね。

宇良木　（色魔的特色を示して）あなたも、久しいこと其嘆がおありだつたのでせうね。

櫨利子　いゝえ、わたしの場合にはそんな事はありませんでした。寺田はあゝいふ好い人物ですし、それに二人のなかには、利根雄といふものもありますからね。

宇良木　それなら、あなたは如何して契約を延長なさらないのです。

櫨利子　わたしは主義に殉するのです。わたしに取つては主義ほど尊いものはありませんからね。

宇良木　では、いよ／＼契約通りになさるのですね。

櫨利子　えゝ。

宇良木　そして、また第二の契約をお結びになるのでせうね。

櫨利子　さあ、それは事情によつてゞすわね。

宇良木　いや、それは是非左樣なさらなくつちやいけません。婦人といふものは、長く寂しい生活をつゞけべきものでは有りません。それにあなたの樣な方が、只十年の結婚で滿足するなどといふのは、金剛石を土の中へ棄てゝ置く樣なものです。

櫨利子　でも、わたしはまだ將來の事まで考へて見る餘裕はなかつたのです。

宇良木　いや、それは餘まり冷酷です。わたしは此幾月――先の家内と別れてからといふもの――あらゆる申込を拒絶して、うら淋しい孤獨の境涯を以て滿足して居たのは、一體何の爲めだと御思ひです。

櫨利子　何の爲めつて、あなたは御自分でそれを望んで居らしつたのでせう。

宇良木　いゝえ、わたしはあなたが自由の身體になるのを待つて居たのです。わたしを次のパアトナアとして推薦する事の出來る時を待つて居たのです。

櫨利子　まあ、あなたは隨分親切な御方ねえ、でも‥‥

宇良木　まあ、おきゝなさい、奥さん‥‥どうも威じが惡い。僕は櫨利子と云つて見たいんですがね。

櫨利子　わたしはまだ寺田の妻です。寺田さんと云つていたゞきませう。

宇良木　いや、失禮しました。僕は氣が早いので、時々大失策をやるのです。が、それは兎に角、僕の熱情、僕の尊敬、僕のあこがれ、あなたに對する僕の一切の愛情は、無論酌み取つて下さるでせうね。

櫨利子　それは有難いと思ひます。でも……

宇良木　（おのれの熱情に醉へるが如く）僕は鹿場子爵のやうに肩書をあなたにさゝげる事は出來ません。併しあなたはそんな世俗的の虛榮に心を動かす方でない事は、僕は能く知つて居ます。而して僕は僕の有つてるもの丶一切――この賤しい僕自身をも、悉くあなたのものとしてあなたの脚下に投げ出します。

櫨利子　あなたが其配偶のために、御自分の力で出來るだけの事をなさる方だといふ事は、わたしにも能く分つて居ります。あなたほど私ども女性の權利を認めて下さる方の少ないといふ事も能く分つて居ります。でも世間にはいろ／＼注意しなければならない事がありますからね。あんまり事を急いてすると、それ自身に危險な事が起るばかりでなく、人から妙な疑ひを招かないとも限りませんからね。

宇良木　併しもう明後日さへ過れば……

櫨利子　えゝ、明後日が過ぎたら、能く考へて見ませう。

宇良木　お考へになつた結果は、無論僕の哀願を適へて下さる事になるでせうね。

櫨利子　さあ、未來の事に御約束は出來ませんね。

宇良木　でも希望をもつことだけは出來ませう。

櫨利子　私はあなたの希望を妨げる事は出來ません。でも私はそれをエンカレーヂはしませんよ。

宇良木　では、もう一度御目にかゝる迄、その希望を唯一の生命とたのむ事にしませう。今度はいつ御目にかゝれませう。明日か……明後日……

櫨利子　日はきめられません。

宇良木　あ、あなたは如何してさう冷靜に出來るのでせう。

（宇良木は、大正の初期に於ける新興劇團の色男の如きジエスチーアして、權利子の手を握らんとす。此刹那に寺田隣室より入來りて此容子を見、目を怒らして思はず歩みをとゞむ）。

宇良木　やつ、寺田君。

寺田　君はまだ歸らないのか、歸る前に用があるといふ話だつたから來て見たのだが。

宇良木　うむ、一寸話したい事があるんだが。

寺田　では書齋へ行かう。

權利子　私があつちへまゐりませう——私あつちに用が有りますから。

宇良木　それでは濟みませんね。

權利子　では、宇良木さん、左樣なら。

宇良木　いづれ、又其中に。

（兩人握手す。權利子退場）。

寺田　（椅子に凭りかゝりて）そこで何か用かね。

宇良木　うむ、その、君の主義からいふと、少し禮に失する樣な事にあたるかも知れないがね。時勢の推移には何人も逆行が出來ないからね……

寺田　まあ、そんな議論はどうでもいゝ。主要な點を先に聞かう。

宇良木　では、思ひ切つて話すが、君と細君との結婚は明後日で滿了する事になるんださうだね。

寺田　それあ、僕の仕事だ。君に何の關係もないぢやないか。

宇良木　無論僕には關係がないさ。が、それは權利子さんの仕事でもあるだらう。すると自然に僕の仕事にもなつて來るのだ。

寺田　な、なにを下らない。

宇良木　實は僕も紳士として、今日までは自分の感情を推隱して居たのだが、いよ／＼今といふ今寺田夫人の第二配偶として、公然名宣を上げる事に決心したんだ。

寺田　名宣を上げる？　して權利子はこれを承諾したのか。

宇良木　いや、それは、その、プラクテカルには
寺田　はつきり云ひ給へ。彼女(あのをんな)は承諾したのか、しないのか。
宇良木　まだはつきりは爲て居ない。が、乾度すると思つて居る。
寺田　若し彼女(あれ)が承知したら、（輕蔑の意味を以て宇良木を打見やりながら）君はさぞ嬉しいだらうな。（立上りさま）では、今日(けふ)はこれで失敬する。
宇良木　まあ、待つてくれ給へ、そこで僕がいよいよ君の細君と新らしい契約を締結するとなると、一つ君に聞いて置きたい事があるんだ。
寺田　なにをさ。
宇良木　權利子さんの性格について君の證明を求めたいんだ。
寺田　なに、權利子の性格の證明をか？
宇良木　そんなに怒るには當らないぢやないか。近來日本でも大分左樣いふ習慣になつて來たが、奉公人が暇を取る時には、親切な主人は必らず其人物に對する證明書を出して居る。細君に對しても、前の夫から證明書を出す位は是非しなければならないことなのだ。が、君と僕といふ間柄で、そんな證明書を書いて貰ふ必要もないから、僕は自身で君に質問に來たんだ。
寺田　では、君は妻も奉公人も同じやうに思つて居るのか。
宇良木　それあ同じとは思はんさ。が、まあ非常な違ひはないぢやないか。（チョッキの隱袋(ポケット)より紙片を取出し）僕は念の爲めに箇條書にして來たから、一寸待つてくれ給へ。えゝと第一の質問は、權利子さんの性質についてだがね。
寺田　（憤怒の極に達し）君、君、もう歸つてくれ給へ。
宇良木　君、まあ、左樣(さう)怒るものぢやないよ。男は相みたがひだ。君もまた其中僕に質問する必要が起るかも知れない。一體、權利子さんはお客に對しては

大變に愛相の好い人だが、私的生活（プライヴエートライフ）に於ても矢張愛相のいゝ人かね。

寺田　（苦々しげに）それが君に何の關係があるのだ。

宇良木　それあ、君、非常な關係があらうぢやないか未來の細君の性質なんだからね。

寺田　彼女（あれ）に直接に聽き給へ。

宇良木　君、そんな事を云つたつてそれあ無理だよ、それあ君が答へるのが當然ぢやないか。

寺田　若しおれがそれを拒絶したら。

宇良木　僕は君を情けない人だと思ふね。氣の毒な人だと思ふね。社會一般が左樣思ふに違ひないね。

寺田　人は何とでも思ふが好い。（思ひ直して）それから其外に聞きたい事といふのは何だ。

宇良木　（囁いて）しかし君が若し答へないのなら……

寺田　まあ、好いから云つて見たまへ。

宇良木　第二の質問といふのはね、あの人は贅澤で、錢づかひがあらいといふ樣な事はないかね。

寺田　それから！

宇良木　第三はなんだ。これ迄君に隱してどこからか金を借りたりなんかした事はないかね。

寺田　其次は。

宇良木　第四は、嫉き過るといふ樣な虞れはないか、如何かといふことだ。たとはゞ君が夜遲く歸つて來るとするね。すると何處へ行つて何をして居たといふ樣な、根掘り葉掘り聞きたがるといふ樣な……

寺田　もうそれ切りかね。

宇良木　もう一つある。あの奧さんはこれまで外の男に對して――君と僕だけは別だがね――自由行動を取りすぎたといふやうな事はなかつたかね。

寺田　（血走る目を光らして）きさまは恐ろしい人間だ。さ、その紙をおれに渡せ。（云ひつゝ宇良木に迫る）。

宇良木　（身を退りながら）何を、馬鹿な事をするんだ。

寺田　何でもいゝからその紙を置いてこゝを出ろ。（背突過す）。

宇良木　お、まへは氣が狂つたのか。

寺田　狂つてるかも知れない。さ、それをよこせ。

（寺田は宇良木にむしやぶりつきて、其紙片を奪ふ。此時權利子入り來りて驚く。）

權利子　まあ、あなた方は如何したといふのです。（寺田に向ひ）あなた、何だつてそんな亂暴をなさるの。

寺田　二日でも三日でも、まだ期限の滿たない中は、おまへはおれの妻だ。その妻を侮蔑されては、おれは我慢がならん。

權利子　わたしを侮辱ですつて？　誰がです。

寺田　こゝに居る此男がさ。

權利子　（哄笑して）まあ、宇良木さんは私を崇拜して居ますわ。如何して侮辱なんか出來ますものか。（宇良木に向ひ）ねえ。宇良木さん。

宇良木　左、左樣ですとも？

寺田　きさまは能くもぬけ〳〵とそんな事をいふな。權利子、まあ、この書付を讀んで見ろ。

宇良木　君、それあ、餘り殘酷だよ。（奪ひ取らんとす）。

權利子　（それを横取りして）まあ、お見せなさい。（一讀の後）これは何なの。

寺田　それはおまへの人格に對する試驗問題なのだ。おまへはこの男からそれほど危ぶまれて居るのだ。それほど不信用なのだ。それでもおまへは此男と一緒になるつもりなのか。

權利子　（涙を浮めつゝ）而して此男はこんな事をあなたに聞いたのですね。

寺田　左樣だ。それでも此男はおまへを侮辱しないといふのか。尊敬して居るといふのか。

權利子　あゝ、私、今となつてはじめて目が開きました。宇良木さん、まあ歸つていたゞきませう。

宇良木　併し奥さん……

（利根雄隣室より走り入る。朗子これにつゞく。）

利根雄　阿父、阿母。誰だか僕を迎へに來たよ。玩弄具のある處へ連れて行くつて。

朗子　市の吏員がやつて來たのです。いよ／＼若樣を養兒院へ御連れ申さうといふので。

寺田　あゝ、如何しやう。

利根雄　阿母一緒にいきませうよ、ねえ。阿父も行くでせう。

寺田　阿父も阿母も今日は御用があつて行かれないから、おまへ一人で行つておいで。阿父は此頃に迎へに行くからね。

利根雄　いやだ／＼、阿父も阿母も一緒でなければいやだ。

朗子　さあ、そんな事を仰有らないでね。阿母に接吻をなすつて、おとなしく參りませうね。

利根雄　いやだ、いやだ。僕、いやだ。（泣く）

寺田　あゝ、なんといふ悲慘な事だ。權利子――まだ遲くはないのだがな！

朗子　ですから先刻申上げた樣になされば、よろしいぢや有りませんか。

寺田　先刻云つた？　何をさ。

朗子　もう忘れて居らつしやるの。成程いろ／＼心配がおありになるのですから無理もありませんけれど……。兎に角、此御子さんの事は、私か何處までも面倒を見て上げれば、それでよろしいぢや有りませんか。

權利子　（此時まで利根雄を抱きしめ居りしが、俄かに面を上げ）では、やつぱりあなた方はもう約束をして居たのですね。

朗子　それは私と御主人との間の事です。あなたには關係の無い事です。

權利子　成程、左樣でしたね、あなた方は私に知れないやうに陰謀を企てゝ居たのですからね。

寺田　權利子、おれはそんな……

朗子　（口惜氣に）わたしはそんな陋劣な事をする女では有りません。たゞ私はあんまり此御子さんが御可哀さうですから、それで先刻初めて契約の話をしたの

です……

寺田　まあ、待つて下さい、私は……

權利子　あなた默つてゐらつしやい。さあ、朗子さん云ふだけの事を云つていたゞきませう。

朗子　はい、申上げます。あなたは此御子さんに對して、何等の愛情もおもちになりません。ところが私は此御子さんと離れては、悲しみの爲めに氣が狂ひさうです。あなたは御主人に對する愛情を、此宇良木さんに賣つておしまひになりました。

權利子　(銳どく)宇良木さんの事は議論外にしていたゞきませう。その人は私共には何の關係もありません。

朗子　いゝえ、ある筈です。私は宇良木さんから直接に聞いた事があるんです。

權利子　(勝ほこけるやうに)まあ、お待ちなさい、わたしと寺田は、都合によると、今の契約を延長する事になるかも知れないのですからね。

朗子　でも、あなたはそれを爲さりはしますまい。

權利子　(微笑して)それこそわたしたちだけの問題です(寺田に向ひ)ねえ、あなた。

寺田　(はじめてわれに返れる如く生色をあらはして)左樣だとも。

利根雄　阿母！　(又權利子に抱きつく)。

權利子　(利根雄を抱きしめて)あなた、此子の可愛さが今になつてしみ〴〵と分りました。あなた、此子の爲めに、どうぞわたしを御許しなすつて……

寺田　なに、許してくれつて？あゝ、眞實にそんな心地になつてくれたのか。

權利子　(涙に咽びつゝ)もしあなたさへまだ私を許して下さるなら……

寺田　(嗚咽しつゝ)權利子！

權利子　わたしたちの契約を繼續しませう……

寺田　終身の契約をか？

權利子　出來るだけ長く！

朗子　まあ、馬鹿々々しい。

宇良木　何の事だ！

(女中入り來る)。

女中　あの市の方々は若樣を御待ちなすつて御出でになりますが。

寺田「利根雄はもう行かない事になりました。今主人がそちらへまゐつて御話し申します」と左樣云つて置け。いや、朗子さん、あなたから云つていたゞきませうか。

朗子　私、存じません。

(朗子腹立しげに立去る。女中之につゞく)。

宇良木　いや、兎に角おめでたう。

寺田　いづれ終身結婚の披露の時には、是非來てくれ給へ。

宇良木　有難う。奥さん、左樣なら。

(宇良木悄然として立去る)。

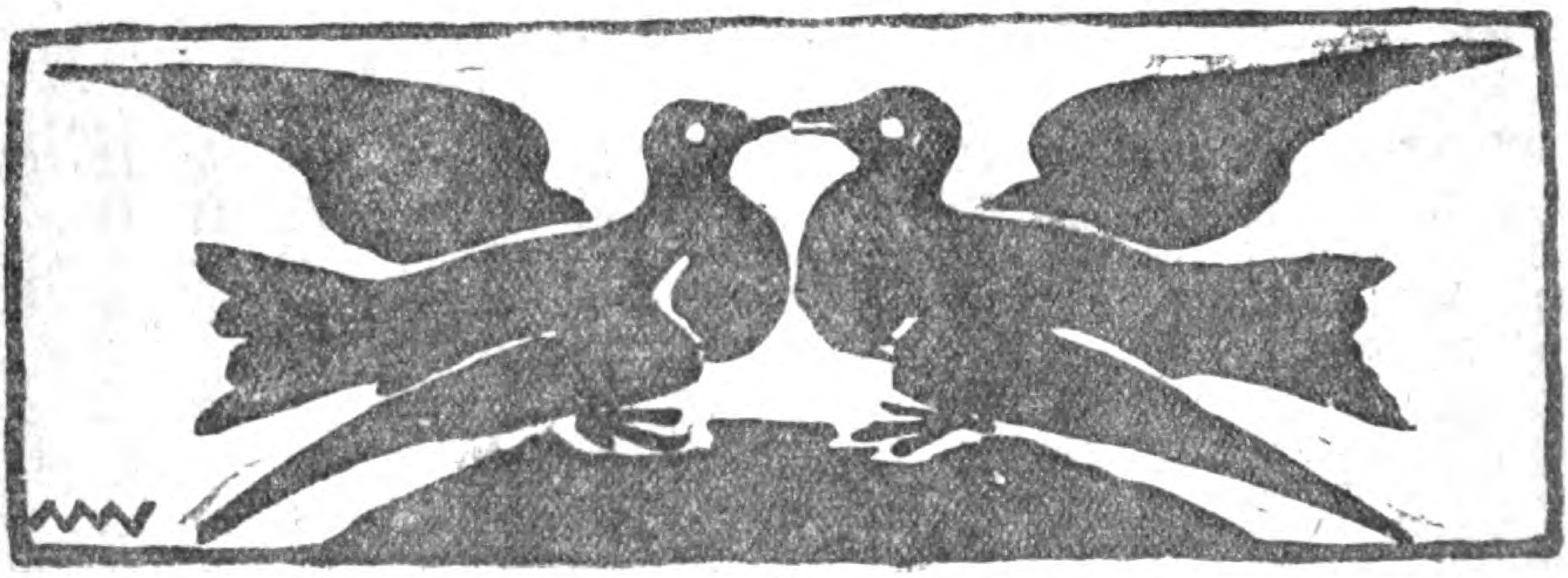
權利子　(利根雄を抱きしめ)利根雄、利根雄、阿母に接吻(キッス)しておくれ。

寺田　今度の日曜日は、動物園へ連れて行かうな。

利根雄　阿母も一緒にね。

權利子　あゝ、阿母も一緒にね。

(幕)



彼女の生活

田村俊子

一

彼女が新田と結婚をしたのは二十一の時であつた。

二人が偶然ある所で知己(ちかづき)になつてから、新田は彼女に戀するやうになつた。優子もまた男を戀してゐた。新田は優子と結婚しやうとしたけれ共、優子にはその頃、自己と云ふものを考へることの出來る聰明な現代の若い女に有り勝ちな危惧の念で、結婚と云ふものに就いても不安を持つてゐた。結婚の恐(おそろ)しさと云ふよりも、結婚後の自分と云ふものに就いて、優子は考へ過ぎてゐた。結婚後の自分が男から何う云ふ待遇を受けるかと云ふ疑念は、殊に若い彼女に世間のあらゆる夫婦生活の上に新(あらた)な考究の眼を向けさせた。

そこには優子が憤慨爲ずには居られないやうな女の屈辱ばかりが見出された。どの女の腰にぬ太い鎖が巻き付いてゐた。まるで自分と云ふものを失ひ盡(つく)してゐる亡靈のやうな蒼い顏ばかりがあつた。ある女は男に對する愛の媄

妬と自分の生活の倦怠とでヒステリーになつてゐたり、ある女は朝から終日赤兒のむつきを洗ふのに追はれて水を一杯汲むのにも不健全な呼吸をしてゐたり、ある女は又絶對に男の從僕者であつたりした。女自身の心臓は良人や小供のために壓搾されて、そこに最も清新に動くすべての女の生血は、塵埃の支へた下水の滓のやうに濁らされ澁らされてゐた。女たちは純眞な愛などゝ云ふことを思索的に教義的に考へてゐる暇などはなかつた。犬や猫が自分の産んだ子を可愛がると同じやうな下司な本能的の愛情で單に小供たちの上にある注意を急がしく向けるといふことの外は何も知らなかつた。女たちは又その家庭の上に責任と云ふことを考へる暇もなかつた。女は家事の仕事の上にすら責任などは少しも感じてゐなかつた。女たちは唯何か自分の前後に差し迫つてくる仕事の上に、無意識に夢中に手を置くと云ふに過ぎなかつた。まことに家庭の女の上には山のやうに雜務が積まれていつた。彼れ等の生涯の着物の襤褸が女の面前には何の猶豫もなく一日々々と積まれていつた。一日の用務は殆んど何所と云ふ限界なしに時間から時間へと續いて果てしがなかつた。斯くして女たちは責任といふ最大な意味を、自分たちの生活の上に見出すことにさへ疲れ果てゝゐた。山車の人形が後から押され前から曳かれて泳ぎながら動いて進むやうに、女は全く魂を閉ざしてその人形のやうな身體を後から押され前から曳かれて一日々々と盲目の日を果たして行つた。

　優子は然う云ふ女の生活を考へる時に戰慄した。自分はどんな事があつても然う云ふ女の生活の道を追ふことは厭だと思つた。自分と云ふものをこの人生に飽くまで自分として生かして置きたい。男の自我心に自分の魂を失はされるやうな結婚生活は求めてはならない。自分は何所までも自分の尊い存在の

上に一人で生きる。愛と云ふ卑怯な口實を求めて結婚の罠に落ちてはならないと優子は決心してゐた。優子は自身を物質的の生活の上にも安全に維持させられるやうに、職業を求めて働いてゐた。才の薄い文筆によつて活計の料を得ながら、優子は猶健氣な自分の向上の精神を衞つて勉强をつゞけてゐた。そうして不圖若い彼女は新田に逢つた時戀に落ちた。

新田は結婚をすることを優子に求めてやまなかつた。新田は愛する女の全てを所有すると云ふ事實が得たいのであつた。だが優子は暫らくそれに應じなかつた。聰明な彼女は思ひがけない戀と結婚の一致に苦しんで、一度は自分の主張の爲に戀を捨てなくてはなるまいかと惑つたりした。そうして其れが自分に取つて矢張り不自然な處置だと自身に思ひ付いた時、優子は一層苦しんだ。

「私はどうかして自由に生きたい。私の戀も自由に自然にさせておきたい。私たちは結婚をしなくてはならないと云ふ愛の義務は持ちたくありません。結婚などと云ふことを避けて永久に戀の自由にお互に生きてゆくことは出來ないものでせうか。」

と優子は新田に云つた。新田には優子の其の言葉が肉を知らない、處女の空想としきや聞かれなかつた。新田は寧ろ眞面目な優子が可笑しかつた。それと同時に、自分がどんなに烈しく優子の肉を求めてゐるかと云ふことを、新田は優子に白狀した。優子は新田の其の露骨な言葉に赤面はしたけれども、その男の欲望を侮蔑することは出來なかつた。優子は新田の欲望は自然だと思つた。然し優子は矢張り結婚をする氣にはなれなかつた。男が肉を求めやうとする感情よりも、結婚を求めやうとする意志の方に、優子は却つて男の卑怯さと醜さが感じられた。肉を戀人に許すことは優子の永遠の自由であつたけれ共

結婚に應じることは自分の生涯を男の手によつて閉ざされることだ。男が自分に結婚を迫るのは、自分の身體に一生飼ひ殺しの鎖り鎌を打ちかけやうとするのと同じだと優子は思つた。

「結婚はしない。」

と云ふ優子の言葉に對して、新田は「その考へが間違つてゐる。」ことを優子に云つた。

「あなたは私を普通の世間の男と同じに見てゐるのではないか。私はもう少し女と云ふものに對して新らしい理解を持つてゐる筈だ。私は決してあなたを私より劣つたものだとは思つてゐない。何所までも私と同權者の地位に居るべき人だと思つてゐる。私はあなたの其の獨立の意志を尊重してゐる。無論私たちは世間普通の夫婦關係のやうなものを作つてはいけない。どこまでもあなたは私の伴侶であり、私はあなたの友達である。私は今までよりももつとあなたの自由を認め、あなたの進まうとする道を開いて上げる。あなたを自由に生かすことは、自分をも自由に生かすことである。私はあなたを單に家政の女として求めてゐるのではない。あなたを妻とすると同時にあなたを靈魂を持つ女性として尊敬しやうとする點に私の結婚の理想があるのである。それが眞の結婚だと思ふ。さうして又精神的な結婚だ。斯う云ふ結婚が望まれないくらゐなら、自分もまた求めて結婚なぞを爲る必要はない。」と新田は熱心に云つた。

優子は男の言葉を非常に嬉しく思つた。それは眞實に女を理解してくれる言葉だと思つた。單に自分を理解してくれると云ふよりも、廣く女と云ふものに對して深い理解の籠つた言葉を戀人から聞くと云ふ事は、優子に取つて一層戀人の人格を大きく考へさせ、その感情を崇高に思はせずには置かなかつ

た。新田が云ふやうに、それこそ眞の結婚である。男は自分の自由を認めやうと云ふのである。そうして自分の意志も藝術も尊重して呉れやうと云ふのである。優子はその男の言葉を信じないではゐられなかつた。自分の戀人は新らしい人である。この新らしい人の新らしい理解によつて生きる自分は、女の中のもつとも幸福なものだと優子は信じた。

二人は結婚をした。優子は新田の家に迎へられてその名目は新田の妻として、新田と一所に朝夕を送ることになつた。二人は別々の室に住むことにした。優子の室にも新田の室にも、お互に無雜作に入ることをお互に禁じ合つた。優子はそこで勉强をした。良人から養はれると云ふことを屈辱に感じる優子は、いさゝかのものでも自身の力から產み出すことを忘れなかつた。新田は哲學者で現代の評論家であつた。自分も自分の書齋に籠つて執筆や讀書に耽つてゐた。

二人は下女が入り用になつた。家の掃除、衣服の洗濯、炊事、すべてを優子が一人して負擔することは到底出來なかつた。殊に家政の女になつて自分の思想を朽ちさせてしまふことは皆そこから初まつてゆくことであつた。優子も新田もそれを恐れた。然う云ふ家政事の時間を、優子の大切な勉强の時間から引き割くことは新田にも苦痛であつた。それで二人は下女を置くことにした。若い下女が新田の家に度々入り代りした。二人の思ふやうな理想的な下女は一人も見付からなかつた。

どの下女も汚らしかつた。彼れ等の爲る仕事は不秩序で、不規則で、ずる〳〵と亂次がなかつた。命ずることをしなければ彼れ等の魯鈍な頭腦は何時までも錆びついた儘で動かなかつた。彼れ等は忠實と云ふ意味を取り違へてゐた。云はれた事を其の儘に行ふことが忠實だと思つてゐた。云はれなければ彼

れ等は何んな事でも抛つて置く、云はれない事を先んじて爲る事は彼れ等は潛越のやうに感じてゐるのであつた。優子の主婦たる一面を、鏡のやうに其の頭腦に映して無言の內に其の儘を行つてくれると云ふやうな理想な女などは到底見付からなかつた。

優子は忽ち疲れてしまつた。命ずると云ふことに疲れ、敎へると云ふことに疲れた。優子はその書齋に居て、下女に命ずる家政の順序を繰り返すことの煩はしさに神經が弱つて行つた。無智な下女の起居擧動は、聰明な優子の神經を一々咎めた。優子は一日斯う云ふ下女と交渉を持つよりも、寧ろ自分一人で家政を始末することの方が遙に煩雜でなく、そうして却つて自分の時間を確りと自分のものに爲る事が出來ると思つた。下女は無雜作に――良人の新田が氣儘に立入ることも出來ない優子の書齋に入つて來て、

「あれは何うしますか。これは何うしますか。」

と云ふやうな相談に用捨もなく優子の靜思を妨げた。

優子は下女を廢してしまつた。家政の用の時間と、自分の勉强の時間とを劃然と區別して、臺所にある時間の間は、自分の頭腦を臺所の中のものにするやうな習慣をつけた。

それは容易であつた。新田も家政の仕事を分擔することを考へてゐた。それが自分の同權者に對する義務だと思つた。優子が臺所に出れば自分も臺所に出た。優子が野菜を切る間には、新田は瓦斯に火を點けた。優子が汚れた器物を洗へば新田は其れを潔癖にふきんで拭き上げたりした。家の掃除も二人でした。却つてこの方が美味しい食事に就くことが出來るやうであつた。無智な下女などを煩さくこの家

庭に配するよりも、さつぱりとして優子の感情は平靜であつた。身體の勞働は優子の思索に疲れた頭腦を轉換させて却つて心持が快かつた。優子は細い腕に力を入れて可成りに廣い家の周圍を奇麗に掃除した。白いエプロンをかけて、よく切れる庖丁で野菜を切ることもある時は趣味を感じた。

「家政の仕事を持つことは却つて宜う御座んすわ。私の頭が非常にデリケートに働くやうになつて、神經が始終齒車にでもかけられてゐるやうです。私はこの鋭さを自分に見付けると嬉しくつて堪りません。」

と優子は云つた。優子は勤勉であつた。

だが其れも長くは續かなかつた。何う處理することも出來ない雜務が、犇々と彼女の前に積まれてきた。男の襯衣の洗濯、足袋の繼ぎ、――そんな事にまで優子の注意はこま／＼と向けられなくては濟まなかつた。仕事はよく整頓されても、其れは直ぐに崩されてしまつた。來客の度毎に優子は一々立たなくてはならない。茶の世話、珈琲の世話、其れは僅なことの樣でゐて、優子の一日の時間を、刻むやうに邪魔をした。新田も最初は其れを氣の毒に感じて自身で用を達すやうにしてゐたけれ共、女が自分の時間に就いて考へるやうに、男も又自分の時間に就いて考へないではゐられなかつた。新田も優子と同じやうに家政の仕事に與かつてゐた。新田は努めて女の雜務を助けるやうにしてゐた。自分の本務の時間はどれだけ斯うした無意味な雜用の時間に潰されるか知れないのであつた。新田も自分の書齋に居て其れを考へないではゐられなかつた。然うして新田は知らず／＼家政の仕事を怠けるやうになつた。殊に自分には二人の生活と云ふ重い責任があつた。生計の始に、新田は今までよりも働かなくてはならな

い境遇であつた。そうして毎日の生活の事實が、新田自身に社會に對する新な男の責任と義務とを强ひずにはゐなかつた。――新田は其れを意識するほど、いかにも自然的に、自分の仕事は重く大きく、自分の襯衣を洗つたり貧物の手傳ひをするやうな家政の仕事は極く輕いものとして自分の行爲に現はれてきた。机に向つてゐた彼れが、臺所の物音を聞いて急いで臺所に走つて行くと云ふやうな注意は、すつかり失くなつてしまつた。優子の家政の仕事はだん〳〵に增殖えていつた。そうして家政の上のことは唯簡單と云ふだけでは濟まなくなつた。塵埃のやうに錯雜した用務は一層無經驗な優子を苦しめ惱めた。

優子は何うしていゝのか分らないやうな紛亂に落ちて、家の掃除も怠るやうなことがあつた。然しその傍から、男の仕事に對する愛と理解が優子を凝つとさせては置かなかつた。少しでも男を快い氣分に浸らせたいと云ふ望みが、優子の氣を引立てゝ勵まして優子自身を働かせた。聰明な優子は男の周圍にどんなにでも細かく心が働いた。その細かい注意を、どんな時にも自分で抛つておくことは出來なかつた。新田のその時々の感情や感覺は、手に取るやうに優子の胸に映つた。優子は出來るだけ自分の注意で男の感情を平靜にさせなくてはならないと云ふ好意を忘れることができなかつた。

男は又外出勝ちであつた。外に多くの交渉を持つてゐる新田は毎日よく出て歩いた。優子はまるで外に出ると云ふやうな事はなくなつた。近所へ買物にでも出てゆく他は、優子は自分の身體を裝つて外出すると云ふことが非常に隱劫になつた。それは優子が家政の仕事を省みないではゐられないからの事であつた。まるで神經的に、優子は家政の仕事を處理し始末し、そうして一時間でも多く自分自身の勉强

の時間を得やうとする事ばかりに心が凝つた。幾週間も家に閉ぢ籠つて夜から晝へと眠つたり覺めたりした後、優子はぼんやりと晴れ渡つた空を眺めることがあつた。そうして一人して旅行をしつゞけた頃の、自由な樂しい氣分を思ひ出して、その空の色に唆られることがあつた。然し優子はそれを直ぐに打消した。

「今の自分に取つては、旅行などゝ云ふ事に興味はない。」

二

優子は全く自分の勉强が手に付かなかつた。優子は自分の室に籠つて自分の現在の生活を考へた。ある時は夫婦の愛までが彼女に重苦しいものを與へるやうな氣がした。知らず〳〵自分自身と云ふものを必らず新田の感覺の中から見出そうとしてゐる自分の感情の卑屈さにも、優子は自から厭惡を感じないではゐられなかつた。

自分の生活は何うしても男に從屬してゐるものであつた。それは何う拒むことも出來ない二人の生活の事實であつた。女の自由を認め、女の生きやうとする道を解放しやうと誓つた新田は、矢つ張り現在の自分たちの生活が女の自由を奪つてゆくことに氣が付かなくはなかつた。曾ては意氣の激しかつた藝術感の鋭敏であつた、人生に生きることに潑溂としてゐた優子が、まるで意氣を失つて顏色も蒼白になり、そうして始終家内にばかり閉ぢ籠つてゐるのを見ると、新田は唯優子が憫れで堪らなかつた。出來るだけ煩雜な家政の用と優子とを引き放してやり度ひと考へながら、新田は直きにその努力にさへ自分が疲れていつた。女がある我慢とある信念とを感じて、一生懸命に家政の用を果たして行くいぢらしい

姿を見守りながら、優子のその健氣な信念に心を安めて顏を背向けてゐるより仕方がなかつた。

「勉强が出來ますか。」

「え丶出來ます。」

斯う云ふ返事を聞いて、新田は默つて安心するより仕方がなかつた。自分の爲に好意と同情とを盡してくれる妻を自分の傍に見出す時、新田はどんなにか幸福であつた。自分の書齋に籠つて自身の仕事に沒頭してゐる時の優子を見るよりも、新田には妻らしい感情を持つて自分に接してくれる時の優子の方に一層深い愛を感じるのであつた。この愛感を犧牲にしてまでも、妻の優子が書齋に籠る時間の多いことを願つてゐると云ふことは、新田には寂寥で又苦痛なとであつた。けれ共新田はそれを優子に打ち明けはしなかつた。それは自分の思想上の友達に對して侮辱的な考へだと思つて新田は恥ぢてゐた。そうして優子に向つて然う云ふ感情を求めることは卑屈だと新田は自身を責めた。それでも、妻らしい優しさと氣忙しさと細な注意とで家事に働いてゐる時の優子が、非常に美しく愛らしく見えることの事實の感じは、どうしても新田には打消すことが出來なかつた。それは優子がすつかり新田の爲に家政の女になることは新田には悲しい事には違ひなかつたけれ共、新田は自分の頭腦が疲れてゐる時などに、同じやうに思索の苦澁を表はした優子の顏などを見ることは苦しいのであつた。

優子はそれを全て感知つてゐた。新田が常に自分に就いて感じつ丶ある全てを悉く知つてゐた。自分が善良な妻である時を喜ぶやうに見える新田の突然な表情が、時折無意識のうちに新田の面に上つてきて彼女を驚かすことがあつた。優子はそれを感じるほど、自分の生活に失望した。然かも新田へ對する

優子の愛は、新田が自分を善良な妻として求めやうとするある一時の要求にも背向くことをさせなかつた。新田の滿足の前には、善良な妻でゐることを願ふやうな媚が、何時ともよく彼女の心底に滲みひろがつて居る事を優子は自身に感じてゐた。それは優子に取つては恐しい妥協の最初であつた。

優子はあまりの苦しさに、自分の生活を最も正しく解釋し眞實に理解して見やうとした。家政の仕事の上における自分の無能と、無能にも拘はらず家政の仕事を處理しなければならない自分の境遇と、良人へ對する愛と、良人の仕事に對する理解と、――それから最も大切な自分の藝術と、自分の自由と、自分の生がだん／＼に結婚によつて壓搾されてゆく苦しさと――優子は一つづゝ物を算用するやうに考へたり、書き付けたり批判したりした。臺所に立つても彼女は到底かゝる仕事を續けられそうにもない苦しみに壓倒されるやうになつた。然かも彼女の聰明は、家政事に沒入すればするほど、あらゆる事物に無神經ではゐられなくなつた。殊に男の被服、男へ供する食物の按配にも、優子はます／＼鋭敏になつて、その注意を自身に看過ごすことが出來なかつた。優子は自分のその聰明に、却つて逆に苦しまされるやうな場合が屡々あつた。

彼女はその矛盾の混惑から脱れる爲に、一人の生活に戻ることを幾度か考へた。自分が一人になれば、自分の家には自分の忠實な親切な母もゐた。現在の自分の負擔にあるやうな家政の仕事は凡てその母が爲てくれるのである。自分の着物についての面倒もなかつた。炊事も洗濯も一々自分を煩はすやうなこともない。自分は現在の新田のやうな地位にゐて、自由に働くことが出來るのである。自由に勉強をすることが出來るのである。優子は一人で居た頃の主權者であつた自分の生活を戀はずにはゐられなかつ

た。優子は一人の生活に戻ることを考へた。

「自分たちの愛は愛である。二人の生活が離れたからと云つてお互の愛が不幸になると云ふことはない。却つてお互の心を混亂に導く煩はしいものから離れることが出來て、靜な勉强をつゞけることが出來る。」

と優子は思つて見た。然しそれも理論だけの事であつた。半年でも一所になつたものが離れると云ふことは大變な苦痛であつた。その努力に打勝つことは優子には出來なかつた。優子は又いろ〳〵と考へ直した。「お前の現在の生活の全體は愛である。愛より外にはない。その愛の儘に濶く大きく生きることがお前の現在の生活の自然である。」斯う云ふ新な意義が、彼女の頭腦にいつぱいになつた時、優子は目が覺めたやうに自分の生活上の正しい信仰をはつきりと摑むことが出來たと思つた。愛の生活は美しく、愛の生活は純潔で幸福であると、彼女はそれを今更のやうに心で繰り返した。彼女はその信仰を逃がしてはならないと思つて堅く自分の魂で摑まうとした。自分のこれからの生活の意義は、すべてこの愛を中心として割り出すことに努めやうとした。

　男のために髮結化粧の時間を多く取られることも、彼女は一度は自分のその場合の感情を卑屈なものにして考へたけれ共、然しそれも男へ對する愛が自分に美を裝はせるのだと考へた時に、心が安まつた。家政の仕事に就くことも、男へ對する誠の現はれの一とつだと考へた時に、心が安まつた。家政の仕事を苦しく考へることこそ卑怯であつた。自分はあらゆる仕事を、最も明細にはつきりと爲分けて行かなくてはならない。然うする事が强い自分である。家政の仕事を完全に滯りなく運ばせて行つて、その上

にも自分は自分の生きてゆく道を開いてゆくのである。一方には妻の務めを盡し、一方には靈魂を持つ女として生きてゆく道を怠らず求めるのである。それは決して矛盾したものを自分の生活の上に齎しはない。自分の愛の充實は、その二た筋の平行線をある調和をもつて進んで行くことが出來る筈である。

――優子は然う考へた。

この考へは、優子の混亂してゐた思念を幾分か落着けることが出來た。樂しく家政の仕事に就いた後で、のんびりと緩漫な態度で書齋の仕事を取り上げることが出來た。その緩漫な心持にある愉快が潜んでゐた。彼女はまた至極當り前な心持で新田の機嫌を見ることが出來た。二人は夫婦のやうに愛し合ふことがだん〳〵に樂しまれてきた。良人の力に抱擁される妻の感情は、どこまでも柔順なもので然うして少しも利己的な何ものも含まれてゐない事が、彼女には非常に美しいことに感じられた。單なる友情といふやうな――却つて二人の生活を伴侶的に結び付けるつもりで斯うした情誼の名を付けておいたのだけれ共、その不確な情誼とは違つて、良人としての男の愛は健全で、そうして憧憬せずにはゐられないやうな力強さがあつた。優子はその力強い愛に魅せられるやうに思ふ時があつた。その愛に魅せられる時、優子は知らず〳〵男の感情に媚び甘えた。然し優子は、その自身の媚びを卑屈だとは思はないやうになつた。男の性と女の性とが自然に有する本能の慾が、斯うした微妙な力の差になつてその體の上に現はれてくる事に、優子は一層深い魅力を感じないではゐられなかつた。

三

二人の間には二年の月日が經つた。二人の生活は暫らく幸福であつた。彼女は愛の信仰に獅嚙みつい

て、頻りに凡ての不滿や不足を追ひ拂つてゐた。

然しその愛の信仰が、直きに彼女の片手から脱け落ちさうになつた。二人が相愛することの他に、二人はまた相爭はなくては濟まされない生活上の事實に幾度となく打つ突かつた。二人が相爭はなければならない時、彼女は直きに自身を悔いたけれ共、然しその都度彼女の胸に曖昧な紛紜の後の侮辱が幽に殘るのが癖であつた。彼女は苦い苦い感念でその侮蔑の殘つたあとを自身に見詰めた。

無論優子は、書齋の仕事を抛つてはゐなかつた。家政の仕事も長い月日の馴れから手際よく整頓してゆける樣になつて、優子は一層書齋の仕事に熱心に就くことが出來るやうになつた。結婚前からの彼女の藝術上の朋友は、この頃になつて又優子を訪問することが多くなつた。それは皆男の友達ばかりであつた。優子は眞面目な男の友達を持つてゐた。優子の立派な才能と優子の勝れた藝術とに敬意を持つて優子を精神的の友達としてゐた理解を持つた若い人たちであつた。その友達は、こゝに訪ねて來ても新田と話するよりは優子と話する方をよろこんだ。優子も又自分の藝術を好く理解してくれる其れ等の人たちを昔のやうに喜んで迎えやうとした。家政の仕事に隱れてしまつて暫らく世間と遠ざかつてゐた優子は、其れ等の友達と久し振りで會つて見ると、又新な興奮を覺えずにはゐられなかつた。友達は誰れも若々しい藝術の憧れにその眼が輝いてゐた。その輝きを見てゐることさへも彼女の胸は波立つやうな歡びを感じた。友達たちの新な欲求に燃えた言葉は、彼女の心臓に久し振りな高調な強い響きを與へてやまなかつた。藝術の憧憬の大空に、これ等の若い友達たちと手を取り合つて踊り舞ひたいやうな生き〳〵とした歡び――彼女はその歡びを味ひ盡して陶然となつて友達たちと別れた。

彼女はその後で藝術の憧れをすべて新田に浴びせかけて、そうしてその激しい興奮を新田によつて力強く靜めて貰はうとする時、優子は忽ち何も彼も暗黑になつたやうに失望しないではゐられなかつた。何故と云へば、その場合の新田ほど意地惡るく冷淡に見えることはないからであつた。新田は不快の頂點にあるやうな顏をして、不思議な沈默に落ちてゐた。あらゆる苦痛を嚙み潰してゐるやうな男の鋭い沈默が、彼女の憧憬的哀感にひた〳〵と潤つてゐるその胸を笞のやうに打つ時、優子は唯悲慘であつた。優子は喘ぐやうな壓迫の呼吸を押へて、男が何故そんな不快な顏をしてゐるのかを靜に聞くより仕方がなかつた。新田は然う云ふ時、

「あゝ云ふ友達たちと交際はないでも濟みそうなものぢやないか。」

と云つた。

「何故交際つてはいけないのです。」

「何故と云ふ事もないが、あなたが彼あ云ふ人だちと交際ふことが私には苦しいから。」

「あなたがそんな事を仰有るの。」

優子はその無理解すぎた男の言葉に驚いて、たゞ默つて新田の顏を見た。そうしてやがて靜に、

「あなたは少つとも眞面目に私を觀てゐらつしやらないのですね。」

と云つた。

「彼の人たちは私に取つて一番貴い、一番有難い友達です。何故私がその友達と交際つてはならないのです。可笑しいぢやありませんか。私はあなたのお友達に對してそんな抗議を云へる權利はないと思つ

てゐます。あなただつて同じです。何故あなたの方からそんな抗議が云へるのです。」
「抗議ぢやない。――あなたが若い人たちと話してゐるのが私には不愉快なのだから。」
「まあ、あなたは何と云ふ無智でせう。卑屈でせう。そうしてあなたは私を侮辱してるぢやありませんか。私の自由を認めないのですか。」
優子はもつと、散々に男を罵つた。そんな間違つたことはないと云つた。
「私に孤獨になれと仰有るの。一人になれと仰有るの。友達を持つことは出來ないのですか。」
優子は悲くなつて泣いた。新田がどんなにか慘酷に見えた。同情も理解もない岩のやうな男に見えた。彼女は男に對する憎惡でいつぱいになつた。
「私は間違つてゐる。けれども何うする事もできない。」
と新田は云つた。その醜い無智な嫉妬を新田は何うすることも出來なかつた。女の生きる道を解放するなどゝは思ひもよらなかつた。
「あなたが百人の友達を失つたつて孤獨ぢやない。何故孤獨だと云ふやうな事を考へるのだらう。私はあなたの持つてゐる百人の友達よりももつと澤山な理解と同情をあなたに對して持つてゐるぢやないか。あなたは友達を持たなくつても好い。一人で居ればいゝと思ふ。」
優子は猶一層激しく泣いた。何と云ふ淋しい人生だらう――優子は唯男を呪つて泣き續けた。
二人の愛がやがて二人を舊のやうにさせた。新田は自分の嫉妬を恥ぢて優子にあやまつた。其れは當然女を侮辱した事であつた。優子は又賑やかな人生に返ることが出來た。友達たちの熱烈な言葉を、彼

女は感激を持つて新田に自由に話すことが出來た。

「お互に解し會ふと云ふ事は、ほんとうに愉快な事だ。幸福な事だ。何事も優子に失望を與へてはならない。」

と新田はその時心に誓つた。

然し其れも一時であつた。優子が優子の友達に接した後、新田はどうしても其の不快を拭ひ去ることが出來なかつた。面白くない曇りを帶びた顔をして、新田は當分優子に話しかける事もしなかつた。

「あの人は矢つ張り苦しんでゐる。あの人は私たちの結婚がどんなものだつたかを忘れてゐるのだ。あの人は矢つ張り普通の男だ。女を新らしく理解することの出來ない男だ。」優子は一人して新田を罵つて見ることがあるけれ共、然しその底に、男へ對する優しい同情が雪解の水のやうに流れてゐるのを優子は知つてゐた。

彼女は暗い生活の絶望の底に屈まなくてはならなかつた。彼女には良人を恐れる何ものもなかつたけれ共、新田の不快なその顔付を見てゐることに忍びなかつた。

「あなたは私を信じない。私を理解しない。私を侮辱してゐる。」

と幾度も男の前で訴へて見ても、その嫉妬を制することの出來ない男の苦痛に、却つて彼女は同情を起して、そうして何も彼も許してしまひ度くなつた。その結果は、彼女は自然自分の友達たちを避けるやうになつた。何の罪もなく、彼女にもつとも親しかつた、若い藝術家たちは、何時ともなく優子から逐はれていつた。

「今、ちよつと用事が混んでゐて――。」

「今、來客があつて――。」

優子はこんな事を云つて、少しでも新田の苦痛の種を縮めやうとした。優子が友達に逢はない時、新田は如何にも罪の懺悔の中にゐる人のやうに面を垂れて優子に接した。然う云ふ時二人は一層深く愛し會つた。

然し優子は淋しかつた。「何うすれば好いと云ふのだらう。」優子は絶えずいら／＼と自分の周圍を撥き探るやうに見詰めた。自分の生活の廣さを願ふ優子は、反對に益々小さく狹められる事を悲しく思はずにはゐられなかつた。唯一人、新田にばかり寄り添つてゐなければならないと云ふ事は、優子にはあまりに窮屈であつた。現在の優子には新田の他には誰れをも愛する心はなかつたけれ共、彼女はその周圍に藝術上の友達を求めないではゐられなかつた。彼れ等の思想は彼女の思想にいろ／＼な影を與へ、然うして彼女の沈んで行かうとする藝術欲に新な欲望を促した。その人たちは優子に取つては刺戟であつた。優子はその大切な友達さへも新田の爲には失はなければならなかつた。

新田自身にも多くの友達があつた。無論それは異性ではなかつた。新田はその人々と會合もし訪問もしてゐた。今優子がそれ等の友人と新田が絶交するやうにと云ふ樣な事を申出でたとして、新田はそれに何んな返事をするだらう。

「あれは私の大切な友人だ。」

と云ふに違ひない。男も女も同じではないか。何故新田自身は友達を求めることが出來、自分自身は友

逢を求めることが出來ないと云ふのだらう。

「自分の友達も同性であつたら、何の問題も起らないに違ひない。」

優子は斯う考へてから、眞の友達としたいやうな人たちが、自分の同性のうちには一人もない事を思つて優子は落膽した。

新田はその頃、外國小說の長い飜譯にかゝつてゐた。二人の生活費の爲には、新田もいろ〳〵な仕事を爲なければならなかつた。優子は無理に良人から養つて貰ふと云ふことは絕對に女の屈辱だと考へてゐるので、自分も勉強半分、易しいところを拔いてその飜譯を手傳つてゐたりした。夜になれば疲れた新田を慰めることも怠らなかつた。晝の時間の半ばは、家政の仕事で追はれてゐた。新田も優子を慰めた。二人が新田の書齋に向き合つて椅子に腰をかけ、お互に飜譯の意味を述べ合つて敎へられ助けられながらペンを走らしてゐる時、窓の外には六月の靑あらしが吹いて、淸新な酒のやうな木の香りが室內に滿ちたりした。二人は誠に幸福であつた。殊に新田は幸福であつた。彼女には才能があつた。そうして怜悧であつた。彼女は繕ふところもなく溫和しやかであつた。彼女は又何でも器用であつた。そうして仕事を整理する手際に長じてゐた。彼女の愛の笑ひは美しかつた。彼女の周圍からは男の友達の訪問も絕え〳〵になつて、彼女はこの頃では全く一人になつた。彼女の肉親の母親さへも彼女から遠ざけて了ふことが出來た。そうして彼女は健全に勤勉に自分の傍にゐて自分の仕事を手傳つてくれる――新田は幸福な自分たちの生活だと思つた。

「私は決して他の女なぞを愛しはしない。」

と新田は優子に云つた。

四

優子はだん／＼に身體が不健康になつてきた。何所と云ふこともなく身體に故障があるやうな氣がした。胸が支へたり頭痛がしたりして、殊に腦がいつも病的に混濁してゐた。新田は優子が運動を取ることが少ない爲だらうと云つたが、優子は相變らず外出する氣にはなれなかつた。

優子は自分の生活がこの頃いかにも落着いてきた事を考へて見て、恐しく思つた。それは丁度痼疾が慢性になつた病人に見るやうな落着きであつた。身内に病がありながら、その病に少しも煩はされなくなつて來たと云ふのは、恐しい事實であつた。彼女は決して幸福ではなかつた。それは二人の愛が一致した時、優子は無限の幸福を感じるやうに思ふけれ共、その幸福の感じはやがて恐しく不幸な感じに變つて行つた。そうしていかなる場合にも利己的に傾いてゆく新田の愛を、優子は鋭く見出さずにはゐられなかつた。彼れの境遇の事情が、無意識の間に女に對する要求を利已的なものにさせるのだと云ふ同情は優子には充分ありながら、その利己的な男の愛の態度は優子に絶えず不快を起させた。

彼女の愛の信仰は全く突き落されてしまふ樣な時があつた。愛の信仰は彼女の心の上からだん／＼に色を褪まして行つた。彼女が愛の信仰を守らうとする時には、一方の利己的な愛をも自分が抱擁してやらなくてはならなかつた。優子には到底そんな事は出來なかつた。自分の生活の意義を、愛を中心としてそこから割り出さうと努めた事は、あまりに馬鹿々々し過ぎた。自分は必ずしも愛さなくてはならないと云ふ事はない。自分は自分の爲にあの人とも戰はなくてはならない事を覺悟しなくてはならない。

愛の信仰なぞと云ふ事は自分を墮落させる事だ。愛の信仰と云ふやうな曖昧な教義的の名の下に、自分自身を失つてゆくやうな薄弱なことをしてはならない。と優子は考へた。斯うした固定した愛のうちにばかり生きる女としては、彼女は稍々大き過ぎる野心の世界をその魂のうちに持つてゐた。彼女は何かしら自分の周圍を打破らなくてはゐられないやうにその心が焦燥ることがあつた。

　優子は良人の仕事を助けることを止めてしまつて、自分の書齋に隱れるやうになつた。そこで優子は一心に自己の藝術の創作に耽つた。然し恐しいことは、彼女の二年近くの家政上の習慣が、神經的に彼女にさま〴〵の用事を促さないではおかなかつた。机に向つてゐる彼女の頭腦に、それ等の仕事の順序が不用意に妄想的に突發してきて彼女を苦しめた。それから又、彼女の心からすつかり新田を忘れてゐると云ふ事も出來なかつた。新田が外出してゐる間だけは彼女は安靜だつたけれども、新田が家にゐる間は、彼女は何かしらその方に注意を惹かれ思索を妨げられた。

　彼女の創作の筆は少しも進まなかつた。書齋にゐればまるで放心してゐるやうな日が續いた。優子は終に、自分は自分の世界を創造することの出來ない人間だと考へて、一人で悲しんだりした。彼女はだん〳〵にヒステリー患者のやうな身體の狀態に落ちていつた。彼女は時々激しく泣いたり怒つたりした。新田のその全身に溢れる活動の力を感じることさへ、優子には嫉ましかつた。そうして自分の生活を絕えず浸蝕してくる男の目に見えない權威の力が、彼女には唯憎かつた。

　優子は男に突つかゝつたり、男に反抗したりすることが多くなつてきた。何の根據もない事で亂暴に無智に男に喧嘩を賣ることに快感を覺えるやうになつてから、彼女はその瞬間だけは男を屈服させたや

うな誇りを感じた。彼女が然うした無智な感情を弄ぶやうになつたことを、新田は彼女の今まで隱されてゐた性質の癖がこの頃になつて露骨にされて來たものだと思ひ誤つてゐた。新田はその女の我が儘を咎めないではゐられなかつた。もう二人の間には正しい理解も、精神的な何ものも失くなつて了つた。理解しやうとする事さへ、二人には屈辱そのものであつた。最も高い生の道を歩んで行かうとして約束し理解し合つた最初の二人は、今ではお互に下劣な低級な人間として取扱ふやうな侮蔑をお互に投げ合つた。

「結婚が惡るいのだ。」

と云ふことを新田も優子も考へずにはゐられなかつた。二人の結婚の間には最初考へたやうな靈的な何物もなく、精神的な何物もなかつた。唯肉體の結合があるばかりであつた。その印象ばかりに由つて二人は漸つと動物的の愛を續けて行くのだ——優子は斯う極端に考へることさへあつた。

「全く妻の服從、妻の忠實、妻の貞淑、妻の謹愼は、結婚生活を美化する大きな手段として特に選ばれた生活の作法の一とつである。女の道徳と云ふよりも結婚生活の作法である。その作法を學んでその作法の影にかくれて居なければ、到底結婚生活の暴露の羞恥に堪へては行かれない。」

と優子はある日、反感的に紙の端に書きつけた。

然し聰明な優子は暫らくして、自分自身の生活をもう一度取り直すことに努めた。現在の生活を捨てることが出來なければ、その生活を好く自分に適應させて行くより仕方がないと彼女は考へた。彼女は自分が一と度踏み込んだ女の運命に從つて、その中から更に自分を新らしく求めて行かうと決心した。

それは身惨めな決心であつたけれ共、彼女はそれによつて暫らくの間の精神の方向を定めることが出來ると思つたのであつた。

彼女の努力は無駄にはならなかつた。彼女が漸く書き上げた一とつの評論が發表されると、忽ちそれがある一部の青年たちに推賞されて、評判になつた。結婚について囚はれたる婦人の生活を痛切に披歴したその一文には、彼女の思索の徹底と、表現の率直と、感情の熾熱とがよく現はれてゐた。若い彼女が他の女たちとは違つて、兎に角その思想の上に強い自覺の閃きのある事を云つて男たちは彼女を有望だと云ひはやした。優子はその一文が發表されてから、又多くの人たちの訪問を受けた。一度彼女から遠ざかつた昔の友達の藝術家もやつて來た。彼女は其れ等の人々に新らしく接することに歡びを感じた。不思議なことには、彼女に向つてある特別な親しい感情を向けやうとする男なども彼女の周圍に出てきた。彼女はそれ等の人に對しても侮蔑などは感じなかつた。

家庭の事情は、それと同時に却つて好くなつてきた。新田も、優子が結婚後になつて初めて自己の仕事に就くことが出來初めたのを喜んでゐた。優子もそれを見て幸福を感じないではゐられなかつた。優子の生活は輝いてきた。彼女に取つては凡てが誇りであつた。家政を見ることの彼女には嘗て覺えないやうな誇りを感じさせた。

「女が一方に家政を整頓しながら、片方では男と同じ歩調で社會の上に立つて行かうとする事は、確に男よりも二倍の仕事をすることになる。力の差は兎に角、その量の上では女の方が男より優越する。」

斯う云ふ誇りが優子にその活動の力を一層増加させた。

五

二人はまた、靜に愛し合ふことが出來るやうになつた。自分の日常の生活からは何にも煩はされる事なしに、優子は絶えず自分の創造の世界を見詰めてゐることが出來た。あれ程重大に考へてゐた家政の仕事も、彼女はこの頃は好い加減に投げておく事が出來た。

丁度優子が、自分に特別に親しまうとするその周圍のある男から朧に誘惑を感じた時、優子がそれに打勝たなくてはならないと思つて苦しい努力をつゞけてゐる時であつた。優子は自分の身體に異常のあることを見付けて、それを長い間心にかけて暮らした。そうして其れが懷妊だと知れた時に、優子はまるで思ひ設けない事實に打つ衝かつたやうに驚いた。優子はその日一日自分の室に入つて泣き暮らした。

「もうこれで凡てがお終ひだ。」

と優子は思つた。悲しい絶望――優子は自分たちの間に子供なぞは決して出來ないと思つてゐたその愚かしさを思ふよりも、この後の自分の生活の上に又新な責任の殖えたことを何時までも何時までも絶望的に考へてゐた。

「自分はまた、もう一とつ善良な母親になることを考へなくちやならない。母親の責任を考へなくちやならない。」

優子のその絶望には、新田は少しも同情を持たなかつた。新田は自分たちの間に小供の生れることを喜んでゐた。

することを嬉しがつていらつしやるんですね。」

優子は新田に泣きながらこんな事を云つた。新田は默つてゐた。小供に就いての責任は自分も優子と同じやうに考へなくてはならない。唯自分には産むと云ふ苦痛がないだけだ。然しそれは何うすることも出來ない。――新田は殆んど優子の眼には陰險な男に映つて見えるほど、それに就いては何も云はなかつた。

優子は又、人々に對して自分の身體を恥ぢた。殊に、かの誘惑を感じる男に對して優子は一層深い羞恥を感じた。それは何故だらうか。優子はそれを考へる事さへ厭であつた。「子供が出來たら、直ぐに何所かへやつてしまふ事を約束して下さい。私たちには小供より大切なものがあるぢやありませんか。」

優子が斯う云つた時、新田はそれに同意した。子供を養ふと云ふ事が、優子の書齋の仕事に邪魔になるならば然うしてもいゝと、新田は云つた。新田は無論まだ生れないその子供よりも、優子の方を愛してゐた。

「何故女が子供を生まなければならないのだらうか。」

優子は女のその自然の運命を呪ひ盡した。新田に對する憎惡が、又彼女の感情を荒くしてきた。優子は捨鉢に毎日々々外を出歩いた。自分の身體を何かに打つ突けて破壞して了ひたいやうな苛々しさが、彼女を少しもぢつとさせて置かなかつた。

然し、彼女の身體は一層健全であつた。胎内の子は、母の苦悶も知らずに月々と育つていつた。胎内

の子は母の愛を強請むやうに、微妙な愛の溫度をその胎内から母の感觸に傳はらせやうとしてゐた。優子は度々その感觸から刺戟を受けた。

「自覺——結局それは自分が女だと云ふことを自覺することだ。」

優子は中々、その絶望から救はれることが出來なかつた。彼女は自分の爲かけた仕事も抛つてしまつた。然う云ふことには頓着なく、十ヶ月と云ふ月日は直きに優子の目前を過ぎて行つた。

可愛いらしい男の子が生れたのは、二人が結婚してから三年目の冬であつた。

新田はそれに好い名を選んだ。生れたら直ぐ他に遣つてしまふ事を主張してゐた優子は、その子が生れてから、忘れて了つたやうに彼女は其れを云ひ出さずにゐた。

「母の責任。」

優子に取つてはそんな事は何でもなかつた。愛するものを愛すると云ふ他には、今の優子には何の考へも起つてはこなかつた。愛するものを愛することで、彼女の感情はいつぱいに張り詰めてゐた。ちつとの間も、彼女はその小供を人の手に抱かしておく事さへも出來なかつた。美しい自然の愛に彼女はすつかり掩はれて、唯その愛らしいものを見詰めてゐるより外には、何の感念も浮んではこなかつた。

優子はその小供の爲に守りを一人おかなくてはならなかつた。優子の毎日の仕事は一層殖えてきた。けれども優子は然う云ふ仕事に少しも煩はされなかつた。小供の爲には夜も碌々眠れないで過ごすことは珍らしくはなかつた。小さなものゝ苦痛の表情を、その小さな顔の上から見て取ることに、彼女の注意は一時の間もおろそかには爲れなかつた。小さなものに對するあるたけの注意、あるたけの心遣ひ、

あるたけの用心とで、彼女は自分の上のことなどを考へてゐる暇はなかつた。睡眠不足の爲に優子の眼は血走り、その顏の生地は恐しく荒びて蒼白になつてゐるけれ共、彼女は自身に少しも疲勞などゝ云ふことは感じてはゐなかつた。新田は優子のその身慘めな朝夕が見てゐられないやうな氣がして、小供を他へやる事を云ひ出した。

「どうして、他人の手などに渡しておかれるものですか。私は自分で育てます。ほんとうに可愛いゝのですもの。母の責任とか母の犧牲とか、そんなものは全で超越しちまつてゐます。私はもう何も考へることはない。」

と優子は云つた。

六

また彼女の魂が野心の世界に目覺めてきた。優子は可愛いゝ我子供をその手に抱いてゐるばかりでは彼女の生活に對する欲望が不足になつてきた。殊に新田が今までよりも二倍に働かなくてはならなくなつたのを見て、然うして其の努力を見て、優子はぢつとしては居られなかつた。たとへ物質上の事だけでも、優子は新田を助けなくてはならないと思つた。

優子は赤兒を抱いて自分の書齋に入つた。だが赤兒は始終優子の仕事の邪魔をした。優子は自分の創作欲に興奮してゐる時、その愛らしい障害物を、憎むことも罵ることも出來なくなると、唯赤兒を抱きしめて涙をこぼした。何とも知れない焦燥の涙が彼女の眼から落ちてくると、その後はまるでぐつたりとして、彼女は他愛もなく赤兒のその小さな生命を抱愛した。

子供を觀る上には守りなぞは何の役にも立たなかつた。却つて世話が燒けるばかりであつた。新田はせめてその子供の勞だけでも除くやうにと、彼女の女親を呼ぶことを相談した。母親は好い人であつたけれ共、新田や優子の生活をほんとうに理解することも出來るやうな人ではなかつた。世間の人は誰れも自分と同じやうな心持で暮らしてゐるものだと思ひ込んでゐるやうな女であつた。新田も優子もその母親には始終苦笑ばかりで接してゐなければならなかつた。

母親は直ぐに娘と孫の傍に來たけれ共、赤兒を育てることに不馴れな娘に對して、妙に躾し付けがましい權利を母が持つやうになつたのが優子には面白くなかつた。優子の考へてゐる養育の法と母親の考へてゐる養育の法とはまるで違つてゐた。優子はそんな事で毎日母親にぐづ〳〵云つたり、肉親の間の我が儘が手傳つて優子は母親に突つかゝつたりした。その間に挾まる新田の感情も、優子には面倒であつた。

「あれが新田の母親であつたら、自分はもつと我慢するに違ひない。」

と優子は考へながら、母親にも歸つて貰ふことにした。母親も長くこの家に手傳つてはゐられなかつた。優子の兄弟の孫たちを見てやらなければならない務めが母親にはあつた。

優子はまた子供を自分の傍に引きつけて置くやうになつた。赤兒を背負つて本を讀んだり、赤兒に乳を吞ませながらペンを走らせてゐたりするやうな事は珍らしくなかつた。赤兒は丈夫に育つて行くのだけれ共、その小さな身體には時々熱が出て若い母親を驚かしたり、その要求が少しも分らずに唯泣きつゞけてゐるやうな身慘めな様子を見せたりした。丁度優子が結婚してから暫らくこの書齋の仕事が手に

付かなつたと同じやうな狀態になつて、優子の思ふ半ばだけでも自分の仕事は出來なかつた。

「自分には一體どれだけの時間があるのだらう。」

優子は又、自分の時間を考へるやうになつた。家政の仕事だけに煩はされてゐた時とは違つて、赤兒に煩はされるこの頃は、何時から何時までと云つて自分の時間を制限することも出來なかつた。唯不用意にある隙をその赤兒の上から盜んでくるより仕方がなかつた。然うしてその隙に自分の眞實の仕事をするより仕方がなかつた。

然しやがて彼女の生活の上に第二の習慣が入つてきた。最初家政の仕事を好い加減に投げておく事が出來てきた時と同じやうに、赤兒へ對する注意も好い加減に投げておく事が出來るやうになつた。何でも好い加減でよかつた。彼女は赤兒に接してゐる時にある思索を求めることが出來るやうになり、臺所に立つてゐる時に想を構へることが出來るやうになり、洗濯をしてゐる時に想を纏めることが出來るやうになつた。赤兒の泣く聲を耳にしながら彼女は平氣で机に向つてゐる事が出來るやうになつた。

それは誠に不思議な生活の力ではないか。彼女は自分の二重三重の生活を等分し、調和し、區分し、隔絕し、調整することが出來るのである。傍から彼女の生活を觀る時は、それは隨分悲慘であつた。彼女はそれだけの家政の仕事を負擔しながら、以前よりは却つて多くの創作を發表したり評論を書いたりしてゐた。彼女は必然の女の運命に對して、其れを逆に切り拔けて行かうとする努力と意地ばかりでその禁縛の中で悶搔いてゐるやうに見えた。身慘めな生活、哀れむべき生活——然し彼女自身では然うは感じなかつた。子に對する母の誇り、良人に對する妻の權利、それから又、自身に對する藝術の誇り——

彼女は又その誇りを誇りと解釋することを避けやうとした。それは誇りではなくつて愛と名付くべきものであつた。子に對する愛、良人に對する愛、そうして自身に對する愛であつた。すべてが愛であつた自分の生活が愛であつた。自分の生活の力は愛の力であると、彼女は考へてゐた。

彼女は自分の愛の感得が、如何にも廣大無邊であるかのやうに考へられてゐた。嘗て自分の考へた愛の信仰とは違つて、今度は自分自身が愛の權化であるやうに解釋されてきた。彼女は歡びに輝きながら、自分の世界を創造することにも怠らなかつた。

優子のこの生活の問題は、彼女に取つて再び永遠に繰り返されなくつて濟む問題だらうか。彼女には續いて第二の子も出來るだらう。それから又、彼女が第一の子を懷姙してゐた當時、ある男の誘惑に會つたと同じやうな誘惑が彼女を襲ふだらう。彼女の藝術的情緒は、あらゆる物の魅惑、誘惑を感じないではゐられないに違ひないから。――彼女の創造の世界は、彼女が突き入つて行けば行く程無限に無際限に廣がつて行くだらう。その時に、彼女は又現在の愛の生活と戰はなくてはならない。今までの生活の上に時々閃いたやうな小さな戰ひではなくつて、もつと大きな戰ひが彼女の魂を强迫するに違ひない。

然うして、哀れむべき女の必然の運命から到底逃れられないと知つた時、彼女は又新奇な「愛の生活」を叫び出すだらう。



吹雪の野を

中村星湖

「都會生活ッて奴は……これは申すまでもなく……田舍にゐて考へた程華やかでもなければ、樂でもありませんな。若い人達が「東京へ」「東京へ」と、何でも東京へ行きさへすれば新らしい運命が轉がつてゐるやうに、または榮光が門を開いて待つてでもゐるやうに思つて、闇雲出掛けて行くのは間違つてゐますよ。東京といふ所は、たゞ忙しいばかりです。人過ぎてお互ひが喰ひ合ひをしてゐるやうな所です……」

「それはさうでせう。けれども人過ぎると言ふ點、生活難といふ點では田舍だつてひどいものですぜ。十年毎に一と戰爭やるといふ段取りで、日本も世界的には可なり有名になつたけれども、それと逆比例に、地方の生活は一と戰爭毎に、といふよりは一年々々に困難になつて來てゐます。」

「さうらしいですね。それは一つは戰爭の爲めの經濟上の創痍が癒え切らないうちに、後から後からと絕えず打擊が續く爲めでもありませうが、も一つは人口の繁殖

率の增加といふ事にも原因してゐるのでせう。……これは一家の經濟狀態に就いて考へれば一番よく解る事ですが、フランスなどのやうに人頭稅でも掛けられなければ氣付かないのだから情けない。それに氣付いて、といふよりは貧乏の爲めに餘儀なくされて墮胎したり嬰兒を壓殺したりすると、直ぐに罪に問はれるのですからこれも出來ない。そんなら貧乏人の子供をば政府で收容して育てゝくれゝば好いのにそれもしない。しないのではない。政府も貧乏だから出來ないのです。避姙法なども知つてゐる人は行ひつゝあるでせうが、一般的には行はれてゐない。此儘ならば、日本人は何處か人口の稀薄な土地へ押出して行くより外はなくなります。』してはならない戰爭までしなければならなくなるのです』。

「ハヽヽヽ、すると侵略主義の是認といふ事になるのですね。」

「さうです。禁欲主義の生活か、もしくは欲望の結果を斬り棄てるやり方かを取らない限りはさうなるより外はありません。そして人間が昔の野獸に皈つて喰ひ合ひをして勝つた者が殘り敗けたものが亡びて行くだけの事です……さうです、僕は一體戰爭つて事は大嫌ひです。先頃の靑島の占領などをも今なほ腹立たしく感じてゐます。それにも係らず侵略主義を是認しなければならない。……非常な矛盾ですよ。この矛盾を解決しない限り、人間は墮落して行くばかりです。すべての國民は無自覺に盲動的にたゞ生きてゐるといふだけです……。」

病人の弟を連れて歸鄕する途中の馬車で、一造はふと昔の小學校の敎師に出逢つた。別れてから最早二十年にもならう（一造が十一二の頃にその敎師は村の學校を去つたのだから）それだのに、その敎師が、すこし瘠せて目元が柔和になつたゞけで、餘り年寄つて見えないのが一造には不思議であつた。昔

は酒の好きな怒りッぽい人で、氣に喰はないと、よく生徒の襟を摑んで柱へ叩き着けたりした。

「お久り振りです。」と一造はその人の前で懐しい氣持で挨拶した。

「ハ。」と言つて首をすこし動かしたゞけで、洋服にインバネスを着たその人はやはり洋服姿の一造を見守つてゐた。

「私はK――村の矢崎です。」と一造は對手の記憶を呼びさます爲めに斷るやうに言つた。

「ハア。」とやつと氣付いたらしくその人は笑顔をした。「どうも暫くでした。今日東京からですか？」

「さうです。」と一造が答へた。「一番に乘る積りで急いだのですが、四五分の違ひで乘り遲れまして、二番でやつて參りました。新宿で汽車を待つてゐた間も、隨分寒いとは思ひましたが、こんなだとは思ひませんでした。」

「今年はこちらはいつまでも寒い事ですよ。」

「もう三月も末で、東京では櫻が咲くのを待つてゐる時分ですから、こちらも暖かからうと思つて、襟巻なんか忘れて來た始末です。」

馬車の窓からはまだ冬の儘のやうにいぢけた麥畑や、枯枝ばかりの桑畑や、ところどころに雪の殘つてゐる山々や暗く曇つてゐる空が見えた。

「お孃さんが東京に行つてゐらしやるやうに記憶しますが……」と一造が言ふと、「私の……娘ですか？ えゝ、娘も行つてゐるが悴も行つてをります。」と敎師は答へた。そんな事から段々話がはづんで行つた。

乘合つた客達は大方は此地方の人らしく、中には一造の父親を知つてゐる年增の女もゐた。彼は我知

らず熱して議論をするやうな調子で敎師と物を言つてゐたが、ふと窓を掠めて雪が降り出したのを見た。

「あゝ、たうとう降り出した。」

「寒いわけでした。」

「實に魂消るなあ、今頃雪が降るなんて。」

でも、此地方の人々には雪の降る事位ゐは別段の驚きではないらしかつた。一造も此地方の氣候には子供の時から馴れてゐたので、あたりを薄暗くしてそれ自らは白く明るく降る雪を、一種爽快な氣分で眺めてゐたが、病體の弟が此寒さの爲めに風邪を引きはせぬかと思ふ掛念が急に彼の話の腰を折つた。混み合ふ乘客の間に身を潛めるやうにして腰掛けてゐる弟の良次は、唇の厚い口をすこし開け氣味に、當て途も無い眼つきで默り續けてゐた。

道路も、野も、山も、見る間にまつ白になつて行つた。風があるので雪は渦を卷いて降りしきつた。——時ならぬ雪だから今に歇むであらう……と思つたのも空賴みで、馬車がY——町の會社の前に着くまでも降り續いた。そして何時歇むといふ氣色も見えなかつた。乘物のうちは兎に角、徒歩で步かねばならぬこれからが一造には一層の心配であつた。一造は洋傘を持つてゐたが弟にはその用意が無かつた。よし傘の用意はあつたとしても、こんな天氣を犯して病人を連れて行くといふ事は無謀の極であつた。

「仕方ないから此地へ宿らう。」と彼は馬車から降りると吹雪の中で弟にさう言つた。「けれど今夜々中降り續くと明日がまた案じられる……。」

そこへ敎師が近づいて來た。
「何處かへお休みですか？私はちよつと寄る所がありますから……」
さう言つて敎師は別を告げて、橋を渡つて町の往還をのぼつて行つた。
「お前寒いだらう……まあ、早く待合へ入れ、己はちよつと俥を訊いて來る。」
一造は橋の袂に一臺の襤褸俥を見付けると、さう言つて良次を小さな共同便所のやうな形をした待合所へ追入れて置いて、駈足で俥の置いてある家まで行つた。
「大急ぎで俥を二臺やつて貰へまいか？」
彼は外套の胸に降りかゝつた雪を拂ひながら言つた。
「どちらまでゞすね？」と汚い內儀が現れた。
「F——村まで……二臺あるかね？」と彼は念を押した。
「へえ、二臺だけある事はありますが……」と言つて內儀は炬燵にゐた子供に叱るやうな調子で、「われ早く行つて角屋にお父がゐるから聞いて來う——」と吩付けた。
「こんな日だからすこしは高くも好い、是非やつて貰ひたい。わしはあそこの待合にゐるから……」
さう言つて彼はいくらか安心して弟の側へ引返した。
弟は待合の土間に佇んでゐた。
「寒いか？」彼は弟の顏色を見ながら言つた。
「いゝえ、そんなに寒くはありません。」と弟がのろ〳〵した調子で答へるのへ押被せるやうに、「風邪を

引かないやうに意氣んでゐろ。俥は幸ひ二臺あるさうだから、それの仕度の出來るまでだ。」と彼は言つた。

彼は斯うしてゐる間も、何處か暖かい家で休まう（それは彼自身の爲めにでなくて弟の爲めに）と思つたが、その時、もう使にやられた俥宿の子供が橋を渡つて歸つて來るのが、渦をなしたり飛白をなしたりして降つてゐる雪の間に見えたので、直ぐにまた俥宿へ走つて行つた。

「何うでした、行つてくれますか？」と彼は息氣を切らしながら訊いた。

「二臺ある事はあるですが」と内儀が無愛想に答へた。「一臺はもうお客がきまり、一臺の方は曳子が腹が痛いつて申しまして……。」

「ぢやダメですか？」と彼はがつかりして言つた。「すこしは高くても好んだがなあ。」

「お氣の毒ですけれど……。」

何時までそこに立つてゐたッて仕方がなかつた。

「ほかには無いでせうか？」

立去る際に彼はさう訊いた。

「俥は此町に、こゝに二臺あるきりですよ。乘合馬車ならもすこし下にありますが……」

「有りがたう。」と言つて彼は急いで待合室へ戻つた。乘合馬車がある事は先刻鐵道馬車の中から見て知つてはゐたが、二人で買切りは贅澤のやうに思つた。しかし此場合乘合馬車にするより外は無かつた。

——なぜこんなに都合が惡いのだらう？

新宿で汽車に乘り遲れた時にも、途中で雪に降り出された時にも浮んだやうな考へが彼の胸を突上げて來た。汽車に乘る時には電車が案外に手間取つたので、彼は始めから間に合はないやうな氣がしてゐた。もし間に合へば弟の病氣もきつと癒る……が、もし間に合はなければ……といふやうな事を考へてゐたのであつた。日は暮れさうなのに雪が降り出した。俥は二臺ある事はあるが、一臺はもう客がきまり、一臺の曳子は病氣だといふ……今日一日の出來事がすべて、何かの凶兆であるやうに思はれた。

――そんな馬鹿な事があるものか！と心で自分を叱りながら彼は佇んでゐる弟を見た。そこにはいつもの表情に乏しい大きな顏があつた。

「生憎、俥はダメだ。ガタ馬車を一つ掛合つて來るから待つてゝくれ。」

彼はさう言ひ棄てゝ馬車會社の黑い柵を出て行つた。十五六間降つた所の或家の軒下にガタ馬車が二三臺淺黃染の汚れた幕を垂れたまゝ置かれてあつた。彼は其家の入口を入つた。まだ年若な女房が挨拶した。

「さうですね、今歸つて來たばかりですが、聞いてみませう。」と女が言つた時には、また斷はられるのかと思つたが、買切りの上に餘分に出すと言ふと、兵隊の穿くやうなカーキ色のゲートルを着けた若者が、裏から、多分廐からであらう、土間の入口まで廻つて來た。そして二言三言女と何か言ふと、「ぢや參りませう」とハッキリ答へた。

「馬が疲れてゐるだらうから、豆を餘分にやつておくれ。」と女が若者に言つた。その言葉振から女が主人で若者は雇人である事が察せられた。それと同時に、馬をいたはる女の言葉を、一造は異常な感動を

以て聞いた。

――豆を餘分にやつておくれ。…まあ何といふ美くしい言葉だらう！馬は彼等の商賣道具であるからと言ふ以上の、或尊い、廣い、大きな感情がその言葉に含まれてゐたやうに彼は思つたのである。實際、女は馬車宿の內儀と見られるのには、體の動かし方までが餘りにしなやかであつた。

彼は喜んで待合室へ弟を連れに行つた。そして鞄などを提げて吹雪の中を引返す途中、もしや弟が咳をしはせぬかと聞耳を立てながら歩いた。兄弟がガタ馬車屋の土間に入つた時には、どちらも可なり雪を浴びてゐた。

『己は靴だから面倒臭い。お前はあがつて當てゝ貰へよ。』圍爐裏に焚き火がしてあるのを見ると、一造は外套の雪をはたきながら良次にさう言つた。

『サア〳〵、どうぞお當り下すつて。』と內儀が言つた。

良次は、『はいッ』と言つてそこへ上つて行つた。

一造はホッとした氣持で上框に腰掛けて煙草を燻らしはじめた。これでF――村まては安心だ、あそこまで行けば無論日は暮れる、そしたら今夜は妻の家へ宿るんだ、明日はまた明日の天氣模樣だ――とそんな事を考へながら。

端折をして白い湯布を見せた內儀が暗い家のうちを往つたり來たりして指圖をする間に、座布團や行火まで運び込まれて、すつかり馬車の仕度は出來た。

門へ出てみると、人通りも途絕えた程に雪はます〳〵降りしきつてゐた。やがて兄弟は馬車へ乘つた。

昇降口に垂れた幕には『絲繭商一同』と染め拔いてあつた。その一同の中には多分自分等の父親も入つてゐるであらう、そして夏の炎天とか雨の日風の日とかには父親も幾度か此馬車に乘つたであらう、と一造は考へた。內儀は側まで來て幕の紐の外れてゐるのを直したり、捲れ上がつてゐる部分を下げたりした。

暗室のやうな車室に、一造と良次とは行火を挾んで相對して腰を掛けた。そこへ、馭者台のうしろの厚い幕の隙間からかすかに光が差した。

ピュッ、ピュッと馭者が口笛を鳴らすと馬は靜かに動き出した。間もなく橋の上を過ぎた。F――村へは、普通は橋手前から右へ入るのであるが、そちらは石ころ道故、馬車は遠廻りをして町の往還を上るのらしかつた。往還と可なりの傾斜なので馬車はゆつくり〳〵動いた。

『どうだ、寒くはないか？』

『いゝえ、すこしも寒くはないで……。』

『人力でなくて却つて仕合せだつたな。火まで入れて貰つたから。』

そんな簡單な會話の後、二人は默つて靜かに馬車に搖られてゐた。幾年振りかで歸つて來た一造は、多少の興味を持つて町の樣を覗いたが、降る雪、積る雪の白が眼に入るだけであつた。兩側の家には雨戶などを閉てゝゐるのが多かつた。

『此町にも近頃は藝妓の置屋などが出來たつて話だねえ。ます〳〵繁盛するわけだね？』と彼は馭者に聲を掛けた。

『いゝえ、戰爭からこつち、絲價がずん〳〵下るばかりだから商賣はまるで休みです。それに寒いうちはから話になりませんや。』と馭者が答へた。

『やつぱり夏場、登山客のある頃だけかね？』

『へえ。』

彼と馭者との會話もそれでポツリと切れてしまつた。馬蹄と車輪の音だけは聞えるが、それ等とて進むのやら退くのやら解らない位ゐであつた。たゞひとり雪を吹き捲く富士颪のみが折々天地の寂寞を破つてゐた。

『ヤイ乘せてくれ、××屋の前までゞ好えが……』と急に聲を掛ける者があつた。

馭者はぎゆつと手綱を控へた。

『買切りだがお客樣に訊いてみべえや。』と言つて、馭者は外套の頭巾を被つたまゝの顏を幕の間から差入れた。

大きな風呂敷包を脊負つて番傘をさした商人體の若者が、高足駄で步きなやんでゐるのを見ると、『乘せてやつたらいゝ。』と言つた。

『買切りなら仕方がない。』と馬車を離れようとした若者は『それは濟みません。』と言つて直ぐに幕を外して、先きに荷物と雨傘とを押込んで置いて、着物の雪を拂ひながら入つて來た。傾斜はます〳〵急になる、荷が嵩むしいた爲めであらう馬車の步みは一層遲くなつた。その若者が商人らしい世辭を殘して降るまでには大分手間取つた。

「この分ては日の暮れまでにはF――村へ着くまい。」

餘り愚圖々々してゐるので、一造ははら立たしくなつてさう言つた。

「いゝえ、大丈夫です。もう大鳥居ですから。」と馭者は答へた。

大鳥居から右に入ると道は割合に平らであつた。「餘り積まないうちに急がせろよ。」と一造が急き立てると、馭者はそれに應ずるやうに口笛を吹いた。そして馬車が小走りに走り出したと思ふと、「この先き××の渡邊さんが行つたが、追着いて乘せて行つてくれろ。」と聲を掛けた者がある。

「この馬車は買切りで。」と馭者が拒んだが馬車はぴたりと止まつてしまつた。

「買切りでも好えわ。知つてる人なら己が賴む。どれ。」と言つて不躾に幕の下から五十恰好の阿爺が首を突込んだ。そのうしろには三十許の女が傘をさして立つてゐた。

「知らない人だ。」

獨り言のやうにさういつて阿爺は幕を閉ぢた。

「だが小人數のやうだから乘せて行つて貰ひたいなあ。」

「お客さん何うしがすべえ、ね？」と馭者が振返つて訊いた。

「餘り手間取られては困る……」と一造は先刻に懲りたので一旦はさう言つたが、雪の中を步く人の難澁を思ふとすげなく斷れなかつた。「賃金を取つて乘せてやつたらいゝ。」

「あゝ、金はわしが出しとく。F――村まで乘せてつて貰へばえゝだから、いくらやるべえ。」

「ぢや、二貫も貰つて置くべえ。」

『よし。それよ。』

道は平らになつたし、もう累はす者もなかつたが、それでも馬車はあまり急がなかつた。道は町を離れて次第に廣々とした裾野を横ぎつて行つた。

——一生に幾度、こんな日に、こんな野原を、こんな焦燥と不安の念を懷いて通る事があらう！と思ふと、一造は急に一種の感動を以て、馭者台の背後の幕を半分はづしてしまつた。

風は餘程凪いだが、雪はやはり斜めに、或は渦を卷いて降つてゐた。降つて直ぐに消える春の雪とは見えなかつた。あたりはもうまつ白になつて、兩側の畑と思はれるなかからスイ〳〵と桑の梢が突き出てゐるのがわづかに目を遮るだけであつた。一丁程先きの方に傘を差した人が一人歩いてゐたが、ちよつと曲り角を廻つたと思ふと、もう見えなくなつてしまつた。

『今そこに見えた人ぢやないか？』と一造が馭者に注意すると、馭者は『オーイ！』と聲を限りに叫んだ。けれども答へる者はなかつた。道の好い折ならば馬車が一と走り走れば無論追ひ着ける距離であるが、向ふは餘り積らぬさきにと急いでゐるらしいのに、こちらの馬の足取りは相變らず遲かつた。それにたゞ普通に歩いてゐるばかりか、雪に纏ひ着かれる轍は始終軋りなやんだ。

人影がとある坂の傾斜面に現れた時、その注意を惹く爲めに馭者は高らかに喇叭を吹いた。

トテー、トテー、トー、トー、トテー……

その金屬性の呼聲は降りしきる雪を貫いて何處までも、恐らく世界のはてまでも響き渡るであらうと思はれたが、それでも人影はこちらを振返く樣子はなかつた。そして直ぐに坂の向ふへ消えてしまつた。

ダメだ！」と馭者は打遣るやうに言つた。「折角賴まれたゞから、一つ飛び着けて呼んでやらう。」

坂の下まで來ると、馭者は馭者台から雪の上へ降り立つた。そして外套の裾を端折つて兩手を振りながら駈け出した。その黑い姿は見る〳〵白くなり小さくなつた。馭者が居なくなつてから、馬は一層悠々として長い首を垂れてボタリ〳〵と步いてゐたが、それでも坂にかゝるとひとりで巧みに車台を曳上げた。

先刻の人が馭者と一緖に戾つて來たと見ると、それはまるで違つた女の二人連れであつたり、通勤の小學教師でゞもあるか、帽子を眉深に被つてマントを着た人であつたりした。着物の片側のまつ白な彼等は、傘で面を隱すやうにして馬車を避けて通つて行つた。

樅の老木が雪を被いで聳えてゐる不動堂の前まで馬車が行つた時、馭者が喘ぎながら戾つて來た。

「どうだつたかね？」と一造が訊いた。

「追着く事は追着きました。」と馭者は頭巾のなかの逞ましい黑い顏に笑を浮べた。「けれど、乘らなくても好いッてずん〳〵步いて行つちまひました。」

「さうか？無駄な苦勞をしたつたな。」

「それでも、折角賴まれたゞから、それをむかふへ通じさへすれば好えです。」

馭者は再び馭者臺へ掛けて手綱を取つた。

一造は何となくあつ氣ない氣持がした。人一人を寒さから救ふ爲めに、老人と女とがわざ〳〵馬車を呼止めに出て來た。そして賃金を前拂ひにまでした。馭者は馭者で、聲を嗄らして叫んだり喇叭を吹い

たり追驅けたりした。何の緣故もない一造自身も、自分達だけが馬車に乘つてゐてその男は寒い吹雪の中を難澁して歩いてゐるであらうと思ふ心から、一種緊張した期待を以て、馭者がその男に追着く事を望んでゐた。追着くには追着いたが馭者は空しく歸つて來たのだ。

『なあに、歩く方が却つて好い。』と勇氣に滿ちた顏で言つて、やがて歩き去つたであらうその客を考へると、一造は、今まで心に掛けてゐたのはそんな元氣な、健康な人の上ではなくて、この車室に自分と向き合つて腰掛けて、死人のやうに默つてゐる弟の事であつたのに氣付いた。底に沈んでゐた不安、焦燥が、自分とは何の關係もない極々微かな刺戟にさへ、暗默の間に動いてゐたのだ。さもなければ、天地人間に渡つて或大きな悲しみの流がある、そしてそれに依つてすべての物が動かされてゐるのであらう。

竈の焚き落しを入れたゆゑか、行火は早くも火氣を失つてゐた。一造は卷煙草の尖端で突いてから改めて掌を當てゝみた。それから薄暗いなかで弟の顏を仰ぐやうにした。

『消えちまやがつた。お前寒かないか？』

『いゝえ、ちつとも。』と良次は例の言葉ずくなに答へて、雪明りでそれだけが際立つて靑白く見える顏を動かした。眼は非常にぼんやりとした、白痴に近い精神を宿してゐるやうにも、または普通の健康な樂天家には見透す事も出來ない、遠い〳〵界を覗いてゐるやうにも感ぜられた。

その頰にいさゝかの紅を潮して來たのに一造が氣付いたのは、良次が二度目に母親と共に上京した時からであつた。

三番目の弟の達三が、去年の暑中休暇に歸郷した時、結婚後良次の健康が非常に衰へた事と、同時に母親が胃痙攣の發作に度々苦しめられた事を見て來て一造の耳に入れた。その前から良次の健康に就いては一造は一方ならぬ心配をしてゐたので、他家に嫁入つてゐる妹の許まで『これは餘りに露骨な事になる故、手紙などでは親達へも書けない事であるが、お前は平らな氣持で讀んで、靜かによく解るやうに良次に告げてくれなければならない。結婚生活は女の體に取つては好い影響があればとて、惡い結果を來らす事は殆んどない。しかし、それは男の體に取つて反對である。殊に良次のやうなもと／＼體の弱い人間に取つては。だから此際出來るならば別居させる工夫をしなければなるまい……。』といふ意味を書き送つた程であつた。それが別居どころではなくて、達三の話によると、良次は無理々々健康をよそほつては舅と一緒に漁に出かけて平氣で水を潜つたりして、その揚句には隱れるやうにして我家へ來ては兩親の介抱を受けて寢てゐる事もあつたといふ。去年の春までは或所に奉職してゐたのだが、病氣の傳染を同僚に恐れられた果て、一時、健康の十分に恢復するまで職を止めなければならなくなつた。そして、舅の手傳ひもせずに閑暇で退屈な折には、大きな體に子供を負つて尻端折をしてそこらを恥かしげもなく歩るき廻る事もあつたといふ。

『何といふ氣が利かないんだか！職をやめるにしても、同僚に嫌つて／＼嫌ひ拔かれた揚句だつたさうです。それに早く氣が付かないなんて……』

達三はさう言つて半ば憤慨し、半ば嘆息した。達三の憤慨には別に理由があつたのだが……

『そんならなほの事、も一度東京へ引張つて來て、よく診察して貰つたり治療したりしなけりや可けな

い。あんなにお前に言つてやつたのになぜ出て來ないのだらう？」と一造が言つた。

「それは幾度も言つたのです。」と達三は答へた。「おつかさんだッて田舍の醫者なんかに掛つてゐたのぢやとてもダメだから一緒にッて言つたんです。けれども、兄ちやの事を心配し過ぎて半分は氣違ひにでもなつてるやうな調子で、おつかさんがすこしも言ふ事を聞かなかつたんです。」

「おや好きにしたらいゝ。」と一造も憤慨して言つた。「それ程言つて聞かないのなら、こつちは構はない。」

それから暫くして、父親から一造へ便りがあつた。「母が良次を連れて今日湯治に出懸けた。最初に××へ寄るはずであるが、歸りは多分東京へ廻るであらう、其節はよろしく頼む。」といふ意味のハガキであつた。

母の病氣は何であるか解らなかつたが、よく冬になると風邪を引く人であつた。その母と良次とが秋口に湯治場へ行く——何の病氣で衰へたのでも湯治に行きさへすれば好いやうに考へるのが田舍の人々の常とは言へ、今日醫學の進歩した世の中で、醫者の診察や治療を受ける事を忘れて、矢鱈にそんな所へ出懸ける愚かさを一造は憤らずにはゐられなかつた。二三年前、良次が病氣になつたといふ當初に或山中の溫泉場へ行つた事をも思ひ合はせて。

でも母親か良次かから何か便りがあるであらうと心待ちに待つてゐたが、七日が十日になつても何の音沙汰もなかつた。そこで、一造は多分彼等が滯在してゐるであらうと思つた×××の親戚へ宛てゝ手紙を書いた。

「秋風が立つのに溫泉場あたりにまご〳〵してゐて風邪を引いたつてつまらない事でせう。それよりは一日も早く東京へ出て來て、信用のある醫者の診察を受けてからほんとの療養をした方がいゝではありませんか……」

その手紙が行つても何とも答へて來なかつた。すると達三は、「こちらでは樣子が何うだらうッて毎日心配してゐるのに、返事もよこさないとは何ういふわけです？」と詰問するやうに良次に宛てゝ言つてやつた。

呆れる程間を置いて良次から一造へ返事が來たが、手紙は受取つたとも何ともなくて、たゞ『母と一緒に熱海へしばらく行つてをりました。母は湯あたりですこし寢ましたがもう恢復しました。私は元氣で毎日のやうにT——叔父さんに連れられて海岸などへ散歩に行きます。まだいつ出發ともきまりません』と書いてあつた。

『いつ出發ともきまりません——とは何の事だ、馬鹿野郎、手紙の書きやうを一つ知つてやしない。』

一造はひどく不愉快な餘りにさう言つた。けれども急に彼は或事に思ひ當つた。急にといふよりは、母親と良次とがあれ程言つてやつたのに東京へは來ないでまづ湯治場へ行つたと知つた時にも、親戚へ宛てゝやつた手紙の返事の遲くなつた時にも、影のやうに彼の心に差しては直ぐに消えて行つた或事である。

それは良次よりもむしろ母親が、東京へ、一造の許へ來る事を嫌つてゐるらしいといふ疑惑であつた。といふのは、良次が他家へ養子に行く前に、その事をほのめかした母親に向つて一造は種々な事情を述べ

て激しく反對したのであつた。それにも拘らず、親達は良次を他家へやつた、しかもそれを其の時、ちやうど東京へ出て來てゐた一造の妹へまではその夫から知らせてよこしたが、そのなかに『しかしこれはお前のお袋の考では兄さんには知らせる事はないといふが……』といふ文句があつた（それを妹が彼に話した）ばかりでなく、彼、一造のところへは親達から表向き何事をも言つて來なかつた。『よし、そんならそれでも好い。』と言つて彼は母の敵意を挾んだ心持を惡んだ。彼としてはたゞもう知らぬ振をしてゐるより外はなかつた。

年を越してから彼の父親と良次の舅になる人とから同時に、今度良次を養子に貰つたといふ知らせがあつた。父親に對しては今更何も言ふ事はなかつたが、一造は良次の舅に宛てゝ、弟は人間として何の能もない男であるだけに素直な好人物といふ點では兄弟中で第一だと信じてゐる、たゞ體がいくらか弱いやうに覺えてゐる、どうぞほんたうの子と思つて愛して頂きたいと言つてやつた。

けれども、それから間もなく郷里から上京した或男の話によつて、良次の妻が最早臨月に近い大きな腹をしてゐた事を知ると、一造はつい其頃受取つたばかりの良次の結婚の知らせの餘りにしら〳〵しいのに呆れないわけには行かなかつた。そこで、良次の爲めに祝ひの品など送りたいが村の人の話が事實だとすると、何だか變である、よくその邊の事情を知らせて貰ひたいと、わざと強く父親に問ひ合はせた。父親からはたゞ、良次の爲めに祝つてくれるよりは、子供が產れてから產衣でも送つてくれと極りがわるさうな簡單な返事が來た。

良次の結婚が、一造に取つてこれ程厭なこんがらかつた物になつてしまつたのは、同時に彼の親達、殊に母親に對する彼の感情がひどく荒んでしまつたのは、主として彼の理窟ッぽい性質に原因してはゐるが、そこにはまた別に混み入つた事情もあつた。

馬車がF――村に近づくに從つて、雪は次第に小降りになつた。日暮際ではあるらしいが、あたりがハッキリ見透された。白一色の富士の裾野の大高原はうしろになつて、前には松林を脊負つた小山が幾つか迫つてゐた。五六戸しかない小部落を過ぎ、四十五度位ゐの傾斜の長い坂を越してからは、馬車は小高い畷道を小山の群に沿うて動いた。鳥の翔ける影もなく、小鳥の啼く聲も聞えず、たゞ時としてバサ〳〵と常磐木の枝から雪が塊まつて落ちた。言ふまでもなく恐ろしく寒かつた。馭者も一造兄弟もじつと默つて固くなつて、たゞ馬車に搖られるに任せてゐた。

――しかし、良次は戀の勝利者であつた。さう思つて一造は改めて弟の顏を見た。

東京で、一造の手元から中學に通つてゐた達三が、病氣の爲めに學問を中止して半年ばかり郷里に歸つてゐた事があつた。その時達三が隣家の一人娘と戀なかになつた事は、さういふ事となるとひとりの胸にだけ押包んではゐられないのが常と見えて、達三から一造の妻に傳はり、妻から一造に傳はつた。その後一造の母親が上京した折、隣家から達三を聟にほしいと言つて來たよしを一造に告げた。

「馬鹿な事を言つてはいけない。達三はまだ修業最中ぢやありませんか。中學を卒業しないさきから……」

「むかうでは何時までゞも待つてゐるといふが……」

「それは可けませんよ。かういふ事は後々になれば何うなるものか解りはしない。」

そんな問答があつたきりで、その話はやめになつた。けれども其の後も、逹三と隣家の娘とは始終手紙のやり取りをしてゐた。それを女の好奇心から妻が知つてゐてはよく一造に話して聞かせたが、兄だからとてそこまで干渉するわけには行かないので、一造は知らぬ振をしてゐた。

「これはお前のお袋の考では兄さんに知せる事はないといふが……」と言つて、妹の夫が妹のところまで、良次が隣家の養子にきまつた事を知らせて來た後も、逹三はやはりその隣家の娘へ手紙を書いた。

前からの續きがあるとは言へ、兄の妻と定つた女の許へ、弟から絶えず手紙を出す、そしてその女からも返事が來るらしいといふのは何たる厭な事だらう、と一造は考へた。

その年の夏休に、逹三は鄕里へ歸り、それと入代りのやうに母親が、一造の妻の產の前後の手傳ひの爲めに上京した。その時に母親は一造に言つた。

「お前にも相談しようと思つたけれど、隣りで逹三が呉れられなければ良次を呉れろつて朝晩のやうに來てヤイ／＼言ふものだから、良次をやる事にして「酒入れ」も濟んだぞよ。」

「へえ、さうですか。」と一造はつとめて平氣な面持で答へた。「この春、お仙が來てゐた時、お仙にだけはそんな知らせがあつたとか聞いたけれど、わしには話すには及ばないつて事だつたさうだから、わしも口の出しやうがなかつた。」

母親は出鼻を折られたやうに默つてゐたが、やがて言つた。

「あの時はな、お前、かういふわけだ。喜作さんが博賭を打つてる所へ巡査に踏込まれて一生懸命に逃げ

出したまではよかつたけれど、××橋からおつこつて、脾腹を打つてな、直きに死にさうの騒ぎで、遺言までしたとよ。そんな事のあつた後だつたから、氣の毒でイヤとも言へなくて……』

『場合は何ういふ場合だつたかわしは知らない。』と一造はもう怒りを抑へかねて苦り切つて言つた。『けれど、良次の體はすつかり好いだらうか、結婚後急に衰へる事がなければ好いが、とわしは第一にそれを心配した。……それから、達三と喜作さんの娘の間に手紙の往來がある事は、おつかさんは知らないでせう。が今でもまだ續いてゐる筈ですぜ。今度、休暇で國へ歸つたのも、達三は專らあの娘に逢ひたいばかりに歸つたらしく、わしは察してゐる。……年齢から言へばどちらもまだ子供だ。と思つてゐたのがわしの過りでした。……良次は、そんな事は何も知らないのだらう。わしは良次には氣の毒でならない。……弟と仲の好かつた娘の許へ、いかにも先方で重ねて望んだからと言つて、兄の方をやる——そんな事は田舍にはよくある事だらうが、まるで犬か猫を貰つたり呉れたりするやうなものぢやありませんか!』

一造は、我ともなく激昂して、そんなに母親を罵つた。それに對しては、母親は何とも答へずに長くぢつと座つてゐた。

けれども、良次の結婚に對する一造の觀察、良次をひとへに間の拔けたお人好しの地位に置いて考へた事、感じた事は、半ばは當つてゐたが、半ばゝ見當違ひであつた事が後になつて知れた。それはその次の年即ち去年の夏休みにも郷里へ行つた達三が、東京へ戻つて來て、いくらか嫉妬の念を交ぢへながら(であらう)一造の妻へ『兄ちやが行きたがつて行つたとさうです』と言つたのからも、『おとつつあ

んが喜作さんに逢つて、兄ちやが病身だから暫く暇をくれるやうにと言つた言葉が喜作の氣に觸つたとかで、「それぢやあまるでおらが家へ䇫によこして置くのが厭だといふ風に聞える、お前もよく考へて好きにしてくれろ」と喜作さんに言はれて、兄ちやは、まるで子供みたいにワン／＼泣いて家へ來たですよ。』と話したのからも、またずつとの以前、達三を養子にほしいといふ話があると母親が言つた時、一造が『まだ中學も卒業しないさきから……』とてんで受付けないのを見て、母親も『おれもさう思つて斷る事は斷つたよ。……けれども、達三があそこへ始終遊びに行くッて事は知らなかつた。もつとも、一度、良次が「あの野郎は、表の家まはりへ夜遊びに行く。叱らつしやい」ッて怒つてゐたのを聞いた事はある。』と言つた、そんな事からも推量された。

良次は達三のやうに無遠慮に遊びに行つて炬燵の下で手を握つたり（そんな事をも達三は得意になつて嫂に話した、そしてそんなこま／＼した事までが一造の耳に入つた）華やかな文章で手紙を書いたりはしなかつたが、達三よりも前から隣のその娘に想ひを掛けてゐたらしかつた。

それはまた、長い事待せて置いて、秋雨の寒い頃に青くむくんだ顏をして湯治場から東京へ廻つて來た母親の言葉で、いよ／＼明かに證據立てられた。一造のこれ迄の度々の苦情に懲りてゐたせいか、母親は一造に直接には言はなかつたが、『良次は自分から行きたくて行つたゞから、あいつは死んだつて本望さ。けれどもわしとしては世間の手前、どうしても病氣を治してやらなくてはならない。』と一造の妻に言つた。また『よかれと思つてやつた事が惡るくなるのは運だ。仕方がない。』と獨り言のやうに嘆息した。そんな言葉で、母親が、嫁を通して自分に言ひわけをしてゐるのだ、とも、わざと溫泉場などに

悲關々々してゐたのは、お前達の世話にならなくても、おれが治してみせるといふ例の母親の負け嫌ひだとも一造は取つた。彼はもう過ぎ去つた事に就いては何も言はなかつた。それどころではなかつた。母の病氣は慢性の胃病で、もすこし手遲れがすれば一命にも拘る程だつたといふ診察であつた。良次の健康はやゝ恢復してゐたが、これとて棄てゝ置けなかつた。

母親と良次とは、隔日に、一造の家から醫者へ通ふやうになつた。どこが惡いのか解らずに無暗に湯へ入つたり口に合ふ物を食べたりしてゐたといふ母親は、東京へ來てからは醫者に注意されて一切の魚類肉類を退けて煮くたらがした粥ばかりを取るやうになつた。その反對に良次はなるべく脂肪の多い滋養物を食べなければならなかつた。『この病氣には藥はない。たゞ藥が一いろあると言はれてゐるが、昔から利いた例がありません。たゞ呑氣にして旨い物を食べるより外はないのです。然し私には經驗から來た自信があるから、まあ任せて御覽なさい。』さう言つて醫者は良次に注射をすゝめたのであつた。

『ハア、實に好くなつてゐる。田舍は空氣が好いからですね。』

病氣に就いては、大事を取り過ぎるといふ評判の醫者が、始めからさう言ふので、皆は『まあ、よかつた！』と良次の爲めに喜んでゐた。

ところが、注射の針數がやつと十本ばかりになつた時、父親の許から、良次の姑の病氣が危篤で親類の者が毎日枕もとに集つてゐるといふ知らせが來た。病氣は持病の婦人病が急に腹膜炎に變じたので、主治醫は電報できのふ或藥劑を東京へ注文したといふ騷ぎであるとも書いてあつた。

母の顏面の浮腫も段々にすぴ、良次の注射も數を加へて、まづよかつたと思つたのも東の間でまたそ

んな話を聞くといふ事は一造に取つても、誰に取つても、堪へられない事であつた。

「なぜ斯う不幸が續くだらう！」と一造はもう飽き〳〵したといふ調子で嘆息した。『達三が病氣して學校を一年休む。あれをいよ〳〵國へ歸すまでにも、わしはどれ位ゐ苦勞したり心配したか解らなかつた。あれがやつと丈夫になると今度は良次がわるいと言ふ。續いておつかさんが病氣する。その間にわしはわしで他人の心配をしてゐる所ではないひどい病氣を二三度する。……病氣以外のわしの心遣ひは、こりやあわしの性分だから仕方はないが……それもこれも何とか當りが付いて、これからはいくらか落着けると思ふと、今度はまた、新らしい親戚の爲めに……なる程、今度の事は、普通なら、無論早速歸つて行かなければならないがこつちも病人だ。たとへばむかふが死ぬ病人だとしても、おつかさんや良次が歸つて行つてそれで助かるといふわけはあるまい。親類の手前なんかを考へるのはこちらが健康の時の話だよ。』

『それはさうさ。』と母親は答へた。『けれども、きつとあの人は死ぬよ。わし等が湯治に出掛ける朝も、起きてそこまで送つて來たが、どうも長生きはしさうもない顏だつた。……いよ〳〵死ぬとなると、二人來てゐるのだからせめて一人は歸つて行かなければならない。わしが歸つてみようよ。』

さういふ母親を、一造も一造の妻も達三も叱るやうにして止めた。

「義理からなら」と一造が重ねて言つた。『なにもおつかさんが無理をして歸るわけはないぢやありませんか？　良次の方は養子の身分だから……それに醫者の見込も今は好い所だから、一時手を拔いて義理を盡させても好いかも知れない。』

「それでもこゝで歸してやるとまた出て來るッて事は面倒づらよ。」

そんな相談を醫者の許まで持つて行つた。

「やりかけたんだから惜しいですね。」と醫者は言つた。「これがせめて十五本にもなつてゐると、手を拔いても利き目は殘りますが、これで歸るとまた始めから繰返さなければならない。」

――その時、なまなか義理とか人情とか言ふ空疎な影みたいな物に惹かされたのが過りだつた。その時、母親の歸國を止めたと同じ心持で、なぜ斷然良次の歸國をも止めなかつたか？……良次が歸つたからとて死ぬ者は死んだんだ。たゞ一時、世間體が好かつたといふだけだ。姑の葬式が濟んで間もなく、良次は急に四十度近い熱を發して臥るやうになつた。……やがて母親も、まだ十分でない體を推して歸つて行つた。……良次がひとりで、二度目に、注射を續ける爲めに東京へ出て來たのは今年の正月で、その時には、自分もひどい風邪を引いて暫らく海岸へ行つてゐた。海岸から歸つて來て良次に逢ふと、以前は氣付かなかつた良次の頰の色に氣付かずにはゐられなかつた。良次の憔悴はそれ程目立つてゐた。醫者も「今度は、以前とはずつと樣子が違ふ。惜しい事をしました。途中で歸つたのがわるかつたのですね、ケチが付いたのですね」と言つた。それまでも可なり注意はして來たが、それからは殊に食器類を嚴重に區別して始末しなければならなくなつた。本人がさういふ事には割合に無神經な爲めに、かげでの注意だけで足らない場合には、こちらから言ひづらい事も言はなければならなかつた。「周圍の者に對する病人の德義」悲しい淋しい心を慰めてやる代りに、そんな殘酷な、しかし餘義ない義務を強ひなければならなくなつてしまつた。それでも、療養の利き目があつて段々恢復するであらうかと、つい此間まで萬

一を僥倖しようとして、おれ達も失望しずに、またつとめて本人にも失望させまいと注意に注意をして來たのだが……しかし、とう／＼郷里に連れて歸らねばならない今日となつた！

一造の眼は茫然として、暮れかゝる白い野山に向つてゐたが、心は深い苦悶と哀愁と憐憫とで混雜してゐた。

――他人と交らなければ生きて行けない人間の世界では、餘程の强者でない限りは自分の弱點短所を晒け出す事は出來ない。多くの者はその弱點を見せたが爲めに關係生活から疎外される。殊に傳染性の病氣に罹つてゐる者はさうである。そこで隱蔽する必要が起こつて來る。他人に對してばかりではなく、弱い、直ぐにも度を失つてしまふ自分自身の心に對しても。だから、良次や親達が、狹い田舍の世間から、良次の職業の仲間から、殊に良次の養家から良次を病人視されまいと無理な苦心をして來たのにも、涙がこぼれるやうないとしい所がある。けれども、それが却つて病氣をすゝめる原因ともなつてゐる。一時の安さを偸む爲めに永久の災を遺さうとしてゐる。愚かな事である。嗤ふべき愚かさではなくて、悲に泣いてやるべき愚かさである。けれどもその愚は許しては置けない。それは自らさうと氣付いてはゐまいけれど、餘りに身の程を知らない利己主義だからである。積極的に他人に害を及ぼす積りはなく、たゞ自分の持つてゐるだけの生命の限りを生きたいといふ謙遜の心持しか無いとしても、弱者であり病人である事を自覺しない爲めの不注意から、自然に累を他に及ぼさうとするものである。たとへば自分の病氣が他に傳はるといふ事に就いて、病人は責任を自覺しなくても好いものか？すこしの注意、すこしの諦めで、何うとでもなる事ではないか？そのやうなたしなみは良次には全然缺けてゐたらしかつ

た。

「病人は病院へ」

大方はそれで片が付くのだ。周圍の不馴れな者が無駄な心配や苦勞をしてゐるよりは、設備の完全な病院へ送れば、本人の爲めにも周圍の者の爲めにも一番好い事である。ちよつと考へればそれに相違ないが、實際はそこへ行くまでに幾多の階段がある。ましてゴーリキイの書いた「どん底」の中の一人物が言つたやうに『破れた者は、默つて死を待つまでだ。』といふやうな覺悟は、それこそどん詰りまで落ちた人間より外には持てない覺悟である。

すくなくとも外見だけは良次は普通の健康者と變らなかつた。時としては、普通の健康者よりも悠々としてゐた。

「なか〳〵平氣だ。あれでは大抵の病氣なんか治つちまふよ。自然其物と言つたやうな所があるよ、良次には。」と半ばは安心したやうに半ばはいら立たしいやうに一造は言つた事がある。

「あれで、心配する時には馬鹿に心配するんです。田舍の醫者から東京の醫者へ相談の手紙を自分で封を切つて筆を入れたり、夜なかに眠れない事もあるとみえて自分で打診したりするんですよ。……私は吃驚した事がありますよ、ひよいと眼がさめると、暗闇のなかで、コンコン、コンコンと調子を取つてかすかな音が聞えるものだから、鼠か知らんと思つて、シッと言ふと、兄ちやが、おれだ！ッて言うんでせう。」

良次と同じ部屋に起き臥しする達三はさう言つた。

「ふーむ、そんなこともあつたかい？さうだらう、なあ。」と言つて一造はまた出路のわからぬ鍛のやう

な考へに入つて行くのであつた。

「外科の病氣とか、その他の單純な病氣とはこれは違ひますからなあ。」とは多くの醫者の言ふ所であつた。『病名をハツキリ宣告する事をさへこちらでは避けてゐますよ。ましてのつけから病院へ入れて、精神的にまづ殺してかゝるのは、却つてよくありますまい。』

情愛、學問、金錢――人間のあらゆる力を以てしても解決が付かないやうな苦悶のうちにも、暮れて行く夜があり、明けて行く朝があつた。さうして二た月と經ち三月と經つた。その間で一番一造の神經をいら立たせたのは、彼の二人ある子供が良次によく馴染んでゐる事であつた。殊に長男は話好きなので、ヒマで遊んでゐる良次に抱かれては「それから」「それから」と話の續きをせがんだ。相撲を取る眞似などもした。そんな時には一造はよく妻を叱つた。

「だつて、言つて聞かせても子供だから駄目ですよ。」と妻は言つた。

「だめの事はない。お前が子供に掛り切りになつてゐれば好いぢやないか？」

「それやあ、なるたけさうする積りですけれど、始終は氣が付きさりませんわ。」

一造はそれとなく良次に注意した事もあつた。良次が遠ざからうとすればするだけ子供は彼に近づきたがつた。

良次の病氣は醫者に任せて、たゞその經過を待つより外はなかつたが、一つまだ完全に濟んでゐない注意事項があつた。それは顯微鏡的檢査であつた。良次が病氣に罹つたといふ當初、田舍の醫者のすゝめでその爲めに良次がわざ／＼東京へ出て來た事があつたが、檢鏡の結果は曖昧の間に埋められてしま

つた。「傳染のうれひなかるべし」といふ診斷書ではあつたが、それも最早二三年前の事である。萬一を恐れて空しい心配をしてゐるよりもハッキリした檢査をして貰つて、それ相當の所置を取らなければならないと思ひ付いたのは、一造が海岸から歸つて來て再び發熱して、或は良次と同じ病氣ではないかと疑ひ出したからであつた。彼の神經は針のやうに鋭くなつてゐた。遠慮の幕を隔てゝ物を考へたり物を言つたりしてはゐられなくなつた。彼はまづ自らの病氣の顯微鏡的檢査を行つて貰つた。その結果にすこしでも疑はしい所があれば、斷然一家を解體して、自分一人を人間の社會から退けて、眞の孤獨の生活をしようと決心した。それと同時に、彼は良次に顯微鏡的檢査を强ひたのであつた。良次はそれを恐れるらしく、一造の檢鏡の結果が二度共ブランクであつた事が知れて來た迄も、延び〳〵にしてゐた。一造から重ねての注意があつて、良次はやうやく小さな硝子器へ入れた物を醫者の許へ持つて行つた。

何といふ殘酷な事だつたらう。厭がるものを、强ひて。けれどもおれには、もうとても辛抱がしきれなかつた。

一造は其頃の自分の苦悶を思ひ出さずにはゐられかつた。良次のは最初はやはりブランクであつたといふが、二度目のには疑はしい物が映つて來たとの事であつた。それを聞いて來た良次は、ひどく憂鬱な顏をしてゐた。一造は其翌日早く醫者を訪ねた。

「さうですか、しよげてますか？氣の毒ですねえ。非常に優しい好い人だから私も是非治してあげなくつちやと思つて骨を折つてゐるのですよ。」と醫者は言つてから、良次にはたゞ仄めかしたゞけの檢鏡の結果を一造に詳しく話した。

『大人同志では、すこし注意すれば何でもない事なんですよ。けれども子供さんの事は、こりやあ注意がし切れませんからなあ……それにあなただつてお丈夫の方ではなし。』と言ふ時、醫者はチラと一造の顔を見た。『もし傳染するやうな事では、どなたに傳染しても、醫者としての私の責任です。……あゝいふ優しい方だから、ハッキリ宣告したら、まづ精神的に非常な打擊でせうが、仕方ありませんよ。思ひ切つて小の虫を殺して大の虫を助けるんですね。……方法としては、さう、病院へ入れるのも好ゝ御座んす。兎に角十分に隔離するのですよ。折角注射をしかけたのだから、一軒、どつか離家でも借りて別居させて、おつかさんかどなたにか來て頂くのですね。……國へ歸しても、それだけの注意さへしてをれば、差支ありませんが、どうも田舍の醫者では注射が思ふやうに行きますまい。』

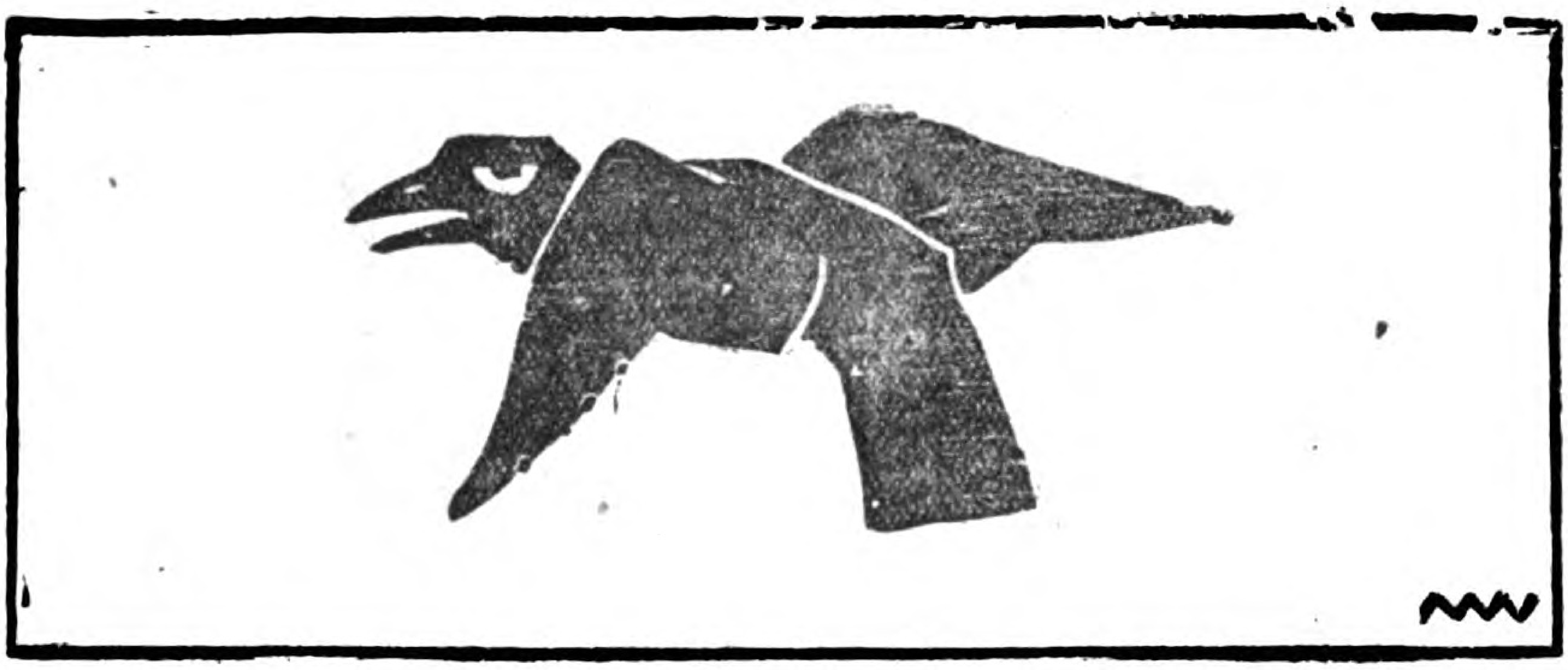
醫者から歸つた一造は良次を二階の書齋へ呼んで、靜かに出來るだけ相手の精神を刺戟しないやうにつとめながら相談した。今はまだ病院へ入る程の事はあるまい。海岸へ行くか別居して東京で注射を續けるか、東京の醫者の處方を貰つて國へ歸るか――三つのうち一つを擇べと言つた。前に同じやうな事で心配させられた達三とも相談してみた。『お前には經驗があるんだが。何うだらう、何うしたらいゝだらう……氣持は……この病氣には氣持が第一だからねえ。』などと『子供に傳染るやうな事があると困るから、國へ歸ると言つてます。』と其晩達三が良次の心持を一造に傳へた。

その翌日一日間を置いて、今朝、一造は良次を連れて、東京を發つたのであつた。良次を田舍へ置くとも東京へ連れ戻すとも、まだ一造の決心は着いてゐない。兎に角、自分一個の考へでは計らひかねる、親達とも良次の舅とも相談しなければならないと思つてゐた。殊に、一家五六人を過ごしてゐる上

に達三の衣食料學費一切を引受けてゐる身では、良次を長く病院へ入れるなり何なりするには金の事がなか／＼の心配であつた。四月はちやうど季節の變り目で、良次は就職口の周旋を郷里の友達に頼んだり、達三に身代りになつて健康診斷書を取つてくれと言つたり、夏休には登攀をもする、釣にも行く事などを樂しみにしてゐた事をも一造は聞いてゐた。檢鏡の結果そんな慾望や空想をすつかり破られて、多分本意なく國へ歸ると言ひ出したであらう良次に附添つて、わが子の病氣を心配する傍ら世間の噂さを防がうとしてゐる親達や、良次の病氣に就いては餘り多くを知つてゐないらしい彼の男や妻やに逢ひに行くのであゝ、そして生皮をでゝ剝くやうに一切の彌縫の裏を返して見せなければならないのである。場合に依つては良次をその養家から離縁させなければならないとも思つて來たのである。

もう暖からうと思つて來た此國にはまだ雪が降つてゐる。……相談の結果は何うなるか知らぬが、ひがみ易くなつてゐる母親などは、わざ／＼こんな日を擇んで、良次を棄てに來たやうに取るかも知れない……實際自分でも、この肉親の弟を棄てに來たやうな氣がする。……棄てに來た……

さう思ふと、長い間の戰ひに疲れた人の持つやうな始末におへない悲しみが、一造の胸の奥から雪の野の面へ廣がつて行つた。……（をはり）



社會悲劇

三角畑（禁無斷興行）

岩野泡鳴

登場人物

百姓甲（四十歲前後）
女房甲（三十五六歲）
百姓乙（五十歲以上）
女房乙（四十七八歲）
通行人細君風（二十三四歲）
同老母（五十歲以上）
巡査

その他に、無言若しくは有言の仕出しの御用聽き並に牛乳配達各一名

場所

東京の郊外

時

六月の初め、曇天の午後

〔鐵道線そばの畑地で、舞臺に向つて右の方は鋭角の三角形に迫り、反對の方へは開いてゐる。この鋭角の方に電柱が立つて、倒れぬ爲めに針がねが引ッ張つてある。それから畑の向ふ側に細い眞ッ直ぐな道路があり。人の丈ほど延びた檜葉の苗木の僅かな植ゑ込み。その後ろから見える二階の裏手。こちら向きの小い平家。これに隣つての、これを小い二階家。かかる景が舞臺中央の奥の方で切れて、眞ッ直ぐな道路のあなたは青葉の桃畑。そのまた向ふの方から、山の手線の鐵道シグナルのあたまが見えてゐる。

〔向つて左り手の奥に、檜葉の間から二階家の横手が見える。そのこちらも、後ろも、すべて畑の體。舞臺左り手の前方にも、枳殻の生垣で圍んだ小い平家の裏手の隅なる便所のところが見える。この家の横手から、奥の方の道へ、直角に道路がついてるので、正面の畑は不等邊三角形になつてゐる。〕

（一）百姓甲、酒屋の御用聽き

〔酒屋の御用聽きらしいのが、物を肩にかけて、自轉車を、向つて右の三角點から乘り入れ、あぶなッかしさうに舞臺の前方を眞ン中どろまで來る。〕

百姓甲〔今氣が付いたやうに鍬の手をやめて、舞臺中央少し奥から暗鬱な瘦せた顏をその方に向けて、とがつた聲で〕通るない！

〔御用聽きは無言で驅け拔ける。〕

百姓甲　畜生！〔暫らく睨んでゐてから、また鍬を動かす。〕

（二）百姓甲、牛乳配達

牛乳配達〔奥から左り前方への道路を、配達車をがら／＼云はせてやつて來て〕今日は。

百姓甲　………〔ふり向いた時には、もう、配達は知らぬ顏でずん／＼行つてしまうので、またいま／＼しさうに暫らく睨んでから、鍬を動かす。この動かし方が焼け氣味であつた。〕

（三）百姓甲、その女房

女房甲〔これも瘦せた方で、血色のよくない顏で、薩摩芋の芽を入れた籠をかかへて、向つて右の三角點に現はれ〕お父さん、まんま喰はねいか？

百姓甲　………〔ふり向きもしないで、鍬を使つてゐる。〕

女房甲〔奥への道路から渠の方へ近づきながら〕腹が減りやアしねいかよ？

百姓甲　………〔矢張りふり向きもしない。〕

女房甲〔その道ばたに近いところを渠がうなつてるのを見て、立ちどまつたが〕もッとよくおうなひよ。いつものやうにやア行つてゐねいぢやアねいか？——もう、ドンも餘ッ

ほど前に鳴つたがよ。

百姓甲〔見向かないで、低い獨り言のやうに〕おらアめしも喰ひたくねい！

女房甲　そんなことを云つたッて、腹が減るがよ。ちよッくら行つて來なよ。そのうち、わしやアそこまで植え付けて置くが——

百姓甲〔同じ態度のまま〕うちへも行きたくねい。

女房甲　そんなに嫌はねいで、さ、わしの娘は父(とッ)さんの娘ぢやアねいか？　ゆふべからあんな怪我をして足が立てねいのに、可哀さうでねいかよ？　ちよッくら行つて、ちよッとでも愛相云つてやんなよ。親でもねいやうに——まだ痛(いて)いッて、寢たッ切りぢやアねいか？

百姓甲〔まだ同じやうに鍬を動かしながら〕あいつも天罰を受けやがつて——もう、どうせ、一生寢たッ切りだらう、さ。見たくもねい！

女房甲〔多少引き入れられた樣子で〕天罰ッたら、天罰だらう、さ。父(とう)さんが行くなと云ふのに、毎晩(めえばん)、夜這(よべ)ひに行きやアがつて——歩けもしなくなつた片輪に、若し子でも出來たら、どうするだらう？　あの久原(ひさはら)の旦那も物好きな、人の娘を毎晩(めえばん)あの〔と、自分の右手前方をちよッと見やつて〕廣ッぱで自由にして、さ——早く金にでもしてやんなよ、いい療治も出來ねいぢやアねいか？

百姓甲〔矢ッ張り鍬の手を休めないで〕いい療治が出來ねいから、一生の片輪さ——おらア都會の人にやア一文でも世話にならねい。あいつ等の屎でも小便でも、禮をして買つてらア。

女房甲　それだから、世間から馬鹿正直だと云はれるのだよ。矢澤の作兵衞ぢぢイを見なよ、近處のお屋敷へへいへい云つてあたまを下げて行く代りにやアそこいらの肥はただで貰つてるし、おもちやのやうな畑をうなつてやつても一圓や二圓にやアなるし、たまにやア下手な庭つくりや植木屋の眞似もしてる

らア、ね。

百姓甲 （初めて鍬の手を休めて、女房の方を睨むやうに見て）　おらア作兵衞のやうな、出來合ひの植木屋などアしねい！　今は小作でこそあれ、これでも親代々から正眞正銘の百姓だ！

女房甲　百姓は百姓に相違ねいが――

百姓甲　だから、おらア都會くさい奴らア嫌ひだ！　鐵道が引けるッて土地をへずられ、――屋敷が立つッて地面を削がれ、――賣り地にするッてもとの畑に草を生やしッ放しにして、――電氣が來るッて大きな柱などを立てて、さ、おら達のいのちア段々變挺な物になつてしまはア！　おまけに、道でもねい道を付けアがつて――どうせ踏まれるから、そこだけ明けて置くものの、たださへ減つた地面がまたそれだけ使へねいんだ。

女房甲　だから、作兵衞なんか商買換へをしねいぢやアと云つてるさうだ。

百姓甲　馬鹿野郎！　あいつらア植木屋にでも、乞食にでもなつてしまへ！（と、投げ出すやうに云つてから）おらアつちくれ一つにかじり付いても、百姓をすらア！（手につばを吐いて、また鍬を持つ。舞臺正面の向つて左りの方へ、すぢかひにうなひ下つて行くので、かの女からは段々遠ざかる。）

女房甲　そりやアさうだとも、さ――だが、行つて來なよ。

百姓甲　…………

女房甲　まんまを喰はねいと毒だア、ね。

百姓甲　…………

女房甲　いいか、ね――？（心配さうに。）

百姓甲 （獨り言のやうに）かまうもんか？

女房甲　でも、ちよッくら行つて來なよ。それに、あの兒も何か父さんに話があるッてがよ――隨分利かねい兒であつたが、ゆふべから急に氣が弱くなつて、さ。

百房甲 （矢ッ張り獨り言のやうに）天罰だア、ね、――親の苦

勞も知らねいで！

女房甲〔渠の鍬のあとを見ながら〕もッとよくうなつて行きなよ、去年ほど根がつかないと困るぢやねいか？

百姓甲　どうせ年々身入りは減つて行くの、さ。

女房甲　そりやア、畑が段々狹くなりやア、せめて深くでもうなはねいと、さ――

百姓甲　高が芋畑だ！

女房甲　外の物だッて、何ほど出來ようぞ？

百姓甲　……〔正面向きになつて、今度はさくを一つ、向つて右手の方へ、後ろ下がりにうなひ初める。〕

女房甲　ちよッくら行つて來なよ。

百姓甲　うるせい！

女房甲　天罰ッても〔と、何だか考へてるやうに〕――でも、父(とツ)さんが惡いんだぜ、あんなところに大きな穴など掘つて、さ――

百姓甲　……

女房甲　うめて置きなよ。あぶねい。自分の兒に限らねい、誰でもまた落ッこちるか知れねい。

百姓甲〔ます／＼燒け氣味になつたのが鍬の使ひ方に見えてたが〕ええ！〔と、鍬を引き拔いて〕もッと深くしてやれ！〔つか／＼と畑のおもてを渡つて、向つて右手の三角點の方へ進み、角の針がね押さへの横から、この針がねが引ッ張つてる電柱のところまで、舞臺正面に添つて掘れてる長い穴を、一層深く掘り起す。〕

女房甲〔半ば呆れ、半ば心配さうにやつて來て、掘れる穴をのぞくやうにして〕あの兒が落ッこちたばかりぢやアねい――外に誰れかもやつたか知れねいッて！　よしなよ。あぶねい。

百姓甲　なアに〔と、因業な顏つきと口調とを以つて〕人の云ふことを聽かねいやつ等ア、みんな足でも手でも挫(くぢ)いてしまふがいい、さ！　ここはおらんとこの借りた地面で、道路ぢやアねい。

女房甲　でも〔と、のッそり渠の横顏を見あげて〕やつたかも知れねえ――あぶねい。

百姓甲〔鍬を左りの手に頑固に引ッさげたが、かの女の方は見ないで、心持ち正面を向き〕かまうもんか！〔向つて左り手の方へ、畑の中を、暗鬱な樣子で一二あるく。〕

女房甲〔掘れた穴をあぶなッかしさうにのぞいて見るやうにして、三角點をまはつて、穴のそとを正面の道へ來て〕ちよッくら行つて來なよ。

百姓甲〔かの女が正面前方の道へ來たのに氣が付いて〕手前まで這入りやアがつて——道路ぢやアねい！

女房甲〔立ちどまつて、少しきまりが惡さうに〕でも、どうせ踏まれてしまうところだ。

百姓甲　踏むやつ等が不埒なんだ！

女房甲〔渠がまたもとのうなひ場所に行かうとするのを見やつて〕いいか、ね——腹がへつても？毒だによ。

百姓甲　考へても見ろ、鐵道が敷けるやうになつて、あッちが〔と、右の手で後ろ向きて舞臺右手の方をさし〕引ッ裂かれたのが初めで——あすこにも〔と、舞臺左り手の方を自分の右の手でさし〕家が建つ。こッちも〔と、鍬を正面から自分の左りへ十分に向けて、榆葉の植ゑ込みの方をさして〕敷地に取られ。とう〱この前も〔と、正面を鍬でしやくつて見せ〕こんどまた家になつた。百姓の賴みとする畑を都會攻めにして、おらの命までも今にここから追ッ拂はうとするのアどいつだ、畜生！この畑のざまを見ろ！〔舞臺の中央に正面を向き、左りに持つてた鍬を右に持ち換へると同時に、土の上に置いて、鍬の柄を杖に突き、左右を見まはしながら、餘ほど感に入つた聲で〕狹くッても、四角ならまだしもゆとりがあらう——出來そくねいの三角とア、お前——

女房甲　三角だッて、四角だッて——〔輕く獨り言のやうに云つたが、多少釣り込まれたかのやうにしほ〱と、舞臺左り手の方へ、畑へ觸れないで歩きながら〕正直にかせいでゐりやア圓くなつて行かア、ね。

〔かの女は舞臺左り手なる前方の隅から起る道路に添つた第一のうねに行くと、初めて畑へ這入つて、正面に向つて、第一うねのあたまを跨ぎ、持つて來た籠なる芋の芽を植ゑ初める。電車の過ぎる音。〕

百姓甲　…………〔正面向きに鍬を突いてつッ立つてゐたまま、舞臺向つて右手の奧を、きッとふり向いて睨む。〕

女房甲〔第一うねを半分ばかりさがつて行つたところから、渠の横向き姿をぢッと見て、芋の芽を持つた手を忘れたやうにして〕お前さんは、けふ、餘ッぽどどうかしてるんだよ……こんなうなひ方ぢやア困るぢやアねいか？〔また下を向いて

土くれを手でこわしながら〕もッとこまかにしねいぢやア
――〔一つ、あとずさりをする。〕
百姓甲　文明開化とア人のいのちを縮めたり、人の娘を夜這ひさせたりすることけい！
女房甲〔一心に土くれをこわしながら〕それでも電車などが出來て、近頃ア便利になつた、さ。
百姓甲　便利過ぎて、おら達にやア不便だ！
女房甲　お父さんは出て見ないから、さ、ね。
〔百姓甲も元のところへ納まつて、不精無精に鍬を續け初める。〕

（四）　百姓乙、百姓甲、女房甲

百姓乙〔肥桶をおもさうにかついで、穴のある方に現はれ、穴の外がはを、穴の長さの半分ばかり來たところで踏みとまり、百姓甲の方をぢッとおそろしさうに見やつて――これはふとつた顔付きだ〕通らして貰ひます。〔また進み出す。〕
百姓甲　………〔休めた鍬の柄を固く握つて、からだを延ばし、ぢッと乙を憎々しさうに見詰めてゐる。〕
女房甲　………〔これも意地惡さうに見詰めて、立ちあがつたが、第二のそれに渡つて、直ぐ奥のうね先きを舞臺に尻を見せて跨ぐ。〕
百姓乙　………〔その道を半分以上も來たところで呼びとめられる。〕
百姓甲　おい、植木屋！
百姓乙〔踏みとまつて、顔だけをその方に向けて〕おらア何も植木屋ぢやアねい。
百姓甲　百姓が植木屋のやうな手間取りをするのが文明開化けい？
百姓乙　そんな因業なこと云ふな――お互ひにこんな世になつたから、百姓してゐるばかりぢやア喰へねいんぢやアねいか？
百姓甲　そりやア、お前のやうな都會ものにへいへい云つてくやつ等の云ふことだ。
百姓乙　それでなきやア喰へねい、さ――お前のやうに强情でも困るぢやアねいか、あすこにあんな大きな穴を掘つて、さ、夜など歩くにあぶなッかしいッて、お屋敷がたでこぼしてゐるぜ。
百姓甲　通るべき道路ぢやアねいんだ！
百姓乙　それが、さ、どんなところだッて、人が通り

出しやア仕方がねい。おらの畑などア、大事な眞ン中を突き抜けられたア、な。

百姓甲　お前のやうな、都會ものの世話になるやつ等にやア仕方がなからうが、おらア都會は怨敵だ！

百姓乙　それでも、あんまり因業だから、お前のわなにお前の娘がかかつたぢやアねいか？

百姓甲　そんなことアお前の厄介にやアならねい――二度とそこを通るな！

百姓乙　そりやア、然し、無理だぜ。

女房甲　作兵衛さん［と、立ちあがつて、その場に正面に向きなほり］　おらんとこの娘のことを云つたが、ね、お前んとこの娘のざまを見ろよ――どこへ奉公に行つても、氣儘で勤まらないから、また歸つて來てるぢやアねいか？

百姓乙［むツとしたが、わざとおとなしく出て］　あれにも困るが、まア、あの穴を埋めて置くがいいぜ、功德にならア。

女房甲　うちのことなど云つて貰はねいでもいい！

百姓甲　二度と通るな！

百姓乙　……。

［乙はあとをかまはないで、舞臺向つて左りの方へ退入る。あとの二人は暫らくその方を見詰める。］

（五）　女房甲、百姓甲

女房甲　なんていめ〳〵しいぢぢイだらう？

百姓甲　今度通つたら、ぶんなぐつてやるがいい。

女房甲　人の娘のことばかり云やアがつて、あいつのうちのアどうだ――ざまだけでも見やアあるがいいさ。――でも、ほんとにお前さん、ちよツくら云つて來ねいでもいいかよ？

百姓甲　かまうもんか！

［二人はまた仕事にかかる。］

（六）　通行人若い細君風、老母、百姓乙、甲、女房甲

細君風［若い作り、舞臺奥から、向つて左り手前方の道路を、老母のさきに立つて、ちよこ〳〵と出て來て、百姓乙のあとを呼ぶ。］作兵衛さん――作兵衛さん！

百姓乙〔また同じ様子で出て來て〕へい、今日は。〔舞臺向つて左り手の三角點のところに立つ。〕

細君風〔奥からの道にゐて〕今出て行くところで、見えたから呼んだのだが、ね、娘さんの奉公口は——聽いてあげたが——駄目ですとよ。

百姓乙　さうですかい？

細君風　折角いいとこだと思つて聽いてあげたんだが、ね、あの兒なら、氣ままでどうせお尻が落ちつきッこがないッて、ほかさまへもよく分つてるが、ね——そんな兒ぢやア仕やうがないぢやないか、よく云つて聽かさないぢやア？

百姓乙　へい——あれにも困つてをりますので——

細君風　よく云つて聽かせておやりよ、本人の爲めにもなるまいから——誰れだッて、そんなぢやア使ひ手はない、わ、ね。

百姓乙　へい——

老母　ほんとに、本人の爲めにやアならないよ、よく云つて聽かさないぢやア。

百姓乙　へい——

百姓甲〔いい氣味だと云ふやうに、女房甲と共に、じろじろと見てゐたのが、獨り言のやうに〕ざまア見ろ！

細君風〔ちよッとその方に氣を向けてから〕それに、あの、うちの垣根はいつ直して呉れるんです、ね、旦那がぶつぶつ云つて困るぢやアないか、ね？

百姓乙　へい、きのふ、けふ、少し茄子苗の方でいそがしう御座いますので——

老母　早くしないと、いけないよ。

百姓乙　へい。

女房甲　ほんとに、植木屋か庭造りさんだア、ね。

細君風　ぢやア、賴みますよ。

老母　あの兒にも云つてお聽かせよ——今時、そんなに氣ままぢやア人の信用が置けない、わ、ね。

〔細君と老母とは前方の道へ出る。百姓乙はもとの通り退場。〕

（七）　老母、細君風（百姓甲、女房甲）

老母 〔先きに立つて行く細君風に〕實に、あんな兒だとは思はなかつたが、ね――ちよッと見るといい兒だが――
――

細君風 〔穴のところまで來て、のぞき込みながら〕おッ母さん、また深く掘りましたよ。〔斯う云つて、百姓甲の方を見る。〕

老母 〔も、そのそばへ行つてから、のぞきながら、百姓甲に當て付けるやうに〕ほんとに、ひどいんだ、ね――村役場の方で時々見まはりに來ないからいけない。誰れが落ッこちないとも限らないのに！

細君風 思ひやりのないものがあるからいけないのだわ。

老母 さうだとも、ね。

〔ちよッとまた二人は百姓の方を見る。百姓甲も、女房甲も、段々、向つて右の方に仕事を寄せて來てゐた。細君風、續いて老母、退場。〕

（八） 百姓甲、女房甲

百姓甲 〔二人退場の方を苦々しさうに見てから、獨り言のやうに〕自分の娘がちんばになりやア、もう、どうしたッてこつちに罪ア來るものか？

女房甲 あんないい奥さんを持つて、全體、あの旦那はどうしたと云ふんだらう――百姓の娘なんかに手を付けて？

百姓甲 〔女房の言葉には頓着せずに〕おらア喰へなくなつたら東京中を燒き拂つてやらア！

女房甲 金にしてやんなよ――今のうちに――もう、いよ〳〵片輪になりやア、あの兒も嫁にやア行けねいや、な、可哀相に！

（九） 女房乙、百姓甲、女房甲

女房乙 〔でッぷり肥えた方、籠に茄子の苗を入れて、それをかかへながら、穴のある三角點に現はれて〕通して貰ひます。

〔この時、また電車の響きがする。〕

百姓甲 〔響きの方を睨んでからだを延ばした勢ひが、女房乙に對する荒々しい返事になつて――もう、穴のある三角點の近くを前向きにうろなつてゐた〕通ることは無用だ！

女房乙 〔穴の長さ以上に步いて來たのが、踏みとまつて〕さうか、ね――

女房甲〔後ろ向きのままその方を見て〕まご〳〵しねいで、まはんなよ！

女房乙〔あと戻りしながら〕今まで便利に通して貰つたのに、な。お竹さんが落ち込んだのがいけなけりやア、穴を埋めたらいいぢやアねいか、ね、わけもねいこッたのに、な。

女房甲　大きにお世話だ！

百姓甲　道路ぢやアねいんだ！

女房乙〔三角點から曲つて、舞臺向つて左り手の奥へ通ずる道を、怒つた樣子でつか〳〵歩み行きながら〕通して呉れたッてよからうに、な——

女房甲〔後ろ向きになつてたので、直ぐ女房乙の方へ目をやつて〕通さうが、通すまいが、こッちの借りてる地面なら、こッちの勝手だ。——お前んとこのお初は、な、氣ままで奉公が出來ねいほど結構なお姬樣だとよ。

女房乙　それこそ、大きにお世話だ——まだ片輪などにやアならねいから、な！

女房甲　さぞ立派な奥さまにお成りなさらう——あのお顏で、な。

女房乙　お前んとこのは何だ——おかめとひよッとことを突きまぜたやうで？

百姓甲〔前向きに鍬を使つてるまま、自分の右から顏だけちよッとその方へふり向けて〕畜生！とッとと行きやアがれ！おかめでも、ひよッとこでも、な、手前等のやうに都會ものの世話にやならねい！

女房甲　さう、さ、ね、馬鹿！

〔またうつ向きになつて、芽を植えながら、舞臺の前方へあとすさり〕

女房乙〔奥の三角點から、舞臺向つて左り手の前方へ道をまはつて來ながら〕へん、斯う通つてゐりやア、何とも云へめいさ——菱餠のやうな畑など通して貰はねいでも。

百姓甲　かちやりと云つたと思つたら、おい〔と、女房甲に向ひ、左りの手は鍬に着け、そして右の手に拾つた物を見せながら〕こんな石があつたぞ。

女房甲〔返り見はしないで〕また通りすがりの子供でも投げ

てッたのだらうよ。

「電車の音。」

百姓甲　また來やアがつた、な！〔石を持つた手を擧げる。〕

女房乙　……〔わざと横を向いて舞臺向つて左り手の前方まで出た時、渠の突差の叫びを聽いたので、自分に向つて發せられたのだと思ひ込んだやうに、退場眞ぎはゝ驅け出しながら、渠の示を見る。〕

百姓甲　えい！〔聲にも右の手にも力を入れて、正面から、舞臺向つて右手の方へ石を投げる。〕

（一〇）女房甲、百姓甲

女房甲〔後ろ向きだが、顔を心配さうに百姓甲の方へ向けて〕お前さん電車に石を投げたんぢやアねいか、ね？

百姓甲〔前向きに鍬を働かせながら〕投げたくもならア、な。

女房甲　でも、罰金どころぢやアねいぜ。

百姓甲〔輕く〕誰れが知つてるもんか？

女房甲　でも、ね――〔なほ心配さう。〕

百姓甲　……

〔渠は無言で、さア濟んだと云はぬばかりに、自分のそばの三角點の向ふ側の道に出て、女房甲のまだ植ゑ殘りの分を急いでるのを見ながら、鍬を立てたその上に自分の兩手を置いて、からだをずッと延ばす。〕

女房甲〔植ゑ付けを急ぎながら〕わしも直ぐ濟ませるが、な

――

百姓甲〔ふと思ひ出したやうに、立てた鍬を離れて、三角點のそのさきへ行き、土堤下の線路をのぞいて見て、ぎッくりしたが、何氣ない振りをして、鍬の立つところまで來て〕電車がとまつてらア。〔聲が顫えてゐる。〕

女房甲　え！當つたんぢやアねいか、ね？〔心配さうに渠の顔を見る。〕

百姓甲〔わざと落ち付いて〕當つたッて、かまうもんか、誰れのせいとも分らねい以上は？

女房甲　さうかも知れねいが――〔また植ゑ付けをしながら〕道理で何だか胸騷ぎがしてイたんだらう。ゆふべから日が惡いのか、あの兒はおほ怪我をするし。お前（めい）さんはうなひ方がうまく行かねいし。わしまでも亦あんなかみさん等と喧嘩をするし。まさか、辛（から）しの交（ま）ぜッこをしてイるんぢやアあるめいし、さ、この

芋ばたけもどうせ碌なことアねいぜ。二度あることア三度あると云ふし、な。

百姓甲〔鍬を肩にかけて、少しからだを饑期の恐怖に顫はせながら、その道を、向つて左りの方へ進んで、女房の植ゑ付けたあとを見まはりながら〕人間はどうせ、病氣でなけりやア喰へねいで死ぬんだ！

女房甲〔手をちよツと休めて、渠の方を向き――この時は、かの女のからだは前向きにしやがんでゐる〕またいつもの焼けになつてさ――しツかりかせがねいと、あの兒にも可哀さうぢやアねいか、ね？

百姓甲　なアに〔と、意地惡くまた憤慨の樣子で、奥の三角點を反對の道路に曲つて前方に歩きながら〕あいつまでが都會くさくなりやアがつて――とう／＼おらの心までも三(さん)角畑(かくばたけ)にしやアがつたんだ！

女房甲　三角だツて、四角だツて――〔また一心に手を働かせる。〕

百姓甲〔向つて左りの手の道路の長さの眞ン中ごろに立ちどまつて、肩から鍬をおろし、それを杖について、女房の方に〕去年は、立派な屋敷の奥さんが女中と一緒に、あの多吉の畑を掘つて、赤い芋を盗んだことがあつた。ことしやア今から、おら達の娘が掘り返された。都會ものと云やア、まるで、泥棒か色事師だ。

女房甲　だから、今のうちに金にしておやりよ――どうせ、折れた芽は二度と物にやアなるまいから。

百姓甲〔鍬の上に兩手を乘せたまま、からだをゆすつて〕ああ、もう、焼けだ――おらア世の中がいやになつた！〔少し間を置いて、半ば獨り言のやうに〕金があつたツて、百姓が圓くなり四角なりに落け付ける所があるかい？

女房甲　わしもやツと濟ませたが、な――〔とツ先きの三角點外で、明き籠の中の泥をはたき落し、兩手をもはたいてから、立ち上つた。〕

百姓甲〔かの女の立つてるところまでを自分の方から見渡して〕何だツて、お天道さんはおらの畑をこんなに三角がたに縮めて來たんだ？

女房甲　でも、けふは照らず降らずで結構だア、ね。

〔かの女もちよッと、栗がしたやうに線路の方をのぞいて見たが、びッくり、あわててふり返り、舞臺前方の道を畑に觸れないやうに、眞ン中ごろまで小走りにやつて來たり〕今の奥さんがハンケチで繃帶をして來るが、ね――

百姓甲 ……〔更らにぎッくりして、暗欝と忿怒と恐怖との混亂。〕

女房甲〔云つて聽かせるやうに、そして腰を曲げて顔だけを栗の方へ突き出し〕默つて、ね――感づかれちやアいけないよ。

〔かの女はもとの三角點をまはつて、奥へ通る道路の端へ立つ。〕

（一一） 老母、細君風（百姓甲、女房甲）

老母〔先きになつて、細君風の左りの手を引いて、女房甲の顔を睨みつけるやうにして出て來て〕またあぶないよ――例の落し穴だから、ね。

細君風〔白のハンケチをつないだので頭を額の方まで繃帶してゐるが、なほその額を繃帶の上から右の手で押さへて、引かれながら〕はい。

老母 電車に石を投げたりして、さ――どいつだか大抵分つてる、わ、ね！

細君風〔いたさうな様子だが、氣のないやうな聲で〕さうですとも！

〔百姓と女房とは、兩方につッ立つたまま、靑ざめて、ちッとその方を見詰めてゐる。〕

老母〔舞臺向つて左りの方を見て、氣がついたやうに〕あ、巡査が來るよ――直ぐ云つて置かうよ。

細君風 ……

〔この兩人はその方へ退場して行く。百姓夫婦はどうしようと云ふやうに、畑を隔てて、顔を兩方から見合せる。〕

（一二） 女房甲、百姓甲

女房甲〔聲に顫えを帶びて〕いい氣味だが、な――

百姓甲〔これはまた一しほおぢけづいてるが、わざとにも強さうに〕天罰覿面だア、ね――あいつの淫亂亭主の罪が報つておらの娘のかたきがひよッくら取れたやうなもんだわ！

女房甲 でも、巡査が來たら、どうする？

百姓甲〔舞臺向つて左りの方を見込んで〕へん、畜生！〔少しゆッくりした口調で、女房の方に向き直つて〕おらが投げたとアきまつてねいや。

（一三） 老母、巡査、女房甲、百姓甲

女房乙、細君、百姓

老母〔今退場した方から、細君風の手をもとの通り引いて、他のもの等の先きに立つて出て來て、遊んでゐる左りの方の手で穴の方をゆび指しながら〕兎に角、あのやうな穴を明けてあるのですから、ね。

巡査〔おほ股に歩き拔けて、前方の道を一杯に進み行き、穴をのぞきながら〕成る程、大きなやつを明けたものだ。

女房甲 ………〔青くなつてだが、巡査の目の落ちるところへ、自分のも落てゐる。〕

巡査〔かの女に〕これはお前とこの亭主が掘つたのか？

女房甲〔おづ／＼して〕へい。

百姓甲 ………〔向ふの方で、鋤へ後ろ向きで、巡査のゐる方とは反對に横向きになつてゐる。〕

巡査 不都合なやつだ！

女房甲 でも、うちの畑を通られて困りますので――

巡査 然し、今聽くと、お前とこの娘がゆふべ落ちておほ怪我をしたといふぢやアないか？

女房甲 へい――

巡査 こら、鶴松！

百姓甲 ………〔その聲の方へちよッと振り向いたのが、自分の方へ巡査がまはつて來かかつたのを見て、立てた鍬を置き去りに、奥へ逃げ出さうとした。〕

巡査 こら、待て！

百姓甲 へい。〔おづ／＼答へて、踏みとまる。〕

女房甲〔巡査が畝を踏みたくつて行くのを見て〕今植ゑつけたところでございますが、ね。

巡査〔百姓甲のおづ／＼立つてる道へ出てから、楽に〕貴様は今何をした？

百姓甲〔少し返答にまごついてから〕芋の植ゑつけをしてをりました。

巡査 そのあひだに、電車に石を投げたらう――？

百姓甲〔白ばッくれて〕いえ、そんなことは致しません。

女房乙〔これもこの前から百姓乙と共に出て老母並に細君風の後ろにゐたのだが、この時巡査のあとに驅けて行つて、百姓甲に〕わしが今見たんだよ。

巡査　ふといやつだ！〔一つ横ッつらを喰らはせてから〕こッちへ來い！〔と、肩のところをつかまへて、引ッ張る。〕

百姓甲　……〔からだは引ッ張られても、腹には少なからず反抗のおもみがある様子。〕

巡査　こッちへ來い！〔またぐいと引ッ張る。〕

百姓甲　……〔引ッ張られながら、踏みこたへる。〕

巡査　來い！

〔引く、こたへる、この兩勢の中心がそれて、巡査が先づ畑の中へ踏み入つたが、百姓甲も一二歩踏み込んだのが最後の焼けッ腹になる初めて、巡査の力を一二歩引き戻して、もとのままに立つて鍬の柄の中ほどを右の手に攫むと、また巡査の方に引ッ張られる。〕

百姓甲　……

巡査　來い！

〔いよいよ二人とも畑の中へおのづから踏み込んだことになる。〕

女房甲〔穴のある三角點を前方の道へまはつて來て、顏に怒りを帶び〕なんぼおせはりさんだッて、人の畑を踏みくちやにして、さ――〔少しおだやかな口調になつて〕うちのア電車に投げたんぢやア御座いません。

巡査〔かの女に〕現に、あのお方の〔と、細君風のゐる方を見せて〕顏に當つたぢやアないか？

女房甲　どこかの子供でも――

巡査　馬鹿を云へ！

女房乙〔奥から舞臺向つて左り前方への道から、ば獨り言らしく〕それこそ、子供のやうなうそを云つてらア！

巡査〔百姓甲に向き直り〕貴様はもとからこいらの注意人物だ。一度は引き上げられるにきまつてたのだ。

百姓甲　なんだと？〔いよいよ暗欝な不平家の本性を顯はして、鍬をしッかりと握つて〕警察までも、もう、都會もの等の氣ままや淫亂を手つだふまわしものかい？

巡査　何を――無禮な！〔とッつかまへようとする。〕

百姓甲　えい――どけ、どけ！

〔渠は鍬を兩手に握つて、巡査の足もとを拂はうとしたので、巡査は二三歩とび退く。〕

老母〔もとの場所に立つて見てゐたのが、細君風に〕おそろしい男だ、ねえ。

細君風〔手を取られてゐるままで〕さやうです、ね。

女房甲　お父さん、手荒いことはしなさんなよ。

百姓甲　おらア、もう、覺悟だ——この畑までこんなに荒されるほどなら、いッそのこと、自分でみんな荒してやらア！

女房甲　そんな無茶苦茶云つたッて——

百姓甲　なアに、かまうもんか！ええッ！——ええッ！うん！——うん！〔と、鍬を左右にかたみがはりに振つてうなりながら、畑のおもてを崩す。〕

女房甲　父さん！〔飛び込んで行つて、中央に荒れる菜の、向つて右の方から、とめようとする。〕

百姓乙〔かの女とは反對の方から、これも飛び込んで行つて、あまり惜しいと云ふやうな風て〕おい、あんまりむごいことはすなよ——あんまり。芋畑に罪アねい、わ、な。〔とめようとする。〕

老母〔段々おぢ氣づいて來たやうに〕まるで氣違ひだ！

細君風〔聲が顫えて〕さう、ね。

女房甲　父さん！〔思ひ切つてとめようとして、鍬で足をすくはれる。〕あ、いてい！〔倒れる。〕

百姓乙　あぶねいぶりやアねいかッ〔思はず、とめに飛び込んで行く。〕

百姓甲　この密告め！〔鍬をあげて百姓乙の脛ッ腹をなぐり付ける。〕

百姓乙　いてい！〔倒れる。〕

女房乙　なにしやがるんだ、うちのを？〔畑にとび込んでから、途中にまごつく。〕

百姓甲〔百姓乙をぢッと睨みつけて〕おらの事を密告させやアがつて！いッその事なぜ娘の夜這の密告しねい……

細君風　行きましよう。

老母　あぶないから、ね。

巡査　久原さん、ちよッと待つてゐて下さい。〔と、最後の二人が退場しかけるのをとめる。〕

老母、細君風　……〔共に默つてたが、顔を見合せながら、未練さうに、また氣味が惡さうに踏みとまる。〕

巡査　鶴松！貴様は電車妨害、官吏侮辱、殺人または身體傷害、二重にも三重にもの犯罪者だぞ！

百姓甲〔巡査をまた睨み付けて目は燃えてゐる〕それでも、な、おらア都會もののやうにやア人の畑にも踏ん込まね

！人の娘を無断で盗みもせぬ！あの繃帯をしたかみさんの〔と、細君風の方を注意させて〕亭主なんかを見ろ——おらの娘を無断で呼び出しやがつて、毎晩（めえばん）、あの廣ッぱで〔と、舞臺向つて左り手の前方を見やつて〕自由にしやアがつてたぢやアねいか？

女房乙　お前（めえ）んとこのア締りがねいんだ——それであの穴へ落ッこちやアがつて！

百姓甲〔それに頓着せず〕その天罰がとう〳〵かみさんに報つて、あのざまア見ろ！

巡査　そりやア、人の娘を無断で呼び出すのもよくないが——まア、その鍬を置け。

細君風　………〔突然、泣き崩れかける。〕

老母〔細君風に向つておも〳〵しく〕何を泣きます？

細君風　………〔なほ默つてたが、姿勢を直す。〕

老母〔かの女を引いた手を放して、少し前へ出て〕うちの主人にそんなみだらなことは、家名に誓つて、御座りません。

百姓甲〔今度はその方を睨み付けて〕何も知らねいで、畜生！それがみんな都會もののうそだぞ！

巡査〔も、渠の勢ひをおそろしがつてるやうだが、聲だけは命令的に〕まア、鍬を置け。

女房甲〔足が痛む様子で、半身を起し〕おまはりさん、娘の手つけ料をあのかみさんに貰つて呉れねいぢやア、とても、あの兒とわしの療治代は出ません。

女房乙〔少し進んで〕それよりやア、うちの人は死んでるのか——生きてるのか？

百姓甲　どうでもいいや！

女房乙　………〔渠ににらまれて、またあとずさりをする。そして遠くから〕お父（とう）さん！　お父さん！

百姓乙〔倒れたまゝ、うなる〕ううん——とても、助かるめい。

女房乙　ええッ！〔びツくり。〕

老母〔今少し進み出て、愛相笑ひをしながら、巡査に〕念の爲めにあなたに申し上げて置きたう御座いますが、ね、

うちの主人に於いては決して――

巡査　〔おもくしげに〕いや、お宅の御主人はその點では評判がよくないのが、警察にも知れてゐます。

老母　でも、そんなことは――

巡査　ぢやア、此間、神社の森で探偵に見つかつたのはどこの御主人です？

老母　……〔ぎツくりして、一二歩あとずさり。〕

細君風　わツ――〔と、こらへ切れないで泣き出す。〕

百姓甲　……〔ぢツとその方を横向きに見つめてゐたのが、正面を向いて、暗澹な顔でにツたりと笑ふ。〕

女房乙　父(とツ)さん、しツかりしなよ。

百姓乙　……〔返事をしない。〕

女房甲　お前、人を殺して濟みますかい？

百姓甲　人の死ぬ、生きるをおらが知つたことけい？

巡査　兎に角、鶴松、鍬を置け。

百姓甲　よく分つた警官に面じて、おらは、もう、あきらめてやる――えい！〔と、鍬を力一杯出して後ろの方へ投げる。それから、畑の眞ン中に、正面向きに、どつかりあぐらをかいて、あまり氣張らないで〕さア、殺すなり、縛るなりして貰はう。この畑の眞ン中で取られりやア、おらア本望だ！

巡査　……〔默つて用意の綱を出してゆるめる。〕

老母　〔巡査に〕では、只今お呼びとめになつたのは――？

巡査　〔かの女に〕もう、大抵分りました――いづれ、また改めて――

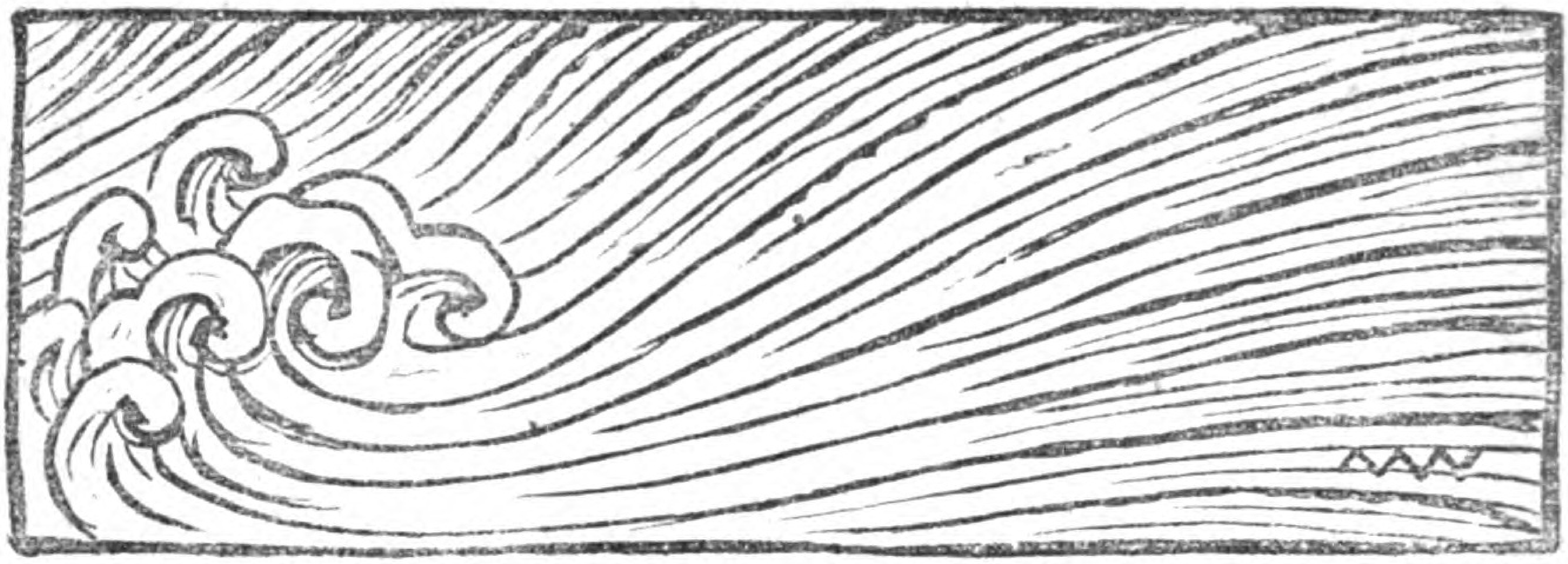
老母　左様で御座いますか？〔また愛相笑ひをして、細君風の手を取つたのが、何だか心殘りがする樣子。〕

女房乙　うちのをどうして呉れるんだ？

女房甲　ひよんなことになつた、なア！

百姓甲　……〔ぢツと下を向いてゐる。〕

巡査　……〔無言で、綱を以つて百姓甲に近づく〕――幕



社會劇

爆發

中村吉藏

登場人物

呉服店丸嘉の主人	遠山嘉一郎
その妻	お道
その娘	近子
番頭	保科新介
手代	西田善吉
赤菱商會の三男	赤菱慶吉

時

現代

場所

東京下町の老舗の納戸

○

舞台正面の中央に、一對の眞鍮の眼を持つた中形の黒い金庫が据付けてある、その傍には帳場格子が置かれ、直ぐ背后の戸棚の下割は帳簿箪笥が入つてゐて、上手隣は櫺子窓になつてゐる、戸棚の下手には表の店頭へ通路の、◉と染抜いた紺暖簾がかゝり、つゞいて左手の一隅は電話室、その中央は二階へ上り口の段梯子、一番前は壁になつてゐる、右手は障子を明放して、廻り椽が見え、直ぐその庭前に、鼻を突くやうに白壁塗の倉庫が立つてゐる、廻り椽と倉庫との奥の一角からは午後の薄暗い日蔭を浴びた青い庭木がチラ〳〵見えてゐる。

○

母のお道は四十余才の大年増、油濃い丸髷に結つて、少し抜衣紋て、懶さうに針仕事をしてゐる、その傍に、銀杏返の、廿歳前后に見える色の白い、眼の活々した娘近子は、折々溜息をしたり、考へ込んだりしながら白地の、男物の浴衣地を裁ちかけてゐる。

近子 (物尺を使ひながら)「彼のは、三尺六寸の丈で善いわねえ、お母さん、然うですね……」

お道 (氣の無ささうな調子で)「私は知らないよ……先刻、汝が自分で新介の單衣を引張り出して來て、寸法を取つてた癖に、もう忘れて了つたのかえ?」

近子「何んだか頭がムシャクシャして、髪毛に火でも燃え附いてるやうな氣持がするんですもの、一寸前の事が夢にでも見たやうにうろ覺なの……寧そもう病氣になつて了やア善いんだ……イヤ、もう私は病氣になつてるんだわ」(泣出しさうに云つて、物尺を投出す)

お道 (心配さうに、見つめて)「そんなに焦々しちいけないつて云ふにねえ……汝ももう赤兒ぢやアあるまいし、一旦アゝして赤菱さんへ嫁くつて事を承知して、お父さんにも漸つと安心させたんだから、もう善い加減にしてあきらめを附けるんですよ、何しろ先方はお金が澤山あるんだから、それこそ汝の思ふ存分、贅澤も出來やうし、面白い目も見られやうて云ふもんです、一時は不幸と思ふた事が、後から見ると幸になるもんだからね」

近子 (獨語するやうな調子で)「そりや私だつて、貧乏華族の處へ嫁いて善い氣になつて威張つてる友達なんかにも見せ附けてやり度いんだから、浴びる程お金の

使へる處へ嫁つて見度は見度いんですけれども、あの人が繁々、此處へ出入し出してから、私は何んだか一日、一日忌アな氣持がして來てよ……第一、私はあの人のお喋舌が氣に喰はないわ、口先丈で、腹がないやうで、便にならない氣がするんだもの、永年、アメリカへ行つてたていふのも、學問の勉强や商賣の見習ぢやアありやあしない、あんまり放蕩だから、日本に置けなくなつたのだつて云ふんでせう…
……」

お道（呆れたやうに、遮つて）「まア、汝、……お聟さんになる人の事をそんなに惡口云つて、後ではこのお母さんに極が惡くなる時がありますよ、一體誰が汝に慶吉さんの事を惡く云つて聞かせるんだね……新助なんかが何處からか善い加減な事を聞き出して來て、汝を突つくんでせう？」

近子「惡い事は誰でも云つて聞かせてくれますわ、こんな事になると、他人の方が親よりも正直ですからね……あの人が妾の子だつて云ふのも、仲人から私に打明けてくれたのぢやア、ありませんか、お母さんなんかは知つてゝも知らん顔をなすつてたんだもの」

お道「汝のやうに、然うヅケ〳〵云つてた日には底も蓋もありやアしませんよ、他人は人の幸福を妬かんで、無理遣にでもケチを附けやうとかゝるんです、そりやあ慶吉さんが、大して豪い人間でもあるまいが、別に出世する見込もない家の新介などよりは、ズッと增ですよ、新介も從前辛棒人には相違なかつたけれども、この頃は宛で人間が變つたやうになつて、チョイ〳〵外泊なんかする、現に昨晩からまだ歸つて來ないぢやアないかえ、何もお稽古だから、汝が彼に浴衣位縫つてやるのをお母さんは、別に何んとも云やアしないけれども、今更、下らない事をヤキモキ思ふの丈はお止しなさいよ」

近子（焦たげに）「私はそんなに新介の事許り思つてる

のぢやアないわ……私の良人になる人は、まだ何處か他にあるやうな氣がします、その人にまだ逢へない中に、親の命令で、無理に嫁付いて行くんだと思ふと、それが口惜しいわ……」

お道「ホヽヽ、そんな夢のやうな事を的にして、ぼんやり待つてたら汝、腰が曲りますよ……（窘めるやうに）馬鹿な事を云ふもんぢやアありません」

近子「ねえ、お母さん……新介が外泊つて來たりなんかし出したのも、この話が始まつてからの事だわ、彼が惡いのぢやアない、矢張、此方が惡いんです、私がついお父さんや、お母さんの口車に乘せられて、輕卒な承知をしたのが、いけなかつたんだわ、もつと考へて見りや善かつた、何うしてこんなに氣が弱いのでせう、私は馬鹿ね……自分で自分に愛相が盡きて了ふわ……チエツ……」（ヒステリカルに、浴衣地の切れをモミクチヤにする）

お道（横から奪つて）「そんなに汝、肝癪を起すんぢやありませんよ……（布の皺を延しながら）こんなに皺クチヤにして了つて、仕樣がないぢやアないか、折角の汝の信切が無になりますよ……一體、新介も何處をうろついてるんだらうねえ、此方で手を張るやうに思つてるのも知らないで、善い氣なもんだ、もう何處かに情婦でも出來てるのだよ、男子つて皆あゝしたもんだ、一圖に思込むのは眞實に馬鹿々々しいよ」

近子（忌な顏をして）「私、彼の事をそんなに思つてるのぢやアないつて云ふにねえ、お母さんも理解らない人……先頃の朝なんか、彼がぼんやりした顏をして歸つて來たのを見ると、何んだか、淺ましいやうな憎いやうな氣持がしたんです、けれどもお父さんが頭から嚙み附くやうに叱り附けなさるので、私はつい氣の毒になつて、あんなに酷く云はなくても善からう、お父さんもあんまりだと思ひました、あの時は、もう赤菱なんかへは行きませんつて、お父さんの前へ出て云つてやらうかと思つた位ですわ……一

證お父さんは冷酷よ、人情がないんだわ、あれが眞實の親か知らと、私、時々然う思ひますわ、小兒の時から、何んだか、そんな氣がするんですもの……」

お道　（濟まねやうな顏色で）「お父さんは唯、あんな性分なんだよ、加之、斯ういふ時勢になつて、商賣の方では、他に資本が澤山あつて、當世向の派手に、派手にとやつて行くのが段々出來て來るし、此方は焦れれば焦れる程、手許が苦しくなつて、行詰まつて來たんだからもがいて許りゐるんだよ、……考へて見ると氣の毒な人サ……」（鬱ぎ込んだ調子）

近子　（小い嘆息を吐いて）「然う云へば私が小學校へ行つてた頃は、この店も隨分繁昌してゐましたけね、賣出しの時なんか、お客がもう黑山のやうに、店頭へたかつてゐた事をまだよく覺えてゐますわ、私が女學校を卒業する前後から、何んだか店へ入つても暗いやうな、陰氣な氣持がしてゐましたけ……尤も、三星だの、平木だのつて、傍にあんな大仕掛なのが出來ちや、とても敵ひませんわねえ、私等だつて、同じ買物をするなら、あんな處へ出かけて行く方が氣持が善いんですものね、大きい處は段々大きくなつて行く一方だし、小い處はそれに押されて、潰れて行くんだわねえ……」

お道　「これでも汝、「丸嘉」つて云へば江戸の頃からズッと續いて來た名代の老舗だつたのよ、店構こそ小さいが、彼方此方の大小名の奥向へもお出入をして、御贔負を受けてたもんださうだからね、今このまゝで潰しちや先祖樣へも濟みませんよ」

近子　（陰氣に笑つて）「お母さんや、お父さんが、あんまり先祖々々つて仰やるもんだから、私迄それに感染れて了つて、つまらない虛榮心が燃え立つて來たんだわ……けれども相手が、華族で、富豪で……それから私の空想に描いてるやうな男子なら善いけれども、あんまり世間の評判の善くない赤菱の妾の子の處なんかへ嫁に行くのは、何んだか身を賣るやうな

忌な氣持がしてよ、人に笑はれるかも知れないわ」

お道「誰が笑ひますか？　娘を持つた親は皆羨みます、そんな汝のやうに、立派な處へ嫁に行くのを、身を賣るの何のつて云つちやア、罰が當りますよ」

近子「だつて私は、何んだかそんな氣がするんですもの……（兩手でソット横腹を押へて）……寧そ罰が當つて死んで了つたら恰度善いわ」

お道（娘の顏を熟と見て、沁々した調子で）「思ふ通りに行かないのが、娑婆つて云ふもんですよ……お母さんにだつて、汝の氣持は善く分ります、唯、お母さんはそこをヂッと辛棒して來たんだからね、矢ッ張月日は藥なんだよ」

近子「お母さんはお父さんが好きぢやアなかつたのね？……でも今はもう善くなつて？」

お道（人氣配に耳敏く）「シッ……お父さんらしいよ」

（遠山嘉一郎、もう五十才を越した、胡麻鹽頭の老人、少し血走つた眼が險しく光つてゐる、臺灣パナマの帽子をそこへ拋り出し、大島絣の上に、絽の羽織を着たまゝ、汗を拭き／＼ぐつたり疊の上に倒れるやうに坐る）

お道「お歸んなさい、戶外は暑いでせうねえ」

近子「お歸り……手拭でも持つて參りませうか？」

嘉一郎「否、要らないよ、まアこの羽織を取ろう……空梅雨でムウ／＼蒸すもんだから、走り廻ると相應に暑い……加之、電車の中が混雜んで居てな、ずーと釣革にぶら下つてたもんだから、脚が疲れて棒のやうになつた、（押へて見て）少し腫んでやがる、歲を老ると何處も彼處も、損傷が出て來るんだな」

お道（慰めるやうに）「でも貴方は氣一つで持つてるんですよ、今から弱音を吹いちやいけませんわ」

嘉一郎（勢のない調子で）「そりやア自分でお氣は附いてるがなお道、今日といふ今日は、私もスッカリ雪隱詰になつたんだよ、銀行へ明日の正午迄に持つて行かなけやならないあの約束手形の貳千圓といふ金の工面が附かない、今日も三處賴みに行つて、二處な

から體よく斷られて了つたんだ、京都の織元へ知れたら品はバッたり止まつて了ふ、をまけに方々の債權者が湧き立つて來やうし、これで愈々丸嘉の店も戸を閉めなけやならん事になるだらう、然う思ふと、汝等にも申譯がない」

お道（曇つた顏色で）「私はまだ何の口かで融通が附くだらうと思つてゐましたが、もうそんなに方々で、信用がガタ落に落ちて了つたんですかねえ、困りましたね……でもまだ赤菱へはお話なさらないのでせう？」

嘉一郎「如何に逼迫したからつて、丸嘉が二千圓の融通に困るつて云ふやうな事を、私の口から何うも彼處へはぶつゝけに談しには行けないんだ、勿論向ふでも、此方の手許の不如意な事は萬々承知してるんだから結婚の儀式が濟んだら、何萬圓かの合資會社にして、それ……デ……パアメントか……？」

お道「デパアトメント、ストアーだつたね、近子？」

嘉一郎「……その……ストアーにするつて目論見だらう、それが愈々成立つ迄は、此方でもチット齒を喰縛つて、この襤褸々々の内兜を見透させ度くはないんだ、向では現金を積む……此方は丸嘉といふ老舖の古い軒簾が資本なのだから、その資本へ高い價の附く前に、頭から踏倒してかゝられるやうな、へマな眞似はやり度ないんだ」

お道（簪で頭の中を掻きながら）「それは然うですけれども、手形が不渡となつたら、それ限丸嘉の軒簾も潰れて了ふぢやァありませんか？背に腹は替へられない場合ですから、寧そ赤菱へお打明けなさいよ、それより外に切拔ける途はありますまい……」

嘉一郎「困つたなア……（大息をして、時計を見ながら）時間はズン〳〵經つて行きやがる、これから夜通し駈けずり廻つても、明日の午は直だ、何んにも出來やしない、第一、もう他に的もないから、話すなら赤菱だが、それにしても彼處の親父にではいけない、慶吉

君にコッソリ云ふのだな、それも私は知らない事にして、汝等が内證に要る金だとか何んとか云ふのだ……近子から慶吉君に話してくれたら一等善い方法だがな」

お道（思案して）「然うですねえ……近子がダイヤモンド入の指環が買度いとか何んとか云つて頼んだら、屹度二つ返事ですよ（近子に）これも家の爲めだら、近子、一番然うして話して見てお呉れよ、必死の場合だからね」

嘉一郎「近子一人では、萬一遣り損つた場合に困るから、汝も附いて行つて、何んとかその場を旨く取繕ふんだな」

お道「それぢやア寧そ慶吉さんに、此處へ來て貰ひませうか……然うですね……遊びに入らしつて下さいつて、近子から電話でもかけたら、あの人の事だから、もう大喜びで飛んで來ますよ」

嘉一郎（苦笑）「此方へ呼び附けて置いて、金を貸せも少し跋が惡いよ、それよりか御苦勞だが、汝等二人で、向へ出かけて行くんだな、大切な場合だから失敗つたら取返しが附かなくなるよ（不安さうに）愈々いけなけりや私が正面から切り出して行くまでだが、マア〳〵それは最後の手段だ」

お道「近子や、電話をかけて御覽、お家に居らつしやるか何うか聞いて見るんですよ、汝が掛けた方が善いんだから」

近子「私は忌だわ」

嘉一郎（戯談らしく）「極が惡いのかい、大きな赤兒だな、今にお母さんにならうていふ人に、遠慮なんかしてちやいけないよ」

近子（冷淡に）「あんな人に遠慮も何もありやアしないわ……唯、私の氣が進まないのです」

お道（窘めるやうに）「汝の我儘にも困りますよ……私が電話をかけませう）（膝の上の糸屑を拂つて起上り、電話室へ入る）

嘉一郎（近子を見て）「汝はも少と、他樣との交際を心得て置くが善いよ、何時も赤菱さんが談話しに來て、汝へお愛相のつもりでもの丶十口も利く間に、汝の方ぢやアせい〳〵一口しか返事をしない、漸つと半口位で濟まして置く事もある、私も始めの中は、耻かしがつてるのだらうと許思つてたが、この頃は少し氣になつて來た、あれぢやアいけない、夫婦になつたら、亭主を慰めるのが、女房の役目だから、今の中から心掛けて機嫌を取るやうにしなさい、一生の事だからな」

近子（沈んだ調子で）「だつてこれが私の性分ですもの、仕方がありませんわ」

嘉一郎「その癖、汝は他の人とは善く話をしてるぢやアないか？」

近子「一體、あの人は……慶吉さんは、人一倍よくお喋舌をなさるんですよ、私なんか、とても話の相手は出來ませんわ」

嘉一郎（苦い顏をして）「……兎に角、赤菱商會といへば、今ぢやア日本でも屈指の中に入つてる大きな商賣人だからな、其處へ嫁くのは汝の出世だよ」

近子「だつてお父さんは、赤菱商會はコンミッション取の御用商人で、現に裁判沙汰にまでなつてるし、あんな評判の惡い成金と、この老舖の丸嘉とは家柄が違ふつて、始めの中は仲人に向つて隨分惡く云つてらつしやつたのぢやアありませんか？ それを後ではもう人が變つたやうに、無闇に唯難有がつてらつしやるんだもの……お父さんは金に惚れてゐるのよ」

嘉一郎（苦笑）「汝等には駈引といふ事が分らないんだよ……ハ丶丶商人が金に惚れるのは當然だ、イヤこんな時勢になつちや、女でも金に惚れないのは馬鹿者だ、假令自分で何んなに怜悧ぶつても世間から馬鹿にされるんだから仕樣がない、汝だつてもう大分怜悧になつてる筈だかな」

お道（電話室から出て來て）「まア、恰度善かつたんです

よ。此から遊びに行かうと思つてた處だから、直ぐ伺ひますつて、」

嘉一郎（眉を顰めて）「來られるのは善いが、其處を此方から押掛けて行かないと、話が仕憎いぢやあないか？　氣が利かないな……もう電話は切つたのかい？」

お道「もう切つて了ひました……何處か會社へとか一寸と廻つて、それから伺ふつていふ事でしたから、押かけて行くのは却てお邪魔ですよ」

近子「來るといふ事なら來させたら善いでせう、私は此方から行くのは忌ですもの、金の無心になんか……人に顔を見られるやうで、こんな極の惡い事はないわ」

嘉一郎（嘆息を吐いて）「女つて皆、眞實に我儘者だ……忌だの、極が惡いだのつて、それ位な事が一番の苦勞だと思つてるんだ、男子の苦勞は少とも分つちやゐない」

道子「だつて、女には又女の苦勞がありますもの……誰にも云へないで、自分一人の胸の中で死ぬまでヂツト苦んでゐなけりやならない事がね」

嘉一郎（鼻で笑ひ）「フン、流行の帶が調へて貰へなかつたり、見度い芝居が見せて貰へなかつたりする不平位なもんだらう……だが近子には赤菱さんが附いてるから、そんな苦勞は無くなるよ」

近子（淋しく笑つて）「ホヽヽ、だから男子つて皆呑氣だわ……お父さんなんかには、お金だの、家柄だのが一番大切なものでせうが、女はそんなものは何んでもないと思ふ場合が澤山とあつてよ、それなのに、男子に引づられて行かなけやならないんだもの、弱い者だわねえお母さん」

お道「つく／″＼然う思ふ事があるね、世間は男子に許威張らせて置くんだものね」

嘉一郎「ハヽヽ、此家ぢやアお婆さん迄が、此頃の新聞に出てる「新らしい女」のやうな事を云出して

來たな、オイ、止してくれい、丸嘉は丸嘉の家風でやつて行けやそれで善いぢやアないか‥‥時に、新介はまだ歸つて來ないのかい？‥‥彼奴もア、まで性根が腐つちや仕様が無い、此際奇麗に暇をやつて了ふんだな、ア、して置いたら今に飼犬に手を嚙まれるやうな事が出來するかも知れない、イヤ、もううつかりしちや居られない、先日から善吉に云附けて帳簿を調べさせてあるんだが、一體、何うなへたのかな‥‥（起上つて店口に向ひ）善吉‥‥善吉‥‥チヨツと來てくれ」

（暖簾口から前垂掛の、手代風の若い男が耳に筆を挿み、帳簿を手にして入つて來る）

善吉「お召になりましたか？」

嘉一郎「調べは何う附いたのか？ まだ帳尻を合はせて見ないのかい、取引先への掛合は何うしたのだ？」

善吉「イヤ、昨夜まで夜通しで品物と引合せて調べまして、この通り、一先づ片は附いたのでございますが、若し間違があつてはと思ひまして、今、二度遣り直して居りますので‥‥」

嘉一郎「略方で善いんだ、詳細い事は後廻にして、ザツト帳尻に間違は無いのかい？」

善吉（頭を掻いて）「實はその、愈々一錢一厘も間違のないといふ處は分りかねますが、略方當つて見ましたのでは、何うも大分怪しい事がありますので」

嘉一郎（眼を光らせ）「何アに、怪しい‥‥幾何間違つてるんだ、幾何？」

善吉「エ、と、左様でございます、此方の當坐帳と本帳と現品とを突合せて見ましてザツと五百圓の餘喰違ひが出來て居ります、この一月の間の事でして‥‥その中には古い懸金の寄つた筈なのが、附落になつてゐるのも三四箇處はあるやうでございます、念の爲に一應電話で掛合ひますと、御得意様からお叱言を食つて、受取證を見せやうかつて、仰しやるのもあります」

嘉一郎（顔色を變へ）「エ……ぢやア彼奴がそんな不埒な事を仕出したのか……皆で五百圓の餘といふんだな」

善吉「ザッと然うなります、詳い事はまだ分りませんけれども……」

嘉一郎（拇指の附いた帳簿を調べながら）「フム……フム……然うか……人の落目に附込んで、不都合千萬な事を働きやがる……もう容赦はならん、皆の者にも然う云つて置け、新介の眞似をやつた奴は、片ッ端から縛り上げて暗い處へ叩き込んでやるぞ……不屆な野郎め……不埒な野郎め……店の者が皆同謀になつてやつてるんぢやアあるまいな？」

善吉「何う致しまして……番頭さんが店の帳場を一切預つてゐましたので誰も氣が附かなかつたのでございます」

嘉一郎「善くお互に氣を附合ふが善いぞ……この帳簿は此方へ置け、これから毎晩、私が一々調べるからつて、皆にも然う云つて置いてくれ……もう店へ行つても善い、今は用事はない……」

善吉「ヘイ……誠に何うもとんだ事で」（と逃げるやうに入る）

嘉一郎（頬然して）「ア、とう／＼飼犬に手を嚙まれたんだ……十五年の恩を仇で返しやがつた（興奮的に）奴、この儘ぢやア置かないから然う思つてやがれ……直ぐ警察へ屆出てやろう」

お道（愁の色）「まア五百圓も使ひ込んだのですつて、情ない事をしてくれました……だがまア、表沙汰にするのはお待ちなさいよ、逃げた譯ぢやありますまいから、」

近子（沈んだ調子）「そんなに大膽な事を仕出したのですかねえ……でも可哀さうね、自棄を起したのですよ」

嘉一郎「主人の頭を土足にかけて、それで濟むものと思つてやがるんだらうか？　こんな事をした奴は、

私は骨まで愔い、屹度、今に思知らせてやるから見てゐろ（何處となく睨み据えて）……待て、金庫の中に異狀はないか知ら」（錠を明けて調にかゝる）

お道「まだお金が大分入つてたのですか？」

近子「株券なんか、ずつと前にお父さんがスッカリ持出してお了ひなすつたのぢやァありませんか？　相場で皆耗つて了つたつて仰つたのでせう」

嘉一郎「まァ入らざる口を叩くな……いろんな書附が收つてある、大切な書類だから持出されてはならんもんぢや……フム、何うも少し怪しいな、誰か此處を明けはしないか？……合鍵は私が持つてたから、それを盗まれる筈もないが……」

お道「何うなつてるんですか？」

嘉一郎「書附の置場處が違つてゐる、中を搔混たやうな様子がある……別に紛失物はないが」

近子「お父さんの思違ひでせう？」

嘉一郎「イヤ、何うも誰か明けたやうだ……彼奴か合鍵を持つてゐるのぢアないかな？」

お道（輕く笑つて）「新介がですか？　マサカ、それ程の惡黨でもありますまい」

嘉一郎「兎に角、帳簿やら、掛先やら善い加減に胡魔化して、現金を着服するやうな盗人を此家に隱まつてゐては、一刻も油斷がならない、歸つて來たら早速交番へ附き出してやるんだ」

お道（倦むやうな口調）「彼ァ昨年の暮頃から、かねての約束通り、暖簾を分けて貰ひ度いつて、しきりに貴方にせがんでたんぢやァありませんか？　それがついずるずるべつたりになつたもんだから、間違つた考を起したのですよ、長年あんなに善く勤めてくれた男子ですのにねえ」

近子「お父さんが約束通りにしておやんなすつたら善かつたんだわ……此方にも落度があるのです」

嘉一郎（勃とした顔色）「母子して、あの泥棒の肩を持つのかい、汝等がそれ程の結構人揃ひなら私はもう知

らない、寧そ店の品物なんか皆奉公人に勝手に分取をさせて、何も彼も無茶苦茶にバラ撒いて了つた方が早く片が附いて善い、私が獨りで、こんな苦勞するのは大痴呆の骨頂だ」

（この時、人影がフラ〳〵、廻り椽の先から倉庫の方へ消えて行く）

近子（眼敏く見て）「アラ、新介ぢやアないか？」

嘉一郎「エ、…今のはあの泥棒かい、倉庫へ入つて又何か盜み出さうとしやがるんだろう、圖々しい、その儘に置くもんか」（椽先から駈け下りて行く）

お道「貴方、手荒な事をしちやアいけませんよ」

近子（起上つて）「お父さん、眞實に酷い事をなさるのはお止しなさいよ」

（母子は不安に窒息した如く、凝立する、倉庫の中では騷かしく罵る聲が一しきり、やがて嘉一郎は新介を引立てるやうにして連れて來る、新介は三十前后の、斬髮が亂れて、眼に沈欝の光を持つた、神經質らしい瘦形の男子である）

新介「逃げも隱れもしませんから、まア靜かに仰やつて下さい」

嘉一郎（激昂して唇頭も慄えながら）「一體何用があつて倉庫の中へなんかコッソリ忍び込むんだ、貴樣は晝鳶の仲間入をしたのか？」

新介（落着いた調子で）「まアあんまり口汚く仰やるものぢやアありません、私は倉庫の中へ入つて、少し考へ事をしやうと思つてたのです、この頃、私の癖になりましたので……」

嘉一郎「フン、倉庫へ忍び込む癖なんか附いちや汝ももう札附きだ、そんな奴にうろ〳〵されちや堪らないから、これから直交番へ突出してやる、さア一緒に來い」

お道「貴方、まアそんなに大きな聲をなすつちや近所へ聞えますよ」

近子「お父さんはあんまり一酷だわ、もつと落着いて仰つたら善いぢやアありませんか？」

嘉一郎「まア其處へ坐るんだ（新介を座敷に引据えて、その前に座す）「貴樣はお得意先や店の帳簿を胡魔化して、

その金を何うしたんだ、何處で使ひ捨てんだ、不埒な奴貴様には丸嘉の今日の內證が分らないか？私が百圓の融通にも苦んでゐる矢先に、主人の金を盜んで野良をこき歩くとは、一體何うした了見だい、貴様はそれでも人間の皮を被つてる氣か、この恩不知の畜生めッ」

新介（一寸と凄い笑顏をして）「然う曝露て了つたのなら、私は別に隱立は致しません、仰やる通、いかにも五百圓餘りの金は私が遣ひ込ました、それ丈、私はお店へ借錢が出來た譯です……だが且那さん、然う云へば貴方も十五年の間、私から借錢をしてゐらつしやるんです、恰度去年の暮に、その方の形を附けて下さる期限が來てゐるのに、始めから證書が出てゐなかつたといふのを楯に、貴方は水へ流して了はふとなさるんだ、そんな蟲の善い事がありますか、それ許りぢやァない……」

嘉一郎（遮つて）「默れッ、主人に向つて借錢があるの何のつて、不屆千萬な口上だ、元來軒簾を分けてやらうていふのは、主人のお情なんだ、それを此方の借錢だつて、罰當りめ、恥を知れ、恥を……」

新介（冷やかに笑つて）「そりや私も此方樣へ、始めて御奉公に上つた時は、眞の子供でした、十五年勤めたら、店を一軒出させてやるつて仰つしやつたのを、難有い事だと思つて、身に泌みる程御恩に着てゐました、一つはそれを勵に及ばずながらズーッと蔭日向なく御奉公大切に勤めて來ましたが、イザとなつてそのお約束通りにして下さらないのぢやァ、此方は無駄骨を折つた事になります、自分の口から云ふのも可笑しく聞えませうが、私は若い朋輩同士から、交際だと云つて、色町へ引張られても、これが身の毒たと思つて、是迄一度もそんな處へ上つた事はなかつたのです、考へて見ますと、人間の面白い眞盛りを、見向もしないで私はまァ、あの馬車馬か何かのやうに塵埃まみれ、汗まみれになつて通り拔けて了つたのです

ね、それ丈ならまア善いでせうが、男子の出世盛り、働き盛りの十五年つていふ長い月日を、私は此家様の爲めに棒に振つて了つた譯ぢやありませんか……」

嘉一郎（吐出すやうに）「そんな事は今聞かなくても善い、汝はそれで自分のした事が惡とは思はないのか？」

新介「まア、一つ、私の身にもなつて考へて見て下さい、田舎で髪結をして、私が一人前の男子になるのを一生懸命待焦れてゐた母親は、この春、急病で頓死して了ひますし、親戚の宿屋へ厄介になつてた妹は妹で、私生兒を產んだといふ報知が來ますし、私はこの頃、自分の腑甲斐ないのを地團踏んで悔んで居るのです」（胸が塞がつたやうに言葉が切れる）

嘉一郎「何も私は、汝に店を出させてやらないとは云ひはしない、だが今の今と云つて、そんな事の出來ない譯は、こゝの內證を知つてる汝に善く分つてる筈ぢやアないか？」

新介「そりやアお店の樣子を知つてゐますから、昨年の暮に、織元の會社の方に相當な口のあつたのを幸、そこへ入りたいと申しました、もう私も三十だから、自分で自分の身が立つやうにしたいと云つて、お暇を願ひました、其時、旦那を始め、奥さんからも、いろ〱お話がありまして、他の奉公人に行かれるのは仕方がないが、汝丈は一番古くからゐるのだから、今一息辛棒してくれ、行々は聟養子にするとまで仰やつたぢやアありませんか？私は馬鹿正直だから騙されたのです……お孃さんにまで騙されたんです」（近子の方を尻眼にかける）

嘉一郎「聟養子と云つても、此家には跡取の息子がゐる、實太郎が神戸の商業學校に行つてるのを汝、知らない事もないだろう、私は自分の口から、そんな約束迄した覺は無い」

お道（辯解するやうに）「そりや私がつい、口を滑らしたのは惡かつたけれどもね、汝を騙したりなんかせうて腹で云つたのぢやアありませんよ、私は氣の毒で堪

らない」

嘉一郎「いかに何んだつて、主人の金を使ひ込むといふ法は無い、恩を仇で返すつて云ふもんだ」

新介「けれども旦那、この二三年以來、高は僅かでございますが、私が隨切長い辛棒で貯め込んだ金まで、チヨイ／＼引出してお店の遣繰に御用立てた事もないではありませんよ、別に云度はないんですが、私の名で高利貸から融通して貰つてる口もあります、氣が附いて見ると私なんかゞ好人物つていふ奴の標本でしたろう、旦那は恩だ、恩だと仰やるが、結局斯うなつて夢が醒めた後では、去年の暮に店を出て行つた連中の云つたやうに、高が傭主と傭はれ人との間ですからね、恩も義理も五分五分ぢやァありませんか？イヤ私から云ひますと、差引まだ大分、お店の方が借方になつてる勘定です」

嘉一郎（激昂する情を抑へ切れぬやうに）「馬鹿ッ、よくもそんな圖々しい事が云へたもんだ、貴樣が融通した端金なんか皆返してある、第一、ツベコベと口答をするからが不埒だ、私が昔、奉公してた頃は御主人樣の方へ足を向けて寢た事もないんだぞ、いかに時勢が變つても、主人は主人、奉公人は奉公人だ、他の者への見せしめもある、さア交番へ來い」（襟髪を取つて引立てる、店頭の方からは自動車の笛が聞える）

新介（振りもぎつて、蒼靑な顏色をして）「止して下さい、交番へ行く前に、此方から裁判所へ訴へて出ます、契約に反いたのを訴へます、加之に近子さんとの關係も打明けて云つて了ひますよ」

近子（驚いた眼色で）「まア……」

お道「新介、何卒ね、私が賴みますから」

嘉一郎「何を贅言をぬかすんだ、主人を突飛ばすとは愈々堪忍ならん、奴、地上を引ずつてゞも連れて行くぞ」（と哮り立つて摑みかゝる）

（店頭から「さア何卒！」と手代善吉の案内の厚白リネンの洋服に赤ネクタイ、鼻眼鏡をかけた、二十五六才の赤澤慶吉が暖簾の間か

ら顔を出す）

慶吉（笑顔で）「何んだか御賑かな様ですねえ、皆さん、今日は……」

嘉一郎（周章てゝ、急に手を放して）「ア、赤菱さんですか……これは善うこそ…（新介に向ひ）貴様は一體、此處へ來るんぢやアない、店へ行つて、もつと切々と帳面を附けるんだ、イヤ帳面ぢやアない、お客のお相手をするんだ、お客の、……なまけ者め」（と店頭の方へ、押だすやうにする）

慶吉（入つて來て）「別にお取込ぢやアありませんか、」

嘉一郎「イヤ何うしまして、一寸と目を離してゐますと若い者は兎角遊んで仕様がありませんので、折檻をやつてたんです、何うも飛んだ處を御目に蒐けまして……先づ今日は、……その後は御無沙汰を致して居ります」

慶吉（會釋）「今日は……お母さん……近子さん、今日は……先刻はお電話を難有うございました」

お道「善うこそ……まアずつと此方へ……取り散らかして居りまして（仕事を片附けながら）……あの二階へ御案内しましたら……近子さん、然うをしなさいよ」

近子「ハイ……」（生返事をして起かける）

慶吉「イヤ、何處でも結構です、お針仕事ですか？ナカ／＼御精が出ますね（手巾で顔をくるりと拭いて）何んだか、忌に蒸暑いぢやアありませんか、降る時分にはザアーと降つてくれないといけませんね、照つたり、曇つたり、人間を弄ぶるやうな空模様は忌ですね」

嘉一郎「御尤です、私なども氣候の所為か、頭が重くて、途を歩いてると折々、前へ突込んで了ひさうな心持がしますよ、夜なんかも落々眠られないので、つい肝癪が嵩ぶつて來ましてね」

お道「ホヽヽ、宅のはもうこれが持病でございます」

近子（小聲に）「眞實ね……」

慶吉（交際口調で）それやいけませんね、御用心なさい……時にいろ／＼御心配かけました親父の商會の方の、

例のコンミッション一件も、漸く片を附けましたよ無論、父は承知してゐなかつたんですが、支配人等が、外國の軍器製造會社から受取つた三十萬圓といふものは、結局不當利得ですからね、その儘父の手に收める譯には行きません、それで彼をそつくり出獄人保護事業に寄附させる事にしました、僕の發案です、米國にゐる時分に、僕もチョイ／＼彼方の監獄を視察しましたし、出獄者を保護してやる者がなければ、再犯三犯と罪惡を重ねて行く許ですから、懲罰の效果の上らないといふ事を痛切に感じましたよ、新聞で見ますと、現に淺草邊りにも、五十幾歳かの醜業婦で、賣春百何十犯と云ふのがあるさうですね、これ等もつまり一度一度、罰金を出す爲めに稼がなけりやならないし、第一、生活が出來ないから、こんな事になる譯ですから、何うしても保護事業が必要です、さうして又、寄附をすれば、今檢擧されてる支配人等も、自然、執行猶豫か、何かの恩典に預るんですからね」（得意げに云つて、人々……殊に、近子の顔を見る）

嘉一郎「ヘエ……すつかり御寄附なさるんですか？」

慶吉「その方がサツパリして了ひますよ 兄貴等は二人とも、何かぐづ／＼云つてましたが、親父は例の太つ腹ですから、私の意見に贊成してくれました、私も始めて褒められましたよ、洋行の甲斐があるつて、ハヽヽヽヽ」

お道「御宅のやうに、手廣く大きな御商賣をなすつてると、おやんなさる事が違ひますわねえ……世間には僅か許なお金に屈托してるものが隨分ありますが、貴方等の眼から見たら嘘のやうでせうねえ」

慶吉「イヤ、これで僕も米國にゐる時分には、ナカナカ苦勞をしましたよ、僅かの當飼扶持でしたからね……だがお庇で世間の事も少しは分つて來ましたハヽヽヽヽ」

嘉一郎「イヤ、貴方なんかのは、苦勞と云つても眞の

眞似事ですよ、まア何しろ結構な御身分です……ア、近子、アイスクリームか何か、氣が利かないな」

お道「オヽ、私が茫然してゐました、近子は些と御話の御相手をなさいよ……大きな赤兒でして、何うもなりません」

近子「お母さん、私が行きますわ、御免遊ばせ」（と匆々に起つて行く）

嘉一郎（取繕ふやうに）「何うも羞耻屋で困つて了ひます、柄ばかり大きくつて、一向世間慣れない未通娘でございますので、何時も失禮計致します」

慶吉「イヤ、日本の娘は彼處に奥床しい處がありますヤンキー娘のやうに無闇に跳つ返りの、お轉婆にはもう懲々してゐますからねハヽヽヽ」

お道（嘉一郎に）「あの二階の方が善いぢやアありませんか？」

慶吉「イヤ、此處の方が却つて家族的で、ゆつくり御話がしてゐられますよ、御客様扱ひにされると、何うも長居が出來ませんからねハヽヽヽ」

お道「ではまア、何卒御自由に、おくつろぎなすつて」

嘉一郎（獨、頷いて）「ア、然ういふ譯なら、おくつろぎなさる前に、チヨッと御耳を拜借しませうか、二階で些つとの間ですが？」

慶吉「何かお話が？」

嘉一郎「實はその、お話し惡い事ですが……まア此方ではもう御親戚同様に思つて居りますので、打明談がしたいのです……實は奉公人が不埒を働きましてね」

慶吉（怪訝の眼色）「エ、何事です？……ア、今の……彼ですか？」

嘉一郎「實は彼が大金を使ひ込みましてね……まア何卒二階へ」

慶吉（稍安心したやうな調子で）「ア、お金ですか？……フーム、それは兎に角御心配でせう、何卒打明けたお話を聞かせて下さい、その方が僕も嬉しいのですよ、

斯うなつちやもうお互に隠立ては氣まづいですからね」

嘉一郎（元氣づいて）「何卒此方へ‥‥」（二人は二階へ上る）

近子（浮かぬ顔色で出て來て）「二階ですか？、然う云附けて置きましたよ」

お道「お父さんが自分で金の話をするんでせうから、私等は助かつたよ‥‥（低い調子で）でも新介は迷惑だね、皆、彼に塗り附けて了ふんでせうよ、お父さんは昔から駈引の旨い人だからね」

近子「エ‥‥ぢやア新介が二千圓使ひ込んだとでも言騙めるのでせうか？、まア酷い人‥‥お母さん、私はもうつく〴〵忌になりました、他に心配で堪らない事もありますからもうこの縁談は斷つて下さい、私は嫁きませんよ」（ぐつたりと座つて了ふ）

お道（周章て）「汝、今更そんな事を云つて、人を困らすのぢやアありませんよ、今のは私の邪推だからね、マサカ、お父さんがそんな出たら目の嘘ッ八を云つて、胡摩化しもしないでせう、汝は直眞氣になつて了ふからいけませんよ」

近子「否え、お父さんは、それ位の事を云兼はなさらないわ、才子ですものね、それはまア何うでも善いが、私、まだ他に氣にかゝる事があるんですから‥‥」（考へ込んでゐる）

お道「氣にかゝるつて、何んな事？」

近子（苦悶顔で）「今は云へないわ‥‥それよりかお母さんはお父さんを何う思つて？随分得手勝手ぢやアなくつて？」

お道「何しろ彼の人が才子だから、私の親の鑑にも留つて此家の婿にもされたのです、‥‥けれども世間は思ふやうには行かないんだね、あの人の代になつて、丸嘉もこんなに沒落しかゝつたんだからね」（嘆息を吐く）

近子「ですから才子も金も本當の便にはならないんだわ、私の胸で思つてる人が出て來る迄、此の儘で居

た方が善い、……お母さんとお父さんとで、今に食べるにも困るつて、あんまり心細い事を云ふんですもの、私もフッと氣が迷ひ出して、エ、何うせ一生だ、出來る丈虛榮も張り通して見度い、金の力で何んでも仕度三昧をしてやりませう、それが此家の爲めにもなるのなら、兩得だと思つて、ついあんな返事をして了ひましたが、お母さんの事を考へると結局は失敗ですわねえ、母子でそんな失敗を繰返すのは馬鹿げてゐますわ、お母さん斷つて下さいよ、それでなけりや、寧そ私が二階へ上つて、然う云つてやりますわ」

お道（ハラ／＼して）「コレ、靜かにおしよ、聞えますよ」

近子（興奮して）「聞えたつて構はないわ」

お道「まア此方へお來（手を引張るやうにして、端の方へ連れて行き、涙ぐんだ聲で）そりやア汝の心持は私にも分つてゐますよ……お母さんだつて覺えのある事です……けれどもその辛い處を我慢してくれなけりやなりませんよ、この前にも薄々話はしたんだが、打明けて云ふとね（邊を見廻はして）お母さんが汝のやうな娘の時に、思つてた男子と云ふのは、矢ッ張、店の若い手代だつたのよ、併し兩親が、それよりも働のある、一番番頭の方が、末の見込が確だからつて、無理遣り今のお父さんと夫婦にされたのですよ」

近子「それでお母さんは、今ぢやア幸福だつたと思つて？」

お道（淋しく笑つて）「夫婦つてものは、皆斯んなものでせうよ、幸福だか、不幸だか分らないのが、まア幸福なんだろうね」

近子「私はお母さんが可哀さうだわ、親つて皆、勝手な事をしますわねえ……だがお母さん、私はまだ隱してたけれども、あのね（耳の傍へ口を寄せて、囁く調子で）私と新介とは、別に戀仲と云ふのぢやアありませんけれども唯お母さん等のやうに、心で思つてるといふ丈ぢやアなかつたのですわ」

お道（頷いて）「そりやアお母さんだつて知つてゐますよ、……汝等がチヨイ〳〵、その倉庫の中へ忍んで入つてたのを知つてゐます」

近子（赧くなつて）「エ……お母さん、眞實に？」

お道（擽つたいやうな笑顔で）「ホラ、あれでせう、倉庫の窓の下に、鎧櫃が藏つてあるね、あの蓋を明けると、隅の方から樟腦臭い讀本が、出て來るでせう、小娘の時から、他に遊び相手は無し、私は下女と倉庫へ物を藏ひに行つちや一人殘つて一時間も、二時間も、あの中で過したもんですよ……汝にはあれが眼に附いたのでせう？！」

近子（眩しさうに）「お母さんも矢ッ張り……」

お道（依然、囁くやうな低調で）「恥を云はぬと分らないが、お母さんは夫婦の祝言をする前に、その若い手代と二人で倉庫の中へ入つてゐたんですよ、私は汝と新介とが、薄暗い夕方なんかに倉庫から出て來るのを見ると、自分の若い時の事を思ひ出して、何んだか竦としたんだよ……（倉庫の方を見て暗い表情で）一體この倉庫は何代か前に建てた古いものなんで、中に鱗の金光のする大きな青大將が住んでゐたのよ、それが主だとか、此處の金の神だとか云つてたのだが私が今のお父さんと祝言する事が定ると、若い手代が、氣が變になつて、その主を叩き殺して、それ限行衛不明になつたのですよ、床板に血まみれになつた蛇の形が附いて何うしても消えないの、私の眼には今でもそれがアリ〳〵と分ります、この家がいけなくなつたのは、あの男の執念や……、あの主の祟ぢやアないかと私は折々然う思ふんだよ……」

近子（襲はれたやうな眼色で）「まア眞實に？……その祟かも知れませんわねえ……私、濟まなかつたけれども私が新介を誘つたのか、新介が私を誘つたのか、分らないんですよ……何んだか男子の力で手込にされたやうな氣もしますわ、それもお母さんが、婿になる人だと仰つたのを聞いてから、私の氣が緩んだの

でせう……でも赤菱への縁談が持上つてから、私はもう寄せ附けないやうにしてゐるんです」

お道（相不變、低い調子で）「あつた事はあつた事で仕樣がありません……お母さんもその時の事を振返つて見ると、何んだか恐くもあるし、一生に一度限の樂みだつたとも思ひます……何んのお父さんだつて、女郎買はする、妾は置く、今でもチョイ／＼女道樂はやつてるんだからね、私許が惡いと悔んぢやゐません、男子は得だと思つてあきらめてるんですよ、だから汝ももうそんな事は此邊で弗ッり、思切つて、赤菱さんへ嫁くんです、竹の柱に茅の屋根なんて云ふのは、歌で丈聞いてりやア善いんだよ、現に斯う內證が苦しくなつて來ちや、お母さんだつて、昔の色の戀のを思出してる暇がないんだからね、汝は富豪の處へ行つて、思ふさま贅澤に暮らすのが得ですよ、一生の事だもの、それが此家の爲にもなるんだからね」

近子（淋しい調子で）「お母さんの仰る通にするのが怜悧は怜悧ですわねえ、……けれども何んだか私は胸の底に空虛が出來てるやうで、寂しい、物足らない氣持がしてならないんです……（思切つたやうな顏色で、邊りを氣にしながら）加之ね、も一つ心配なのは……（母の耳へ口を寄せて）お母さん、私は體が少し變なのよ」

お道（針にでも刺されたやうに）「エ……何時頃から？」（四邊を見廻はす）

近子「つい先月位からの事ですけどもね……確りは分らないんだけれども、萬一、そんな事だと後から大變でせう、それで一つは進まなくなつたのです」

お道（思案して靜かに）「何に、構やアしない……そんなに心配する事はないよ」

近子「だつて私、心配だわ……今から苦になつてならないんだもの」

お道（淋しく笑つて、耳へ口を寄せ）「近子汝は今のお父さんの子だと思つてるのでせうね？」

近子（憤慨の眼を瞠つて）「エ　まア、お母さん・・・私は然うぢやアないんですか？」

お道「シッ・・・・聞えますよ・・・・そりやアお母さんにだつて、眞實の事は分りやアしないけれども、お父さんが、月不足だとか何んとか云つて私を善く虐めてたんだから、最後には、私にもそんな氣がして來たんですよ」

近子「まア・・・それで私には冷淡なのだわ・・・けれども、自分で恐ろしくはないの、お母さん？」

お道「仕様がないぢやアないか？自分が好いて亭主にしたんぢやアない、親が然うしたんだもの、それ位な事は大目に見てくれなけやね」

近子（沈鬱な表情）「ぢやア私もお母さんの通りの事を繰返すのかねえ・・・・もう彼の人を妾の子だなんて笑へる處ぢやアないわ・・・（長い太息を吐いて）・・・・こんな事を代々續けて行つて善いんでせうか？」

お道「善いの、惡いのつて、何うしやうもないぢやアないか？」

（近子は深く考へ込んでゐる、善吉がアイス、クリームの岡持を持運んで來る）

善吉「漸つと持つて參りました、小僧さん、新米で店頭へ飛び込んで來ましてね、ハヽヽ」

お道「隨分、手間が取れたのねえ、・・・・近子、二階へ持つて行つておくれ」

（善吉は立去る、此時二階口から話聲が聞えて、嘉一郎と慶吉とが降りて來る）

嘉一郎「何うもお手間を取らせました」

慶吉「イヤ、僕の方の話が長くなりましてなハヽヽヽヽヽ」

お道（笑顔で迎へて）「ア、折角、持つて參ろうと思つてた處でございます、何卒召上つて」

近子（愛嬌を作つて）「さア、何卒此方へ、風通しが善うございますから」

慶吉「難有う（座りながら）・・・・一寸と急に歸つて來た

けりやなりませんで、又明日でもゆつくり伺ふ事にしませう」

嘉一郎「まア、一つ、召上つて…私がいろ〳〵御心配をかけて、早速御承知下すつたのだよ、皆お禮を云ひな」

慶吉（笑顔で）「イヤ、お易い御用で：（アイス、クリームを啜りながら）近子さんもチと、濱町の宅の方へ遊びに入らつしやいな、つい近い所だし、さう遠慮せんでも善いでせう」

近子「難有うございます…近日、是非一度御伺ひ致しませう…何んだか出無性でございましてね」

慶吉（苦笑して）「お伺ひぢやアない、お遊びにですよ…些と交際界へも顔を出すんですな、これからは大に快活にやりませうよ、僕はこの通り、書生ッ坊ですから、宅ぢやア禮儀作法は要らないんです、此處のお父さんとは、デパートメント、ストアーの方の設計圖を引いて見るんですが、貴方とは新築の邸宅の圖案でも相談しやうぢやアありませんか？ハヽヽヽ」

お道（戯談口調で）「ホヽヽ近子も出來るだけ、贅澤に暮したいんださうですから、御邸の御新築なら、ろ〳〵注文が出る事でございませうよ」

近子（故とらしく、はしやいで）「そりやもうお困らせするかも知れませんわ」

慶吉「その方が結構ですなハヽヽ」

嘉一郎（時計の針を氣にしながら）「時に、付者も氣がゝりですから、私がお伴をする事にしませう」

慶吉「然うですか？ぢやア御苦勞ですが、御同伴願ひませうか、自働車ですから御手間はかゝりませんではこれから參りませう、…何うも失禮を」（會釋して立上る）

嘉一郎「では私も一寸と行つて來ますよ（お道は後から羽織を着せかける）…ア、その前に、新介に云渡す事がある」（慶吉を先に、店の方へ出て行く、母子は送つて出る）

（嘉一郎は、再び入る後から新介が蹤いて來る）

嘉一郎（正座つて）「先刻も云つて置いたが、今日、只今限り、暇をやるから此家を出て行つてくれ、……使ひ込んだ五百圓何がしの金は、汝が兎に角十五年勤めてくれたのに免じて、奇麗に棒を引いてやる、それでお互に何んにも云はぬ事にせう、……これで一切濟んだぞ、何も彼も奇麗に片附いたんだぞ、丸嘉も近い中に仕組を替へて、デパートメントにするから奉公人も入代なけりやアならない、殊に不都合を働いた者を店へ置いては信用にかゝる、只今限り暇をやるから直出て行つてくれ、善いか、分つたか、屹度、云渡したぞ」

新介（神妙な顔で）「よろしうございます」

嘉一郎「善いか？分つたな」（云つて、出て行く、新介は默つて、腕組をしてゐる、自動車の笛、やがてお道と近子とは歸つて來る）

お道（柔かに）「新介何うもとんだ事になつたね、私は眞實に氣の毒に思つてゐるよ」

新介（血走つた眼で見上げて、慄えた調子で）「難有うございます……この御恩は一生忘れません」

お道「エ……然う云はれると御挨拶に困つて了ふが、此家も昔の通り繁昌してるのなら暖簾を分ける位、何んでもない事だけれども、斯ういふ體裁だからまア察しておくれよ」

新介（自棄的な口調で）「イヤ、元はと云へば私が馬鹿正直だつたのです……旦那は明日支拂の約束手形の事おやア、血眼になつて御心配なすつてる樣だが、矢ッ張、紙に書いたものでなけりや口を利きませんからね、私なんかのやうな奉公人には「暇をやる」つて一口云はれたらそれ限何も彼も帳消になつて了ふんだから堪りません、何處へ泣附うにも、泣附く場處はありませんからね」

お道「それがね、今云ふ通り、して上げやうと思つても、出來ないんだか 仕樣がないぢやアないかね、

聞けば汝の使ひ込んだ金を帳消しにしてやるつて事になつたんでせう、それで汝も我慢したら善いぢやアないか？表沙汰になつたら、汝は赤い衣物を着る處ですよ」

新介（嘲るやうな笑を浮べて）「ぢやアお庇で私ァ罪人になる處を助かつたやうなもんですね、それが御主人のお情ですか？ア丶奉公なんかするんぢやなかつた」

お道（不機嫌な顔色で）「汝は此頃ァ間が緩つたやうですよ、今こそ、そんな口幅つたい事をお云ひだけれど、まア考へて見て御覧、汝が始めて店へ連れて來られた時は、白雲頭の、眼許光る鼻垂小僧だつたよ、居眠をすると云つちやア、よく大番頭に頭を張られて泣出したもんだが、田舍から出て來た者を可愛さうだと思つて、私はいろ／＼氣を附けて庇つてやりました、何時か自働車から轉げ落ちて大負傷をした時なんか、私は寢ないで介抱してやつた事もありますよ、それを皆、忘れてお了ひぢやアなからうね？」

新介（眼を瞬いて）「そりやア奥さんには、いろ／＼御信切にして戴きました、それを忘れはしませんが、私も御主人の家を自分の家のやうに思つて、奉公人といふ氣ではゐなかつたのです、傍に大きな店が出來て、新式で盛んに賣出した時も、この儘ぢやア今に此方が寂びれる一方だと、自分の事のやうに氣を揉んで、旦那に私の考を申上げた事も二度や三度ぢやアありません、現に奥さんのお耳にも入れました、けれども旦那は御不承知で、何アに、傍が皆デパートメント、ストアーになりや、此店丈が昔ながらの老舗で殘るから、却て繁昌するなんかと、頑固な事許り仰つてたんです、御自分で御氣の附いた時は、もう遣切れなくなつた時ぢやアありませんか……それでも此家には大した資本主が附いたさうですから、これから盛返されても行きませうが、唯私丈が、元の素裸で、街中へ追ッ放り出されるんぢやアあんまり情ないと思ひます」

お道「それは私も察してないぢやアないんだよ、紳戸の息子が歸つて來て、彼の代になつたら屹度何うにか計らつて上げるからね、惡く思はないでゐておくれよ」

新介（冷笑）「奥さん、若旦那の代になるのを待つてたら私ゃ腰が曲りませう、イヤ、もうそんな御戯談を聞いてられる場合ぢやアありません、斯うしてもう御暇が出たんだから、私も今日から新規蒔直しをやらなけりやなりませんが、三十才にもなつて、地道から踏み出すんぢやもう追ッ附かない、これから一つ、相場師にでも化けて、運善く金蔓に取附きましたら、又改めて御挨拶にでも出ませうし、失敗つたらもう御目には蒐りますまひ」

お道「相場なんかへ手を出すより、何卒堅氣にやつておくれ、私は汝の事を忘れはしませんよ」

新介「堅氣になんかやるのは、馬鹿か、阿呆だしかし思へませんね、現に赤菱商會なんかゞあんな大身代を拵へたのも、賄賂を使つたり、買收したりして、隨分不正な事をやつて來たお庇だと云ふぢやアありませんか、私もつく〴〵然う思ひます、何アに、長い者には皆が卷かれるんだから、少々位不正な事をやつても、後でその金を慈善事業か何かに寄附して、善い顔をしてりやア世間はそれで立派に濟んで行くんですよ、（近子の方を見て）お孃さんのお婿さんの家を惡口しては濟みませんが……」

近子（俯向いて考へ込んでたのが、顔を少し上げて）「お父さんからお暇が出たと云つても今日の今日出て行かなくても善いでせう」

新介「只今出て行けつて云ふ御命令が出ましたからね、私にしてもお暇の出た家へ一刻も尻を落付けちやアゐられません」

近子「私ね、せめてもの紀念に、汝に上げやうと思つて、麻の浴衣をこゝに縫ひかけてるのよ、今夜中に仕上げますから、それ丈は着て行つておくれよ」

お道「近子も汝の事を心にかけちやゐるんですよ、家が昔のやうだと評判の善くない處へ嫁になんかやるんぢやアない、私が乾度、何うにかして上げるんだが、これが浮世つて云ふんだらうね」

新介「折角の御信切は難有うございますが、もうお仕着を受ける爲めに一晩待つてる程の鼻垂小僧でもなくなつてゐます、それは折角お婿さんにお着せなすつた方が、お喜びなさるでせう」

近子「そんな忌味を云はれると口惜しいつたらありやアしない……あの堅氣だつた汝が店の金を使込むなんて、乾度何處かへ情婦でも拵へたんでせう、然うでせう、ね、お母さん、それに違ひないわ」

お道「唯、ムシヤ、クシヤ紛れに遊んだのでせう、ね、然うだらう？」

新介「ハヽヽ、始めはムシヤ、クシヤ紛れでしたが、これで今はもう、立派に一人前の情婦も出來てゐます……別に不思議もありません、商賣人が商賣氣離れて、かゝつて來ますと、生の素人なんかよりヅヽと情が濃くつて、便にもなりますよ、つまり虚榮や、外聞を氣にしないんですからね」

近子（勃として手近の浴衣地を抛り出して）「もう知らない、何うなと勝手にするが善い」

お道「新介もそんな面當を云つたりなんかするといふ法がありますか、假にも主人の娘ぢやアないか？」

新介「フン、主人の娘……まア然うでしたらうね」

お道（窘めるやうに）「私は何も彼も知つてゐますよ、それを大目に見てやつてたんです……馬鹿になつて知らん顏をしてたんです、その私の眼前で、娘を虐めて何うせうていふんだね？」

新介（顏色を動かし）「へエ……ぢやアスッカリ御存じでしたか？實はそれを種に、相場の資本を少しゆすりたいと思つてたんですが、駄目ですかなハヽヽヽ」

お道「汝はそれ程、生根が腐つたのかえ？」

新介「貴方等が、御承知で、疵物の娘を賣物になさる

のも、あんまり立派なお心掛たア見えませんね」
お道「その粧物には誰がしたんだ？」
（三人の視線が一つに閃き合ふ、奇怪な沈默が續く）
嘉一郎（汗を拭き〱入つて來て）「新介はまだゐるのか、出て行けつて云渡したぢやアないか？」
新介「荷物も整理ねばなりません、此から支度にかゝる處です」
嘉一郎（懐ろを押へて）「支度するなら早く彼方へ行つてサッサとしたら善いんだ、金庫のある室をウロ〱するなんて怪しからん、五百圓は帳消しにしてやつたが、後は鐚一文も汝に使はせる金なんかないんだぞ」
（新介は默つて、凄い眼光をして、店口へ出る）
嘉一郎「まアこれで安心したよ……近子は何うしたんだ？」
お道「イヤ、何うもしやしません、一寸と例の肝の蟲で」（羽織を取つてやる）

嘉一郎「然うか……コラ、二千圓現金で借りて來た、漸つと安心したよ、これでもう、いくら早く日が暮れやうが、夜が明けやうが、心配はしない、イヤ、先刻は、時計の針の進むのを見てると、一秒づゝ命が縮むやうな氣がしたよ」（金庫を開けて金を藏め）「ア、疲勞れた、氣づかれが出た」（と長く横臥する）
お道「それはまア善ござんしたねえ……疲れてらつしやるなら、お湯へお入りなすつちやア何うですか、もう沸いてゐませうよ、湯加減を見て來ませう」（起上る）
嘉一郎「ア、然うしてくれ、一風呂浴びて、ゆつくり一杯やらう、久しぶりに濶ろがう……近子、汝は何うしたんだい、鬱ぎ込んでるぢやアないか？」
近子「別に何うもしませんけれども……、少し頭痛がしまして」
嘉一郎「嫁入前の大切な體だから用心おしよ、一つは陽氣の加減だらう、工合か惡ければ二階へ行つて、

休んだら何うだね？」

（お道の呼ぶ聲）「お湯が沸いてゐます、直ぐ入らつしやい」

嘉一郎「然うか……エ、とこの金庫の鍵は……近子、汝に預けて置かう……イヤ、私が自身に持つて居ろう、その方が間違ひ無しだ」（椽側傳ひに入る）

新介（店口の暖簾の間からぬいつと現れる）「近子さん……先刻貴方が云つたのはありや本心からでせうか？あの浴衣を私に拵へてやるつていふのは、眞實ですか？」

近子（冷淡に）「もう知らない」

（傍へ膝行寄つて）「然う怒らなくても善いでせう、貴方はまだ私の事を忘れ切つちやゐないんですね？」

お道「もう、うるさいつてばね……汝は早くその情婦の處へ行つたら善いでせう、私なんか何うせ生の素人だからね」

新介「お母さんの前だからついあんな事を云つたんです」

近子「斯うなつちやもう今更何うにもなりやしないよ」

新介（哀願的に）「寧そ私と逃げて下さらんか？貴方と一緒なら何んなに落魄れても私はもう殘念だとは思ひません、長の御奉公の甲斐があつたと、それ丈でもう滿足します」

近子「逃げたら先は何うなるんだね（思案して）……まアも少し考へさせておくれよ」

新介（急に顏色を變へ）「フム、貴方は矢張、心の底は冷たい女だ、赤菱へ行つて贅澤な眞似がしたいんだろう、それならまア好きなやうになさるも善かろう……

……（發作的に）だが一寸とあの倉庫の中まで來て下さい、お別れに話したい事があるから」（白い手頸を握る）

近子（新介の顏をヂッと見て、身慄して振放し）「汝の顏は蒼青だよ恐くなつて了まふ、私は倉庫へなんかもう行かない……」

新介「何も恐い事はないから來て下さい」

近子「私は先刻から頭痛がするから、少し休みますよ（起上つて）……明日の朝迄考へさせておくれ、兩親に此の上心配をかけても濟まないし、お互に一生の事だからね」（云捨てゝ、二階へ上つて行く）

新介（後姿を睨み上げて）「逃げ口を利くんか？　皆で人を蟲螻のやうに思つてやがるんだな……待つてやがれ、よろしい、もう此家に未練は無くなつた」

（急に四邊を見廻はし、懷から合鍵を出して手早く金庫の錠を捻ぢあけ、金包を盜んで、周章だしく椽先から逃げて行く）

お道（襷がけのまゝ馳け來つて）「アラ、近子はゐないのね、誰かこの坐敷から走つて出たやうだが……何うしたんだらう？」（室内を見廻はして）「オヤ、金庫の錠が開いてゐる……大變だ、大變だ……近子はゐないの、近子……貴方……貴方……大變ですよ、早く來て下さい、早く……」

嘉一郎（浴衣に着かへて）「何うしたんだ、大きな聲をして、騷々しいぢやアないか？」

お道（金庫を指ざし）「あれを……あれを御覧なさい……鍵は何うなすつたのです？」

嘉一郎「エ、金庫？……鍵はこゝに持つてゐる、開く筈がない（近寄つて見て）ヤ、しまつた、泥棒が合鍵を持つてたのか……しまつた、盜まれたんだ」

お道「何處から入つたんでせうね……近子は何處へ行つたんでせう、近子、近子……新介はゐないか？　善吉……善吉、皆何うしたんだ？」

嘉一郎（深い失望の色）「しまつた……とんでもない事になつた、新介の畜生に相違ない……文字鍵の符牒を知つてる者は彼奴より外にない早く電話をかけい、交番へ電話を……エ、周章てるな」（自分で電話室へ馳込む）

善吉（顏を出して）「何うしたんでございますか？　エ、金庫の中から……」

お道「早く交番へ行つてをくれ……早くサ」（善吉は飛んで入る）

近子（顳顬を押へながら、階段を降りて來て）「お母さん何うしたんです？」

お道「何うも斯うもありやアしない、お金を……二千圓のお金を盗まれたんだよ」

近子「エ……まア……」（釘付にされたやうに凝立する）

お道「汝が此處にゐると思つたから安心してたんだよ、賊は新介に違ひない、彼奴に……」

近子「お母さん、訴へるの丈は止して下さいよ……それは私が惡いのですから」

お道「何うして……汝、知つてたのかい？」

近子「それは新介が十五年の奉公の抵當に持つて行つたのです」

嘉一郎（電話室から出て來て、落膽し切つた顔色）「新介の野郎め、何處迄私に祟ろうとするんだ……殺してやつても腹が癒えぬ」

近子「私が二階へ上つたのが惡かつたのです、それで惡心を起したのでせう……それともアヽして私を嚇し付けて、後で盗む氣だつたか知ら……何れにしても私の考が足りなかつたわ、何卒内分にして濟まして下さい、お願ですから」

嘉一郎「踏んだ上を蹴られて堪るもんか、内分も何もありやアしない、もう交番へ訴へて出た、早く縛られてくれりや善いが……私もぢつとしちやゐられない私がも一度行つて來やう……」

近子（決意の色）「お父さん、まア待つて下さい、斯うなりや私ももう腹を定めましたから、お金の事なら自分で赤菱へ行つて、何度でも泣附いて見ます、新介の持つて行つた分は、あのまゝ奇麗にくれてやつた事になすつて下さい、表沙汰にすると、又何んな事を云出すかも知れませんわ、私は恐うございますから」

お道「然う、よく氣が附きましたよ、貴方何卒内分にしてやつて下さい、加之店から罪人を出すのは信用にもかゝりますから」（二人で抱締めるやうにする）

嘉一郎「お金つていふのは、汝等の考へてるやうな

そんな安つぽいもんぢやアないよ、今日お父さんが慶吉さんへ賴んだ時も、この額から、粘い、血のやうな汗がポタ〳〵垂るやうな氣持がしたんだ、女は淚さへ出して泣付いたら、幾何でも金が湧くやうに思つてゐる、だから男子の苦みが分らないつて云ふんだ、手を放せッ、愚圖々々しちやアゐられない」（振放して行きかける）

善吉（顏を出して）「御安心なさいまし、盜人は捕まりました、新介さんが、角の交番の前の袋路次に追詰められて、縛られました、顏が血みどろになつてゐました……泥棒が新米だから逃げる方角が立たないんだつて、刑事が笑つてゐました、人がもう黑山のやうに群集つてゐます」

嘉一郎（躍り上つて）「然うか……ヤレ……ヤレ、助かつた、天罰だよ」

近子（蒼青な顏色で）「エ、血みどろに……可愛さうだわ

[illegible]

お父さん……お願しますわ」

嘉一郎「願下にしたら、今度は强盜になつて押込んで來るだらう、馬鹿な事を云ふもんぢやアない、あんな太い奴は、一度臭い飯を食つて見なけりや主人の恩が分らない、天罰敵面だ」

お道（諫めるやうに）「でも慶吉さんが然う云つてたぢやアありませんか？一度監獄に入つたら後が可哀さうですから……」

嘉一郎「赤菱のは出獄者保護事業に、三十萬圓の寄附したつていふんだ、彼奴なんかもその御厄介になりやア恰度善いんだ、汝等が何も心配する事は無い」

近子（胸苦しさうに）「私は心配ですわ……心配ですわ……ねお母さん、新介が皆云つて了つたら、何うしませう……何しませう、」（蹌踉するのを母が抱いてやる）

お道「コレ……氣を落着けるんですよ」（憐むやうに、見て、太息を吐く）

（夕陽がパッと赤く倉庫の白壁にかしかゝる）

近子（ヒステリカルに）「ア、お母さん、御覧なさい倉庫が眞赤になつたぢやアないの……眞赤に……血みどろに……新介が惡いんぢやアないわ……惡いんぢやアないわ……（身悶えして泣叫ぶ）

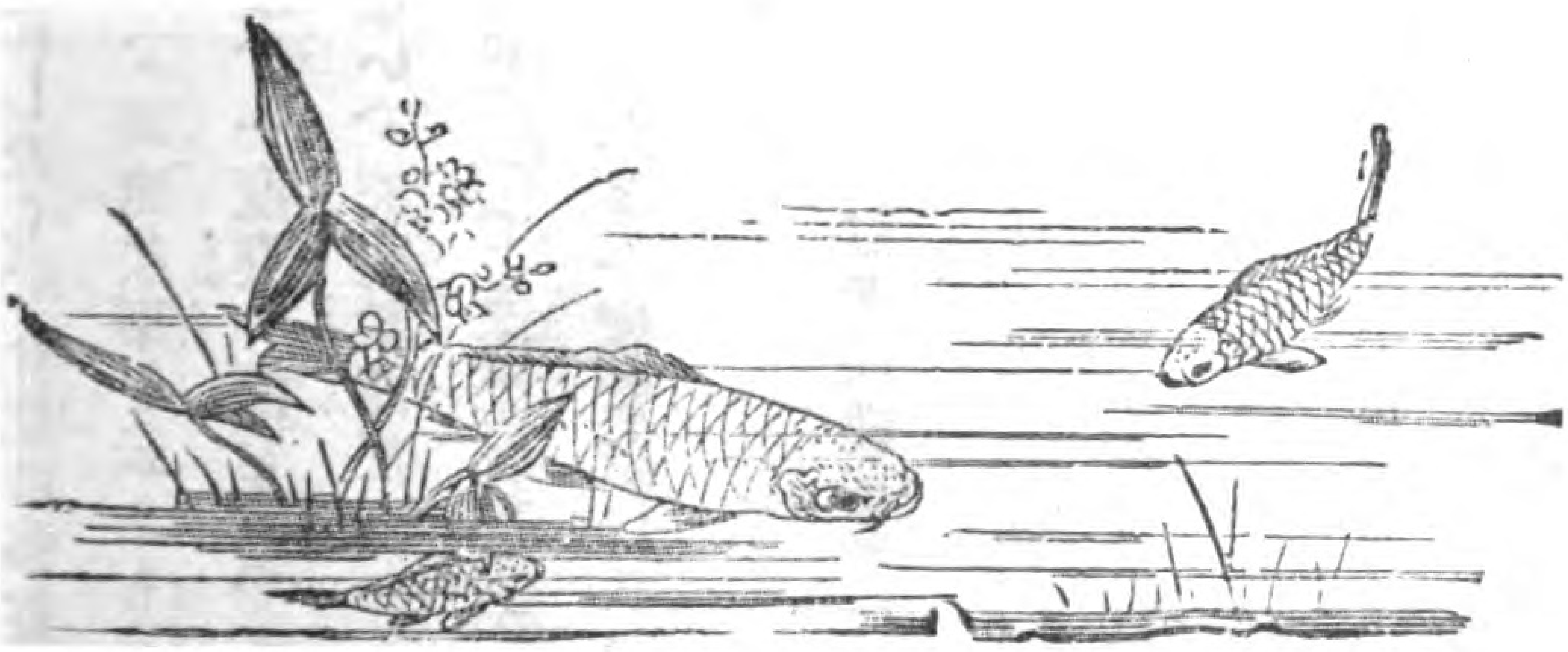
お道「夕照がしたのよ……もう何も心配する事はない、氣を落着けるんですつてばねえ」（抱辣めてゐる）

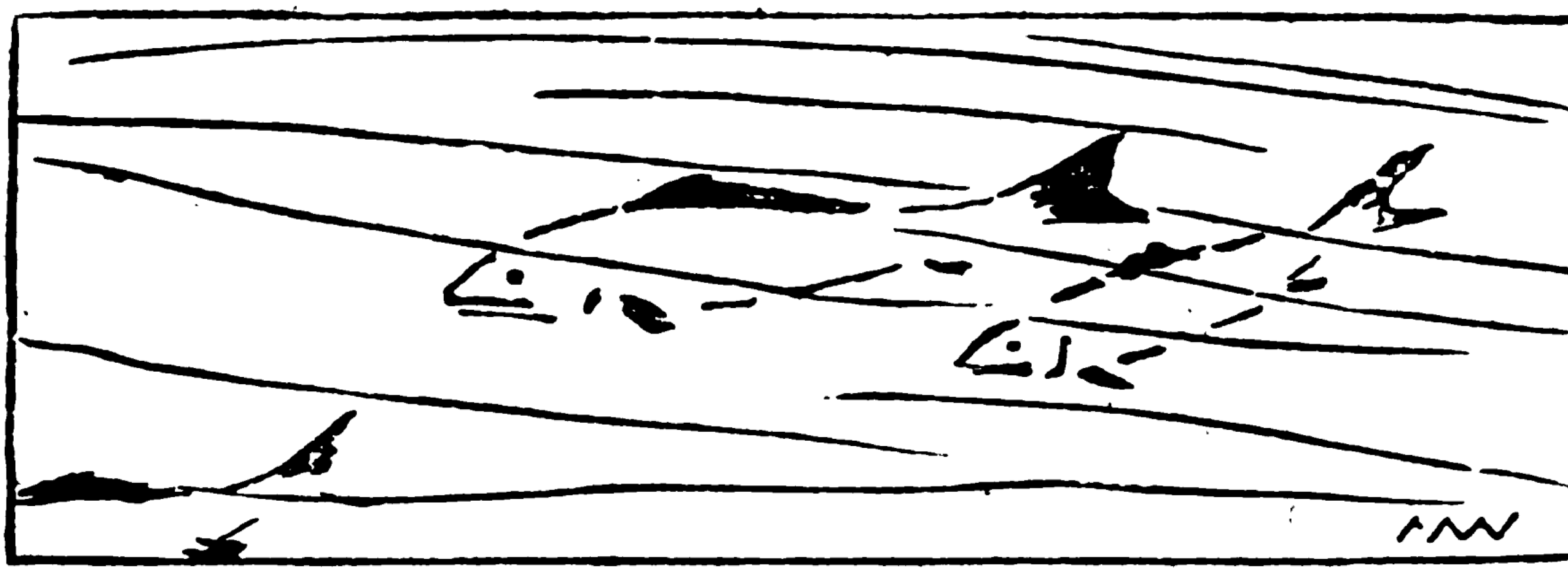
嘉一郎「眞實にもう氣を落着るが善い……金は大丈夫返つて來る、ア、、私はこれで漸つと安心した、明日から、丸嘉の運も直つて來るんだよハヽヽヽヽ」

（金庫の前に座つて快心の笑）

（赤く燃えた倉庫の壁の、夕陽の反映が見るく黄黑く不安に暮れて行く）

（カーテン）





美女の死骸

上司小剣

一

今日から「入梅」と暦に書いてある日、私は暫く二階の欄干に凭れて、薄墨色の迅い雲足を眺めてゐた。雨はまだ一滴も落ちぬけれど、空氣には夥しく水分を含んで、夕陽が丘と名つくる細長い丘一帶の若葉は、青い繪の具を使ひ過ぎたと言つた風に、重苦しく見えてゐる。

丘の麓の廣い野原には、新建ちの家が四五軒、塗り立ての壁の色を薄赤く見せてゐるが、それも濕氣にベト／＼としてゐるらしく、手に觸れる指が赤く染まりさうである。

午前十時の太陽は、腫物の癒つた痕でも見るやうに、薄墨色の黑の中に、ぼんやりと圓い一點を印して、よく／＼考へなければそこに太陽のあるといふことを知り難い。

昨夜は、郊外の住居に附き物の犬がよく吠えたので、屢々夢を破られて、朝から

頭の重いところへ、鳥も快くは啼かぬこの天氣で、腦を取り外して、冷たい清水を波々と湛へたのに二三滴のリゾールでもたらしたので、心ゆくまで洗濯をした上、薄絹で拭ひかけて、元の腦骨の下へ納めたいやうな氣がする。

何を感違へしたのか、一羽の白い蝶が、晴れた春の日でゞもあるかのやうに、ひら〱と舞つて來て、二階の屋根の廂から、廊下へ入り、小さな窓のガラス障子に鼻づらをこすり付けて、外へ出やう〱と焦慮つてゐる。

こんな厭やな日には、庭の森の茂みにでも潜んでゐればよいのに、其の森の宿を出て、弱い羽根で重い大氣の中へ泳ぎ出たさへあるに、わざ〱狹苦しい人間の家の二階の廊下なんぞへ入つて來て、出口が分らずに藻掻いてゐるのは笑止千萬である。ガラスといふものゝあることを知らない憐はれな蝶は、先きが見え透いてゐて、一寸も一分も進むことが出來ずに、堅く行く手を遮ぎられてゐるのに、奇妙を感ぜずには居られないであらう。

見よ、憐はれな小ひさきものは、美人の薄化粧に使ふやうな白い粉を少しづゝ散らして、羽根をばたばたさせながら、ガラス戸を上下左右に悶え歩いてゐるではないか。小ひさき彼れは、たゞ前面の廣い世界に出やうとして、いら〱してゐるのである。先きが見えてゐて少しも前へ行かれないのは、何んたる妙ちきりんのことであらう。——

斯くして彼の憐はれな小ひさきものは、藻掻きに藻掻き、悶へに悶へて不思議に透明な魔の隔てに身を擦り付けて死なうとしてゐる。全知全能——とまでは行かずとも、毛蟲から進んだ蝶よりは少しばか

り悧好な、――ガラスといふものを造り給ひし人間の眼から見れば、よく分つてゐることを、彼の憐はれな小ひさきものには少しも分らずに藻掻き悶へてゐるのである。

私はこんなことを考へながら、ツト進んで、ガラスに鼻づらを探り付けつゝ騒いでゐる憐はれな小ひさきものを捕へて、廣い世界へ放してやらうと思つて、ばた〱させてゐる羽根を押へやうとすると、憐はれに小ひさき彼れは、大きな毒手が來たと思つてか、如何にもして、眼に見えぬ奇妙不可思議の障壁を突破しやうと、ます〱羽根をばたつかして、物狂はしいまでに騒ぎ廻はつたが、世の中に眼に見えぬ不可思議のあらうとは思つてゐないらしい、憐はれに小ひさな彼れは、必ず前へ進み得るものとの確信から、一尺四方ほどのガラスを、あッちへ滑り、こッちへ滑りして、只管に前へとのみ焦慮り、後へといふ考へが少しも浮ばぬやうであつたから、捕へにくいには捕へにくかつたが、後へ戻ることを知らぬ悲しさは、折角人間にはない二つの結構な羽根を有ちながら、到頭人間の二本の指に押へられて了つた。

乃で私は直ぐに其のガラス窓を開いて、憐はれな小ひさきものを、彼れの望んでゐた廣い世界へ放してやると、哀はれや、押へる時指頭に力が入り過ぎたものと見えて、眞ッ直ぐに飛ぶ力はなく、少しばかりクル〱と舞つてから、ばたりと屋根瓦の上に落ちた。

憐はれに小ひさきものは、滑々と光る瓦の上で、バタ……バタと二度だけ力なく羽根を動かしたが、それ切り動かなくなつて、蒼光りのする瓦の上を永久の眠りの床としたらしい。私は何うにかして其の美しい、憐はれな、白い死骸を取り上げてやらうと思つたけれど、手を伸ばしても屆きさうになく、窓

から這ひ出すには危なッかしく、下から登るには梯子がなかつた。それでヂッと其の小ひさな白い死骸を見詰めて、彼女の（私はこの時からこの蝶を女性ときめて置きたかつた）魂魄が何處を彷徨ふてゐるであらうかなぞと考へてゐた。

夢が胡蝶か、胡蝶が夢か。と口吟みながら、私は何時までも、小ひさな白い死骸に見入つてゐた。美女の墓から蝶がひら〳〵と舞ひ出た。美女の魂魄が蝶に化したのであらう。などといふ物語はよくあるが、美女が死んで蝶になつて、蝶が死んで何になるであらう。美しく愛らしい蝶の前身が、醜く厭やな毛蟲であるなぞといふシアンスは、姑く考へたくもない。

私はまたこんなことをも考へながら、窓のガラス戸を締め、美女の死骸を家根瓦の上に見棄てゝ、階上の書齋に入つた。

床の間には、西京に今を盛りの閨秀作家が手に成つた燕子花の絹本の一軸が懸つてゐる。其の前にはロダン先生の野武者の半身像が、額縁に篏めて立てかけてある。鼻眼鏡が光つて、鼻が小氣味よくツンと尖つてゐる。鼻の孔の大きいのが目立つ。耳も福耳で大きい。頭髪は短くて、格別に手入れをしてもないやうだ。ロダン像の横に、相馬燒の俗な花瓶があつて、黄色い夏菊が萎れ切つたまゝに挿されてゐる。其の脇の書架の上には、幾冊の本を亂雜に並べた上へ、パリ出來の粗末な手遊品の人形が三つ放り投げたやうにして置いてある。一つは幽靈、他の一つは兵隊、今一つは競馬の騎手である。いづれも手ッ取り早く造つたものらしく、眼鼻なども黑と赤とで簡單に彩つてあるのだが、一つ〳〵に表情があつて、物に立てかけて置けば立てかけたなりに、轉がして置けば轉がしたなりに、必ず其處に個性が現は

れてゐるやうで、しかも上と下とに距てやうと、前と後とに分けやうと、三つの人形には、それ〳〵の連絡があり、天體の星座の如く、一つ〳〵別々で、また自然の聯鎖がある。パリを出て八重の汐路を遙々と渡つて來た三つのものが、異鄕に在つて元の土に歸へらうとも、必ず一つに結ばれやうとする執着があるのであらうか。この三つの人形に隣りして、日本の作家の手に捏ねられた裸體女の石膏が立つてゐるけれど、パリの手遊品人形に比らべて、全く死んでゐる。

私は毎日見慣れて、何の珍らしさもない、自分の机の周圍をば、今日は何んだか特別の趣きをもつて見入つた。さながら初めて入つた室のやうな工合にして。……

鬱陶しいこの天氣に、まぐれ出た白い胡蝶が私の指に摘み殺されて、其の小ひさな魂魄がこの書齋に入つて來て、私にこんな思ひをさせるのではあるまいか。胡蝶の靈が私の頭の中に潛り込んで、腦の中樞を搔き亂すのではあるまいか。

私は何んだか氣味が惡くなつて、總身の毛穴がよだつやうであつた。空は雲がいよ〳〵厚くなつたと見えて、室の內は燈火の欲しいほどの薄暗さである。私はツト立つて廊下から階下へおりやうとした。其の序に小ひさな窓から家根瓦の上を覗くと、白い蝶の死骸は、標本のやうに、愛らしく羽根を擴げたまゝである。

正午にはまだ間があるけれど、私は外で午飯をやらうと思つてゐたので、そろ〳〵外出の支度に、先づ新らしい足袋を穿いてゐると、魚屋が來て好物の鯛の白子を置いて行つた。乃でまた方針を變へて、宅の午飯を待つことにした。

二三丁先きに競馬の厩があるので、蠅の發生が夥しく、宅へも多く飛んで來て、家人は毎日蠅を殺すのに二三時間づゝを費してゐる。

「同じ蟲でも蝶々なんぞは可愛らしくて殺す氣になれませんが、蠅は憎らしいから幾らでも殺せます。ね。………蠅を殺しても化けて來るなんていふ心は起りませんね。」

棕櫚の葉の蠅叩きを斜に構へて、家人はこんなことを言ひながら、臺所から茶の間へ來た。

「蝶々を殺すと、化けて出るかね。」

私は二階で彼の憐はれな小ひさいものを摘み殺したことが、家人の心にも感應して問ひもせぬに蝶々なぞと言ひ出したのではないかとまで思つて、不安な口調で斯う言つた。

「蝶々だつて、よく見ると厭やな蟲ですが、衣裳が良くて派手だから、蠅みたいにジミな小うるさいのを殺したのとは違つて、人間の胸にこたへるんでせうね。……乞食女が坂道でのたれ死にをしたツて、碌に新聞にも出やしませんが、女優が舞臺で卒倒したら大變な騷ぎでせう。若し女優が殺されでもして御覧なさい、「女優殺し」なんて、毎日〳〵新聞には其のことばかり書いてあるでせう。」

家人は斯う言つて、手近かの飾臺の上に手をすり足をすりしてゐた丸々と肥えてゐる一匹の蠅を棕櫚の葉で叩き殺した。

蠅の死骸を見ても蝶の死骸を見たやうな憐はれさの起らぬばかりでなく、小氣味のよい感じがする。其の黑く醜い死骸を庭先きに投げ棄てゝ、暫く見入つてゐると、醜い死骸が少しづゝ動き出した。俯は蘇りでもすることか、今一擊を加へねばならぬと、私は家人の手から棕櫚の枝を奪ひ取つて、ヂツと蠅

を見詰めると、勤勉で力の強い蟻が蠅の死骸に喰い付いて、已れの身體よりも幾倍あるものを食料に貯へやうとして巣の方へ引き行かうとするのである。それが面白いので、私はまた飼臺の上で一匹の蠅を獲つて其の死骸を庭先きに投げた。スルと直ぐ蟻が來て、それを引き行かうとする、家人の殺した蠅の死骸はと見ると、もう加勢の蟻が三つ四つも集つて來て、樂々と一尺も先きへ引いて行つてゐる。後の蠅の死骸にも早や一つの加勢が出合つて、二つで引ッ張つてゐる。

蟻は其の社會組織に於いて、人間よりも遙かに進んでゐると學者は言つてゐる。この大きな世界が蟻の自由にならぬのは、人間の自由にならぬのと同じことであるけれど、蟻は其の能力の及ぶ限り社會狀態を齊整して來て、人間よりもズッと進步した生活をなし得るやうになつたから、人間社會に見るやうな苦痛も醜態もない。人間の社會が蟻の社會に比敵するまでに進步するには、前途に對して盛んにストラッグルしなければならぬさうである。――

私はまたこんなことを考へつゝ、取つても取つても取り蒜くせぬまでに近所の厩から襲來する蠅を叩き殺しては、庭先きを忙し氣に往來する蟻の仲間に與へた。蟻の嗅覺は稀に見る鋭さだといふことであるが、直ぐ傍に大きな蠅の死骸の轉がつてゐるを知らずに、チョカ〳〵と行き過ぎて了ふのが多い。偶然この香餌にブッかつたのが、「こいつはうまいぞ」と言つた風にして、蠅の死骸に嚙り付く。さうして後から來た二三匹と力を合はせて、自分の身體の四五倍もあるものを引いて行く。見たところ總べてが偶然のやうで、規律も節制も何も無さゝうで、それがちやんと大きな有機體の生活圏を作つてゐるのだもの。天體の星座を見るやうに、各個性が完全に發達して絕對自由を得てゐながら、自然に他のものと

聯應連絡して、束縛も抑壓も無しに、各個は各個として、一つの細胞として、また更に團體として、滯りなく活力を進めて行く。成程これが生活の齊整から得た進歩の絶頂かも知れぬ。

生殺しにした蠅の片翼を取つて、蟻の群れに投げてやるのが一番面白い。嗅ぎ付けて喰いかゝつた蟻は、蠅の羽搏きに跳ね飛ばされるが、懲りずに幾度でも喰い付く、其の中に一匹二匹と蟻の助勢が來て、前後左右から蠅に取り付く、蠅は全身の勇氣を鼓して、三四匹の蟻を身につけたまゝ引き摺つて歩く、轉がつてはまた喰い付き、駈け違つては助勢を呼ぶ蟻の大奮闘もさることながら、片翼を剝がれて、最早現世に望みの尠い蠅が如何にもして、刹那の難義から脱しやうとする躍動が面白い。人間は團扇片手に甘い乾葡萄などを摘みながら、笑つて――或は笑ふにも値ひせぬ些事として――傍觀――といふほどにはならぬ態度で――見てゐるけれど、蟻も蠅もシンケンである。嚴肅である。眞面目である。積極的と消極的との相違はあるけれど、彼等の全生活力は此處に極度まで展かれてゐるのである。

其の中にも私は、厩の方から飛んで來た蠅を殺しては、蟻の領地(或は遠征地)に投げてやる。蠅も厩の中で臭い藁の上にでも晝寢してゐれば、棕櫚の葉で叩き殺されて、蟻の兵粮にされる危險はないのであるが、彼れもまた生物である、生きてゐる中は躍動せずにはゐられぬのである。

生と死との境界標から、遙かに生の方に近い程度に棕櫚の葉の一撃を與へて、片翼を剝いだ上、其の蠅を蟻の群れに投ずると、蟻は香餌來れりと、直ぐ嚙み付くが、蠅はスウッと電車のやうに駈けて逃げる。蟻の足では追つかけやうもない。蟻は流石に思想が自由で、團隊生活が進歩してゐるらしく、總てが同意の下に行はれて、强制の規律といふものに壓伏されてゐるのではあるまいから、其の遠征軍の並

び方も人間のする觀兵式の行列のやうなものでなく、自然の中に個性の尊重の上から發動した團隊の約束といふ如きものがあつて、各個の細胞を一つの有機體に繋いでゐるやうであるが、この片翼の蠅が蟻の群れを狂ひ廻はる時には、人間が散兵教練をやつてゐる上へ、飛行機が墜落しかゝつたくらゐの狼狽はする。

其の時、私が妻楊枝の尖端で、狂ひ廻はる蠅の頭を一寸突くと、蠅はグタリと倒れて、足だけをピク〳〵動かしてゐる。蟻は得たりとばかりに喰ひ付いて、まだ息の通つてゐる蠅を引いて行かうとした。蟻どもはこの不意の偉大な加勢を何と觀じてゐるのであらうか。天の與へと思つてゐるのであらうか、神の加護と信じてゐるのであらうか。偶然の出來事として看過してゐるであらうか。彼等の社會には迷信があるであらうか。彼等は人間のすることをば全知全能として尊び恐れてゐるであらうか。――

蟻の領地の上の方には、廂から松の枝へかけて、丸々と肥えた蜘蛛が其のアンディイヴィデュアリズムの醜い身體をさらしつゝ、網を張つてゐるが、この網には一つも獲物がかゝつて居らぬ。私もこゝへは蠅の死骸を投げてやりたくない。

蟻の社會では、人間の社會よりも分業法が細かくなつてゐて、勞働に服するものと、生殖に從ふものとに、職業もハッキリ分れてゐるといふことである。

「人間の社會でも、さういふ風に分業が行はれるやうになると、僕は眞ッ先きに生殖業を志願して、鑑札を受けるね。」と、私の知つてゐる或る肥滿した洋行歸りの紳士は、いやらしい眼付きをして言つたことのあるのを覺えてゐる。

「愉快な生殖といふ仕事を見棄てゝ、情けない勞働を志願するものがあるだらうか。」

其の肥滿した紳士はまたこんなことを言つて、卑しい笑ひ方をした。

「蟻の社會のやうに進步したところでは、仕事は皆んな愉快ときまつてゐるのでせう。情けないなぞとは、下劣な人間社會からの想像に過ぎないんでせう。」

私は斯う言つてみた。肥滿紳士は何を馬鹿なといふ顏付きをした。其の言ふに言はれぬ厭やな〳〵、女郎蜘蛛のやうな顏付きには、今もなほ眼の前に見えるやうである。

鯛の白子を蒸して、トマトソースをかけたのと、鯛の頭のスープとで午飯を喰べた。大きな虻が來たので、早速棕櫚の葉で叩き殺して、蟻の領地に投げた。家人は飯の給仕をしながら、五六匹の蠅を叩き殺して、悉く蟻の領地に投げた。

苺にクリームをかけたのを食後に喰べながら、蟻の領地を見やると、運ぶべき食料の豊富なのに、だん〳〵同勢が增して來て、今投げた虻の死骸なぞには、もう蟻が眞ッ黑にたかつてゐる。

傍の青磁の瓶かけには、達磨堂の小形の鐵瓶に湯がたぎつてゐる。私は苺の匕を置くと、其の鐵瓶を取り上げて、煮立つた湯を虻にたかつてゐる蟻の群れを中心にして、蟻の領地へ出來るだけ廣く浴せかけた。ジウ〳〵〳〵と音して、煮え湯は土に浸み込んだが、蟻の小ひさな肉體は、高度の熱に爛れて、伏屍狼籍と言つた風に、ゴロ〳〵と斃れてゐる。旺盛であつた今の今までの活力は全く失はれて、せッせと喰ひ付いてゐた虻の死骸とゝもに、魂魄のない「物」になつてゐる。

其の上の網の眞ん中には、蜘蛛が冷かな眼でこの慘状を白眼に睨んでゐるらしいので、私は棕櫚の枝

を逆さにして、ピシリと一撃を與へると、蜘蛛は忽ち肝脳地に塗れて醜いが上に醜い死態を見せた。其處には纔に九死の危險境を遁れた蟻が、キヨト／＼として走つてゐたが、彼れにはもうこの蜘蛛の死骸といふ新たなる好食料を顧みる餘裕はなかつた。

私は先刻の蝶の死骸が何うなつたかと、二階へ上つて見ると、彼女は淸らかな死の上に、永い眠を眠つたまゝでゐる。厭やになるほど勤勉な蟻の勞働も、此處までは力が及ばないであらう。私は憐はれな小ひさく美しきものを、下根にして働くばかりが能の蟻風情に無殘々々と喰べさせたくはないと思つた。このまゝに、風に煽られて、雲の上までも舞ひあがれかし。美しき姿して。……

私は、斯う獨言して、またヂッと美女の死骸に見入つた。

美しい蝶も死んだ。勤勉にして能く勞働し、能く生殖する蟻も死んだ。個人主義の蜘蛛も死んだ。傑れたる暴力の前には、如何なるものも無力である。

暴力の勝利！

二

私はヨソイキに着更へて、フイと家を出た。

空は朝の通り曇つたまゝである。電車の通じてゐる坂上の街道へ、踵に砂埃を立てつゝ急ぐと、程遠からぬ苺園へ、新鮮な苺を喰べに行くらしい三四組の男女に會つた。西洋人も二三人見えた。島國の人も大陸の人も居たやうである。ストローベリーといふ言葉や、フレイズといふ言葉が、ちよい／＼耳に入つた。

電車では、一二臺やり過して、都合好く一番先きの端に腰をかけた。動き出すと眞向から風を受けて、帽子が吹き飛ばされさうである。風とゝもに小砂をも顔に吹き付けて來るのは厭やだけれど、肌の蒸し暑さは、風に毟り取られて行くやうで、心知が淸々とする。この邊で第一の長い烟突を有つた錢湯の「女」と扇形の額に書いたのを掲げてある方の入口が内部から開いて、大功記の十段目で息子の竹槍に刺されるやうな白髮頭の老婆が腰を屈めて出ると、其の後から身長のスラリとした、眼の覺めるやうな湯あがり姿の若く美しい女が出た。

「先刻の蝶がこんなになつて現はれたのではないだらうか……」

私は途方もないことを考へながら、電車から其の女を見てゐたが、電車の疾風の如くに走り行く出會頭によく見ると、其の女は界隈に評判の疑問の女であつた。

「若く見えたり、老けて見えたり、小柄に見えたり、大柄に見えたりするので、近所でも彼處の家には姉妹二人娘が居ると思つてたんですつて、妙な女ぢやありませんかね。綺麗だから若く見えますけど、彼女もうそんなに若くはありませんよ。」と、家人も噂さをしたことのある其の女であつた。

冬の夜を銀座のカフエに更かして有樂町の家根の上から、郊外へ通ふ高架鐵道によつて歸へらうとすると、早や車掌が笛を吹きかけてゐる終電車へ、チビた日和下駄の音を立てゝ駈け込んで來る若い女があつた。時ならぬ頃に、湯上りと見えるほてつた赤い顔をしてゐるのが不思議だと思はれたが、其の當座終電車に乘ると屹とこの女が來る。あらい模樣を置いた對の銘仙の羽織と着物とが毎も同じである。チビた日和下駄が草履に變つてゐることもない。湯上りの赤い顔までが、判で捺したやうにきまつてゐ

る。紫縮緬の肩掛のやうなもので、昔風のおこそ頭巾風に頭をつゝんでゐるのも、さまつた形であつた。

或る夜それが其の紫縮緬を撤つて手に持つてゐたが、頭髪はと見ると、鬘下地にしてあつた。ハヽア解つた、と私は思ふとゝもに、今までそれと氣が付かなかつた自分の迂濶を笑ひたくなつた。彼女はこの高いステーションから後家根の見える劇場で養成しかゝつてゐる女優であつたのだ。

私の下りるステーションで、矢張り彼女も下りた。さうして兩手で袂の端を握つて、小走りに石段を駈け登つて行く狀は、まだ舞臺の上の修練の足らぬらしい身のこなし方であつた。

「彼女は淫賣ですつてね。」と、或る日家人はさもさげしむ風の口調で言つた。

「淫賣だつて職業だらう。」

私は、家人がそんなことは口にするだに穢らはしいと言つたやうな顏付きと、さもさも自身はそんなものよりも一段上に位する人間だ、わたしは淫賣ぢやないといふ風の態度とが氣に入らぬので、態と斯う言つてやつた。

「××座の女優になつたんださうですが、──さう言へば、××座の新女優として大勢の寫眞が新聞に出た時、あの女の顏もありましたよ。──一昨年あたり淺草の六區へ出てたことが知れて、仲間から排斥されたりしたので、到頭除名されたんですつて。……」

現在の世の中に於ける婦人の位地とか職業とかいふことに就いては一切盲目な家人に、私の「淫賣だつて職業だらう」と言つた言葉の奧に潜んだ意味が解らう筈はないので、こんなことを言つて彼女の身體にケチを付けやうとした。

「〇〇〇郎といふ壯士役者の妾をしてゐたこともあるんですつてね。」

淫賣とか妾とか、婦人に取つて最も恥辱であるらしい文字を並べて、家人は彼女を貶し去らうとした。

「お前だつて、生活の爲めに俺の女房になつたんだらう。……職業として俺の家へ片付いて來たんだらう。」

斯う言つて、私はヂッと家人の顏を見詰めてゐたが、家人には、私のこの言葉が家人自身に先刻から言つた彼女を貶した言葉とどれだけ密接な關係があるかといふことを全く知らなかつた。

「兎に角綺麗だからいゝぢやないか。女は綺麗でなければ生きてる甲斐がない。醜い女なんか生れて來なくてもいゝんだ。」と、私は棄鉢のやうに言つて、くるりと横を向きながら、家人にぽんの窪を見せた。

「綺麗と言つても一寸の間ですよ。子でも生んでごらんなさい、直ぐ汚なくなりますからね。」

當てこすりを言はれたと思つたらしく、家人はツンとして斯う言つた。

「子を生むから女はえらいんぢやないか。今ではもう女が何事も皆男に負けて了つて、女のすることで男に出來ないのは子を生むといふことだけだ。男が幾ら威張つても、これだけは何うにも仕樣がない。」

何かなしに、家人と反對のことを言つてみたいといふのが、私の其の折りの心持ちであつた。

「なアに子さへ生れなければ、女は男に負けてやしませんよ。子を生むといふことが一番女の弱味ですからね。」

「そらさうかも知れない。……總べてのものは、長所が即ち短所、强點が即ち弱點になるんだからね。

國でも社會でも偉人でも皆さうだよ』

私の話は何うかするとギゴチない書生論に入つて行かうとする。——

こんな時には、ゆつくり走つて呉れゝばいゝと思ふ電車は、意地わるく速力を増して、乘つてゐる私は歩いてゐる彼女の顔をチラと見たゞけで、直ぐもう首を廻らして、白髪頭の老婆と並んで歩いて行く其の後姿を見送らなければならなかつた。

チラと見た其の瞬間にも、彼女は持前の嬌羞を作つて、濡ひの豊かな眼で電車の方を見て行つた。腰の曲つた老婆よりは二尺からも身長が高くて、肥えてもゐなければ痩せてもゐない撫で肩の形が傑れて好かつた。老婆の黒い帶に對して、淺黄の狹い帶を貝の口に結んだのが可愛らしくて、今日は殊に若く、十六七より上には見えなかつた。

『成るほど、若く見えたり老けて見えたり、小柄に見えたり大柄に見えたりする女だ。女優に嵌つてゐるのかも知れない。』

こんなことを口の中で獨りごとに言つてから、私は暫く彼女に就いて家人と語り合つたことをいろいろと思ひ出してゐた。

『あんな女を女優にして置けばいゝのに、除名するなんて、××座も馬鹿だ。女優の品行を彼れ是れいふなんて、花に戯れる蝶を追つ拂ふよりもまだ野暮だ。』

私はまた電車の内でこんなことを考へてゐた。

「丸で教育がないんで、書き抜きが滿足に讀めないんですつて、そんなことで朋輩に馬鹿にされて、自分にも辛くなつたんでせう。」と、家人の言つたことを、また少しづゝ思ひ出した。

「教育が何んだ。俺は教育といふ化物を咒ひたい。」

こんなことを思つてゐると、電車は早や芝園橋の乘換場に着いた。

三

「ウ、。」と唸るやうな聲が左の耳に入つたので、私は横をむいて見た。

「お出かけ。……」と太い聲が、矢張り唸るやうに聞えて、薄鼠色の洋服を着た六尺豊かの大きな人が、弛んだ顔の筋肉に寂しい微笑を湛へて立つてゐた。私は丁度來た目的の電車を一つ遣り過すことにして、

「何處へ行くんですか。」と、必要もないことを訊いてみた。

「△△銀行へ給仕の口を頼んどいたから、これから試驗を受けに行つて見やうと思つて。……」と、大きな人の聲には、物の憐れが含んでゐた。給仕の口といふのがこの大きな人には不思議なので、私は一寸呑込めなかつた。この大きな人は一昨年○○會社を罷められてから無職業に苦んでゐるので、近頃この人を見ると直ぐに聞くのは、「何處かいゝ口が」といふ言葉であつたけれど。

「うまく及第して呉れるといゝがなア。」と大きな人は心配さうな顔をした。私はこの人の大きな、弛んだ顔から、寂しい、憐はれな、心配さうな、いろ／＼の厭やな表情を見るに堪へないで、傍に眼を外らすと、其處に顔の色の蒼い、血の巡りのわるさうな少年が、紺飛白に小倉の袴を穿いて立つてゐた。さうして私の視線と其の少年のドンヨリと曇つたこの日の天候のやうな鈍い眼の光と行き逢ふと、少年は

白い布片の被せてある學生帽を脱いで丁寧に禮をした。

『雄二郎の奴、先刻から幾度お辭儀してるんだい。』と大きな人は苦々し氣に言つた。大きな人が二男の雄二郎を連れて△△銀行へ給仕の試驗を受けさせに行くのだなといふことゝ、雄二郎が先刻から私に幾度も禮をしたけれど、私が氣付かずに居たのだといふことゝが、同時に解つたので、私は帽子をとつて丁寧に、子供への答禮には過分な頭の下げ方をした。

『試驗は三時からだが、まだ大分早いね。』と、大きな人は稍滿足氣な顏をした。

『給仕なんぞさしたつて詰まらないでせう。』と私は言つて、續いて來た電車の方向標に見入つた。

『なァに此奴は學校が嫌ひでね。』と、大きな人の顏にはまた苦しさうな色が浮んだ。雄二郎は去年中學校の入學試驗を三ヶ所まで落第して、到頭無試驗入學の安中學校へ入つたけれど、今年の進級試驗に落第して、

『雄二郎は一學年を二年づゝかゝつて行くんだから十年經たなけれや中學が卒業出來ない。』と、今年三學年の兄宇一郎は言つてゐた。

『まだ時間があるんなら、公園の中をブラ／＼歩かうぢやありませんか。』と、私は目的の方向標を揭げた電車がなか／＼來ないので、斯う言つて橋の方へ歩き出した。公園をブラ／＼するなんて、そんな呑氣な場合ぢやない。とでも言ひた氣な顏をしながら、大きな人は、それでも默つて、雄二郎と二人で私の後から隨いて來た。

『一生懸命に汗水流して働いても、長屋の家賃が拂ひ切れないで、店立てを食ふ奴があるのに、高がノ

ヲクラ坊主の寢所に大きな家を建てるんだね。」

暫く無言で歩いてから、大きな人は例にない齒切れのよい調子でこんなことを言つた。右手の方に竹矢來を組んで、『大殿工作所』と筆太に黑々と達者な字を書いた木標を建て、假屋の中で大工たちが手斧の音を立てつゝ太い木材を扱つてゐるのを、ジロ〳〵と見やりながら。

『堂塔伽藍は幾度も建つべし。また幾度も燒くべし。……と昔は言つたものださうです。火事ほどよく利く廣告は今だつてありませんものね。大本山の大きな堂が燒けると、ソラ大變だと、早鐘の響きと、天を焦がすやうな焔とは、誰れの耳にも目にも入る。……大本山の名と其の宗旨とは一層強く大勢の人の頭に印象される。こんな立派な廣告はない。おまけに今なら翌くる日の新聞が大袈裟な書き振りで盛んに無料廣告をやつて吳れる。……イヤ假本堂の建築だの、方丈の引き越し先きだのと、其の當座は廣告の種が盡きない。それからいよ〳〵再建の勸化といふことで、傳道の機會を作る。……普請にかゝる、棟上げだ、開眼供養だと、一尾の鯛をさしみにしたり、鹽燒きにしたり、うしほにしたり、煮付けにしたりするやうに、寺が燒けて建つまでには隨分いろ〳〵のことに利用が出來る。……だから昔は坊主が態々火を放けて寺を燒いたものださうですよ。』と、私が唾液を呑み込み〳〵言ふと、

『このまアせちがらい世の中に、坊主の寢所の贅澤な普請に金を出す奴があるもんですな。』と、大きな人は感慨の深さうな顏をした。

『そこは矢ッ張り慾得づくですからね。死んでから極樂へ行かうと思つて。……』

『フヽン。……』と。大きな人は鼻先きで笑つたが、それからまた暫くは何事をか獨りで考へる風をし

「雄ちやん、お父さんがあんなことを言つてるよ。」と、私は仕方なしに雄二郎の方を見たが、雄二郎は艶のない顏をケロリとさして、菓子でも喰いたさうに、ぽんやり突ッ立つてゐた。

「君、こいつ馬鹿ぢやないだらうかね。」と、大きな人は、親類中で評判の話の種を、今頃漸く氣にかゝつて耐らんといふ風をして言ひ出した。

「さうぢやないでせう。……大石内藏之助も子供の時は晝行燈と言はれたさうですからね。却つてこんなノッソリした、山が崩れても驚かん、と言つた風なのが先きになつてえらくなるんかも知れませんよ。」と、私は大きな人の好きな浪花節の智識で解釋の出來る比喩を引いて言つた。

「それもさうだがね。」

稍會心の笑みを漏らしつゝ、大きな人は更に言葉を次いで、

「奥州の棚倉か北海道の空知邊へでも行つてこッそり死ねば、東京の新聞へは死んだ人なんて小ひさい字で名も出されずに濟むと思ふから、いッそやつ付けやうかと、幾度決心しかゝつたか知れないが、親甲斐もないやくざ親でも、子供の眼からは大船のやうにたよりにしてるだらうと思ふと、それも可哀さうだし、また子供の大きくなつた後に、君の親爺は行方不明だなんて友達に言はれるだらうと思ふと、死ぬにも死ねないし、……こんな苦しいことはないよ。」と、突つ立つてゐる雄二郎の方を見い〳〵言つた。雄二郎は父の言葉も一向耳に入らぬらしく、矢張ケロリとして、大きな口で欠伸を二つ三つ續けてした。

「詰らないことを考へたッて仕様がない。……死ぬ、死ぬいふものに死んだためしなしといふことも

あるから、そんな下らんことは言はないで、まア早くいゝ勤め口でも見付けるですね。』

私は言ふこともないので、こんなきまり文句を並べて、汗の小粒の染み出してゐる大きな人の黒く廣い額を見た。白髮は尠いが頭のテッペンのごッそりと禿げかゝつてゐるのが、折柄脱いだ古い8形のパナマ帽の下から見えた。

『其の口がなか／＼ないんでね。……詰まらないことでも何か腕に覺えがあると、また仕事も見付かるんだが、普通の讀み書きと算盤ぢやア、何處でも人が餘りかへつてるんでなア。……僕くらゐの年齢になると、役人なら敕任か少くとも奏任なら三等になつてるか、銀行會社なら重役だものね。腰辨なら學校を卒業した若手がゴロ／＼してゐて、安くて來るんだもの。……よッぽどいゝ引きでもなけりや、何も好きこのんで金のかゝつてない年寄りの體を買うことはないんだ。……』

眼の縁に露の玉が宿つてゐはせぬかと思はれるほどに、沈み切つた顔をして、物哀れな聲を出すのが、身體の大きいだけ、一際目立つて慘ましかつた。

『だん／＼セチ辛くはなつて行くんですが、今は殊に工合のわるい時でね。……これが貧民と富豪――勞働者と資本家――といふ風にキチンと分れて了へば、ほんとに始末がいんですがね。中途半端の妙なものがあつてね、中等社會だの何んだのと言つてるから、そいつが一番困るんですよ。』と、私は月並みの理屈を眞面目臭つて言つた。

『僕なんぞはまア中等社會――と言つても、中の下ぐらゐのところだが、それも表面だけの話さ。……中等紳士で候のと、こんな洋服を着込んだり、門のある家に住んだりしてるが、内所の苦しさは新綱や鮫ヶ

てゐた。

「極樂なんて、ほんとにあるんだらうかね。」

考へ〳〵た末に、大きな人はこんな詰まらないことを言つた。

「何んとも分りませんね。」と、私は嘲弄うつもりで言つた。

「極樂が若しあるとすると、今斯うやつて苦んでゐるのも、子供の時の煎餅一枚ぐらゐのもんかも知れんがね。」と、大きな人は謎のやうなことを言ひ出した。

「子供の時の煎餅一枚ぐらゐ、ッて一體何のことですか。」

「僕は兄弟が多くてね。子供の時よくお袋から煎餅なんぞ貰つても、皆んなに行き渡らないもんだから、兄貴は二枚貰つてるのに僕は一枚きや貰はないことゝあつたし、弟が一枚貰つて僕は一枚も貰はないこともあつたんだ。其の時の殘念さつたらないんです。……今から考へて見れや高が煎餅一枚だから、何うでもいゝんだが、其の時は其の一枚の煎餅が命懸けの大問題だつたよ。……」

大きな人は柄にない比喩なんぞ引いて來て、重々しく語り出した。さうして、もう其の後は言はずとも分つてゐるのに、

「今斯うして生活に追はれて、子供を給仕に出さなけやならんやうになつて、藻搔き拔いてるが、將來極樂へ行つてから考へたら、子供の時煎餅一枚喰い損なつたぐらゐのことかも知れんね。……アハヽヽヽ。」と、取つて附けたやうな苦笑を添へて言つた。

「人間といふものは、何うかすると後生氣を出すもんですね。あなたが○○會社でドッサリ月給取つて

る時分は、地獄の極樂のといふことをテンで聽いたことがなかつたんでがね。」

『あんまりドッサリでもなかつたが、僕なんざア食つて行くことに困りさへしなければ、餘計なことは考へんからね。……兎に角今の人數で無收入と來ちやア、神佛を思ひ出さうぢやないか。……」

『乃が宗教といふキワ物の附け込みどころなんです。……地獄だの極樂だの、天國だの。何が何で、これが斯うと、比喩ずくめで誤魔化されちまうんだから。……何んでも比喩ちう奴が曲者ですよ。これは斯ういふやうなものだと、勝手に一つ比喩を製造すると、其の比喩からまた比喩が生れて、ノッピキならんことになつて了うんですからね。」

『まアいゝさ。……僕は別に地獄極樂や天國を信じ樣といふぢやない。君が言ひ出したからツイ言つて見たんです。しかし何うしたもんだらうね。宇一郞とこの雄二郞は眞逆間違へば小僧にでも何んでもなるだらうが、季の五人の年子がね、まだこまかいんだからお力もあれを抱へて困るだらうと思ふんさ。……實はね、こんなやくざな意氣地なしの亭主なんか居ない方がいゝだらうと思つてね、奧州の棚倉か、北海道の後志邊へでも行つて、一思ひにやつて了うかとも思ふんだが。……」

大きな人は右の手に持つてゐた扇子で腹切る眞似をして、沈痛な色を顏の全面に浮べつゝ、人通りの稀れな廣い往來の松の木の下の棄石の上にドカと腰をおろした。客の尠い電車が轟と行き過ぎた。

『銀行へ行くのが遲くなりやしませんか。』と、私は稍どぎまぎして言つた。

『銀行なんぞ何うだつていゝや。……この松の樹はいゝね、レコやるのに。……』と、大きな人はまた兩手で首を括る眞似をして、眼尻に小皺を寄せつゝ笑つたが、其の眼は戲談らしくなく凄かつた。

襤褸よりヒドいんだものね。」

「さうですとも、正體は貧民で勞働者で、しかも失業者なんですが、紳士といふ皮を被つてるから、暑苦しくていけないんです。眞逆棟割長屋へも入れないとか、印袢纒も着られないとかいふことになつてね。」

「見得を飾らうとするから惡いんかなア。」と、大きな人は深く考へ込む風をした。先刻から幾度かポケットを探ぐつて取り出した皮の卷煙草入れの、蓋をとつて見ては空なのに失望しつゝ、元のポケットに納めたのを、また取り出して蓋をとつて、漸と氣付いた風で、周章てゝ納ひ込みながら、物欲しさうな顏をした。

「見得と限つた譯でもないでせうが、さういふ習慣で來たんですから、急に最下層の汚ならしい生活も出來ませんものね。第一身體がさういふ風になつてゐないもの。……物の起るのにも夫れ相當の順序があるやうに、物の亡ぶるのにもまた順序があるんですよ、亡び行く中等社會も、全く痕跡を留めないまでになるには長いことかゝるでせう。其の亡び行く道中筋に當つたものが、いゝ面の皮なんです。」

「全くだね、一文の收入はなくても、ヘナヘナ音請ながら、名前だけでも門や玄關の附いてる家へ住まなけやならんし、嚊は奥さんて言はれるし、子供は學校へやらんならんし、詰らない力持ちをしてるんだ。」

「だからまア、後生を願つて、極樂行きを樂みにしますかね。……現在の苦しみは高が煎餅一枚の問題だと思つて。……」

口から出まかせに、私はさまざまのことを言つてみた。

『何んしろ、この不景氣では仕様がない。全體何時になつたら景氣が直るんだらう。戰爭が濟めばとか、何が何すればとか、前觸れだけは、耳が胝になるほど聞いたが、一向直りさうもないね。』と、大きな人はまた未練がましい口調をして言つた。

『南の方へ急に流れてる川の水が、風の工合か何かで、一寸ばかり逆に流れたつて、川が北へ流れるとは言はれないんです。今の世で景氣が直る〳〵といふのは、南へ流れてる水が少しばかり北へ波を打つぐらゐのことを指すのです。……世界の富が增加して、貧民がまた增加するといふ變な風向きが根本から改まらない限り、不景氣の直りッこはありません。』と、私は一廉の物識りらしい風をして喋舌つた。

『そんなものかなア。』

呑み込めないと言つた顏をして大きな人は、溜息とともに立ち上り、

『雄二郎行かうか、遲くなる。』と、動物性の愛情に充ちた、瞼の弛んだ眼で息子の顏を見詰めてゐた。

『うむ。』と、濁つた聲で返辭して、雄二郎はまた欠伸をしながら、他人事のやうにノロ〳〵と歩き出した。

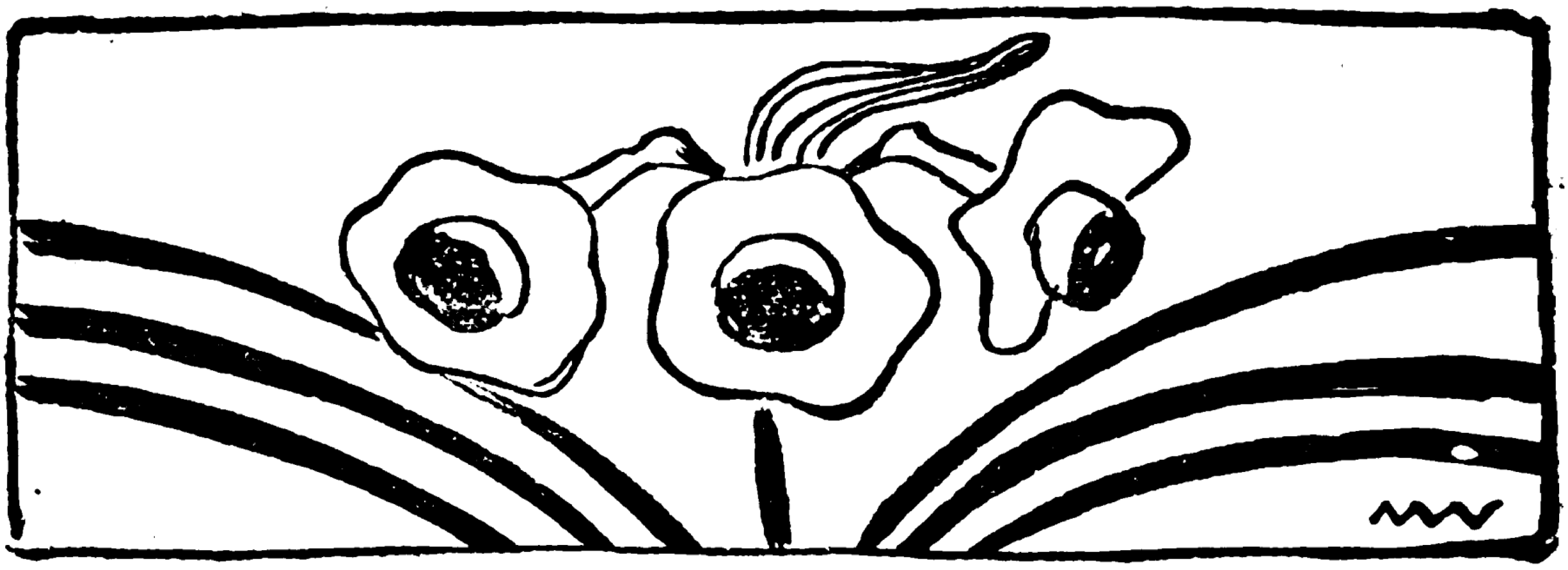
一滴、二滴、太い松の粗らな枝の間から雨が落ちて來た。

『家根の上の蝶々の死骸は何うなつたらう。』と、私はまた彼の美しく憐はれな小ひさいもの丶ことを考へ出した。

『蝶々の死骸。……美女の死骸。……雨に流されるだらう。……』

大きな人に別れてから、私はこんなことを口の中で言つて、家の方角へ引き返へした。

振り返へつて見ると、大きな人は息子を先きにして、えんやらやんと電車に乘るところであつた。（完）



共益貯金（スケッチ）

池田大伍

市内場末の人通り少き横町。舞臺前面往還の心、上手ずつと側へ寄せて格子戸を嵌めた冠木門、續けて下手見切まで生垣、但し中央廣く破れて觀客席の何所よりも中の仕事充分に見透ける。登場の人物も冠木門より寧ろこの破れより多く出入す。生垣の中はもと庭であつたのを手入をせず、邪魔な樹や枯れた樹は取片づけて廣場にした心。所々植込見すぼらし相に殘り、下手寄に車井戸がある。正面奥は二間建の長屋、格子戸を嵌めた入口、二つ並んで見ゆる。續いて上手奥は植込越しに二階建の横手見える。前の冠木門はこの家に通する心。つまりこの二階建の主人が手廣な庭を半分潰して借家を建て、それがすべてあまり構はずにあるといふ道具。舞臺前左右の見切は植込でよし。但し上手の植込の前に「腦氣に神丹、幸達は勇氣を要す」といふ大字の廣告あるやゝ太き電信柱。

「車井戸の右におとよ、三十五六の温和しい情に脆そうな質、二軒長屋の右の方の主人、某印刷所の職長の妻、洗濯をしてゐる。同じく左におみち、大柄の十五、我儘そうな質、これも洗濯をしてゐる。上手におとよの子龜太郎、八歳位、つまらなそうに破れた飛行器をもつて遊んでゐる」

おみち　「疳癪を起したように絞り上げた洗濯物を盥へ打付け、身を搖ぶつて立上り」あゝ、もう忌だこんなこと。私なんかにさせたつて出來やしない。「泣聲を出し」あら忌だ、こんなに手が赤く剝けちやつた。

おとよ　みつちやん、それは慣れないで力をいれてごしくやるからよ、やつぱり骨で洗はなければいけませんよ。辛抱してやつてごらんなさい、ぢき出來ますよ。

おみち　だつてこんなに［とまた泣聲で］赤く剝けちまうんだもの、私の手軟かいから無理よ。母さまがすればいいのに。

おとよ　だつてお母さんは御用が多いから少しは手助けしなくつちやあいけますまい。……それに道ちやんだつてもう直御嫁に行けば洗濯もしなきやあならない。今の中苦しんで置けば先へいつて樂ですよ。

おみち　私洗濯する程ならお嫁にゆかない。

おとよ　だつて一家のおかみさんになつては遊んでゐられませんよ。

おみち　あら小母さま、忌な、……私おかみさんだなんて云はれる所へはこれでも御嫁に往ない積よ。……それから小母さま。もう道つちやんていふのよして下さい。［とやゝ俯眼になり］品が悪いわ。

おとよ　あら、それは悪かつてね。ではお道さん？

お道　いゝえ、道子さんていつて下さい。……だけど小母さま、これからは學問がなくてはいゝ所へお嫁に往れないのねえ。それに母様はもう學校を下つてしまへくつていふんですもの、解らないにも程がある［とまた癇を起したように脣を喰ひしばって］あんな母様つてありあしない。娘が出世しようとするのが忌なのかしら。

おとよ　まあ道……いえ道子さん、お母さんのことをそんなことをいふもんぢやありませんよ。

おみち　でもあたしもう癇癪が起つて、起つて［と袂先を噛んで引張り］ね、私今裁縫學校へ行つてるでせよ。それもやつと母様を承知させて上つたの。だけど小學の御友達は高等女學校の方なのでせよ。途中であつても肩身が狹いわ。この間もみんなで顏を見合せて、あなた裁縫の方なのつて變な眼をするんですも

の、それだのにこの頃は裁縫學校も下つてしまへつていふんですもの　わたしだつて癇がおこるわ。

おとよ　まあそんなことをいつたつて‥‥

おみち　全く不味ないわ。私なんだつて家の様な所へ生れたんだらう。奥の吉井さんの妙子さんね、何を着たつてあんな縹緻で似合ひもしないのに、始終着物が變つて‥‥小母さま見て？　過日着てゐた紗縮緬のしぼりのコート。

おとよ　へえ、この頃そんなものが流行るんですの。

おみち　あら小母さま、忌だ。‥‥けれどあんな縹緻だつてお金さへありさへすれば何んな裝だつて出來る〔と當所もなく見るような眼付をして〕私いつそ藝者になつてしまはふか知ら。

おとよ〔眼を瞪って〕まあ。

おみち　墮落だつて構ふもんか。これからの世の中はお金さへありさへすればいゝのよ。

おとよ　そんなことをいつたつて道子さん。

おみち　いゝえ、小母さま、そうよ。小母さまの所へよく來るやま子さんね。

おとよ　えゝ、おやま‥‥

おみち　何時も好い裝をして帯止や指環が始終變つてゐるのね。今大變いゝ所の奥様になつてゐるんですつてね。

おとよ　いゝえ、いゝ所つていふ譯でもないんですよ。あれの家も不仕合で藝者に出て漸く堅氣になつてあゝしてゐるんですが、連合が相場師ですから浮沈があるので苦勞は絶えますまいよ。

おみち　でもやま子さんはいつも面白相だわ。

おとよ　あれは陽氣な質ですから。

おみち　美ましいわ。

〔この時先刻から飛行器をしきりに直しては飛ばそうとしてゐた龜太郎はあと溜息をする。おとよ振返つて〕

おとよ　なんだよ、子供の癖に溜息なんぞして‥‥

龜太郎　だつてつまらないや。

おとよ　何かつまらないんだよ。

龜太郎　〔飛行器を抛棄し母の側へ駆けより〕母さん、お錢おくれよ。

おとよ　お前、もう今日の朝の分は使つちやつたぢやないか。

龜太郎　でもつまらないもの、飛行器が破れちやつて飛ばないんだもの……

おとよ　おや表へいつて皆と遊んでおいでな。お前はこの頃何したんだか、ちつとも外へ出ないで獨りでばかり遊んでゐるから不味なくつて御錢ばかり使ひたくなるんだよ。さ、少と外へいつて遊んでおいで。みんなで毎日戰ごつこをして面白そうぢやあないか。

龜太郎　だつてえ……

おとよ　なにがだつてだよ。さ早く行つて遊んでおいで。今日は日曜でお父さんが家においでぢやあないか。叱れるよ。

龜太郎　だつても忌だあ。

おとよ　お前、では表の子達と喧嘩でもしたのかい。

龜太郎　うゝん……〔と頸を振り急に思出したように〕母さん空氣銃を買つておくれよ。

おとよ　何だい、またそんなことをいつて。空氣銃だなんて、三圓も五圓もするものを、云付ますよ、お父さんに。

龜太郎　いやだあ、云付けちやあ。……母さん、何しても空氣銃買つてくれないの。

おとよ　飛んでもない。五圓も三圓もするもの。買へやしないよ。

龜太郎　〔鼻をならして〕だつて欲いなあ。欲しなあ。

おとよ　〔漸く洗濯の手をとめて〕お前ほんとに此頃どうかしたねえ。大概今まではいけませんよといふと一度でよす子だのに。此間から空氣銃を買つてくれ〳〵つてお父さんの眼のない所だと私にせがみ立てゝ……

……何うしてあんな物が欲しくなつたんだらう。え、

お前何うしてそう欲しいんだい。

龜太郎 〔默って瓜を噛んでゐる〕

おみち そりあ小母さま、みんなが戰爭ごつこで空氣銃を持つてゐるからそれで龜ちやんも欲しいのよ。ね龜ちやんそうでせよ。

龜太郎 うん〔とうなづく〕

おとよ あゝそうかい。道子さん、そんな高いものをみんな持つてゐるんですか。

おみち えゝ、表の子はみんな持つてますわ。だから小母様も買つておやんなさいよ。

おとよ まあそんな高いものをみんな持つてるんですか。へえ今の小供はほんとに贅澤になりましたねえ。

おみち おほゝ、小母さま、仰山ね。時勢が變つてゆくのよ。世間がそうなるんですもの、仕方がありませんわ。

おとよ 〔龜太郎に〕あ、それでお前はこの頃學校から歸つてきても外へゆかないで家にゐるんだね。何も怪しいとおもつてゐたよ。… だけど先にはお前も學校から歸るとすぐ戰ごつこだつて復習もしないで驅け出そうとしたぢやあないか。

龜太郎 だつて先は飛行機隊だつたの。だけれど〔損れた飛行器を不味なそ に見て〕 損れちやつたから……

おとよ まあ、もう損れたね、なんだつてまだ破れそうにもしないものを破しちやつたんだい。

龜太郎 だつて僕が破したんぢやあない。向ふ横町の子が破したんだよ。

おとよ なんだつて人に貸したりなんかするんだよ。

龜太郎 うゝん、貸しはしないよ。敵なんだよ。

おとよ まあ呆れたね。ぢやああとでお父さんに直してもらひな。

龜太郎 うゝん、直したつて駄目だ。もつと好い飛行機でなけりあ戰闘力がないつていふんだもの、飛行機ならもつと好いのを買はなくつちやあ。

おとよ まあ仕様がないね。ぢやあ空氣銃がなけりあ

みんなが遊ばないといふのかい。

鑑太郎　あゝ戰鬪力のない奴が戰線にゐては邪魔だつて突き飛ばすんだもの。

おとよ　まあ非道い子達だね。そんな子と遊んでもらはなくつてもいゝよ。家で遊んでおいで。

鑑太郎　つまらないなあ。不味ないなあ……

おとよ　何だよ。そんな我儘をいふとお父さんに叱れるよ。

鑑太郎　〔泣顔になつて〕でもつまらないや。

おとよ　まだそんなことをいふ〔と帶の間の巾着から小錢を出して〕さ、ぢや今日はお晝からの分の御小使をあげるから、もうそんな事をいふんぢやないよ。お父さんに叱れます。

鑑太郎　ぢやあどうしてもいけないの。

〔と悄然と表の方へ出てゆく。おとよ可愛想だといふような顔をして見送る。おみち親子の話の間手持ないのでまた不精無精片手でなまけたような洗ひ方をしてゐたがこの時また立上つて〕

おみち　小母さま、みんな持つてるのに鑑ちやん一人持たなくつては片身が狹くつて可愛想よ。買つておやんなさいよ。

おとよ　だつてそんな高いものを勿體ない。小供なんかに。

おみち　あゝ小母さんも内の母さまの様ね。使ふ爲の御金ぢやあないの。片身せまく暮す位ならいつそ死んでしほう方がいゝ。

おとよ　〔少し悄れたように〕そりあ私も買つて遣りたいのは山々ですが、夫のがそういふ事は八釜しいものですから……

おみち　あら小母さま内所だつて買へるぢやありませんか。

おとよ　いゝえ家ではちつとも内所といふことが出來ませんの。

おみち　あら何故?

〔こゝへ前の往來からおとよの姪のおやま來懸りおとよを見てはしや

いかだ聲を出して。

おやま　おや、叔母さん。しばらく。

〔と蝙蝠傘を窄めて垣根の破れた間から入つて來て傍へよる〕

おとよ　あらやまちやん、今日はどうしたの。

おやま　暫く御無沙汰をしたから其處まで買物に出た序に一寸よつたの。

おとよ　この頃吉山さんは何うなの。

おやま　だめよ、この頃は戰爭で場の方がちつとも動ないから‥それに此二三日出たつきり歸らないの。わたし行つてる所もしつてゐるの。だが嫉いたつて嫉き切れないし、馬鹿々々しいから打棄つておくの。‥‥あら道ちやん、しばらく。

おみち　やま子さん。いゝパラソルね。レースね。それ新流行？　奥の吉山さんの妙子さんのと同なじね。

おやま　なに安物よ。一昨日三越へ一寸いつたので買つてきたの。あ、さういへば叔母さん、三越へ行つて？　素晴しく普請が出來てよくなつたの。

おとよ　おほゝ、わたしは先の三越だつて電車の硝子越しにみたばかりだよ。‥‥

おみち　やま子さん、三越大層立派ですつてね。

おやま　えゝ、だが全くあすこへ行くのは眼の毒ね。欲しいものだらけで動けなくなるわ。そりやいゝ柄の夏帶があつてよ。

おとよ　おまへは相變らずそんなことばかり云つてるね。

おみち　あら小母さま。だつて衣服は女の生命よ。

おやま　全くだわ。良くみえるのも惡くみえるのもみんな衣物にあるわ。今そこであつた女、慄いつきたい様な明石を着てゐたの。女はそんなによかあなかつたけれど明石てものは全く立つものね。私もあの柄が欲しくなつた。何所にあるのだらう。

おとよ　お前の様に欲しがりやもないね。そんなに何枚も着物があつて何うするの。着切れないぢやないか。

おやま　あら着るから欲しいつてもんぢやあないわ。毎日簞笥の引出しを明けてみてゐるだけでも氣持がいゝわ、ほんとに欲しいとなると寐られないことがあつてよ。

おみち　全くよ。奥の吉井さんの妙子さんなんか一枚着物をこしらへる度にその姿で寫眞を取つてよ。その寫眞が〔と手で仕方をみせて〕こんなにあるの。全くあんなに着物が出來たら何なにいゝでせう。……わたし考へると不味ない。

おとよ　〔態と話を外らして〕それはそうとお前また吉山さんが始めたのかい。困つたね。

おやま　いえ、始めたのぢやあないの、先からなのよ。あたしもうつく〳〵此頃堅氣もいやになつたからまた商賣に出ようとおもうの。

おとよ　まあなんだよ。折角こゝが辛抱どころぢやあないか。

おやま　でもねえ。わたし不味ないもの。あの人ばかり外で勝手な眞似をして……私だつて生身を持つてゐるんですもの。すこしは邪も起るわ。この間もあんまり腹が立つたから留守だつたけれども明つ放しにして寄席へ行つてやつたの。そうしたら福助が出て槍さびがよかつたわ。丁度私吉山の金を少し預つてゐたから呼んで遊んでやらうと思つたけれど何うしていゝか分らないから止したの。……あゝ不味ない。あんな得手勝手な人はありあしない。商賣してゐた時分には隨分いろ〳〵深切に云つてくれた人もあるんだもの……そういへばあの寶井さんはどうしたらう。ほんとに考へると不味ないわ。

おとよ　だけどお前そんな呑氣なことをいつてゐて先行どうするんだよ。

おやま　どうするつてあんな當にならない人をあてにしてゐたつて何うなるもんですか。わたし仕たいことをして三十位で死んでしまへばいゝわ。先のことなんか考へて暮していけるもんか。

おとよ　ま、お前道子さんと同なじやうなことをいつてるよ。
おみち　だつて小母さま。だれだつて全くそうよ。思ふことが出來なきあ死んだ方がましよ。
おとよ　だつて今日の御飯が樂に戴けたらそれで結構ぢやありませんか。
おやま　あらそれぢやあつまらないわ。
おとよ　その代り安心だよ。家では一錢でもみんな小使帳をつけることになつてゐますの。‥道子さん、それだからわたしの勝手にあれへも空氣銃を買つてやれないのですよ。‥‥そりやあ私だつて願になにか強請られた時にはみすみす可愛想だと知つてゐて叱りつけるのは辛うござんすわ、あゝまで堅くしなくつてもよさそうなものだと少とは腹の中でうらめしいこともありますけれど、夫のは何でも整然とした事が好きですし、あんな商賣はしてゐますが割に學問もあるとかで奥の吉山さんなぞも始終ほめておいでなさるので、私には解りませんがあの人のすることだから間違はないとおもつてその通りにしてゐます。それに記帳面で、わたしが用の合間に新聞の端だの、暦の端へ書付けておくのを自分で日曜日にちやんと小遣ひ帳に清書しますの。ですから私も何うしてもそうするようになりますの。
おみち　まあ大變ね。それぢやあ一錢でも小母さまは勝手に使へないの。
おとよ　えゝ。
おやま　全く究屈ね。わたしなんかぢやあとても辛抱が出來ないわ。あ、そう叔母さん。わたしこの頃自分で御小遣を稼ぐのよ。
おとよ　まあ何うして？
おやま　あたし毎日氣配をみて場を買うのよ。吉山に内所で‥‥
おとよ　まあ、お前相場をやるの。
おやま　えゝ、少し、でもうまいわ。この間も一日で

二十圓儲かつたわ。それで隠しといたら吉山に目付けられて持つて行かれてしまつて口惜しかつたわ。

おとよ　まあ呆れたねえ。

おやま　あら叔母さん。此頃はいゝとこの奥さんはみんなやつてるわ。それで御小遣ひ取りをしてゐるの。學校の先生にだつてやつてるのがあるわ。吉山が注文を取りにゆく家にもいくらもあつてよ。あの山内裁縫女學校の校長さんも吉山の御得意よ。わたしなんか遣るのは當り前だわ。

おみち　まあおぢやあ家の學校の校長さんもやるの、まあ先生だつてそうなんですものねえ。

おとよ　まあやまちやん、お前そんなことを道子さんに聴かしちやあいけないぢやあないか。

おやま　だつてねえ、道つちやん。本統のことを話すんですもののね。

おみち　えゝそうですとも。

〔この時お道の家より母の聲にて「道や、道や、一寸來ておくれよ」と聲をかける。

おみち　〔また癇を起したように〕あら母さま。私今お洗濯よ。そう一度になにもかも出來ないわ……〔とおやまの方を振り向いて〕私全くやま子さんが羨ましいわ。

おやま　おや、何故？

おみち　何故つてあなたは自由におもつたことが出來るでせよ。……ほんとに私も藝者にならうかしら。

おやま　おほゝ、道つちやんが……

おみち　でもなまじ不味ない所へ御嫁にいつて苦勞するよりその方が増しでせよ。

おやま　まあそりやそうだわ。男なんて何うも當になるもんぢやあなし、當になれば御人好しか生地なしだし……

おみち　そうでせよ。いつそ藝者になつて男なんかおもちやにしてやつた方がいゝでせよ。

おやま　ほゝ、だけど道つちやん、女は弱いものでそうも行かないものよ。誰れも始めはそういつても、

遂、男の甘い口にのると欺されて諦めて知りながら我慢をしてしまうようになるのよ。あら飛んだことで惚けて失禮。

おとよ　やまちやん、お止しよ。今日は叔父さんが家だよ。

おやま　あら、叔父さんが家？、私あの叔父さん全く氣ぶつせいよ。ぢや歸らう。いづれ又。

おとよ　あれお待ちよ。今ねてゐるんだから。昨夜急な夜業があつて今朝夜明けにかへつたもんだから・・・・・・・・・

おやま　そう、そんならいゝけれど・・・・

〔此時またおみちの家より母の聲にて「道や、道や、後生だから來ておくれ、といふに、私はいま手が放せなくつて困るんだからさ。」と聲をかける。〕

おみち　えゝ、うるさい。私もう忌になつてしまうわ

おとよ　まあ道子さん、お母さんがお困りでせうから行つておやんなさいよ。

おみち　〔不精不精に〕えゝ、・・・用は解つてゐるのよ。必然また御使ひに行けといふのよ。私八百屋へ大根やおねぎを買ひに行くのは全く思ひよ、なんだか極が惡くつて。此間なんか漬物屋でお煮豆を買つて出る所を學校の御友達にみられて私顔から火が出て立竦んだわ。

〔此時また母の聲にて「道や、道や、」とやゝじれて呼ぶ〕

おみち　はい、今行きますよ。

〔と皿を持つてぷり〱して家の奥手へまわる〕

おやま　〔見送つて〕中々我儘そな子ね。

おとよ　あゝそうらしいよ。あすこのお母さんが學校の方を下げたがつてゐてそれを口へ出すと最じれて泣いて泣いて仕方がないんだつて。

おやま　まああんな大きな丈をして・・・・

おとよ　あゝ、何うも手がつけられませんて、お母さんはとぼ〱してゐるんだよ。

おやま　まあ親不孝ね・・・・〔と語を變へ〕實は叔母さん、

私今日はちつとお願ひがあつて上つたのよ。……叔父さん今ほんとに寝てゐて？

おとよ　あゝ寝てゐるよ。そして用つて何？

おやま　實はね叔母さん、此頃吉山がちつと曲りなの。それで一つは自棄で遊んでも居るようなの。それは遊んでゐるのは構はないけれど大分家のものを持出してゐるの。

おとよ　まあそれは困つたね。

おやま　何場の方は全く切つちやつた譯ぢやあないからいゝけれど、何しろ此戰爭の爲に場がちつとも引立たないでせよ。尤も最うそれもこゝ一寸で來月になるともう戰爭も講和になるつてえ噂よ。それは世間へは知れなくつてもあすこへは不思議に早く知れますからね。講和風さへ吹きさへすりあ全然景氣がなほるのだけど、こゝの處が一寸苦しいの、それでね叔母さん、こゝの處だけ一寸二十圓程用立てゝくれない？　いけない？　叔母さん。

おとよ　まあお前、私にそんなことが出來るものかね。叔父さんにやあ叱れてしまうよ。

おやま　だから叔父さんに内所で……

おとよ　私は叔父さんに何一つ内所の出來ないのはお前さつき話したぢやあないか。

おやま　そう、ぢやあ何しても出來ない？　困つたわねえ。……だけど叔父さんは大分貯金が出來てゐるつてえ話ぢやあないの。その中を少し位叔母さんの自由にならないの。

おとよ　そんなこと出來るもんかねえ。それに叔父さんは何か考へがあつてこうやつて儉しくして御金を貯めてゐるのだもの。……

おやま　叔父さんはその中で用立てゝくれないかしら。なにも返へさないといふんぢやなし、一時の融通なんだから……

おとよ　何といつてもそれは駄目だよ。叔父さんの方は……それよりお前いゝ石入の指環を二つも嵌めて

ゐるぢやあないか。それを一つ放したつて二十圓位出來そうぢやあないか。

おやま　これつ［と指環を押へて］これを今放しちやあ損よ。引取る時は二東三文だから、……だが困つたわねえ。

［こゝへ下手奥より裏の長屋にゐるおきわ五十五六の痩せぎすのしたゝか者らしい婆あさん、共益貯金株式會社の勸誘員、三十四五の洋服男を連れて出てくる］

おきわ　おや、奥さん。いつも御勢が出ますこと。ほんとに御感心でゐらつしやいますね。いつも奥さんの手をお空けなすつてゐらつしやるのを見たことがない。おや姉ちやん、いらつしやい。いつも御奇麗ですこと、まあ〳〵お髪がよく……あの奥さま、あの此間お願ひしましたこと、如何でございませう。旦那様へ御願ひ下さいましたらうか。

おとよ　此間のつてあの無盡のことですか。あれなら話丈けはいたしましたか御斷り申せといふことでした。何分夫のは堅いものですからそういふ事は……

おきわ　あれ奥様、そんなものぢやあございませんよ。私なんぞはよく分りませんが、大體きくと大相得なことの様ぢやあございませんか。……お、それで今日は會社の人を連れて參りましたからお聽なすつて。……さあお前さん、この方が最上さんの奥さまだよ。

勸誘員　［帽子を取りて］えゝ、始めまして、……えゝ、手前共がお勸めをいたして御加入を願ひますことは最も有利な利殖法で毎月一回宛ございます抽籤に御當りにさへなれば其金を銀行へお預けになつてお置きになつてその利子で殆ど跡の懸金が御拂ひになつていけます。で何年かの後には唯で全部の金が御手に入ります。また幾分の利を御覧になつて他人に賣渡してお仕舞になることも出來ます。……それに此方様なぞでは決して連帯保證を願はんでも始終おきわさんから伺つて居りますし、此方様の御預金のこ

ともお取引銀行の方で伺つて居りますので。‥‥

おきわ　ほんとに奥さま、御入會なさいよ。そして當つて御覧なさい。そのお金はわたしがまた例の方へ廻はして立派に利を上げて見せますよ。そんな風に幾口も預かつておりますので‥‥

おとよ　ですけれども手前共ではそういふことは一切‥‥

おきわ　なんの奥さま、いゝ所の奥様でも皆さん、なさいますよ。此からは地道の御商買では何方樣でも喰べておいでなさるばかりで、召物を造へたり、芝居を御覧なすつたりなさるのは利の薄い御商買の方では出ませんで、みんな此ういふことをなさるので‥‥そりやもう本眞で、私なぞお預りして利を廻してゐる方がいくらもございますよ。ほんとに御入會なさいましよ。而倒なことは少ともないのでござりますから‥‥

勧誘員　〔規則書を折鞄の中から出し〕こゝに規則書が御座いますから御覧下すつて〔と無理におとよに渡す、おとよ余儀なく受取る〕　それにも御座います通り手前共のは創立も古く、取引銀行もみな信用がありますので‥‥現時頻々と出きる富籤類似のものとは違ひますので、決して御損になるといふ樣な結果はございませんので、何うか篤と御勘考を願ひまして‥‥

おきわ　ほんとに奥さま、さうなさいましよ。此方の樣に銀行へばかり御預け入れもようございますが、あの坂上の銀行へ千圓からも御預けいれがあるつていふぢやありませんか。そんな大金を遊ばせてお置きなさつても勿體ないぢやあございませんか。

おやま　叔母さん、そんなにまあ銀行に預け金があるの。そんなら私に‥‥

おとよ　だつてお前それは叔父さんが何か考へがあつて積んでるお金で餘裕のあるお金ぢやあないんだよ。‥‥あのおきわさん、私共は迚も駄目ですが、お隣のお母さんが御話をきいて此間入りたい樣なこ

とをいつておいでなさいましたよ。

おきわ　〔大仰に手を振つて〕だめ、だめ、迚もお隣では毎月の懸金が出せますもんか。あの娘の學校の月謝だつて苦しい位ですもの〔とお道の家の方を見て小聲になり〕あの子のお父さんていふのが年は老つてゐるし、區役所へ出て幾何も取れやあしないのでせよ。その中で學校でもないぢやありませんか。それであの娘が口ばかり厭にあまつ足るく母様、々々つてあんな暮しをしてゐて見られないぢやありませんか。やつぱり學校で教へるんでせうね。あの子は一寸子柄もいゝし、藝者にでも出れば家は樂になるんですが、……私も口をかけられて口を利いてみたこともありますが、あのお母さんが愚痴ばかりいふばかりで娘の云ひなり放題ですから……それに引代へて此方さまなんぞは旦那様はあの通りの稼ぎ人ですし、奥さまは働き手ですし、月に五圓位のことはなんでもないぢやありませんか。

おやま　ほんとに叔母さん、お入んなさいよ。毎月五圓位どんなことをしたつて積めるわ。

おとよ　そんなことをいつたつて叔父さんはそんなこと大嫌ひだよ。

おやま　ぢや私が入らうか。當れば一寸旨いのね。

勸誘員　えゝ、何うぞ願ひます。

おやま　ぢや私入つてよ。

勸誘員　〔折鞄より證書を出し〕えゝ、ではこれが證書でございます。これへ御名前を御記入下さればよろしいので……

おやま　あゝそう。

おとよ　やまちやん。そんな事をしていゝの。吉山さんに。

おやま　吉山に出して貰はなくつたつて毎月五圓位どうにでもなるわ。

勸誘員　〔おとよに〕それでは恐れ入りますが、此方様で御保證をなすつて下さいまし。

おとよ　え、保證ですつて。

勸誘員　いゝえ、その少しもむづかしいことではないのでほんの規則でございますし。それに吉山さんの方もしつかりした方でゐらつしやることは御身裝を拜見した丈で分つて居りますが、ほんの規則で……

おとよ　でも判事は一切うちの留守には扱ひませんから……

おきわ　では奧樣、そんならかうなさいましな、二人で一口お入りになつたら。お一人二圓五十圓位ですもの。手前共などと違つてこちら樣ならそれ位のことは何うともなりますわ。

おとよ　ですけれど……

おやま　叔母さん、それ位のことはしてくれてもいゝわ。餘まりだわ。

おとよ　そりあ私もしてやりたいが何分にも主人が堅いから……勘忍しておくれよ。

おやま　叔父さんだつて餘まり馬鹿々々しいわ。そんなに究屈な思ひをしてお金を溜めてどうするのだらう。そんなにして欲いものも買はず、喰べたいものを喰べずにゐてふいと煩らつて死んでゞもしまつたらどうするのだらう。不味ない。

おきわ　全くですよ。儲けられるものはなんでもお儲けなすつて而うして少しは奧樣の欲しいものもお買ひなすつたつていゝぢやありませんか。

おやま　本眞だわ。叔母さんだつてそんなに何も要らない譯ぢあないんでせよ。

おとよ　〔稍俯目になつて〕そりあ私だつて少しは樂もしてみたいし、……なによりも小供には欲しいといふのは買つてやりたいわ。

おきわ　お、さう、此間表でこちらの坊ちやんが泣いてゐるので何うしたんですと伺ふと空氣銃が買つて貰へないのでみんなが遊んでくれないと仰いましたよ。まあお可愛想に、小供衆ですもの、欲いものに見界はありあしませんわ。こちら樣で少し奧樣がお

小遣をお取りなさらうてえ御心をお出しなさりや空氣銃位ゐ譯はないぢやありませんか。

おやま　そうだわ、叔母さん、あんまり欲しいといふものを買つてもやらないと子供はいぢ〳〵育つわ。

勸誘員　ではせめて保證の方だけ願へますまいか。

おやま　叔母さんの保證であたし入れるのだから是非さうして下さいよ。わたし叔母さんの迷惑になるやうなことは決してしないから、たつた五圓づゝでせよ。何んなことをしたつて拂へますわ。

おとよ　でもねえ……

おやま　［昂然として］そう、そんなに私信用がないの。いゝわ。

おとよ　あれ怒つてはいけないよ。お前はやつぱりお前のお母さんに似て怒つぽいよ。

おやま　どうせ母の子ですもの［と泣聲になり］保證してくれなきあ、無いでいゝわ。お母さんのことまで言はなくつたつていゝわ。お母さんがやくざだから私もこんな身になつたのよ。

おとよ　あれ何だね、お前。

［こゝへ往來の下手より搗米やの米、米を擔いで通りかゝりおとよに「今日は」と挨拶をして行過ぎようとする。おきわ見つけて往來へ追掛けて出る。］

おきわ　おい、米さん、己がこゝにゐるのを知らん顏はひどいよ。

米　なに知らん顏はしねえ。

おきわ　知らん顏をしなきあなほ圖々しいよ。お前この頃己の影をみると逃げてばつかし居るぢやあないか。一體あれはどうしてくれるんだい。

米　どうするも有るもんか。返さないと云やあしまいし。この間己が受けた時返さうといつてもお前取らないと云つたぢやあないか。

おきわ　そりあ期限も來ないで返されちや利子の帳面づらが合はないから受取らないといつたのだ。己も他人の金を冗談に預つて融通してやしないよ。だが

期限が切れて返へさなきあ默つてはゐられないよ。
米　へん返さうといつた時に取つてくれなきあ、此方とらの身にそんな餘分な金が何時まで附いてゐるものかあ。お蔭であの時金があつた計りで馬鹿あして義理の惡い借金まで出來た。これもおめへのお蔭だ。
おきわ　えゝ馬鹿にするな。女だとおもつて。
米　なに、おめへを女だとおもふものか。
おきわ　何んだつて！
米　まあ怒るなよ。あの金だつて唯の貸借とは違ふぢやあねえか。お前の所へ集まつた時の退引ならねえ背負込みぢやねえか。それを知つてゝ餘り業突張り過ぎらあ。
おきわ　なに業突張りだと。此奴！
〔と摑みかゝらうとする。米身を退いて〕
米　よせよ。己は構はねえがお衣服へこの白いものが附着くぜ。
おきわ　えい、ほんとに手の附けられない奴だ。

米　あはゝ全くだ。だから己の借金は何かいゝ玉を世話をして儲けた時に差引いといてくれ。
おきわ　えゝ、此畜生、また馬鹿にするな。
〔と摑みかゝる。米も米袋を脇へ置いて摑み合ひになりかゝる。勸誘員垣の中より出てきて間へ入る。〕
勸誘員　まあ止せ。止せ。
米　なにが止せ〳〵だ。月賦洋服を着やあがつて大風なことをいふな。
勸誘員　なんだつて。
米　なに傍へ寄つて洋服が破けるといけねえと云つたのだ。
勸誘員　なんだ、怪からん。
〔と三人摑み合ひになりかける。おとよ。あやま呆れて後でみてゐる。往來の下手から巡査、山岸準一巡廻してくる〕
準一　おい〳〵なにをするのだ。
〔と引分ける。勸誘員巡査を見ると後へ下つてその眼を避けるようにしてゐる〕

準一　おい、何してこんなことを始めたのだ。

米　へえ、何斗屑ないことなので。

準一　何斗屑ない？　斗屑ない事で喧嘩をする奴があるか。

米　へえ濟みません。

準一　〔おきわに〕おい、何うしたのだ。

おきわ　いえ貸金の催促をしてをりましたので‥‥

準一　貸金の催促に喧嘩が要るのか。

おきわ　いえ返へさないと、申しますものですから遂‥‥

米　いえ、返へさないと申しはしません。

準一　一體何の貸金だ。

おきわ　へ？　いえ、なにいゝんで‥‥

準一　なにいゝ？　いゝ貸金なら催促しなくつてもよからう。〔米に〕おい何の貸金だ。

米　へえ、何よろしいので‥‥

準一　借りた方でよろしいといふ貸金かあるか〔とおきわに〕おい、おまへの家はこの頃大分夜更けてまで騒々しいが氣を付けんといけんぞ。

おきわ　へい。

準一　おいお前は用の途中だらう。早く行かないか。

〔米辭義して米を擔いで上手へ入る〕

準一　〔おとよに〕やあ奥さん、今日はこれで非番ですからあとで最上君の所へお話しに上ります。最上君も家でせう。今日は日曜だから‥‥

おとよ　えゝ家に居ります。

準一　ぢやあとで上りますよ。

〔と行掛けてふと勸誘員を見てじろ／＼見返りながら上手へ入る。勸誘員顔を反けて視線を避ける〕

おやま　〔準一の影を見送つておとよに〕叔母さん。ね、どうか保證して下さいな。

おとよ　まあそれは堪忍しておくれ。

〔この中おきわと勸誘員垣の中へ入つて〕

おきわ　何うもお騒がせ申しまして‥‥あんまり非道

い奴ですから腹が立ちまして……いかゞでございませう。先刻途中で御話しが消へましたが、一口お二人で御入りになつて二圓五十錢といふのは…

おとよ　そりや一口二人で二圓五十錢位といふのなら成程出せないこともないですけれど……

おきわ　それにこれが外の御無駄費ひといふのではなし。いかゞでせう？

おとよ　さあ、まあ考へさして下さい。直ぐ御返事も出來ないから……

おきわ　あ、成程、あんまり御强ひ申すもいかゞで、ではまた後に上りますから、何卒よろしく願ひます。では姉ちやん、失禮を。さ、おいでよ。

〔とおきわ、勸誘員挨拶して下手奥へ入る〕

おやま　では叔母さん。二圓五十錢宛なら出して……

おとよ　さあ、それ位ならどうにか出せないこともないね。一日一錢づゝだもの。一寸々々小遣ひに氣を付ければねえ。……

〔こゝへ上手奥の折枝を開けて吉井勘藏出てくる。この二軒長屋の持主、五十四五。〕

吉井　やあ御家内。最上さんはゐるかい。

おとよ　おや吉井さんでいらつしいましたか。夫のは昨晩夜業でまだ臥つてをりまするが一寸起してまゐりませう。

吉井　いやいや起さなくつてもいゝよ。別に大した用でもない。

おとよ　はあそうですか。……おや起きた樣ですよ。

吉井　おつ、顏を洗つてゐなさる樣だねえ。

〔右の家の格子戸を開けて最上重治タオルで顏を拭きながら出てくる〕

吉井　やあ最上さん、御眼覺めかね。昨夜は夜業で晩かつたそうだね。

最上　えゝ。何も時間の定まらない職業で……

おやま　〔急にそはそはして〕叔父さん。今日は。……叔母さん。私家を明放しにしてきたからこれで失禮して

よ。

おとよ　あらもうお歸りかへ。

おやま　えゝ、また直ぐ上りますわ。ぢや左様なら。叔父さん左様なら。

〔と挨拶して吉井に目禮し、急いでかへつてゆく。〕

おとよ　〔吉井に〕さあ取散らしてございますけれど御入り下すつて……

吉井　いやこゝの方が晴々として結構……憚りですがおかみさん。あの椽臺をこゝへ運んで下さい。

おとよ　はあ、さようでございますか。

〔と二つの入口の間の羽目に立てかけてある椽臺を下して直す。吉井と最上掛ける。おとよ煙草盆なぞ運ぶこと。〕

おとよ　では甚だ失禮ですが私は勝手に用事がございますから御免を蒙ります。

吉井　さあ〳〵どうぞお構ひなく。

最上　おい。もう晝飯の仕度か。そんなに痕たか。

おとよ　えゝもう彼是十一時ですよ。

〔といひながら盥の中の洗つたものを手早く絞りバケツへ移し、盥の水を明けて盥を井戸側によせかけバケツを持つて格子戸へ入る〕

吉井　〔見送つて〕實に御家内は感心だねえ。温順しくつて口數は利かず。それで働きもので全く最上さんはいゝおかみさんを持つて仕合せだよ。

最上　なにあれは馬鹿です。

吉井　え？　〔と笑つて〕いくら自分の家内でもあの御家内を馬鹿とはひどい。

最上　いえ、ほんとです。私が附いてゐる中はいゝが私の手をはなれたら困りませう。

吉井　なぜ。

最上　たゞ温順しいばかりで考へといふものが少とも ありません。ですから私もまあ何うか私が無い後も何うにか樂にしてやつて行けるだけの事はしておいてやりたいとあがいてゐるのです。

吉井　うむ、有繋だね。ぢやあ御家内の方がいゝ御亭主をもつて仕合といふべきだね。こりやあ先刻のは

君の御商賣の方でいふ訂正だ。あはゝ。……さうだ、そこでこの間君に話した今度の新築の方の家作ね、愈その一戸へ君が入つてくれるかね。無論君の樣な人が入つてくれりあ私の方ぢや大歡迎さ。ありあ君も知つての通り私の理想的家作さ。で成るたけ借り手の人選をしたいのさ。

最上　無論私が拜借が出來ればいたしたいので……

吉井　では愈なにか商賣を始めるのですかい。

最上　えゝ。貯金が千圓に達したらあれになにか商賣をと心掛けて居りましたので。……勿論あれの事ですから氣働の要る商賣は出來ませんが……何かこう小間物やでもとおもつて居りますので……

吉井　うむ、えらいね。私はあなたのもとを知つてる丈けに餘計感心するよ。小舟町で近江屋といへば聞こえた荒物問屋さんの一人息子さんだつたが、叔父さんが惡い爲にねえ。

最上　なあに矢つぱり私が馬鹿だつたので。何うせ叔父に取られる財産なら遣ひ無くしてみせてやるつて勢で無茶苦茶にしてしまつて……

吉井　そりあ全く若い氣で無理はない事さ。だがその後あの叔父さんは何うしました。

最上　えゝ、叔父もその後好い事もなく貧乏して此間手紙をよこして免してくれといつて死にました。兩方こうなる位ならあの時お互ひに意地を張つて力まなくつてもよかつたでせうに、あはゝ。……併しまあ私は派手な暮しもしてきて面白い目も可笑しい目もみてもう世の中にこれといふ願もありませんがこ今の妻は身を落してから縁あつて貰つた女で、年中働きづめで何一つ嬉しい目もみた事もないとおもふと可愛想で、まあ一刻も早く少しは樂をさせて遣りたいとおもつてゐます。で時には可愛そうだとおもつても無理な小言もいふのです。

吉井　なるほどね。承はると益々感服だがお家内も中々えらい。よく君のいふ事をきいてさうして遣つて

ゐる所が感心だ家の家内なんぞはもういゝ婆あさん
の癖に娘と一緒になつて何かと私にせびり立てる。
また娘ときちあ私に内所でお袋と相談しちやあ買物
だ。此間も外で御辭儀をされて何所の華族の御孃さ
んかと思つて叮嚀に挨拶しようと思ふと自分の娘
さ。馬鹿々々しい。何時の間にか親父の知らない間
に素晴らしいものばかり持つてゐる。

最上　いや世間の風潮がそうなつてきたので‥‥

吉井　いや全くそうだ。近頃は女ばかりぢやない。男
までゝ贅澤になつて‥‥昔は夏冬仙臺平が一着あり
あ儀式用に間に合つたものだが當節は縞絽、極暑に
なると紗だなぞと、無いと極りが惡い樣な世の中に
なつて仕舞つた。尤も昔だつてあの傀儡師の淨るり
に「紗の紗の袴、紗の袴」てえのがある所をみると紗
の袴はあつたに違ひないが貴人の穿き料だつたとみ
える。

最上　あはゝ、吉井さん今日は滿元ですな。

吉井　あはゝ。私だつて年中一中の講釋ばかりはしな
い。

最上　ですが矢つぱり近頃も一中ですか。

吉井　いやあれは止めた。此頃は植木ですよ。いやそ
れでまた講釋がある‥‥

〔こゝへ上手より先刻の巡査山岸準一、非番になつて湯に行つた歸り
がけにてかすりの單衣、濡れ手拭と生卵を三つばかりいれた紙袋を
持ち出てくる。〕

山岸　やあ今日は。‥‥おつ吉井さんもおゐでゞすね。

吉井　やあ山岸さん、今日は非番ですか。さあ、こゝ
へおいでなさい。

山岸　はあ、有難う。〔と椽臺の端へ卵をおき〕おつと吉井
さん、手を附かずに下さい。僕の生活の糧が滅茶滅
茶になる。

吉井　何ですつて〔と吃驚して〕あはゝ、生卵か。山岸さ
ん、これを飮むのですか。

山岸　そうです。非番になつて湯へ入つて歸つて茶碗

へこいつを破つて三つ一時にのむ。するとすつかり元氣が恢復する。今の私の最大快樂です。

吉井　あはゝ。單純な快樂ですな。併し全く山岸さんもえらいな。

山岸　え、何故です。

吉井　いや、今、世の中が段々贅澤になつてゆくといふ話をしてゐたので、君なぞもまだお若いが中々感心だ。

山岸　いや、えらいといふのは最上さんの奥さんだ。女で見得もなく絶えず手を働かしてゐられる。そりやどうも近來の女ときてはかなはんな。僕なぞはこういふ風な職にゐる丈け社會の裏面が分るので厭になる。此間なぞも僕が立合つた萬引なぞは全く立派な資産家の孃さんでその遣口は全く黑人跣先だ。白絹なんぞ眞中の心をぽんと拔いて二つに折つて懷ろへ入れてた。それで曝れたとなると頭の毛を目茶々々にして泣いて殺してくれつて傍にある硝子拭きの揮發の瓶へ手をかける。何うも恐ろしい位だ。それでみると容貌もいゝし、淑かで、何うみても立派な娘さんだ。あゝいふのを見ると實際女は恐ろしいものだとおもつてどんないゝ女をみても厭になる。あはゝ。

吉井　ふうん。驚いたね。全く。いくら着物が欲しいつたつて。

山岸　いや尤もあの女も始めつからあゝでも無かつたのでせう。一つは近來呉服屋が競爭の結果、どんどん新奇を競つたものを造へて益々女の虛榮を募らせる。それもいゝが得意を繼ぐ爲に半襟の一掛や二掛默つて持つてゆくのを大目にみておく風がある。それで一種の僥倖心を募らせてとう／＼あんな女を造らへてしまう。いはゞ賣る方にも罪がある。

最上　全くそれはさうだ。近頃の商賣の遣り口はたゞ儲けさへすればいゝと云ふ風であらゆる手段で買手を煽る。月賦なぞといふことも存外好い物が安くか

へるといふので遂みんな引つ掛り、その實高い金を出すようになつて飛んだ目に逢ふ。

山岸　いや其通り。その中でもひどいのは近來流行の無盡會社だ。始めは巧みにいろ〳〵な利益を說き込んで無知な連中を捲きこんで後難のないよう譯もなくいつて連帶保證をさせ掛金を怠たつたりといふとすぐ保證人ぐるめ財產差押へを執行する。中には充分懸金の集つた所で會社を潰して儲ける奴がある。警察の方でも充分取締りたいのだが何分法網を潜つてゐるので一寸手がつけ兼ねる。そういへば先刻もその勸誘員らしい奴が此邊を徘徊してゐたようですが近所へも充分注意させたいものです。

吉井　へえ。そうですかい。

山岸　それに矢つぱり吉井さんあなたの家作だが裏におきわといふ女がゐるでせよ。何うも彼奴好くない奴で勸誘員の手先をしてゐるらしいです。それに彼・奴少し好い標致の女でもゐると旨いことをいつて藝者なんぞに周旋したりなぞする樣です。

吉井　へえ。そうですか。あの婆あお世辭者で喰へない樣な奴ですが、そんなことをするのですか。早速何うかしませう。

最上　だがあゝいふ婆あさんは何所の長屋にもきつと一人はゐるものですよ。

山岸　いやそうです。それで少し目に立つ娘は十一二になりあ必然抜け目なく連れ出される。長屋に美人がゐない譯ですな。

吉井　そうだ。家の子守なぞもちよいと目鼻立ちがばらりとしてゐるものだからいろんな事をいひに來たらしく到頭連れ出されてしまつた。

山岸　そこの（と顋で左の家を示し）娘なぞは中々氣位がある樣だから連れ出されもしないが色々手を換へてこられると危險いものだ。

吉井　いや何うも忌な世の中になつたものだ。併してんな事がいろ〳〵流行るのも一つは人情が變つて來

たのだ。みんな人間が贅澤になつて分相應といふことを忘れてくるからだ。下女なぞは十年前には縮緬・なぞといふものは決して着なかつたものだが此頃はざらだ。それにひどいのは前には小供に好い裝をさしてゐたら親は何を着てゐても良かつたものだが此頃は反對だ。女の子なぞに安人形のやうな出來の洋服を着せて自分はぞつきに着飾つた女親なぞをよく見懸ける。

最上　いやそりや種々譯もあるでせうが一つは平等主義の影響です。文明が開けて誰れも彼れも平等だといふ考へが誰の頭にもあるのです。で金持は誰れに遠慮もなく自分の金力でやることだと擅な贅澤をする。それを見て眞似をするものは己だつて金がありあ出來ることだと無理をしても見得を張る。で互ひに競ひ合ふから底止する所がない。それに乘じて色色な手段を講じてその需要に應じようといふ奴がある。つまり秩序がなくなつて我勝といふ有樣です。

この末は何うなるのか心ある人がみたら恐ろしいことでせう。

吉井　うん、さすがは學者だ。最上さんのいふ通りだ。それでみんな狡つ辛くなつて金にさへなりあ義理も人情もいらないといふ譯だ。忌な世の中になつたものだ。子供でも昔の樣には親父の云ふこともきかない。家の兄貴の方なんぞは朝寐をしてゐて屁理窟ばつかり並べをつて偶に朝起きをするとおもふと相撲が始まつたので朝つぱらから國技館へ日參だ。手も附けられない。最も朝起きをしてくれない方が小遣ひを使はなくつていゝのかも知れぬ。これを思ふと植木の方がよつぽど可愛いゝ。あゝそうだ。最上さんさつき、植木の講釋をしかけたのはこうだよ。あいつ可愛がつて水をやつたり肥料をやつたりしてゐればちやんと日數通りに十日なら十日目には可愛い芽を出す。その可愛いたらないよ。

山岸　あはゝ。ぢやあ、吉井さんは植木で諦めてゐる

のですね。
吉井　全くさ。人はなんでも諦らめが出來なくつちやいけないね。君もまだ若いのだから細君に美人を持ちたいなぞとおもひたもふな。今のような世の中になると飛んだ目にあふよ。
山岸　あはゝ、だから僕も諦らめて無妻主義ですよ。
吉井　いやそれは感心。いやいかん〳〵今の若さからそれは諦めようが早過ぎる。一つこの最上さんの家内のようなのを捜したまへ。あはゝ。
山岸　全くですな、あはゝ。
吉井　いや、一寸用事で上つて飛んだ長話をした。ではもう失禮しよう。
山岸　やあ僕は湯かへりでつい長居をしてしまつた。
最上　やあもうお歸りですか。
吉井　いやどうも飛んだ御邪魔をした。
山岸　僕も御邪魔でした。
〔と二人挨拶して吉井は枝折戸へ山岸は下手奥へ入る。最上格子戸へゆき〕
最上　おい、おとよ。おとよ。ちよいと帽子を持つてきてくれ。
おとよ　〔臺所にて〕はい。
〔と返事して帽子を持つて格子戸より出てくる〕
おとよ　おや、もう皆さん、お歸りになつたんですか。臺所で用をしてゐたので少とも知りませんでした。
最上　あゝ今歸つた。おれは一寸昨日の仕事の刷り上りを見に印刷所の方へいつてくるから‥‥
〔と行きかける〕
おとよ　あ、もし、あなた。
最上　なんだ。
おとよ　〔云ひ惜くそうに〕あの龜が空氣銃を大變欲しがつてゐるんですが‥‥
最上　何んだな。またそんなことをいふ。買へる様になつたら何時でも買つてやる。
〔と云ひ捨てゝつか〳〵と垣より往來へ出て下手へ入る、おとよあと

ぼんやりと考へてゐる。往來の上手よりおやま、空氣銃と菓子の袋を兩手に持つた龜太郎の手をひきパラソルを翳して出る〕

龜太郎　〔母をみて驅けよる〕母さん、おやま姉さんに空氣銃を買つて貰つたよ。

おとよ　〔吃驚して〕あらおまへ。やまちやん、こんな高いものを…。

おやま　なあに叔母さん。いゝのよ。だつて今歸りかけるとこの子が往來でないてゐて何したのだといふと空氣銃が買つて貰へないつていふので、家へ歸つて云へば母さんに叱れるつていつてゐるのだもの、余まり可愛想で一緒に行て買つてやつたの。〔龜太郎に〕さあ今度は大丈夫だから行つてみんなと遊んでおいでよ。

〔龜太郎喜んで空氣銃と菓子と兩手に持つたまゝ驅け出す〕

おやま　あれ御菓子をみんな持つてゆくと又みんなに取られるといけないから少し持つて母さんに預けてゆきよ。

〔龜太郎引きかへる。おやま菓子袋を受取り二つばかり出してやる。龜太郎また元氣よく驅け出して入る〕

おやま　あれまあ、あの喜こんでゆくこと。

おとよ　ほんとにねえ。〔おやまに〕どうも有難う。定めし高いものだらうね。

おやま　なあに二圓ばかりよ。

おとよ　まあほんとに濟まないねえ。どうも有難うよ。ほんとに。

おやま　ね、叔母さん。さつきの事ね。二圓五十錢づつ出して二人で一口入らうぢやありませんか。

おとよ　あゝ〔と困つて〕だけど夫のがね。

おやま　ぢやあ叔母さん判だけ突いて下さいな。叔父さんに内所で、わたしきつと迷惑なんか掛けるようなことはしないわ。

おとよ　〔愈困つて〕そりあお前があの子に空氣銃も買つてくれたことだし出來るなら押してあげたいが…

〔こゝへ先刻のおきわと勸誘員下手奧より出る〕

おきわ　奥様いかゞでございます。さつき御考へ置きを願つておきましたことは・・・・

勸誘員　實はあれから彼方の方でまた二口ほど御入會を願つたのでもう直き滿員になりますので、そういたしますと折角思し召がありましても已むを得ずお斷はりをいたさなければなりませんような譯で、いかゞでせう。

おとよ　え、ぢやあもう直滿員になりますの。

勸誘員　へえ。もう直滿員になります。それに今度のは廣告がはりでございますからこんな有利な御提供はもう此限り出來ますまいと存じます。

おきわ　ですから奥さん。御思案は入りませんよ。お入りなさいましよ。

おとよ　では全く二圓五十錢づゝ月々いれゝばいゝのですか。

勸誘員　へえ左樣で。〔と折鞄より證書を出す〕

おやま　ぢや叔母さん入つて？

おとよ　そうね。

おやま　まだそんなことといつてるの。ぢや辻占取つて御覧なさい。いや？　ぢや私代りに取つて見るわ。〔と菓子袋の中から辻占をとり、明けてみて喜びの聲をたてる〕あら、「旨くいくよ」とあつてよ。幸先がいゝわ。大丈夫よ。叔母さん。

おとよ　〔辻占をみて〕ほんとだねえ。

おきわ　成程奥樣こりやあ幸先がいゝ。さお入りなさいましよ。

勸誘員　〔往來の上手の廣告柱をみて〕もし奥さま。あれを御覧なさい。御宅の前の神丹の廣告柱に「幸運は勇氣を要す」と書いてあります。あゝいふ廣告が御宅の前　あるのも偶然で、御奮發さへなさりあ御運は大丈夫です。

おきわ　ほんとにこれは入れといはないばかりですね。

おやま　ぢや叔母さん。判を出して下さいな。

おとよ　判はこゝに持つてるよ。叔父さんは出が多いから私が始終預かつて……

おやま　ではその帶の間の紙入に……〔と手をかけて紙入を取り判を出し〕ぢやあ押してよ。〔と勸誘員の差出す證書へ押しておとよに返す〕

おとよ〔みて〕あれいけないよ。

勸誘員　では此れで。いやどうも有難う存じます。〔と證書を折鞄へ入れる〕

おとよ〔咎めたように〕あれいけませんよ。まだほんとに……

おやま　だつていゝぢやありませんか。

おとよ　では全く大丈夫かえ。

勸誘員〔折鞄より通ひ帳を取出し〕ではこれはそちらへ。

おとよ〔受取つて〕ですが懸金は今日はありませんが二三日中に。

勸誘員　いえもう何時でもよろしうございます。では失禮いたします。どうも有難う存じます。ではおきわさん。

おきわ　あゝ行こうよ。奥様どうも有難う存じました。何れまた。

〔と二人連立つて下手奥へ入る〕

おやま　では叔母さん。わたし今空氣銃を買つてしまつてもうお金がないから明日持つてきますよ。

おとよ　あ、おまへ、吉山さんがゐなくつて困りあしないかへ。

おやま　なに一寸したものを遣りさへすりやあ懸金位すぐ出ますよ。ぢや左樣なら〔と垣の外へ出て往來の上手へはいる。〕

おとよ〔なにか考へてゐて〕なあに當りさへすりあ……

〔こゝへ往來の下手より最上かへつてきておとよをみつけ〕

最上　おい、おとよ、もう晝飯の支度は出來たか。

おとよ　あッ〔と氣が附いて〕あのつい用があつたものですから……

最上　そうか、ぢやあ早くしてくれ。

〔と家へ入る。こゝへ龜太郎空氣銃を持つてかへつてきたり〕

龜太郎　父さん、空氣銃を……

〔おとよ、驚いて無言に引手繰り後へ匿す〕

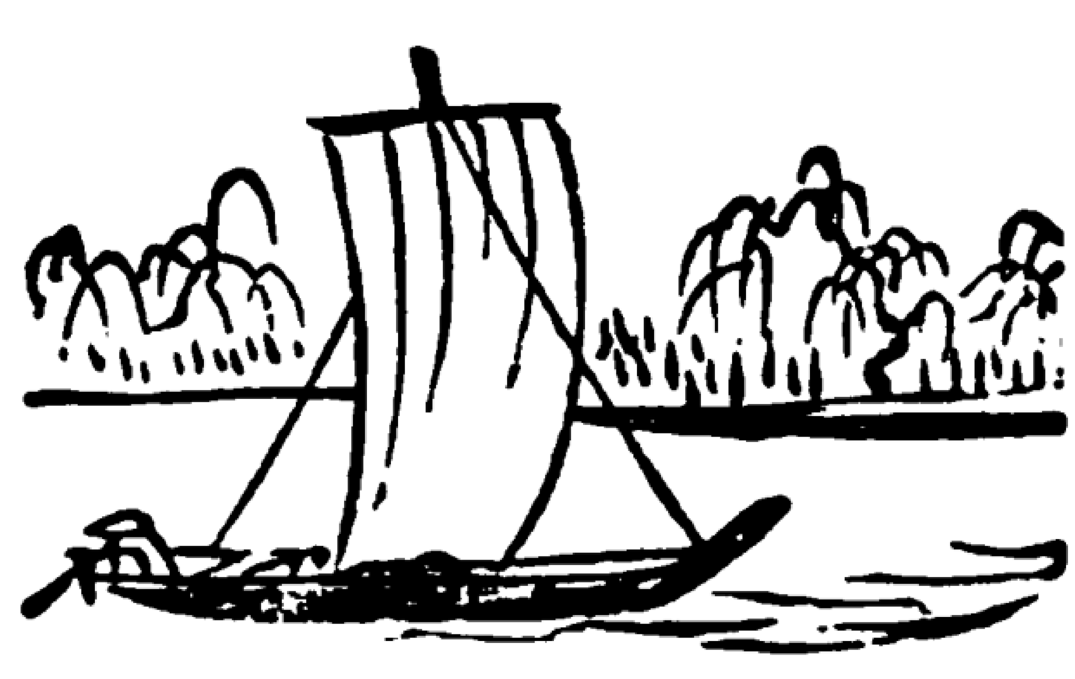
最上　〔振返つて〕なに空氣銃？　な、今に買へるようになつたら買つてやるぞ。

〔と家へ入る。途端に午砲の音。續いて方々の會社の汽笛。おとよびつくりして龜太郎を抱きふと上手の廣告柱をみて〕

おとよ　運は全く勇氣がなきあ掴まらないわ。

〔と口でいつても不安な面持〕

幕。



戯曲

緑の野（三幕）

秋田雨雀

人物

海野常吉　青年
平塚八十　教授、理學博士
廣田讓　警察署長
梁川仁　支廳吏員
山崎・光三　教授
海野ひさ子　常吉の妻
平塚淳子　博士の娘
あさ子　子守
其他男女數名

場所

北海道の一部落

時

一九〇二――一九〇三（戰爭當時）

第一幕

舞臺は常吉の書齋。方四角形な、あつい板を以つて圍まれた、冬のためにばかり要意されたやうな室。然し木口は新しくて、心地がいゝ。明治初年にアメリカ人に數へられたといはれてゐる建物の形を保存してゐるところに、內地の家屋とは全くちがつた樣式を見ることが出來る。

舞臺正面奥には二つの框の厚い窓が開いて、綠色のポプラの枝が始終風に搖れて時々その白い葉裏を表はしてゐる。その右手の窓の下にテイブル、その周圍に粗末な椅子二脚に、長いベンチが一脚ある。ベンチの上に鐵罐と茶器が置いてある。室の左右に古風な書棚があつて、その上に古びた額が二三枚かゝつてゐる。

廣い綠の野原から働いてゐる人々の歌が、時々子守歌に和して聞へる夏の晝時。

主人の常吉は、窓の方にテイブルに對つて熱心に讀書してゐる。

ひさ子。（右手の戸から入る。）お邪魔ぢやありませんか？

常吉。（讀書をやめずに。）いや、何か用？

ひさ子。（主人より丈夫さうな顏をしてゐる。）今南部から來た百姓が子守を置いて呉れつて來ましたけれども何うしたらいゝでせうね？

常吉。南部の百姓なら去年の子守ぢやないかね？

ひさ子。え。やはり、あのあさといふ子供ですの。何うしたらいゝでせうね？

常吉。然うだね。子守なんか置くだけの餘裕はないんだが、僕の學校を廢めたといふことを話してやつたら？

ひさ子。え。その事もよくいつたのですけれども。

常吉。學校をやめてかうしてやつて行くには五拾錢の金でも餘分には出せないんだからね。然しあの女の子ならば心持のいゝ子だから、置いてやれば僕等も安心して仕事が出來る…然し全く經濟的には困る。子守を一人置けば何うしても壹圓五拾錢は　ゝるだらう？

ひさ子。え、それはかゝりますわ。でも、私の方でも子守がゐると安心して、あなたのおたすけが出來る

…からやつぱり同じことですわ。

常吉。それや然うだけれども、今の場合毎月仕拂はなければならないものが一つ殖えると思へば何んだか責任のやうな氣がするね。

ひさ子。それは然うですね。何うしませう、それぢや？言斷りませうか？

常吉。いや。そして給料は去年通りに貰ひたいといふのか？

ひさ子。いゝえ。給料なんか何うでもいゝといふんですよ。たゞ、御飯だけ此方で食べさせていたゞけばいゝといふんです。

常吉。（少し笑ひながら。）隨分慾のない話ぢやないか。それならば御飯を食べさせて、着物でも着せてやりさへすればいゝだらう。

ひさ子。え、それに少しばかり小使錢でもやつたらいゝだらうと思ひますの…　それぢや置いてやりませうか？

常吉。そしてあれの親父は丈夫なんだらうね？

ひさ子。あゝ、私すつかり忘れてゐましたわ。あの人の御亭主も出征したんですつて。

常吉。（少し驚いて。）出征？

ひさ子。え、この春滿洲へ行つたんですつて。

常吉。然うか。然し、南部はいゝお爺さんぢやないか？

ひさ子。可憐さうに。でも四十五六でせうか？

常吉。あれなら後備位ゐぢやないかね。あんな人間まで連れて行かなくつたつてよささうなものぢやないか！

ひさ子。（室を出やうとしながら。）それぢや、あの子を置いてやりませうね。

常吉。あ、然し今日からすぐ置いて呉れといふんぢやないだらう？

ひさ子。いゝえ。旦那さへよろしければ、すぐ置いていたゞくといふんですよ。それに、あの子は子供が大

樂好きで、去年內地へ歸つてからも、始終家の子のことをいひくらしてばかりゐたさうですよ。

常吉。然うか、そんな子供だとほんとうに安心して置けるからいゝ。世間には子供を全く可愛いがらない子を子守にしてゐる家があるが、そんなのは見ると憎らしくもあるし、氣毒なやうな氣持もする。人間は自分の仕事を義務としてばかり働けるもんぢやないからね。何んな勞働をしてゐても、その勞働に多少の愛がなければ一日だつて働いてゐられるもんぢやない。子供の嫌ひな人間に安い給料をかけて子供を好きにさせやうと思ふのは實際殘酷な話だと思ふね。戰爭だつてやづぱり然うだ。だれもほんとうに戰爭を好きでしてゐる人間はない。過つた時代に對する一つの義務として努めて働いてゐるに過ぎないのだ。然し人間はただ義務ばかりで働くことの出來るものぢやないから無理にでもそこに愛のやうなものを拵へて來なくちやならない。敵慨心といふものも過つた意味の愛の變形だ。國民のため。國家のために。正義のために。君主のために。（無意識的に昂奮して、）然しその實は戰爭位ゐ國家のためにならないものはない。國民のためにならないものはない。正義のためにならないものはない。君主のためにならないものはない！

ひさ子。（心配さうに常吉の方へ近寄つて、）戰爭のことだけはほんとうによしてくださいよ。それでなくとも、やかましい時なんですから。

常吉。（不快さうに、）然し僕は何も間違つたことをいつてやしない。たゞ當前のことをいつてゐるにすぎないんぢやないか。

ひさ子。え、それや然うですけれども、その當前のことがいけないんですよ。學校の方だつて、その當前のことをいつたために廢めさせられたんでせう？この上私達が苦しめられたら何うするつもりです？ほんとうに私達を可愛さうだと思つたら、戰爭のこと

だけはいはないやうにしてくださいよ！

常吉。あゝ、よし。然しお前のやうな氣持でゐたら、何うして生きて行けるだらう？ 世の中といふものはそんな狹いもんぢやないと僕は思ふね。僕等はこの世の中に生きてゐる以上、自由に考へ、自由に話し、自由に行つていける權利を持つてゐるんだ。そんなにびく／＼してゐたら一時間だつて生きて行けるもんぢやない。

ひさ子。それや、あなた一人ならば、何んなことをしてもいゝでせう。然し私達といふものがあるんですからね。世間を狹くして、まるで盜賊か放火者のやうな氣持で世間を渡つて行くのはほんとうに、もう／＼いやです。

常吉。（暫く默つてゐたが、强いて笑ひながら、）よし／＼。やつぱり同じことを繰り返へすばかりだ。南部の妻さんが待つてゐるんだらう？

ひさ子。いゝえ、お妻さんは、あの子を置いて畑へ行きました。もし要らないやうでしたら晩に歸してくださればいゝつて。

常吉。然うか。家の子は寢てゐるのか？

ひさ子。え。よく寢てゐます。

常吉。あの子守を一寸こゝへ呼んで與れないか。

ひさ子。（戶の外へ呼びかける。）あさ！こつちへおいで。かまはないから、あがつておいで。

（十二三歲の瘠せた正直さうな女の子。）

常吉。（女の子を見て、）お前また來たね。いつ此方へ來たの？

子守。一昨日來ました。

常吉。誰と一緒に來た？ お母さんとか？

子守。え、お母さんと、それから伯父さんと。

常吉。伯父さん？ ふむ、伯父さんといふのはお前のお母さんの兄弟か？

子守。いゝえ。お父さんの兄弟です。

ひさ子。お父さんの弟か？

子守。え。

常吉。（子守をベンチに腰かけさす。）あさ、そこへおかけ。お前大變大きくなつたね。いくつになる？

子守。（おぢ／＼しながら、）十三になります。

ひさ子。然う、もう十三になるね。いゝ子になつた。去年とはまるで見違へるやうになつた。お母さんに似て、お前は奇量よしになるよ。

常吉。僕はこの子のお母さんを見たことがないやうだね。

ひさ子。（笑ひながら、）あら、あんなことを！よく家へキヤベツを持つて來て呉れた女ですよ。あなたも百姓には珍しい、いゝ女だつてお仰有つたでせう。

常吉。（考へた後、）あゝ、あの女か。僕はまた南部の妻さんとは思はなかつた。まだ若い人ぢやないか？

ひさ子。（笑ひながら、）え、若い人のやうですね。

常吉。あさ。お前はあのお母さんの子供か？

子守。え。

ひさ子。ほんとうにあのお母さんから生れたの？

子守。え。

常吉。それや、然うかも知れない。顔が似てゐるもの。お前のお母さんは幾つになる？

子守。四十です。

常吉。四十？　四十にしては若いぢやないか、一寸見たところ三十三四位にしか見へないね。

ひさ子。ほんとうに若い人ですね。（子供に、）それで、お前のお母さんはお前を可愛がるだらう。

子守。え。

常吉。それや自分の子供だもの可愛いくないことはないさ。あさ、お前だつてお母さんを好きだらう。

子供。え。

常吉。お前達は何處の小屋にゐるの？

子守。今年はお父さんゐないから小屋がないんですつて。

常吉。それぢや、お前のお母さんや伯父さんは何處に

ゐるの？
子守。町にゐます。
常吉。町の何んなところに？
子守。他の家を借りてゐます。伯父さんは今に大きな小屋を建てるんですつて。
常吉。然うか。そして、お前は今まで、お母さんや、お伯父さんと一緒にゐたの？
子守。（頭を振る。）
ひさ子。（不思議さうに女の子の顔をのぞいて。）それぢや、今日までお前だけ別なところにゐたの？
子守。（非常にいひしぶりながら）え。
常吉。（だん〳〵暗い表情になる。）あさ、お前の伯父さんといふ人はお前を可愛いがらないのか？
子守。（ぢつとしてゐる。）
常吉。お前、伯父さんはお母さんの世話をしてゐるのか？
子守。え。
ひさ子。お父さんのゐない間、お伯父さんが、お前たちの世話をして呉れるといふのだらう！
子守。え。
ひさ子。（女らしく。）然うか、それぢや、きつと、その伯父さんは親切なやさしい人にちがひないね。お前のことも伯父さんは可愛がつて面倒を見て呉れるだらう？きつと然うにちがひないね。
（二人は女の子の顔をのぞくやうにしてゐる。）
子守。（ぢつとしてゐる。目に涙が一杯たまつてゐる。）
常吉。（妻に。）僕は妙ないやな氣持になつて來た。きつとこの子供は不幸な生活をしてゐるに違ひがない。
ひさ子。私には何のことだか、ちつとも解りませんわ。一體その伯父さんといふのは何んな人間なんでせう？
常吉。僕にも解らないけれども、兎に角あまりいゝ性質の人間ぢやないだらうと思ふね。
ひさ子。然し、それは解りませんわ。

兄の妻を預つて置きながら、子供と同棲しないで、女と一緒に家を借りてゐるといふ法がないぢやないか。

ひさ子。あさ！（憐れむやうに、）お前は何か心配ごとでもあるんぢやないか。私達には何も隱すに當らないよ。何でも遠慮なく打ちあけてお呉れ。私達に出來ることなら何でも力になつてやるからね。

常吉。そんな事人に強いるもんぢやないよ。人間には人間めい／＼の生活があるんだもの。

ひさ子。それや、然うですけれども、こんな子供には自分の生活といふものがないんです。たゞ周圍の事情に支配されて生きて行くだけですもの。私はこの子が可憐さうでなりません。どこやら去年よりは顏がやつれてゐるやうですわ！

常吉。うむ。幾らか瘠せてゐるやうだ。（冷笑を浮べて、）然しこの子供の方から見たら、僕等も今年は瘠せて

ひさ子。然うね。

常吉。あさ！お父さん戰爭に行つたつてほんとうか？

子守。（涙を拭きながら、）え。ほんとうです。

常吉。いつ行つたの？

子守。この春。

常吉。うむ。そして戰地から手紙でも來るかへ？

子守。え。手紙が來ますけれども、伯父さんだけ讀んでしまつて置きます。

ひさ子。お母さん手紙を讀めないの？

子守。いえ、少し讀みます。

ひさ子。お前には手紙を讀ませないの？

子守。え。

ひさ子。お前もお父さんの手紙を讀みたいと思ふだらう？

子守。え。

ひさ子。伯父さんはなぜお前に手紙を讀ませないの？
子守。解らないからつて讀ませないんです……そして私を生意氣だつて怒るんです（涙を落しながら、）いつか……いつかも……
ひさ子。いつかも、何うしたの？
子守。（前垂の端を頬にあてゝ、すゝり泣きながら、）私はお父さんのところへ寫眞を送つたといつて、大變に叱られました……伯父さんは私を鎌の柄で大變叩きました……（急に烈しくすゝり泣く、）それからお母さんも一緒になつて……わたしを叱つたんです……奧さん……わたしいつまでもお家にゐたいんです……わたしをいつまでも置いてください……
ひさ子。あゝ、いつまでも置いてやるよ。お前さへゐたいと思へばいつまでゐてもいゝよ。然しお母さんはお前が可愛いんだよ。お母さんは決してお前を惡くんではゐないんだよ。お前だつてお母さんとは一緒[illegible]

子守。（聲をたてゝ泣く。）
常吉。（不快さうに、）もう、およし。お前は妙なことをする女だ！ それぢや、まるで子供を泣かせて喜ぶやうなもんぢやないか。私には事情がよく解る。然しこんなことはこの子供の身上ばかりぢやない。戰爭の蔭にこんな事實が幾らあるか知れたもんぢやない。
ひさ子。それでも私はこの子供が可憐さうです！
常吉。それは可憐さうさ。然しこの子供よりも、何も知らないで戰爭をしてゐる親父の方が倚ほ可憐さうぢやないか？ それに僕にはお母さんといふ人も隨分可憐さうな女だと思ふよ。
ひさ子。お母さんは馬鹿な人です。その伯父さんとの關係は何うであつても、自分の生みの娘ぢやありませんか、鎌で叩かせて、それに加勢する人があるもんですか？
常吉。なるほど、それは利巧な人間ぢやないかも知れ

逢ふかも知れない。

ひさ子。でもその誘惑に敗れる人もあれば打勝つて行く人もあるんです。

常吉。然し、誰が勝つか敗けるか、その誘惑にぶつかつて見なければ斷言の出來るものぢやない。（エモオシヨンを以つて。）要するに、そんなことは第二の問題だ。僕から見れば、戰爭をしてゐる親父さんも、お母さんも、伯父さんも、この子供も大きな波の中にゐる人間だ。何うして、その大きな波が起つて來るか知らない。何處からその波が起つて來るのか知らない。一寸見ると、伯父さんばかり惡い人であるやうに見へるかも知れないが、伯父さんだつてその誘惑があればこそ、その誘惑に敗けたんぢやないか。この子の親父さんは戰爭さへなければ去年の夏のやうに、この殺の野原で、可愛い妻さんや娘と一緒に麥を刈つたり、キヤベツをつくつたりしても樂しく暮してゐ

福に暮して行けた筈なんだ。たゞ戰爭といふ過つた愛の變形が今の社會に殘つてゐるために人間は人間の不幸を二重にも三重にもしてゐるんだ。私は然したゞ今現在戰爭をしてゐる人達を惡いといふのではない。あの人達は寧ろ可憐さうな人達だ……今のところそれをするより仕方がなかつたかも知れない……あの人達は例へば日本人にしろロシヤ人にしろお互同志には何等の怨恨の情がない、それでも敵の姿を見れば凱歌をつくつて進んで行かなければならない。そしてその結果は何うだらう？戰爭に勝つた國は幾らかの領土と幾らかの償金を得るだらう。その金で勳章を作つたり戰死者の遺族の扶助料に當てたりする。そして新しい領土へは内地で生活の出來ない浮浪人や賣笑婦を送つてやる。それだけのことだ。それよりも以上のことを何もしてゐない。そして私達は人間の靈魂や人間の苦痛は何等の慰め

もなくそのまゝ滅んでゐることに氣がつかない……そして戰爭をしてゐるお互の國では戰爭そのものに大きな意味があるやうに思つてゐる。（話頭を代へて、）この子供の親父さんがいつか凱旋して故郷へ歸るとする、その時伯父さんは羽織を着て袴をつけて、この子供をつれてステイションに兄さんを迎へに行くだらう。そして、兄さんは勳章をさげて、『萬歳』の聲に迎へられて自分の家へ入るだらう。（聲をひくゝして、）もし假りに、不幸にして、この子のお父さんが戰死したとしたらば、戰死者に下りる金は一體誰れの手に入るだらう？もし私達は私達の作つでゐる社會に、『正しい精神』が大事な所有物の一つであるとしたならば、これは大きな損害ぢやなからうか？

ひさ子。（額をしかめて、）あなたは、またすぐ激してしまうんだもの！ 私達は今議論をしてるんでも何んでもないんです。私達は今こゝにゐる娘の身上のことを話してゐるんぢやありませんか？

常吉。然うさ。然しこの娘の身の上も偶然に生れて來たものではない。だから僕はすべての道德はその道德を生んだ社會狀態を知らないでは、批判の出來るものぢやないと思ふ。普通世間の道德では、この娘のお母さんや伯父さんの行だけを單獨につき離して批判してゐる。然し僕から見ればお母さんも伯父さんもある意味で可憐さうな人だと思ふ……單にこの娘の場合に限らない、すべて今の道德は根のない樹のやうなものだ……いつかその樹が枯れてしまふ……いつかその樹が倒れてしまふ……

ひさ子。（いら／＼して主人の言葉を聞いてゐたが、子供をかばふやうにして、）お前もう泣くんぢやないよ。今に坊やが起きたら背負してお呉れ。さあ、あつちへ行かう。

子守。（涙を拭きながら立上り主人に辭儀をする。）

（二人が戸の外へ出る時、子供の寢醒めて激しく泣く聲がする。）

——自然に幕を下す——

第二幕

同じ室。夜。この幕は序幕に續いたものと見ることも出來るし、ある間隔を置いた時の事柄と見ることも出來る。またこの光景は必らずしも厚い幕で仕切る必要がない。

序幕のまゝの室の裝置、正面の窓には暗綠色の窓懸がかゝつてゐる。テイブルの上に火の消へたラムプが置いてある。

幕の上つた瞬間には舞臺は全く暗い。室の中には誰もゐない。

戸を叩く人。今晩は！今晩は！

（家の人は誰も目を醒さない。）

戸を叩く人。海野さん！　お休みですか？

（家の人の起きる音がする。）

戸を叩く人。（正面の窓のところで呼ぶ。）遲く伺つてすみませんが、一寸お目にかゝりたいのです！

（主人の常吉は寐卷のまゝ室の中へ入る。ラムプをつけ、カアテンを開いて外を覗く。）

常吉。何誰ですか？

廣田。私です。廣田。それから支廳の梁川君です。

常吉。はあ、署長さんと梁川君……一體何うしたのですか？

廣田。（努めて柔和な語調で、）なに一寸お目にかゝるだけでいゝのです。どうもすみません。

常吉。然うですか。ぢや一寸お待ちください。

（主人はラムプを持つて戸の外へ出る。やがて常吉を先きにして署長の廣田と支廳吏員の梁川とが入る。廣田は小肥りのした四十五六の人、制服をつけてゐる。吏員は三十二三の黑服を着た瘠せた人。）

常吉。（不安さうに、）さあ何うぞ。一體何うしたのですか？

廣田。（ハンケチで際立つて白い額を二三度拭きながら、）なに何うといふこともないのですが、今日一寸札幌の方へ參りましてね、それで明朝伺つてもよろしいのですが、ちやうどお宅の前を通つたもんですから、それでから遲くなつてお邪魔したやうな譯なんです。

常吉。はあ。廣田さんは時々札幌の方へおいでになりますか？

廣田。え。一週間に一遍はきつと行くことになつて居

ります。今日も道廳で梁川君にお目にかゝつたのです。

梁川。（少し卑しい笑ひ方をしながら、）海野さんには暫くお目にかゝりませんね。學校においでの時は毎日お目にかゝつたんだが。

常吉。（淋しく笑ひながら、）然うですね。梁川君とはよく學校で議論をしたもんでしたね。學校の連中はみんな元氣ですか？

梁川。え。みんな元氣のやうですね。安田君は戰死したといふ噂がありますが、あなたの方へはなんともありませんか？

常吉。いえ、ちつとも。あの人は出征してから一遍も手紙をよこしませんから……然しそれは多分間違ひでせう、一昨日妹の方から手紙が來ましたけれども何とも書いてよこしませんから。

梁川。（首を曲げて、）然し、新聞に安田中尉として戰死者の中に書いてあつたといふ話しでしたよ。

常吉。（少しく不安になつて、）安田中尉？ 然し安田といふ中尉は幾人あるか知れませんよ。聯隊の名が書いてあつたでせうか？

梁川。いや、聯隊の名はなかつたさうです。たゞ八師團、歩兵中尉としてあつたさうです。

常吉。いや多分違ひませう。死んだのなら妹の方へ通知がある譯ですから。

廣田。然し出征軍人が戰死をするといふことは寧ろ名譽なことです。それに御當人だつてそれ位のことは覺悟が出來てゐるでせうから。

常吉。さあ！

廣田。然しまあ、打開けた話が、名譽の凱旋をなすつた方が國家のために、御一家のために一番目出度い話ですね。（梁川に、）時に梁川君あまり遲くなるといけないからお話することにしませうか。

梁川。え。何うぞ。

常吉。（非常に眞面目に二人を見ながら、）一體何んな話ですか

？　なるだけ早くお話しを願いたいのです。私も朝早く起きなければならない身體ですから、

廣田。大きに。あなた氣を惡くしちやいけませんよ。私は決して公人としてあなたにお話しするんぢやありませんよ。つまり友人として打ちとけたお話しをするんですよ。

常吉。え、よく解つて居ります。

廣田。（鞄を持つて、）今日道廳へ參りますと、部長の方から、あなたの近頃の生活を調べるやうに命ぜられたのです……それも公式にあなたの生活に干涉する譯でも何んでもないのです、たゞ學校をお廢めになつてから何ういふ生活をしておいでになるか、それを個人として調べてもらひたいといふのです。

常吉。（益々眞面目に、）何うしてゞせう。何うして私の生活を調べる必要があるのでせう？

廣田。それは私供にはよく解りませんけれども、多分あなたが學校時代に嫌疑をお受けになつたと同じやうな意味ぢやないかと思ふんですが……

常吉。然し、それならば平塚博士にお願ひして長官の方へもよく通じてゐる筈ぢやありませんか？　平塚博士は私の思想を一番よく理解してゐて呉れる人です。私は學校をやめた時だつて、私は自分で廢めまいと思へば廢めなくとも、よかつたのです。私は寧ろ周圍の壓迫のために自分から職を退いたのです。なるほど私の思想は今の教育制度や、教育界の思想とはちがつてゐませう。それなればこそ私も自分で廢めたのです。然し今日の教育界にだつて、隨分ちがつた思想を持つてゐる人がゐます。平塚博士のやうな人が何んな思想を持つてゐるか恐く道教育會の人達には解らないでせう。人のことを引き合ひに出すのは何んですけれども、もし非戰論を唱へたり、外國人と手紙や繪葉書の交換したりするのが社會主義者ならば、平塚博士や道廳の技師なぞは立派な社會主義者ぢやありませんか、然し平塚博士に大學教

授の職を廢めさせやうといふ人がないぢやありませんか、誰か平塚博士のところへ行つて、あなたは近頃何んな生活をしてゐますかと調べて見たでせうか？それは何んのためですか、あの人は博士で大學の教授で、私は免職された小學教師だからでせう……私はもしさういふ主義でも持つてゐる者ならば、私は甘んじてその嫌疑を受けます……然し私は全くちがふのです、このことは平塚博士を通して長官に申上げてある筈です。第一私は社會主義といふものを知らないのです。私は今の社會を何うしなければならないかといふやうな纏つた考へが少しもないのです私は自分といふ一人の人間さへよく解つてゐないのです。一つの主義のために働くといふことは余程の確信を持つた者でなければ出來ないことです。

廣田。海野さんは大分私供を誤解してゐるやうだな。私は先刻もいつた通り、別にあなたの個人生活といふものに干渉しやうといふのでも何んでもないんですよ。私達はたゞ長官の內意を受けて、あなたの意見を聞いて、それを報告するだけです。あなたを別に主義者と斷定してゐるわけでも何んでもないのです。

常吉。（唇をふるはして、）然し、私はある意味の干渉だと思ひます。

廣田。（眞面目に、）何うしてゞすか？

深川。海野さん、廣田さんは、あなたには大變に同情しておいでになるんですよ。一體ならば正式にある期間あなたの生活を監視しなければならないのだけれども、それをしないで、あなたの意見を土臺にして報告を作るといふのですから。

常吉。然し私は一體何んなことをいへばいゝのですか？

廣田。つまり、私を一人の友人として正直に打開けてくださりさへすればいゝのです。

常吉。正直に打開けるつて、私は別に改まつて打開け

るとも何もないのですが……

廣田。あなたは學校をお廢めになつてから何ういふ生活をしておいでゝすか？

常吉。生活つて、何うして食べて行つてるかといふことですか？

梁川。まあ、然うです。

常吉。（意味ありげに）それならば、梁川君がよく知つてるぢやありませんか！

廣田。然しそれは私が聞くんです。

常吉。（苦笑して、）私は一層貧乏してゐます。私は餓死しないのが不思議だ位に思つてゐます。

梁川。然し養鷄の方は大分盛んにやつておいでだといふぢやありませんか。

常吉。ふむ。駄目です。

廣田。養鷄の方は私もやつたことがあるが、鷄は大分飼つて居りますか？

常吉。いえ、まだ駄目です。レグホンとミノルカを少しばかり飼つてゐるだけです。

廣田。（話を進めやうとあせりながら、）そして現在の生活はその養鷄の方だけですか、他になにかお仕事があるのですか？

常吉。仕事といつて別にありませんが、やつてゐますが、自分達の食べるものを作るだけです。

廣田。また立入つて伺ふやうですが、一月何れ位の收入がおありですか？

常吉。さあ、何れ位になりますか、私は正確に計算したこともありません、妻は帳簿を持つてゐますからちよつと起して見ませうか？

（立上らうとするのをとめる。）

廣田。いや、奥さんをお起しなさるには及びません、まあ、大體のところでいゝのです。

常吉。（苦笑しながら、）さうですね、大體のところといつても、一寸解りかねますが、いつか拾圓位の收入

あつた時がありますから、必要でしたら拾圓と書いて置いてください。

廣田。（數字だけ手帳に書入れる。）なるほど、拾圓。それで、その他何處からも收入がありませんか？

常吉。借金も收入と見られるならば、二月に一返位は借金をします。

廣田。（笑ひながら、）また立入つたお話しですが、何ういふ方面から借金をなさいます？

常吉。平塚博士から大分借金をします。然しそれは時々博士の仕事を手傳ふから帳消しになつてゐるだらうと思ひます。

廣田。博士の仕事といふのは何ういふ仕事ですか？

常吉。エスペラントの辭書を編纂することです。

（廣田は帳簿に急いで物を記す。）

廣田。あなたもエスペラントをおやりになりますか？

常吉。やるといふほどでもありませんが、私は好きです。

廣田。本道でエスペラントをやつてゐる人が澤山ありますか？

常吉。え。札幌には大分ゐるやうです。

廣田。何ういふ人達です、例へば？

常吉。私もよく知りませんけれども、農科大學の教授に二三人ありますし、道廳の技師にも七八人はあるやうです。

廣田。（鞄の中からはがきを出して、）あなたはこの繪葉書に見覺へがありますか？

常吉。（はがきを熟視して、）え、無論これは私から出した葉書です。

廣田。あなたは、この名宛人を御存じですか？

常吉。え、無論知つてゐます。私の友達ですから。

廣田。この葉書の文字は英語ですか、エスペラントですか？

梁川。（笑ひながら、）英語とエスペラントはすぐに解りますね、海野さん。

常吉。(もどかしさうに、)廣田さん、その葉書が何うしたといふのですか… お話を早く進めていたゞきたいものですね、大分遲いのですから。

廣田。この葉書は何んと書いてあるんですか？

常吉。何うして然んなことをおきゝになるんです。(葉書を受取つて、)これはダリアの根の相場を書いたものです。

(廣田は眞面目に澤山の葉書を出してゐる。)

廣田。この手紙はやはり同人宛のあなたの手紙したね？

常吉。(一書を與へて、)え、然うです。

廣田。御面倒でせうが、この手紙に何んなことが書いてあるか、一寸聞かしていたゞきたいのですが。

常吉。(うるささうに、)一體何うしたといふのです？梁川君もエスペランテストだから梁川君にでも讀んでもらつたらいゝぢやありませんか？

梁川。いや、僕はちつとも讀めない。あなたが讀んだらいゝでせう。

廣田。さあ、何うか大體でいゝのですから、意味だけでいゝのです。

常吉。(手紙を受取つて、)これは戰爭前に書いた手紙で、人間はなるだけ戰爭を避けるやうにしなければならないといふことを書いたものです。

廣田。それだけですか？

常吉。それから、戰爭に用ゐる何百分の一の金を各國が據出して、理想的な萬國國際會議を起したならば戰爭を未然に防ぐことが出來るだらうといふとを書いたものです。

廣田。(帳簿に記しながら、)なるほど、そしてあなたは今でも然ういふ考へを持つておいでゝすか？

常吉。無論です。今日戰爭を好んでしてゐる國といふものは、何處にもないと思ひます。

廣田。それは無論然うでせう。然しあなたは戰爭は避け難いものだとは思ひませんか？

常吉。避け惡いものだとは思ひますが、全然避け難いものだとは思ひません。
廣田。それでは今現在の戰爭に對して何んな態度をとつておいでゞすか？
常吉。（苦笑して、）態度つて、私には別にとるべき態度といふやうなものはありやしません。
廣田。あなたは、この手紙の名宛人とはいつから御交際しておいでゝした？
常吉。三年ばかり前からです。
廣田。何ういふ方面の御交際ですか？
常吉。何ういふ方面といつて、人間としてゞす。
廣田。あの人は社會主義者だといふことですか、あなたは何う思ひますか？
常吉。私は社會主義の理論を能く知らないものですから、何うともお答へが出來ません。然し近代の文明には政治でも文學でも哲學でもみんな社會主義の色を帶びてゐないものはないといふことをある本で讀んだことがあります。
廣田。あなたの思想と、あの人の思想とは大分異つてゐると思ひますか？
常吉。え。大變異つてゐると思ひます。あの男のが社會主義なら私のは個人主義です。
廣田。（手帳に書きながら、）なるほど社會主義と個人主義（手帳をしまひながら、）や、何うもご面倒でしたらう。
常吉。いえ。
廣田。（間を置いて、）それから、いつか海野さんにお話ししたいと思つてゐたのですが、あなたは東京へ出て一つ働いて見やうといふやうなお考へがありませんか？
常吉。いえ。私は東京の生活が飽きて、此方へ來たのですから、當分東京へ歸るのはいやです。
梁川。然し海野さんなどは友達が澤山だから東京の生活はきつと面白いでせう？
常吉。（不快さうに、）私は友達はみんな嫌いです！
廣田。實はこれは打開けたお話しですが、かういふ田

合に頭のあんまり進んだ人にゐられると、實に私供がやり惡いのですな。殊に戰爭中はみんなが擧國一致でかゝらなければならないのですから。それに人の氣がひきたつてゐますから、何んなことが起るか知れないと思ひましてね。それで、今日も支廳長とも相談したのですが、もし海野さんが東京へでも出られて仕事をなさるお考へでしたら私供の方で格好な仕事を見つけてあげてもよろしいのですが、然ういふお考へがありませんか？

常吉。（數秒間無言でゐたが、沈んだ調子で、）いや、難有うございます。然しこれは御返事しないことにして置きませう。（昂奮してゐる。）

廣田。私の方では別に強いる譯ではないのです。たゞ本道ではなるべく思想の違つた人にゐていたゞかない方針にしてあるものですから……札幌でもその方針で少し激しい人は檢擧することにして居ります。あなたのお友達のこの戶田さんも昨日鑛山へ行く途中で押へられました。まことにお氣の毒な譯でした

常吉。（非常に瞑想的な沈默をつゞけてゐる。）

梁川。（時計を見ながら、）廣田さん、もう二時ですよ。

廣田。然うですか。それぢや失禮しませう。（常吉に對ひ、）何うか惡く思はないでくださいよ。今のことはよく考へて置いて、私の方へ返事を願ひたいのです私供は個人として決してあなたを惡んでゐるのでも何んでもないのですから。

（二人は立つ。常吉はやはり沈默をつゞけながら、ランプを持つて、二人の後につゞく。）

ひさ子。（三人の出た後の暗い室の中に幽靈のやうに入る。）

（外の方で二人の主人に挨拶する聲が聞へる。）

常吉。（ランプを持つたまゝ戶の際に立つ。女を一瞥したまゝ無言で立つてゐる。）ひさ子か？

ひさ子。（蒼白な顏をしてゐる。）え。

常吉。お前起きてゐたのか？

ひさ子。え。

常吉。お前聞いてゐたのか？
ひさ子。え。（目が涙で一杯になつてゐる。）
常吉。坊はよく寝てるかへ？
ひさ子。え丶、よく寝てゐます。
常吉。（ラムプをテイブルの上へ置いて。）さあ、明朝から働くんだぞ！
ひさ子。何處で働くんです？　私達はやつぱりこゝも追はれて行くんぢやありませんか？
常吉。（昂奮した眼を輝かして、女の方へ近寄り。）お前と坊やさへ丈夫でゐて呉れさへすれば僕は安心して働ける。僕は今晩は非常に愉快だ！　僕は初めて地球に足を觸れたやうな氣がする！　僕等の行くところには何處にも世界があるんだ！　さあ、寝やう！
（ラムプを消す。）

――幕――

第三幕

一週間の後。
部落の小さなステイションの構内の一部。舞臺全體を待合室と事務室で占めてゐる。事務室の方は建物の外廓を表にし、その前に小さな花壇がありその中には、バラ、キキヤウ、アマリヽ、等が亂雑に咲いてその周圍をクロヽバアの柔かな緑が包んでゐる。電信機の音が絶へず響いてゐる。
待合室は一方の壁なしに觀客の方に開いてゐる。正面に出入口があつて、そこからプラツトホームの一部が見へる。
朝。
朝霧が未だ充分に晴れきらない頃。
幕の上つた瞬間に、ひさ子は黄色がゝつたショオルをかけて待合室へ入つて來る。すぐその後から子守は三歳ばかりの子を背負ひながら入る。ひさ子は子守の背中にゐる幼兒をあやしなぞしてゐる。時々思ひ出したやうに掲示板を眺めては指で物を數へたりしてゐる。
『旅順が陷落したさうだ……』『いや未だ陷落しない……』『君はいつ出征するんだ？……』『未だ判らない……』かういふ會話は何處からともなく聞へて來る。
時々眠いやうな沈默がつゞく。
（數分間の後、常吉の一行が話しながら待合室へ入つて來る。一行の中に若い女が二人に紳士が五名ばかりゐる。）

まだ三十分間があります。

平塚博士。(白い髭を短く刈つた、怜悧さうな目をした老紳士。)まだ三十分あるか、少し早やすぎたかね？

常吉。先生、みなさんお歸りなすつてください。山崎さんもみなさんもおいそがしい身體ですから。

博士。いや、かまはないさ。(外の人々に、)さあ、みんな懸け賜へ。こゝでゆつくり話さう。(首を曲げてひさ子の方を見て、)奥さん忘物はありませんか？元氣を出さなくちやいけませんよ、二晝夜も汽車や汽船で搖られるのだから。淳子も大變あなたや坊つちやんのことを心配してゐましたよ。

ひさ子。(蒼白い顔が少し昂奮してゐる。)ありがたうございます。お陰さまで坊も私も丈夫でございますから。ほんとうに、先生やみなさまに御心配ばかりかけて何とも申譯けがございません。

(ひさ子は一同に辭儀をする。女達はひさ子の方へ寄つて幼兒を

博士。東京へ行くと、安心して暮せますよ。東京は廣いからね！

(ひさ子は何もいはずに頭をさげる。外の紳士は博士の言葉を聞いて微笑する。)

常吉。然し私は東京は餘り好きぢやありません(一同腰かける。)——東京は正當の日本ぢやないやうな氣がするんです。

博士。(笑ひながら、)何うして？

常吉。正當の日本ならば、別な發達をしてゐる筈です

博士。一體君の正當の日本といふのは何ういふ意味だね？

常吉。(眞面目に、)やつぱり正當の日本です。もし新しい日本の首府が今の東京でなく大阪か神戸か名古屋か、でなければ横濱か函館か札幌にてもあつたら今の東京よりは三層倍も立派な文明が出來てゐたでせう。

山崎。(靜かに、)君のいはれるのは、保守的だといふ意

味ですか、或はあんまり破壞されすぎてゐるといふ意味ですか？

常吉。一層保守的なら保守的でいゝのです。生中破壞されてゐて、その中に妙な保守的な空氣が始終逆流して來るからいけないのです。今のまゝで進んだら東京からは永久に立派な哲學も生れなければ文學も生れなければ、政治も生れません！

博士。私も趣味としてはあまり東京を好かない。私は日清戰爭前に大阪に五年ばかり住んでゐたことがあるが、大阪にゐる間はそんなにも思はなかつたが、今になつて考へて見ると、大阪の生活は一番愉快であつた。なぜ愉快かといへば、新しい文明と舊い文明とがきちんと別れてゐるからだ。だから生活してゐて趣味を强いられることがない。東京では然うはいかない、新しい方の仕事をしてゐる人がいつでも舊い影法師を背負つて歩いてゐる。思ひ切つて仕事をするのが大阪だ。東京は皆がいゝ〱といふ保證を與へなければなか〱やらない。然し私は海野君の説には全然贊成が出來ない。私は東京にも東京の持つてゐる特色があると思ふ。これは東京の外に、世界の何處にもない特色だと思ふ。

常吉。それは monstrio としてでせう？

博士。研究の temo として。

常吉。それぢや、やはり一つの見世物としてでせう。

山崎。私は海野君の、首府に就いての意見は面白い意見だと思ふけれども、假りに東京を大阪に代へて見ても、さう變つた文明が出來てゐるとは思はない。それは多少異つたものが出來るかも知れないけれども。

常吉。いえ、確かにもう少し思ひ切つた文明が出來てゐたでせう。東京ではさういふ機會を何返も持つてゐながらすぐ逆戻りしてゐます。

の文明を作つてゐないんだから。東京の今日の文明といふものはみんな田舍者の作つた文明だもの。

常吉。それは然うかも知れませんね。然し田舍者でも結構です。田舍者は田舍者で自分逹の文明を作つて行つたらよかつたんです。

博士。然しそんなことは要するに過ぎ去つたことだ。『過ぎさるものは過ぎ去らしめよ』だ。海野君なんか、これから新しい文明を作つて行く人だ。海野君は東京を好かないなら、好かないやうに東京に對して責任がある譯だ。君なぞの思想からいつても。

常吉。(ぢつとしてゐる。)

(他の人逹は雜談を初める。博士は安い煙草を喫む。時々電信機の音が事務室の方から聞へて來る。)

ひさ子。(子守に、)あさ、お前はもう歸つていゝよ。さあ、坊やを私が懷くから。

(女は子守の背中から子供を下さうとする。)

いゝんですよ!

ひさ子。(驚いて、)いゝたつて、お前もうぢき汽車が來るんぢやないか。可笑しな子だね。

子守。(子供を背負つたまゝ、ひさ子から遠ざからうとする。)

ひさ子。(少しあわてゝ、)あさ、お前何うしたの。坊やは色々仕度があるんだからさ。早く下してお呉れ!

子守。(大きな一つの掲示板の下のところに立つて、顏に手をあてゝ烈しく泣く。)

(常吉も外の人逹も一同不思議さうにその方を見る。)

常吉。(立つてその方へ行く。)あさ、何うしたんだ? お前も一緒に行くつもりでゐたのか?

ひさ子。きつと然う思つてゐたんですよ。それに坊を大變に可愛がつてゐましたから。

常吉。あさ、お前は行かないんだよ。お前はお母さんと一緒にゐて、お母さんの手傳ひをしなければならない。今に秋になると大變いそがしくなるから。

子守。（決心して、）旦那さま、私もつれて行つてください！

常吉。つれて行つて呉れつて、お前そんなことが出來るものか。お前にはちやんとしたお母さんもあれば伯父さんもゐるぢやないか？

ひさ子。そんな解らないことをいふものぢやないよ。また來年になると私達も此方へ來るんだからね。さあいゝ子だから坊やを下してお呉れ。

子守。（ひさ子の手をかけるのを烈しく拒む。）いやです……いやです……私何うしても行きたいんです……

博士。（常吉に、）海野君、その子は一體何ういふ子です？何うしたといふのです？

常吉。Ŝi estas filino de Milito!

博士。ふむ。戰爭の子供！然し君もやつぱり戰爭の子供だ。そしてこの子の家族が此方にゐるんですか？

常吉。え。お母さんと、この子の伯父さんと一緒にゐ

博士。家庭の狀態がいゝんですか？

常吉。（淋しい調子で、）Tre malbona! Tio estas grandat ragedio!

博士。Ĉu ili ne amas ŝin?

常吉。Kontraŭe, ili malamas, kaj ofte turmentas ŝin.

博士。（非常に淋い表情になる。）海野君その子供をつれて行つたら何うです？

常吉。さあ、何うしたらいゝもんでせう？そんなことが出來るもんでせうか？

博士。出來るも出來ないもないさ。そんな家庭に子供を置くのは可愛さうだ。

ひさ子。（子守に、）お前ほんとうに私達と一緒に行く氣かへ？　仕度もなにもいらないのかへ？

子守。（昂奮して、）え、奥さま行きたいんです……行きたいんです……私汽車賃を持つてゐますから……

ひさ子。（少し驚いて、）汽車賃？お前汽車賃を誰から貰

ひさ子。それぢや、お母さんはお前に行つてもいゝといつたの？

子守。え。

常吉。お母さん、家にゐるの？

子守。いえ。こゝへ來てゐます。

常吉。こゝへつて停車場へか？

子守。え。

常吉。（ひさ子に、）この子をつれて行かうか？お前は何う思う？

ひさ子。私はつれて行つてもいゝと思ひますけれども何んなものでせう？

博士。つれていらしやい。東京へ行つても何うせ當分は子守がいるでせうから。

常吉。それぢや、つれて行くことにしませう。この子供は非常に氣立てのいゝ子です。この子が一緒に行つて呉れさへすれば私達も幾らか樂な旅が出來ませ

（常吉は元の位置に腰かける。）

博士。（淳子に、）あれを奥さんにあげてお呉れ。

淳子。（も一人の若い女學生風の女と一緒に博士の鞄の中から新聞に包んだ荷物を出して、）

奥さん、お邪魔でせうけれども、これをお納めなすつてくださいまし。

ひさ子。まあ、何んでございますか、いたゞいてよろしいのでございますか？

常吉。然ういふ御心配はいらないんですよ。

博士。海野君、何もないから、學校で出來るバタアを少しばかり持つて來ました。邪魔でも持つて行つて呉れ賜へ。

常吉。バタアですか、何うも有難うございます。それぢやいたゞいて行きます。

（常吉は自分の鞄にそれを入れる。）

博士。海野君仕度はみんな出來たか？忘物はないか

ね？

常吉。え。

博士。(笑ひながら、)鷄は何うしました？

常吉。みんな賣つてしまひました。生きた者を賣つて旅費にするのだと思つたらいやな氣持がしました。

博士。(淋しく笑ふ。)

常吉。生物を飼つたことのない人には話しても解りませんが、何んな生物でも、暫く飼ひつけて見ると、その生物が可愛くなるものです。それも犬だとか猫だとかになると、然ういふ氣持は誰れにも解りますけれども、鷄を飼う人はやつぱり鷄が可愛くなるといふやうなことは普通の人に話しても解りませんね。私はよくそんなことをいふと、人は笑ひますけれども、それは全くです。例へば同じ鷄の中でも、毛の色だとか嘴の形とかで可愛いさがちがひます。

博士。然うだね。それで鷄はやつぱり[illegible]をしたりなん

かするんだらう！

(男も女も一緒に笑ふ。淳子のみは眞面目な顔をしてゐる。)

博士。さあ！こゝで常例によつて私は極く簡單な御挨拶をしやう。私達の未來の國のために、私達の言葉のために！

(一同眞面目に博士の方を見る。)

Karaj Gesinjoroj!

Mi permesas al mi paroli kelkajn vortojn. Ni samideanoj nun estas en la ĉambro de la malgranda studdometo, kaj ni atendas la tempon kiu forportos la plej grandan samideanon, kiun ni iam havis. Ĉiuj miaj amikoj tre forte amas lin, kiel lia frato, kiel lia knabo, aŭ kiel lia amanto, sed nun, bedaŭrinde, iu alia envenas inter ili, kaj ili devas apartiĝi unu la alian nevolonte. Sed mi kredas, tiu ĉi afero des pli fortikigos iliajn amojn. Do kiu estas la alia, tiu envenanta inter ili? Li estas a muta "Milito". Milito ĉiam havas multajn maskojn, per kiuj li trompas multajn homojn. Sed jam li komencas perdi ĉiujn maskojn kaj pretiĝas morti nature.

常吉。(低い聲で、) Kontraŭe, li havos novajn maskojn senĉese!

博士。(眞面目に言葉をつゞける。)

Sed sendube li komencas perdi la maskon de amo! Tiu, kredible, montras al ni la triumfon de "paco". Tial mi esperas, ke min samideano Sinjoro [illegible] staru forte kaj propagandu la idion de

paco! Vivu la amanto de paco! Vivu Sinjoro un'no!

常吉。（静かに、）

Doktoro kaj miaj Gesamideanoj!
Honeste parolu, mi povas paroli tute nenion. Doktoro Hiracuka parolis pri paco, kaj li diris al ni, ke la milito post ne longe mortos si mem. Sed mi ne kredas tion, kontraŭe, mi zorgas, ke ni devos vidi la pli grandan militon en la mond. Sed li bone diris, ke "milito" komencas perdi la maskon de amo! Antaŭ ĉio, mi bedaŭras ke mi ne povas vivi kune kun vi, en tiu ĉi vasta kampo, kiun mi tre amas, kaj ke mi devas foriri sencele. Sed viaj grandaj amoj, kiujn vi donis al mi kaj min familio, ne vane perdos. Mi tutkore dankas vin!

（常吉は静かに座る）

（この時署長の廣田及び二人の和服の紳士が入る。）

博士。（廣田に）廣田さん、まだ時間がありますか？

廣田。（時計を見て、）いゝえ、もう直ぐです。（一同を見て、）私もさつきから此方へ伺ふ筈でしたが、昨晩から出征軍人の方で一睡もしないやうな具合でしてね。

博士。然うですか、なか〳〵おいそがしいでせう。あなたもまるで出征してゐるやうなものですね。

廣田。（帽子をとつて、ハンケチで前額を烈しく拭きながら、）いや、軍人よりも私供の方が却つていそがしい位です。（常吉の方へ向つて、）海野さん仕度は出來ましたか？

常吉。えゝ。有りつたけの物を賣り飛ばして行くのですから、荷物も何もありません。

廣田。私なんかも、大抵のものはその土地土地で買うことにしてゐます。却つてその方が安くつく位ゐです。

ひさ子。（廣田の前へ進んで、）廣田さん、いろ〳〵お厄介をおかけして、申譯けがございませんでした。

廣田。いや。ほんとうにお氣毒です。私もこの秋は東京へ出るつもりですから、その時はお立寄りします。

博士。署長さんはお國は何方です？

廣田。私は東京の近くです。浦和です。

博士。はあ、浦和ですか？

廣田。（常吉に、少し小聲で、）途中であなたに何か質ねる者があるかも知れませんが、氣を惡くしちやいけま

せんよ。東京の方へは私の方からよく通知して置きましたから、決して御心配はいりません。

常吉。何うも難有う。かうして始終仕事を變へたり、土地を變へたりするやうぢや、全く安心して仕事が出來ません！

廣田。いや、大きに！

博士。（署長に、）それに海野君なんかの場合は全く氣の毒だ。僕等から見ると決して烈しい思想を以つてゐる人でも何んでもない。極く當前のことをいつてゐるんです。（他の紳士を指して）こゝにゐる人達はみんな大學の先生ばかりですが、海野君なぞよりずつと烈しいことを講義してゐますよ。それでゐて月給を貰つて結構に暮して行つてゐます。

（四人の紳士は笑ふ。）

ほんとうに廣田さん、海野君のことはよろしく願ひますよ。

（この時遠く汽笛の音がする。）

博士。さあ！荷物を運ばせよう。

廣田。（プラットホームの方へ手を上げる。赤帽が入る。）荷物を運んで呉れ。

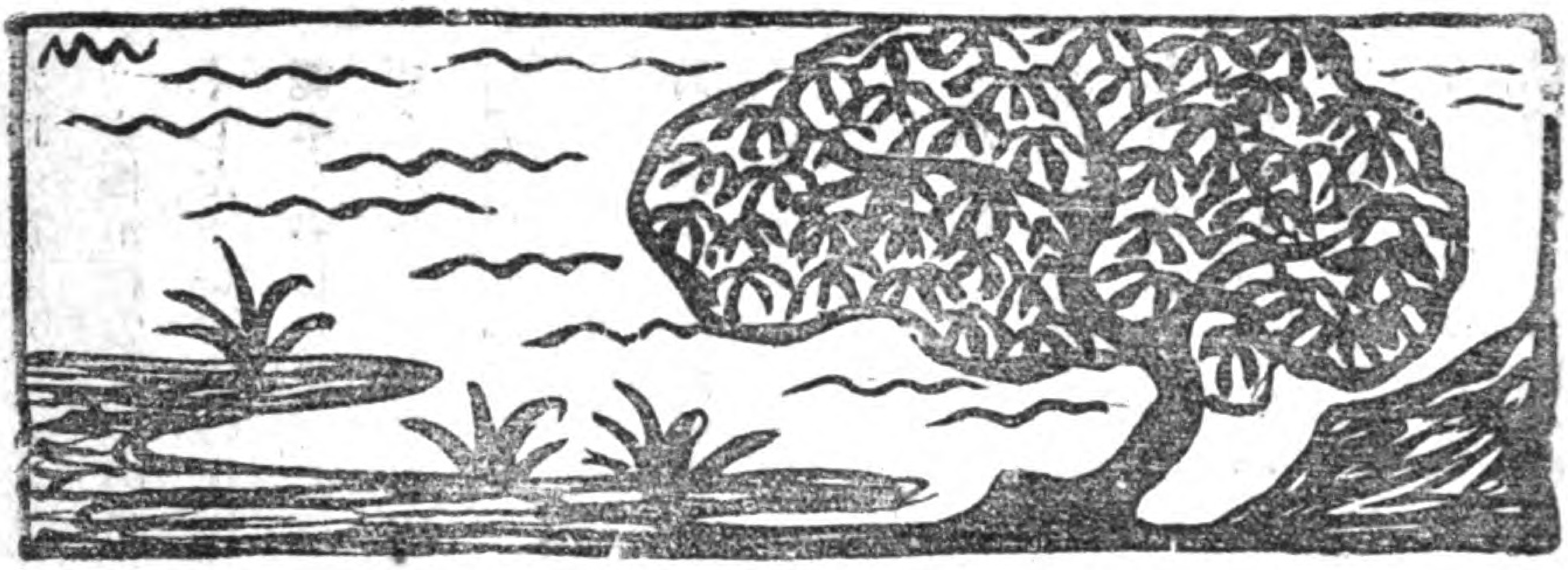
（赤帽はひさ子から荷物を受取つて運ぶ。一同はプラットホームの方へ歩む）

常吉。（赤帽の運ぶ荷物を見てゐる内に次第に陰欝になつて來る。殆んど發作的に、）Ĉu ni devas forlasi ĉi tiun verdan kampon?（この緑の野をすてゝ行くのか？）

博士。Jes, por la estonta verda kampo!（然り、未來の緑の野のために！）

（博士は常吉の肩に手を當てる。常吉は何もいはずに靜かに歩む博士と常吉が戸のところへ達した頃、汽笛がまた鳴る。）

――靜かに自然のまゝで幕――



魚玄機

森林太郎

魚玄機が人を殺して獄に下つた。風說は忽ち長安人士の間に流傳せられて、一人として事の意表に出でたのに驚かぬものはなかつた。

唐の代には道教が盛であつた。それは道士等が王室の李姓であるのを奇貨として、老子を先祖だと言ひ做し、老君に仕ふること宗廟に仕ふるが如くならしめた爲めである。天寶以來西の京の長安には太淸宮があり、東の京の洛陽には太微宮があつた。其外都會ごとに紫極宮があつてどこでも日を定めて嚴かな祭が行はれるのであつた。長安には太淸宮の下に許多の樓觀がある。道教に觀があるのは、佛教に寺があるのと同じ事で、寺には僧侶が居り、觀には道士が居る。其觀の一つを咸宜觀と云つて女道士魚玄機はそこに住んでゐたのである。

玄機は久しく美人を以て聞えてゐた。趙痩と云はむよりは、寧ろ楊肥と云ふべき女である。それが女道士になつてゐるから、脂粉の顏色を涴すを嫌つてゐたかと云ふと、さうではない。平生粧を凝し容を冶つてゐたのである。獄に下つ

た時は懿宗の咸通九年で、玄機は恰も二十六歳になつてゐた。

玄機が長安人士の間に知られてゐたのは、獨り美人として知られてゐたのみではない。此女は詩を善くした。詩が唐の代に最も隆盛であつたことは言を待たない。隴西の李白、襄陽の杜甫が出て、天下の能事を恭した後に太原の白居易が踵いで起つて、古今の人情を曲盡し、長恨歌や琵琶行は戶ごとに誦んぜられた。白居易の亡くなつた宣宗の大中元年に、玄機はまだ五歳の女兒であつたが、ひどく怜悧で、白居易は勿論、それと名を齊うしてゐた元微之の詩をも、多く諳記して、其數は古今體を通じて十餘篇に及んでゐた。十三歳の時玄機は始て七言絶句を作つた。それから十五歳の時には、もう魚家の少女の詩と云ふものが好事者の間に寫し傳へられることがあつたのである。

さう云ふ美しい女詩人が人を殺して獄に下つたのだから、當時世間の視聽を聳動したのも無理はない。

魚玄機の生れた家は、長安の大道から横に曲がつて行く小さい街にあつた。所謂狹邪の地でどの家にも歌妓を養つてゐる。魚家も其倡家の一つである。玄機が詩を學びたいと言ひ出した時、兩親が快く諾して、隣街の窮措大を家に招いて、平仄や押韻の法を教へさせたのは、他日此子を搖金樹にしようと云ふ願があつたからである。

大中十一年の春であつた。魚家の妓數人が度々或る旗亭から呼ばれた。客は宰相令狐綯の家の公子で令狐滈と云ふ人である。貴公子仲間の裴誠がいつも一しよに來る。それに今一人の相伴があつて、此人は溫姓で、令狐や裴に鍾馗々々と呼ばれてゐる。公子二人は美服してゐるのに、溫は獨り汚れ垢ついた

衣を着てゐて、兎角公子等に頤使せられるので、妓等は初め僮僕ではないかと思つた。然るに酒酣に耳熱して來ると、溫鍾馗は二公子を白眼に視て、叱咤怒號する。それから妓に琴を彈かせ、笛を吹かせて歌ひ出す。曾て聞いたことのない、美しい詞を朗かな聲で歌ふのに、其音調が好く整つてゐて、しろう人とは思はれぬ程である。鍾馗の諢名のある于思肸目の溫が、二人の白面郞に侮られるのを見て、嘲謔の目標にしてゐた妓等は、此時溫の傍に一人寄り二人寄つて、とう〳〵溫を圍んで傾聽した。此時から妓等は溫と親しくなつた。溫は妓の琴を借りて彈いたり、笛を借りて吹いたりする。吹彈の技も妓等の及ぶ所ではない。

妓等が魚家に歸つて、頻に溫の噂をするので、玄機がそれを聞いて師匠にしてゐる措大に話すと、其男が驚いて云つた。「溫鍾馗と云ふのは、恐らくは大原の溫岐の事だらう。又の名は庭均、字は飛卿である。擧場にあつて一たび手を叉けば八韻の詩が成るので、溫八叉と云ふ諢名もある。鍾馗と云ふのは、容貌が醜怪だから言ふのだ。當今の詩人では、李商隱を除いて、あの人の右に出るものはない。此二人に段成式を加へて三名家と云つてゐるが、段は稍劣つてゐる」と云つた。

それを聞いてからは、妓等が令狐の筵會から歸る每に、玄機が溫の事を問ふ。妓等も亦溫に逢ふ每に玄機の事を語るやうになつた。そしてとう〳〵或る日溫が魚家に訪ねて來た。美しい少女が詩を作ると云ふ話に、好奇心を起したのである。

溫と玄機とが對面した。溫の目に映じた玄機は將に開かむとする牡丹の花のやうな少女である。溫は貴公子連と遊んではゐるが、もう年は四十に達して、鍾馗の名に負かぬ容貌をしてゐる。開成の初に妻

を迎へて、家には玄機と殆ど同年になる憲と云ふ子がゐる。

玄機は襟を正して恭しく温を迎へた。初め妓等に接するが如き態度を以て接しようとした温は、覺えず容を改めた。さて語を交へて見て、温は直に玄機が尋常の女でないことを知つた。何故と云ふに、この花の如き十五歳の少女には、些の嬌羞の色もなく、其口吻は男子に似てゐたからである。

温は云つた。『卿の詩を善くすることを聞いた。近業があるなら見せて下さい』と云つた。

玄機は答へた。『兒は不幸にして未だ良師を得ません。どうして近業の言ふ足るものがありませう。今伯樂の一顧を得て、奔踶して千里を致すの思があります。願はくは題を課してお試み下さい』と云つたのである。

温は微笑を禁じ得なかつた。此少女が良驥を以て自ら比するのは、いかにもふさはしくないやうに感じたからである。

玄機は起つて筆墨を温の前に置いた。温は率然『江邊柳』の三字を書して示した。玄機が暫く考へて占出した詩はかうである。

賦得江邊柳

翠色連荒岸。烟姿入遠樓。影鋪秋水面。花落釣人頭。
根老藏魚窟。枝低繫客舟。蕭々風雨夜。驚夢復添愁。

温は一誦して善しと稱した。温はこれまで七たび擧場に入つた。そして毎に堂々たる男子が苦索して

一句を成し得ないのを見た。彼輩は皆遠く此少女に及ばぬのである。此を始として溫は度々魚家を訪ねた。二人の間には一時詩筒の往反織るが如くになつた。

溫は大中元年に、三十歲で太原から出て、始て進士の試に應じた。自己の詩文は燭一寸を燃さぬうちに成つたので、隣席のものが呻吟するのを見て、これに手を假して遣つた。其後擧場に入る毎に七八人の爲めに詩文を作る。其中には及第するものがある。只溫のみはいつまでも及第しない。

これに反して場外の名は京師に騷いで、大中四年に宰相になつた令狐綯も、溫を引見して度々筵席に列せしめた。或る日席上で綯が一の故事を問うた。それは莊子に出てゐる事であつた。溫が直ちに答へたのは好いが、其詞は頗る不謹愼であつた。『それは南華に出てをります。餘り僻書ではございません。相公も燮理の暇には、時々讀書をもなさるが宜しうございませう』と云つたのである。

又宣宗が菩薩蠻の詞を愛するので、綯が塡詞して上つた。實は溫に代作させて口止をして置いたのである。然るに溫は醉つて其事を人に漏した。其上嘗て『中書堂內坐將軍』と云つたことがある。綯が無學なのを譏つたのである。

溫の名は遂に宣宗にも聞えた。それは或る時宣宗が一句を得て對を擧人中に求めると、溫は宣宗の『金步搖』に對するに『玉條脫』を以てして、帝に激賞せられたのである。然るに宣宗は微行をする癖があつて、溫の名を識つてから間もなく、旗亭で溫に邂逅した。溫は帝の顏を識らぬので、暫く語を交へてゐるうちに傲慢無禮の言をなした。

既にして舉場では、沈詢が知擧になつてから、温を別席に居らせて、鄰に空席を置くことになつた。詩名は愈高く、帝も宰相も其才を愛しながら、其人を鄙んだ。趙顓の妻になつてゐる温の姉などは、弟のために要路に懇請したが、何の甲斐もなかつた。

温の友に李億と云ふ素封家があつた。年は温より十ばかりも少くて頗る詞賦を解してゐた。咸通元年の春であつた。久しく襄陽に往つてゐた温が長安に還つたので、李が其寓居を訪ねた。襄陽では、温は刺史徐商の下で小吏になつて、稍久しく勤めてゐたが、終に厭倦を生じて罷めたのである。温の机の上に玄機の詩稿があつた。李はそれを見て歎稱した。そしてどんな女かと云つた。温は三年前から詩を教へてゐる、花の如き少女だと告げた。それを聞くと、李は精しく魚家のある街を問うて、何か思ふことありげに、急いで座を起つた。

李は温の所を辭して、徑ちに魚家に往つて、玄機を納れて側室にしようと云つた。玄機の兩親は幣の厚いのに動された。

玄機は出て李と相見た。今年はもう十八歳になつてゐる。その容貌の美しさは、温の初て逢つた時の比ではない。李も亦白皙の美丈夫である。李は切に請ひ、玄機は必ずしも拒まぬので、約束は即時に成就して、數日の後に、李は玄機を城外の林亭に迎へ入れた。

此時李は遽に發した願が遽に愜つたやうに思つた。しかしそこに意外の障礙が生じた。それは李が身を以て、近からうとすれば、玄機は回避して、强ひて逼れば號泣するのである。林亭は李が夕に望を懷い

て往き、朝に興を失つて還るの處となつた。

李は玄機が不具ではないかと疑つて見た。しかし若しさうなら、初に聘を卻けた筈である。李は玄機に嫌はれてゐるとも思ふことが出來ない。玄機は泣く時に、一旦避けた身を李に靠せ掛けてさへ苦痛に堪へぬらしく泣くのである。

李は屢催して曾て遂げぬ欲望の爲めに、徒らに精神を銷磨した、行住座臥の間、恍惚として失する所あるが如くになつた。

李には妻がある。妻は夫の動作が常に異なるのを見て、其去住に意を注いだ。そして僮僕に啗はしめて、玄機の林亭にゐることを知つた。夫妻は反目した。或る日岳父が李の家に來て李を面責し、李は遂に玄機を逐ふことを誓つた。

李は林亭に往つて、玄機に魚家に歸ることを勸めた。しかし李は聽かなかつた。縱令二親は寬假するにしても、女伴の侮を受けるに堪へないと云ふのである。そこで李は兼て交つてゐた道士趙錬師を請待して、玄機の身の上を託した。玄機が咸宜觀に入つて女道士になつたのは、かうした因緣である。

李は才智に長けた少女であつた。其詩には人に優れた剪裁の工があつた。溫を師として詩を學ぶことになつてからは、一面には典籍の涉獵に努力し、一面には字句の錘錬に苦心して、殆寢食を忘れる程であつた。それと同時に詩名を求める念が漸く增長した。

李に聘せられる前の事である。或る日玄機は崇眞觀に往つて、南樓に狀元以下の進士等が名を題した

のを見て、慨然として詩を賦した。

遊崇眞觀南樓。覩新及第題名處。

雲峯滿目放春晴。歷々銀鈎指下生。自恨羅衣掩詩句。擧頭空羨榜中名。

玄機が女子の形骸を以て、男子の心情を有してゐたことは、此詩を見ても推知することが出來る。しかし其形骸が女子であるから、吉士を懷ふの情がないことはない。只それは蔓草が木の幹に纏ひ附かうとするやうな心であつて、房帷の欲ではない。玄機は彼があつたから、李の聘に應じたのである。此がなかつたから、林亭の夜は索莫であつたのである。

既にして玄機は咸宜觀に入つた。李が別に臨んで、衣食に窮せぬだけの財を餽つたので、玄機は安んじて觀内で暮らすことが出來た。趙が道書を授けると、玄機は喜んでこれを讀んだ。此女の爲めには經を講じ史を讀むのは、家常の茶飯であるから、道家の言が却つてその新を趁ひ奇を求める心を悅ばしめたのである。

當時道家には中氣眞術と云ふものを行ふ習があつた。每月朔望の二度、豫め三日の齋をして、所謂四目四鼻孔云々の法を修するのである。玄機は遁るべからざる規律の下にこれを修すること一年餘にして忽然悟入する所があつた。玄機は眞に女子になつて、李の林亭にゐた日に知らなかつた事を知つた。これが咸通二年の春の事である。

玄機は共に修行する女道士中の稍文字ある一人と親しくなつて、これと寢食を同じうし、これに心胸

贈鄰女

羞日遮羅袖。　愁春懶起粧。　易求無價寶。　難得有心郎。
枕上潜垂涙。　花間暗斷腸。　自能窺宋玉。　何必恨王昌。

采蘋は體が小くて輕率であつた。それに年が十六で、もう十九になつてゐる玄機よりは少いので、始終沈重な魚機に制馭せられてゐた。そして二人で爭ふと、いつも采蘋が負けて泣いた。さう云ふ事は日毎にあつた。しかし二人は直に又和睦する。女道士仲間では、かう云ふ風に親しくするのを對食と名づけて、傍から揶揄する。それには美と妬とも交つてゐるのである。

秋になつて采蘋は忽失踪した。それは趙の所で塑像を造つてゐた旅の工人が、暇を告げて去つたのと同時であつた。前に對食を嘲つた女等が、趙に玄機の寂しがつてゐることを話すと、趙は笑つて「蘋也飄蕩、蕙也幽獨」と云つた。玄機は字を幼微と云ひ、又蕙蘭とも云つたからである。

趙は修法の時に規律を以て束縛するばかりで、樓觀の出入などを嚴にすることはなかつた。玄機の所へは、詩名が次第に高くなつた爲めに、書を索めに來る人が多かつた。さう云ふ人は玄機に金を遣ることもある。物を遣ることもある。中には玄機の美しいことを聞いて、名を索書に藉りて訪ふものもある。或る士人は酒を携へて來て玄機に飲ませようとすると、玄機は僮僕を呼んで、其人を門外に逐ひ出させ

たさうである。

然るに采蘋が失踪した後、玄機の態度は一變して、稍文字を識る士人が來て詩を乞ひ書を求めると、それを留めて茶を供し、笑語晷を移すことがある。一たび款待せられたものは、友を誘つて再び來る。玄機が客を好むと云ふ風聞は、幾もなくして長安人士の間に傳はつた。もう酒を載せて尋ねても、逐はれる虞はなくなつたのである。

これに反して徒に美人の名に誘はれて、目に丁字なしと云ふ輩が來ると、玄機は毫も假借せずに、これに侮辱を加へて逐ひ出してしまふ。熟客と共に來た無學の貴介子弟などは、幸にして謾罵を免れることが出來ても、坐客が或は句を聯ね或は曲を度する間にあつて、自ら視て缺然たる處から、獨り竊に席を逃れて歸るのである。

客と共に謔浪した玄機は、客の散じた後に、怏々として樂まない。夜が更けても眠らずに、目に涙を湛へてゐる。さう云ふ夜旅中の溫に寄せる詩を作つたことがある。

寄飛卿

堦砌亂蛩鳴。庭柯烟露清。月中隣樂響。樓上遠山明。
珍簟涼風到。瑤琴寄恨生。嵇君懶書札。底物慰秋情。

玄機は詩筒を發した後、日夜溫の書の來るのを待つた。さて日を經て溫の書が來ると、玄機は失望し

たやうに見えた。これは温の書の罪ではない。玄機は求むる所のものがあつて、自らその何物たるかを知らぬのである。

或る夜玄機は例の如く、燈の下に眉を蹙めて沈思してゐたが、漸く不安になつて席を起ち、あちこち室内を歩いて、机の上の物を取つては、又直に放下しなどしてゐた。良久しうして後、玄機は紙を展べて詩を書いた。それは樂人陳某に寄せる詩であつた。陳某は十日ばかり前に、二三人の貴公子と共に只一度玄機の所に來たのである。體格が雄偉で、面貌の柔和な少年で、多く語らずに、始終微笑を帶びて玄機の擧止を凝視してゐた。年は玄機より少いのである。

　　感懷寄人

恨寄朱絃上。含情意不任。早知雲雨會。未起蕙蘭心。灼々桃兼李。無妨國士尋。蒼々松與桂。仍羨世人欽。月色庭階淨。歌聲竹院深。門前紅葉地。不掃待知音。

陳は翌日詩を得て、直に咸宜觀に來た。玄機は人を屏けて引見し、僮僕に客を謝することを命じた。玄機の書齋からは只微かに低語の聲が聞えるのみであつた。初夜を過ぎて陳は辭し去つた。これからは陳は姓名を通ぜずに玄機の書齋に入ることになり、玄機は陳を迎へる度に客を謝することになつた。

陳の玄機を訪ふことが頻なので、客は多く郤けられるやうになつた。書を索めるものは、只金を贈つて書を得るだけで、滿足しなくてはならぬことになつたのである。

一月ばかり後に、玄機は僮僕に暇を遣つて、老婢一人を使ふことにした。この醜惡な、いつも不機嫌な媼は、殆人に物を言ふこともないので、觀內の狀況は世間に知られることが少く、玄機と陳とは餘り人に煩聒せられずにゐることが出來た。

陳は時々旅行することがある。玄機はさう云ふ時にも客を迎へずに、籠居して多く詩を作り、それを溫に送つて正を乞うた。溫は此詩を受けて讀む每に、語中に閨人の柔情が漸く多く、道家の逸思が殆無いのを見て、訝かしげに首を傾けた。玄機が李の妾になつて、幾もなく李と別れ、咸宜觀に入つて女道士になつた顚末は、悉く李の口から溫の耳に入つてゐたのである。

七年程の月日が無事に立つた。其の時夢にも想はぬ災害が玄機の身の上に起つて來た。

咸通八年の暮に、陳が旅行をした。玄機は跡に殘つて寂しく年を送つた。其頃溫に寄せた詩の中に『滿庭木葉愁風起、透幌紗窓惜月沈』と云ふ、例に無い悽慘な句がある。

九年の初めに、まだ陳が歸らぬうちに、老婢が死んだ。親戚の恃むべきものもない媼は、兼て棺材まで準備してゐたので、玄機は送葬の事を計らつて遣つた。其の跡へ綠翹と云ふ十八歲の婢が來た。顏は美しくはないが、聰慧で媚態があつた。

陳が長安に歸つて咸宜觀に來たのは、艷陽三月の天であつた。玄機がこれを迎へる情は、渴した人が泉に臨むやうであつた。暫らくは陳が殆虛日のないやうに來た。其間に玄機は、度々陳が綠翹を揶揄するのを見た。しかし玄機は初め意に介せなかつた。なぜと云ふに、玄機の目中には女子としての綠翹は

ないと云つて好い位であつたからである。

玄機は今年二十六歳になつてゐる。眉目端正な顔が、迫り視るべからざる程の氣高い美しさを具へて、新に浴を出た時には、琥珀色の光を放つてゐる。豐かな肌は瑕のない玉のやうである。緑翹は額の低い、頤の短い猧子に似た顏で、手足は粗大である。領や肘はいつも垢膩に汚れてゐる。玄機に緑翹を忌む心のなかつたのは無理もない。

そのうち三人の關係が少しく紛糾して來た。これまでは玄機の擧措が意に滿たぬ時、陳は寡言になつたり、又は全く口を噤んでゐたりしたのに、今は陳がさう云ふ時、多く緑翹と語つた。其の上さう云ふ時の陳の詞は極て溫和である。玄機はそれを聞く度に胸を刺されるやうに感じた。

或る日玄機は女道士仲間に招かれて、某の樓觀に往つた。書齋を出る時、緑翹にその觀の名を敎へて置いたのである。さて夕方になつて歸ると、緑翹が門に出迎へて云つた。「お留守に陳さんがお出なさいました。お出になつた先を申しましたら、さうかと云つてお歸なさいました」と云つた。

玄機は色を變じた。これまで留守の間に陳の來たことは度々あるが、いつも陳は書齋に入つて待つてゐた。それに今日は程近い所にゐるのを知つてゐて、待たずに歸つたと云ふ。玄機は陳と緑翹との間に何等かの秘密があるらしく感じたのである。

玄機は默つて書齋に入つて、暫く坐して沈思してゐた。猜疑は次第に深くなり、忿恨は次第に盛んになつた。門に迎へた緑翹の顏に、常に無い侮蔑の色が見えたやうにも思はれて來る。溫言を以て緑翹を賺す陳の聲が、歷々として耳に響くやうにも思はれて來る。

そこへ綠翹が燈に火を點じて持つて來た。何氣なく見える女の顏を、玄機は甚だしく陰險なやうに看取した。玄機は突然起つて扉に鎖を下した。そして震ふ聲で詰問しはじめた。女は只『存じません、存じません』と云つた。玄機にはそれが甚だしく狡猾なやうに感ぜられた。玄機は床の上に跪いてゐる女を押し倒した。女は慴れて目を睜つてゐる。『なぜ白狀しないか』と叫んで、玄機は女の吭を扼した。女は只手足をもがいてゐる。玄機が手を放して見ると、女は死んでゐた。

玄機の綠翹を殺したことは、稍久しく發覺せずにゐた。殺した翌日陳の來た時には、玄機は陳が綠翹の事を問ふだらうと豫期してゐた。しかし陳は問はなかつた。玄機がとう〳〵『あの綠翹がゆうべからゐなくなりましたが』と云つて陳の顏色を覗ふと、陳は『さうかい』と云つただけで、別に意に介せぬらしく見えた。玄機は前夜のうちに、觀の背後に土を取つた穴のある處へ、綠翹の屍を抱いて往つて、穴の中へ推し墜して、上から土を掛けて置いたのである。

玄機は『生ける秘密』の爲めに、數年前から客を謝してゐた。然るに今は『死せる秘密』の爲めに懼を懷いて、若し客を謝したら、綠翹の踪跡を尋ねるものが、觀内に目を着けはすまいかと思つた。そこで切に會見を求めるものがあると、强ひて拒ばぬことにした。

初夏の頃に、或る日二三人の客があつた。其中の一人が凉を求めて觀の背後に出ると、土を取つた跡らしい穴の底に、新しい土が塡まつてゐて、其上に綠色に光る蠅が群がり集まつてゐた。其人は只なんとなく訝しく思つて、深い思慮をも費さずに、これを自己の從者に語つた。從者は又これを兄に語つ

た。兄は府の衙卒を勤めてゐるものである。此卒は數年前に、陳が拂曉に咸宜觀から出るのを認めたことがある。そこで奇貨居くべしとなして、玄機を脅して金を獲ようとしたが、玄機は笑つて顧みなかつた。卒はそれから玄機を怨んでゐた。今弟の語を聞いて、小婢の失踪したのと、土穴に腥羶の氣があるのとの間に、何等かの關係があるやうに思つた。そして同班の卒數人と共に、鍤を持つて咸宜觀に突入して、穴の底を掘つた。綠翹の屍は一尺に足らぬ土の下に埋まつてゐたのである。

京兆の尹溫璋は、衙卒の訴に本づいて魚玄機を逮捕させた。玄機は毫も辯疏することなくして罪に服した。樂人陳某は鞫問を受けたが、情を知らざるものとして釋された。

李億を始として、曾て玄機を識つてゐた朝野の人士は、皆其才を惜んで救はうとした。只方城の吏になつて、遠く京師を離れてゐたので、玄機がために力を致すことが出來なかつた。

京兆の尹は、事が餘りにあらはになつたので、法を枉げることが出來なくなつた。立秋の頃に至つて、遂に懿宗に上奏して、玄機を斬に處した。

玄機の刑せられたのを哀むものは多かつたが、最も深く心を傷めたものは、方城にゐる溫岐であつた。

玄機が刑せられる二年前に、溫は流離して揚州に往つてゐた。揚州は大中十三年に宰相を罷めた令狐綯が刺史になつてゐる地である。溫は綯が自己を知つてゐながら用ゐなかつたのを怨んで名刺をも出さずにゐるうちに、或る夜妓院に醉つて虞候に擊たれ、面に創を負ひ前齒を折られたので、怒つてこれを訴へた。綯が溫と虞候とを對決させると、虞候は盛んに溫の汙行を陳述して、自己は無罪と判決せられ

た。事は京師に聞えた。溫は自ら長安に入つて、要路に上書して分疏した。此時徐商と楊收とが宰相に列してゐて、徐は溫を庇護したが楊が聽かずに、溫を方城に遣つて吏務に服せしめたのである。其制辭は『孔門以德行爲先、文章爲末、爾旣德行無取、文章何以稱焉、徒負不羈之才、罕有適時之用』と云ふのであつた。溫は後に隋縣に遷されて死んだ。子の憲も弟の庭皓も、咸通中に官に擢でられたが、庭皓は龐勛の亂に、徐州で殺された。玄機が斬られてから三月の後の事である。

参照

其一　魚玄機

三水小牘　　南部新書
太平廣記　　北夢瑣言
續談助　　唐才子傳
唐詩紀事　　全唐詩(姓名下小傳)
全唐詩話　　唐女郎魚玄機詩

其二　溫飛卿

舊唐書　　漁隱叢話
新唐書　　北夢瑣言
全唐詩話　　桐薪
唐詩紀事　　玉泉子
六一詩話　　南部新書
滄浪詩話　　握蘭集
彥周詩話　　金筌集
三山老人語錄　　漢南眞稿
雪浪齋日記　　溫飛卿詩集

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
仝　神田區裏神保町	上田屋
仝　京橋區尾張町	東海堂
仝　京橋區元數寄屋町	北隆館
仝　京橋區西紺屋町	良明堂
仝　日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館
仝　東區京町堀	太華堂
仝　北區東梅田町	宮內立誠堂
京都市七條停車場前	三共社
仝	藤村梅松堂

○定價　金貳拾五錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十七冊分の割合なれば一ヶ年分御註文の方は內國は金四圓二拾五錢外國は金五圓九拾五錢の割となる

●本號　特價金五拾錢　郵稅金四錢

送金注意

一誌代郵稅　は一切前金とす、金切の場合は發送を止むべし

一郵便爲替　にて御送金の場合は指定を**本郷區片町十番地中央公論社**とし拂渡局を**東片町局**と指定あれば途中盜取さるゝ虞なし

一振替貯金　口座は**東京三十四番**なり

一郵劵代用　必ず**一割增**の事

一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、**坐ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

一金一圓迄　金六錢（集金委託料
一金五圓迄　金七錢（及送達料共）

一受領證請求　は必す返信料を要す

大正四年七月十四日印刷納本
大正四年七月十五日發行

（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木西三

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地　中央公論社
電話長下谷九一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.

Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可
大正四年七月[illegible]

中央公論大正新機運號（第三十年第八號）

